



Title	リグヴェーダにおける1人称接続法の研究
Author(s)	堂山, 英次郎
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2005, 45(2), p. v-326
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/9502">https://doi.org/10.18910/9502</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# リグヴェーダにおける 1 人称接続法の研究

堂山 英次郎

## 【目 次】

序 論 .....	v
略号表 .....	x
総 論 .....	1
I 形態 .....	1
1 用例の統計と分布 .....	1
2 1 人称接続法の語形成 .....	1
2.1 語幹 .....	2
2.1.1 非幹母音語幹の語形とアクセント .....	2
2.1.2 幹母音語幹の語形とアクセント .....	6
2.2 接続法接尾辞 (= 幹母音) .....	6
2.3 人称語尾 .....	8
2.3.1 1 人称 単数 能動態 (1sg. act.): <i>-ā/-āni</i> ( <i>/-am</i> ?) .....	9
2.3.2 1 人称 双／複数 能動態 (1du/pl. act.): <i>-va/-ma</i> .....	11
2.3.3 1 人称 単数 中動態 (1sg. mid.): <i>-ai</i> ( <i>/-e</i> ?) .....	13
2.3.4 1 人称 双／複数 中動態 (1du/pl. mid.): <i>-vahail/-mahe</i> ~ <i>-mahai</i> .....	16
2.3.5 語尾の分布について .....	17
2.4 語形一覧 .....	20
3 語形同定の諸問題 (不確実語形の検討) .....	22
3.1 <i>-ā</i> に終わる語形に, subj. 1sg. act. 以外の可能性が認められる場合 .....	22
3.1.1 subj. 1sg. act. 以外に複数の可能性がある場合 .....	23
3.1.2 subj. 1sg. act. と iptv. 2sg. act. ....	25
3.1.3 まとめ .....	41
3.2 第二語尾をとる語形 (inj. 1sg.) に, subj. 1sg. の可能性が疑われる場合 .....	42
3.2.1 第二語尾が接続法語尾として用いられている可能性 (非幹母音幹) .....	44
3.2.2 inj. 語形に接続法の機能が疑われる可能性 (幹母音幹) .....	50
3.2.3 まとめ .....	53
II 機能 .....	54
接続法の基本機能 .....	54
a) 話し手の意志 .....	54

b) 話し手の見込み .....	59
A 非疑問文——主文／主節 .....	64
1 話し手の意志表明 .....	64
1.1 意志表明の諸機能 .....	64
1.1.1 意志の伝達 .....	64
1.1.2 宣言 .....	68
1.1.3 独り言 .....	77
補説 1 話し手の義務 ? .....	79
1.2 意志表明の諸相 .....	81
1.2.1 形式的特徴 .....	81
a) 1 人称代名詞の使用 .....	81
b) <i>tām u (...) stavāma</i> .....	82
c) <i>hānta</i> + 意志表明 .....	84
1.2.2 行為の実現時期 .....	85
a) 行為に直接先立つ意志表明 .....	86
b) 一般的心構え（繰り返し有効な意志の表明）～条件付き心構え .....	88
c) <i>Sūkta</i> の最終詩節における意志表明 .....	92
1.2.3 意志表明の表現形態 .....	95
a) 過去或いは現状の確認を伴う場合 .....	95
b) 聞き手／儀礼の対象への要求を伴う場合（give-and-take） .....	96
c) 要求の結果に対する意志表明 .....	98
1.2.4 意志表明と否定 .....	100
2 聞き手に対する勧誘 .....	102
2.1 <i>étā (...)</i> subj. 1pl. [+ accent] .....	104
補説 2 勧誘／意志表明 ? .....	106
3 見込み .....	108
3.1 「見込み」の諸機能 .....	108
3.1.1 見込みの伝達 .....	108
3.1.2 見込みの公言 .....	110
3.1.3 独り言 .....	111
3.2 見込みの諸相 .....	111
a) 見込みの表現形態：要求や条件の提示を伴う場合 .....	111
b) 行為の実現時期：一般的（繰り返し有効な）見込み～条件付き見込み .....	113

補説3 見込み／意志表明？	115
B 非疑問文——従属節	118
1 従属接続詞節	120
1.1 <i>yadā</i> + 1 人称接続法（時）	120
1.2 <i>yādi</i> + 1 人称接続法（条件）	120
1.3 <i>yād</i> + 1 人称接続法	121
1.3.1 <i>yād</i> 条件節	121
1.3.2 時を表す <i>yād</i> 節	123
1.3.3 補足節「…ということ」	124
1.4 <i>yāthā</i> + 1 人称接続法（目的）	125
2 関係節	128
2.1 同格的関係節	129
2.2 限定的関係節	131
2.2.1 一般論を表す限定的関係節	134
2.3 同格的／限定的関係節？	135
3 従属節における <i>vaś, śak</i> の 1 人称接続法	137
4 従属節における 1 人称接続法の機能	138
C 疑問文／疑問節	140
1 疑問文（主文）	141
1.1 義務	141
1.2 見込み	143
1.3 義務／見込み？	144
2 疑問節（従属節）＝ 間接疑問文	145
3 <i>kuvīd</i> + 1 人称接続法	146
4 疑問文／節における 1 人称接続法の機能	147
総論への補説	150
1 接続法とアスペクトとの関係	150
2 接続法と動詞の語彙的意味との関係	152
3 人称語尾	153
各 論	154
RV I	154

RV II .....	186
RV III .....	192
RV IV .....	200
RV V .....	210
RV VI .....	230
RV VII .....	235
RV VIII .....	244
RV IX .....	266
RV X .....	273
参考文献 .....	314
<索引>	
取扱箇所一覧 (RV) : 詩節番号順 .....	327
取扱語形 (1 人称接続法) 一覧 : 語根順 .....	337
総論 I 3 において検討した不確実語形 .....	345
文法事項, テーマ等 .....	345
単語, 語句, 表現 .....	347

## 序論

本研究は、古インド・アーリヤ語に属するヴェーダ語の動詞カテゴリーの一つである接続法（英〔語〕 subjunctive, ド〔イツ語〕 Konjunktiv, フ〔ランス語〕 subjonctif）の包括的研究の一環として、ヴェーダ語最古の文献『リグヴェーダ』（RV）における 1 人称の用例を、語形・機能の両側面から文献学的・言語学的に調査したものである。対象を 1 人称だけに限定したのは、それが語形成及び機能のいずれにおいても、2/3 人称とは異なる固有の問題を抱えているからである。個々の語形とその機能・用法を、必要となる多くの項目に基づいて吟味し、今後予定している 2/3 人称の研究と合わせて接続法全体の体系的な記述につなげることが狙いである。

＜接続法＞：接続法はインド・ヨーロッパ祖語（印欧祖語）が本来有していたと考えられる動詞組織の一カテゴリーで、動詞の法（叙法、話法、ムード：英 mood, ド Modus）の一つである。印欧語における叙法とは、動詞の内容に対する話し手の心的態度（義務、意志、願望、非現実 etc.）を表すカテゴリーを指す。ヴェーダ語では接続法の他に言及法 (injunctive)、報告法 (indicative)、願望法 (optative)、命令法 (imperative) が区別されるが<sup>1</sup>、特に接続法と願望法とは、語形成法及び統辞法の両面において多くの共通点を有し、話し手の発語に対する態度・意図を強く表すことから、狭い意味での叙法と呼ばれる。

＜リグヴェーダ (RV)＞：インド・イラン語派（アーリヤ語派）においてまとまった量の接続法語形が回収されるのは、インド側では最古の文献リグヴェーダ (R̥gveda, 以下 RV) を始めとするヴェーダ語諸文献、イラン側では古・新アヴェスタ語で書かれたゾロアスター教聖典アヴェスタ及び古ペルシア語の碑文である。この中で接続法研究にとって特別重要な位置を占めるのが、本研究で扱う RV である。RV はインドのヴェーダ語文献の中で最古層に位置し、紀元前 1200 年頃に編纂されたと推定される神々への讃歌集である。そのコーパスの大きさに加え、古い語形やアクセントが正確に伝承されていることから、インド・イラン語派の比較研究にとって、また印欧語比較言語学にとって、常に第一級の資料となっている。接続法の研究における RV の価値は、特に次の二つの点に認められる：1) RV は、接続法の用例の量的かつ質的豊富さと、その機能の手がかりとなる統辞法的、内容的透明性という点で、イラン側の資料を遥かに凌ぐ；2) 接続法は、ヴェーダ語諸文献の中では RV においてのみ生産的な動詞カテゴリーであり、RV 以降では用法が限定され、動詞組織の体系から急速に姿を消すことになる。つまり RV は、接続法をインド・イラン的な見地から考察する場合にも、またインドの言語史の中で理解する上でも、先ず最初に解明されるべき基本

<sup>1</sup> 術語の邦語訳は、後藤「インド・ヨーロッパ祖語における動詞表現の諸カテゴリー」（1992）に従う。

的かつ最重要の資料であると言える。

接続法の研究は、このような言語史的な重要性に加えて、思想史解明にも意義を持つ。接続法や願望法といった、話し手の態度表明に関わる動詞カテゴリー（狭い意味での叙法）は、RV の詩人と彼らが向かい合う神々とはどのような関係にあったかについて、直接的な手掛かりを与えてくれるからである。残念ながら従来の研究では、この点について十分配慮されてきたとは言い難い。本論中で改めて指摘するように、詩人と神々との間には、厳密な“give-and-take”の関係があったことは、RV のみならず、後の祭式文献を理解する上でも、強調し過ぎることはないと思われる。こうした点は、接続法という文法カテゴリーを正確に理解し翻訳した時に初めて把握されるものである。接続法は、文献の内容の理解が文法の解明によって可能となる典型的な例であると言えよう。

＜接続法研究の現状＞：本研究は、文献学的調査に根差した実例の吟味とその記述・分類を主眼としているため、その結果が従来の研究の中でどのように位置づけられるかについて深く立ち入ることはしない。それは、随所に指摘されるように、2/3人称接続法の研究成果を待って初めて行なうべきである。以下では、語形及び機能・用法の考察に必要な基本的な先行研究を列举するにとどめる：実例に基づくヴェーダ語の接続法の機能・用法を、文構造・人称・数などの別に初めて包括的かつ体系的に記述・分類したのは DELBRÜCK である<sup>2</sup>。その一連の研究——特に *Altindische Syntax* (1888) ——は、後の接続法及び叙法全般の理解と研究の基礎を築いたと言えよう。その半世紀後、GONDA (1956)<sup>3</sup> は接続法を含めた叙法全般の研究を行ない、その中で接続法についても詳しい議論を展開している。ただし一部には、その後接続ではないことが明らかとなった語形も含まれることは注意すべきである。それ以降も、一部の用例或いは純理論的考察に基づいて、接続法の根底に在る抽象概念を析出する試みや、印欧祖語における接続法発生のメカニズムを解明しようとする試みが為されている (e.g. SCHERER 1975, ERHALT 1985, RIX 1986)<sup>4</sup>。これらはいずれも、個々の機能の議論や理論的考察においては多くの示唆に富むものの、多かれ少なかれ、語形、機能の両面で確かな資料に基づいていないという点で脆弱な基礎に立っていると言えよう。事実上、実例の詳細な検討に基づいた接続法の共時的研究は、DELBRÜCK 以来大きくは進展していないと思われる。K. HOFFMANN はその著書 *Der Injunktiv im Veda* (1967) において、それまで正しく理解されていなかった inj. (言及法) の語形及び機能、

<sup>2</sup> DELBRÜCK (1871) *Der Gebrauch des Conjunctivs und Optativs im Sanskrit und Griechischen* 17ff., (1888) *Altindische Syntax* 306–330. 更に、DELBRÜCK (1897) *Vergleichende Syntax II* 365ff., BRUGMANN (1916) *Grundriß II-3/2* 835ff. も参照。

<sup>3</sup> GONDA (1956) *The Character of the Indo-European Moods* 68–109.

<sup>4</sup> SCHERER (1975) *Die ursprüngliche Funktion des Konjunktivs. Indogermanische und allgemeine Sprachwissenschaft*: 99–106, ERHART (1985) *Zur Entwicklung der Kategorien Tempus und Modus im Indogermanischen*, RIX (1986) *Zur Entstehung des urindogermanischen Modusystems*.

更にはヴェーダ語の動詞組織についての理解を飛躍的に進歩させたが（総論 I 3.2 を参照），その厳密な文献学的・言語学的考察は一方で，inj. と関わる他の法にも及んだ。接続法に関して為された語形の同定及びその機能について考察（同書 236-255）は，以後の接続法の理解と研究とを飛躍的に進めることになった（総論 I 2.3 を参照）。HOFFMANN以降の成果を多分に取り入れて RV における接続法語形を網羅的に収集したのが，M. MEIER-BRÜGGER *Konjunktiv und Optativ im Rigveda* (1980, 教授資格論文，未出版) である。しかしながらそれに続くべき機能面の考察については，例えば ETTER *Die Fragesätze im Rgveda* (1985) が疑問文の研究の中で，また HETTRICH *Untersuchungen zur Hypotaxe im Vedischen* (1988) が従属文の研究の中でそれぞれ部分的に扱っているのみで，包括的な研究は未だ為されていないのが現状である。接続法の理解が他の文法範疇と同様もしくはそれ以上に，文脈等の厳密な文献学的調査によってのみ可能であることと，それを支えるヴェーダ語の解釈や文法研究が DELBRÜCK 以降飛躍的に進んだこと，とりわけ HOFFMANN 以来接続法語形の同定が著しく正確さを増したことなどから判断して，MEIER-BRÜGGER の行なった語形調査を再吟味しつつ，RV における接続法の全用例に基づいてその機能・用法を分類・整理し，それに一定の理論的枠組みを与えることが，現在のヴェーダ語研究における焦眉の課題の一つといえる。本研究は，その為の第一段階と位置づけられる。

＜接続法組織全体における1人称の位置づけ＞：MEIER-BRÜGGER *Konj.Opt.* に従えば，RV において例証されている接続法語形の総数 1688 個である。MEIER-BRÜGGER の同定作業は全体的に再確認・再検証されるべきではあるが，それによって例証語形の数が大幅に変更される可能性は低いと考えられるため，同書に基づいて接続法語形の人称・数（すう）による分布と偏りを概観することは，無意味ではないであろう。そこで，接続法語形の総数を100%とした場合の各人稱・数の占める割合を数字にすると，おおよそ次のようになる<sup>5</sup>：

	単数	双数	複数	合計
1人称	3.5%	1.5%	10%	15%
2人称	15%	2%	2%	19%
3人称	52%	2%	12%	66%
合計	70.5%	5.5%	24%	100%

3人称単数が全体の半数以上（52%）を占めており，次いで 2人称単数，3人称複数，1人称複数が 15%，12%，10% で続く。残る5つは全て 2-3% 前後と低い割合である。こうした人稱・数の偏りには，RV という文献の性質が大きく関与しているものと思われる。即ち，

<sup>5</sup> ただし，この中には（1 人称も含め）再検討すべき不確定語形が含まれているため，正確な統計を出す為にはなお検討が必要である。

RV 讃歌の大部分は詩人が神々を2/3人称において称えるという形式を取るため、2/3人称の記述に対して、話し手自身を指す1人称が少なくなることは予想される。また、2/3人称における単数と複数の割合の関係(単数 > 複数)が1人称におけるそれと逆転(単数 < 複数)している理由は、2/3人称の指す対象が主として特定の一神(アグニ、インドラなど)であるのに対して、1人称の場合は、直接の話し手たる詩人(祭官)を含む祭官集団ないし祭主や部族の成員全体をも含む祭式参加者の総体が主語とされる場合が多いことに帰せられるであろう。実際1人称単数が用いられるのは、祭式儀礼の場面よりも、神話等における個人的会話の中が多い。

言語史の観点から注目すべき点は、RV以降急速に生産性が低下し、遂には消滅した2/3人称接続法が、RVにおいては実に全体の4分の3以上(85%)を占めているということであろう。ヴェーダ語を通時的に考察する際、接続法が表わしていた意味領域が、その消滅以降どのような文法カテゴリー或いは文法現象によって引き継がれていったかという問題は、今後2/3人称接続法の研究によって初めて正確に記述され得るものと思われる。これに対して1人称接続法は、接続法というカテゴリーが消滅した後も、話し手の意志表明の機能(→ 本論 A 1)とともに使われ続け、古典サンスクリット語では、機能上もともと1人称を持たなかった命令法の中に組み込まれている。これは、話し手の意志の表現を中核的な役割とする接続法にとって、話者＝主語である1人称と、話者≠主語である2/3人称接続法との間に、機能的な差異が生じたためと予想される。

このように接続法の機能は、共時的にも通時的にも、人称の別——1人称と2/3人称——に連動して異なる振るまいを示しているため、機能研究のためには人称別の用例の精査が必要であると考えられる。こうした認識のもと、本研究はまず1人称の用例を吟味・検討することを目指すものである。無論、機能の全体を論じるには、2/3人称の研究を待たなければならないのは、冒頭に述べた通りである。

＜本論の構成＞：本論は大きく総論と各論とに分かれる。**総論**では、まず接続法一般及び1人称接続法の語形成を確認するとともに、形態的に曖昧な語形の同定の問題を、文献の内容解釈を基礎に論じる：**I 形態**。次に、Iで得られた語形に基づいて、その機能の一つ一つの文脈に即して理解、分類し、それら全てを異なる文構造ごとに提示する：**II 機能**。ただし多くの分類は、1人称接続法全体の機能的性質をよりよく把握するためのものであり、必ずしも分類の境界線を明確に引くことが目的ではない。総論に続く**各論**では、本論で扱ったRVの用例全てについて、原文、和訳、及び接続法の形態的・機能的情報を付した。その際、接続法の理解にとって重要となる詩節全体の解釈に関しても出来るだけ立ち入って検討し、詳細な注を付けた。巻末には、扱った用例の語根別の索引を付した。

\*\*\*\*\*

本研究は、平成 15 年度に東北大学に提出した博士学位論文「リグヴェーダにおける 1 人称接続法の形態論的・機能論的研究」を、その後見つかった様々な問題点の検討と、新たな議論の増強とによって大幅に改良したものである。論文の作成及び審査、そしてその後の研究においても、長い間忍耐強く御指導下さった東北大学教授後藤敏文先生に、ここで改めて心からの御礼を申し上げたい。また、論文審査も含め数々のご指導をいただいた東北大学教授千種眞一先生、そして折りに触れて貴重な助言を下さった阪本（後藤）純子先生に、感謝の意を表したい。最後に、原稿の提出が大幅に遅れたにも関わらず、最後まで我がまを聞いていただいた紀要担当の諸先生方ならびに研究推進室の皆様に、改めて御詫びと御礼を申し上げたい。多くの方々からの御指導・御支援にも関わらず、私の不手際と時間的な都合からまだ改良する余地を残したまま公刊に至ったことについては、深く反省するとともに、これを今後の更なる研究への教訓としたい。

なお、本研究は、文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））による研究成果の一部を含む。

2005 年 3 月 堂山 英次郎

## 略号表

1. 一次文献<sup>6</sup>

AB	Aitareya-Brāhmaṇa
AV, AVŚ	Atharva-Veda (Śaunaka-recension)
AVP	Atharva-Veda Paippalāda-recension (Kashmir)
BĀU	Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad (Kāṇva-recension)
BĀU(M)	Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad Mādhyandina-recension
BṛhDev.	Bṛhad-Devatā
ChUp	Chāndogya-Upaniṣad
GB	Gopatha-Brāhmaṇa
JB	Jaiminiya-Brāhmaṇa
KaṭhU	Kaṭha-Upaniṣad
KB	Kauṣītaki-Brāhmaṇa (= Śāṅkhāyana-Brāhmaṇa)
Kh.	(R̥gveda-)Khilāni
KpS	Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṁhitā
KS	Kāṭhaka-Saṁhitā
MS	Maitrāyaṇī Saṁhitā
Pāṇ	Pāṇini (Aṣṭādhyāyī)
Pat.	Patañjali (Mahābhāṣya)
Pp.	Padapāṭha
Sāy.	Sāyaṇa
PS	Atharva-Veda Paippalāda-recension (Orissa)
RV	R̥g-Veda
SV	Sāma-Veda (Kauthuma-recension)
ŚāṅkhĀ	Śāṅkhāyana-Āraṇyaka
ŚāṅkhŚrSū	Śāṅkhāyana-Śrauta-Sūtra
ŚB	Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina-recension)
ŚBK	Śatapatha-Brāhmaṇa Kāṇva-recension
TB	Taittirīya-Brāhmaṇa
TS	Taittirīya-Saṁhitā
VādhAnvākh	Vādhūla-Anvākhyāna
VS	Vājasaneyi-Saṁhitā (Mādhyandina-recension)
Yā.	Yāska
YS	Yajurveda-Saṁhitā

<sup>6</sup> リグヴェーダ以外の文献については、本論の中で接続法の語形や機能に関して参照したものだけに留める

## 2. 二次文献

### 2.1 著者名によるもの

ETTER	= Die Fragesätze im Rgveda (1985)
DELBRÜCK	= Altindische Syntax (1888)
GAECICKE	= Der Accusativ im Veda (1880)
GELDNER	= Der Rig-Veda (1951)
GOTŌ	= Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen (1987)
GRASSMANN	= Wörterbuch zum Rig-Veda (1872–1875)
HETRICH	= Untersuchungen zur Hypotaxe im Vedischen (1988)
HOFFMANN	= Der Injunktiv im Veda (1967)
NARTEN	= Die sigmatischen Aoriste im Veda (1964)
SCARLATA	= Die Wurzelkomposita im Rg-Veda (1999)
SGALL	= Die Infinitive im Rgveda (1958)
SCHAEFER	= Das Intensivum im Vedischen (1994)
WACKERNAGEL/DEBRUNNER	= Altindische Grammatik (1896–1964)
WHITNEY	= Sanskrit Grammar (1889)

### 2.2 著書名, 雑誌名によるもの

Aufs.	Aufsätze → HOFFMANN
Concordance	A Rgvedic Word Concordance → LUBOTSKY
Conj.Opt.	Der Gebrauch des Conjunktivs und Optativs ... → DELBRÜCK
Disc.Gram.	Toward a Discourse Grammar of the Rigveda → KLEIN
EWAia	Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen → MAYRHOFER
EVP	Études védiques et pāṇinénennes → RENOU
Fs.	Festschrift
Gr.Gram.	Historische Grammatik des Griechischen → RIX
Idg.Gram.	Indogermanische Grammatik. Band III/1 → WATKINS
IF	Indogermanische Forschungen. Strassburg — Berlin/New York
IJ	Indo-Iranian Journal. Hague — Dordrecht/Boston/London
JAOS	Journal of the American Oriental Society. New Haven
Kl.Schr.	Kleine Schriften
Konj.Opt.	Konjunktiv und Optativ im Rigveda → MEIER-BRÜGGER
KZ	Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung ~ Historische Sprachforschungen. Göttingen
LIV	Lexikon der indogermanischen Verben → Rix
Material.	Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen → GOTŌ
MSS	Münchener Studien zur Sprachwissenschaft. München
Noten	Rgveda. Textkritische und exegetische Noten → OLDENBERG
Proleg.	Prolegomena → OLDENBERG

PW	Petersburger Wörterbuch (1855–1875) → BÖHTLINGK/ROTH
pw	Petersburger Wörterbuch (1879–1889) → BÖHTLINGK
StII	Studien zur Indologie und Iranistik. Reinbek
WZKM	Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes. Wien
ZDMG	Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft. Stuttgart

### 3. 文法用語その他 (中に英語, ラテン語, ドイツ語の用語を含む)

abl.	ablative
absol.	absolute
acc.	accusative
act.	active
adj.	adjective
ad loc.	ad locum
adv.	adverb
affekt.	affektiv (affective)
aor.	aorist
athem.	athematic
Aufl.	Auflage
Av.	Avestan
Bahuv.	Bahuvrihi
Bd., Bde.	Band, Bände
Br.	Brāhmaṇa(s)
caus.	causative
cond.	conditional
dat.	dative
denom.	denominative
desid.	desiderative
diss.	dissertation
do	ditto
du.	dual
ed.	edition; edited
encl.	enclitic
extend.-gr.	extended-grade
f.	feminine
facient.	facientiv (agentiv)
fakt.	faktitiv (factitive)
fient.	fientiv (fientive)
full-gr.	full-grade
fut.	future

gen.	genitive
gerd.	gerund
gerdv.	gerundive
Gr.	Greek
hap. leg.	hapax legomenon
Hit.	Hittite
Hom.	Homeric
ind.	indicative
indef.	indefinite
inf.	infinitive
inj.	injunctive
Inhaltsakk.	Inhaltsakkusativ
instr.	instrumental
intens.	intensive
intrans.	intransitive
ipf.	imperfect
iptv.	imperative
iter.	iterative
Lat.	Latin
loc.	locative
loc. cit.	loco citato
m.	masculine
med. tant.	medium tantum
mid.	middle
n.	neuter; note
neut.	neuter
nom.	nominative
OAv.	Old Avestan
OPers.	Old Persian
opt.	optative
op. cit.	opere citato
pass.	passive
patient.	patientiv (patientive)
prec.	precative
perf.	perfect
pl.	plural
pluperf.	pluperfect
possess.-affekt.	possessiv-affektiv (possessive-affective)
PIE	Proto-Indo-European

PIIr.	Proto-Indo-Iranian
pres.	present
prev.	preverb
pron.	pronoun
ptcpl.	participle
redupl.	reduplicative; reduplicated; reduplication
reflex.	reflexiv (reflexive)
rev.	review
Skt.	Sanskrit
sg.	singular
subj.	subjunctive
syl.	syllable; syllabic
s.v.	sub verbo
Tatp.	Tatpuruṣa
them.	thematic
trans.	transitive
transl.	translation; translated
Up.	Upaniṣad(s)
vadj.	verbal adjective
Vālah.	Vālahilya
Ved.	Vedic
voc.	vocative
vol.	volume(s)
Wb.	Wörterbuch
Y	Yasna
YAv.	Young Avestan
Yt	Yašt
zero-gr.	zero-grade
1sg./2du./3pl. etc.	the first person singular/the second person dual/the third person plural etc.

## 4. 記号

*□	例証されていないが、理論的に再建される音・語形
□*	偶然例証されていないだけで、当然あったと考えられる語形
A > B; B < A	A は B に変化した; B は A から生じた
+□	訂正した語形
C	consonant (子音)
V	vowel (母音)
H, h <sub>1-3</sub>	laryngeal (喉音)

<input type="checkbox"/> <sub>y</sub> , <input type="checkbox"/> <sub>u</sub> (下付き)	伝承されたテキストには書かれていないが、韻律からは半母音 (y, v) の前で発音されていたと考えられる <i>i, u</i> 。
<input type="checkbox"/> <sub>a</sub> (下付き)	伝承されたテキストには書かれていない／区別されていないが、韻律からは発音されていたと考えられる <i>a</i> 。anaptyxis も含む。
<input type="checkbox"/> <sub>i, u, ə, ɐ</sub> (下付き)	epenthesis (アヴェスタ語)
<input type="checkbox"/> <sub>語根</sub> (上付きの <i>i</i> )	印欧祖語もしくはインド・イラン祖語時代に末尾音が laryngeal であった語根；インド伝統文法の <i>set</i> 語根と重なることが多い。
◦ <input type="checkbox"/> , <input type="checkbox"/> ◦	先行／後続部分を省略
- <input type="checkbox"/>	前綴りが動詞語形に直前に先行する場合
... <input type="checkbox"/>	前綴りと動詞語形との間に他の一つ以上の語が入る場合
# <input style="border: 1px solid black;" type="checkbox"/> 詩節の番号	Sukta の最初の詩節
<input style="border: 1px solid black;" type="checkbox"/> 詩節の番号 #; -#	Sukta の最終詩節；最後から二番目の詩節
その他の#	文もくしくは Pada の切れ目
→ <input type="checkbox"/>	「 <input type="checkbox"/> を見よ」
( )	訳中の語に対する説明
[ ]	訳中に補われるべき語句

## 5. 用例の引用について

・訳中の文法的説明においては、1 人称接続法を太字で表わすが、もし同一詩節の中に議論に関わらない 1 人称接続法がある場合は、問題としている形の方に更に下線を引く。また、2/3 人称接続法がある場合は、他の動詞カテゴリーと同様に訳文中に ( ) で示すに留め、太字にはしない。

・各論の——つまり 1 人称接続法の——用例は、文意が損なわれない程度に、語順も含めなるべく原文に忠実に和訳した。またそれらの用例を総論で用いる場合も、基本的に各論の訳をそのまま挙げたが、場合によっては、文のつながりをより明確にする目的で一部語句の順序を入れ替えた。

## 総論

### I 形態

#### 1 用例の統計と分布

RV における 1 人称接続法語形は、83 の語根に基づく 97 の動詞語幹（時制語幹）から作られ、134 種の語形が例証されている。ただしこの中には、以下 3 で検討する不確実語形の数に含まれない。用例の総数は、繰り返し部分も含めると 254 箇所、210 詩節に現れる（複数の用例が同一詩節に現れる場合が多い）。この全体数を RV の巻別に見ると、I (51), II (10), III (11), IV (21), V (28), VI (9), VII (15), VIII (33), IX (9), X (67) である。巻によって数の違いに幅があるが、各巻の全体量における割合からすると、それほど極端な違いは見られない。相対的には、IV, V, VIII, X 巻における割合が比較的高く、VI, VII, IX 巻が比較的低い。I, II, III 巻は中程度である。2/3 人称接続法が RV より後に急激に生産性を失うことと、これに対し 1 人称接続法が後々まで（1 人称命令法として）生き続けたことを考慮すると、人称による分布と、いわゆる「家伝書」（“family books/Familienbücher”: II–VII）とそれ以外（特に言語的、内容的な新層が顕著な I, X 巻）といった文献層の違いとの間に何らかの相関関係が無いかどうか、今後検討する必要がある。

#### 2 1 人称接続法の語形成

ヴェーダ語の接続法語形は、動詞語幹に接続法専用の接尾辞（音韻環境によって *-a-* もしくは *-ā-*、→ 2.2, 2.3）が添加され（接続法語幹）、これに人称語尾が付いて形成される：  
 動詞語幹 + 接続法接尾辞 *-a/ā-* + 人称語尾 = 接続法語形。動詞語幹としては、用例の大半を占める二大時制語幹——現在語幹（pres[ent stem].）とアオリスト語幹（aor[ist stem].）——の他にも、完了語幹（perf[ect stem].: 広い意味でこれも時制語幹に含まれる）や、受動語幹（pass[ive stem].）、未来語幹（fut[ure stem].）、使役語幹（caus[ative stem].）、意欲語幹（desid[erative stem].）、強意・反復語幹（intens[ive stem].）、名詞起源の動詞語幹（denom[inative stem].）といった、いわゆる二次的現在語幹が用いられる。

以下では、本論が対象とする 1 人称接続法の語形形成法を、動詞語幹（時制語幹）（2.1）、接続法接尾辞（2.2）、人称語尾（2.3）に分けて概観する。

## 2.1 語幹

1人称接続法の全 134 語形 (254 箇所) の語幹別の内訳は、現在語幹が 73 (134), アオリスト語幹が 46 (101), 完了語幹が 5 (6), 二次語幹が 10 (13) である。現在語幹では、nasal pres. 25 (43), full-gr. them. pres. 22 (27), root-pres. 17 (52) が特に多く, redupl. pres. 5 (7) にも数例見られる。他の現在語幹は散発的に例証されるに過ぎない: full-/extend.-gr.(?) them. pres. 1 (2)<sup>7</sup>, zero-gr. them. pres. 1 (1), -ya-pres. 1 (1), -ske-pres. 1 (1)。アオリスト語幹では, root-aor. 24 (69) が圧倒的に多く, -s-aor. 11 (16), redupl. aor. 5 (9), zero-gr. them. aor. 5 (6), -sa-aor. 1 (1) と続く。上記の二語幹に比べて, 完了語幹の用例が極めて少ないことが目立つ: 5 (6)。二次語幹では caus. 6 (6), intens. 4 (7) のみが見られる。形態上 fut. subj. 1sg. act. が疑われる RV I 165,9 *kariṣyā* は, 文脈から fut. subj. 2sg. act. *kariṣyāḥ* と考えられる → 3.1.1 を参照。RV では, pass./desid./denom. の1人称接続法は見られない<sup>8</sup>。以上の例証される語幹の形とアクセントを, 非幹母音幹と幹母音幹とに分けて検討する。

### 2.1.1 非幹母音語幹の語形とアクセント

語幹部分が母音交替 (Ablaut) を示す時制語幹 (下記 3) *īd-* 以外の非幹母音幹) は, 殆どの場合標準階梯 (full-grade) をとり, アクセントは例外無く full-gr. の部分に置かれる, e.g. root-pres. *brāv-āni*, nasal pres. *kṛ-ṇāv-āma*, root-aor. *yāj-ā*, -s-aor. *jé-ṣ-āma*, perf. *ta-tān-āma*, *sū-sāv-āma*。一方, これに当てはまらない語幹も幾つか存在する。語幹がゼロ階梯 (zero-grade) を示すもの (1) -4)), full-/zero-gr. のいずれか決められない語幹 (5)), そして延長階梯 (extended-grade) を示す語幹 (6)) である:

#### 1) zero-grade : root-aor. *bhuvāni*

語根 *bhav/bhū* のアオリスト語幹は一貫して zero-gr. を示すが, ギリシア語やラテン語など他の印欧語の対応形から, この現象は印欧祖語に遡ると考えられる, root-aor. ind. 3sg. act. *ábhūt* = Gr. *éphū*, cf. Lat. *fui* (古くは *fui*)<sup>9</sup>, GOTÖ 230。その中で接続法だけが, 他の (Ablaut を持つ) root-aor. と同じように full-gr. から形成される (\**bhāv-a-*) という状況は想定し難いため<sup>10</sup>, *bhuvāni* に見られる *bhuv-a-* (< \**b<sup>h</sup>uh<sub>2</sub>-e-*) も印欧祖語本来の接続法語幹であった

<sup>7</sup> *-rājāni* → 注646。

<sup>8</sup> pass. subj. は, RV では V 31,12 *áva ... bhriyāte* が唯一の用例と思われる, KULIKOV -ya-pres. 131, 552. desid./denom. subj. は, 1 人称以外では複数例証されている, e.g. desid. 3sg. *títṛpsāt*, *nínitsāt*, 3pl. *saparyān*; denom. 2sg. *śravasyās*, 3sg. *uruṣyāt*, 3du. *varivasyātas*。

<sup>9</sup> Ablaut を示さない zero-gr. の語幹は, 完了語幹においても対応が示唆される: perf. ind. 3sg. act. *babhūva*, cf. Gr. 3pl. act. *pephúāsi* (Hom.), *péphuka* etc., STRUNK KZ 86 24ff. + n. 15, cf. FRISK II 1053f.。アオリスト語幹の zero-gr. を, パラダイム内の均一化による二次的現象とする意見もある (MAYRHOFER EWAia II 256 に参考文献)。

<sup>10</sup> pres. ind. *bháva-*<sup>11</sup> に本来の aor. subj. を認めようとする説については, VII 86,2 *bhuvāni* を参照。

可能性が高いと思われる(同書同箇所; 各論 VII 86,2 も参照)。ところでヴェーダ語には、同様に zero-gr. のアオリスト語幹, 完了語幹を示す語根に *sav<sup>i</sup>/sū* 「(母が) 子を産む」がある: aor. 3sg. act. *asūt*, perf. 3sg. act. *sasūva*, cf. pres. 3sg. mid. *sūte* (接続法語形は例証されていない)。ただしこの語根はインド・イラン語派にのみ見られ, またこれらの語形が, 語幹の zero-gr. 及び reduplication の母音についても *bhav<sup>i</sup>/bhū* のそれと酷似していることから, それぞれ *ābhūt*, *babhūva* に倣って作られたものと思われる<sup>11</sup>。

*bhuvāni* のアクセント語形は例証されていないが, 他の人称語形 (*bhúvas*, *bhúvat*, *bhúvan*) からは語根部分のアクセントが想定される。

## 2) zero-grade : intensive I

語根部分で Ablaut を示す非幹母音幹の intensive (= intensive I) は, 接続法語幹を一貫して弱い形 (zero-gr.) から形成する (SCHAEFER 35ff.)。1人称接続法では, *vevid-āma* (語根 *ved/vid*) < PIIr. \**uajuiid-āma* (cf. OAv. \**vōiuuid-a*<sup>12</sup>), *carkir-āma* (*kar<sup>i</sup>/kṛ*) < PIIr. \**čarkṛH-āma*<sup>13</sup>, 及び *jañghán-āni*, *jañghan-āva* (*han*) が例証されている。ただし, *jañghán-āni*, *jañghan-āva* に関しては事情が複雑である。他の intens. I subj. (zero-gr.) と同様に考えれば, \**jañ-ghn-āni/-āva* が想定されよう。SCHAEFER 70 は, 同じく zero-gr. が想定される subj. 3sg. act. 及び ptcpl. act. m. nom. sg. に例証される *jāñghan-at* と, gen. sg. *jāñghn-at-as* との違いを, 「Sievers の法則の効力が, 差し当たり最終音節に限られる」ことによって説明する, cf. pres. 3pl. mid. *sarsr-ate*。これによって subj. 3sg. *jāñghan-at* (2sg. *jañghan-as*) が説明されるなら, *jañghán-āni/-āva* はこれらへの類推により -*ghan-* を取り入れたと考えられる, → 各論 X 119,10 も参照。しかし, この「Sievers の法則」だけでは説明出来ない場合もあるため (inj. 3pl. mid. *jāñghan-anta*, perf. ind. 3sg. mid. *sarsr-é*), より多面的な要因が考慮されるべきであろう。音節の位置とは関係無く 3子音連続の回避という現象一般と, 連続する子音の音韻的特徴との関りも吟味する必要がある。例えば, -*rsr-* では *s* が持続音であり, *s* と *r* とは調音位置がほぼ同じであるが, -*ñghn-* では *gh* が破裂音であり, しかも *gh* と *n* とでは調音位置が大きくずれることなど, 発音のしやすさが深く関係している可能性がある。また, 動詞ごとのパラダイム内の均一化 (Ausgleichung) も影響していると思われる。例えば *sar/sṛ* の intens. 活用では, 語根部分の -*sar-* の形は一度も例証されていない: pres. ind. 3sg. mid. *sarsṛte*, 3du. *sarsṛāte*, perf. 3sg. mid. *sarsre*, pres. ptcpl. mid. m. sg. nom. *sársrāṇas*, gen. *sársrāṇasya*。これに対して *han* の場合は, 定動詞は全て -*ghan-* を持ち (上記 5語形 + pres. ind. 3sg. act. -*jañghanti*), -*ghn-* は上記 pres. ptcpl. に一度現れる他は, pres. ptcpl. でのみ見られる異形 m. sg. nom. *ghánighnat*, dat. *ghánighnate* に例証されるだけである。また -*ghan-*

<sup>11</sup> *asūt* → GOTÖ Material. 1991 698 n. 141; *sasūva* → STRUNK op. cit. 26f.

<sup>12</sup> Cf. SCHAEFER Intens. 186 n. 557.

<sup>13</sup> 或いは < PIIr. \**čark<sub>s</sub>r-ā* < \*\**čarkr-ā*? (以下 *jañghán-āni*, *jañghan-āva* の説明及び各論 IV 39,1 を参照)。

においては、root-pres. subj. の語幹の形 (*hán-* : 1du. act. *hánāva*, pl. *hánāma*, cf. sg. *hanāni* MS +) の影響も皆無では無いであろう。以上のことから、*jañghán-āni/-āva* には、他の intens. subj. と同様に本来 zero-gr. からの形成が想定されるが、*-ghan-* を持つに至った過程については諸々の理由が複合的に絡み合っていると考えられるため、単純な結論を出すのは難しいと言える。

intens. I 1人称接続法の中でアクセントを示すのは、*jañghánāni* だけである。しかしこれは、ind. と同じ redupl. 部分にアクセントを持つ subj. 3sg. act. *jāñghanat* や他の intens. I subj. の用例 (*mármṛjat*, *cárkr̥ṣat*) から見ると異例であり、むしろ当該箇所文脈（話し手がソーマに酔っている）におけるアクセントの乱れが想定される、→ 各論 X 119,10。

### 3) zero-grade : *īdāmahai*

現在語幹 *īd-* は、語源的には redupl. pres. に起源する可能性が高い : PIE *\*h<sub>2</sub>i-h<sub>2</sub>isd-*, cf. LIV<sup>2</sup> 260f. + n. 2。ただし RV では既に *īd* が語根として定着しているため (cf. vadj. *īdūtā-*, gerdv. *īdya-*), *īd-* は root-pres. として理解される。mid. でのみ活用し (Ablaut を示さず), アクセントは常に語根部分に固定されている<sup>14</sup> : pres. ind. 1sg. mid. *īde*, 3sg. *ītte*, ptcpl. *īdāna-*。

### 4) zero-grade : 異例形 (人工語形) : *pruṣā, śaśvacāi*

root-aor. (?) *pruṣ-ā* (語根 *proṣ/pruṣ*) は、当該詩節の名詞 *abhra-prūṣo* の押韻によって作られた人工語形成 (Kunstabildung) と思われる、→ 各論 X 77,1。また、perf. *śaśvacāi* (語根 *śvañc/śvac*) は、語根部分の zero-gr., 及びアクセント位置に関しても、zero-gr. them. pres. (第六類動詞 : ind. 1sg. mid. *viśé* :: subj. *viśái*) の影響を受けた異例形と思われる、→ 各論 III 33,10。いずれの場合もパラダイム中で生産性を持つ語形ではなく、当該箇所において ad hoc に形成された語形成 (Augenblicksbildung) と判断される。

### 5) zero-grade/full-grade? : 語根部分が *-ā* に終わる語幹

語根部分の full-gr. が *-ā* で終わる語幹は、接続法語幹を zero-gr. から作ることがある。これはまず 2/3人称で明確に認められる。redupl. pres. *dádāhā-/dadh-* ~ *dádāh-* (語根 *dhā* ; pres. ind. act. 3sg. *dádāhā-ti*, 1pl. *dadh-mási*, 3pl. *dádāh-ati*) は、2/3人称接続法を一貫して zero-gr. から作り (*dádāh-a* → “kurzvokalischer Konjunktiv”<sup>15</sup>), しかもこの形成法はイラン語の対応形から、インド・イラン共通時代に遡るものと判断される (PIIr. *\*d<sup>h</sup>a-d<sup>h</sup>H-a-*) : 2sg. act. *dádāh-a-s* ≈ YAv. *-daθ-ō* < *\*-a-s*, 3sg. act. *dádāh-a-t* ≈ YAv. *-daθ-a-t* (cf. *-daθ-ā-ti*), 2du. act. *dádāh-a-thas*, 3pl. act. *dádāh-a-nti*。同様に redupl. pres. *jāhā-/jah-* (語根 *hā* ; 3sg. act. *jāhā-ti*, 3pl. *jah-ati*) も、pres. subj. 3sg. *jah-a-t* (AB VIII 23,11) 及び OAv. pres. subj. 3pl. act. *zaz-ə-ntī* から、

<sup>14</sup> IV 3,3 *īdé* は、むしろアクセントの位置から 3sg. perf. mid. と判断される, KÜMMEL Perf. 122 + n. 69, cf. LUBOTSKY Concord. I 324: pres. 1sg. mid. “irregular accent”。

<sup>15</sup> HOFFMANN Aufs. I 29f. n. 5, 224 n. 6, II 445f. n. 14 を参照。

また nasal pres. *minā-/min-* (語根 *may<sup>i</sup>/mi<sup>i</sup>; minā-ti*, 3pl. act. *min-án*) も, pres. subj. 3sg. act. *min-a-t*, 3pl. *min-a-n* (RV) から, それぞれ接続法語幹を zero-gr. PIIr. *\*j<sup>h</sup>a-j<sup>h</sup>H-a-/mi-n-a-* から形成していたと理解される。nasal pres. *junā-/jun-* (語根 *jav<sup>i</sup>/jū<sup>i</sup>; junā-si*, 3pl. act. *jun-ánti*) の場合は, 接続法語幹の形が明らかではない。もし RV I 27,7 *junās* に subj. 2sg. act. (i.e. *\*ju-naH-a-s*) を認めるならば<sup>16</sup> (HOFFMANN Inj. 111 n. 13), full-gr. *ju-nā-* が想定される。

これら2/3人称語形では語幹の階梯が明らかであるのに対して, 1人称接続法語形 *dadhāni*, *dadhāma*, *jahāma*, *mināma*, *junāma* は, full-/zero-gr. のいずれから導くことも可能である (e.g. full-gr. *de-d<sup>h</sup>eh<sub>1</sub>-o-me/zero-gr. de-d<sup>h</sup>h<sub>1</sub>-o-me > dadhāma → 2.2*)。full-gr. による形成が印欧祖語本来のものであるならば<sup>17</sup>, あえて zero-gr. からの再形成を想定する必要はないと思われる。強語幹が *-ā* に終わる語幹 ——他にも root-aor. subj. *dhāti*, *dāti* (OAv. *dātī*, cf. 2sg. *dāhi*: *-ā* は 2音節) と並んで *dhat* (OAv. *da<sup>i</sup>ntī* 3pl.) 等 —— に “kurzvokalischer Konjunktiv” が多く見られるのは, これらの語幹では (laryngeal の消失とともに) ind./inj. の強語幹語形と subj. 語形とが同形になることを回避する必要があったためであろう。とすればむしろ, 1人称接続法語形がいわば蝶番 (Scharnierform) となって “kurzvokalischer Konjunktiv” が作られた可能性が高いと思われる, e.g. *asāni*, *asāma* : *asat* = *dadhāni*, *dadhāma* : *x* → *x* = *dadhat*, cf. HOFFMANN Aufs. II 445f. n. 14。

redupl. pres. *dadhāni*, *dadhāma*, *jahāma* のアクセント語形は例証されていない。ただし RV において, subj. *dadha-* の他の人称語形が一樣に reduplication 部分にアクセントを持つことや (*dádhat*, *dádhatas*, *dádhanti*, *dádhate* etc.), また後のヴェーダ語文献に例証される subj. 1sg. *dádhāni* (e.g. ŚāṅkhĀ, ŚB), *dádhāma* (ŚB) の存在からは, ind. と同じアクセント位置 (redupl. 部分) が想定される。また *jahāma* も, *jáhāni* (AVŚ, AVP) から, 同様に判断される (cf. pres. ind. *jáhāti*)。一方 nasal pres. *mināma*, *junāma* は, 時制語幹部分か法接尾辞のいずれかにアクセントを持つ。

#### 6) extended-grade : *sākṣāma*

*sākṣāma* (語根 *sah*) は, 他の *-s-aor. subj.* と違い (*jéṣāma*, *śreṣāma*, *saniṣāmahe* etc.) extend.-gr. から作られているのが特徴的である。RV に例証される *sah* の *-s-aor.* 語形は ind. mid. 及び接続法のみであるから, 本来いずれの場合も full-gr. *sakṣ-* が予想されるが, 実際には *sākṣ-* が大勢を占める : ind./inj. mid. *asākṣi*, *sākṣi*, subj. *sakṣat*, *sākṣāma*, *sākṣate*, iptv. *sākṣva* → NARTEN 264f. *sākṣ-* は, 実際に例証されていない act. 語幹 *\*sākṣ-* に基づくと見るよりも, 長い *-ā-* を示す他の多くの語形 (pres. ptcpl. *sāhant-/sāhant-*, aor. opt. *sāhyāma ~ sahyās* etc.)

<sup>16</sup> I 27,7 *yām agne pr̥tsú márti yam ávā vájeṣu yām junāḥ | sá yántā sásvatīr iṣaḥ* 「アグニよ, 諸々の戦いにおいて, 君が援助するところの (pres. subj.), 諸々の競走において君が駆り立てるところの死すべき [人間] がいれば, その者は途絶えることない滋養たちを, 手にする者である」。

<sup>17</sup> RIX Historische Grammatik des Griechischen 230。

とともに、二次的な perf. ind. mid. 形 *sa-sāhé* (← \**sāhé* < PIE \**se-sg<sup>h</sup>*-) から抽出された *sāh* に基づく可能性が高い, KLINGENSCHMITT *Altarm. Verb.* 129 + n. 4, cf. NARTEN 264f. n. 832. *sākṣāma* は、上記の他の -s-aor. 語形と同様に語根部分にアクセントを持つ。

## 2.1.2 幹母音語幹の語形とアクセント

幹母音語幹の接続法では、法接尾辞が付加されるのみで語幹構造に変化は起きない。その際アクセント位置も、ind./inj. など他の活用形と変わらない, e.g. them. pres. subj. *vāhāni*, *ārcāma*, *yājāmahai* (cf. ind. *vāhāmi*, *ārcāmasi*, *yājāmas[i]*); ya-pres. *yūdhyai* (cf. iptv. *yūdhyata*, ind. *yūdhyate*), them. aor. *sānā* (cf. inj. *sānat*<sup>18</sup>), *ruhāva* (cf. inj. *ruhām*<sup>19</sup>).

redupl. aor. *vóc-a-* (< PIE \**u<sup>é</sup>-uk<sup>w</sup>-e-*) には、subj. 3sg. act. にのみ非幹母音幹も例証されている: *vócati/vocati* (5x)<sup>20</sup>。しかし接続法も含め他の語形が一樣に幹母音幹 *voca-* を示すこと (e.g. ind. *āvocat*, inj. *vócat*, iptv. *vocā*, *vocata*, subj. 1sg. act. *vocā*), 非幹母音幹の用例が 1例を除き RV の新層に見られること<sup>21</sup>, また zero-gr. に固定された (Ablaut を示さない) 非幹母音幹が想定し難いこと (cf. *apapt-a-t*, *āvīvr̥dh-a-t*) などから、subj. *vócati/vocati* は二次的な形であると考えられる → LIV 673<sup>22</sup>。従って、subj. du. act. *vocāma*, du. mid. *vocāvahai* も同様に幹母音幹として理解される。1人称接続法にアクセントは例証されていないが、上記 *vócati* からは、他の幹母音幹と同様、他の活用形とともに *vóc-a-* に固定されていると見られる<sup>23</sup>。

## 2.2 接続法接尾辞 (= 幹母音)

印欧語の名詞／動词语幹の形成に使われる「幹母音」(thematic vowel, Themavokal) PIE \**-e/o-* は、接続法語幹を形成する接尾辞としても用いられる。これは、ギリシア語など他の印欧諸語との比較から、時制語幹に用いられる幹母音と同様に、active では 1 人称全て

<sup>18</sup> them. aor. *sān-a-* は恐らく古い root-aor. に基づいており (NARTEN *Sprache* 14 119 = Kl.Schr. 81, GOTÖ 84), それによって語根部分のアクセントも説明される (CARDONA *The Indo-European thematic aorists* 33f.), cf. *vid-á-t*, *tip-á-n*。ただし子音に挟まれた *-a-* を持つ語根では、その出自はどうであれ語根部分にアクセントが置かれることが多い (GOTÖ 284 n. 659)。*sān-a-* のパラダイムでは、opt. *sānema* ~ *sanéma* だけが揺れを示すが、*sanéma* は athem. root-aor. から二次的に作られた *e*-optative *gaméma* etc. からの類推によるものと考えられる (この種の opt. についての参考文献は GOTÖ 285 n. 662)。特に *san* と構造的、意味的に類似な *van* 「打ち克つ、克ち得る」にも、同様の opt. *vanéma* が例証されていること (GOTÖ 284f.) は注目される。

<sup>19</sup> inj. *rúhat* (1x: RV V 36,2) のアクセントについては不明。

<sup>20</sup> MEIER-BRÜGGER *Konj.Opt.* 116 は同様に、redupl. aor. subj. *siṣadhāti* (時制語幹 them. *siṣadh-a-*) と並んで 2sg. *siṣadhah/siṣadhah* (2x) が接続法である (i.e. 時制語幹 athem. *siṣadh-*) 可能性を指摘しているが、用例からそれを確定するのは困難である。

<sup>21</sup> *vocati*: RV I 105,4, I 123,3, X 11,2, X 16,11; *vócati*: V 27,4.

<sup>22</sup> Cf. BENDAHMAN 202.

<sup>23</sup> opt. 全体に見られる *vocé-* (*vocéyam*, *vocéma*, *vocés*, *vocéyur*) は、恐らく *e*-opt. からの類推 → 注18。

及び 3 人称複数で (i.e. 唇音 *u*, 鼻音 *n, m*, laryngeal *h<sub>2</sub>* に始まる語尾の前で) *\*-o-*, それ以外では *\*-e-* という分布を示していたと考えられる<sup>24</sup>。PIE *\*-e/o-* はいずれも PIIt. *-a-* に統合されるが, *\*-o-* については, 開音節においてのみ *-ā-* に変化するという, インド・イラン語派共通の音韻法則 (BRUGMANN の法則) が働く: 幹母音幹 1du. *-ā-va*, pl. *-ā-ma* < PIE *\*-o-ua*, *\*-o-me*, e.g. pres. subj. Ved. *áy-ā-ma* ~ Gr. (Hom.) *í-o-men* (< *\*é-o-men*), cf. pres. ind. Ved. *i-más* ~ Gr. *í-men*。これに対して, middle の時制語幹/接続法の幹母音の分布は, その起源も含めてよく分かっていない, cf. JASANOFF Stative and middle 47–55。同書 52f. によれば, 高い可能性を以て印欧祖語に再建される幹母音は, 3sg., 2/3du., pl. *\*-o-* と 2sg. pl. *\*-e-* であるが, その一方で, 印欧祖語の段階で act. *\*-e-::* mid. *\*-o-* という対立の傾向もある程度あったという (op. cit. 51)。ヴェーダ語の 1 人称接続法に関する限り, 語尾の音韻環境が act. のそれに対応しており (act.: sg. *-ā* [< *\*-o-h<sub>2</sub>*], du. *-va*, pl. *-ma*; mid.: *-ai* [< *\*-o-h<sub>2</sub>ai*], *-vahai*, *-mahe/-mahai*), また act. の場合と同様に, 非幹母音幹 du./pl. mid. の語幹末音 *-ā-* も BRUGMANN の法則によって最もよく理解されることから, 本論でも act. の幹母音及び上記 mid. : *\*-o-* の傾向に従い, 1 人称接続法 mid. の時制語幹/接続法の幹母音を PIE *\*-o-* として理解する。ただし mid. の幹母音については, 今後他の人称を含めた議論が必要である。

[動詞の幹母音の問題については更に, 本論で参照に至らなかった次の論文が挙げられる: KLINGENSCHMITT “Das Albanische als Glied der indogermanischen Sprachfamilie” (Tischvorlage), In Honorem Holger Pedersen (Kolloquium der Indogermanischen Gesellschaft in Kopenhagen 1993). 1994 [1995]. Wiesbaden: 227; JASANOFF “The Thematic Conjugation Revisited”, *Mír Curad* (Studies in honor of Calvert Watkins). 1998. Innsbruck: 301–316]

接続法接尾辞の現れ方は, もともとの時制語幹が幹/非幹母音幹のいずれから作られているかによって変ってくる。時制語幹が非幹母音幹であれば, 語幹と語尾との間に置かれた幹母音は, 語根部分が一貫して full-gr. を示すことや (部分的な) 語尾の違いとともに, 接続法の明らかな特徴となる: e.g. ind. 3sg. act. *ás-ti*, pl. *s-ánti* :: subj. 3sg. act. *ás-a-ti*, pl. *ás-a-n*。一方, 時制語幹がもともと幹母音幹であれば, 接続法接尾辞 *-a-* の更なる付加によって, 接続法語幹は長母音 *-ā-* だけを末尾に持つことになる。この *-ā-* は, もともとの時制語幹が短母音に終わる 2/3 人称語尾の前で明瞭であり (1 人称語尾の前では時制語幹自体が既に *-ā-* → BRUGMANN の法則), 接続法を特徴付けるサインとして強く認識されていたと思われる。その結果, 既に RV の時代から, 非幹母音幹の——つまり本来は短母音だけを持つはずの—— subj. 2/3act. にも (部分的に mid. にも) 長母音の接尾辞が取り入れられた: 接続法の「過剰表示」(Hypercharakterisierung)<sup>25</sup>, e.g. root-aor. 3sg. act. *mar-ā-ti* ← *\*mar-a-ti* (~

<sup>24</sup> RIX Historische Grammatik 230f., SZEMERÉNYI Einführung 266f., MEIER-BRÜGGER Indogermanische Sprachwissenschaft 161f., 180。

<sup>25</sup> HOFFMANN Aufs. I 30 + n. 1。ヴェーダ語の用例については更に GOTÖ 81f., 97, 275, 291, 343 を, ア

*mār-a-te*); *pad-ā-ti* ← \**pad-a-ti* (cf. *var-ā-te* ← *vār-a-te*)。この現象が他の語派でも（恐らく独立に）起こっていることは注目される：OPers. 2sg. act. *kunav-ā-hiy* ← \**kunav-a-hiy* (cf. Ved. *kṛṇā-va-s*), cf. Gr. 1pl. *í-ō-men* ← *í-o-men*。これに対して接続法 mid. では、二通りの異なったやり方で過剰表示がなされている。一つは 2/3du. に限定される現象で、act. の場合と同様、幹母音幹の語尾 *-aithe*, *-aite* (cf. ind. *-ethe*, *-ete*) が、非幹母音幹（本来 *-ethe*, *-ete*）にも取り入れられたことである：e.g. *dhaithe* ~ *dhéthe*。もう一つは、subj. 1sg. の特徴的な語尾（と接尾辞との融合形）*-ai* が、他の mid. 語形の語尾（の末尾）にも広げられたことで、1du. 全てと 1pl. の多くに、また 3sg., 2pl. にも一度ずつ見られる：1pl. *-āmahe* ~ *-āmahai*; 2pl. *-ādhve* ~ *-ādhvai*; 3sg. *-āte* ~ *-ātai*。1人称における後者の現象については、以下の 2.3.4, 2.3.5 で再度取り上げる。

## 2.3 人称語尾

全体的に見て、接続法の人称語尾には、第一語尾 (prim[ary ending]), 第二語尾 (sec[ondary ending]) のいずれもが用いられる<sup>26</sup>。ただし人称と数（すう）によって（つまり機能以外の要因によって）、どちらが使われるかはほぼ決まっており、両方の語尾が同様に用いられるのは、2/3sg. act., 3pl. act./mid. に限られる（*kāraṣi/kāraṣas*; *karati/kārat*; *karanti/kāran*; *kṛṇavante/kṛṇāvanta*）。1人称の場合は、act. では sg. が第一語尾を、du./pl. が第二語尾を、mid. では sg./du./pl. の全てが第一語尾を取る<sup>27</sup>。本来、二種の語尾は機能的に差異化されていたと思われるが（cf. HOFFMANN Inj. 268 n. 4）、少なくとも、語尾の選択に機能外の要因が大きく関わっていると判断される。1人称だけからは、今のところ何らかの仮定を導き出すのは難しい。2/3人称の用例も含めて、今後もう一度検討すべき重要問題である。

以下では、それぞれの語尾について、ヴェーダ語の他の動詞形との関係や歴史的な背景を考慮しながら説明を試みる（図の ? の部分については、以下の説明を参照）。

（図 → 次頁）

ヴェスタ語の用例は KELLENS Verb.av. (175-)176 を参照。ヴェーダ語における過剰表示は、AV 以降により多くの用例が見られる：*āsāt*, *āyāt*, *kṛṇavāt* etc.。

<sup>26</sup> これは動詞組織において接続法だけに見られる特徴である。

<sup>27</sup> 1 人称単数が第二語尾を取る可能性については、2.3.1 (act.), 2.3.3 (mid.) 及び 3.2.1: 1)–4) (act.), 同 5) (mid.) を参照。

接続法人称語尾の分布

	active						middle					
	sg.		du.		pl.		sg.		du.		pl.	
	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.
1	○	?		○		○	○	?	○		○	
2	○	○	○		○		○		○		○	
3	○	○	○		○	○	○		○		○	○

1人称のみ表示

active						middle					
sg.		du.		pl.		sg.		du.		pl.	
prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.
<i>-ā</i>			<i>-va</i>		<i>-ma</i>	<i>-ai</i>				<i>-mahe</i>	
<i>-āni</i>	( <i>-am?</i> )	—		—			( <i>-e?</i> )	<i>-vahai</i>	—	<i>-mahai</i>	—

2.3.1 1人称単数能動態 (1sg. act.) : *-ā* / *-āni* (/ *-am?*)

これらの語尾のうち *-ā* が本来の語尾であり、*-āni* は前者から拡張された形である。*-ā* の形成は印欧祖語まで遡り、既に接続法接尾辞 *\*-e/o-* (1人称では *\*-o-*) と本来の subj. 1sg. act. の語尾 *\*-h<sub>2</sub>* とが融合した形を表わす : PIE *\*-o-h<sub>2</sub>* > *\*-ō* > PIIt. *\*-ā*。この形は、ヴェーダ語の非幹母音幹においては、1人称接続法の形として明確な特徴となる : root-pres. *ay-ā*, *stāv-ā*, nasal pres. *kṛṇav-ā*, roo-aor. *karā*, *yój-ā*。一方幹母音幹の場合は事情が複雑である。もともと印欧祖語においては、*\*-h<sub>2</sub>* は接続法 (幹／非幹母音幹) の語尾であるばかりでなく、幹母音幹 ind. 1sg. act. の語尾でもあった (非幹母音幹は *\*-mi*)。つまり本来的に、幹母音幹の subj. 1sg. act. と ind. 1sg. act. とは同じ形を示していたことになる。この状況は、例えばギリシア語ではそのまま継承された : subj. 1sg. act. = ind. 1sg. act. *phérō*。しかしインド・イラン語派では、次の二つのやり方で両語尾の差異化が図られた : 1) pres. ind. 1sg. act. の形に、本来非幹母音幹専用の語尾であった *\*-mi* を更に添加した : PIIt. *\*b<sup>h</sup>ár-ā ~ \*b<sup>h</sup>ár-ā-mi* (Ved. *bhārāmi*, YAv. *barāmi*, OPers. *barāmiy*)。2) subj. 1sg. act. の形に、particle *\*-ni* (出所不明) を付して *\*-ā-ni* によって接続法を特徴付けた : PIIt. *\*b<sup>h</sup>ár-ā ~ \*b<sup>h</sup>ár-ā-ni* (Ved. *-bharāni*, YAv. *barāni*)。このうち 1) の改変は、ヴェーダ語では全ての幹母音幹で貫徹したと見られ、RV において文脈から ind. 1sg. act. の語尾 *-ā* を証明出来る用例は無い, cf. OAv. pres. ind. *spasiā* (~ ved. *pásyā-mi*), OAv. pres. ind. *pār<sup>s</sup>sā* (~ OPers. *parsā-miy*, Ved. *prcchā-mi*)。一方 2) の

改変も大きな広がりを見せ、本来その必要性がなかった非幹母音幹 (ind. *-mi* :: subj. *-ā*) にも及んだが、完全に普及するには至らなかった : root-pres. ind. *brāvī-mi* :: subj. *brav-ā* ~ *brāv-āni*; root-aor. inj. *kar-am* :: *kar-ā* ~ *kār-āni*, cf. OAv. *aṇh-ā* ~ Ved. *asā-ni*. 幹母音幹での ind. *-mi*, subj. *-ni* の導入が、いずれも多義的な語形の排除という必要に迫られたものであったのに比べて (iptv. 2sg. act. との関係は次段落参照), 非幹母音幹での *-ni* の使用はパラダイム内の均一化 (Ausgleichung) 以外に特別な動機付けを持たなかったからであろう。RV における ind. *-ā-mi* が極めて高い生産性を示すこと、そしてこれに対して subj. *-ā-ni* の広がり不徹底であることから、*-ā* に終わる幹母音幹の動詞形に ind. 1sg. act. は想定し難く、1人称を表わすことが確実な場合は、pres. subj. 1sg. act. としての判断が優先される。

1sg. act.			
幹母音幹 (* <i>b<sup>h</sup>er/bhṛ</i> 「運ぶ」)		非幹母音幹 (* <i>h<sub>1</sub>ei/ h<sub>1</sub>i</i> 「行く」)	
them. pres. ind.	them. pres. subj.	root-pres. ind.	root-pres. subj.
PIE * <i>b<sup>h</sup>ér-o-h<sub>2</sub></i> (* <i>b<sup>h</sup>ér-ō</i> ) > PIIr. * <i>b<sup>h</sup>ár-ā</i> ~ * <i>b<sup>h</sup>ár-ā-mi</i>	PIE * <i>b<sup>h</sup>ér-o-o-h<sub>2</sub></i> (* <i>b<sup>h</sup>ér-ō</i> ) > PIIr. * <i>b<sup>h</sup>ár-ā</i> ~ * <i>b<sup>h</sup>ár-ā-ni</i>	PIE * <i>h<sub>1</sub>éi-mi</i> > PIIr. * <i>ái-mi</i>	PIE * <i>h<sub>1</sub>éi-o-h<sub>2</sub></i> (* <i>h<sub>1</sub>éi-ō</i> ) > PIIr. * <i>ái-ā</i> ~ <i>ái-ā-ni</i>
↓ > Ved. <i>bhárā-mi</i> ----- (cf. OAv. <i>spasiā</i> ) > YAv. <i>barā-mi</i> > OPers. <i>barā-miy</i>	↓ > Ved. <i>bhārā*</i> ~ <i>-bhārā-ni</i> ----- (cf. redupl. aor. <i>vocā</i> ) ----- (cf. OAv. <i>xšaiiā</i> 3 syl.) > YAv. <i>barā-ni</i>	↓ > Ved. <i>é-mi</i> ----- (cf. OAv. <i>ah-mī</i> , OPers. <i>ah-miy/a-miy</i> = Ved. <i>ás-mi</i> )	↓ > Ved. <i>áyā</i> ~ <i>áyā-ni</i> ----- (cf. OAv. <i>aṇhā</i> ) > OAv. <i>aiie-nī</i> > YAv. <i>-aiie-ni</i>

ただし実際の RV のテキストでは、*-ā* に終わる動詞語形には他にも多くの可能性が存在する。これらの多義的な語形が生じる原因には、上記 1sg. ind. act. のような歴史的音韻変化の他にも (更に perf. ind./subj. *jahā*), 韻律上の長母音化 (iptv. 2sg. act./subj. *árca* → *árcā* etc.), 或いは単なるテキストの乱れ (*kariṣyā*) の場合もある。こうした事例は全て、機能や文脈によって subj. 1sg. act. であるか否かを判断する必要がある。特に幹母音幹の iptv. 2sg. act. *-a* (=語幹そのもの) は、RV では頻繁に長母音化し、また文脈上も1人称接続法と重なる場合が多い。このことも、上記の古い ind. pres. との差異化という要因と並んで、subj. 1sg. act. の改変を促した大きな要因の一つであったと考えられる, cf. HOFFMANN Inj. 248. 以下 3.1 では、このように語尾 *-ā* を示す動詞語形のうち、接続法の機能が疑われる用例

を全て調査した結果、VI 59,1 *vocā*, V 75,2 *sānā*, VIII 74,13 *mṛkṣā* の三語形のみを、高い確実性を以て subj. 1sg. act. として判断した。本論の機能研究では、この 3 語形だけをデータとして用いることとする。

次に、RV の接続法組織全体にわたる第一／第二語尾の併用を考慮すれば、subj. 1sg. act. においても第二語尾 *-(a)m* が使われていないかどうか吟味する必要がある。その場合、非幹母音幹では *-a-m*、幹母音幹では *-a-a-m > -ā-m* が想定されるが、幹母音幹で *-ām* に subj. 1sg. act. が想定される用例は見られない (pres. inj. *kṣiṇā-m*, aor. inj. *dā-m*, *sthā-m* はいずれも *-ā* に終わる非幹母音語幹の inj. 1sg. act. として理解され、*-yā-m* に終わる語形は全て通常の非幹母音幹 opt. 1sg. act. の形である)。一方、非幹母音幹の *-am* 語形の中には、接続法語幹 ( $\neq$  ind./inj. 語幹) からの形成が疑われる場合があり (*stoṣ-am*, *dediś-am*)、また、1sg. act. が full-gr. を示す語幹では、*-am* 語形は本来の inj. 1sg. act. でもあることから、全ての用例について文脈に基づいた判定が必要である。またその際、幹母音幹の場合も含めて inj. 語形が二次的に接続法として用いられる可能性 (cf. HOFFMANN 247f.) も検討の余地がある。以下 3.2 では、こうした様々な可能性の点から subj. 1sg. act. あるいはその機能が疑われる用例を全て調査した結果、*-am* を示す語形は全て inj. 自体の機能によって説明可能であり、体系上の inj. *-(a)m :: subj. -ā ~ -āni* という分布はそれぞれ文脈からも確認されることを結論として得た。

### 2.3.2 1 人称 双／複数 能動態 (1du./pl. act.) : *-va/-ma*

非幹母音幹においては、語幹の full-gr. 及び幹母音 *-ā-* (= 接続法接尾辞 : PIE *\*-o-*) の存在によって接続法が明確に特徴付けられる。その際第二語尾 *-va*, *-ma* だけが用いられる (*hān-ā-va*, *ās-ā-ma*)。これに対して、幹母音幹、及び full-gr. が *-ā* に終わる非幹母音幹の場合は事情が複雑である。第一語尾 (*-vas*, *-mas*)、第二語尾 (*-va*, *-ma*) のいずれをとったとしても、それぞれ ind. act. ないし inj. act. と同じ形を持つことになるからである : e.g. PIE inj. (/ind.) *\*b<sup>h</sup>ér-o-ue(s)/me(s[i])* ( $\rightarrow$  2.2 「BRUGMANN の法則」), subj. *\*b<sup>h</sup>ér-o-o-ue(s)/me(s[i])* > PIIr. *\*b<sup>h</sup>ár-ā-ua(s)/ma(s[i])*, cf. Gr. ind. 1sg. act. *phér-o-men* :: subj. 1sg. act. *phér-ō-men*)。1 人称双数・複数の第一語尾語形と第二語尾語形に関する調査の結果、以下の事実が確認される : 第一語尾を取る 1 人称動詞語形の全ては、pres. ind. としての理解が好ましいか、もしくは問題無く理解可能である ; 第二語尾を取る du./pl. act. 語形のうち、inj. と確定出来るのは、事実上 *mā* + inj. の構文に限定されており (*mā* + *arāma*, *cukrudhāma*, *gāma*, *radhāma*, *riṣāma*, *sadāma* etc.), 残りの語形は全て機能的に subj. であることが明らかか、或いはその可能性が高いと判断される (I 173,1 *arcāma* については、II A 1.1 補説 1 を参照)。つまり RV の言語では、幹母音幹の inj. 語形は事実上生産性を失っていたと言える<sup>28</sup>。これら

<sup>28</sup> HOFFMANN 143 n. 73; 254 「…しかし禁止文以外では、act. の幹母音語形成は対応する同形の接続法から区別出来ない。このために恐らく、inj. の 1 人称語形は作られなくなったのだろう」。実際は非幹



## 2.3.3 1人称 単数 中動態 (1sg. mid.) : -ai (/ -e ?)

-ai は、接続法接尾辞 -a- と第一語尾 -e (< PIIr. \*-(H)a<sub>i</sub> < \*PIE \*-h<sub>2</sub>a<sub>i</sub> < \*\*h<sub>2</sub>ei) とが融合した形である。非幹母音幹の場合は、語幹の full-gr. と語尾のいずれにおいても ind. と subj. との違いは明白である : e.g. PIIr. ind. \*k<sub>ṛ</sub>-nu<sub>ṣ</sub>-Hā<sub>i</sub> > Ved. k<sub>ṛ</sub>-nv-é :: subj. \*k<sub>ṛ</sub>-náu<sub>ṣ</sub>-a-Hā<sub>i</sub> > ved. k<sub>ṛ</sub>-náv<sub>ṣ</sub>-ai. その一方で (1sg. act. の場合と同様に)、幹母音幹の ind. と subj. とはインド・イラン祖語の段階で同じ形を示していたことになる : e.g. PIE ind. \*H<sub>1</sub>áǵ-o-h<sub>2</sub>a<sub>i</sub>, subj. \*H<sub>1</sub>áǵ-o-o-h<sub>2</sub>a<sub>i</sub> > PIIr. ind./subj. \*iáj<sub>ṣ</sub>-ā<sub>i</sub> (ギリシア語においては、恐らく二次的に act. -mi から -m- を取り入れることで、ind. と subj. との違いが保たれた : ind. phér-o-mai<sup>30</sup> :: subj. phér-ō-mai)。そこでインド・イラン語派では、これら両形態の差異化が行われた。恐らく “-a<sub>i</sub>” の形が接続法を特徴付けるサインとして強く認識されたために、ind. 1sg. mid. の語尾を非幹母音幹と同じ \*-e に改変した : PIIr. ind./subj. \*iáj<sub>ṣ</sub>-ā<sub>i</sub> > subj. Ved. yáj<sub>ṣ</sub>-ai, YAv. yaz<sub>ṣ</sub>-ā<sub>i</sub> :: ind. → yáj<sub>ṣ</sub>-e, YAv. -üez<sub>ṣ</sub>-e. イラン側 (新アヴェスタ語及び古ペルシア語) では更に、subj. についても、act. 語尾 \*-āni に倣って \*-āna<sub>i</sub> > \*-āne を形成した : YAv. yaz<sub>ṣ</sub>-āne (これは非幹母音幹にも広がった ; 下図参照)。RV において幹母音幹の1人称語尾 -e は極めて生産的であるのに対して、-ai はわずか二例見られるのみで (p<sub>ṛ</sub>chai ~ ind. 1sg. mid. p<sub>ṛ</sub>ché; yúdhya<sub>i</sub>, cf. ind. 3sg. mid. yúdhya<sub>te</sub>), いずれも機能的に subj. 1sg. mid. と確定されることから、上記の改変はヴェーダ語では一貫して作用したと見られ、もはや古い ind. mid. \*-ai が疑われる余地は無い。今や subj. mid. を特徴付けるマーカーとなった “-ai” は、更に mid. の他の人称・数にも持ち込まれることになる : 1du. \*-vahe → -vahi, 1pl. -āmahe ~ -āmahi (以下参照) ; 2pl. -ādhve ~ -ādhvai; 3sg. -āte ~ -ātai。

(図 → 次頁)

<sup>30</sup> Cf. RIX Gr.Gram. 253.

1sg. mid.			
幹母音幹 (*H <sub>1</sub> áġ/Hiġ 「称える」)		非幹母音幹 (*k <sup>w</sup> er/k <sup>w</sup> r 「つくる, 為す」)	
them. pres. ind.	them. pres. subj.	nasal pres. ind.	nasal pres. subj.
PIE *H <sub>1</sub> áġ-o-h <sub>2</sub> ai > PIIr. *iáj-āi	PIE *H <sub>1</sub> áġ-o-o-h <sub>2</sub> ai > PIIr. *iáj-āi	PIE *k <sup>w</sup> r-nu-h <sub>2</sub> ai > PIIr. *kr-nu-ai	PIE *k <sup>w</sup> r-néu-o-h <sub>2</sub> ai > PIIr. *kr-náu-ai
↓ → *iáj-ai			
↓ > Ved. yáje ----- > YAv. -iieze (cf. Ved. yacche OAv. -iiesē)	↓ > Ved. yájai ----- > YAv. yazāi (~ yazāne) (cf. Ved. pṛcchai OAv. pər <sup>3</sup> sāi)	↓ > Ved. kṛṇv-é ----- (cf. OAv. mruui-ē ~ Ved. bruv-é)	↓ > Ved. kṛṇáv-ai ----- (cf. OAv. is-āi = Ved. iś-ai) → YAv. kər <sup>3</sup> nauu-āne → OPers. kunav-ānaiy)

一部の -ai に終わる dat. inf. は, 形の上では(殆どの場合 -ā に終わる語根語幹) subj. 1sg. act. と解釈し得るが (pra-/vi-khyái, parā-dái<sup>31</sup>, prati-mái, ava-/ā-/upa-/pra-yái), pra-khyái 以外主文において前綴りが無アクセントであることと, また何よりも文脈的な理解が困難であることから, これらに接続法を想定するのは無理である。

幹母音幹の語尾 -ā が, ヴェーダ語文献特有の編集法 Samdhi「連声」によって -ai (subj. 1sg. act.) /-āh (subj. 2sg. act.) のいずれとも解釈できる場合 (pres. ind./subj. srjá V-) については, 3.1.1 を参照。

また act. の場合と同様に, mid. においても第二語尾が接続法に用いられていないかどうか検討する必要がある。ヴェーダ語には, 二種類の第二語尾が例証されている: -a, -i。このうちの -a は印欧祖語 \*-h<sub>2</sub>a < \*\*h<sub>2</sub>e に遡るが, インド・イラン語派でこれが保たれているのは opt. のパラダイムのみである<sup>32</sup>, e.g. Ved. sacey-a, vocey-a, masiy-a; OAv. vāurāii-ā, YAv. tanuii-a。これが接続法語尾に使われたとすれば, 幹母音時制幹では極めて多義的な形 (e.g. \*b<sup>h</sup>ára-ā-Ha > ?\*bhārā ~ subj./ind. 1sg act. ?/iptv. 2sg. act. ?) が生じることになり, たとえそれが接続法であり得たとしても, 同形となる act. の古形 (\*bhārā) から mid. 形を

<sup>31</sup> Cf. VI 16,26 dā (astu ...): inf. dāi ?/行為者名詞 dā-, nom. sg. dāh (= Pp.) ?, cf. GELDNER ad loc., SGALL 165 n. 62.

<sup>32</sup> RIX Gr.Gram. 246, WATKINS Idg.Gram. 137. opt. が特有の語幹の形を示すことから, 他と混同される恐れが無かったからであろう。\*-h<sub>2</sub>e を ipf./aor. ind. mid. の語尾として用いた語派では, 何らかの二次的な改変が起こっている: PIE ipf. \*e-h<sub>2</sub>eh<sub>1</sub>s-h<sub>2</sub>e 「私は座った」 > \*ēs-a → Gr. (\*ēs-mān [-ā- は母音延長もしくは \*-h<sub>2</sub>e → \*-eh<sub>2</sub> に基づく?] >) hē-mēn ~ Hit. (\*es-ḥa >) es-ḥa-ti, RIX loc. cit.

機能的に区別出来る例は見られない。一方、非幹母音時制幹の場合に予想される形 (e.g. *kṛṇáv-Ha* > ?\**kṛṇáv-a*) もまた例証されておらず、仮に韻律上の別形 *-ā* (*kṛṇávā*) を想定したとしても、結果は幹母音時制幹の場合と同様である。

もう一つの第二語尾 *-i* は、インド・イラン語派では ind./inj. に用いられる。ただし、*-i* の形は非幹母音幹では保たれるが (ipf. *avṛṇ-i*, root-aor. ind. *ayuj-i*, -s-aor. ind./inj. *ádikṣ-i*, *váṁs-i*; OAv. root-pres. inj. *aoj-i*), 幹母音幹では, ipf. 及びアオリスト語幹にのみ *-i* を想定することが可能である (i.e. *-a-i* → *-e*): ipf. *avije*, them. aor. ind. *áhuve/inj. huvé, vide*, them. redupl. aor. inj. *vóce*; OPers. ipf. *ayadaiy*). 現在語幹の inj. は論理的には可能であるが (e.g. \**bháre* < \**bhára-i*), これを、これと同形となる pres. ind. *bháre* (< *bháraj*; 前段落) から区別するのは文脈的にも困難であるため、幹母音幹の pres. inj. 語形を確実性を以て同定するのは事実上不可能である<sup>33</sup>。さて、*-i* が subj. 1sg. mid. の語尾として用いられたとすれば、非幹母音時制幹では *-e* < \**-a-i*, 幹母音時制幹では *-ai* < \**-a-a-i* が予想されよう。このうち、後者は第一語尾の subj. と同形であり、両者の区別は意味を為さない。一方非幹母音時制幹では、接続法と語幹の形を同じくする場合 (殆どの場合 full-gr.) に限り, subj. 1sg. mid. *-e* を想定し得る。perf. *tatan-e* (cf. 2sg./3sg. ind. *tatn-iṣe/tatn-e*) はこれに該当するが、語幹の形も機能も perf. ind. として問題無く理解される → 3.2.1. また、一部の *-e* に終わる dat. inf. にも第二語尾 *-i* を持つ subj. 1sg. mid. が疑われるが (e.g. *ā-dābh-e*, cf. aor. subj. *dābh-a-t; pari-/saṃ-nás-e*, cf. aor. subj. *nás-a-t*)<sup>34</sup>, 全ての事例において (上記 dat. inf. *-ai* の場合と同様) 形態的にも機能的にもその解釈は認め難い<sup>35</sup>。一方語幹が不変化の非幹母音時制幹では、仮定される subj. 1sg. act. *-e* は pres. ind. と同形であり (pres. ind. *íd-e* ~ subj. 1pl. *íd-ā-mahe*, pres. ind. *dadh-é* ~ subj. 3sg. *dádth-a-te*), 実際に文脈から接続法としての理解を優先すべき用例は見られない。幹母音幹の pres. ind. が、本来の \**-ai* を二次的に *-e* へ改変させたことから (前述), 体系上混乱をきたす subj. 1sg. mid. *-e* は想定し難い。また, act. *-am*

<sup>33</sup> HOFFMANN Inj. はこの問題を体系的には論じていないが, RV X 7,3 で inj. *saparyam* と並ぶ *manyē*, 及び X 95,8 *ni-śéve* に関して, 形態的, 機能的に inj./ind. いずれの可能性もあり得ることを指摘している, Inj. 112 + n. 14; 127 n. 43 (*manyē*); 203 (*ni-śéve*). ただし, 新アヴェスタ語では, ipf./aor. ind. のアウグメントは二次的に落ちることが多いため (cf. REICHEL 129), 文脈から過去時制が想定される場合は, 語形上 inj. として分類される, cf. YAv. *baire* → Yt 14,57 ind. (= Ved. *bháre*) :: Yt 5,6 inj. (KELLENS Verbe 202, 228; HOFFMANN/ FORSSMAN 194f.).

<sup>34</sup> 他に *ni-grābhe* (cf. aor. ind. *a-grabh-am*, AB subj. *grabh-a-t*), *abhi-/abhi-pra-/lava-/vi-/saṃ-cákṣe* (cf. pres. subj. 2sg. *cákṣ-a-se*, HOFFMANN 122 n. 33), *tāne* (cf. aor. ind. 2/3sg. *átan*; 或いは *tán-dat.?*), *pari-bhāvē* (cf. aor. subj. *bhāv-a-t*), *bhuvé* (アクセント?), *vāre* (cf. aor. subj. *vār-a-te*; 或いは *vāra-n.loc.?*, SGALL 164 n. 60).

<sup>35</sup> RV には, 時制語幹 (もしくは語根 ?) + *-se* によって形成され, 全人称の単数形 mid./pass. として用いられる一連の語形が存在する: *arcase, rñjase, ohiṣe, gāyīṣe, punīṣe, hiṣe, yajase, stuṣé, grñīṣé, cārkrṣe*. *-se* 語形 (特に 1 人称) は, 話し手がこれから行なう行為を表現する場面に現れることが多いという点で, 接続法に比べられる: e.g. I 46,1 *stuṣé vām aśvinā brhāt* 「アシュヴィンたちよ, 君たちを (声) 高く, (ここに) 私は称える」。しかし, 共通の語形成を伴うこれらは独立の文法範疇と見なされるべきであり, 接続法とは基本的に異なる機能を持つものと考えられる, cf. RASMUSSEN Der Prospektiv.

の場合と同様に、本来の inj. 語形（事実上 aor. inj.）が二次的に接続法として使われる可能性についても、疑わしい用例は見られず、全て inj. 自体の機能によって理解可能である。

以上の結果、subj. 1sg mid. の語尾には、非／幹母音幹に関らず *-ai* だけが認められる。

#### 2.3.4 1人称 双／複数 中動態 (1du./pl. mid.): *-vahai/-mahe ~ -mahai*

act. の場合と同様に、語幹の形と接続法接尾辞（幹母音）の存在から、非幹母音幹では subj. 1du./pl. mid. 語形は明らかであり、そこでは第一語尾だけが用いられる。du. の語尾は全て、語末に 1sg. mid. の “*-ai*” が持ち込まれた形 *-vahai* (:: pres. ind. *-vahe*) を示すが、pl. においては、本来の第一語尾 *-mahe* と *-mahai* とがほぼ同数見られる。こうした語末音の改変はイラン側には見出せず、ヴェーダ語の内部で起こったものと思われる。一方幹母音幹においては、du. と pl. とで事情が異なる。du. の通常の第一語尾 *-vahe* は、pres. ind. であることが明らかな VII 88,5 *purā + sacāvahe* にのみ見られ、その他の du. 語形は全て拡張形 *-vahai* を示すため接続法として確定される。これに対して pl. の第一語尾には *-mahai* が全く例証されていない。従って、pres. ind. と混同される可能性の無いアオリスト語幹 (them. aor. subj. *sicāmahe*, *huvāmahe*<sup>36</sup>) を除いては、pres. ind. と pres. subj. とは同形 *-ā-mahe* を示すことになる。しかしながら、これら二つを文脈から区別することは事実上不可能である。実際に *-ā-mahe* の用例は全て、pres. ind. の機能が好ましいか、もしくはその理解が可能であり、敢えて接続法の機能を要求するものは無い。ind. pres. が最も生産的なカテゴリーの一つであることや、幹母音幹の pres. subj./ind. を区別し得るのが “*-ai*” だけであり、しかもこれが非幹母音幹にも広がっていることなどからも、現在時制幹の幹母音幹 *-ā-mahe* は全て ind. pres. として理解される。

一方、幹母音幹における第二語尾の使用は、RV 全体で二例 (pl.) のみで、いずれも them. aor. である。そのうち VIII 21,16 *mā ... grhāmahi* は構造上 aor. inj. と確定され、VIII 24,1 *siṣāmahi* は aor. inj. の機能によって理解可能である（→ 注87）。アヴェスタにおいても、第一語尾だけが唯一例証される subj. 1pl. の語尾である：OAv. *is-ā-ma<sup>i</sup>dē*, *hišc-a-ma<sup>i</sup>dē*。

以上のことから、subj. 1du./pl. mid. には、対応する act. とは異なり、第一語尾のみが使われるものと判断される。

（図 → 次頁）

<sup>36</sup> アオリスト語幹と判断されることについては各論を参照。

Idu. mid. <sup>37</sup>		
幹母音幹 (PIIr. *sač «追いかける」)		
full-gr. them. pres. ind.	full-gr. them. pres. inj.	full-gr. them. pres. subj.
PIIr. *sačā- <i>uad</i> <sup>h</sup> <i>Haṯ</i> > *sačā- <i>uad</i> <sup>h</sup> <i>aṯ</i>	PIIr. *sačā- <i>uad</i> <sup>h</sup> <i>H</i> > *sačā- <i>uad</i> <sup>h</sup> <i>i</i>	PIIr. *sačā- <i>uad</i> <sup>h</sup> <i>Haṯ</i> > *sačā- <i>uad</i> <sup>h</sup> <i>aṯ</i>
↓ > Ved. <i>sacā-vahe</i> ----- (cf. OAv. 1pl. <i>yaza-ma'dē</i> )	(↓) > ? Ved. <i>sacā-vahi</i> * (cf. pl.: <i>mā</i> + them. aor. <i>gṛhā-mahi</i> <i>śiśā-mahi</i> )	↓ > Ved. * <i>sacā-vahe</i> → <i>sacā-vahai</i> ----- (cf. OAv. redupl.pres. 1pl. <i>hišca-ma'dē</i> )

1pl. mid.		
非幹母音幹 (PIIr. *kar/*kṛ «つくる, 為す」)		
nasal pres. ind.	nasal pres. inj.	nasal pres. subj.
PIIr. *kṛ- <i>nu-mad</i> <sup>h</sup> <i>Haṯ</i> > *kṛ- <i>nu-mad</i> <sup>h</sup> <i>aṯ</i>	PIIr. *kṛ- <i>nu-mad</i> <sup>h</sup> <i>H</i> > *kṛ- <i>nu-mad</i> <sup>h</sup> <i>i</i>	PIIr. *kṛ- <i>náu-ā-mad</i> <sup>h</sup> <i>Haṯ</i> > *kṛ- <i>náu-ā-mad</i> <sup>h</sup> <i>aṯ</i>
↓ > Ved. * <i>kṛṇu-mahe</i> (二次的に → <i>kṛṇ-mahe</i> ) <sup>38</sup>	(↓) > ? Ved. <i>kṛṇ(u)-mahi</i> * (cf. <i>mā</i> + -s-aor. <i>hās-mahi</i> ; du.: root-aor. <i>gan-vahi</i> ) ----- (cf. OAv. root-aor. <i>var<sup>2</sup>-ma'dī</i> )	↓ > Ved. * <i>kṛṇāvā-mahe</i> → <i>kṛṇāvā-mahai</i> (cf. root-aor. <i>kārā-mahe</i> )

### 2.3.5 語尾の分布について

RV におけるこれら 1 人称接続法語尾の統計と分布を、全体数 (図 a) 及び、幹母音幹、非幹母音幹ごとの内訳 (図 b, c) で見ると次の図のようになる。b, c では比較のために、ind. pres. の語尾を上段に、接続法のそれを下段に挙げ、subj./ind. に関わらず幹母音を持つものは幹母音を含めた形で表示する。各形の下に数字は語形の種類の数、括弧内は繰り返しを含む例証箇所の総数を表わす。接続法 (subj.) の行では、上方により古い形を、下にはインド・イラン段階もしくはインド内部での改変を受けた形を挙げる。

<sup>37</sup> インド・イラン語派の 1du/pl. mid. 語尾は、必ずしも印欧祖語の状態を反映しているとは限らないため、図ではインド・イラン共通祖語以降を記述する。

<sup>38</sup> SEEBOLD Halbvokale 45, HOFFMANN Aufs. II 585f. n. 21, Pāṇ. VI 4,87 を参照。

接続法の1人称語尾全体の分布

voice	active						middle					
num.	sg.		du.		pl.		sg.		du.		pl.	
end.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.
subj.	-ā 12 (20) -āni 17 (21)	-	-	-va 13 (16)	-	-ma 51 (116)	-ai 11 (15)	-	-vahai 8 (8)	-	-mahe 11 (43) -mahai 11 (15)	-

非幹母音幹

voice	active						middle					
num.	sg.		du.		pl.		sg.		du.		pl.	
end.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.
pres. ind.	-mi	-	-vas	-	-mas(i)	-	-e	-	-vahe	-	-mahe	-
inj.		-am		-		(aor.) -ma		-i		(aor.) -vahi		(aor.) -mahi
subj.	-ā 9 (17) -āni 9 (12)	-	-	-āva 6 (9)	-	-āma 35 (91)	-ai 9 (13)	-	-āvahai 3 (3)	-	-āmahe 9 (40) -āmahai 9 (13)	-

幹母音幹

voice	active						middle					
num.	sg.		du.		pl.		sg.		du.		pl.	
end.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.	prim.	sec.
pres. ind.	-āmi	-	-āvas	-	-āmas(i)	-	-e	-	-āvahe	-	-āmahe	-
inj.		-am		-		(aor.) -āma		(aor.) -e		-		(aor.) -āmahi
subj.	-ā 3 (3) -āni 8 (9)	-	-	-āva 7 (7)	-	-āma 16 (25)	-ai 2 (2)	-	-āvahai 5 (5)	-	(aor.) -āmahe 2 (3) -āmahai 2 (2)	-

これらの図からは、1人称接続法語尾の分布が、明確に形態論的な動機付けを持つことが伺える。つまり、接続法語形は全般的に、出来る限り *pres. ind.* (第一語尾を使用) 及び *inj.* (第二語尾を使用) と同語形になるのを避けて形成されていると見る事が出来る: *sg.* では、*act.*, *mid.* とともに、もともと *ind. pres.* とは異なる語尾を持つか、もしくは既に両者の差異化を貫徹しているため、第二語尾を用いる必要が無かったと言える。その際 *act.* では、接続法に特徴的な *-āni* が幹/非幹母音幹に分散しているのに対して、*-ā* の方は、古い *pres. ind. 1sg. act.* や、*iptv. 2sg. act.* と重なる危険の無い非幹母音幹に多く認められる。—— *du./pl.* の場合は、*act.* と *mid.* とで事情が異なる。*act.* では、いずれの数も第二語尾を取ることにによって、*pres. ind.* (第一語尾) との混同が回避されている。第一語尾を取った場合に *pres. ind.* と同語形になり得るのは、理論的には幹母音幹だけであるが、実際は非幹母音幹も同じ第二語尾で統一されている。恐らく、幹母音幹の事情による語尾の選択が、活用の経済性という点から、非幹母音幹にも持ち込まれたものと思われる。上の表からは、他の数においても幹母音幹と非幹母音幹とが、第一/第二語尾の選択に関して完全に対応していることが分かる。また第二語尾を取ることで生じる *inj.* 語形との同形化は、*inj.* の形成がアオリスト語幹、しかも *karma* (II 23,12) を除き全て *mā + inj.* の禁止構文に限定されることによって排除されている、cf. 2.3.2 及び注28。こうした同形化の排除も非幹母音幹でのみ有効な動機付けであるが、実際は非幹母音幹でも同様である。一方 *mid.* では、*du./pl.* とともに *pres. ind.* と同じく第一語尾を使用している。ただし、*du.* の語尾は全て接続法特有の二次的な形 (*-vahi*) に変化しているため、語形の混同を引き起こす可能性はない (*inj. -vahi* が例証されていないのは偶然であろう)。また *pl.* の場合、*pres. ind.* と同じ第一語尾 (*-mahe*) を使うのは、もともと混同される可能性のない非幹母音幹及びアオリスト幹母音幹に限定され、しかも非幹母音幹の用例の半数以上が、*du.* と同様に二次的な形 (*-mahai*) へと変化している。よって第二語尾は完全に *inj.* のために空いていると言えるが、ここでも実際には *act.* の場合と同様、*inj.* 語形はアオリスト語幹に限られており、またこのことは幹/非幹母音幹双方に共通している、cf. 2.3.4 及び注28。

以上のことから接続法の語尾は、*pres. ind.* や *inj.* といった、接続法と人称語尾を共有し、かつ同形となる危険のある動詞範疇と極めて巧みなやり方で「棲み分け」を行なっていることが分かる。もともとこれは、最も同音異義が起りやすい部分で起こったであろうが、恐らく活用の効率性を保つために、*act.* と *mid.*、或いは幹母音幹と非幹母音幹といった、パラダイム内の下位範疇の間で次第に均一化・対称化されていったものと思われる。1人称においてこうした現象が見られることは、第一/第二語尾の併用が残る2/3人称接続法の形態論において、今後極めて重要な視点を提示するものと期待される。

## 2.4 語形一覧

以上 2.1—2.3 で見た語幹から語尾に至る諸考察の結果、RV において例証される1人称接続法の用例は以下の通りである (2.3 の各所で指摘した不確定語形については、いずれも 1人称接続法として確定出来ないためここには挙げない；以下 3 を参照。括弧の中は同一語形の例証数；アクセント語形が例証されているものは、これを代表形として挙げる。また韻律上のヴァリエント、及び Samdhi による音変化は記さない)：

<現在語幹>	active	middle
<b>full-gr. them. pres.</b>		
sg. <i>carāṇi, náyāni, pacāni, bhajāni, váhāni</i>	--	
du. <i>ájāva, cárāva, jáyāva, śáṁsāva</i>		<i>sacāvahai, sahāvahai</i>
pl. <i>ārcāma</i> (4), <i>bhajāma, bhārāma, bhāvāma, mādāma, manthāma, yājāma</i> (3), <i>vadāma, vārdhāma, hārāma</i>		<i>yājāmahai</i>
<b>full-/extend.-gr.(?) them. pres.</b>		
sg. <i>rājāni</i> (2)	--	
<b>zero-gr. them. pres.</b>		
sg. <i>srjáṇi</i>	--	
<b>-ya-pres.</b>		
sg. --		<i>yúdhyai</i>
<b>-ske-pres.</b>		
sg. --		<i>pr̥chai</i>
<b>root-pres.</b>		
sg. <i>ayā, bravā, brávāni</i> (2), <i>stávā</i> (4)		<i>stávai</i> (3)
du. <i>hánāva</i> (3)		<i>bravāvahai</i>
pl. <i>áyāma</i> (3), <i>ásāma</i> (4), <i>kṣáyāma, brávāma</i> (12), <i>vásāma, stávāma</i> (11), <i>hánāma</i>		<i>īdāmahe, īdāmahai, brávāmahai</i> (2)
<b>redupl. pres.</b>		
sg. <i>dadhāni</i>	--	
du. <i>pibāva</i> (them.)	--	
pl. <i>dadhāma</i> (2), <i>juhāvāma</i> (2), <i>jahāma</i>	--	
<b>nasal pres.</b>		
sg. <i>anajā, kṛṇavā, hinavā</i>		<i>kṛṇávai</i> (2), <i>manávai, sunavai</i> (2)
du. <i>aśnavāva, riṇácāva, kṛṇávāva</i>		<i>kṛṇavāvahai, tanavāvahai</i>

pl. <i>inavāma</i> , <i>kṛṇāvāma</i> (9), <i>junāma</i> , <i>aśnāvāma</i> (2), <i>mināma</i> (2), <i>śaknāvāma</i> (2), <i>śṛṇavāmā</i> , <i>sunāvāma</i> (5), <i>sprṇāvāma</i>	<i>kṛṇāvāmahai</i> , <i>aśnāvāmahai</i> <i>bhunājāmahai</i> (2), <i>ruṇádhāmahai</i> , <i>siñcāmahai</i> (them.)
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<アオリスト語幹>

**zero-gr. them. aor.**

sg. <i>sánā</i>	--
du. <i>ruhāva</i>	--
pl. <i>tákṣāma</i>	<i>sicāmahe</i> , <i>huvāmahe</i> (2)

**root-aor.**

sg. <i>karā</i> (2), <i>kārāṇi</i> (2), <i>gamāni</i> (2), <i>gāni</i> , <i>pruṣā</i> (?) <i>bhuvāni</i> , <i>yó jā</i> (5)	<i>mānai</i> , <i>marai</i>
du. <i>vānāva</i>	--
pl. <i>kārāma</i> (2), <i>gamāma</i> (2), <i>dhāma</i> (3 syllabic) <i>marāma</i> (3), <i>rādhāma</i> (2)	<i>kārāmahe</i> (8), <i>gāmāmahai</i> , <i>dhāmahe</i> (3), <i>nāsāmahai</i> (3), <i>mānāmahe</i> (20), <i>marāmahe</i> , <i>vānāmahe</i> (4), <i>vānāmahai</i> , <i>starāmahe</i>

**redupl. aor.**

sg. <i>vocā</i>	--
du. --	<i>vocāvahai</i>
pl. <i>rīramāma</i> , <i>vocāma</i> (5), <i>siṣadhāma</i>	--

**-s-aor.**

sg. <i>stoṣāṇi</i>	<i>naṁsai</i> , <i>māṁsai</i>
pl. <i>jéṣāma</i> (2), <i>váṁsāma</i> (2), <i>śreṣāma</i> , <i>sāksāma</i> <i>stoṣāma</i> (4)	--

**-iṣ-aor.**

sg. <i>daviṣāṇi</i>	--
pl. --	<i>yāciṣāmahe</i> , <i>saniṣāmahe</i>

**-sa-aor.**

sg. <i>mṛkṣā</i>	--
------------------	----

<完了語幹>

sg. --	<i>śaśvacái</i> (?)
pl. <i>cākānāma</i> , <i>cakrāmāma</i> , <i>tatānāma</i> (2), <i>śūśāvāma</i>	--

## &lt;二次語幹&gt;

**caus.**sg. *randhayāni*

--

du. *irāyāva**īṅkhayāvahai, kalpayāvahai*pl. *irayāma, dhārayāmā*

--

**intens. I**sg. *jaṅghānāni*

--

du. *jaṅghanāva* (2)

--

pl. *carkirāma* (2), *vevidāma* (2)

--

(fut. --

--)

(pass. --

--)

(desid. --

--)

(denom. --

--)

**3 語形同定の諸問題（不確定語形の検討）**

2.3 では、1人称接続法語尾及び語形が、純粹に形態論的観点からは、他の（複数の）動詞語形と重なる場合が多いことを確認した。従って、ある語形が接続法であるか否かについての判断は、個々の文脈を検討することによって初めてより正しいものとなる。しかしながら、こうした作業によっても最終的に判断出来ない用例も多く存在する。その場合、複数の選択肢のどれに一番高い可能性を認めるかは解釈者の判断に左右されるため、客観的な基準を提示するのは困難である。以下では、こうした灰色部分の語形の中で特に問題となる1人称単数接続法について、形態及び機能、更には韻律の面でどのような問題が存在し、そして語形を同定する際にそれらをどのように処理すべきかを調査・検討する。そしてその結果、わずかの用例を除く殆どの語形には、2.3 で述べたように、1人称接続法としての判断を優先すべき特別な理由が見られないことを示す。ただしこうした不確定語形は、確実な用例の検討から構築された理論に基づき、将来もう一度検討し直されるべき語形であることも付け加えておく。

**3.1 -ā に終わる語形に、subj. 1sg. act. 以外の可能性が認められる場合**

RV の中には -ā に終わる動詞語形（ほぼ全て幹母音幹）が極めて多いが、その殆どは語形本来の形ではなく、むしろ Samdhi や韻律、或いはテキストの乱れといった二次的な要

因によって、結果的に *-a* を示す語形である。これらは見かけ上, subj. 1sg. act. の古形 *-ā* と同形であるのみならず、機能的にも容易にそれから区別出来ない場合が多い。以下では、こうした語形の一つ一つについて subj. 1sg. act. の可能性を検討し、語形の判断を行なう。その際、当該語形が subj. 1sg. act. 以外の複数の可能性を有する場合は 3.1.1 で、また文脈的に iptv. 2sg. act. と特別な類似性を持つ場合については 3.1.2 で扱う。

### 3.1.1 subj. 1sg. act. 以外に複数の可能性がある場合

#### 1) RV I 165.9 *kariṣyā*

*kariṣyā* (Pp. *kariṣyā*<sup>39</sup>) は、語形の上では未来語幹 (fut. I) に基づく subj. 1sg. act. か iptv. 2sg. act. (→ 3.1.2) と考えられるが、関係節中の命令法は考えられず、また機能に関らず (subj./fut. ind.?), 1人称の動詞を想定するのも難しい: I 165.9 *ánuttam ā te maghavan nákir nú ná tvā́vāṁ asti devātā vídānaḥ | ná jāyamāno násate ná jātó yāni kariṣyā kṛnuhí pravṛddha* 「誰一人として、有能な者よ、君 (インドラ) の突き動かされ [得] ない [力?] へと——神々において君のような者は知られていない——生まれつつある者も、(既に) 生まれた者も、到達することはない (だろう, aor. subj.). 君が為すつもりでいる事々を、君は為せ (pres. iptv. 2sg.), 強大になった者よ」。当詩節はマルト神たちの言葉であるが、これに対するインドラの言葉 (次詩節) から、ここでは、インドラが自分の思い通りに何でも為せるということが強調されていると考えられる: I 165.10 *ékasya cin me vibhāv āstāv ójo yā nú dadhṛṣván kṛṇāvai manīṣā | ... yāni cyāvam indra íd íśa eṣām* 「一人であっても私には、卓越した力がある。今勇気を奮い起して、計画に従って私が為そうとしている事々 (pres. subj.), ... 私が執り行う (pres. inj.) 事々、これらのことを、まさにインドラとして私は意のままにする (pres. ind.)」。当箇所 *kariṣyā* は恐らく、IV 30.23 *kariṣyā* (= *-syāḥ*) *indra ...*<sup>40</sup> の Samdhi 形が持ち込まれたもので、fut. subj. 2sg. act. *\*kariṣyāḥ* に修正すべきと思われる、cf. OLDENBERG *Noten ad loc.* fut. subj. は、RV ではこの二例 (*kariṣyā[h]*) しか例証されていない。いずれも主語 (2人称) の心積もりや予定を表わすものと理解される → II a) 3)。

一方、散文文献では fut. subj. の1人称も例証されている: e.g. JB III 368: 12 *ā-tapsyāni*, JB II 332: 8 *ā-siṣyāvahai*, AB III 50.1-3 *notsyāvahai* (3x), GB II 2.11 *taṁsyāmahai*, GB II 5.1 *anvavaiṣyāmahai*, (GB I 3.20 *upeṣyāmahai* ?) <sup>41</sup>。これらの多くは通常の1人称接続法の機能によ

<sup>39</sup> Pp. がどのような語形を想定しているのかは明らかでない (Pp. は通常、幹母音幹の iptv. 2sg. act. に対しては短母音 *-a* で記す)、cf. Sāy. ... *kariṣyā kartavyāni* (i.e. gerdv. n. nom. pl. !?)。

<sup>40</sup> IV 30.23 *utā nūnām yād indriyām kariṣyā indra páuṁṣyam | adyā nákiṣ tād ā minat* 「今も君が為そうとしている (fut. subj. 2sg. act.) インドラに属する偉業は、インドラよ、今日誰一人これを挫くことはない (だろう; pres. subj. 3sg. act.)」, cf. GELDNER transl.。

<sup>41</sup> 1du./pl. mid. の用例はいずれも Samdhi 形 *-vāhā/mahā iti* で現れる。疑問文では、語尾の *-ā* は fut. ind. (*-va/-ma iti*) の Pluti 語形である可能性もある: AB III 50.1-3 <*notsyāvahā*> (3x), GB I 3.20 <*upeṣyāmahā*> ,

って理解可能と思われる<sup>42</sup>。fut. subj. が現れた背景には、未来語幹と接続法とが、いずれも未来の事柄を表現する範疇であることが関係していよう<sup>43</sup>。また、恐らく同様の意味的類似性により、意欲語幹 (desid.) から接続法が形成される現象 (RV X 87,17 *túrpsāt*, VI 52,2 *nínitsāt*, VII 20,6; 100,1 *ā-vívāsāt*, X 50,3 *īyākṣān*, X 74,4 *abhī ... tūrtsān*, I 173,1 *ā ...vívāsān*; II 11,16 *ā-vívāsān* : 1人称の用例無し) や<sup>44</sup>、意欲語幹から未来語根が作られる場合 (e.g. ŚB III 1,2,15 *titikṣiṣyate*<sup>45</sup>, ŚB XI 2,7,12 *didṛkṣitār-*), 更には未来語幹と意欲語幹とが混交する事例 (e.g. KB II 9 *pari-jigrahīṣyant- ptepl.*, ŚāṅkhŚrSū XVI 4,6 *yiyaṣyant- ptepl.*)<sup>46</sup>なども注目し値する。各動詞範疇の意味領域と、それらが互いにどのように関係しているのかについては、今後 2/3人称も含めた接続法全体の議論の中で検討すべき課題である。

## 2) RV VI 20,8 *srjā*

zero-gr. them. pres. *srjā* (*iyādhyai*) には, (1) subj. 2sg. act. *srjāḥ*, (2) subj. 1sg. act. *srjai* ([BAUNACK とともに] GELDNER ad loc.), (3) iptv. 2sg. act. *srjā* (Pp. *srja*; OLDENBERG Kl.Schr. I 788, Noten ad loc.) の可能性が考えられる。VI 20,8 *sā vetasūṃ dāsamāyaṃ dāsoṇīm tūtuḥjīm indraḥ sāvabhiṣṭisumnaḥ | ā tūgraṃ śāśvad ībhaṃ dyótanāya mātūr ná sim ūpa srjā iyādhyai*<sup>47</sup>「十の魔力を持つ、十の腕を持つヴェータスのもとに、突進する[彼]に、よき援助を善意(の顯れ)とする、その(君)インドラは、トゥグラを、イバを、引き続きドウヨータナ (= ヴェータス?) のために、母[牛]の(乳房に仔牛を)のように、彼(トゥグラ=イバ)を、そばに放つべし (subj. 2sg. act.) (= ドウヨータナに従わせるべし), [彼が] やって来る／行くように<sup>48</sup>」, cf. GELDNER 「…ヴェータスに、インドラは(言った) …『トゥグラを…私は追い立てよう』」。背景には、インドラがヴェータス(族)に味方し、敵であるトゥグラ

II 5,1 <anv-avaīṣyāmāh>。特に GB I 3,20 *katham ... upeṣyāmo nopeṣyāmāhā iti* では, fut. ind. *upeṣyāmo* と一組で用いられており、その可能性が高い, GOTÖ Material. 1990 997 n. 62. Cf. WHITNEY 333f. §938 (AB *notsyāvahai* 以下の語形について) “doubtless false readings for -he”; OERTEL Kl.Schr. 294 (JB *āsiṣyāvahai* について) “perhaps false reading for *āsiṣyāvahe*”。WHITNEY 333f. の挙げる GB *sthāsyāmāhai* はテキストには見出されない。

<sup>42</sup> E.g. JB III 368: 12–14 *tam abravīn – mā mā tvaṃ tataḥ pratyātapsīr iti | nety abravīt praty eva tvātapsyānīti | tasmād etam ubhayor ahorātrayor paśyanti | prati hainaṃ tad ātapanti* 「彼(月)に彼(?)は言った:『私に向かつて、そこから、君は照りつけるな (mā + aor. inj. 2sg. act.: 以下参照)』と。彼(月)は言った:『いやだ。君に向かつてこそ、私は照りつけよう (fut. subj. 1sg. act.: 話し手の意志表明 → II A 1)』と。それゆえその者(月)を、昼と夜の両方において、人々は目にする。そうやって、当人(?)に向かつて、彼は照りつけているわけである (pres. ind.)」。(ātapsīr の -a- が短いのは異例, cf. TB *atāpsis*, MS, KS, ŚB *tāpsit* etc.)。後続の未来語幹 *tapsya-* に影響された形か, NARTEN 128, cf. OERTEL Kl.Schr. 317f.)

<sup>43</sup> RV における未来語幹と接続法との機能的差異については、II 接続法の基本機能 a) 3); b) を参照

<sup>44</sup> RV における意欲語幹と接続法との機能的差異については、II 接続法の基本機能 a) 4) を参照

<sup>45</sup> ただし desid. *titikṣiṣa-*<sup>1e</sup> RV+ は、既に独立の意味「～に耐え忍ぶ」を持つ語彙として確立している。恐らく *tejtij* (\*「～に対して尖ろうとする」?) ではなく、*tyaj* (\*「～を自分から遠ざけようとする、寄せ付けない」) に属すると考えられる → GOTÖ 166 n. 268。

<sup>46</sup> HOFFMANN Aufs. 572f. + n. 22; WHITNEY 376 §1036a, cf. WHITNEY 338 §948b, 378 §1040a。

<sup>47</sup> 語形については GOTÖ Material. 1990: 997 n. 63 を参照

<sup>48</sup> *ā ... iyādhyai, ūpa srjā / ā ... ūpa srjā, iyādhyai*? 或いは *ā* は二つの動詞にかかるか, cf. GELDNER ad loc..

を打ち負かしたという神話がある, GELDNER loc. cit., OLDENBERG Kl.Schr. I 787f.。文構造は難解であるが, 詩人は恐らく, インドラの過去の偉業 (トゥグラ打倒) を今新たに為すよう要求しているものと理解される。規則的な Samdhi と, また「(言った)」などを補わずに済むという点では, 上訳のように (2) *srjāḥ* (subj. 2sg. act.) を想定するのが自然と思われる。

### 3) RV VIII 45.37 *jahā*

*jahā* (*kó* ...) は形態的にも機能的にも多義的である。語幹としては, redupl. pres. *já-hā-* (*jāhāti*) ~ *ja-h-* (*ājahur*) と perf. *ja-hā/\*há-* (cf. AV *jahātha*, 2sg. act., ŚB, JB *jahau*) ~ *ja-h-* (*jahúr*) の二種類の解釈が考えられる。redupl. pres. の場合 subj. 1sg. の可能性が疑われるが, redupl. pres. に *-ā* で終わる語形は他に例証されておらず, また *ja-h(ā)-* の接続法は, AVŚ, AVP *jāhāni* から, アクセントを reduplication に有する (cf. *dá-dha(ā)*) と理解される → 2.1.1, 5)。一方 perf. の場合は, RV I 69,1 *paprā* にも見られるように, perf. ind. 3sg. act. の古形 (*jahā* < PIIr. \**j<sup>h</sup>aj<sup>h</sup>āH-a*) を留めている可能性が高い, GELDNER ad loc., KÜMMEL Perf. 30f., 608f.。perf. subj. も, 語根部分の full-grade 及びアクセント位置からは可能と思われるが (cf. *tatānāma*, *sūśāvāma*), 他に perf. subj. 1sg. act. は例証されておらず, \**jahā* (< PIIr. \**j<sup>h</sup>aj<sup>h</sup>āH-a*) は想像の域を出ない (cf. mid. *śasvacāi*, 但し 2.1 + 各論を参照)。以上の考察に基づけば, 形態及びアクセント位置からは perf. ind. 3sg. act. が最も可能性が高いと思われる。しかし, 実際の文脈からこれを確定するのも, 或いは他の可能性を排除するのも難しい: VIII 45.37 *kó nū maryā ámithitaḥ sákhā sákhāyam abravīt | jahā kó asmád īṣate* 「一体どんな盟友が, 若武者 (インドラ) よ, 敵対することなく, 盟友を——彼 (?) は言った——置き去りにしたのか (perf. ind. 3sg. act.: GELDNER ad loc.)。誰が (今) 我々から離れて行くのか (pres. ind. 3sg. act.)」, 或いは「一体どんな盟友が…盟友に言ったのか: 『私は [君を] 置き去りにしよう (subj. 1sg. act.: OLDENBERG Noten ad loc.)』 (と)。誰が…」。

#### 3.1.2 subj. 1sg. act. と iptv. 2sg. act.

幹母音幹の iptv. 2sg. act. には印欧祖語以来, 語幹そのもの (幹母音で終わる形) が使われるが (*árca*, *tīṣṭha*, *bhára*), RV のテキストでは, 語末短母音が韻律上の要請に対応して長母音形を示すことがあり, これは動詞語形にも多く見られる: e.g. inj. 1pl. *bhūma/bhūmā*, subj. 1pl. act. *brāvāma/bravāmā*, iptv. 2sg. act. *árcā/ārcā*, *śṛṇuhí/śṛṇuhī*, iptv. 2pl. mid. *bhárata/bháratā*, iptv. 2sg. mid. *vṛṣasva/vṛṣasvā*, cf. OLDENBERG Proleg. 394ff.。その場合, 既に指摘したように, 幹母音幹の iptv. 2sg. act. と, 古い (i.e. *-ni* の付加による改変以前の) subj. 1sg. act. *-ā* とが同形を示すことになる, e.g. *ārcā*, *bhārā*, *tīṣṭhā* etc. (→ 2.3.1)。一方で, 同様に韻律上の事情を考慮すれば, 本来の長母音が逆に短母音として現れる可能性を

も視野に入れる必要があろう, cf. neut. nom./acc. pl. *dhárma/dhārmā, nāmā/nāma, brāhmā/bráhma*, cf. LANMAN Noun-Inflection 539。つまり RV 内部では, 1sg. subj. act. *-ā > -a* という「変化」も理論上可能であると予想される。ただし, 長母音で終わる動詞語形が他に無いこと, また非幹母音幹の 1sg. subj. act. においても短母音形が見られないこと, 古形の 1sg. subj. act. *-ā* においては長母音だけが pres. ind. から区別出来る特徴であること, そして何より *-ā* の「短母音化」は先に述べた iptv. 2sg. act. の「長母音化」に加えて更なる語形の混乱を引き起こすこと, などを考えれば, 1sg. subj. act. *-a* の存在の可能性は極めて低いと思われる。しかしそれでも, 調査に厳密性を期すために, また以下で問題にする *-ā* 語形が *-a* 語形と極めて似た文脈に現れることから, 以下の議論では母音の長短を区別せず, 全ての幹母音に終わる語形を対象とする。

2sg. iptv. act. と 1sg. subj. act. とは本来人称も機能も異なる動詞語形であるから, 多くの場合, 文脈によって両者を区別することが可能である, e.g. IX 35,3 *tvāyā vīreṇa vīravo 'abhi syāma prṭanyatāḥ | kṣārā no abhi vāryam* 「勇者である君 (ソーマ) によって, 勇者を伴うものよ, 戦い挑む者たちを, 我々は圧倒したい。我々の望みのものに向かって, 君は流れよ (iptv. 2sg. act.)」。この例では, 文構造 (*no*) や動詞の意味からも, *kṣārā* にはソーマに対する命令以外は考えられない。しかし, RV の詩人が用いる語りのスタイルによって, 上の両語形が文脈的にも混同され得る場合が存在する。1人称接続法は, II A 1 において見るように, 話し手が自ら意志を表明するのに用いられ, その多くが神々や王を称えることを宣言する場合 (特に Sukta の冒頭で) などの詩人の言葉として現れる (a)。その一方で RV では, 詩人が同様の動作を自分自身に命令する場合 (b) も見られる:

(a) : subj. 1sg. act.

V 75,2ab *atīyāyatam aśvinā tiró viśvā ahām sánā* 「越えて, 君たち両者はやって来い (pres. iptv.), 両アシュヴィンたちよ, 一切の [歓迎歌] たちを通り抜けて; わたしが [君たちを] 勝ち取ろう (aor. subj.)<sup>49</sup>」

VIII 74,13 *ahām huvāná ārkṣé śrutārvaṇi madacyúti | śārdhāṁsiva stukāvīnām mṛkṣā śirṣā caturṇām* 「わたしは, 呼ばれれば, リクシャの子, 酩酊なすシュルタルヴァンの前で (もとで), (馬の) 群れを のように, たてがみ持つ四 [頭の馬] の頭を撫でよう (aor. subj.)」

VI 59,1ab *prá nú vocā sutéṣu vām vīryā yāni cakráthuh* 「さあ, 私は宣言しよう (aor. subj.), 君たち両者 (インドラ・アグニ) の (為に) 搾られた [ソーマ] たちの前で, 君たち両者が為した (perf. ind.) 諸々の武勲を」

<sup>49</sup> アクセントについては総論 II A 1.2.3 c) を参照。

(b) : iptv. 2sg. act.

I 64,1a *nódhaḥ suvṛktīm prā bharā marúdbhyaḥ* 「ノードス (=話し手自身) よ, よき称讃を, マルトたちのために, 君は捧げよ (iptv. 2sg. act.) !」

V 22,1ab *prā viśvasāmann atrivád ārcā pāvakāśociṣe* 「ヴィシュヴァサーマン (=話し手自身) よ, アトリのように, 君は唱え出せ (iptv. 2sg. act.), 清らかな明かりを持つ者 (アグニ) のために！」

VIII 33,4ab *pāhī gāyāndhaso māda indrāya medhīyātithē* 「君は飲め (iptv. 2sg. act.), 君は歌え (pres. iptv. 2sg. act.), [ソーマの] 茎の酔いの中で, インドラのために, ヌーディヤーティティ (=話し手自身) よ！」

I 132,1de *nēdiṣṭhe asmīnn āhanīy ādhi vocā nú sunvaté* 「この最も近い日に (i.e. 想定されるうちで最も早い日に), [ソーマを] 搾っている者に, 今, 君 (インドラ) は庇護を約束せよ (aor. iptv.)」

(a) の最初の二例はいずれも, 1人称代名詞 nom. *ahám* によって, 1人称 (= subj. 1sg.) であることが明らかであり, また (b) の最初の三例では, 話し手本人である詩人の名が voc. に置かれているために (voc. はローマン体 [*nódhaḥ* etc.] で表示), 詩人が自分自身に命令を発している (= iptv. 2sg.) ことが分かる (VIII 33,4 *pāhī* は形態的にも明らか)<sup>50</sup>。(a) の三つ目と (b) の四つ目はいずれも *vocā* を含み, 代名詞や voc. といった目印を持たないが, いずれも文脈から, それぞれ subj. 及び iptv. であることが了解される: (a) VI 59,12 では, 詩人は明らかに神々 (アシュヴィン双神) に向かって話しかけており, その同一の文中に詩人自身への命令が含まれているとは想像し難く (cf. 以下 3), また (b) I 132,1 は内容的に, 主語にインドラを, *sunvaté* に祭主/祭官を要求するからである。

幹母音幹の subj. 1sg. act. として *-ā* に終わる古形のが存在することは, まさしく (a) の三例によって証明される。

しかし, 以上のような形態的/文脈的な目印や判断材料が得られない場合には——実際

<sup>50</sup> iptv. 2sg. act. が明らかな例として更に: V 52,1 *prā śyāvaśva ... ārcā* 「シュヤーヴァーシュヴァよ, …君は唱え出せ」, VII 23,1 *īndram ... mahayā vasiṣṭha* 「インドラを…君は力付けよ, ヴァスィシュタよ」, VII 96,1 *sārasvatīm in mahayā ... vasiṣṭha* 「サラスヴァティをこそ君は力付けよ…ヴァスィシュタよ」, cf. V 25,7 *tād agnāye ... arca vibhāvaso* 「それ (歌) を. アグニに…君は唱えよ, ヴィバーヴァスよ (= 恐らく詩人の名前, cf. GELDNER ad loc.)」. 短母音形 *-a*: VIII 20,19 *yūna ū sū ... abhī sobhare ... gāya* 「さて若者たち (マルト神たち) にしかと…ソーバリよ, 君は歌いかけよ」, VIII 23,24 *nūnām arca ... īṣe vaiyaśva* 「今君は唱えよ…詩仙ヴァイヤシュヴァよ」, VIII 70,2 *īndram tām śumbha puruṣanmann ...* 「そのインドラを, 君は飾り立てよ, プルハンマンよ」 (cf. *jaritar* 「歌い手よ」も恐らく話し手自身: VI 50,6 *abhī ... arcēndram ... jaritar*, X 42,1 *nī rāmaya jaritah ... īndram*, X 42,2 *prā bodhaya jaritar ... īndram*). 文脈から明らかな例: V 52,5 *prā yajñām ... ārcā marúdbhyaḥ* 「称讃の言葉を (cf. av. *yasna-*!) を…マルトたちに, 君は唱え出せ」。

この方がはるかに多いが—— *-ā* 語形は *iptv. 2sg. act.* と *subj. 1sg. act.* のいずれに理解することも可能である。またその際 *iptv. 2sg. act.* は、自分自身への命令とも誰か他の詩人への命令とも解釈出来る場合が多いため<sup>51</sup>、都合 3通りの解釈が成り立つことになる、e.g. I 22,1 *prātaryūjā ví bodhayā- śvínāv éhá gachatām | asyá sómasya pītāye* 「朝に〔馬を〕つなぐ両者（＝アシュヴィン双神）を、君（＝/=話し手）は目覚めさせよ（*iptv. 2sg. act.*）／私は目覚めさせよう（*subj. 1sg. act.*）。両アシュヴィンたちは、ここへやって来い（*iptv. 3du. act.*），このソーマを飲むために」。こうした場合に語形の同定を行なうには、一定の作業仮説が必要である。そしてそのための判断基準としては、各動詞語形の歴史的背景が一つの手掛かりとなろう。即ち、幹母音幹の形そのものを用いる *iptv. 2sg. act.* は、印欧祖語以来いかなる改変も受けておらず、RV（及びそれ以降）においても唯一の *iptv. 2sg. act.* として極めて高い生産性を示す。これに対して *subj. 1sg. act.* は、既にインド・イラン共通時代に、*pres. ind. 1sg. act.* との混同を避けて改変形 *-ā-ni* を導入し、しかもこの改変は、同様の混同があり得ない非幹母音幹にも広く持ち込まれた → 2.3.1。これらの事実を考慮するならば、共時体としての RV を対象とする場合、文脈上の重大な問題が無い限りは *iptv. 2sg. act.* としての判断が優先されるべきものと思われる。つまり、上記 I 22,1 のような文脈的に中立な場合の *-ā* 語形は、全て *iptv. 2sg. act.* として理解可能である。しかしその一方で、こうした判断が文脈的に微妙な用例—— *subj. 1sg. act.* の可能性が他よりも高く見える場合——が存在する。以下ではそれらを文脈によって大きく分類し、類例と合わせながら検証する。

1) 以下 (c) の例では、*-ā* 語形を含む文の前後に（同一詩節であれ、複数の詩節に跨がる場合であれ<sup>52</sup>）、当該語形を *iptv. 2sg. act.* とした場合に想定される聞き手とは別の聞き手（神々／他の祭官等）が現れる。この場合、幾つかの例で GELDNER が訳しているように、*-ā* 語形を1人称と理解する方が自然に見えるかもしれない。しかし RV では、連続する命令文がそれぞれ異なる聞き手に向けられる現象は、語形上明らかな場合でも頻繁に見られることから（→ d）、(c) の例も全て *iptv. 2sg. act.*（＝/=話し手）として理解される：

(c) : *iptv. 2sg. act.*

VII 61,3-4 3cd *spāśo dadhāthe ōśadhiṣu vikṣāv ṛdhag yató ānīmīṣaṃ rākṣamāṇā* 「密偵たち

<sup>51</sup> ギリシア語文献に見える歌い出しの場面においても、1 人称で言う場合と詩歌の女神（ムーサ）に命令する場合とがある、cf. Theogn. *Mousāōn helikōniādōn arkhōmeth' aeidein haí th' helikōnos ékhousin óros méga te zdátheón te* 「ヘリコン山に属するムーサたちのことから、我々は歌い始めよう（*pres. subj. 1pl.*）,ヘリコン山の偉大で聖なる頂に住んでいるところの[ムーサたちのことから]」; Hom. Od. 1-2 *ándra moi énnepē, Mousa, polútropon, hòs mála pollà plágkhthē, epeí Troiēs hieròn ptoliēthron éperse* 「私に、ムーサよ、君は語れ（*pres. iptv. 2sg.*）, 多く遍歴した男（オデュッセウス）のことを、トロイアの聖なる都市を破壊した後、遙かな道のりを彷徨い続けたところの」。

<sup>52</sup> ただし詩節を跨ぐ場合は、文脈上の連続性が認められる場合に限る。例えば、一切神（*vísve devāḥ*）への讃歌などは、詩節ごとに別々の神々に対して向けられることが多いため、該当する事例は少ない。

を、草々の中に、諸部族の中に、君たち両者(ミトラ・ヴァルナ)は置き定めた(perf. ind. 2du.)、逸脱する者らを、まばたきすることなく監視しながら」；4ab *śāṁsā mitrásya várūṇasya dhāma śúṣmo ródasi madmadhe mahitvā* 「ミトラの、ヴァルナの居場所を、君は賞讃せよ (cf. GELDNER 'Ich will ...preisen')。[君たちの] 激昂は、天地両界を、偉大さで押し広げた」

VIII 13,7 *pratnavāj janayā girah śṛṇudhī jaritūr hāvam | máde-made vavakṣithā sukṛtvane* 「以前のように、(歓迎の) 歌を君は生み出せ (cf. GELDNER '... will ich eine Lobrede dichten ...')。君(インドラ)は聞け (iptv. 2sg.)、歌い手の呼び掛けを。(ソーマの) 酔いごとに(ソーマを飲んで酔うごとに)、君(インドラ)は増大してきた、よく事を為す者のために」

X 101,12# *káprn narah kapṛthám úd dadhātana codáyata khudāta vājasātaye | niṣtigrāḥ putrá ā cyāvayotāya indram sabādha ihā sómapitaye* 「(これが<sup>53</sup>) 男根である、男たち(他の祭官たち)よ。男根を、君たちは突き上げよ (iptv. 2pl.)、君たちは差し込め (iptv. 2pl.)、戦利品を勝ち得るために。ニシュティグリーの息子を、助力のために、君はこちらへ動かせ、インドラを、早急にここへ[動かせ]、ソーマを飲むために」

[更に：IV 3,1 「君たち(他の祭官たち)の王、ホートリ祭官である…アグニを…助力のために、君たちはこちらへ向けよ (*ā ... kṛṇudhvam*)」；2 「ここに、我々が君(アグニ)に作った母胎がある。…君は腰を降ろせ (*nī śida*)。…」；3 「耳を傾けている…不死なる神(アグニ)に…、巨人よ (*vedhaḥ*=詩人自身)、賞讃を君は言明せよ (*śastim ... śāṁsa*)」；4 「きみは、我々のこの儀礼行為に、アグニよ、気付け (*bodhi*)。…」；VII 31,1 「インドラに、君たち(他の祭官たち)の酔わせる[歌]を、君たちは歌い出せ (*prā ... gāyata*) …」；2 「讃辞を、君はまさに言明せよ (*śāṁséd*) …、我々男たちがしたように (*yāthā ... cakṛmā*)」；3 「君は、インドラよ、我々のために戦利品を求める、牛を求める…」；I 37,4-5, V 59,1, VI 49,11-12, VI 68,8-10, X 63,2-3 については以下 (e) を参照]

(d)

II 3,3 *īditó agne mánasā no árhan devān yaksī mānuṣāt pūrvo adyā | sá ā vaha marūtām śárdho ácyutam indram naro barhiśādām yajadhvam* 「アグニよ、我々の思考によって、相応しい者として呼ばれたなら、今日神々を、君は祭れ (iptv. 2sg.)、人に属する者(祭官)[が呼ぶ]より前に。その[君]は、マルトたちからなる、揺らぐことのない群れを、連れて来い (iptv. 2sg.)<sup>54</sup>。男たち(他の祭官たち)よ (iptv. 2pl.)、バルヒスに座るインドラを、君たちは祭れ (iptv. 2pl.)」

V 52,14 *ácha ṛṣe mārutam gaṇām dānā mitrām ná yośāṇā | divó vā dhṛṣṇav<sup>a</sup> ójasā stutā dhībhīr iṣanyata* 「詩仙(=話し手)よ、マルトたちからなる一群を、贈り物によって (?)

<sup>53</sup> 恐らく前詩節に言われる *vānaspātī-* のこと。ここでは木が男根として象徴化されていると思われる。

<sup>54</sup> *vaha* は文脈から、明らかに iptv. 2sg.。

こちらへ [向けよ], 若婦人が, 伴侶を [そうする] ように。あるいは, 天から, 勇敢な者たち (= マルトたち) よ, 力によって, 君たちは [贈り物を] 送り出せ (iptv. 2pl.), 諸々の思慮によって称えられて」

X 42,1cd *vācā viprās tarata vācam aryó ní rāmaya jaritaḥ sóma índram* 「詩人たちよ, (自分たちの) 言葉によって, 敵の言葉を, 君たちは凌駕せよ (iptv. 2pl.)。歌い手よ, ソーマのもとに, インドラを, 君は留ませよ」

[更に例えば: VIII 42,2 「こうして, 背の高いヴァルナを, 君は誉め称えよ (*vandasva*)。聡い, 不死性を護る者に, 君は敬意を示せ (*namasyā*)。… 天地両界よ, 膝元で, 我々を君たち両者は護れ (*pātām no*)」; I 46,9 「カンヴァたちよ (*kaṇvāsa[h]*), (ソーマの) 滴りたちが, 天の [ある場所 (足跡) に] (ある)。…。何処に, 自分たちの隠れ家を, 君たち両者 (= アシュヴィン双神) は定めようとして いるのか (*dhitsataḥ*)」 (ただし, 文の構成素ではない者の *voc.* については, 以下 3)-(i) も参照)]

(d) の V 52,14 *r̥se* や X 42,1 *jaritaḥ* (*voc.*) は, 話し手本人を指している可能性が高いと思われるため, その場合, 異なる聞き手の一人が話し手自身であることも考えられる。

2) 次に問題となるのが, *-ā* 語形を含む文の前後に話し手自身 (sg.) もしくは話し手を含む集団 (pl.) が, 別途1人称動詞や代名詞で登場する場合である (e)。複数の詩人/祭官が臨席し, それぞれの役割を担っているであろう祭式儀礼の場では, 歌い手が自分 (たち) の所作を述べるのと前後して, 彼が他の詩人/祭官に特定の動作を命令するという状況は, RV では一般的に見られる状況であり, 場合によっては 1) で見た (d) よりも自然な文脈であるとも言えよう, e.g. IX 97,4 *prá gāyatābhy ārcāma devān sómam hinota mahatē dhānāya* 「君たち (ウドガートリたち) は歌い出せ (pres. iptv.)。我々 (ホートリたち) は唱えかけよう (pres. subj.), 神々に。ソーマを 君たち (アドヴァリュたち) は送り出せ (pres. iptv.), 大いなる 財産のために」。ただし, この例のように話し手—聞き手の関係が明確な場合は少なく, しかも同じ主語による動作が複数列举されている可能性がある場合には, 当該語形を前後の1人称動詞と同様に考えることも故無しとしない<sup>55</sup>。しかしながら, 殆どの用例のように, 動作内容とその主語とを明確に結びつける文脈が無い場合には, *-ā* 語形を subj. 1sg. act. と判定するための基準を設けるのは不可能に近い。「当該語形が他の1人称動詞/代名詞と同一詩節にある場合のみ; 同一詩節内でもそれらが隣接する文に現れる場合のみ; 他の1人称が前後のいずれの文にも現れる場合のみ」といった形式的な判断

<sup>55</sup> 例えば (e) の III 54,2, V 59,1, VI 49,12, X 89,3 において, GELDNER が当該語形を1人称動詞として訳出しているのもこのためであろう。

基準は、殆ど役に立たない<sup>56</sup>。また多くの用例に見られるように、他の1人称の存在に加えて、当該語形以外の2人称命令法が前後に重なって現れる場合もあるが、それも先に見た(c)の考察から、有効な基準にはならない。結局、個々の例において「1人称らしく思える」か否かは、殆ど解釈者に委ねられることになる。こうした状況に加えて、以下(f)のように、2人称命令法が語形上明らかな場合にも1人称動詞／代名詞が前後して現れる事例が見られることを考慮すると、(e)の用例はいずれも、話し手自身に関する発言と何らかの聞き手に対する発言(iptv. 2sg. act.)とが並んでいるものとして問題無く理解出来る：

(e)

I 52,1 *tīyām sú meṣām mahayā s<sub>u</sub>varvīdam śatām yāsya subh<sub>u</sub>vāḥ sākām īrate | ātyam ná vājam havanasyādam rātham éndram yavṛtyām ávase suvṛtībhiḥ* 「例の、太陽光を見つけ出す雄羊を、しかと君は敬え、その者の百の偉力が、一遍に作動するところの。駿馬が懸賞品へと[向かう]如く、呼び掛けに急いで走る戦車を、(乗り手の)インドラを、助力のために、よき称讃たちによってこちらへ私は向けたい (aor. opt.)」

II 33,8 *prá babhráve vṛṣabhāya śvitīcé mahó mahīm suṣṭutīm irayāmi | namasyā kalmalikīnaṁ námobhir gr̥ṇimāsi tveṣām rudrāsya náma* 「赤褐色の、白みがかった雄牛(ルドラ)に、偉大な者(ルドラ)への、偉大なよき称讃を、私は(ここに)動かしている (pres. ind.)。きらめく[彼]に、諸々の敬意によって、君は敬意を示せ (GELDNER ‘Verneige dich ...!’)。ルドラの名前を、我々は(ここに)誉め称えている (pres. ind.)」

III 54,2 *māhi mahé divé arcā pṛthivyái kámo mā ichāñ carati prajānān* 「大いに、偉大なる天に、君は唱えよ (cf. GELDNER ‘Ein hohes (Lied) will ich ... singen’), 大地に[唱えよ]。私の願望は[両者を]求め続けている、(両者の居場所を)予知しつつ。」

IV 29,3 *śrāváyéd asya kárṇā vājayādhyai jūṣṭām ānu prá díśam mandayādhyai | udvāvṛṣāṇó rādhasé túviṣmān káran na indrah sutīrthābhayaṁ ca* 「彼(インドラ)の両耳を、君は(よく)聞かせよ、(彼が)戦利品を得るように。喜ばれる方角に(彼を)[向かわせよ]、(彼が我々を)喜ばせるように。恩恵のために勇み立つ、強さを備えたインドラは、よき渡り道たちと、恐れ無きことを、我々に作るべし (aor. subj. 3sg.)」

V 59,1 *prá va spāḍ akran suvitāya dāvāné- arcā divé prá pṛthivyā ṛtām bhare* 「君たち(マルト神たち)の密偵は、叫び声を挙げた (aor. ind.)、(君たちに)よき進行を与えるために。」

<sup>56</sup> 一般には、文脈的繋がりは一詩節内部の方が圧倒的に強いと言えるであろう。しかし、Sukta 全体に互る場合も含め、複数の詩節において、同一詩節と同じくらい内容や場面設定の連続性が認められる場合は多い。確かに、例えば II 33,8 *irayāmi* (1sg.), *namasyā ... gr̥ṇimāsi* (1pl.) と X 89,3 *arca* — 4 *prerayam* (1sg.) (いずれも (e) より) とでは、-a/a 語形が1人称を表わす可能性は、前者の方がより高そうに見えるかも知れない。しかしこれはあくまで一般論に過ぎず、一つ一つの事例においては客観的な基準とはなり得ない。

天に、君は（讃歌を）唱えよ（cf. GELDNER ‘Ich will ... singen’）。大地に、天理を私は（今ここに）捧げている（pres. ind.）。

VI 49,10 *bhūvanasya pitāraṃ gīrbhīr ābhī rudrām divā vardhāyā rudrām aktāu | bṛhāntam ṛṣvām ajāraṃ suṣumnām ṛdhag ghuvema kavīneṣitāsaḥ* 「これらの歓迎歌によって、世界の父ルドラを、昼に「君は増大させよ」。ルドラを夜に、君は増大させよ。背が高く、聳え立ち、老いることのない、よき善意を伴う「彼」を、我々は呼びたい（aor. opt.），見者によって駆り立てられて」

VIII 66,7 *vayām enam idā hīyó 'apīpemeḥā vajrīnam | tasmā u adyā samanā sutām bharā- ā nūnām bhūṣata śruté* 「われわれは当人（インドラ）を昨日、この時にここで膨らませた（perf. ind.），ヴァジュラを持つ「彼」を。一方今日（も）彼に、搾られた「ソーマ」を、同じように君はもたせ。今、（名声）聞こえる「彼」のもとで、君たちは仕えよ（pres. iptv.）」

X 35,9-10 9 *adveṣo adyā barhiṣa stārīmaṇi grāvṇāṃ yoge mánmanaḥ sādha imahe | ādityānām śārmaṇi sthā bhuranyasi ...* 「今日、バルヒス（敷き草）を敷くことにおいて、石臼たちの作動において、敵意無きことを、我々は讀う（pres. ind.），詩作が成功するために。アーディティヤたちの庇護の中に存して、君はうごめいている（pres. ind.）。…」；  
10 *ā no barhiḥ sadhamāde bṛhād divī devāṃ īde sādāyā saptā hótīn | indram mitrām vāruṇam sātāye bhāgam ...* 「天における、我々の高大なバルヒスへ、饗宴において、神々を、私は呼び寄せている（pres. ind.）。七人のホートリたちを、君は座らせよ。インドラを、ミトラを、ヴァルナを、バガを、[品々の]獲得のために。…」

X 63,2-3 2cd *yé sthā jātā āditer adbhyās pári yé pṛthivyās té ma ihā śrutā hávam* 「アディティから、水たちから生まれた者たちであるところの、大地から「生まれた者たちである」ところの、その「君たち（一切神たち）」は、ここに、私の呼び掛けを聞け（aor. iptv.）」；  
3 *yébhyo mātā mādhumat pínvate páyah pīyūṣaṃ dyāur āditir ādribarhāḥ | ukthāśuṣmān vṛṣabharān sāvāpnasas tāṃ ādityāṃ ānu madā sāvastāye* 「その者たちのために、母が密に富む乳を、岩の頑強さを持つ天なるアディティが初乳を膨らませるところの、讃辞を激昂[剤]とし、雄牛たちをもたらし、よき収穫をもたらし、そのアーディティヤたちを、無事のために、君は歓迎せよ」

[更に：I 37,4 「君たち（他の祭官たち）の…一群（マルトたち）に、神々によって与えられた言葉の霊力を（bráhma），君たちは歌い出せ（prá ... gāyata）」；5 「マルトたちからなる…一群を、君は賞讃せよ（prá-saṃsā）。[ソーマの] 精髓の歯（jámbe）において、私は増大した（1sg. vāvṛdhe）<sup>57</sup>」；  
V 56,5 「今、君は立ち上がれ（ú-tiṣṭha）これらの…[マルト]たちへの、諸々の頌歌を伴って。マ

<sup>57</sup> 恐らく、詩人自身がソーマをむさぼり飲むことで昂揚したということ。3sg. vāvṛdhe の場合主語が不明、cf. GELDNER ad loc..

ルトたちの…[一陣]を…私は(ここに)呼んでいる (*hvaye*)」; VI 49,11「若く, 祭式に値する[君たちは]…マルトたちよ, やって来い (*ā ... ganta*) …。輝かしくない者をも, 君たちは活気付けるのだから (*jinvatha*) …」; 12「前へ, 勇者のために, 前に, 力強く, 貫徹する者(インドラ?)のために, 君は(歌を)駆り立てよ (*prā ... ājā*, cf. GELDNER. '... will ich (das Lied) zutreiben ...')」; 13「…その君(ヴィシュヌ)の…庇護のもとで, 財を我々は飲みたい (*madema*), [我々]自身も子孫も」; VI 68,8「インドラ・ヴァルナよ…我々の財を, 君たちは一杯にせよ (*prñktām*)」; 9「高大な大王(ヴァルナ)に, 好ましい詩作を, 今君は唱え出せ (*prā ... ārcā*) …」; 10「インドラ・ヴァルナよ…, この搾られたソーマを, 君たち両者は飲め (*pibatam*) …」; X 89,3「彼(インドラ)に, 脱線することのない, 同じものを, (しかし) …同じでない新しい言葉の霊力を (*bráhma*), 君は歌え (*arca*, cf. GE. 'Ihm will ich das ... Erbauungswort singen ...)。…」; 4「インドラに, 歓迎歌たちを…私は送り出す (*prérayam*)」]

## (f)

- I 186,10 *pró asvínāv ávase kṛñudhvam prā pūṣāṇam svátavaso hí sánti | adveṣó víṣṇur v<sub>a</sub>āta ṛbhukṣā áchā sumnāya vavṛtiya devān* 「さて, 両アシュヴィンたちを, 助力のために, 君たちは前へもたらせ (pres. iptv.)。プーシャンを, 前へ[もたらせ]。自らの力を有する者たちとして, 彼らは存在しているのだから。ヴィシュヌは敵意を持たない, ヴァータは, リブクシャンは。善意のために神々を, こちらへと私は振り向かせたい (aor. opt.)」
- II 21,2-3 2 *abhibhūve 'abhibhaṅgāya vanvaté 'asādhāya sāhamānāya vedhāse | tuvigrāye vāhnaye duṣṭāritave satrāsāhe nāma índrāya vocata* 「卓越する, 破壊する, 獲得する, 克服し得えない, 打ち克つ偉人に, 力強く飲み込む, 乗り越え難い御者に, まとめて克服するインドラに, 敬意を, 君たちは言葉にせよ (aor. iptv.)」; 3 *satrāsāhó ... | ... índrasya vocam prā kṛtāni vīryā* 「まとめて克服する…インドラによって為された, 諸々の武勲を, 私はここに公言する (aor. inj.: Koinzidenzfall → 3.2 (3))」
- VIII 26,9-11 9 *vayāṃ hí vām hāvāmaha ukṣanyānto v<sub>i</sub>yaśvavāt | sumatībhīr ūpa viprāv ihā gatam* 「われわれは, 君たち両者を, 若牛を求めて, 呼んでいるのだから (pres. ind.), ヴィヤシュヴァ[がそうした]ように。よき詩たちによって, 両詩人たちよ, ここに, 君たち両者は馳せ参ぜよ (aor. iptv.)」; 10 *asvínā s<sub>a</sub>v ṛṣe stuhi kuvīt te śrāvato hāvam | ...* 「聖仙(=話し手)よ, 両アシュヴィンたちを, しかと君は称えよ (pres. iptv.)。君の呼び掛けを, 果たして彼ら両者は聞くだろうか。…」; 11 *vaiyaśvāsya śrutam naro-<sub>a</sub>tó me asyā vedathah | sajōṣasā vāruṇo mitró aryamā* 「ヴィヤシュヴァの子(=話し手)の[呼び掛け]を, 君たち両者は聞け (aor. iptv.), 両雄よ。そして, ここに私がいることを, 君たち両者は知るべし (perf. subj.), 思いを一つにした[君ら]両者は, (そして)ヴァルナは, ミトラは, アリヤマンは」

IX 114,2-3 2 *īṣe mantrakṛtām stómaiḥ káśyapodvardháyan girāḥ | sómaṃ namasya rājānaṃ*  
*yó jajñē virúdhām pátir indráyendo pári srava* 「聖仙よ、カシュヤパよ、詩歌を作る者ら  
 の諸々の頌歌によって、歓迎歌たちを増幅させつつ、ソーマに、君は敬意を示せ (pres.  
 iptv.), 草木の王として生まれた [ソーマに]。滴り (ソーマ) よ、主人として、インド  
 ラのために、君は巡り流れよ (pres. iptv.)」; 3 *saptá díśo nánāsūryāḥ saptá hótāra ṛtvījaḥ*  
*| devā ādityā yé saptá tébhiḥ somābhī rakṣa na ...* 「異なる太陽を持つ方角たちは、七つで  
 ある。正しい時節に祭るホートリたちは、七人である。七人であるところの神々アーデ  
 イティヤたち、彼らとともに、ソーマよ、我々を護れ (pres. iptv.)。…」

これら (e), (f) のように話し手自身が別途1人称で示されている場合は、基本的には2人  
 称 (iptv. 2sg. の主語) ≠ 話し手であると考えられる。1人称での発話と2人称による自分  
 への命令とが、同じ人間によって連続して発言されるという状況が極めて不自然に思われ  
 るからである。しかしそれでもなお、(f) VIII 26,8-11, IX 114,2-3 のように、2人称<sub>1</sub> (≠  
 話し手), 2人称<sub>2</sub> (=話し手), 1人称, の三つが (詩節に跨がってはいないものの) 連続する  
 事例が存在することを考えれば、(e) の場合にも、2人称=話し手の可能性を完全に排除出  
 来るか否かについては、なお吟味の余地があるであろう<sup>58</sup>。

<sup>58</sup> その他検討すべき箇所には次のものがある:

V 56,1 「アグニよ (*agne*), 威勢を張っている (マルトたちの) 一群を、諸々の金属の輪飾り、装飾  
 品によって徴付けられた [一群] を、こちらへ [もたらせ]。今日、マルトたちの諸部族を、私 (詩人)  
 は呼び寄せている、天の光る空間からであっても」; 2 「(a) 心臓によって、君 (アグニ ?) が思ってい  
 る、まさにその通りの (b) ことへと、私 (詩人) の諸々の望みは至ったのだ (*jagmur*)。 (c) 君 (恐ら  
 く=話し手) の呼び掛けたちに最も近くやって来るべき、 (d) 恐ろしい容貌をした (見るも恐ろしい)  
 彼らを、君は増大させよ (*vardha*)」。V 56,2 全体の聞き手を、Say. はアグニとするが、GELDNER は話  
 し手自身である可能性も指摘する。第 1 詩節も含めた文脈から、少なくとも cd は詩人自身への話し掛  
 けであると考えられる。とすればここでも、話し手自身が 1 人称 (b) と 2 人称 (cd) に置かれる文と  
 が前後していることになる。ただし a の主語まで詩人自身と考えるのは難しいか (同一文の中で、同じ  
 人間が 1/2 人称に置かれるのは、考え難い、cf. 以下 3) (i)。

III 38,1 「大工のように、計画力 (思考作用) を私は観て取った、よき軛を付け戦利品をもたらす駿  
 馬の如く、体を動かしつつ。遠くにある好ましい [品々] に何度も触りつつ、(昔の) 詩人たちが見届  
 けることを、よき智慧持つ者として、私は望む (*ichāmi*)」; 2 「そして、詩人たちの、物凄い諸々の誕  
 生を、君 (=話し手 ?) は尋ねよ (*prcha*)。思考を保持し、よくことを為す [君たち] は、天を造形す  
 る (=した: *takṣata*)。さて君 (詩人) の、これら増大しつつある遂行 (*prañ-* ?) は、思考によって克  
 ち得られて、今や秩序のもとへ (*dhármaṇi*) 至る (? : *gman*)」。詩人は自らの詩を歌い始める際に、思  
 考 (言葉) の力によって世界を創造した太古の詩人たちを証人として呼び、彼らによる世界創造の秘密  
 に言及していると思われる、cf. GELDNER, OLDENBERG *Noten ad. loc.*。内容の理解は必ずしも容易では  
 ないが、第 2 詩節 a, cd の 2 人称=第 1 詩節の 1 人称=詩人 (話し手) である可能性が高い。

VII 96,1ab *bṛhād u gāyīṣe vāco 'sur'yā nadīnām | sárasvatīm in mahayā suvṛtībhi stómair vasiṣṭha*  
*ródasi* 「さて、高大な言葉を私は/君は (?) 歌う: [彼女は] 川たちのうち、アスラに属する者である。  
 サラスヴァティーをこそ、君は力付けよ、よき讃歌たちによって、詠唱たちによって、ヴァスィシュタ  
 (=話し手) よ、(そして) 天地両界を」。後半は、詩人の名前 (voc.) があるため、明らかに自身への  
 命令である。前半の *gāyīṣe* は、「称える」などの動詞に多く見られる、-se に終わる一連の mid. 語形  
 に属する、→ 注35。RASMUSSEN *Prospektiv* 390ff. によれば、この種の語形には 1 人称で能動的に用い  
 られるものが極めて多く、2 人称の例はほぼ全てが受動的な意味に限られている、cf. V 58,1 *tām u nūnām ...*

3) 恐らく, subj. 1sg. act. の可能性が一層疑われるのは, 当該語形 (-ā) と同一の文の中に, 明らかにそれが仮定するのは別の聞き手 (2pl.) が想定されている場合であろう: e.g. III 13,1ab *prā vo devāy<sub>a</sub>āgnāye bārhiṣṭham arc<sub>a</sub>āsm<sub>a</sub>ai* 「君たちの神アグニに, この者に, 最も高く, 君は (讃歌を) 唱えよ (iptv. 2sg.) / 私は唱えよう (subj. 1sg.) (?)」. この場合, もし *arcā°* が iptv. 2sg. であるとすれば, 同一文の中に異なる聞き手が二重に存在することになるからである。しかし GELDNER は, 基本的にこうした構造は可能であると考え, それらを, “Doppelanrede/doppelte Anrede” 「二重呼び掛け」<sup>59</sup>と呼んでいる。実際, 聞き手が誰かという議論を別にすれば, 一文中でそれぞれ形態的にも明らかに 2人称である二つの語形が, 別々の対象範囲を持っている用例は他にも例証されている (g):

(g)

V 45,11# *dhīyaṃ vo apsú dadhiṣe s<sub>a</sub>varṣāṃ yáyātaran dása māsó návagvāḥ | ayā dhiyā s<sub>i</sub>yāma devágopā ayā dhiyā tuturyāmāt<sub>i</sub>y āmhaḥ* 「君たちの, 太陽光を獲得する思慮を, 水たちの中に, 君 (=≠話し手) は置いた (perf. ind.), それによってナヴァグヴァたちが, 十ヶ月を切り抜けた (ipf.) ところの [思慮を]。この思慮によって, 神々を守り手とする者たちで, 我々はありたい。この思慮によって, 危難を, 我々は乗り越えたい」

VIII 69,2<sup>60</sup> *nadām va ódatin<sub>a</sub>ām nadām yóyuvatin<sub>a</sub>ām | pátiṃ vo ághniyān<sub>a</sub>ām dhenūn<sub>a</sub>ām isudhyasi* 「君たちの, 湧き溢れる [牝] 牛たち<sup>61</sup>に属する牡牛 (ソーマ) を, 少しずつ遠ざかっていく [牝] 牛たちに属する牡牛を, (つまり) 君たちの, 乳出す (優れた) 牝牛たち<sup>62</sup>に属する主人を, 君 (=≠話し手<sup>63</sup>) は元気付けている (pres. ind.)」

VIII 92,7 *tyám u vaḥ satrāsāhaṃ víśvāsu gīrṣ<sub>a</sub>v áyatam | á cyāvayasi y ūtāye* 「片や, 君たちの, かの, まとめて克服する, 一切の歓迎歌たちのもとに引き止められている [インドラ]

*stuṣé gaṇām mārutam* 「さて今, その…マルトたちからなる群れを, 私は称える」; VIII 65,5 *indra gr̥ṇīṣá u stuṣé mahāñ ugrá iśānakṛtī* 「インドラよ, 君は (今ここに) 歓迎歌で迎えられ, 称えられる, 偉大な, 凶暴な, 支配者として振る舞う [君は]」。よって *gāyīṣe* も「私は (今ここに) 歌う」の可能性が高いと思われる。しかし, 能動的な 2 人称の用例もわずかに例証されていることや (VIII 90,4 *tvām ... vṛtrā bhūri nyr̥jāse* 「きみ (インドラ) は…多くの障碍へと突進する」), 1 人称とされる用例の多くは, 詩人が自分に話し掛けているとも理解出来ることから, *gāyīṣe* から「君は歌う」の可能性を完全に排除することは出来ない。その場合の 2 人称は, 後半と同様に, 話し手自身 (ヴァスィシュタ) を指すと考えるのが自然である。(RENOU EVP XV 134 は, *gāyīṣe* を 3 人称の受動文として理解している: ‘(Sarasvatī), l’asuryenne entre les rivières, est chantée (par moi d’) une parole puissante.’)

<sup>59</sup> GELDNER ad V 45,11, VI 16,22; Vol. IV 144 (Sachindex) “Anrede” を参照。

<sup>60</sup> Cf. 第一詩節 (VIII 69,1): *prā-pra vas trīṣṭubham iṣam mandādvirāyēndave* | ... 「君たちのトゥリシュトupp [韻律の讃歌] を, 栄養として, 勇者たちを酔わせる滴り (ソーマ) に, おのおの [差し] 出せ。…」;

<sup>61</sup> ソーマと混ぜる乳を搾るための牝牛, cf. 次詩節 (VIII 69,3): *tā asya sūdadohasaḥ sōmaṃ śrīnanti pr̥śnayaḥ* | ... 「この者 (ソーマ) の, 添加物用に搾乳される, これら斑の [牝牛] たちは, ソーマを熟成させている。…」。*sūda-*?, cf. GOTÖ 343 + n. 843。

<sup>62</sup> 注266参照。

<sup>63</sup> 先行する「君たち」も含めて, 2 人称が表わすものの可能性については, GELDNER ad loc. を参照。

を、助力のために、こちらへ君(=≠話し手)は動かしている (pres. ind.)」。

これらにおいて、異なる二種類の聞き手 (sg. 及び pl.) が前提とされていることは間違いない。ただしそれは、GELDNER ad loc. V 45,11 が想定するような、「残りの歌い手たち (vah) と、話し手自身への語りかけ (dadhiṣe)」が共起している——つまり、全く別々の相手に対する発言——のではなく、むしろ「君 (sg.)」が「君たち (pl.)」の中に含まれているものと理解される。話し手が直接話し掛けている相手は「君」であるが、同時に「君」を代表とする集団が文中に登場するために、一方では「君たち」が使われているものと思われる。こうした状況は会話の場面では容易に起こり得る；例えば、ある村から村人全員が祈祷師のところへ来たとする。彼らを引率してきた村長に対して、祈祷師が「では村長さん、あなた方の望みを聞きましょうか」と言うことは自然であるし、また、プロ野球のオーナーの代表者が選手会長と話をする場合、直接話している相手は選手会長一人であっても、オーナーが言う「君たち」は、選手会長を含む選手全員を指すであろう。つまりこうした状況では、2人称複数という文法範疇は複数の人間全員を指示しているのではなく、「代表者としての2人称単数とこれに属する他の人たち」という意味で用いられている。その意味でこれを、「省略的複数」“elliptischer Plural” の一種と考えることが出来よう<sup>64</sup>。祭式儀礼の場では、実際に讃歌を発語している者以外に、複数の異なる役割を担った詩人／祭官が隣席していると考えられるが、歌い手が何らかの動作を一人の聞き手に命令する時に、その文中の語が詩人／祭官全体に属するものであれば、当然 2人称複数で表現されるであろう<sup>65</sup>。上記 (g) の例ではいずれも、「君たち」がかかる語は神々自身か神々に献ずるソーマであり、これらが詩人／祭官全員のものとして表現されることはむしろ自然である。

3) の最初に引用した III 13,1 *prá vo devāyā ... arcā°* のように、-ā 語形と 2人称複数代名詞とが共起する用例 (h) は、いずれも上記 (g) の用例と平行的な構造を示しており、同様に “elliptischer Plural” の事例として理解される。なお、この種の構造における 2人称単数は、話し手自身でも、話し手以外の人間でもあり得ると思われる<sup>66</sup>：

<sup>64</sup> 実体詞におけるこの現象については、DELBRÜCK AiS. 98 (du. *pitāra* 「父たち両者」=「父と母」)；102 (pl. *pitāras* 「父たち」=「父と祖父と曾祖父」) を参照。

<sup>65</sup> これとは逆に、ある儀礼集団の構成員 (pl.) がその一員／代表者 (sg.) に対して語りかける場合も考えられる、e.g. 「我々皆で決めた規則を君は破った」。次の RV の用例も、こうした状況に属すると見られる：VI 21,9 「我々への助力のために (*āvase no*)、ヴァルナを、ミトラを、インドラを、マルトたちを、今日、援助のために、君は前へもたらせ (*prá ... kṛsva*)」。次も、*vipra* = 詩人であれば、同様に解される：VI 38,5 「偉大な、凶暴な [インドラ] を、詩人よ (*vipra* = 話し手、或いはインドラ？、cf. GELDNER ad loc.)、数々の敵の打倒において、今こちらへ我々は克ち得たいと願う (*ā vivāsema*)」。

<sup>66</sup> 話し手=2 人称単数の場合には、話し手と話し手を含む集団とがいずれも話し手自身によって客体化されていることになる。その場合日本語では「我々の (1pl.)」+「君 (2sg.) は～せよ」と言うべきところか。ただし話し手≠2 人称単数の場合には、ヴェーダ語でも 1pl. + 2sg. の表現を用いる → 注65

(h)

III 13,1ab *prá vo devāyāgnāye bārhiṣṭham arcāsmāi* 「君たちの神アグニに，最も高く，君は（讃歌を）唱えよ」。

VI 16,22 *prá vaḥ sakhāya agnāye stómaṃ yajñāṃ ca dhṛṣṇyā | 'arca gāya ca vedhāse* 「君たちのアグニのために，盟友たちよ，頌歌と祭式を，勇ましく君は唱えよ。そして君は歌え，巨人 (?) のために」<sup>67</sup>

VI 45,22 *tád vo gāya sūtē sácā puruhūtāya sātване | sám yád gāve ná śakīne* 「君たちの搾られた [ソーマ] たちのもとで，それを，君は歌え，多く呼ばれる掠奪隊の長に，牛のように能力ある [彼] にとって，幸なところの [それを]」

VIII 46,14<sup>68</sup> *abhí vo vīrām āndhaso mádeṣu gāya girā mahā vícetasam | índram nāma śrútyaṃ śakīnaṃ váco yáthā* 「君たちの [ソーマの] 茎の酔いたちの中で，勇者に，君は歌いかけよ，偉大なる歓迎歌によって，注意力の行き渡る [彼] に。インドラに，聞こえ高い名前に，能力ある [彼] に（君は歌いかけよ），（そのための）言葉たちがある通りに」

VIII 49,1(Vāḷakh.) *abhí prá vaḥ surādhasam índram arcā yáthā vidé | yó jaritribhyo maghāvā purūvasuḥ sahāsreṇeva śikṣati* 「君たちの，よき恩恵もたらすインドラに，君は唱えかけよ；多くの財物もたらす有能な者として，千 [頭] を伴うかの如く，歌い手たちにとって力になるところの [彼が] 知られている（その）通りに」

X 50,1ab *prá vo mahé mándamānāyāndhaso 'arcā viśvānarāya viśvābhūve* 「君たちのソーマたちに酔いしれている偉大な [インドラ] に，君は（讃歌を）唱え出せ，一切の男たちに存する，一切を支配する [インドラ] に」

X 76,5 *divás cid ā vó 'amavattarebhīyo vibhvānā cid āśvāpastarebhīyah | vāyós cid ā sómarabhastarebhīyo 'agnés cid arcā pitukṛttarebhīyah* 「君たち（他の祭官／祭主 ?）の，天よりも攻撃力のある，Vibhvan よりも仕事の早い，風よりソーマ（の酔い）による暴行を為す，アグニよりも食事をしつらえる [石臼] たちに，君は讃歌を唱えよ」，cf. GELDNER 「天よりも…しつらえる君たち（＝石臼）に，私は讃歌を歌おう（‘Euch will ich lobsingem …’）」

このように，二重に聞き手（2人称）が想定される用例は，二つの聞き手の間に抱合関係が認められるために，iptv. 2sg. act. としての自然な理解が得られる。一般的にも，同一の文中に全く異なる聞き手が存在するという状況は想定し難いであろう。ただし RV では，

<sup>67</sup> GELDNER ‘... stimme ... das Preislied und Opfergebet an und singe (das) Lied ... !’，n. 「どうしてもという場合には，*arca* と *gāya* とを短音化された 1 人称接続法と理解することも出来よう」。

<sup>68</sup> 韻律は不明，cf. OLDENBERG Proleg. 160; Noten ad loc.

そうした状況が全く存在しないわけではない。例えば次の (i) の例はいずれも、それぞれ異なるやり方で異なる二種類の聞き手を一文中に含んでいる：

(i)

VIII 93,4 *yád adyá kác ca vṛtrahann udágā abhí sūrīya | sárvaṃ tād indra te váse* 「何であれ、ブリトラを殺す者（インドラ）よ、今日それへと君（スーリヤ）が登った（照らしつけた）ものがあれば (aor. ind. 2sg.), スーリヤ（太陽）よ、それは全て、インドラよ、君の随意の中にある」

I 6,3 *ketúm kṛṇvānn aketāve péso maryā apesāse | sám uśádbhir ajāyathāḥ* 「微無きものに徴を、模様無きものに模様を作り出しつつ、若武者たち（他の詩人たち：GELDNER ad loc., OLDENBERG Noten I 8ff.）よ、曙たちと一緒に、君（太陽）は生まれた」

VIII 19,7 *suvagnáyo vo agnībhiḥ syāma sūno sahasa ūrjāṃ pate | suvīras tvām asmayúḥ* 「君たち（祭主たち：GELDNER ad loc.）の祭火たちによって、よき祭火を持つものたちで、我々はありたい<sup>69</sup>、克服力の息子である、栄養たちの主人（アグニ）よ。我々を求めるきみは、よき勇者である」

ただしいずれの例においても、それぞれの事情を考慮すべきである。VIII 93,4 の聞き手は、文全体を通してインドラとアグニの両者である。この両神が関る事態を表わす際に、それぞれの行為が従属節・主節に分かれて述べられたものと思われる。複文全体の聞き手はあくまで両神であるから、文中の随所にそれぞれが voc. に置かれることも単に表現上の問題として理解される。これに対して、I 6,3 及び VIII 19,7 では、聞き手の一方は神格であるが、もう一方には他の詩人／祭官や祭主が想定されるため、同一文中で急激な聞き手の変化を想定しなければならない。ここで、二つの例がいずれも [2人称動詞／代名詞 + voc.] で構成されており、[2人称<sub>1</sub> 動詞／代名詞 + 2人称<sub>2</sub> 動詞／代名詞] となっていないことに注目すべきであろう。即ち voc. の指示対象は、必ずしも同時に文内容の構成要素であるとは限らない。話し手が聞き手に直接関係の無い事柄を、聞き手に報告したり、確認したり、尋ねたりする場合に、その聞き手が voc. として文中に埋め込まれることは当然起こり得る<sup>70</sup>：

e.g. III 15,5 *áchidrā śárma jaritah purūṇi devāṃ áchā díd,yānaḥ sumedhāḥ | rátho ná sásnir abhí vakṣi vājam ágne tvām ródasī naḥ suméke* 「裂け目の無い多くの覆いを、歌い手よ、よき智

<sup>69</sup> ここ (syāma) で文が切れないことは、続く sūno にアクセントが無いことから明らかである。

<sup>70</sup> 例えば次の日本語を参考にせよ：「こうして、皆さん、徳川家康は天下統一を果たしたのです」；「あの日は、先生、山田君は学校を休んでいましたよね」。つまり voc. は、それが埋め込まれる文とは構造上直接関係しない。ヴェーダ語の voc. が、アクセントや文中に占める位置に関して、独立した一つの文としての扱いを受けるのは、このためである。

慧備えた [アグニ] は (保持する)<sup>71</sup>, 神々の方を向いて光を放ちつつ。(品々を) 勝ち取る車が の如く, 戦利品へと彼は進んだ。アグニよ, きみは我々に, よく建て付けられた天地両界を [もたらせ]; V 59,8 *mímātu dyáur áditir vitáye naḥ sám dānucitrā uśáso yatantām | ācucyavur diviyām kósam etá íṣe rudrásya marúto grṇānāḥ* 「天は, いななけ。アディティは, 我々を追い求めるべきである。彩り豊かな贈り物をもたらす曙たちは, 歩を合わせよ。ルドラに属するこれらマルトたちは, 天に属する容器を引き寄せたのだ, 詩仙よ」。ただし (i) の I 6,3 と VIII 19,7 は, これらの例と違って, voc. が表わすのとは別の 2人称を既に文中に持つ (I 6,3 では文の主語!) という点で, より理解しにくいと言える。しかし, ある聞き手 (=2人称) に話し掛けている途中であっても, その文の内容や発話行為への同意・確認等の目的で, そばにいる第三者に呼びかけることは論理的に可能である。恐らく I 6,3 と VIII 19,7 では, 文の構成要素でもある聞き手=2人称に加え, 途中で他の祭官らや神々に呼び掛けて発言 (内容) への注意を促したり, 発言 (内容) に対する証人としての役割を要求しているものと考えられる<sup>72</sup>。以上の解釈に基づけば, 同一文中に異なる二つの聞き手が存在する場合も, [2人称動詞/代名詞 + voc.] の場合は必ずしも非論理的構造とは言えないと結論づけられる。しかしこれに対して, 異なる聞き手が同一文の構成素として現れることは論理的に不可能である。そのため, 本節冒頭の (a) に見た VI 59,1 *prá nú vocā sutēṣu vām* に, \*「今, 君 (=詩人) は宣言せよ (iptv. 2sg. act.), 君たち両者 (=インドラ・アグニ) の (為に) 搾られた [ソーマ] たちの前で」[2人称<sub>1</sub> 動詞 + 2人称<sub>2</sub> 代名詞] という解釈は成立せず, その結果 *vocā* は subj. 1sg. act. としてのみ同定可能となる。

\*\*\*\*\*

以上, subj. 1sg. act./iptv. 2sg. act. の判断に関して微妙と思われる用例を 1) -3) に分けて考察した<sup>73</sup>。2) の用例は, 部分的に 1) + 1人称動詞/代名詞の例として位置づけられ

<sup>71</sup> Cf. *śárman-* + *yam* 「覆いを保持する」→ 注339。

<sup>72</sup> 次の二つの歌も, もし voc. が詩人/祭官を表わすならば, III 15,5, V 59,8 と同様の例に属する: V 74,4 「君たち両者 (アシュヴィン双神) は, …プールの子孫を活気付ける (*jínvathah*), プールに属する兩人よ (*páura* = \**páurā* = アシュヴィン双神/詩人の名前?)»; VIII 7,21 「以前に, 君たちの諸々の頌歌によって, 天理の群れ (マルトたちの群れ) たちを, 君は活気付ける (*jínvatha*) というのではないのか, 敷き草が撒き置かれたところの者たちよ (*vṛktabarhiṣah* = マルトたち/祭官たち: 「敷き草を (祭火の回りに) 撒き置いた者たちよ」?, cf. 7,20)」。それぞれの解釈については, GELDNER ad loc. を参照。

<sup>73</sup> 本節で扱わなかった *-ā* 語形は全て, 比較的容易に iptv. 2sg. act. として理解し得る。HOFFMANN 248 は, 既に見た VI 59,1 *vocā*, VIII 74,13 *mṛkṣā* (本節 (a) 参照) の他に, *pruṣā* (X 77,1; 既に root-aor. subj. 1sg. act. の異例形として確認済み → 2.1.15) 及び各論), redupl. aor. *rīradhā* (X 30,1) を subj. 1sg. act. として認め, full-gr. them. pres. *várdhā* (VI 38,4) については態度を保留している。しかしこれら *rīradhā*, *várdhā* も, 本論の作業仮説に基づいて判断するならば, iptv. 2sg. act. としての理解を妨げる要素は見出されない: X 30,1 *prá devatrā bráhmaṇe gātúr et.v apó áchā mánaso ná práyukti | mahīm mītrāsya váruṇasya dhāsīm pṛthujráyase rīradhā suvṛktīm* 「神々のもとへ, 進路が進み行け (iptv. 3sg.), 言葉の霊力のために, 水たちの方へ向かって, 思考の発動によって の如く, ミトラの, ヴァルナの, 大いなる定位置へと。幅広い広がりを持つ [進路] に, よき讃歌を君 (=話し手) は従わせよ (iptv. 2sg.)」において, 先行する iptv. 3sg. *etu* が, *rīradhā* の 1人称接続法としての機能を示唆することはない, cf.

るが、1人称要素の存在が文脈の理解において 1) とは違った役割を果たすことから、両者を分けて議論した。調査の結果、1), 2)/3) の用例はそれぞれ別の事情から、iptv. 2sg. act. としての同定を妨げるものではないと判断された。勿論一つ一つの事例は、いずれも発話行為一般や人称の問題に関るために、より詳細な議論は可能であり、また必要であろうが、本節では語形の決定という目的に重点を置いて必要最小限の議論に留めた。最後に、3.2.1 の議論全体を受けての考察と課題を指摘する。

＜語彙的意味について＞：本節で扱った *-ā* 語形は、文脈的に subj. 1sg. act./iptv. 2sg. act. が混ざることの多い「(讃歌を) 唱える (*arca/ā*) / 歌う (*gāya/ā*) / 言明する (*śaṁsa/ā*)」といった意味の語彙に集中しているが、こうした動詞の意味が、各箇所の主語や話し手を具体的に示唆することは少ない<sup>74</sup>。RV 讃歌がホートリ祭官の家系に伝わるものであるとの理由で、話し手＝ホートリ祭官であると仮定し、後のヴェーダ祭式におけるように、動詞 *arc/ṛc* 「(讃歌を) 唱える」は RV 讃歌 (*ṛc-*) を唱えるホートリ祭官 (*hótar-*) が、動詞 *gā* 「(讃歌を) 歌う」は旋律付きの RV 讃歌 (*sāman-*) を歌うウドゥガートリ祭官 (*udgātár-*) が主語であると同様に断定出来るかどうかは疑わしい、cf. VIII 20,19 *yūna ū sú ... abhí sobhare ... gāya* 「さて若者たち (マルト神たち) にしかと…ソーバリよ (=話し手), 君は歌いかけよ」。RV (特に新層) には明らかにそうした背景が読み取れる例もあるが<sup>75</sup>, それを全ての事例に適用出来るか否かは、RV の祭式儀礼のあり方全体を解明する中で検討されるべきであろう (無論その際、語形・文法が最大の武器であることに変わりはない)。他にも、*gar/gṛ* 「(歓迎) 歌を歌う」、*śaṁs/śas* 「言明する; 称讃する」、*stav/stu* 「称える」などの動詞がよく似た状況で使われることがあるが、これらを含めた動詞の使い分けについ

本節 (c)。また、VI 38,4 *várdhād yām yajñá utá sóma índram várdhād bráhma gíra ukthá ca mánma | várdhāhainam uśáso yāmann aktór várdhān māsāḥ śarádo dyáva índram* 「祭式とそしてソーマが増大させるべき (subj. 3sg.) インドラを、言葉の霊力たちが、歓迎歌たちが、そして讃辞たちが、(即ち) 思索たちが増大させるべき (subj. 3sg.) その当人を、まさしく君 (=≠話し手) は増大させよ (iptv. 2sg.) (*várdha + āha + enam*, OLDENBERG Noten ad loc.)、未明の曙の進行において。月たち、年たち、日たちは、インドラを増大させるべし (subj. 3pl.)」では、同じ *várdha-* の接続法が多用されているものの、関係節内の *várdhād* (Pāda a, b) も、別の文に属する *várdhān* (Pāda d) も、*várdhā°* に subj. 1sg. act. とした理解を強要するものではない (GOTÖ I. Präs. 291 “Iptv.”, LUBOTSKY Concordance “iptv.”, cf. *várdhā* VIII 75,13, IX 29,3, IX 61,15)。

<sup>74</sup> その他にも、*-āya-* によって形成される現在語幹 (caus.) が多く見られるという事実も注目される：*janayā* VIII 13,7 (c), *cyāvayā°* X 101,12 (c), *mahayā* I 52,1 (e), *śrāváyā°* IV 29,3 (e), *vardháya* VI 49,10 (e), *sádáyā* X 35,10 (e)。ただし、このことが何かしらの意味を持つかどうかは分からない。

<sup>75</sup> Cf. IX 97,4a-c *prá gāyatā<sub>a</sub>bh<sub>i</sub>y ārcāma devān sómaṁ hinota mahatē dhānāya | svādūh pavāte āti vāram āvyam* 「君たち (ウドガートリたち) は歌い出せ (pres. iptv.)。我々 (ホートリたち) は唱えかけよう (pres. subj.)、神々に。ソーマを、君たち (アドヴァリユたち) は送り出せ (pres. iptv.)、大いなる財産のために」；I 173,1ab *gāyat sāma nabhan<sub>i</sub>yām yāthā vér ārcāma tād vāvṛdhānām s<sub>i</sub>vārvat* 「割れんばかりの旋律 (サーマン) を (ウドガートリは) 歌う (pres. inj.)、鳥が のように。増大すると、太陽光をもたらすそれを、我々 (ホートリたち) は唱えよう」；II 43,2ab *udgātéva śakune sāma gāyasi brahmaputrā va sāvaneṣu śaṁsasi* 「ウドゥガートリが、鷓鴣よ、旋律 (サーマン) を のように、君は歌っている。バラモンの息子が、諸々の [ソーマ] 搾りにおいて のように、君は言明している」。

でも今後更に研究すべき課題であり、それが祭式文献研究に資するところは大きいと思われる、cf. VI 16,22 ... *ārca gāya ca* ... (h) ; I 37,4 *prá ... gāyata*, 5 *prá śaṁsā* ... (e) ; VII 31,1 *prá ... gāyata* ... 2 *śaṁsā* ... (c) <sup>76</sup>。ただし、仮に動詞の主語をより明確に出来たとしても、それが subj. 1sg. act./iptv. 2sg. act. のいずれの形として発せられているかについて、何らかの成果を得ることは困難である。

＜韻律上の位置について＞：当該語形がもともと *-ā* を持つのか（つまり subj. 1sg. act.）、それとも iptv. 2sg. act. *-a* が延長されているのかについて、韻律上の位置から何らかの示唆を得ることも難しい。OLDENBERG Proleg. 393ff., Kl.Schr. 132–181（特に 137–144）は、RV における語末母音の延長と韻律上の位置について詳しく研究をしているが、それによれば iptv. 2sg. act. の語末の *-a* は、韻律上「長」が要求される／可能である多くの位置で延長され（得）る一方で（e.g. *Gāyatri*/*Triṣṭubh*<sup>77</sup> の第2音節, G. の第6音節, T. の第8音節＝[Kadenz の最初] など）、「長」の役割を担いつつも短い *-a* を示す場合もあるという（e.g. T. の第4／5音節）<sup>78</sup>。とすれば、後者の位置に *-ā* が見られるならば、もともと *-ā* である可能性が高いと言える。しかしながら、上に扱った *-ā* 語形は全て、必ず「長」が起きる／起き得る位置のみに見られる。その場合に、本来短かったか長かったかという議論は意味を為さない。一方本節では、冒頭にも述べた通り、subj. 1sg. act. *-ā* が短母音で現れる場合をも想定し、*-a* 語形（本来の iptv. 2sg. act.）をも含めて検討した。しかし、非幹母音幹でも subj. 1sg. act. *-ā* が「短母音化」される事例が皆無であることから、これを支持あるいは排除するための条件を見出すことは無理である。上に扱った *-a* 語形は全て「短」が要求される／可能である箇所であるから、「長」が起き（得）る箇所に長母音が現れる場合と同様に、語形決定の解決策を与えてはくれない。

### 3.1.3 まとめ

本節での考察の結果、幹母音語幹においては、redupl. aor. *vocā* (VI 59,1), *-sa-aor. mṛkṣā* (VIII 74,13), zero-gr. them. aor. *sānā* (V 75,2) の3語形のみが、確実に subj. 1sg. act. であると結論付けられる。ここで注目すべきは、これらの語形がいずれもアオリスト語幹を示していることである。中でも *-sa-aor.* には iptv. 2sg. act. *-ā* が全く例証されておらず、また redupl. aor. では I 132,1 *vocā* にしか iptv. act. が見られないことから<sup>79</sup>、これらの語幹では接続法

<sup>76</sup> I 37,4 及び VII 31,1 の *prá-gā*, (*prá-*) *śaṁs/śas* の連続については、整備されたシュラウタ祭式において、ウドゥガートリ祭官（+ 助手）が *sāman-* を歌い (*gā*)、ホートリ祭官が *śastra-* (*śaṁs/śas* の派生名詞) を唱えることが参照される。

<sup>77</sup> それぞれを、8 音節及び 11／12 音節 *Pāda* の代表として、G., T. と略す。

<sup>78</sup> そのため OLDENBERG は、この *-a* が RV の詩人にとって「短」と「長」の中間に位置する音であったと考えているが (Kl.Schr. 143f.), これは言語学的にあり得ない想定である。

<sup>79</sup> HOFFMANN Inj. 248 n. 268. また *-sa-aor.* の活用は殆どが ind./inj. act. に限られ、法語形としては他に iptv. *dhukṣasva*, inj. *mṛkṣatam* (iptv. の機能で) が例証されるのみである、NARTEN op. cit. 75.

の古形 (-ā) を改変する動機が余り強くなかったものと思われる。しかしこうした語幹の事情とは関係無く、-ā に終わる語形が常に subj. 1sg. /iptv. 2sg. act. いずれの解釈をも許す状態にあったことは、本節で見た RV の語りのスタイルの特殊性と、*vocā* 及び *sānā* に両方の語形が例証されていることから伺えよう<sup>80</sup>。こうした状況の中で、上記の *vocā*, *mṛkṣā*, *sānā* が1人称接続法として残り得た (i.e. 同定し得る) のは、それらが1人称＝主語代名詞 (*mṛkṣā*, *sānā*) という明確な目印を伴っていたり (*mṛkṣā*, *sānā*)、もしくは iptv. 2sg. としての解釈を許さない文脈にあった (*vocā*) からである。しかしこれら以外の -ā 語形の場合は、たとえその中に本来の subj. 1sg. act. が含まれていたとしても、全て RV の通常の文脈の中で iptv. 2sg. act. として無理なく理解し得る以上、それらが共時体として見た RV の中で subj. 1sg. act. として機能していた可能性は低く、よって subj. 1sg. act. に有利な判定をすることは出来ない。従って、本論の作業仮説においては、*vocā*, *mṛkṣā*, *sānā* の3語形のみを1人称接続法として同定し、またこれらのみを機能研究に資することとする。

### 3.2 第二語尾をとる語形 (inj. 1sg.) に、subj. 1sg. の可能性が疑われる場合

2.3.1 で見たように、非幹母音幹では subj. 1sg. act. が第二語尾 -m を取った場合 (-C-am < -C-a-m), 同語幹の inj. 1sg. act. (-C-am < \*-C-m) と同形を示すことになる。しかも、inj./subj. 1sg. の両カテゴリーは機能的にも接点を持つため、疑わしい語形は文脈の詳細な検討と作業仮説によっていずれかに同定する必要がある。第二語尾 1sg. act. -am が接続法語尾として機能している可能性は、既に OLDENBERG *Noten* (X 27,9 *váyam*) によって言及されている。HOFFMANN 247f. は inj. 語形を同定する中で、これ以外にも幾つかの -am に終わる語形を subj. 1sg. act. として同定し、それ以降、多かれ少なかれこの可能性を受け入れる研究書や辞書類は少なくない<sup>81</sup>。しかしながら、接続法語尾としての -am について、人称語尾体系全体におけるその整合性や、個々の語形の形態論的・統語論的な妥当性が十分に論じられてきたとは言い難い。恐らく最も大きな問題点は、-am 語形が幹母音幹と非幹母音幹とに分けて議論されていないことであろう。本来的に第二語尾が接続法に用いられていた可能性は、非幹母音幹でのみ考察の対象となり (-am < -a-m, cf. 幹母音幹 \*-ām < \*-a-a-m → 2.3.1), もし幹母音幹の -am 語形 (つまり inj.) に接続法の機能が疑われるとすれば、それは第二語尾の用途の問題ではなく、単に inj. が二次的に接続法として用いられていることになる。こうした理解に基づいて、以下では、語形自体が問題となる場合 (3.2.1) と、inj. 語形の二次的な機能上の転用が問題となる場合 (3.2.2) とを分けて考察する。その際、語形自体の同定において判断基準となるのは、subj./inj. それぞれの語尾の歴史的背景及び -am

<sup>80</sup> iptv. 2sg. act. *sānā* 6x (いずれも Pāda の先頭で) : IX 4,1, 2 (bis), 3, IX 9,9 (bis).

<sup>81</sup> ETTER 168f. + n. 461; 245 n. 653; SCHAEFER 42f.; HETTRICH 402, 597; LUBOTSKY *Concordance passim*, cf. GELDNER transl. e.g. ad X 27,2.

の人称体系における整合性である。歴史的に確認される subj. 1sg. act. *-ā ~ -āni* :: inj. 1sg. act. *-am* という排他的な分布を考慮すれば, act. *-am* を示す非幹母音幹語形は, まず inj. としての理解から出発し, それが不可能かつ接続法の機能によって理解出来る場合にのみ, 当該語形を subj. 1sg. として認めるべきと思われる。そこで最初に, 以下の議論に関する inj. の主な機能について簡単に確認する。

HOFFMANN 104f., 266 は, injunctive の機能が「時制観念の欠如」と「報告機能を持たないこと」=「言及」によって特徴付けられることを明らかにした。それは, ind. や ipf. が現在や過去といった時制を表現し, なおかつその内容を聞き手に「報告」する機能を有することとは対照的である。こうした基本機能の実際の現れ方として主なものを, 以下 (1) ~ (3) に簡単にまとめる:

(1), inj. は, 過去の出来事に関して, 時(過去)や報告の要素が不必要な時に使われる: a. 神々を称える際に, 関係する神話上の出来事や民族の共通体験を, 互いに論理的な(時間的な)つながり無しに数え上げる場合 (“Aufzählung”, HOFFMANN 162)<sup>82</sup>; b. 文脈において既に何らかの場面設定がなされている場合は(或いは, それが聞き手にとって了解済みであるとの前提においては), その場面に属する事柄は, しばしば inj. によって単に言及されるだけである (“erwähnende Beschreibung”, 163ff.)<sup>83</sup>; c. 何らかの言葉や事態全体を説明する *yád* 節「…という～」<sup>84</sup>の中で, 純粋に事態の内容を提示するだけの場合 (“Inhaltsangabe”, 166f.)<sup>85</sup>; d. 過去のある行為が, 殆どその主語を特徴付ける性質や属性として理解されている場合, その行為は inj. によって表わされる (“Beeigenschaftung”, 167f.)<sup>86</sup>。以上の場合はいずれも, 時に関する情報や報告機能の明示を必要としないからである。

(2), inj. は, 全ての時に渡って有効な, 超時間的・一般論的事態を表現することがあ

<sup>82</sup> 次の日本語と比べよ:「彼は数々の素晴らしい貢献をしてきた。孤児院を建てる, 病院を設立する, 老人ホームに寄付する, エイズ撲滅基金を作る…」。

<sup>83</sup> 例えば, V 32,1 *ádardar útsam ásrjo ví khāni tvám arjavān badbadhānām aramṇāḥ | mahāntam indra párvatam ví yád vah srjó ví dhārā áva dānavām han*「彼(インドラ)は泉を穿って開けた(ipf.)。諸々の裂け目を, 広げて解放した(ipf.)。きみは, 圧迫された激流を静めた(ipf.)。インドラよ, 巨大な山を, 君が[覆いを取り去って]開ける時(aor.inj.), 諸々の(川の)流出を, 君は広げて解放する(pres.inj.)。ダーナヴァを, 君は打ち倒す(pres.inj.)」では, 前半ではインドラの過去の行為が ipf. によって報告されているが, 後半では, *yád* 文, 主文ともに inj. (aor./pres.) が用いられ, その場面における事態に「言及」するのみである。この際 inj. は, 前半で既に了解済みの時間概念も, それを報告するという機能も持たない, HOFFMANN loc. cit.。ただし inj. のこの機能は, 過去の場面を目の前のことのように描写する歴史的現在とは, 区別されるべきである。

<sup>84</sup> HETTRICH Hypotaxe 395-409 の “Explikativsätze” に相当する(この種の *yád* 節における上記の inj. の機能については, 同書 401 も参照)。現代英語では, *that* 節の名詞的用法に比べられる。

<sup>85</sup> 次の日本語と比べよ:「休日まで出勤するという彼の熱心さは, 誰にも真似できなかった」;「彼が生まれるその日に, 彼の父は他界した」(「生まれたその日に」とも言える)。

<sup>86</sup> 日本語で参考となる表現は無いが, 例えば「○○××は何をした人ですか?」という問いに対する答えに近いと思われる:「世界で初めて空を飛んだ人です」;「我が国を独立に導いた人です」etc.。

る (“außerzeitlicher/genereller Sachverhalt”, HOFFMANN 114f.)。例えば、神々や自然界に関する不変の真実、何度でも繰り返し起こる事柄、特定の人や物事に一般論として当てはまる性質や能力等々を表わすことが出来る：e.g.「太陽は東から昇る；子供は泣くものだ」。

(3), aor. inj. 1sg. に限った機能として<sup>87</sup>、話し手の行為がその発語そのものからなる場合 (“Koinzidenzfall”<sup>88</sup>：e.g.「ここに君を表彰します；ここにあなたを任命します；私は彼に同意します；君にこの健康食品を薦めます」etc.) や、発話の直後に控える行為を予告する場合がある (“unmittelbare Zukunft”；e.g.「今行きます；では、歌います」), op. cit. 250–253。

以上の inj. の機能を踏まえて、接続法が疑われる個々の語形を検討する。<sup>89</sup>

### 3.2.1 第二語尾が接続法語尾として用いられている可能性（非幹母音幹）

act. では、非幹母音幹から作られた全ての *-am* に終わる語形が問題となる。中でも特に、形態論的にも接続法が疑われるものとして、*-s-aor. stoṣam* 及び *intens. dediṣam* が挙げられる。大多数の語幹では、接続法と inj. 1sg. act. とは同じ Ablaut (full-gr.) を示すが、少数の語幹は、両者をそれぞれ異なる Ablaut によって形成する。上記の2語形は、このうち接続法に特有の語幹を示している：

#### 1) RV I 187.1 *stoṣam*

*-s-aor.* は通常 act. ind./inj. で extend.-gr. をとるため (RV ind. *a-jai-ṣ-am*, MS inj. *yau-ṣ-am*), inj. であれば本来 *\*stau-ṣ-am* が予想される。これに対して *-s-aor.* の接続法語幹は、他の多くの語幹と同様 full-gr. を示し、また実際に 1sg. act. *sto-ṣ-āṇi*, 1sg. pl. *sto-ṣ-āma* も例証されている。つまり語幹の形だけを見ると、接続法の可能性を示していると言える。しかし、機能的にこれを補強することは難しい：I 187.1 *pitūm nú stoṣam*<sup>90</sup> *mahó dharmāṇam tāviṣim | yāsya tritó viy ójasā vrtrām víparvam ardāyat* 「食事を、今（ここに）、私は称える、体力を支えるものとして、偉大なその力によって、トゥリタがヴリトラを、関節をばらばらにするところの〔食事を〕」1人称接続法は Sūkta の最初に用いられた場合、詩人がこれから歌を歌う意志を表明することが多い（→ II A 1.1.1), e.g. VI 59.1 *prá nú vocā sutéṣu*

<sup>87</sup> ただし 1sg. という限定は、禁止文 (*mā + inj.*) 以外での inj. 1du./pl. の用例が極端に少ない (*karma, ganvahi, śiṣamahi* の 3 例 → 注28) ことに関連するもので、単数に想定される機能は当然他の数にも予想される。例えば HOFFMANN (255) も、*śiṣamahi* には (3) のいずれかの機能を想定している。また、aor. inj. という限定についても (cf. op. cit. 253), これらの機能が少なくともアオリスト語幹では十分に検証可能であると言う方が正確であろう。よって、HOFFMANN は Koinzidenzfall がアオリスト語幹に限定されていることの理由を明言していない、との MUMM (1995) 182 n. 19 の指摘は正確さを欠く。場合によって pres. inj. も Koinzidenzfall を表わし得る可能性は (MUMM loc. cit.), 下で見るように、HOFFMANN も *intens. pres. inj. dediṣam* に関して示唆している、→ 注93。

<sup>88</sup> KOSCHMIEDER-HOFFMANN (HOFFMANN 251ff. + n. 275) の定義に基づく

<sup>89</sup> この「…個々の語形を検討する」という日本語文は、まさに上記の “unmittelbare Zukunft” にあたる。

<sup>90</sup> Pada a の韻律は不規則、cf. OLDENBERG Proleg. 39f., Noten ad loc.

vām 「今、私は公言しよう、君たち両者（アシュヴィン双神）のために搾られたソーマたちの前で」；X 89,1 *īndraṃ stavā nṛtamam* 「最も男であるインドラを、私は称えよう」。しかし aor. inj. 1sg. act. もまた同じ環境に現れ、直後に続く歌う行為を予告することがある＝上記 inj. 機能 (3) : e.g. I 32,1 *vīṣṇor nū kaṃ virjyāni prā vocam* 「ヴィシュヌの諸々の武勲を、今、私は公言する」；X 96,1 *prā te mahé vidāthe śaṃsiṣaṃ hāri* 「君（インドラ）の両ハリたち（インドラの戦車専用の輓馬）を、大いなる分配（の場）において、私は言明する」。そのため、当該箇所において機能的に subj./inj. を区別するのは不可能である。NARTEN 277 は、他のアオリスト語幹では subj. 1sg. act. と inj. 1sg. act. とが同じ Ablaut を示すこと (inj. *gamam*, subj. *gamāni*; inj. *bhuvam*, subj. *bhuvāni*) と、上記のような似た環境で subj. 1sg. *vocā*, 1pl. *vocāma* (I 166,1 etc.), inj. 1sg. *vocam* が併存することから、*stoṣam* も subj. 1sg. *stoṣāni* (X 88,3), 1pl. *stoṣāma* (VII 2,2 etc.) からの類推によって、同じ語幹 (full-gr.) から作られた inj. 1sg. である可能性を指摘している。更に形態上の事実だけを考えれば、こうした類推を促し得る語形は他にも多く見出される：root-aor. subj. *kārāni*, *kārāma*, inj. *karam*; root-aor. subj. *gamāni*, *gamāma*, inj. *gamam*; nasal pres. subj. *kṛṇavā*, *kṛṇāvāma*, inj. *kṛṇavam*; root-aor. subj. *yójā*, inj. *yojam*; zero-gr. them. aor. subj. *sānā*, inj. *sanam*; caus. pres. subj. *randhayāni*, inj. *randhayam* etc.。 *stoṣam* が接続法であることの機能的な証明が出来ないことと、NARTEN の指摘する類推作用が高い可能性を持つと思われることから、当該語形は inj. 1sg. の異例形と判断するのが妥当と思われる。

## 2) VIII 74,15 *dediṣam*

2.1.1 2) では、intens. の接続法語幹は zero-gr. から作られることを確認した。これに対して ind./inj. act. 単数形は full-gr. から形成される：ind. 1sg. act. *dar-dari-mi*, inj. 2/3sg. act. *dar-dar*, subj. 3sg. act. *dar-dir-a-t* ; ind. 1sg. act. *car-kar-mi*, subj. 1pl. act. *car-kir-āma*<sup>91</sup>。よって inj. 1sg. act. であれば \**de-deṣ-am* が予想されるところであるが、問題の語形 *de-diṣ-am* は接続法と同じ Ablaut (zero-gr.) を示していることになる。しかしここでも、当該箇所の文脈から、接続法に有利な機能を見出すことは出来ない：VIII 74,15# *satyām it tvā mahenadi páruṣṇi, y áva dediṣam | nēm āpo aśvadātaraḥ śaviṣṭhād asti márti, yaḥ* 「君に、まさしく本当のことを、大河パルシュニーよ、（ここに）私は（繰り返し）示し定める：水たちよ、最も強大な〔シュルタルヴァン王〕よりも多くの馬を贈る人間、かような者は存在しない」。当詩節は、詩人が庇護者である王の気前の良さを称える讃歌 (Dānastuti) に属し、Sūkta の最後に位置する。詩人は、大河パルシュニーを証人として、シュルタルヴァン王がいかに多く

<sup>91</sup> それぞれ語根は *dar*<sup>(i)</sup>/*dṛ*~*dṛ*, *kar*<sup>i</sup>/*kṛ*。subj. の -*dir*-, -*kir*- は laryngeal の作用 (< \*-C<sub>r</sub>H-V-) か、もしくは、*anīt* 語根に基づくと考えらるなら、anaptyxis (< \*-C<sub>r</sub>r-V-) による → 2.1.1, 2) + 注13; 各論 IV 39,1. 更に次も参照：ind. 3sg. act. *tartarīti*, *dodhaviṇi*, *veveti*, inj. 3sg. act. *dāvidyot*, *nāvinot*, *kāniṣkan*; subj. 3sg. act. *carḥṣat*, *bārbrhat*, *mārmjāt*, 1pl. act. *vevidāma*, 3pl. mid. *śośucanta*, *jarhṣanta*

の報酬を与えるかを示している。もし *dedīsam* が話し手の意志表明を表わす接続法であれば、詩人はその意志をすぐに実行していることになるうし（「水たちよ…」）、inj. であれば、幾通りかの解釈が可能である。上述（3）の機能がいずれもアオリスト語幹にのみ限定されるならば、pres. inj. *dedīsam* には（2）の一般論（王の不変の性質）の機能が該当する可能性が高いと言える、cf. *satyām it ...*。しかしながら、そうした語幹に関する限定が積極的に支持されるものでないこと（注87）を考慮するならば、ここでは直後に続く自分の発言を予告しているとも理解出来よう。その場合、結果的に接続法としての理解と同様、詩人の予告は詩節の後半で実行されていることになる。ただし、*dedīsam* の pres. inj. としての理解そのものも、再吟味される必要がある。intens. pres. 及び intens. perf. が例証されているのに対して<sup>92</sup>、（恐らく形態上の理由で）intens. aor. 語形が全く形成されていないことを考えるなら、intens. aor. の機能は intens. pres. が代用しているか、もしくは intens. では現在／アオリストが区別されていない可能性も考えられる。その場合、（3）の機能の可能性は更に高まるであろう<sup>93</sup>。SCHAEFER 42f. は、ここで「intens. の繰り返しの機能『何度も何度も指し示す』を厳密に捉えれば、Koinzidenzfall や直後の未来の予告を表わす inj. は排除される」とするが、詩人が当該箇所を、「何度でも示す」うちの一回として表現すること可能であろうし<sup>94</sup>（cf. SCHAEFER 88 §2.4 “FORTWÄHRENDE HANDLUNG”）、或いは intens. の機能が、厳密な「繰り返し」から、より抽象化された「強調」に移っている可能性は、常に想定し得ると思われる、cf. SCHAEFER 93f. §3。

以上のように、*dedīsam* に関して、機能面から inj. よりも接続法を優先すべき妥当な理由は得られない。語幹の zero-gr. は、むしろ形態論的に説明し得ると思われる：inj. 1sg. act. 語形は、intens. 全てを通じて他に例証されていない<sup>95</sup>。これに加え、*des/dīs* の他の intens. 語形が全て zero-gr. *dēdīs-* を示すことを考慮すると<sup>96</sup>、*dedīsam* はそれらからの類推によって作られた inj. 1sg. act. である可能性が考えられる。

その他の非幹母音幹では、subj. 1sg. act. と inj. 1sg. act. とが同じ full-gr. を示し、かつ例証される -am 語形（*mā* + inj. を除く）はいずれも上述の inj. の機能のいずれかによって理解され得るため、ほぼ全てが inj. 語形として確定される、cf. HOFFMANN 249–254 et passim。ただしその中で、機能的に接続法の可能性が指摘されてきた（／されている）幾つ

<sup>92</sup> *davidhāva, nonāva, nonuvur* (RV), *dodrāva* (TS), *yoyāva* (MS), *lelāya* (MS, KS, KpS), SCHAEFER 15 n. 1.

<sup>93</sup> HOFFMANN 253 n. 281 も当該箇所 *dedīsam* に、一般論と並んで Koinzidenzfall の可能性を認めている。

<sup>94</sup> 例えば「君は煩わしいだろうが、私は何度でも忠告する：…」と言って具体的に忠告する状況などがこれに当たる。

<sup>95</sup> 1sg. act. の第二語尾は、intens. 全てを通じて、ipf. *acākaśam* でのみ例証されている（intens. には opt. は存在しない）。

<sup>96</sup> E.g. ind. pres. 3sg. mid. *dēdiṣṭe*, 3pl. *dēdiṣate*; ipf. mid. 3sg. act. *ādediṣṭa*; pres. act. ptcpl. *dēdiṣat-*, mid. ptcpl. *dēdiṣāna-*, SCHAEFER 132.

かの語形については、説明が必要である：

3) X 28.5 *ciketam*, IV 42.6 *cakaram*

いずれも完了語幹から作られた inj. である, cf. perf. inj. 3sg. act. *didet* ~ pluperf. *ádider*; perf. inj. 2sg. act. *pipeh* ~ pluperf. 3sg. act. *apipet*. perf. inj. の機能は必ずしも明らかではないが<sup>97</sup>, いずれも完了語幹の意味と上述の inj. の基本機能との組み合わせによって理解し得ると思われる。完了語幹 *cikét-/cikit-* は、殆ど現在の意味の動詞として語彙化しているため (語根 *cet/cit* 「気付く, 認識する」 > 完了語幹 「気付いている; 分かっている」; 或いは更に、語根と同様の瞬間的な意味に転化しているか「理解する」 etc. ?) <sup>98</sup>, ipf. や pres. inj. が作られるのと同様に pluperf. や perf. inj. が形成され、よって事実上 perf. inj. の機能は pres. inj. と同じように理解される<sup>99</sup>: X 28,5 *kathá ta etád ahám á ciketam gṛtsasya pákas taváso manīśám | t<sub>u</sub>vám no vidvám ṛtuthá ví voco yám árdham te maghavan kṣemiyá dhúh* 「どうして、君 (インドラ) のこの [言葉] を、わたしが分かっているというのか (perf. inj.) (或いは「如何にして…わたしが理解するのか」), 聡明で強力な [君] の [言葉を], 愚かな [私] が。知っているきみは、然るべき時に我々に打ち明けるべし (aor. subj.: 話し手の意志), どの側に、安住に属する君のくびきが [向かうのか] を、有能な者よ」。 *ciketam* が疑問文に現れることは、しばしば理解されているように<sup>100</sup>, 接続法語形を証明することにはならない。疑問文一特に修辭 (反語的) 疑問文一においては、接続法と inj. とが同様に用いられるためである (HOFFMANN 245f.)。否定文において、未来永遠に事態が起こる見込みを否定する接続法と、事態の発生そのものを打ち消す inj. とが結果的に接近するのと同じように、接続法は話し手が予測のつかない未来を対象とすることにより (→ II 接続法の基本機能 b)), また inj. は事態がそもそも起こるかどうかに焦点を置くことにより、いずれも話し手にとって起こり得ない/難しいことを前提とした修辭疑問文に使われ得る。当該箇所でも話し手 (詩人) は、自分は愚かであるからインドラが然るべき時に具体的な方策を打ち明けてくれない限り、(先行詩節で) インドラが言った言葉を正しく理解出来ないと考えているため、*kathá ... á ciketam* には修辭疑問 (反語) が想定され、接続法と inj. いずれの使用も同様に可能と予想される。以上のことから *ciketam* は、形態論的にも機能的にも perf.

<sup>97</sup> *má* + perf. inj. は一般論としての禁止 (“genereller Prohibitiv”, HOFFMANN 91) を表わすか、もしくは、現在の状態を表わす完了語幹では、pres. inj. と同様に中断の命令 (“Inhibitiv”, 77, 78, 84f.) を表わす場合もある, cf. KÜMMEL Perf. 87.

<sup>98</sup> Cf. KÜMMEL Perf. 174f. *cikéta* と並んで、現在語幹のアクセントを示す perf. ind. *ciketa* も比べよ。

<sup>99</sup> Cf. KÜMMEL Perf. 87: 「現在の意味や達成された状態を表わす完了語幹 (“präsentisch-naktostatisch” → 同書 69f.; 70f.) では、inj. は、pres. inj. と同様に、一般論的に時の区別無しに (generell-zeitstufenlos) 使われ得る…、例えば *cākán, ciketam vivyak, śasās* …」。ただし、当該箇所では *ciketam* が疑問文に用いられているのは、「一般論を表わす inj. による返答を期待して」いるため (KÜMMEL 175) ではなく、以下に見るように、修辭疑問文という性質による。

<sup>100</sup> Cf. ETTER 168f. + n. 461; 245 n. 653; KÜMMEL Perf. 87; LUBOTSKY Concordance I 531 (*ciketam* “subj.”).

inj. と同定すべきであると思われる。

これに対して IV 42,6 *cakaram* の場合は, perf. inj. の機能は明らかではない: IV 42,6 *ahám tá víśvā cakaram nákir mā dáivyaṃ sáho varate ápratitam | yán mā sómāso mamádan yád ukthó-  
bhé bhayete rájasi apāré* 「わたしは, それら一切の事々を為す／為しおおせる (perf. inj.)。いかなる天的な克服力も, 私を, 防ぎ止めることはないであろう (aor. subj.: 話し手の見込み), 対抗し得ない[私]を。私を, ソーマたちが, 讃辞たちが酔わせている時 (perf. ind.), 際限なき両空間どもは, [私を] 恐れる (pres. ind.)」。kar/kr のように瞬間的な動作を表わす動詞では, 完了語幹が表わすのは, 過去に為した行為が何らかの形で発話時点に影響していることであると考えられるが, これと inj. の機能との組み合わせは, 当該箇所本文脈では殆ど意味を為さない: e.g. 「私はそれら一切の事々を (いつでも) 為し終えた状態にある／(今ここに) 私は為し終えた状態になる (?)」<sup>101</sup>。ここではむしろ, 本論で接続法にも想定しているように (II 総論への補説 1), perf. subj. が行為を最初から最後まで全てやり遂げること——行為の完全性——を表現していないかどうか検討する必要がある (→ 上記記)。IV 42,1-4 ではヴァルナが自らの力や支配権を誇るが, これに対して 5-6 ではインドラが自分の強さをアピールする。当箇所 (6) では, 前詩節 (5) で言及した自らの偉業 (pres. ind. *kṛnómi, iyarmi*) が——恐らく先行するヴァルナの行為も——全て自分が為せる業であることを主張していると思われる。とすれば, この完了語幹は, 文頭に置かれた *ahám* とともに, 「自分に全てを為す力がある」ことを強調している可能性がある。*cakaram* が何らかの二次的形成でない限り<sup>102</sup>, 完了語幹の持つ意味は更に検討する必要がある。しかし少なくともここで subj. 1sg. が相応しくないことは, 先行詩節及び当該詩節 d の pres. ind. による一般論的表現や, インドラ自身の過去の行為 (恐らくヴァルナのも) 受ける *tá víśvā* から, 明らかである。

#### 4) X 27.9 *váyam*

OLDENBERG *Noten ad loc.*, HOFFMANN 247 によって接続法の機能が想定された -am 語形に, root-pres. *váyam* X 27,9 が挙げられる, cf. ind. 3sg. act. *vé-ti*, pl. *viy-ánti*。ここでは, 時を表わす *yád* 節に *váyam* が, そして帰結文には *ichād* (pres. subj.) 及び *yunajad* (pres. subj.)

<sup>101</sup> Cf. KÜMMEL Perf. 87: 「恐らく幾つかの結果を表わす完了語幹 (“resultativ”: 過去の行為の結果が現在に影響していることを表わす, → 同書 7, 75ff.) の inj. には…時間的に固定されない (行為の) 結果を表わす機能を想定し得る…」彼は更に MUMM (1995) に従い, inj. が特定の (“definit”) 事態を表わす可能性を示唆している。同書 137 によれば, その機能の作用によって, 「この完了語幹 (*cakaram*) が, 結果的に, 既知の事実を述べている」という: ‘Ich [Indra] **habe ja** all dies **getan**, …’。しかし, inj. のこうした機能は, 検討し直す余地があり, また完了語幹にあてはめた場合に, 一方では pres./aor. inj. との, 他方では perf. ind. との機能上の関係が検討されるべきである。

<sup>102</sup> HOFFMANN 247 n. 264: 「恐らく… (詩のリズムによって) perf. ind. 1sg. *cakara* から作り変えたもの」; ただしこれに対して KÜMMEL 247: 「しかし, もしそうしたければ, 単に語末母音を延長することによって出来たであろう」。RV の第 IV 巻には, しばしば動詞の異例形が見られることも指摘される, e.g. GOTO 154 n. 243。

が用いられ、全体として未来のことを表わしていると言える：X 27,9 *sám yád váyam yavasádo jánānām ahām yavāda ur<sub>u</sub>vājre antāḥ | ātrā yuktò 'avasātāram ichād ātho áyuktam yunajad vavanvān* 「わたし（インドラ）が、（他の）人々に属する、牧草を食むものたちを、麦を食むものたちを、幅広の野の中で追い集める時には、この時には、つながれた〔馬〕は（綱を）ほどく者を求めることになろう（pres. subj. : 話し手の見込み）。また一方打ち克った者は、つながれていない〔馬〕をつなぐことになろう（pres. subj. : 同上）」<sup>103</sup>。II A 3.2 において見るように、接続法は話し手の（場合によっては主語の）意志を表わすか否かに関らず、主節でも従属節でも未来に属する事柄を表わすため、*váyam* にも接続法が疑われるかも知れない。しかしながら、ここでも *váyam* は inj. の機能によって理解可能である。一般論を表わす inj. の機能 (2) は、関係節や条件節を伴う複文の中で用いられると、条件付きの一般論や、何度でも繰り返される事態を表現することが多い：「…するなら／…する人がいれば、必ず／いつでも…する（ことになる）」： “gnomische Periode” (HOFFMANN 238ff.)。その際、それぞれ別の事情から同様に一般論を表わし得る pres. ind. や subj. も、従属節／主節の別に関係無く、inj. と並んで現れることがある。HETTRICH 351f. によれば、*yád* 節（時／条件）[inj.] + 主節 [subj.] が、そのような一般論を表わす用例も存在する<sup>104</sup>、e.g. I 77,2 *agnír yád vér mártāya devān sá cā bódhāti mānasā yajāti* 「アグニが死すべき人のために、神々を追い求める時は（pres. inj.）<sup>105</sup>、（いつも）彼もまた注意すべし（pres. subj.）。思考（熟考）を伴って、彼は祭式を為すべし（pres. subj.）」。今問題にしている X 27,9 にも、これと同じ現象（*yád* ... inj., subj.）を想定することにより、*váyam* は inj. 1sg. act. として問題無く理解される。

##### 5) VII 29.3 *tatane*

一方 mid. 語形では、act. 語形の場合と異なり、inj. と 接続法は別々の語幹（zero-gr./full-gr.）を示すため、形態上第二語尾による接続法語形が疑われるのは、full-gr. と同じ形を示す perf. 1sg. mid. *tatane* のみである（→ 2.3.3）。しかしながら *tatane* は、ind. 1sg. mid. の本来の音韻変化によって説明可能である：*tatane* < PIIr. \**tatṇ(H)ai* < PIE \**te-tṇ-h<sub>2</sub>ai* (KÜMMEL Perf. 210 ; anaptyxis \**ta-t<sub>a</sub>n-ai* も可)<sup>106</sup>。また、機能的にも perf. ind. の方が好ましいと判

<sup>103</sup> Pāda cd は勝者と敗者とを対照的に描いている、GELDNER ad loc. : 「敗者の方においては、御者が倒されたことで主人を失った馬たちが逃げ惑い、自分をほどこしてくれる者を探す。一方勝者の方は、奪い取った繫がれていない馬たちを、好き勝手に自分たちの戦車に繫ぐことが出来る」。

<sup>104</sup> HOFFMANN からの用例も含む。

<sup>105</sup> 本来 *vay/vi* の inj. 2sg. act. であるが、II 5.3 *vér* とともに、二次的に 3sg. act. として用いられていると思われる、cf. HETTRICH 665f. n. 244, LUBOTSKY Concordance II 1330。ただし、両書が同様の例とする IV 7,7 *vér* は、本来の 2sg. act. として理解可能である：IV 7,7 *mahām agnír námasā rātāhavyo vér adhvarāya sādām id ṛtāvā* 「偉大なる（君）アグニは、献供物が贈られれば、敬意を伴って、儀軌のために、いつでも〔神々を〕追い求める」（後続詩節 IV 7.8 *vér* 2sg. act. を比べよ）。

<sup>106</sup> \**-tṇ(H)ai* には、1人称語尾本来の laryngeal 以外にも、*ian* の二次的な *seṭ* 語形（pass. *tāyāte*, cf. 後藤 人類と死の起源 429 n. 20）が影響しているかもしれない。

断される：VII 29,3 *kā te asti y āramkṛtiḥ sūktāiḥ kadā nūnām te maghavan dāśema | víśvā matir ā tatane tāvāyā- ádhā ma indra śṛṇavo hávemā* 「よき頌辞たちを用いて、君へのどんな相応しい仕え方が存在するのか。一体何時君に、有能な者よ、我々は奉仕出来るのか (pres. opt.)。一切の思考たちを、君を求めて (i.e. 君の方へと) 私は張り伸ばしてある (perf. ind.)。だから、インドラよ、私の呼び掛けたちを、君は聞くべきである (pres. subj.)」。VII 29 は 5 詩節からなるが (第5詩節は VII 28,5 の繰り返し)、詩人は既に第1-2詩節において、インドラに頌辞 (= 思考) を歌っていることは明らかである、cf. VII 29,2d *úpa bráhmāni śṛṇava imā naḥ* 「我々の、これらの言葉の霊力たちを、君は聞き届けるべきだ (pres. subj.)」。ここではそれを perf. ind. によって確認した上で (cf. *ádhā*)、もう一度詩人の呼び掛けを聞くよう求めていると考えられる。

### 3.2.2 inj. 語形に接続法の機能が疑われる可能性 (幹母音幹)

以上 3.2.1 で見た非幹母音幹の -am 語形が、いずれも語幹部分では inj. 1sg. act./subj. 1sg. act. いずれの可能性も持っていたのに対して、幹母音幹の -am 語形には形態上接続法を疑う根拠は存在しない。もし接続法の機能を担っているとすれば、inj. 語形の二次的な転用ということになる。しかし、*mā + inj.* の構文以外で例証されている現在／アオリスト語幹の -am 語形は、いずれも本章冒頭の inj. の機能 (1-3) によって理解されるため、それらが接続法として使われている可能性は極めて低い。HOFFMANN 247 が接続法の機能を想定した -am 語形 (その多くは従属節に見られる) は、*váyam* を除いて全て幹母音幹の動詞であるが、これらも、彼自身が明らかにした inj. の機能とそれぞれの文脈とを再吟味するならば、必ずしも接続法に特有の環境を示しているとは限らないことが分かる。以下、これらを順に検討する：

#### 1) X 27,2 *siñcam*

X 27,2 *yádíd ahám yudháye saṁnáyānīy ádevayūn tānāvā súśujānān | amā te túmraṁ vṛṣabhám pacāni tivrām sutām pañcadaśām ní śiñcam* 「もしもわたしが、神々を求めない、いきり立っている者たちを、戦うために連れ集めることになるなら (pres. subj.)、家で君に、肉付きのいい牡牛を、私は調理しよう (pres. subj.)。十五 (杯) の搾られた鋭い (舌を刺す) [ソーマ] を、私は注ぎ込む (pres. inj.)」。主文 (c) の subj. 1sg. act. *pacāni* は、条件文 *ab yádi ... saṁnáyāni* (subj.) を受けて、話し手の意志を表明していると考えられるので、c と平行する構造を示す d *ní śiñcam* にも同様の機能が予想されるかも知れない。しかしここでは、Pāda a-c において発話が前提とする場面 (／時) が既に設定済みであるため、*siñcam* は inj. の (1) の機能——既定の枠組みの中で単に行為に言及する——によって十分に理解される。

2) VIII 1.31 *ruhám*

VIII 1.31 *ā yād āśvān vānanvataḥ śraddhāyāhām ráthe ruhám | utá vāmāsya vásunāś ciketati yó ásti yād<sub>u</sub>vah paśúh* 「馬たちを木(ながえ)につながつた状態に[して]<sup>107</sup>, わたしが信頼を伴って戦車に乗る時には (aor. inj.), 好ましい物のことをもまた<sup>108</sup>, 理解することになる／なろう (perf. subj.), ヤドゥに属する家畜であれば」。先に見た X 27.9 *váyam* と同じ状況 (gnomische Periode) が考えられる。即ちここでも, *yād* 節は特定の時を指定しているというより, 主節の事態が起こるための時／条件を一般論として提示しており, それを受ける主節の subj. もまた (つまり複文全体が) 未来全般或いは一般論を表わしているものと考えられる: *yād* 節 (時／条件) [inj.] + 主節 [subj.]。

3) I 165.10 *cyávam*

2) の場合と同様に, 当箇所 *cyávam* においても, 関係節の pres. inj. *cyávam*, subj. *kṛṇávai*, そして主文の pres. ind. もそれぞれが特定の時に捕われない事態を表わし, よって複文全体を一般論的表現にしていると思われる: 関係節 [inj./subj.] + 主節 [pres. ind.]<sup>109</sup>: I 165.10 *ékasya cin me vibh<sub>u</sub>v āst<sub>u</sub>v ójo yā nú dadhṛṣvān kṛṇávai manīṣā | ahám hi y ūgró maruto vídāno yāni cyávam índra íd íśa eṣām* 「一人であっても私には, 卓越した力があれ (pres. iptv.)。今勇気を奮い起して, 計画に従って私が為すことになる事々 (pres. subj.), ——わたしは, マルトたちよ, 強者として知られているから——私が執り行う (pres. inj.) 事々, これらのことを, まさにインドラとして私は意のままにする (pres. ind.)」。

4) X 27.1 *śikṣam*

当箇所は inj. (1) c. の機能によって説明される: *yād* 節は, それがかかる *abhivegá-* の内容を提示する役割 (“Inhaltsangabe”) だけを担っており, その際, 時や報告といった要素は必要無いために inj. が用いられている<sup>110</sup>: X 27.1 *ásat sú me jaritaḥ sábhivegó<sup>111</sup> yát sunvaté yájamānāya śikṣam | ānāśirdām ahám asmi prahantā satyadhvṛtam vṛjināyāntam ābhúm* 「しかと, 私のそういう対応が<sup>112</sup>, 歓迎歌の歌い手よ, あるべし (pres. subj.): [ソーマを]

<sup>107</sup> GOTÖ 138 n. 180: “Wenn ich die Rosse ans [Deichsel]holz gespannt [mache und] auf den Wagen mit Vertrauen steigen werde, dann wird sich das Haustier, dass es bei den Yadus gibt, auf das liebe Gut verstehen (d.h. wohl: merken, dass mir ein liebes Gut ist)”。

<sup>108</sup> KLEIN Disc.Gram. I 451: ‘When I have mounted ..., (then) will (the liberal one) take note (to give me) also (some) of the desirable wealth which is the herd of Yadu’. 或いは「家畜がいれば[それ]もまた」?, cf. GELDNER transl.。

<sup>109</sup> 同様に, 主節 [pres. ind.] + 関係節, [pres. subj.] ... 関係節<sub>2</sub> [pres. inj.] が全体として一般論を表現する例として VII 100.1 が挙げられる (HOFFMANN 238 に引用)。

<sup>110</sup> HETRICH 402 は, HOFFMANN とともに, 当箇所 *śikṣam* を接続法として理解している。

<sup>111</sup> *sá* + *abhivegó* 代名詞 m.nom.sg. *sá* は, RV の古層においてはしばしば後続の (特に *a-* 以外の) 母音と contraction を起こす。一方 X 巻においてはこの現象は少なくなり, hiatus を形成するか, *sáh*, *só* と書かれることが多くなる (更に後には, *sál*\_\_K- ~ *sáh*, *sól*\_\_V という分布が確立)。等箇所のように後続の *a-* と contraction を起こす用例は少ない, OLDENBERG Kl.Schr. 265, Proleg. 462–465 も参照。

<sup>112</sup> *abhivegá-* は, \*「何かに対して／応じて (*abhi*) 行動を起こすこと (*vega-*; *vej/vij*)」 > 「対応・反応」

擽っている祭主のために、私が力になる (pres. inj.) という [対応が]。わたしは (ソーマとの) 混ぜミルクを持たない者を、駆逐する (者である)、真理を傷つける者を、曲がったことを目論む者を、中身の無い者を」。この解釈は、Pāda c *pra-hantār-* の理解とも照応する。行為者名詞 *-tar* も一般的に (常に) 行為を行なう人を表わす時に好んで用いられるからである (HOFFMANN 115, 167: “Beeigenschaftung” → 3.2 (1))。通常 *-tar/-tr* によって形成される行為者名詞のうち、語幹にアクセントを持つ (Akrotonon) タイプは常習的・一般的な行為者を表わし、接尾辞にアクセントを持つ (Hysterotonon) タイプは、当座の臨時的な行為者を表わす。しかし Hysterotonon のタイプも時に一般論——特に神々に固有の性質——を、個々の場面を念頭に置いて／含めて表現することがある、TICHY *-tar-* 290–316, 369。その場合、*-tar* が目的語等に関して動詞構文をとることも特徴的であるという (この特徴は通常 Akrotonon のタイプに属する)、同書 362–373 (特に371)。そして当箇所 *ánāśīrdām, satyadhvṛtam, vrjināyāntam, ābhūm* (acc.) + *prahantā* も、この用例に当たると考えられる、同書 363 ‘Meine Art is es, den mit Schlägen fortzujagen, der ...’。

その他、HOFFMANN 253f. によって、単なる一つの可能性として接続法が疑われた *-am* 語形は、全て inj. の一般論の機能で理解される。VIII 61,6, X 116,9 では、pres. inj. の Koinzidenzfall を認めるなら (→ 注87)、その方が好ましいと思われる: VIII 61,6 *sām u vām yajñām mahayam huvé vām ...* 「一方、君たち両者 (ミトラ・ヴァルナ) への祭式を、私は力づける (pres. inj.)。君たち両者を、私は呼ぶ (aor. inj.) ...」; X 89,4 *indrāya gīro ānīśitasargā apāḥ prērayam sāgarasya budhnāt* 「インドラに、休むことない流出を伴う歓迎歌たちを、水たちを海の底から (のように) 私は送り出す (pres. inj.)」, X 116,9 *prēndrāgnibhyām suvacasyām iyarmi sīndhāv iva prērayam nāvam arkāih* 「インドラ・アグニに、よき言葉を話す力を、私は送り出す (pres. ind.)。大河において舟を のように、讃辞たちによって [それを] 私は送り出す (pres. inj.)」。

一方、本来の inj. mid. 語形が二次的に接続法として用いられる可能性については、現在語幹では ind./inj. の区別が出来ないため、アオリスト語幹だけが考察の対象となる (2.3.3)。しかし、これに該当する *vidé, vóce, huvé* の用例はいずれも inj. の機能によって理解される。

INSLER IF 71-3 (1976) 227f. n. 10 は、幹／非幹母音幹の区別無く、3.2.1 に見た perf. *tatane* を始め pres. *īde, bhāre* などに広く subj. 1sg. mid. *-e* を認めている。それは、「*bhārāmahe* のような形は、形式上 ind. でも subj. でもあるため、対応する *bhāre* 等の単数形も、類推によって二つの価値で用いられ」、更に「讃歌の最初の詩節に現れる *-e* と *-āmahe* は、通常 subj. である」からであるという。しかしながら、KÜMMEL Perf. 210 n. 277 が正しく指摘す

---

と理解した。この Sūkta の背景には、神々の助力が少ないことを嘆く詩人の姿がある、GELDNER ad X 27。よって *abhivegā-* は、神々が歓迎歌や祭式等に応じて祭主を助力すること (Pāda d) である。

るように、讃歌の最初の詩節には ind. 語形もごく普通に用いられる。よって, subj. 1sg. mid. 語尾 *-e* の存在を、文脈の解釈から証明することは出来ない。

### 3.2.3 まとめ

以上の考察の結果, act. *-am*, mid. *-e* で終わる語形で接続法の機能が多少なれ疑われてきたものは、全て inj. 自体の機能によって理解することが可能である。その一方、それらの inj. 語形が多くの場合、接続法と同様の環境に現れることも事実である。とすれば、inj. として確認したものの中に、——丁度 *-ā* に終わる iptv. 2sg. act. の場合と同様に——ヴェーダ語の言語感覚では接続法として理解されていたものが含まれている可能性も排除することは出来ない<sup>113</sup>。実際、HOFFMANN が指摘するように<sup>114</sup>, VS では *-am* が明らかに subj. 1sg. act. の語尾として使われていることを考慮すると、*-am* 語形が RV の時代にも、接続法として再解釈される可能性を胚胎していたであろうことは否めない。恐らくその背景には、(1) 本来の subj. 1sg. act. 語尾 *-ā* が、iptv. 2sg. act. *-a/ā* との同音異義を避ける必要があったこと (→ 2.3.1), (2) 多義的な語尾 *-ā* に比べ *-am* が 1sg. act. を明確に特徴付ける語尾であったこと、(3) inj. という範疇が崩壊しつつあったこと、などの要因が複合的に作用していたと考えられる<sup>115</sup>。しかしそれでも、接続法と inj. との歴史的に証明される排他的語尾分布 (非幹 subj. 1sg. act. *-ā ~ -āni*; mid. *-ai :: inj. 1sg. act. -am, mid. -i*; 幹 subj. 1sg. act. *-ā ~ -āni*; mid. *-ai :: inj. 1sg. act. -m, mid. -e*) と、それらの機能の調査結果とを考え合わせるならば、一つの共時体として見た RV においては、第二語尾に終わる動詞語形を、接続法の機能研究からひとまず除外するのが妥当であると思われる。ただし、こうして除外された曖昧語形の一つ一つが、将来機能研究の成果によって再吟味されるべきであることは、3.1 で見た *-ā* に終わる語形の場合と同じである。

<sup>113</sup> Cf. LUBOTSKY Concordance I preface p. x 「複数の異なる選択肢のいずれかに決定するには、文脈は時に不十分である。よって当該語形に当てられた見出しは試験的なものに過ぎない。このことは、特に接続法と injunctive の場合に当てはまる。これらを区別することは、多くの場合難しい」。同書は、*-am* におわる接続法を、幹/非幹母音幹の区別無く、かなり広く認めている。

<sup>114</sup> AV の *yāthā* + subj. 3sg. *āsat* が VS で 1sg. に変えられた際に、subj. 1sg. として *āsam* が形成された、HOFFMANN Inj. 248 : AV VIII 5,21 *asmīnn indro nī dadhātu nṛmām imām devāso abhisāñviśadhvam | dīrghāyutvāya satāsāradāyā- āyusmām jarādaṣṭir yāthā<sup>āsat</sup>* 「この者の中に、インドラは、男らしさを置き定めよ (pres. iptv.)。この者へと、神々よ、君たちは入り込んで合一せよ (pres. iptv.)、(彼が) 百年間長命を有することのために、命を保つ者で、老齢への到達を得る者で、彼があるように (pres. subj. 3sg. act.)」→ VS XXXIV 52 ... *tān ma ābadhnāmi satāsāradāyā- āyusmām jarādaṣṭir yāthā<sup>āsam</sup>* 「それ(金)を、私は自らに結びつける、(私の) 百年間の [寿命] のために、命を保つ者で、老齢への到達を得る者で、私があるように (pres. subj. 1sg. act.)」。

<sup>115</sup> (1), (2) については HOFFMANN Inj. 248 を参照。(3) に関しては、接続法自体も生産的を失いつつあったことが指摘されようが、少なくとも 1 人称だけは、命令法の組織に組み込まれるという形で動詞組織の一角を担い続けたことを考慮すべきであろう。

## II 機能

### 接続法の基本機能

ある文法範疇 A の中の一部 B を研究する場合、ある程度 A 全体の理解が前提となる一方で、A 全体の理解もまた B の研究によって初めて完全なものとなる。機能研究の出発点と終着点とは、常に作業仮説という手段を通して補完し合っていると言える。接続法全体の機能研究はもとより本論の対象ではないが、1人称接続法を理解する上では、接続法全般に対する一定の理解が必要となる。以下では、接続法に想定される二つの基本的機能——a) 話し手の意志を表わす機能、及び b) 話し手の見込みを表わす機能——について、本論の議論にとって最低限必要と思われる事項を確認する。

#### a) 話し手の意志

接続法の機能で最も多くの用例を持つのが、動詞が表わす事態を話し手の意志として表わす機能である；以下単に意志と呼ぶ<sup>116</sup>。これは、話し手がある事態の実現を、自らの意志に委ねられたものとして——実際にその力があるか否かとは関係無く——捉えるものであり、つまり話し手にとっての当為・必然を表すと言える。この機能の中には、未来という時の要素が必然的に含まれていると理解されるが、これが有意的となることはない（ただし以下 b) を参照）。この機能は、動詞の主語が話し手と異なる場合、つまり2/3人称において、最も明瞭に確認することが出来る：

VI 40,4 *ā yāhi ... ūpa brāhmāṇi śṛṇava imā nō 'athā te yajñās tanvè vāyo dhāt* 「君（インドラ）はやって来い（pres. iptv.）…。我々（＝詩人たち）のこの言葉の霊力たちに、君は耳を傾けるべし（pres. subj. 2sg.），そうしたら祭式が、君の体に活力を置き定めよ（aor. inj. : iptv. の価値で → HOFFMANN 264）」

X 70,10cd *svādāti devāḥ kṛṇāvad dhavīm̐si āvatām dyāvāprthivī hāvam me* 「神（アグニ）は、諸々の供物を美味しくすべし（pres. subj. 3sg.）。（それらを）仕上げるべし（pres. subj. 3sg.）。天と大地は、私の呼び掛けに、助けを与えよ（pres. iptv.）」

これに対して、話し手＝動詞の主語、つまり1人称の場合には、客観的に見た自分自身の義務を表わす機能はなく（「私は～すべきだ」，cf. A 1.2 補説 1），話し手が自分の意志，

<sup>116</sup> Cf. “voluntativ/volitiv”; DELBRÜCK Conj.Opt. 17ff. “Conjunctive des Wollens”; DELBRÜCK 302 “Wille des Redenden”, 308f., 311f. “Aufforderung/auffordernd” (2/3 人称に関して)。

決意を表明する機能を持つ（口語でいう「～するぞ！」にあたる）；以下意志表明と呼ぶ<sup>117</sup>：

X 88,3ab *devébhīr n<sub>iv</sub> īṣitó yajñīyebhīr agnīm stoṣāṇy ajāram brhāntam* 「今、祭式に値する神々に動かされて、アグニを私は称えよう（aor. subj. 1sg.），歳を取らない背の高い〔アグニ〕を」

このように話し手の意志の現れ方が、2/3人称と1人称とで均一でないことは、サンスクリット語史において接続法という文法範疇が消滅した際に、1人称の上記の用法だけが、もともと1人称を欠く命令法のパラダイムの中に組み込まれる形で生き残ったことと関係していると思われる。

次に接続法の話し手の意志を表わす機能が、命令法 (iptv.)、願望法 (opt.)、意欲語幹 (desid.)、未来語幹 (fut.) の諸機能とどのように区別されるかを、以下で確認する。

1) 命令法との関係：上の2/3人称の例に見られるように、接続法と命令法とは、一見同様に用いられているようにも見える。しかしながら、命令法は話し手による主語＝聞き手に対する直接的な働きかけであり、文字通り相手への命令や要求の表現である。これに対して接続法は、主語が関る事態に対する話し手の、いわば一方的な意志表明である。よって、命令法が主語＝聞き手が目の前にいる（ものとして捉える）ことを前提としているのに対して、接続法は必ずしもそのことを必要としない。ただし話し手の意志表明は、実際には事態の当事者（主語）が聞いている状況で発せられ、その者に対する間接的な要求として機能することが多いため、しばしば——特に2人称が主語の場合——命令法と同様の文脈で用いられる<sup>118</sup>。それぞれ生産的な活用体系を示す接続法と命令法との機能的な関係については、別の機会に扱いたい。

2) 願望法との関係：願望法は、語形成法の共通性に対応して（→ 序論），話し手の心的態度を表わすという意味では接続法と似ているが、その機能は接続法と違い、ある事態の実現を、自分以外の意志や諸要素に委ねられているものとして捉え、それを話し手の願望として表現することにある。よって2/3人称が主語の場合には、他人の行為に対する願望を、1人称＝話し手の場合には、話し手自身の願望を表す：

V 4,10cd *jāta vedo yāśo asmāsu dhehi prajābhīr agne amṛtatvām aśyām* 「ジャータヴェーダス（アグニ）よ、我々のもとに、名声を置き定めよ（pres. iptv.）。子孫たちによって、ア

<sup>117</sup> DELBRÜCK 306 “Willenserklärung”.

<sup>118</sup> DELBRÜCK 308f., 311f. が 2/3 人称接続法の意味を「要求 (Aufforderung)」とするのはこのためである。

グニよ、不死であることを、私は獲得したい (aor. opt. 1sg.)」

VI 11,1 *yájasva hotar ... á no mitrávárūnā nāsatyā dyāvā hotráya prthiví vavṛtyāh* 「ホートリ祭官（アグニ）よ、君は祭れ (pres. iptv.) …。我々のホートリ祭官職（遂行）のため、ミトラ・ヴァルナを、両ナーサティヤたちを、天を、大地を、君がこちらへ振り向かせて欲しい (aor. opt. 2sg.)」

III 62,3ab *asmé tád indrāvarūnā vāsu śyād asmé rayír marutaḥ sárvaṁvīrah* 「我々のもとに、インドラ・ヴァルナよ、その財物があつて欲しい (pres. opt. 3sg.)。我々のもとに、マルトたちよ、完全な男子たちからなる財が [あつて欲しい]」

願望法には、後により一般的となる規定や義務を表わす用法がある：V 18,1 *prātár agnīḥ purupriyó viśá stavet<sub>a</sub>ātithiḥ* 「朝に、多くの者たちに好ましいアグニが、部族の客人として称えられるべきである (pres. opt. 3sg.)」；VIII 7,15 *etāvataś cid eśāṁ sumnám bhikṣeta mártiḥyāḥ | ádābh<sub>i</sub>yasya mánmabhiḥ* 「この（以上述べた）全部の、偽り得ない（正真正銘の）[品物]を、（そして）当人たち（マルトたち）の善意を、死すべき[人間]は、詩歌たちによって所望すべきである (pres. opt. 3sg.)」。訳は接続法に類似しているものの、この意味は恐らく願望の機能の発展形として理解される、cf. DELBRÜCK 303。即ち、話し手個人の願望が、より一般性を増して共同体全体が望むこととなった時に、それが社会の規律や義務として表現されるに至ったものと推測される：「私は人に～して欲しいと願う」>「皆が人に～して欲しいと願う」>「(皆が) 人は～すべきものとする／人は～すべきである」。或いは、願望の否定形「～しないで欲しい > ～すべきでない」から、肯定的な義務の意味「～すべきである」が抽出されたとも考えられよう。いずれにしても、願望法の「べき」は、接続法のように話し手の意志に発している訳ではない。

DELBRÜCK 302ff. は、主文／主節における1人称接続法と1人称願望法との用例を検討した際に、その語彙的意味によって本質的に subj. をとる動詞と opt. をとる動詞とが存在することを指摘した上で、この両者の現れ方が、意志内容の実現が話し手の支配下にあるものと認識されるか (subj.)、そうでないか (opt.) によっていると結論付けた。つまり、語彙自体の意味が本来的に意図的な動作であるほど (e.g. *brav<sup>i</sup>/brū* 「話す」、*han* 「打つ、殺す」、*kar/kr* 「つくる、為す」)、容易に話し手が自分の意志として表現し易く、行為の遂行が話し手以外の要素に頼る度合いが強い動詞ほど (e.g. *jay/ji* 「勝利する」、*naś/aś* 「獲得する」、*śak* 「～出来る」)、話し手の願望として表現される傾向があるという。ただしその一方で、話し手がある事態をどのような態度で捉えるかは、基本的に動詞の語彙的意味とは異なるレヴェルの話である。そのため、話し手が自分の意志として「今年こそは宝くじにあたるぞ」と表明することや、「この秘密をどうしても誰かに言いたい」と願望を用いることは、いつ

でも可能である。1人称接続法と動詞の語彙的意味との関係については、II 総論への補説 2) を参照。

3) 未来語幹との関係：-syá- によって作られる未来語幹 (future I) と、次の 4) に見る意欲語幹とは、接続法が話し手の意志を表わすのに対して、動詞の主語の意志に関係するカテゴリーである。この違いは、法語幹 (接続法) と二次語幹 (未来/意欲語幹) という、語形成法のレベルの違いに対応している。未来語幹は文字通り未来という時を表わす語幹であるが、一方では、未来における主語の意図を表わすと考えられる場合も確認される (特に分詞形に多い)。未来語形の人称語尾が、「現在」と「報告」という両機能を併せ持つ第一語尾であることと、実際の用例から得られる理解とを考え合わせると、その意味領域は恐らく、未来に予定されている行為を現時点で報告することであろうと思われる<sup>119</sup>。もし未来の予定が、主語以外の外的な要因によって定められたものであれば、予言や運命のような意味を帯びるであろうし (「～ことになっている」：a))、それが主語自身によって予定されたものであれば、主語の意図を意味することになる (「～ことにしている；～つもりである」：b))：

a) VII 32,23ab *ná tvāṁś anyó diviyó ná páṛthivo ná jātó ná janiṣyate* 「君のような者は、天に属するものであれ、大地に属する者であれ、他に生まれたことはなく、(これから)生まれることはない (fut. ind. 3sg.)」

IV 20,3ab *imám yajñám t<sub>u</sub>vám asmākam indra puró dádhat sanīṣyasi krátum naḥ* 「きみが、われわれのこの祭式を優先させるならば (pres. ptcpl.), インドラよ、我々の意志の力を勝ち取ることになる (fut. ind. 2sg.)」

b) I 6,6 *yád aṅgá dāśúṣe t<sub>u</sub>vám ágne bhadrám kariṣyasi | tāvét tát satyám aṅgiraḥ* 「きみがそもそも、アグニよ、捧げる者に良いことを為すつもりであれば (fut. 2sg.), それはまさしくきみの真実 (i.e. 必ず実現すること) である、アンギラスよ」

IV 18,11cd *áthābraviḍ vṛtrám índro haniṣyan sákhe viṣṇo vitarám ví kramasva* 「するとインドラは、ヴリトラを殺そうとして (fut. ptcpl.), 言った (ipf.)：『仲間ヴィシュヌよ、より広く、君は歩み渡れ』」

<sup>119</sup> 概ね HOFFMANN 276 n. 21 の考察に従う。ただし同書は、主語の意図を表わす機能が、未来語幹本来のもので、未来という時を表わす機能は後の発展であると考えている：「[未来語幹は] 実際は恐らく『(する) 意図を持つ』のような意味の現在語幹である。…こうして作られた現在語幹の ind. pres. は、よって、現在と報告という意味素を表示する：『私は (現在) する意図を持っている 'ich habe (gegenwärtig) die Absicht zu tun'』。『する 'zu tun'』の中に、未来という意味素が隠されているが、ただしそれは元来、『意図を持つ』ことから自動的に得られるものであって、有意的なものではない。言語史の展開の中で、この未来という意味素は有意的となったが、現在という意味素は (『意図を持つ』という語彙的意味素とともに) 有意的ではなくなった」。

話し手の意志と主語の意図との違いは、2/3人称では明らかであろう。これに対して 1 人称においては主語＝話し手であるから、一見どちらも同様に用いられているかのように見える。しかしながら、話し手の意志の表明（接続法）と、主語の意図の報告（未来語幹）とは、DELBRÜCK 289 が正しく指摘しているように、明確に区別されるべきである：「接続法は決意が発現することそのものを表現し、未来語幹は決意した内容を人に伝える」<sup>120</sup>。この観点から、次の1人称の一組の用例は、はっきりと訳し分けられるべきであろう：

II 11,6ab *stāvā nū ta indra pūrvyā mahāni* 「私は称えよう (pres. subj. 1sg.) 今、君の、インドラよ、以前の諸々の偉大な〔武勲〕を」

I 44,5ab *staviṣyāmi tvāṁ ahām viśvasyāmrta bhojana* 「きみを、わたしは（これから）称えつつもりだ／称えようとしている（＜称えることにした）(fut. ind. 1sg.)、（世界の）一切を楽しませる不死者よ」

4) 意欲語幹との関係：意欲語幹も、主語の意志に関する文法範疇であるという点では未来語幹に近く、話し手の意志を表わす接続法とは区別される。しかし、未来語形が未来の行為に対する現在の意図（「～するつもりである」）を表わすのに対して、意欲語幹は主語が実際にその意志内容を実行に移そうとしていることを表わす：「～しようと（欲）する／～しようと試みる」。語幹自体には時の表示機能はなく、それぞれ基準となる時の——pres. ind. であれば発話現在における、ipf. であれば過去の時点における——行為遂行への意欲を表現する。またこの語幹は、話し手の心的態度とも無関係であるから、使役語幹 (caus.) や強意語幹 (intens.) などと同様、それ自体があらゆる法語幹を形成することが出来る：

III 51,7 *indra marutva ihā pāhi sōmaṁ ... tāva prāṇitī tāva sūra śārmann ā vivāsanti kavāyah suyajñāḥ* 「マルトたちを連れるインドラよ、ここで、ソーマを君は飲め…。君の導きによって、君の庇護において、勇者よ、詩人たちはよき祭式を伴って、（今）〔君を〕こちらへ獲得しようとしている (desid. pres. ind. 3pl.)」

IV 18,12ab *kās te mātāraṁ vidhāvām acarkac chayūṁ kās tvāṁ ajighāṁsac cārantam* 「誰が、君（インドラ）の母を寡婦にしてしまったのか。誰が、父無し子となって彷徨っているきみを、殺そうとしたのか (desid. ipf. 3sg.)」

III 8,6 *yān vo nāro devayānto nimimyr vānaspate svādhitir vā tatākṣa | té devāsaḥ svāravas taṣṭhivāṁsaḥ prajāvad asmé didhiṣantu rātnam* 「神々を求める男たちが（地中に）立てたところの、或いは、樹木よ、手斧が造形したところの、その、君たち天の祭柱は安立している。子孫に富む財宝を、我々のもとに、それらは置き定めんと欲せ (desid. iptv. 3pl.)」

<sup>120</sup> “Der Conj. begleitet den zum Ausbruch kommenden Entschluss, das Fut. theilt den gefassten Entschluss mit.”

主語＝話し手である1人称 (ind. pres.) においても、意志を表明する接続法との違いは歴然である。意欲語幹は語根の語彙的意味を変更しただけの現在語幹と位置づけられるから、desid. pres. ind. 1sg. は、発話現在における行為遂行の意欲を強調するものである：

X 119,9ab *hántāhām prthivīm imām ní dadhānīhá vehá vā* 「よし、わたしは、この大地を定め置こう (pres. subj. 1sg.)、ここに、或いはここに」

II 35,12cd *sām sānu mārjmi dīdhiṣāmi bīlmair dādhamīy ānnaiḥ pári vanda ṛgbhīḥ* 「(アグニの) 背中を、私は撫でている (pres. ind.)。木屑たちによって (彼を) 私は据え置こうとしている (desid. pres. ind. 1sg.)。食物たちによって、(彼を) 私は据え置いている (pres. ind.)。讃歌たちによって、(彼を) 私は取り囲んで賞讃している (pres. ind.)」

## b) 話し手の見込み

接続法のもう一つの基本機能は、話し手がある事態を、未来に高い見込みで実現するものとして表わす機能である；以下単に見込みと呼ぶ<sup>121</sup>。話し手自身の意志は入らないが、事態の実現度に対する一定の判断を前提としているため、これも話し手の心的態度の一つと言える。未来という時の要素は、ここでも必然的に含まれるものである。接続法が担う見込みの高さ／範囲の微妙な違いは、実際の文脈から伺うことは出来ず、確信、推量、予想などの広い範囲を含む意味領域が想定される。この機能は、主文／主節（非疑問文）において現れることは少なく、むしろ一部の従属節や疑問文で話し手の意志が関らない場合にしばしば想定される：

VIII 100,2 *ásaś ca tvām dakṣiṇatāḥ sakhā mé 'adhā vṛtrāṇi jaṅghanāva bhūri* 「きみ (ヴィシュヌ) が、盟友として私の右側に居ることになれば (pres. subj. 3sg.)、そうすれば、多くの障碍たちを、我ら両者は [一つ一つ] 打ち倒すことになる (pres. subj. 1du.)」(本論を参照)

VIII 96,7cd *marúdbhir indra sakhyām te astu áthemā vísvāḥ pṛtanā jayāsi* 「インドラよ、マルトたちとの同盟関係が、君にあれ (pres. iptv.)。そうすれば、これら一切の戦いに、君は勝つことになる (pres. subj. 2sg.)」

II 41,11 *indraś ca mṛḍáyāti no ná naḥ paścād aghām naśat | bhadram bhavāti naḥ purāḥ* 「インドラが、我々に寛容であるならば (pres. subj. 3sg.)、我々に、後方から害が及ぶことはないだろう (aor. subj. 3sg.)；前方に、恵みが我々のものとして現れるであろう (pres. subj. 3sg.)」

I 25,5 *kadā kṣatraśríyaṃ nāram ā vāruṇam karāmahe | mṛḍikāyorucákṣasam* 「何時 (になれば) 、

<sup>121</sup> Cf. “prospektiv”; DELBRÜCK Conj.Opt. 23ff. “Conjunctiv der Erwartung”; DELBRÜCK 309 (2 人称) , 313 (3 人称) 「事柄は見込みの中に置かれ、未来の意味に近づく」。

支配権において華々しい男を、ヴァルナを、こちらへ我々は引き寄せることになるのか (aor. subj. 1pl.), (我々への) 寛大さのために、幅広い眼差しを持つ [ヴァルナ] を」(本論を参照)

IV 31,2ab *kás tvā satyó mādānām mām̐hiṣṭho matsad ándhasaḥ* 「諸々の酔う [飲み] 物の中で、どれが本当のものとして、(ソーマの) 茎 [汁] の [どの部分が], 最も多くを与えるものとして、君 (インドラ) を酔わせるであろうか (aor. subj. 3sg.)」

IV 43,1ab *ká u śravat katamó yajñíyānām vandāru devāḥ katamó juṣāte* 「さて、誰が聞くであろうか (aor. subj. 3sg.), 祭式に値する者たちの中でどの者が。誉め言葉を、どの神が喜ぶであろうか (aor./pres. subj. 3sg.)」

これに対して、ある事態が起こる見込みが低い場合、もしくは、そもそも起きるかどうかが自体 (可能性) が問題となる場合には、接続法ではなく願望法が用いられる。願望法のこの機能と「見込み」の接続法との関係は、丁度、接続法の意志と願望法の願望の機能との関係に対応するものと見ることが出来る。願望法のこの可能性を表わす機能 (potential) も、多くの場合、主文/主節 (非疑問文) よりも従属節や疑問文において確認される:

VII 32,18 *yád indra yávatat t<sub>u</sub>vám etāvad ahám íśiya | stotāram íd didhiṣeya radāvaso ná pāpatváya rāsīya* 「インドラよ、きみが [所有している] ほどの、それほど沢山、わたしが所有しているならば (pres. opt. 1sg.), まさに歌い手を、私は手元に置こうとするであろうに (desid. opt. 1sg.), 財物を削り取る者よ。(彼を) 悲惨な目に、差し出すことはないであろうに (aor. opt. 1sg.)」

III 33,11 *yád aṅgá tvā bharatāḥ saṁtāreyur ... āṛṣād áha prasavāḥ sárgataкта* 「バラタ族が、そもそも君 (大河) を渡り遂せることが出来れば (pres. opt. 3pl.) …, 放出とともに突き進む奔流が、確かに流れるべし (pres. subj. 3sg.)」(話し手たち=バラタ族が河を渡ったら、追っ手が続いて渡る前に、水かさと流れを強くせよと言っている)

VII 8,3cd *kadā bhavema pátayaḥ sudatra rāyó vantāro duṣṭārasya sādhoḥ* 「何時 (になれば), よき贈り物もたらす者よ, 主人たちに, 乗り越え難い立派な財を克ち得る者たちに, 我々はなれるであろうか (pres. opt. 1sg.)」

VII 86,2c *kím me havyám áhṛñāno juṣeta* 「私の供物を, 憤怒せずに, 彼 (ヴァルナ) は喜ぶであろうか (aor./pres. opt. 3sg.)」

接続法と願望法との機能領域に明確なラインを引くことは難しいが、少なくともヴェーダ語の動詞体系の中では、話し手が事態の実現可能性を高いと見るか否かが文法上有意的な境界点であったことは、間違いない。

さて、話し手の事態に対する見込みが高ければ高いほど、話し手はそれを確信することになる。そしてこの確信の度合いが強いと、それはもはや話し手の個人的な態度というよりも、一般的に起こると認識されている事態に近いと言える：e.g. 「十年以内には、今ある資源は底をつく」、「次の世代が、環境汚染のつけを払うことになる」。こうして話し手自身の心的態度が薄れると、接続法にとって本来有意的ではなかった未来という時の要素が、中核的な役割を担うようになる。そしてその際、a)3) で確認した未来語形の機能と接近する。こうした性質は否定文において顕著に見られる：

X 86,11 *indrāṇīm āsú nāriṣu subhāgām ahām aśravam | nahy āsyā aparām canā jarāsā mārāte pātir vīśvasmād indra úttaraḥ* 「インドラニー（インドラの妻）は、これらの妻たちの中で幸運な女であると私は聞きました（aor. ind.）。だって、彼女の主人（インドラ）は、未来においても、老いによって死ぬことはないのですから（aor. subj. 3sg.）。あらゆるものより、インドラは優れています」

VII 32,23ab *ná tvāṁ anyó divyó ná pāṛthivo ná jātó ná janīsyate* 「君（インドラ）のような者は、天に属するものであれ、大地に属する者であれ、他に生まれたことはなく、（これから）生まれることはない（fut. ind. 3sg.）」

しかし、未来語形は発話時に視点を置いて、未来の予定を今報告しているのに対して、接続法は視点を未来時に移動させて、そこに予測される事態を表わすのみである。そのため未来語形には、現在既に決定済みの未来といった意味が強いが、接続法の表わす未来は、発話時点において話し手も含め一般に起こると予想されている事態に過ぎないと言える。

一方で、接続法の未来の要素は、特定の（一度の）未来だけではなく、不特定の（何度でも起こる）未来もしくは未来全般を対象とし得ることから、発話時以降に何度でも起こり得る事態あるいは未来永劫該当する事態を表わすことにもなる。これが更に抽象化されると、殆ど時の観念が重要性を持たない、純粹に一般論的な事態（「超時間的・一般論的」，cf. “außerzeitlich”，“generell”，HOFFMANN 115, 238）に近づく。そしてこの場合接続法は、同様の機能を持つ pres. ind. や inj. と、殆ど機能的な区別無く用いられる（少なくとも、文脈上見分けがつかない）。これが顕著に見られる文に、いわゆる「格言的複文」（“gnomische Periode”，同書 238f.）がある：「～する者は、誰でも（必ず）…することになる」（用例はいずれも同書より）：

VII 20,6cd *yajñāir yé indre dādāte dūvāṁsi kṣāyat sá rāyá ṛtapā ṛtejāḥ* 「諸々の祭式によって、インドラのもとに、諸々の捧げ物を置き定める者がいれば（pres. subj. 3sg.），その者は、財（の獲得）に向けて安住することになる（pres. subj. 3sg.），天理を守る者として、天理に生まれる者として」

VII 100,1 *nū mārto dayate saniṣyān yó viṣṇava urugāyāya dāśat | prā yāḥ satrācā mānasā yājāta etāvantam nāryam āvivāsāt* 「勝ち取ろうとする人間は、自らの取り分を手に入れる (pres. ind.), 幅広く歩むべきヴィシュヌに、捧げる者であれば (pres. inj.), 集中させた思考によって、このような男らしさを誉め称える者であれば (pres. subj. 3sg.), (それを) 獲得しようとする者があれば (desid. pres. subj. 3sg.) (誰でも)」

この超時間的・一般論的な事態は、否定文にも多く見られる (HOFFMANN 239, 241)。これは、ある事態が起こること自体が未来永劫あるいは概して否定されるために、一般論としての性格を強く帯びるからであろう。その場合、上に見た未来の特定の事態を否定する X 86,11 (subj.) や VII 32,23 (fut. ind.) の例と殆どが区別が付かなくなる：

I 155,5 *duvé id adya krāmaṇe sūvardīśo 'abhih<sub>(i)</sub>yāya mārtyo bhuraṇyati | tṛtīyam asya nākir ā dadharṣati vāyaś canā patāyantah patatrīṇaḥ* 「太陽光を目にする [ヴィシュヌ] の、他ならぬ二度の歩みを凝視して、死すべき [人間] は動揺する (pres. ind.)。誰一人、彼の三つ目の [歩み] に立ち向かう (敢えて見に行く) 者はいない (perf. subj. 3sg.)。(空を) 飛んでいる、翼を持つ鳥でさえも [立ち向かわ] ない」

VII 32,21ab *nā duṣṭutī mārtyo vindate vāsu nā srédhantaṁ rayir naśat* 「死すべき [人間] は、下手な称讃によって、財物を手に入れることはない (pres. ind.)。しくじる者に、財が至ることはない (aor. subj. 3sg.)」

X 43,5cd *nā tát te anyó ānu vīryam śakan nā purāṇo maghavan nótā nūtanah* 「他に、君 (インドラ) のその武勲を真似出来る (aor. subj. 3sg.) 者はいない、有能な者よ、以前の者も、そして今の者も」

\*\*\*\*\*

以上、意志と見込みという接続法の二つの基本的機能を概観し、それらと他の文法範疇との類似や相違についても簡単に触れた。その際に基づいたのは、主として主文／主節における用例であった。これは、動詞範疇の基本機能はまず最も一般的な上記の文型において確認されるべきと考えられること<sup>122</sup>、そして (歴史的な展開とは関係無く) これによって他のあらゆる文型における接続法の機能や用法が説明可能と予想されること、また、全ての文型における機能や用法を理解することは、それ自体接続法の包括的機能研究の対象であって本節の対象ではないこと、による。

<sup>122</sup> 異なる文型に別の機能を与えることは可能である。例えば、疑問文の接続法に対して特別「思案 (deliberativ)」という機能を立てる場合がある (BRUGMANN Grundriß II-3/2 835ff.)。疑問文は主文や従属節とは異なる性質を持つため、接続法にも特別な機能が設定されることは故無しとしない。しかし接続法の機能自体を問題とするレベルからは、それらの機能は上記の基本機能の具体的発現形として理解し得ると考えられる。

以下ではこれらの基本機能が、1人称において具体的にどういった使われ方をしているのか、またそうした用法がどのように下位分類され得るのか、或いは逆に、実例の検討が上記の機能設定にどのような提言をし得るのか、などについて、具体的な用例を基に検討・考察する。その際、接続法が用いられる環境を、便宜的に大きく非疑問文と疑問文とに分け、それぞれについて主文／主節<sup>123</sup>、従属節（従属接続詞節；関係節）の順に検討する。これは、接続法の機能や個々の用法が、これらの文型によって異なる検討と理解を必要とすると考えられるからである。

---

<sup>123</sup> 以下、単文のことを主文、複文における主文を従属節に対して主節とし、文や節の定義についての問題には立ち入らない。また、主文／主節の区別は本論の接続法の機能に殆ど関係しないので、特に区別する必要の無い時は、主文／主節を合わせて単に主文と呼ぶ。

## A 非疑問文——主文／主節

### 1 話し手の意志表明

主文における 1 人称接続法の殆どは、話し手の意志表明として機能する：「私／我々は～しよう！」（口語的の「私／我々は…するぞ！」に当たる）。多くの場合、何らかの聞き手（ただし目の前に居るとは限らない）の存在を意識して発言されるものの、聞き手に伝えるという行為そのものは必ずしも有意的ではない。意志表明はむしろ、話し手が自分の意志を面に出す過程に重点を置いており、基本的には話し手の一方的な発言であると考えられる。その意味で、聞き手＝主語に直接何かを要求／催促する命令法や、聞き手に報告することを主眼とする pres. ind., fut. ind. が、本質的に聞き手の存在を前提としているのとは異なる、cf. I 3.2 及び II 接続法の基本機能 a) 3)。

以下では、話し手が意志表明することの目的や意義という観点から諸機能を整理し (1.1), それぞれにおいて、上記の接続法の特徴がどのように反映されているかを確認する。それに続いて 1.2 では、具体的用例に見られる、形式的、意味的、文脈的特性といった意志表明の諸相について確認する。

#### 1.1 意志表明の諸機能

##### 1.1.1 意志の伝達

会話の場面に見られる意志表明で、話し手は自分の意志を聞き手に聞かせること、つまり意志の伝達を目的として発言する。相手が望むことを約束したり、取り引きや契約において話し手側の条件を提示したり、或いは殆ど自分の能力を誇示するために用いられる場合も見られる。RV では 8 詩節に 13 例が見られる：

X 95,13 : 人間の王プルーラヴァス (P.) は天女ウルヴァシー (U.) を妻として迎えるが、彼が結婚時の約束を破ったために、彼女は姿を消してしまう。再び U. を見つけた P. は、彼女を連れ戻そうと様々な説得を試みる。第 12 詩節で P. は、U. との間にできた子供（この時既に生まれているか、或いは U. が身籠もっている）が父 (P.) を欲して悲しむであろうと主張するが、U. の反応はそっけなく、子供を P. に渡しても構わないことを、皮肉交じりに伝える：

P.: X 95,12 *kaḍā sūnūḥ pitāraṃ jātā ichāc cakrān nāśru vartayad vijānān | kó dāmpatī sāmanasā vī yūyod ādha yād agnīḥ śvāsūreṣu dīdayat* 「いつ、生まれたばかりの息子は、父を求め

るだろうか (pres. subj. : 見込み)。分別がつけば、車輪が のように、(子は) 涙を転がすものだ (pres. inj. : 一般論)。誰が、思いを一つにした夫婦を、引き離すものか (pres. inj. : 一般論)。舅たちのもとに、火が輝いているであろう (perf. subj. : 見込み)、その時に」

U. : X 95,13 *prāti bravāṇi vartáyate áśru cakrān ná krandad ādhṛyè śivāyai | prá tát te hinavā yát te asmé párehṇy ástaṁ nahí mūra mápah* 「(その子に) 私が答えましょう (pres. subj.), 涙を流す[彼]のために。車輪が のように、(子は大声で) 泣き叫ぶものです、愛情ある配慮を求めて。私たちのもとに君のもの(君の子のこと)があるなら、それを君に私は送り出し(返し)ましょう (pres. subj.)。家へ、君は帰り去れ (pres. iptv.)、愚かな人よ。私を、君が手に入れることはないのだから (perf. subj.)」

III 33,10 : バラタ族を率いるヴィシュヴァーミトラ (V.) と、彼らが渡ろうとしている二つの川 (f.) との間の会話。V. の再三の要求を受け入れて、川たちは彼らが渡れるように水位を下げることを約束する :

V. : III 33,9 *ó śú svasārah kārāve śṛṇota yayáu vo dūrād ánasā ráthena | ní śú namadhvam bhávatā supārā adhoakṣāḥ sindhavaḥ srotṇyābhiḥ* 「一方、しかと、姉妹たち(川たち)よ、聞き届けよ (pres. iptv.)。君たちのもとへ、遠路遙々私は走(って来)た (perf. ind.), 荷車を伴って、戦車を伴って。しかと、君たちは身を低めよ (pres. iptv.)。良い渡し手となれ (pres. iptv.)。川たちよ、流れどもに関して、車軸の下にあるものたちと[なれ]」。

川 : III 33,10 *á te káro śṛṇavāmā vácāṁsi yayátha dūrād ánasā ráthena | ní te namśai pīpṇyānéva yóṣā máryāyeva kaṇṇyā śaśvacái te* 「君の、賞讃する者よ、言葉たちを、我々は聞き入れよう (pres. subj.)。君は走(て来)た (perf. ind.), 遠くから、荷車を伴って、戦車を伴って。君に、私は身を屈めよう (aor. subj.), (乳で) 膨らんだ若い女が(乳飲み子に対する)ように。青年に娘が(対する)ように、君に私は身を低めていよう (perf. subj.)」

X 108,3; 9 : 牛たちを城塞の中に囲い込んでいるパニ族 (P.'s) と、インドラに派遣されてその在り処を見つけた牝犬サラマー (S.) との会話。彼らはインドラ本人と契約(和議)を結ぶ提案をしたり、更にはサラマーを買収しようとする :

S. : X 108,2 *índrasya dūtīr iṣitā carāmi mahá ichánti paṇayo nidhín vaḥ | atiṣkádo bhiyāsā tán na āvat táthā rasāyā ataram páyāṁsi* 「インドラの使いとして、送り出されて、私は活動している (pres. ind.), 君たちの、パニどもよ、巨大な蓄えたちを探しつつ。飛び越え(られ)ることへの恐れによって、その時、我々を(ラサー川が)助けた (ipf.)。そうやっ

て、ラサー川の乳（なる流れ）たちを、私は渡った（ipf.）<sup>124</sup>」

.....

**P.'s :** X 108,3 *kidṛññ indraḥ sarame kâ dṛśikā yāsyedām dūtīr āsarah parākāt | ā ca gáchān mītrām enā dadhāmā- athā gāvām gópatir no bhavāti* 「インドラはどのような見かけをしているのか、サラマーよ、どのような容貌を持つのか、その者の使者として、あちら側から、君が走っ〔て来〕た（aor. ind.）ところの〔彼は〕。彼がやって来るなら（pres. subj.），契約を、当人と我々は定めよう（pres. subj.）。そうすれば、我々の牛たちの牛の主人に、彼はなるであろう（pres. subj.）」

**P.'s :** X 108,9 *evā ca tvām sarama ājagānthā prābādhitā sāhasā dáiv,yena | svāsāram tvā kṛṇavai mā púnar gā āpa te gāvām subhage bhajāma* 「こうして君は／が、サラマーよ、神々に属する強制力に押し出されて、やって来たのだが／やって来たのなら（perf. ind.），君を我が妹に、私はしよう（pres. subj.）。君は戻って行くな。君に、牛たちの〔一部を〕，よき天分持つ者よ、我々は分け与えよう（pres. subj.）」

X 27,2; 10 : X 27 は恐らく、インドラ（I.）の助力が少ないことを嘆く詩人と、それに答えるインドラとの会話，GELDNER ad loc.。Sūkta は、自分は正しく祭式をする者を助ける者であると主張するインドラの言葉から始まる：

**I. :** X 27,1 *ásat sú me jaritaḥ sābhivegó yát sunvaté yájamānāya śíkṣam | ánāśīrdām ahám asmi prahantā satyadhvṛtaḥ vṛjināyāntam ābhúm* 「しかと、私のそういう対応が、歓迎歌の歌い手よ、あるべし（pres. subj.）：〔ソーマを〕搾っている祭主のために、私が力になる（pres. inj. → I 3.2.1）という〔対応が〕。わたしは（ソーマとの）混ぜミルクを持たない者を、駆逐する（者である）、真理を傷つける者を、曲がったことを目論む者を、中身の無い者を」

**詩人 :** X 27,2 *yádīd ahám yudháye saṁnāyān,y ádevayūn tan,vā śúśujānān amā te túmram vṛṣabhām pacāni tivrām sutām pañcadaśām ní śiñcam* 「もしもわたしが、神々を求めない、いきり立っている者たちを、戦うために連れ集めることになるなら／が出来たら（pres. subj.），家で君に、肉付きのいい牡牛を、私は調理しよう（pres. subj.）。十五（杯）の、搾られた鋭い（舌を刺す）〔ソーマ〕を、私は注ぎ込む（pres. inj. → I 3.2.1）」

.....

詩人は、彼と同様にインドラを求めるライヴアルの牛が、牧草地にのさばっていること

<sup>124</sup> ラサー川を渡ったところにパニ族の城塞（Vala）があり、サラマーはそこで牛たちを見つける。ラサー川を渡る場面はこの話のハイライトであり、JB II 440-441 に詳しい説話が見られる。

に不満を述べる。しかしインドラは、彼らを駆逐することを約束する：

I. : X 27,9 *sām yád váyaṃ yavasādo jánānām ahám yavāda ur<sub>u</sub>vájre antáh | átrā yuktò 'a<sub>a</sub>vasātāram ichād átho áyuktaṃ yunajad vavanvān* 「わたし（インドラ）が、（他の）人々に属する、牧草を食むものたちを、麦を食むものたちを、幅広の野の中で追い集める時には (pres. inj. → I 3.2.1), この時には、つながれた〔馬〕は（綱を）ほどく者を求めることになろう (pres. subj.)。また一方打ち克った者は、つながれていない〔馬〕をつなぐことになろう (pres. subj.)」

I. : X 27,10 *átréd u me maṃsase satyám uktám dvipāc ca yác cátuṣpāt saṃsṛjāni | sribhír yó átra vṛṣaṇaṃ pṛtanyád áyuddho asya ví bhajāni védaḥ* 「一方、まさしくこの時、私によって言われたことを、本当であると君は思うことになろう (aor. subj.)、（即ち）二本足のものと四本足のものを 私が寄せ集めるつもりである／ことになる (pres. subj.)、ということ。この際、女たちと共に雄牛（インドラ）に戦をしかける者があれば (pres. subj.)、この者の財産を、戦わずして私は（他の者たちに）分け与えよう (pres. subj.)」

IV 33,5 : リブ三神（三兄弟）は、工巧神トヴァシュトリが作った盃をより見事なものに作り替えてしまう。当該箇所は、三神それぞれが自分の意志を勝手に言い放っているだけとも考えられるが（その場合独り言 → A 1.1.3）、恐らく各自は他の兄弟たちに向けて意志を伝えることで、自分の能力を誇示しているものと考えられる（「～してみせよう」に近い）。特に *kṛṇavāma* は、一人が他の二人（長男と末っ子）の間を取りなそうとして呼びかけている可能性が高く（勧誘 → A 2 補説 2）、その場合他の二人が互いに意志表明をぶつけ合っていると理解するのが最も適当と思われる：

IV 33,5 *jyeṣṭhá āha camasā dvā karéti kánīyān trīn kṛṇavāmét,y āha | kaniṣṭhá āha catúras karéti tvāṣṭa ṛbhavas tát panayad váco vaḥ* 「（リブたちの中の）最年長の者が言う、『盃を二つに私はしよう (aor. subj.)』と。より年少の者が、『三つに我々はしようではないか (pres. subj.; 勧誘／或いは意志表明 ? → A 2 補説 2)』と言う。最年少の者が言う、『四つに私はしよう (aor. subj.)』と。トヴァシュトリは、リブたちよ、君たちのこの言葉を賞嘆する」

X 28,9 : X 28 は、インドラ (I.) と彼の子 Vasukra (cf. 各論注及び GELDNER ad X 28) との会話。驕り高ぶる V. が、弱い自分でも強力になり得ることを、動物の喩えによって I. に示すが、I. はこれを、別の動物の喩えを用いて諫めている。V. の喩えが、弱者でも強者に勝てるという趣旨であるのに対して、I. のそれは、欲を出すとしっぺ返しを食らうということをしていると考えられる。上の IV 33,5 と同様、意志表明は自分の能力を誇示していると言えるが（＝「～して見せよう」）、恐らくここでは実際に意志を実行することと

は関係無く、能力の誇示そのものを目的として発言していると思われる（→ A 1.2.2 b））：

V. : X 28,9 *śasāḥ kṣurāṃ pratīyāñcam jagārā-* *adriṃ logéna vṛyābhedaṃ ārāt | bṛhāntaṃ cid ṛhaté randhayāni vāyad vatsó vṛṣabhāṃ śúsuvānaḥ* 「野うさぎは、剃刀を逆さまに呑み込んだ (perf. ind.)。巖を、土くれで、遠くから私は砕き割った (aor. ind.)。高大な者をも、弱小の者に私は屈服させよう (pres. subj.)。仔牛は、力をつければ、雄牛を追いかけることになる (pres. subj.)」

I. : X 28,10 : *suparnā ithā nakhām ā siṣāyā-* *avaruddhaḥ paripādaṃ ná simhāḥ | niruddhās cin mahiṣās tarṣīyāvān godhā tasmā ayāthaṃ karṣad etāt* 「鷲は、こうやって（君が言うようにして）爪を絡み付けてしまったのだ (perf. ind.)，取り押さえられて、獅子が足枷（罣）に〔取り押さえられた〕かの如く。喉が渴いている水牛は、押さえ込まれることさえある。大トカゲは、それ（水牛）〔の意〕に反して、（水牛の）この脚を（噛み付いて）引いていく (pres. inj.)」<sup>125</sup>

意志の伝達の用例が比較的少ないのは、RV には会話からなる Sūkta が極めて少ないからであろう。用例の中には、1人称単数が比較的多いことが注目される。これは、次に見る「宣言」の用法では殆どの場合、詩人が祭式という公の場で詩人／祭官全体或いは祭主や一族を代表して発言する（つまり、複数形が使われる）のに対し、会話文での 1人称には個人的な意志のやり取りが多いためと思われる（ただし、III 33,10, X 108,3; 9）。A 1.1.3 の IV 18,2; 3 も比べよ。

### 1.1.2 宣言

RV 讃歌の大部分は、祭式儀礼の場において詩人／祭官が語る言葉であるが、その大部分は、詩人／祭官たちが祭式儀礼の場に神々を呼び寄せ、詩歌によって彼らや彼らの属性を称えたり供物を捧げる代わりに、自分たちの望みを神々に伝えたりそれを叶えるよう要求する、或いは祭主（つまり詩人たちのパトロン）の気前の良さ（報酬の多さ）を誉め称える、といったスタイルを取る。その際詩人は、命令法によって神々に直接命令したり (iptv.)，現在進行中である儀礼行為を報告したり (ind. pres.)，或いは昔に／直前に（正しく）儀礼行為を遂行したということを確認したり (ind. aor., perf. ind.) など、多用な表現方法を用いる。その中の一つに、1人称接続法によって発話時以降（未来）の行為——神々を称える／供物を差し出す／（神々の助けにより）自分たちの望みを達成する、等々——に対する意志や決意の表明がある。この場合の意志表明は、声に出して明言すること自体に特別な重要性を置

<sup>125</sup> 対立、敵意を表わす dat. か？ → 注647。後続詩節も参照：X 28,11 *tébhyo godhā ayāthaṃ karṣad etād*。

くと考えられることから、本論では特に宣言と呼んで他と区別する。以下ではそれが、先に見た伝達や後で見る独り言とどのように異なるかを中心に、意志表明の用例の大半を占める宣言の性質を浮かび上がらせるを試みる。

以下の議論のために、称讃や儀礼の対象として言及される神格等を X、そして 2 人称で表わされる発話の聞き手を Y とすると、まず X = Y の例が挙げられる：

## (a)

I 114,3 *ářiṣṭavīrā juhavāma te havīḥ* 「男子たちを損なうことのない者たちとして（結果の先取り、→ A 1.2.3 c）」、君（ルドラ）への供物を我々は献じよう（pres. subj.）」

I 170,4 *tātrāmṛtasya cétanam yajñám te tanavāvahai* 「そこ（ヴェーディ＝祭場の中央部）において、不死なる君（インドラ）への際立つ祭式を、我ら両者は（自分たちのために）繰り広げよう（pres. subj.）」

VI 59,1 *prá nú vocā sutéṣu vām vīryā yāni cakráthuh* 「さあ、私は宣言しよう（aor. subj.）、君たち両者の（為に）搾られた〔ソーマ〕たちの前で、君たち両者が為した諸々の武勲を」

VI 67,10 *ād vām bravāma satīyāny ukthā nákir devébhīr yatatho mahitvā* 「そこで、君たち両者（ミトラ・ヴァルナ）に我々は言おう（pres. subj.）、真の讃辞たちを：偉大さに関して、決して（他の）神々と君たち両者が競い合うことはない」

VIII 11,5 *mártā ámartīyasya te bhūri náma manāmahe* 「死すべき者たちとして、不死なる君（アグニ）の多くの名前たちを、我々は思念しよう（aor. subj.）」

X 85,22 *úd īrṣvāto viśvāvaso námaseḍāmahe t<sub>u</sub>vā* 「ここから君は立ち去れ、ヴィシュヴァーヴァス（ガンダルヴァの一人）よ。敬礼を伴い、君に我々は頼もう／呼びかけよう（pres. subj.）」

X 124,6 *havīṣ tvā sántam havīṣā yajāma* 「（それ自身）供物である君（ソーマ）を、供物によって我々は祭ろう（pres. subj.）」

(a) の用例は、聞き手である 2 人称に話し掛けていているという点で、先に見た意志の伝達と変わらないようにも見える。しかし、こうした祭式儀礼の場においては、通常神々からの返答があるわけではなく、むしろ詩人が半ば一方的に神格等に話し掛けて、神々がそれに応じているものと仮想しているだけであり、厳密な意味で会話が成立しているとは言い難い。また次の (b) の用例は、(a) と同様の文脈に現れるものの、Y は 3 人称の位置に置かれている：

## (b)

I 103,6 *bhūrikarmane vṛṣabhāya vṛṣṇe satyāśuṣmāya sunavāma sómam* 「多くの行為を為す

猛々しい雄牛（インドラ）に、実現する激昂を持つ者に、ソーマを我々は搾ろう（*pres. subj.*）」

I 159,5 *tád rādho adyá savitúr váreṇīyaṃ vayám devásya prasavé manāmahe* 「サヴィトリの、その望ましい恩恵を、今日、われわれは[その]神の督励のもとに、思念しよう（*aor. subj.*）」

V 56,8 *ráthaṃ nú mārutaṃ vayám śravasyúm ā huvāmahe* 「今、マルトたちに属する戦車を、われわれは呼び寄せよう（*aor. subj.*），名声を求める[それ]を」

VIII 62,12 *satyám íd vā u tám vayám índraṃ stavāma nāṇṭam* 「まさしく真実にかなった（実現する）こととして、われわれは彼を、インドラを称えよう（*pres. subj.*），虚偽としてではなく」

VIII 74,13 *ahám huvāná ārkṣé śrutárvaṇi madacyúti | sárdhāṃśiva stukāvināṃ mṛkṣá śirṣá caturṇāṃ* 「わたしは、呼ばれば（いつでも）リクシャの子、酩酊に揺らぐシュルタルヴァンのもとで（馬の）群れを のように、たてがみ持つ四[頭の馬]の頭を、撫でよう（*aor. subj.*）」（Dānastuti）

X 53,2 *yājāmahai yajñīyān hanta devāñ ídāmahā idīyān ājīyena* 「我々は[自分たちのために]祭ろう、よし、祭式に値する神々を。我々は崇めよう、崇めらるべき[神々]を、塗りバターを用いて」（*yājāmahai ... hanta [... ídāmahai]* ; A 1.3.1 も参照）

X 88,3 *devēbhir n<sub>u</sub>v īṣitō yajñīyebhir agnīm stoṣāṇīy ajāram bṛhāntam* 「今、祭式に値する神々に動かされて、アグニを私は称えよう（*aor. subj.*），歳を取らない背の高い[アグニ]を」

このような場合、もはや詩人と神格等との間に「話し手―聞き手」という明確な関係があるとは言えず、詩人は神々が聞いている／そばににいるという仮想のもと、彼らに聞こえるよう、詩人が自らの意志を声高に宣伝しているという状況の方が実情に近いと思われる。つまり、祭式儀礼における意志表明は、当該神格（X）が聞いていることを前提に発言されている——当該神格に向けられている——ものの、それが必ずしも直接語りかける相手（Y）として 2人称で表現されるとは限らない。重要なのは、発言が X の耳に届くことであり、それが (a) の例のように X=Y として表わされるか（「君（インドラ）を」etc.），或いは (b) のように X が 3人称として表現されるか（「インドラを」etc.）は、個々の詩人や祭式儀礼のスタイルによるものと思われる。それゆえ、聞き手（Y）が明らかな場合であっても、発言自体はそれとは別の X に向けられることもあり得る：

(c)

VIII 91,1 *kaṇīyā vār avāyatī sōmam āpi srutāvidat | āstaṃ bhārantīy abravīd índrāya sunavai t<sub>u</sub>vā śakrāya sunavai t<sub>u</sub>vā* 「娘が水のもとへ降りて行きつつ、ソーマを、進路（道）にお

いて見つけた。家へ（それを）持って行きつつ、彼女は言った、『君を、インドラのために、私は搾ろう（pres. subj.）。君を、力強い〔彼〕のために、私は搾ろう』。

VIII 91 は、少女が自分の体の悩みを解決してもらうために、川辺で見つけたソーマをインドラに捧げる内容の話であるが、彼女は形式上ソーマに話し掛けてはいるものの（*tvā*），事実上の目的は、発言がインドラの耳に届くことであると考えられる。続く第 2 詩節で、インドラが姿を変えて少女の目につくように登場するのは、まさに彼女のこの意図が成功したことを意味する<sup>126</sup>。この例は、宣言においては Y（2 人称）が存在するか否か或いはそれが誰であるか、ということとは関係無く、X の存在が重要であることを示唆している。

また X は、常に特定の神々や祭主を表現するとは限らない。次の（c）の *Dānastuti* の例では、いずれも X（＝祭主）が一般論的表現により不特定の対象として表示されている。しかしながら実際には、話し手は当該祭式の特定の祭主を前にして一般的な心構え（→ A 1.2.2 b））を表明することで、かえって当人のための祭式を行なう意志を強調している（或いは一種のあてつけている？、cf. 各論 X 33,5）と考えられる：

（d）

I 122,12 *etāṃ śārdhaṃ dhāma yāsyā sūrér ity avocan dāsatayasya nāmśe* 『この（マルトたちの）群れを、我々は定めよう（aor. subj.），どんな主人（i.e. 祭主）のものとしても』と、彼ら（詩人たち）は言ったのだ（aor. ind.），十からなる〔食物〕にあり着く時に』

II 30,7 *nā vocāma mā sunotēti sōmam | yō me pṛṇād ... yō mā sunvāntam ūpa gōbhir āyat* 「我々は言うまい（aor. subj.）『ソーマを搾るのを君たちは止めよ』と（は），（誰か）私に贈り物をする者，…〔ソーマを〕搾っている私のそばへ，牝牛たちを伴ってやって来る者（i.e. 祭主）があれば（pres. subj.）」

X 33,5 *yāsyā mā harīto rāthe tistrō vāhanti sādhyā | stāvai sahāsradaḥṣiṇe* 「その者の三頭の黄緑色した〔馬〕たちが，私を戦車の上で真直ぐに運んでいくところの，千〔頭の牛〕を報酬とする〔祭主〕のもとで，私は（神々を）称えよう（pres. subj.）」

これらの事例からは、発言の宛先が一般論として表わされたとしても、実際には特定の X に向けられ得ることが伺える。以上の（c）や（d）の例は、宣言においては、聞き手である 2 人称と、実際の発言の宛先と、そしてそれらが文中でどう表現されるか、という 3 つの要素を別々に考慮しなければならないという、語用論上の複雑さが存在することを示している。

<sup>126</sup> VIII 91,2 *asāu yā ēṣi virakó gṛhām-gṛhām vicākaśad | imāṃ jāmbhasutam piba ...* 「男の子として（の姿をして）家々を一件ずつ見極めて歩いているそこの君（インドラ）は，この（私の）歯で搾られた〔ソーマ〕を飲め。…」

これもまた 2/3 人称接続法の調査結果とともに、接続法の文法機能とは別に再吟味されるべき課題と言えよう。

称讃や儀礼の対象たる X は、自ずと詩節の中味に関与するが多いため、これまでの用例のように文中に表示される（言語化される）ことが多い。しかし当然ながら X は、特定／不特定に関わらず、必ずしも文中に明示されるとは限らない。X の存在は、2/3 人称のいずれであれ、前後の文脈によって示唆されることもあろうし (e)，更には、単にその詩節が特定の神格等に宛てられた Sukta に属しているという状況証拠によってのみ了解されることもある (f)。これらの例は全て、発言の中味に直接 X が関与せず、話し手側の都合だけを一方的に意志表明するような場合に見られる (cf. A 1.2.3 c))：

(e)

I 15,8 *draviṇodā dadātu no vāsūni yāni śṛṇviré | devēṣu tā vanāmahe* 「ドラヴィノードスは我々に与えよ (pres. itpv. 3sg.)，(よく) 聞かれているところの (i.e. 名高い) 財物たちを。神々のもとで、それらを、我々は克ち得よう (aor. subj.)」(X = ドラヴィノードス)

VIII 53,7 *yās te sādhiṣṭho 'avase té siyāma bhāreṣu te | vayāṃ hōtrābhir utā devāhūtibhiḥ sasavāṃso manāmahe* 「君（インドラ）の援助に最もかなう者、君にとってそういう者たちで、我々はあるたい (pres. opt.)，諸々の分捕りにおいて。われわれは〔ソーマの〕献注たちによって、そして神々への呼びかけたちによって、(既に) 勝ち取った者たちとして思考しよう／〔詩歌を〕考え出そう (aor. subj.)」(X = インドラ)

X 19,6 *ā nivarta nī vartaya pūnar na indra gā dehi | jivābhir bhunajāmahai* 「引き返させる者よ、(牛たちを) 君は戻って来させよ。我々に、インドラよ、牛たちを君は返せ。生きている〔牛〕たちを、我々は役立てよう (pres. subj.)」(X = インドラ)

(f)

V 44,10 *avatsārasya sprṇavāma rāṇvabhiḥ śaviṣṭhaṃ vājaṃ vidūṣā cid ārdhīyam* 「アヴァットサーラの、戦好きの〔兵士〕たちによって、我々は手に入れよう (pres. subj.)，最も強大な戦利品を、知っている者によってであればせしめられるべき〔戦利品を〕」(X = 一切神)

IX 41,2 *suvitāsyā manāmahé 'ati sētum durāvīyam | sāhvāṃso dāsyum avratām* 「よき進行について、我々は思念しよう (aor. subj.)，困難な災いを伴う跳び石を越えて、誓いを持たない夷狄を征服した者たちとして」(X = ソーマ)

X 59,2 *sāman nū rāyē nidhimān nāv ānnaṃ kārāmahe sū purudhā śrāvāṃsi* 「旋律において、今、財のために、今、食物を蓄えあるものと、(そして)〔自分たちの〕諸々の名声を、多様に、しかと我々は為そう (aor. subj.)」(X = 諸々の神格)

以上のように、特定の聞き手＝2人称が想定されず、また当該詩節に X が明示されず、話し手側の都合のみを述べるような事例は、祭式儀礼における意志表明の一方通行的な性格をよく表わしていると言えるだろう。ただしこれらは、話し手の個人的な勝手な発言（独り言）を意味する訳ではない。宣言にとっては、あくまで特定の神格、祭主等の耳に届くことに意味があり、上記の (f) のような事例も、神々等が発言の証人として意識されていると考えられるからである。そのため、次節で見るように独り言が単に話し手自身の意志を確認するために発せられ、口に出すか否かは二次的な問題であるのに対して、宣言は声に出すこと自体に大きな重要性を認めていると言えよう。このことは、宣言の用例の中に *prá-brav' /brū* (pres.) ~ *prá-vac* (aor.) 「言葉に出す、公言する」<sup>127</sup> といった、公に発語することそのものを表す動詞が非常に多く見られることから伺える：

- III 55,18 *vīrásya nú s<sub>u</sub>vás<sub>v</sub>iyaṃ janāsaḥ prá nú vocāma vidūr asya devāḥ* 「男子（インドラ？）が、今や良き馬に富む【という】ことを、人々よ、今、我々は宣言しよう（aor. subj.）。神々はそのことを知っている（perf. ind.）」
- IV 20,10 *návyē deṣṇé śasté asmín ta ukthé prá bravāma vayām indra stuvántaḥ* 「新たな贈り物があれば、この言明された君への讃辞の形で、われわれは【その贈り物を／君の武勲たちを】公言しよう（pres. subj.）、インドラよ、【君を】称えつつ」
- IV 32,10 *prá te vocāma vīryā* 「我々は宣言しよう、君（インドラ）の諸々の武勲を」
- IV 58,2 *vayām nāma prá bravāmā ghṛtāsya-asmín yajñé dhārayāmā námobhiḥ* 「われわれは、グリタ（液体バター）の名を公言しよう（pres. subj.）。この祭式において（その名を）我々は保持しよう（pres. subj.）、敬意たちを伴って」
- V 29,13 *yā co nú návyā kṛnāvah saviṣṭha préd u tā te vidátheṣu bravāma* 「片や今、最も力みなぎる者よ、君が為すことになる。（pres. subj.）諸々の新たな【武勲】、それらを君に、諸々の分配（の場）において、我々はまさしく公言しよう（pres. subj.）」
- V 30,3 *prá nú vayām suté yā te kṛtānī-ndra bravāma yāni no jújoṣaḥ* 「われわれは、今、搾られた【ソーマ】の前で、君の為したこと事々を、インドラよ、公言しよう（pres. subj.）、我々の（歌う）それらを、君が喜ぶことになるように（perf, subj.）」
- V 42,6 *marútvato ápratītasya jiṣṇór ájūryataḥ prá bravāmā kṛtāni* 「マルトたちを伴う、手向かい得ない、勝利する、朽ちることのない者（インドラ）によって為されたことたちを、我々は公言しよう（pres. subj.）」

<sup>127</sup> ヴェーダ語では、*brav' /brū* と *vac* とは補完現象（suppletion）を示す。前者からは現在語幹が、その他の語幹（aor., perf., fut., caus. desid., intens.）及び動詞の不定形（inf., gerd., gerdv., nom. ag., vadj.）は全て後者から作られる。派生名詞も、*-bravá-*, *-bruvá-* を除き *vac* から作られる。また、*ah* の perf. 語形（現在の意味；3sg., 2sg., 3du., 3pl. act. でのみ例証）も、この補完現象に部分的に参加する。

## VI 59,1 上掲

X 39,5 *purāṇā vāṃ vīryā prā bravā jáné* 「君たち両者（アシュヴィン双神）の、以前の諸々の武勲を、部族の前で私は公言しよう」、

X 72,1 *devānām nú vayām jānā prā vocāma vipanyāyā* 「神々の諸々の誕生を、今、われわれは宣言しよう (aor. subj.)、昂揚のうちに／を伴って」

X 112,1 *hárṣas,va hántave śūra śátrūn ukthébhiṣ te vīryā prā bravāma* 「奮い立て (pres. iptv.), 勇者（インドラ）よ、敵たちを打ち殺すために。讃辞たちによって、君の諸々の武勲を、我々は公言しよう (pres. subj.)」

以上の考察を考え合わせると、殆どが祭式儀礼の場に見られる宣言の中核的機能は恐らく、誰が（誰〔神々等〕を／に etc.）何をするかということを、明確かつ公に（神々にも人々にも聞こえる形で）言挙げすることにあると思われる。このことは、RV に顕著に見られる、正しく発語された言葉はそれが表わす内容を実現させる霊力（*bráhmaṇ-*）を持つとの思想によって最も良く理解出来よう<sup>128</sup>。詩人は 1 人称接続法によって、自分（たち）が神格その他を、正しく（＝ 効力を持つように）称える／祭る（etc.）意志を持つことを言葉に出して、広く天界の神々や、地上界の人々をその証人たらしめることに、最も大きな重要性を認めていたと言える。宣言の用例が特に Sūkta の最初（第一詩節）に特徴的に見られることとも、そのことに関係していると思われる。つまり「誰が（誰に etc.）何をする」かを宣言することは、その Sūkta 全体を成功させる（効力を持たせる）ために極めて重要な役割を担っていたと言えよう。その際、称える等の動作の対象が神々である場合には、神々を 2 人称に置くよりも（2x: X 112,1 *te vīryā prā bravāma*; VI 59,1 *prā ... vocā ... vāṃ vīryā* [いずれも上掲]）、神々の名前（もしくはそれに準ずる呼称）を明言する形式（神々が 3 人称に置かれる形式）を取ることが圧倒的に多い（13x: 以下参照）ことが注目される。Sūkta の歌い始めには、讃歌や祭式の対象となる神々等が誰／何であるかを实名に出して述べることに、特別な意味が付与されたものと考えられる：

I 62,1 *suṛktībhi stuvatā rgmiyāyā- arcāmārkām náre víśrutāya* 「称えている者（私）のよき讃歌たちによって、讃歌に値する者（インドラ）のために、詩歌を我々は唱えよう、聞こえ広き男のために」

I 166,1 *tán nú vocāma rabhasāya jánmane pūrvam mahitvām vṛṣabhāsya ketāve* 「それを、今、我々は話そう (aor. subj.)、荒々しい一族（マルト神たち）に、雄牛（インドラ）の太古の偉大さを、（彼の）証のために」

<sup>128</sup> 二次文献を含め堂山（2000）及び、注631を参照。

- IV 39,1 *āśúm dadhikráṃ tám u nú śtavāma divás pṛthivyā utá carkirāma* 「俊足のダディクラーを、さあ、この者を我々は称えよう。天と大地のことを、我々は誉め称えよう」
- IV 40,1 *dadhikrávṇa íd u nú carkirāma víśvā ín mām uśásah sūdayantu* 「さて 今 まさしくダディクラーヴァンのことを、我々は誉め称えよう (pres. subj.),
- V 54,1 *prá śárdhāya mārūtāya svābhānava imām vācam anajā parvatacyúte* 「マルトたちからなる自らの輝きを伴う一群に、この言葉を私は塗り飾ろう、山を揺り動かす [一群] に」
- VIII 67,1 *tīyān nú kṣatríyāṃ áva ādityān yāciṣāmahe* 「例の、支配権に与るアディティの子ら (アーディティア神群) に、今、我々は助力を頼もう」
- X 72,1 *devānām nú vayām jānā prá vocāma vipanyáyā* 「神々の諸々の誕生を、今、われわれは宣言しよう (aor. subj.), 昂揚のうちに／を伴って」
- X 89,1 *índram stavā nṛtamaṃ* 「インドラを、私は称えよう、最も男である [彼] を」
- X 94,1 *práité vadantu prá vayām vadāma* 「このもの (石臼) たちは、声を出せ (pres. iptv.). われわれは (も) 声を出そう (pres. subj.)」
- X 97,1 *mānai nú babhrúnām ahám śatām dhāmāni saptá ca* 「思念しよう、今、わたしは、茶褐色の [薬草たち] の百と七つの定位置たちを」
- X 157,1 *imā nú kaṃ bhúvanā siṣadhāmé- ndraś ca víśve ca devāḥ* 「この生類たち (世界) を、今、我々は成就させよう (繁栄させよう) (aor. subj.), [我々と] インドラと一切神たちとが」
- X 165,1 *dévāḥ kapóta īṣitó yád ichán dūtó nīrṛtyā idám ājagāma | tásmā arcāma kṛṇāvāma níṣkṛtiṃ* 「神々よ、鳩が送り出されて、何かを求めて、破滅の女神の使者としてここに来て来たとしたら／としても (perf. ind.), それに対して我々は唱えよう (pres. subj.), 取り消し／回復を我々は為そう (pres. subj.)」
- Cf. I 99,1# *jātavedase sunavāma sómam* 「ジャータヴェーダス (アグニ) のために、ソーマを我々は搾ろう」 (I 99 は 1 詩節だけからなる)

言葉の持つ効力に支配されていた RV の詩人たちにとっては、このように 1 人称接続法によるある種定式化された意志表明の形は、祭式儀礼を円滑に進めるための重要な要素であったと見なすことが出来よう。その一方で、こうした表現は恐らく日常的な場面においても大きな役割を担っていたと思われる。言葉の持つ実現力 (*bráhman-*) の思想、或いは真実語 (*satyavacana-*) の概念 (→ 注 631) が、RV 以降も広くインドの文献に見られる主要概念であり続けたという事実は、接続法という文法範疇が消失した後でも、1 人称接続法の語形が (命令法の一部として) 意志表明の機能とともに生産的なパラダイムを形成し続けたとい

うことと無関係ではないであろう。話し手が意図する事態について、その参加者や動作の影響関係を含む内容を過不足無く発語するという行為が、後の文献においてどのように位置づけられているかということは、今後も広く文献を精査して明らかにする必要がある。また同時に、こうした古代インドの世界観が、2/3人称接続法や他の動詞範疇の機能を理解する際に、また文献内容の理解においても、どのように関わってくるかについても、調査されるべきであろう。

以下、便宜的に宣言の用例を、称讃や儀礼の対象 (X) や 2人称=聞き手 (Y) の有無或いは表示といった観点から、上で議論した (a) ~ (e) に分類する。ただしこれらの区分は、必ずしも明確な場合だけではない。pra-bhav<sup>1</sup>/bhū ~ pra-vac の用例及び Sūkta の第一詩節の用例も含め、既にテキストを出したものについては、箇所番号を挙げるに留める：

(a) X = Y : I 114,3, I 170,4, IV 20,10, IV 32,10, V 29,13, V 30,3, VI 59,1, VI 67,10, VIII 11,5, X 39,5, X 85,22, X 112,1, X 124,6 ; I 16,9 *stāvāma tvā (īndram)*, I 53,11c = X 115,8c *tvām (īndram) stoṣāma*, I 82,1-5 *yōjā ... indra te hārī*, I 94,4 *bhārāma, kṛṇāvāma havīṃsi te (agnēḥ) ... vayām*, II 11,6 *stāvā ... ta indra ... mahāni ... stavāma ... kṛtāni*, II 28,8 *nāmaḥ ... te varuṇa ... bravāma*, III 35,5 *vayām té (īndrāya) # āram ... kṛṇāvāma*, V 41,13 *brāvāma dasmā (marutaḥ)*, VI 16,16 *brāvāni té āgne*, VII 24,6# = VII 25,6# *prā te ... sumatīm vevidāma*, VII 66,12 *tād vaḥ (ādityébhyaḥ) ... manāmahe*, VIII 47,3 *vīśvavedaso (ādityāḥ) varūthyā manāmahe*, VIII 62,4 *kṛṇāvāma ta # indra brāhmāni*, VIII 63,11 *jéśāmendra tvāyā yujā*, VIII 92,27 *āram gamāma te (īndrāya) vayām*, X 9,3 *āram gamāma vo (apāḥ)*, X 39,5 *tā vām (aśvīnā) ... nāvyaḥ ... karāmahe*, X 44,2 *vārdhāma te (īndrasya) ... vṛṣṇyāni* ; 恐らく IX 53,2 [*tvā(sómam)* ?] *stāvā*

(b) X = 3人称 : I 62,1, I 99,1, I 103,6, I 159,5, I 166,1, III 55,18, IV 39,1, IV 40,1, IV 58,2, V 42,6, V 54,1, V 56,8, VIII 22,3, VIII 62,12, VIII 67,1, VIII 74,13, X 53,2, X 72,1, X 88,3, X 89,1, X 97,1, X 157,1 ; I 24,2 *agnér vayām ... mánāmahe ... devāsya nāma*, I 27,13 *yājāma devān*, I 110,6 *ā manīṣām ... nṛbhyaḥ (ṛbhūbhyaḥ) ... srucēva gṛtām juhavāma*, II 16,7 *īndram ... sicāmahe*, III 11,9# *āgne vīśvāni vāryā # ... śaniṣāmahe*, III 32,14 *stāvai ... indram*, IV 21,4 *tām u ṣṭavāma ... indram (→ A 1.2.1 b)*, IV 25,4c = V 37,1d *īndrāya [sómam] sunāvāma*, V 13,2 *agné stómam manāmahe*, V 51,12 *vāyūm úpa bravāmahai*, VI 55,4 *pūṣānam ... úpa stoṣāma*, VII 2,2 *nārāśāmsasya mahimānam eṣām (devānām) úpa stoṣāma*, VII 82,10 = VII 83,10 *devāsya ślókam savitúr manāmahe*, VII 86,7 *āram ... mīdhūṣe (váruṇāya) karāṇy ahám*, VIII 68,13 (Dānastuti) ... *nṛbhya urūm ... pánthāam devāvītim manāmahe*, VIII 95,6 *tām u ṣṭavāma ... indram (→ A 1.2.1 b)*, VIII 96,6 *tām (īndram) u ṣṭavāma (→ A 1.2.1 b)*, IX 97,4 *abhī-ārcāma devān*, X 38,4 *arvāncam indram ... karāmahe*

(c) X ≠ Y : VIII 91,1

(d) X = 一般名詞 (3人称) : I 122,12, II 30,7, X 33,5

(e) X は前後の文脈 (下線部) から了解される : I 15,8, VIII 53,7, X 19,6, X 94,1, X 165,1 ;  
 II 11,6 stāvā ... ta indra pūrvyā ... # utā stavāma nūtanā kṛtāni # stāvā vājram ... # stāvā hārī, V  
 16,5# ... na éhi vāryam # ágne ... ā bhara ... svastī dhāmahe, V 35,8 ... indrēhi ... vayām śaviṣṭha  
(indra) ... śrávo dadhimahi # ... stómam manāmahe, V 50,5 eṣā te deva netā (savitar) # ... iṣastúto  
manāmahe, devastúto manāmahe, V 66,3 tā vām (mītrāvārunā) ... gávyūtim [verb ?] # ... suṣtutīm ...  
manāmahe, V 75,2 atyāyātām aśvinā ... # [vām] ahám sánā, VII 81,5 tād rāsva (2sg.: uṣāh) #  
bhunājāmahai, VII 98,4 yád yodháyāḥ (2sg.: indrah) mahatō mányamānān, sákṣāma tán, VIII 61,11  
nā pāpāso manāmahe ... yád ... índram ... sakhāyam kṛṇávāmāhai, X 2,2 vayām kṛṇávāmā havīṃṣi  
# devó ... yajatv agnīḥ, X 23,6 vidmā ... asya (indrasya) bhójanam ... # [índram] ā ... karāmahe  
 (f) Sūkta 全体によって X が了解されている : V 44,10, IX 41,2, X 59,2 ; I 26,8 svagnáyo  
manāmahe, I 173,1 ārcāma tād (sāma), X 57,3 māno [subándhoḥ] ... ā-huvāmahe, X 77,1 pruṣā  
vāsu

### 1.1.3 独り言

恐らく、一方的発言としての意志表明の性格が最もよく現れているのは、この独り言であ  
 ろう<sup>129</sup>。話し手の目的は、自らの意志を誰かに伝えることでも、公に宣言することでもなく、  
 自身の決意を確認するためだけに発言することである。よって、独り言は必ずしも実際に発  
 語されるとは限らず、単に思考内容として表現される場合も見られるが、本論ではいずれの  
 場合も含めてこの用語で呼ぶ。多くの場合「言う、話す；思う」などの動詞を伴い、しばし  
 ば意志表明の内容が *iti* 「『…』と」でくくられる。独り言は、基本的に話し手個人の内部  
 で起こる現象であるから、単数の用例しか見られない：

IV 18,2; 3 : 第一詩節でインドラを身籠もっている母が、胎内のインドラに通常の産道か  
 ら生まれるよう求めるが、当該詩節で彼はこれを拒否する。ここでの意志表明は母への返  
 答として発せられているとも解釈出来るが（その場合意志の伝達 → A 1.1）、むしろ母胎  
 の中のインドラが勝手に決意を述べているものと想定される。続く第3詩節は、（恐らく脇  
 腹から）生まれたばかりのインドラが、自分を捨てて去って行く母を見ながら、やはり独  
 り言として発語している：

IV 18,2 nāhám áto nír ayā durgāhaitāt tīraścātā pārśvān nír gamāni 「『わたしは、ここ（通  
 常の産道）から出て行くまい（pres. subj.）。諸々の踏み込み難い場所が、ここにある。

<sup>129</sup> Cf. GONDA Moods 103.

横切って、脇腹から私は出て行こう (aor. subj.)』 (同詩節 *Pāda cd yūdhyai, sám ... prchai* については, A 3.1.3 を参照)

IV 18,3 *parāyatīm mātāram ānv acaṣṭa ná nānu gān.y ānu nū gamāni* 「去り行く母の後を、彼は目で追っていた、『決してついては行くまい (aor. subj.)。やはりついて行こう (aor. subj.)』」

上の例では、意志された事態が実際に行為に移されていると理解される。しかし意志表明は基本的に話し手の一方的な発言であるから、発言内容が本当に実現可能であるか否かは余り重要ではない。ただし宣言において、恐らく表明内容が虚偽となることは許されなかったと思われるため、非現実的な意志表明は見られない。しかし独り言は話し手自身の個人的・主観的な発言／思考であるため、実現性が極めて低い、或いは最初から実現性を無視した発言（一種の放言）も起こり得る：

X 34,5：博打打ちの言葉。何度博打から足を洗おうと決心しても、すぐに誘惑に負けてしまう心境が述べられる：

X 34,5 *yād ādīdhye ná daviṣān.y ebhiḥ parāyādbhyó 'ava hīye sākhibhyaḥ | nyūptās ca babhrāvo vācam ākrataṁ émīd eṣāṁ niṣkṛtām jāriṇīva* 「『これら（賽子たち）で私は賭博をすまい (ná + aor. subj.)』 — 私が思いを決めていると、去り行く仲間たちから、私は取り残される。播き入れられた茶色の〔実：賽子〕たちが、言葉を発したとたんに、彼らとの待ち合わせ場所へ私は向かっている、愛人を持つ女が のように」

X 119,9; 10：ソーマを飲んで酔った鳥 (*labá-*：タゲリ、恐らくインドラの変身したもの) が、妄想の中で発言していると思われる：

X 119,1 *íti vā íti me máno gām áśvaṁ sanuyām iti | kuvít sómasyāpām íti* 「私の考えはこう、つまり、こうなのだ、『牛を、馬を、私は勝ち得たい (pres. opt.)』と。『(それとも) 一体、ソーマを私は飲んだかのだろうか』と (私は思う)」

.....

X 119,9 *hántāhām prthivīm imām ní dadhānīhá vehá vā | kuvít sómasyāpām íti* 「『よし、わたしはこの大地を定め置こう、ここに、或いはここに。—— (それとも) 一体、ソーマを私は飲んだのだろうか——』と」 (*hánta ... dadhāni* → A 1.2.1 c) も参照)

X 119,10 *oṣām ít prthivīm ahām jañghānānīhá vehá vā | kuvít sómasyāpām íti* 「『まさに激しく、大地を、わたしは何度も叩き打とう、ここで、或いはここで。—— (それとも) 一体、ソーマを私は飲んだのだろうか——』と」

これらの例は、常に聞き手との関係性の中で用いられる *pres. ind.* や *iptv.* と違い、接続法が基本的に一方通行の発言であることを表わす端的な例と言えよう。こうした性質は、先に見た伝達の用例：X 28,9 *bṛhantaṃ cid ṛhaté randhayāni* 「高大な者をも、弱小の者に私は屈服させよう (*pres. subj.*)」においても認められる。実現性を無視した意志を聞き手に伝えることは、即ち話し手が自らの力を相手に誇示することになる、cf A 1.2.2 b)。

IV 33,5 *āha ... karéti* (2x) (意志の伝達 → A 1.1.1) は、3人の神々がそれぞれ勝手に自分の計画を確認しているのであればここに属する (同詩節 *kṛṇavāméty āha* は勧誘／意志表明いずれの可能性もある → A 2 補説 2)。V 37,1d = IV 25,4c *sunāvāméty āha* 及び I 122,12 *dhāma ... ity avocan* は、発話状況が明らかではないが、いずれも祭式の場面の行為に属するため宣言として判断した (→ A 1.1.2)。

### 補説 1 話し手の義務？

II 接続法の基本機能 a) では、話し手の意志が、2/3人称に向けられる (=2/3人称が主語の) 時には話し手にとっての当為・義務として現れ (「君／彼は～すべし！」)、1人称の時には話し手の意志表明として現れる (「私は～しよう」) という論理的不均衡が生じていることを指摘した。しかし、主文 (非疑問文) における接続法が原則的に話し手の心的態度を吐き出す／言い放つ表現であって、それを報告／説明／記述するもの (「～すべきである」) でないとすれば、1人称接続法に、客観的に見た話し手の義務を表す機能 (「私は～すべし！」) は考え難い。ただし、1人称接続法が「～すべきである」を表わす可能性については、2/3人称も含め従属節や疑問文に及ぶ用例の検討と、願望法の規定や義務を表わす用法 (→ II a)) との関係をも考慮しなければならないため、ここで詳しい議論に立ち入るのは控えたい。しかし少なくとも、1人称接続法のうち話し手の義務の意味が疑われるわずかな用例は、いずれもその解釈を強要するものではなく、全て意志表明として理解可能である：

I 24,1-2 は、AB の *Śunaḥśepa* の物語において、王子に買われて人身祭儀の犠牲にされそうになった *Śunaḥśepa* が、諸神格に助けを求める際に引用される詩節である。I 24,1 は自問文であり、*mānāmahe* には義務の意味が想定される (→ C 1.1)。続く I 24,2 はこの自問に正確に対応する自答であるため、これに対応して、当該詩節の *mānāmahe* にも義務の記述「～すべきである」としての解釈が可能かもしれない。しかし、自問を受けて思い巡らせた結果得られた結論を意志として表明することは極めて自然である。換言すれば、自問は意志表明に至る過程を修辭的に表現するものであり、ここでは答えの意志表明に主眼が置かれていると言えよう：

I 24,1 *kāśya nūnām katamāsyāmṛtānām mānāmahe cāru devāsya nāma | kó no mahyā áditaye púnar dāt pitāraṃ ca dṛśeyaṃ mātāraṃ ca* 「今、誰の、不死なる者たちの中でどの神の、

慶ばしい名前を、我々は思念すべきか (aor. subj.)。誰が我々を、偉大なアディティに返すのか (i.e. 我々を再び解放するのか, aor. inj.)。父と母とを、私は見たい (に会いたい: aor. opt. = prec.)」

- I 24,2 *agnér vayám prathamásyāmṛtānām mánāmahe cāru devāsya nāma | sá no mahyá áditaye púnar dāt pitāraṃ ca dṛśéyaṃ mātāraṃ ca* 「われわれは、不死なる者たちの中で最初の者であるアグニの、慶ばしい名前を、思念しよう (aor. subj.)。彼が我々を、偉大なアディティに返す。父と母とを、私は見たい」

I 173,1-3 では、祭式におけるウドガートリ祭官とホートリ祭官の役割がそれぞれ述べられている。ウドガートリの *gāyat* のみならず、続く第2, 第3詩節では、ホートリの諸々の所作も inj. で表わされているため、全体としては祭式の行程や祭官の任務を一般論として述べていると思われる (HOFFMANN 143f.)。ここでは、*ārcāma* も話し手 (=ホートリ) が自分の任務を義務として述べていると考えることも可能であろう<sup>130</sup>。しかしながら、こうした一般論的発言の中で、話し手たちが自分たちの意志を一般的心構え (A 1.2.2 b)) として表明しているとも、同様に理解可能である<sup>131</sup>：

- I 173,1 *gāyat sāma nabhanṣyaṃ yāthā vér ārcāma tād vāvṛdhānām sāvārvat gāvo dhenāvo barhiṣy ādabdhā ā yāt sadmānaṃ divyāṃ vívāsān* 「割れんばかりの旋律 (サーマン) を (ウドガートリは) 歌う (pres. inj.)、鳥が のように。増大すると、太陽光をもたらすそれを、我々 (ホートリたち) は唱えよう (pres. subj.)、紛れもない、乳出す牝牛たちが、敷き草の上へ、天に属する者 (インドラ) を、座を占める者として、克ち得ようとするように (desid. pres. subj.)」

- 2 *ārcad vṛṣā vṛṣabhiḥ svēduhavyair ... prā mandayūr manāṃ gūrta hótā bhárate máryo mithunā yájatrah* 「雄牛 (インドラ) は、汗水を献供物とする荒ぶる者たち (詩人たち) とともに、唱える (pres. inj.) …。歓喜を求めるホートリは、(インドラの) 熱意に歓迎の意を述べる (aor. inj.)。祭式に値する若武者は、(祭官の) 一組を、自分のもとに寄せる」

- 3 *nákṣad dhótā pári sádma mitā yān bhárad gārbham ā śarādaḥ pṛthivyāḥ | krándad áśvo nāyamāno ruvād gaur antár dūtó ná ródasi carad vāk* 「ホートリが、諸々の座所の回りを進みつつ、(自分の位置に) 至る (pres. inj.)。大地の秋の実りを、彼は持って来る (pres. inj.)。

<sup>130</sup> HOFFMANN 143 n. 73 “Der Sprechende gehört den Hotr’s an, und er wird dadurch veranlasst, deren rituelle Aufgabe als “aktuell” (“wir sollen, haben die Aufgabe”) darzustellen.”

<sup>131</sup> 或いは、見込みの機能が一般論的な使われ方をしているとすれば (II 接続法の基本機能 b) 及び A 3.2), inj. との共存がよりよく説明されよう (*ārcāma* がそもそも inj. 語形である可能性は、語尾の分布から見て低い → I 2.3.2)。ただし、肯定文の 1 人称接続法にその意味が想定される用例は他に見られない

馬は牽かれながら嘶く (pres. inj.)。牝牛は鳴く (pres. inj.)。天地両界の間を、使者が の如く、声が往来する (pres. inj.)」

話し手が自分たちの任務を一般論として記述するか一般的心構えとして表明するかは、基本的に話し手の判断に委ねられており、たとえ他の表現形式が前後で多用されているとしても、それに合わせて理解すべき理由にはならない。以上の二つの事例においても、話し手の義務としての理解は、文脈的に好ましいとは決して言えないため、主文（非疑問文）における1人称接続法に、こうした異例の用法を持ち込む必要は無いと結論付けられる。

## 1.2 意志表明の諸相

### 1.2.1 形式的特徴

#### a) 1 人称代名詞の使用

1人称接続法の話し手＝主語は、しばしば 1人称代名詞 nom. sg. *ahám*, du. *vām*, pl. *vayám* によって表わされる (*vām* はヴェーダ文献中 RV VI 55,1 にのみ例証されている, cf. ŚB *āvām*)。動詞の屈折に加えての主語の過剰な表示は、意志表明の主体が「他ならぬ私／我々」であることを強調するものと思われる。典型的な例として次の III 35,5, V 75,2 は、いずれも異なる祭主たちが神々を取り合う場面 (Saṁsava → 注325) を表わしているが、そこでは他の祭主ではなく、まさに自分たちこそが神々を味方につけるべきことが、1人称代名詞+1人称接続法によって強調されていると言える。また I 159,5 では、後続する命令法においても1人称代名詞 dat. の強い形が用いられており、神々に働き掛けるのも、その見返りを受けるのも彼ら自身であることを主張している：

III 35,5 *atīyāyāhi śáśvato vayám té 'arāṁ sutébhīḥ kṛṇavāma sómaiḥ* 「彼ら（ライバルの祭主たち）を次々と越えて、君はやって来い。われわれは、搾られたソーマたちによって、君に相応しく仕えよう (pres. subj.)」

V 75,2 *atīyāyātam aśvinā tiró viśvā ahám sánā* 「越えて、君たちはやって来い、両アシュヴィンよ、一切の〔歓迎歌〕たちを通り抜けて；わたしが (i.e. 他の祭主たちではなく) [君たちを] 勝ち取ろう (aor. subj.)」

I 159,5 *tád rādho adyá savitúr váreṇīyaṁ vayám devāsya prasavé manāmahe | asmābhyam dyāvāprthivi sucetúnā rayīm dhattam vāsumantaṁ śatagvīnam* 「サヴィトリの、その望ましい恩恵を、今日われわれは [その] 神の督励のもとに、思念しよう (aor. subj.)。われわれに、天・地両界よ、よき注意力をもって、財を、君たち両者は置き定めよ (pres. iptv.)、

財物に富む、百の牝牛を伴う〔財〕を」

意志表明が 1 人称代名詞と共に現れるのは全部で 22 例であるが、うち 19 例が宣言に属する。しかも 19 例中 15 例が Sūkta の最初もしくは最後の 2 詩節に現れることは、讃歌の歌い出し或いは歌い終わりに意志表明の主体を明言することが重要な意味を持っていたことを示唆すると思われる。更に宣言の 19 例中 6 例が、宣言することをそのものを表わす *prá-brav/brū ~ prá-vac* の 1 人称接続法を示すことは、A 1.1.2 で指摘した、誰が何をするかを公に述べることに重きを置く宣言の性質によって、最もよく理解出来よう : IV 58,2 *vayám ... prá bravāmā* ..., X 97,1 *mánai nú ... ahám*, IV 20,10-# *prá bravāma vayám* ..., V 30,3 *prá nú vayám ... bravāma* ..., X 72,1 ... *nú vayám ... prá vocāma* ..., cf. X 94,1 ... *prá vayám vadāma*。

その他 1 人称代名詞及び 1 人称接続法が、当該詩節内でどの位置に現れるかという面も注目される。即ち、1 人称代名詞は Pāda の先頭または末尾に置かれることが多く、またその場合往々にして 1 人称接続法も同様の位置を占める。こうした形式的な特徴も、恐らく意志表明を強調する一形態と考えられるだろう（詩節の Sūkta 内での位置を表わす “#” については略号表を参照；その他の “#” は、ここでは Pāda の切れ目のみを表わし、文の切れ目には “,” を用いる [1x]）：

Pāda／文の先頭 : I 159,5# # *vayám ... manāmahe* #, IV 58,2 # *vayám ... prá bravāmā* ..., VI 55,1 *éhi, vām ... # ... sám sacāvahai* #, VII 86,7-# ... *karāṇy # ahám* ..., VIII 53,7-# # *vayám ... # ... manāmahe* #, VIII 74,13 # *ahám ... # mṛkṣā* ... [cf. IV 18,2 # *nāhām ... nīr ayā* ..., X 2,2 # *svāhā vayám kṛṇāvāmā* ..., X 119,9 # *hántāhām ... # ní dadhāni* ...]

Pāda／文の末尾 : I 94,4 # *bhārāma ... kṛṇāvāmā* ... # ... *vayám* #, VIII 62,12# ... *vayám # indram stavāma* ..., VIII 92,27 # *āram gamāma te vayám* #, X 97,1 # *mánai nú ... ahám* #, X 119,10 ... *ahám # jaṅghānāni* ...

その他の位置 : I 24,2 ... *vayám ... # manāmahe* ..., III 35,5 ... *vayám ... # āram... kṛṇāvāma* ..., IV 20,10-# # *prá bravāma vayám* ..., V 16,5# # *yé vayám yé ca sūráyaḥ # ... dhāmahe* ..., V 30,3 # *prá nú vayám ... # ... bravāma* ..., V 75,2 ... *ahám sánā* #, X 72,1 ... *nú vayám ... # prá vocāma* ..., X 94,1 ... *prá vayám vadāma* #

代名詞の存在と強調表現については、接続法の他の人称においても、また他の動詞範疇においても、総合的な調査が必要である。

#### b) *tām u (...) stavāma*

宣言の用例の中には標記の語の連続が 4 箇所見られるが、以下に述べる理由から、これら

は神々を称讃するための一種の形式化した強調表現であると考えられる。

KLEIN Particle *u* 48–76 によれば、*u* の最も典型的な機能は、関係構文における主文の代名詞に伴って (*sá/tá- u*)、関係代名詞に対する前方指示的な (anaphoric) 関係を強調することである：「先に述べた／そういう、その…」。この場合、通常は関係文が主文に先行するが (*yá- ... sá/tá- u ...*)、主文が先行するタイプ (*sá/tá- u ... yá- ...*) も例証されている。中でも特に、{*tám u* + 「称える、歌う」等の動詞 ... *yá-/名詞*} という、形式的にも意味的にも固定した一連の表現が目立つ、e.g. I 173,5, V 42,11, VI 18,1 *tám u ṣṭuhi* (pres. iptv.) (...) *yáh ...*, VIII 15,1 *tám u abhí prá gāyata* (pres. iptv.) ... *puruhūtám puruṣtutám índram ...*, VIII 92,5 *tám u abhí prārcata* (pres. iptv.) ... *índram*, VII 97,3 *tám u ... bráhmanas pátiṃ gṛñīṣe* (pres. ind.), V 58,1 *tám u ... stuṣé* (pres. ind.) *gaṇám ...*, II 20, 4 *tám u ... stuṣá* (pres. ind.) *índram tám gṛñīṣé* (pres. ind.)。stav/stu の派生名詞が立つ場合もある：I 156,3 *tám u stotāraḥ ...*, VI 10,2 *tám u ... stómaṃ yám ...*; → KLEIN op. cit. 53f., 67f.。これらの定型表現は、詩人が神々を称えることを特別強い語調によって宣言、命令するため、*tám u* を通常とは異なる位置 (i.e. cataphoric な位置, op. cit. 70 + n. 10) に置いた (前置した) ものであると KLEIN は説明する, loc. cit.。

これと同じ現象は stav/stu の pres. subj. でも見られる：*tám u ṣṭavāma*。通常の語順 (*yá- ... sá/tá- u ...*) を示す IV 21,4 に対し、VIII 95,6 及び VIII 96,6 では主文が関係文の前に置かれている (*sá/tá- u ... yá- ...*)<sup>132</sup>：

IV 21,4 *sthūrāsya rāyó bṛható yá íṣe tám u ṣṭavāma vidátheṣu índram* 「堅牢な、高大な財産を意のままにするとところ、そういうインドラを、また、我々は称えよう (pres. subj.)、諸々の分配において」

VIII 95,6 *tám u ṣṭavāma yám gíra índram ukthāni vāvṛdhúḥ* 「その者を、また、我々は称えよう (pres. subj.)、歓迎歌たちが、讃辞たちが (既に) 増大させてあるインドラを」

VIII 96,6 *tám u ṣṭavāma yá imā jajāna víśvā jātāni, y ávarāni, y asmāt* 「その者 (インドラ) を、また、我々は称えよう (pres. subj.)、これら一切の、彼より後に生まれた者たちを生み出したところの [彼を]」

IV 39,1 *āsúm dadhikrām tám u nú ṣṭavāma* 「俊足のダディクラーを、さあ、この者を、また、我々は称えよう (pres. subj.)」も、*sá/tá- u ... yá- ...* のタイプのヴァリエーションと位置づけられる。一般に *u* の位置は文の二番目に固定されているため、文頭は *tám u ...* であり、*āsúm dadhikrām* (acc.) は *tám* を先取りして caesura の前に前置されたものと考えられる<sup>133</sup>。

<sup>132</sup> 以下の訳文では、*u* を「また」の語によって置き換えてある。

<sup>133</sup> よって、例えば VIII 62,12 *satyám íd vā u tám vayám índram stavāma ...* 「まさしく実現することとして、彼インドラを、われわれは称えよう」のような文と混同されるべきではない、→ 各論。

つまり、*tām u ... śtavāma* の構文と、倒置構造とにより、二重に強調が置かれているものと思われる。

神々を称える宣言が特別な強調を受け、固有の定型表現を形成したことは、そのこと自体の重要性を反映するものである。これは同様に定型化した表現、*étā ... stāvāma* etc. の存在によっても裏付けされる、→ A 2.1, 及び各論 I 33,1, VIII 24,19, VIII 95,7, V 45,6 を参照。

### c) *hanta* + 意志表明

1人称接続法は RV で二回、不変化辞 *hanta* と共に用いられ、いずれの場合も話し手が意志決定・決断に至る際の心的衝動を表現するものとして用いられている：「よし、～しよう／するぞ！」。そのため、RV X 119,9 や後の散文文献にも散見されるように、独り言の用例に伴うことが多いが、RV X 53,2 のように宣言に伴う場合もある。*hanta* は本来、動詞 *han* 「打つ、殺す」の pres. iptv. 2pl. act. であったと考えられるが<sup>134</sup>、RV では既に上記の意味の間投詞的な役割を担っている<sup>135</sup>：

X 119,9 *hantāhām pṛthivīm imām ní dadhānīhá vehā vā | kuvīt sómasyāpām iti* 「『よし、わたしはこの大地を定め置こう (pres. subj.), ここに、或いはここに。—— (それとも) 一体、ソーマを私は飲んだのだろうか——』と」

X 53,2 *yājāmahai yajñīyān hanta devān idāmahā idīyān ājīyena* 「我々は [自分たちのために] 祭ろう (pres. subj.), よし、祭式に値する神々を。我々は崇めよう (pres. subj.), 崇めらるべき [神々] を、塗りバターを用いて」

*hanta* + 1人称接続法は AV 以降も多く例証されており、特に散文文献以降は必ず動詞にアクセントを伴い (ŚB), また *hanta* の位置も文頭にほぼ固定されている：#*hanta* ... 1人称接続法 [アクセント有]<sup>136</sup>。これに対して RV の用例では、動詞はアクセントを伴わないか (X 119,9 *dadhāni*), アクセントの有無が決められないか (X 53,2 *yājāmahai* : Pāda の先頭) のいずれかであり (HETTRICH 166 n. 38), また文中における位置も比較的自由である

<sup>134</sup> DUNKEL IE hortatory \*éy, \*éyte (MSS 46) 56, 71 n. 50, 51. 少なくとも *han* の root-aor., root-pres., nasal pres. の iptv. 2pl. act. は、印欧祖語の段階で Vollstufe から作られていた, cf. WATKINS Idg.Gram. 33f., OETTINGER Stammbildung 97 + n. 24, 141, HOFFMANN Aufs. 365 (更に DUNKEL op. cit. 78 Addendum I に参考文献)。 *hanta* がヴェーダ語の *han* のパラダイムから切り離されて独自の発展を遂げた一方で (THIEME Fremdling 2f.), *hantana* (= heth. *ku-en-ten* < uridg. \*g<sup>wh</sup>én-tene, OETTINGER op. cit. 96) 及び *hatā* (二次的に Nullst. から) が通常の iptv. 2pl. act. として用いられた。

<sup>135</sup> DELBRÜCK 22 は, ŚB XI 4,1,2 *hantainam brahmōdyam āhvāyāmahā iti* 「よし、当人をブラフモーディア (祭官どうしの論戦) へと、我々は呼び寄せよう」に関して、*hanta* の後ろに文の区切れが入り得ないことから (*enam* から文が始まることは無い), *hanta* が他の文要素と同様に理解されることを指摘している。

<sup>136</sup> またウパニシャッドでは, subj. 1sg. (正確には既に iptv. 1sg.) の代わりに future 1sg. も見られる, e.g. KaṭhU V 6 *hanta ta idam pravakṣyāmi*。

(X 53,2 *yājāmahai ... hānta*)。つまり RV の *hānta* + 1人称接続法は、散文文献に見られるような定型表現化の前段階を示している。ただし、既に RV の時代から、*hānta* がしばしば「決意」とともに用いられたであろうことは、次の二つの用例からも推察される。これらの用例では、*hānta* だけで話し手の何らかの決意を表していると考えられる：

VIII 80,5 *hānto, nú kím āsase prathamām no rátham kṛdhi | upamām vājayú śrávaḥ* 「よし、さてそれでは〔行こう〕——何と、君（インドラ）は座っているのか<sup>137</sup>。我々の戦車を、最前（列）に君はもたせ。戦利品を得る名声は、最上のものである」

AVŚ XI 8,22 *nindās ca vā ānindās ca yac ca hāntéti néti ca | śáriram śraddhā dākṣiṇā-śraddhā cānu prāviśan* 「諸々の中傷と中傷しないことと、『よし [しよう]』と〔思う〕ことと『[す] まい』と〔思う〕ことと、（祭官への）信頼、（つまり、祭官への）報酬、そして非信頼とが、体の中に後から入り込んだ」

VIII 80,5 の文の切れ目は *hānto nú # kím āsase* である<sup>138</sup>。当該 Sūkta では、詩人がインドラを急き立てて、自分たちを助けて戦車を前進させるよう彼に要求している<sup>139</sup>。先行（第4詩節）の要求に基づき詩人たちが進もうとしたところ、インドラがまだ（何もせず）座っているものと考えて、催促しているのであろう。*hānto nú* には、「よし、さてこれから〔前進しよう（\**prā-ayāma* etc.）〕」などの動詞的意味が了解されていると思われる。AVŚ の用例では、肯定的な決意と否定的な決意一般が、それぞれ *hānta*, *ná* だけによって表わされており、*yac ca hāntéti néti ca* は「意図することと意図しないこと／望むことと望まざること」を意味する表現と思われる。それぞれ、1人称接続法を伴った用例に比べられよう：X 119,9 *hānta ... ní dadhāni*, X 53,2 *yājāmahai ... hānta* :: IV 18,2 *nāhām ... nír ayā*, X 34,5 *ná daviṣāṇi* (*ná* + 1人称接続法について、またそれに対して聞き手が発する *ná* についても、A 1.2.4 を参照)。

### 1.2.2 行為の実現時期

表明された話し手の意志は、発話の直後から遠い未来に至るまで、任意の未来時をその実現（実行）時期として想定し得る。場合によっては、その意志が後で実行されていることが

<sup>137</sup> *kím ...* は、聞き手への驚きや非難を表している、ETTER 126。

<sup>138</sup> *hānto nú* を疑問文 (*kím āsase*) の中に含める (HETTRICH 166 n. 38) のは無理と思われる（その場合には、*u nú* は疑問詞に後続する、cf. II 29,3 *kím ū nú ...*）。

<sup>139</sup> 或いは、インドラの助力に確信を持ち得ていないことの表現とも解釈できる、cf. VIII 80,3 *kím aṅgá radhracódanah sunvānāsyāvitéd asi | kuvít sāv indra naḥ sákah* 「いったい、くじけた者を駆り立てる者で、〔ソーマを〕搾っている者の他ならぬ助力者で、君はあるのか。果たして、インドラよ、しかと我々を〔助力することが〕君は出来るのだろうか」、4 *indra prá no rátham ava paścāc cit sántam adrivaḥ | purástād enam me kṛdhi* 「インドラよ、我々の戦車を助けて前へ進めよ、たとえ（それが）後方にあるとしても、石を持つ者よ。私のために当の〔戦車〕を、前方へ出せ」。

記述されている、もしくは了解出来る事例も見られる。ただしそうした例は、ある程度の実現可能性を伴う宣言の例にのみ見られ、一方的発言——それゆえ実現性を無視した発言——の性格が強い独り言では見られない。

#### a) 行為に直接先立つ意志表明

宣言において意志表明された行為（話す／称える）は、同詩節内で直後に実行されていると考えられる：

VI 16,16 ... *brāvāṇi té 'āgna itthétarā girāḥ | ebhír vardhāsa indubhiḥ* 「君に、私は言おう（pres. subj.）——：アグニよ、他の歓迎歌たちはこういう風である（＝ライバル詩人たちの歌は取るに足らないものである）。ここにある（＝我々の）[ソーマの] 滴りたちによって、君は増大すべし（pres. subj.）」

V 42,6 *ājūryataḥ prā bravāmā kṛtāni | ná te pūrve maghavan nāparāso ná vīryaṃ nūtanah kās canāpa* 「朽ちることのない者（インドラ）によって為されたことたちを、我々は公言しよう（pres. subj.）——：太初の者たちも、有能な者よ、後に続く者たちも、今の如何なる者も、決して君の武勇に到達してはいない」

VIII 62,12# *satyām id vā u tām vayām indram stavāma nāṇṛtam | mahāṃ āsunvato vadho bhūri jyōtiṃṣi sunvató bhadrá indrasya rātāyah* 「まさしく真実にかなった（実現する）こととして、われわれは、彼インドラを称えよう（pres. subj.），虚偽としてではなく——：大いなる兵器が[ソーマを] 搾らない者にはあり，[ソーマを] 搾る者には，沢山の光たちがある。インドラの贈り物たちは，幸あるものである」

[更に V 41,13 *brāvāma ... āva yanti kṣubhā mātām ānuayatām vadhasnāiḥ*, VI 67,10 ... *bravāma satyāni ukthā nākir devébhīr yatatho mahitvā*]

称える、献ずるなどの動作が宣言される場合、一般論的性質が特別明確でない限り、大抵は当該祭式儀礼の場で後で行なうことを意志表明していると言える。これが特に顕著なのは、宣言が *nú* 「今（から）、さあ（これから）」を伴う場合であろう。これは特に、Sūkta の第一詩節（ないし最初の方）に現れることが多く（cf. A 1.1.2），その場合、直後に続く諸詩節そのもの（Sūkta 全体）が、意志された行為の実行にあたりと考えられる：

IV 40,1 *dadhikrāvṇa id u nū carkirāma* 「さて、今（これから）、まさしくダディクラーヴァンのことを、我々は誉め称えよう（pres. subj.）」

VIII 67,1 *tīyān nū kṣatṛíyāṃ āva ādityān yāciṣāmahe* 「今（これから）、例の、支配権に与るアディティの子らに、助力を我々は頼もう（aor. subj.）」

X 72,1 *devānāṃ nū vayām jānā prā vocāma vipanyāyā* 「神々の諸々の誕生を、今（これから）、

われわれは宣言しよう (aor. subj.), 昂揚のうちに／を伴って」

X 88,3 *devébhīr nāv īṣitō yajñīyebhīr agnīm stoṣāṇy ajāram brhāntam* 「今、祭式に値する神々に動かされて、アグニを私は称えよう (aor. subj.), 歳を取らない背の高い [アグニ] を」  
[更に I 166,1 *tān nū vocāma ... mahitvām vṛṣabhāsya (indrasya)*, II 11,6 *stāvā nū ... pūrvyā [kṛtāni]*, III 55,18 *vīrāsya (indrasya) nū svāśvyam ... prā nū vocāma*, V 30,3 *prā nū ... yā te kṛtāni ... brāvāma*, VI 55,4 *pūṣāṇam nū ... ūpa stoṣāma*, X 157,1 *imā nū kaṁ bhūvanā siṣadhāma*]

*adyā* 「今日、本日」を伴う場合、もう少し広い時間幅を見込んだ意志表明であると思われる：「今日のこの儀礼の場で」：

X 38,4 *tām vikhādē sāsnim adyā śrutām nāram arvāṅcam indram āvase karāmahe* 「その繰り返し勝ち取る、聞こえ高い男を、熾烈な戦いにおいて、今日、インドラを、助力のために、こちらへ我々は向けよう (aor. subj.)」

V 13,2 *agnē stómam manāmahe sidhrām adyā divispṛśaḥ | devāsya draviṇasyāvah* 「アグニの前で、成功する頌歌を、我々は考え出そう (aor. subj.), 今日、天に触る (i.e. 天に届く) 神 (アグニ) への [頌歌] を、家財を求める者たちとして」

VII 66,12 *tād vo adyā manāmahe sūktāiḥ sūra údite* 「それを、君たち (アーディティヤ神群) のために、今日、我々は考え出そう (aor. subj.), 讃歌たちによって、太陽が昇った時に」

一方、意志された行為の遂行が Sukta の最後で明言される場合も見られる。その場合、意志表明—実行の関係が明らかである：

X 39,5 *purāṇā vām viriyā prā bravā jāné- 'atho hāsathur bhiṣājā mayobhūvā | tā vām nū nāvyaṁ āvase karāmahe* 「君たち両者の以前の諸々の武勲を、部族の前でわたしは公言しよう。さらにまた、喜びとなる医者で [も] 君たち両者はあった。その君たち両者を、今 (我々への) 助力のために、新たな状態に我々はなそう」

⇒ 14# *etām vām stómam aśvināv akarmā- 'ataksāma bhṛgavo ná rátham* 「君たち両者へのこの頌歌を、両アシュヴィンよ、(今まさに) 我々は作った (aor. ind.), (今まさに) 我々は形作った (aor. ind.), プリグ [族の者] たちが戦車を の如く」

I 82,1d *yóḥ nāv indra te hārī* 「さあ、インドラよ、君の両ハリたち (インドラの戦車を牽く二頭の馬) を、私は繋ごう」, 2d *yóḥ nv ...* 「さあ、インドラよ、…」, 3d *yóḥ nv ...*, 4d *yóḥ nv ...*, 5d *yóḥ nv ...*

⇒ 6# *yunājmi te brāhmaṇā keśinā hārī* 「*brāhmaṇ-* (言葉の霊力) よって、(今ここに) 私は繋ぐ (pres. ind.), たてがみ持つ君の両ハリたちを」

次の神話の場面では、話し手の意志内容が後に実現されたことは物語の記述から明らかである：

IV 18,2 *nāhām āto nīr ayā durgāhaitāt tiraścātā pārśvān nīr gamāni* 「『わたしは、ここ（通常の産道）から出て行くまい（pres. subj.）。諸々の踏み込み難い場所が、ここにある。横切って、脇腹から私は出て行こう（aor. subj.）』」

⇒ 3 *parāyatīm mātāram ānv acaṣṭa nā nānu gāny ānu nū gamāni* 「去り行く母の後を、彼は目で追っていた、『決してついては行くまい（aor. subj.）。やはりついて行こう（aor. subj.）』」（恐らく、「ここ」からは出ずに、脇腹から誕生したと思われる → A 1.1.1）

IV 33,5 *jyeṣṭhā āha camasā dvā karēti ... kaniṣṭhā āha catūras karēti ...* 「（リブたちの中の）最年長の者が言う、『盃を二つに私はしよう（aor. subj.）』と。…最年少の者が言う、『四つに私はしよう（aor. subj.）』と。…」。

⇒ 6 *satyām ūcur nāra evā hi cakrūr* 「男たち（リブたち）は本当のことを言った（perf. ind.）。そのように、彼らはしたのだから（perf. ind.）」（→ 注351）

VIII 91,1 *indrāya sunavai tūvā* 「インドラのために、君（ソーマ）を私（アパーラー）は搾ろう（pres. subj.）」

⇒ 2 *asáu yā eṣi virakó gṛhām-gṛhām vicākaśad | imām jāmbhasutam piba ...* 「男の子として（の姿をして）家々を一件ずつ見極めて歩いているその君（インドラ）は、この（私の）歯で搾られた「ソーマ」を飲め」（A 1.1.2；注126）

#### b) 一般的心構え（繰り返し有効な意志の表明）～条件付き心構え

意志表明が上記 a) よりも比較的遠い未来を対象にすることも論理的には当然可能であるが（「明日～しよう／1年後～しよう／いつの日か～しよう」etc.），RV では、恐らく内容的な制約から、そうした用例は見られない。これは恐らく、話し手の強い意志作用にはある程度具体的な時と内容とが前提になっているからであろう。意志表明が遠い未来をも表わし得るのは、特定の（一度的な）未来時を想定するのではなく、むしろ未来全般を対象とする場合である。話し手は、特定の時に縛られず、いつでも行為に及ぶ用意が出来ていること或いは意志が何度でも繰り返し有効であることを表すことから、これを一般的心構えと呼ぶことが出来る<sup>140</sup>（HOFFMANN 253 “allgemeine Bereitschaft”）。典型的な例として次の3例が挙げられる：

II 28,8 *nāmaḥ purā te varuṇotā nūnām utāparām tuvijāta bravāma* 「敬意を君に、ヴァルナよ、

<sup>140</sup> 見込みの機能が一般論を表わし得ることと比べよ → II 接続法の基本機能 b)；3.2。

以前に、そして今も、そしてこれからも、生まれつき強力な者よ、我々は述べよう (pres. subj.)」

VII 24,6# = VII 25,6# *evā na indra vār̥yasya pūrdhi prā te mahīm sumatīm vevidāma | īṣam pinva maghāvadbhyaḥ suvīrām yūyām pāta sāvastībhiḥ sādā naḥ* 「こうして、インドラよ、望ましいものの [中から]、我々に君は与えよ (aor. iptv.)。君の偉大なよき思考を、我々は繰り返し見出そう (intens. pres. subj.)。よき勇者に富む滋養を、有力者たちのために、君は膨らませよ (pres. iptv.)。きみたちは、諸々の安全さによって、いつも我々を護れ (pres. iptv.)」

X 28,9 *śaśāḥ kṣurām pratīyāncam jagārā- adriṃ logēna vāy ābhedaṃ ārāt | bṛhantaṃ cid ṛhatē randhayāni vāyad vatsó vṛṣabhām śūśuvāna[h]* 「野うさぎは、剃刀を逆さまに呑み込んだ。巖を土くれで、遠くから私は砕き割った。高大な者をも、弱小の者に私は屈服させよう (pres. subj.)。仔牛は力を付ければ、雄牛を追いかけることになる (pres. subj.)」

II 28,8 は現在と未来全般（或いは過去も？→各論）に対して「述べる」心構えがあることを宣言しており、また VII 24,6 では、intens. の使用や Sūkta の最終詩節という位置からも（→ A 1.2.2 c））、未来において繰り返し有効な意志を表明していると解される（後続の iptv. + *sādā* も参照）。X 28,9 は驕り高ぶるヴァスクラ（インドラの息子）のインドラに対する発言であるが（→ A 1.1.1）、ここでは話し手が未来において実際に意志内容を実行することは殆ど意識されておらず——未来という時の概念は薄れており——、むしろインドラに自分の心構えを伝えること自体を、ひいては自らの能力を誇示することを目的として発言されていると考えられる。独り言の用例に顕著に見られたように、意志表明が基本的には発言内容の実現性の有無とは関係無しに用いられることを、よく表わしていると言えるであろう。

また、文の構成要素の一つが不特定の実体一般を表わす場合にも、同様の解釈が成り立つ。限定的関係節はしばしば、先行詞を個別に特定化するのではなく、ある限定が当てはまる対象全般を表わすことがある：「…するところの、そういう者（物）は…」⇒「…するような者（物）がいれば（あれば）、彼（それ）は必ず／いつでも…」その際、関係節・主節ともに接続法が用いられることが多く、主節に置かれた意志表明は一般的心構えを表わす (cf. 格言的複文 → II 接続法の基本機能 b) 及び 3.2) <sup>141</sup>：

I 122,12 *etām śārdham dhāma yāsya sūrér* 「この（マルトたちの）群れを、我々（祭官たち）は置き定めよう (aor. subj.)、（誰であれ）主人 (i.e. 話し手を雇う祭主) [となる人] の

<sup>141</sup> Cf. GONDA Moods 96f.: “the rel. clause usually precedes, the main clause containing another subj. serving to make known the speaker’s wish or the inevitability of the occurrence.”

ものとして」＝「…我々は置き定めよう、どんな主人（祭主）であっても、彼のものとして／どんな主人のものとしても（＝ \*yásya kásya ca sūrér）」

X 33,5 *yásya mā harító ráthe tísró váhanti sādhyá | stávai sahásradakṣiṇe* 「（誰であれ）その者の三頭の黄緑色した〔馬〕たちが、私を戦車の上で真直ぐに運んでいくところの、千〔頭の牛〕を報酬とする〔祭主〕のもとで、私は（神々を）称えよう（pres. subj.）」＝「運んでいくような…〔祭主〕がいれば、（いつでも）私は…称えよう」<sup>142</sup>

X 165,1 *dévāḥ kapóta iṣitó yád ichán dūtó nírṣtyā idám ājagāma | tásmā arcāma kṛṇávāma níṣkṛtiṃ* 「神々よ、鳩が、破滅の女神の使者として送り出されて、（何であれ）それを求めてここにやって来たところのもの、それに対して我々は唱えよう（pres. subj.），取り消し／回復を、我々は為そう（pres. subj.）」＝「鳩が…何かを求めてここにやって来たとしたら／としても、それに対して我々は唱えよう…」

[II 30,7 ... ná *vocāma* ... *yó me pṛṇād yó dādad yó nibódhād* *yó ... āyat* 及び X 27,10 ... *yó átra ... pṛtanyād* ... *ví bhajāni* については以下参照]

X 33,5 では、*sahásradakṣiṇe* が既に特定の祭主のことを、また X 165,1 では事実上 *yád ... tásmā* が「死」のことを指している可能性がある：「…ところの、例の人／もの」；それぞれ各論を参照。しかしこうした文脈にも関わらず、形式上は一般論的な表現を使うことで、かえって特定の人やものを強く暗示しているとも考えられる。以上の3例の関係節は、以下に見る副詞節・句などと同様に、意志が有効となるための限定（時や条件）を表わすようにも見える。しかしながら、限定的関係節は主節からは不可分の構成要素であり、その意味で、意志表明は本来的に不特定の要素を内包していると言える。そのため文全体は時や条件を持たない一般的心構えとして理解される。

一方、一般的心構えは否定文においても見られる。その場合、話し手の意志性が未来全般に亘って否定されることから、極めて強い決意を表わされることになる、cf. I 3.2.1 (3)。既に見た次の博打打ちの言葉（A 1.1.3）からは、「金輪際二度と博打をすまい」といった強い否定的決意を読み取ることが出来よう<sup>143</sup>：

X 34,5 *yád ādīdhye ná daviṣāṇy ebhiḥ parāyādbhyó 'āva hīye sākhibhyaḥ | nyūptās ca babhrāvo vācam ākrataṃ émīd eṣāṃ niṣkṛtām jārīṇiva* 『『これら（賽子たち）で私は賭博をすまい（ná + aor. subj.）』— 私が思いを決めていると、去り行く仲間たちから、私は取り残される。播き入れられた茶色の〔実：賽子〕たちが、言葉を発したとたんに、彼らとの待ち合わせ場所へ私は向かっている、愛人を持つ女が のように』

<sup>142</sup> 或いは *sahásradakṣiṇe* によって既に特定の祭主を暗示しているとも考えられる → 各論。

<sup>143</sup> その際のアオリスト語幹の意味については II 総論への補説 1) 参照。

[II 30,7 ... *ná vocāma* については以下参照]

以上の例は、程度の差こそあれ、漠然と未来全般或いは不特定の未来を表わす場合である。しかしこうした例は比較的少ない。大抵の場合話し手の心構えは、不特定ながらも一定の時や条件によって限定されている。話し手の意志がある一定の枠組みの中でのみ有効であることから、これを条件付き心構えと呼ぶことが出来る。その際、時や条件の提示には様々な文法的手段が用いられる。従属節が使われる場合には、主節・従属節ともに接続法が用いられることが注目される：

<副詞的要素による>

I 94,4 *bhārāmedhmām kṛṇāvāmā havīṃsi te citáyantaḥ pārvanā-parvanā vayām* 「焚き木を、我々は運ぼう (pres. subj.)。君への供物たちを、われわれはつくろう (pres. subj.)、節目(新月・満月)ごとに、気を付けながら」(時の instr. の Āmreḍita)

IV 20,10 *nāvyē deśnē śastē asmīn ta ukthē prā bravāma vayām indra stuvāntaḥ* 「新たな贈り物があれば (その度に)、この言明された君への讃辞の形で、われわれは [その贈り物を / 君の武勲たちを] 公言しよう (pres. subj.)、インドラよ、[君を] 称えつつ」(loc. [absol.])

VIII 74,13 *ahām huvānā ārkṣē śrutārvaṇi madacyūti | śārdhāṃsiva stukāvīnām mrkṣā śirṣā caturnāām* 「わたしは、呼ばれれば、リクシャの子、酩酊に揺らぐシュルタルヴァンのもとで(馬の)群れを のように、たてがみ持つ四[頭の馬]の頭を、撫でよう (aor. subj.)」(aor. ptcple.)

[場合によっては VI 59,1 *prā nū vocā sutēsu vām vīryā* (loc. pl.) も? ; 但し各論参照]

<接続詞節(条件節)による>

I 27,13c#(l) *yājāma devān yādi śaknāvāma* 「神々を、我々は祭ろう (pres. subj.)、もし我々に出来るなら (いつでも) (pres. subj.)」

VII 98,4 *yād yodhāyā mahatō mānyamānān sāksāma tān bāhūbhiḥ śāśadānān* 「もし [自分たちを] 偉大であると思っている者たちを、君が(我々と)戦わせることになるなら (pres. subj.)、我々は征服しよう (aor. subj.)、腕々を驕っているその者たちを」

X 27,2 *yādīd ahām yudhāye samnāyān,y ādevayūn tanvā śūsujānān | amā te tūmraṃ vṛṣabhām pacāni* 「もしもわたしが、神々を求めない、いきり立っている者たちを、戦うために連れ集めることになるなら (pres. subj.)、家で肉付きのいい牡牛を、君に私は調理しよう (pres. subj.)」

X 108,3cd *ā ca gāchān mitrām enā dadhāmā- āthā gāvām gópatir no bhavāti* 「彼(インドラ)がやって来るなら (pres. subj.)、契約を、当人と我々は定めよう (pres. subj.)。そうすれば、我々の牛たちの牛の主人に、彼はなるであろう (pres. subj.)」

[更に III 32,14 *vivéṣa yān mā dhiṣāṇā jajāna* (perf. ind.) *stávai* (pres. subj.) ... *índram*]

<関係節による>

II 30,7 ... *ná vocāma mā sunotéti sómam | yó me pṛṇád yó dádad yó nibódhād yó mā sunvántam úpa góbbhir áyat* 「我々（祭官）は言うまい (aor. subj.) 『ソーマを搾るのを、君たちは止めよ』と（は）、私に贈り物をするであろう者 (pres. subj.), 与えるであろう者 (pres. subj.), [私に] 気付くであろう者 (pres. subj.), [ソーマを] 搾っている私のそばへ牝牛たち（＝報酬）を伴ってやって来るであろう者 (祭主) があれば (pres. subj.)」

<副詞的要素 + 関係節による>

X 27,10 *sribhír yó átra víṣaṇam pṛtanyād áyuddho asya ví bhajāni védaḥ* 「（誰であれ）この際，女たちと共に，雄牛（インドラ＝話し手自身）に戦をしかける者がいれば (pres. subj.)，この者の財産を，戦わずして私は（奪って人に）分け与えよう (pres. subj.)」

II 30,7 の関係節は先行詞を修飾するという機能を離れ（かかるべき先行詞を持たず），それ自体が独立して条件節を表わしている。その意味で従属接続詞による条件節に近い，cf. B 2.2.1。X 27,10 の限定的関係節は，先に見た一般的心構えを表わす関係文が，*átra* という特定の時の枠組みによって限定された例と見る事が出来よう。

なお，A 1.2.3 b)；c) に多く見られるように，先行する命令文が，事実上後続の意志表明の条件として解釈され得る場合もあろう。しかし，A 1.2.3 b) の命令文は交換条件としての要求であり，A 1.2.3 c) のそれは意志表明の内容を命令に言い換えたものとして理解される。つまりいずれの場合も，意志表明と命令法との間に明確な前後関係——命令の実現が契機となって初めて意志表明が有効となる——の性質が明瞭ではない（少なくともそれを見分けるのは難しい）。よってここでは，それらを条件付き心構えの表現としては含ず，その可能性を指摘するにとどめる，cf. A 3.2 b)：命令法 + *ádha* + 1 人称接続法（条件付き見込み）。A 3 補説 3 の議論も参照。

これら条件付き心構えの中には，「条件—意志の実現」を一度きりのこととして捉えるものと，当該条件が整えば何度でも意志が有効となることを表わす場合とが見られる。前者には恐らく X 108,3, VIII 74,13, X 27,10 が，後者には I 27,13, II 30,7, I 94,4, IV 20,10 が属すると思われる。しかし，全ての用例を文脈からいずれかに決定することは必ずしも可能ではない。むしろ，時や回数に関係無く用いられること自体が，意志表明の一般論的心構えの性質を表わしていると言えるであろう。

#### c) Sūkta の最終詩節における意志表明

これまでに見た用例は，発話時点より後のことについて用いられるものであるが，これ

ら——特に Sūkta の最初に直後の行為（讃歌を歌うこと）を宣言する場合（→ 当節 a）——とは対照的に、Sūkta の最終詩節（或いは最後から二番目）に現れる一連の意志表明がある。これはそれまでに述べてきた讃歌を最後に再確認して、表明し直す機能を持つ可能性がある：「以上述べてきたように、ここでもう一度私は称えよう」etc.。つまりその場合、行為自体はそれを発言することそれ自体によって遂行されていることになる：Koinzidenzfall → I 3.2 (3) <sup>144</sup>。HOFFMANN 251ff. は、ヴェーダ語では aor. inj. 1sg. がこの機能領域を担うことが明らかにしたが、これと同じことが1人称接続法によっても表現可能であると思われる、cf.（表彰式で）「君の勇気をここに称えます／君の勇気をここに称えよう」<sup>145</sup>。次の二例はこの可能性を示唆するものである：

I 53,11# *yá udṛci<sub>nd</sub>ra devágopāḥ sákhāyas te śivátamā ásāma | tvā<sub>a</sub>m stoṣāma t<sub>u</sub>váyā suvīrā drāghiya áyuh pratarām dádhanāḥ* 「[唱え] 終わりに、インドラよ、神々を牛飼いとする、君の最も幸ある盟友たちで、我々があるように（pres. subj.）、きみを、我々は称えよう（pres. subj.）、君によって、よき男子に富み、[自分たちの] 命をより先へ延長させつつ」

I 159,5# *tád rādho adyá savitúr vāreṇyam vayām devāsya prasavé manāmahe | asmábhyam dyāvāprthivi sucetúnā rayīm dhattam vāsumantam śatagvīnam* 「サヴィトリの、その望ましい恩恵を、今日、われわれは[その] 神の督励のもとに、思念しよう（aor. subj.）。われわれに、天・地両界よ、よき注意力をもって、財を君たち両者は置き定めよ（pres. iptv.）、財物に富む、百の牝牛を伴う[財]を」

III 11,9# *ágne víśvāni vāryā vājeṣu saniṣāmahe | t<sub>u</sub>vé devāsa érire* 「アグニよ、一切の望ましいものたちを諸々の競争において、我々は勝ち取ろう（aor. subj.）。神々は、君のもとに[それらを] 移動させてある（pres. ind.）」

いずれも Sūkta 最終詩節であるが、最初の2例ではそれぞれ I 53,11 *udṛci* (loc.), I 159,5 *tád rādho*（前方指示代名詞）、*adyá* (adv.) の存在から、また III 11,9 では *víśvāni vāryā* が後続文（perf. ind.）の目的語であると考えられることから、意志表明は未来に向けられているのではなく、現在歌っている（きた）讃歌の内容について述べられているものと考えられる。ただしこのような解釈が、他の Sūkta 最終詩節に見られる意志表明にも一様に適用出来るかどうかについては、更に議論の余地がある。逆に次の例は、intens. という動詞の意味的

<sup>144</sup> ここに扱う用例では、VIII 62,12# や VI 67,10-#（→ 当節 a）のように、意志された行為が同詩節内で実行されるという解釈は成り立たない。

<sup>145</sup> もしこの仮説が正しければ、aor. inj. 1sg. は行為に「言及」することによって（話し手の態度表明は行為そのものによって示されているので、それ以上の限定、呈示の必要がない）、1 人称接続法は行為に対する話し手の現在の意志を「表明」することによって、それぞれ Koinzidenzfall を表わし得ると言える。GOTO 349 は、Koinzidenzfall には pres. ind. も用いられるとする。I 82,5（→ 各論）*yunajmi*（pres. ind.）は丁度これに当たると思われる、堂山「新しい歌」5 を参照。

性質や、後続の命令法 + *sádā* 「いつも～せよ」からも、1人称接続法は当該 Sūkta ではなく、これから後未来全般に亘って／繰り返し行為に及ぶ用意があること——つまり一般的心構え——を表明していることが明らかである（→ A 1.2.2 b））：

VII 24,6# = VII 25,6# *evā na indra vārīyasya pūrdhi prá te mahīm sumatīm vevidāma* | ... *yūyām pāta s<sub>u</sub>vastībhiḥ sádā naḥ* 「こうして、インドラよ、望ましいものの [中から]、我々に君は与えよ (aor. iptv.)。君の偉大なよき思考を、我々は繰り返し見出そう (intens. pres. subj.)。…。きみたちは、諸々の安全さによって、いつも我々を護れ (pres. iptv.)」

しかし、以上見てきた以外の例は全て、先に挙げた I 53,11 や I 159,5 に見られるような、意志表明が現在の Sūkta に属することを示唆する要素も、それが未来に向けられたものであることを示す要素も持たない。その場合には、いずれの可能性も同様に存在すると言える：

I 16,9# *sémām naḥ kāmam ā pr̥ṇa góbhir áśvaiḥ śatakrato* | *stávāma tvā s<sub>u</sub>vādhīyāḥ* 「そういう [君、インドラ] は、我々のこの望みを満たせ (pres. iptv.)、牛たちによって、馬たちによって、百の意志を持つ者よ。我々は称えよう (pres. subj.)、君を、よき配慮を持つ者たちとして」

I 27,13#cd *yājāma devān yádi śaknāvāma mā jyāyasaḥ śāmsam ā vṛkṣi devāḥ* 「神々を、我々は祭ろう (pres. subj.)、もし我々に出来るなら (pres. subj.)。より格上の者の (権威ある) 言明 (非難) を、神々よ、私が我が身に引き受けることが無いようにせよ (*mā* + aor. inj.)」

V 16,5# *nū na áhi vārīyam ágne gṛṇāná ā bhara* | *yé vayām yé ca sūrāyaḥ s<sub>u</sub>vastí dhāmahe sácā* 「さて今、我々のもとへ君はやって来い (pres. iptv.)。望ましいものを、アグニよ、歌い迎えられつつ、君は持って来い (pres. iptv.)。われわれ (詩人たち) と、そして主人 (祭主) なる者たちは共に無事を手にしよう (aor. subj.)」<sup>146</sup>

V 35,8#cde *vayām śaviṣṭha vārīyam diví śrávo dadhīmahi diví stómam manāmahe* 「われわれは、最も強大な者よ、望みのものを、天において、聞こえ (名声) を自らに置き定めた。天において、頌歌を我々は考え出そう (aor. subj.)」

V 50,5#cde *sām rāyē sām s<sub>u</sub>vastáya iṣastúto manāmahe devastúto manāmahe* 「首尾よく、財のために、首尾よく、安寧のために、諸々の滋養を称える者たちとして、我々は思念しよう／[詩歌を] 考え出そう (aor. subj.)。神々を称える者たちとして、我々は思念しよう／[詩歌を] 考え出そう (aor. subj.)」

<sup>146</sup> 或いは関係文 *yé ...* を目的節として解釈する可能性も考えられるが（「…することになるように」），*yá-* が先行詞持たずに独立の目的節として機能する用例は事実上ないので、上訳のように解釈した，詳しくは各論注を参照。

VII 82,10# *asmé índro váruṇo mitró aryamā dyumnām yachantu máhi sárma sapráthaḥ | avadhram jyótir áditer ṛtāvṛdho devásya ślókaṁ savitúr manāmahe* 「われわれの上に、インドラ、ヴァルナ、ミトラ、アリヤマンは明るさを保持せよ (pres. iptv.), 広がりのある大きな覆いを, アディティの壊されることない光を, 天理を増大させる者たちは。駆り立てる神 (サヴィトリ) への誉め歌を, 我々は考え出そう (aor. subj.)」

これらの用例 (先の I 159,5 も含めて) には共通して, 神々への望みの要求 (命令) と彼らを称える宣言とが並んで現れるが, このことも, 意志表明が先行の内容——神々への讃歌と詩人らの要求と——の確認として発せられているのか, それとも未来全般に対する宣言であるのかを決定する手掛かりにはならない。

1人称接続法に Koinzidenzfall が設定されるべきか否かについては, ヴェーダ語においてこの意味領域が他にどのように表現され得るか (特に inj. の場合) を, 文献学的に精査する必要がある。以上の仮説を今後の研究のための問題提議としたい。

### 1.2.3 意志表明の表現形態

#### a) 過去或いは現状の確認を伴う場合

話し手は, 意図している内容やその目的に関して, 過去の事実或いはその結果としての現状を perf. ind. や aor. ind. によって確認 (“Konstatierung”) した上で, 意志表明を行なうことがある。これは, 聞き手に既成事実を想起させ, 話し手の意志表明を効果的にするための表現形態であると思われる。特に宣言においては, 正しく述べられた言葉 (讃歌) には実現力 (bráhmaṇ-) が宿るという思想に基づき (→ A 1.1.2), 過去の神々の行為を正しく確認した上で意志表明をすることで, その実現力を強化しているものと考えられる:

I 26,8 *s<sub>u</sub>vagnáyo hí vār<sub>i</sub>yaṁ deváso dadhiré ca naḥ | s<sub>u</sub>vagnáyo manāmahe* 「よき祭火を伴って, 神々は望みのものを自らに定め置いたのだから (perf. ind.), そして我々の [望みのもの] を。よき祭火を伴って我々は思考しよう / [詩歌を] 考え出そう (pres. subj.)」

V 41,13 *vidā cin nú mahānto yé va évā brávāma dasmā vār<sub>i</sub>yaṁ dádhanāḥ* 「今や, まさしく君たち (マルトたち) は知っているとも (perf. ind.), 偉大な者たちよ, 君たちの諸々の行程が何であるかを。我々は (それらを) 言おう (pres. subj.), 驚くべき者たちよ, [君たちに] 望ましいものを [我々の中から] 定め置きながら」

X 124,6 *idám s<sub>u</sub>vār idám íd āsa vāmám ayám prakāśá ur<sub>u</sub>v āntárikṣam | ... haviṣ tvā sántam haviṣā yajāma* 「ここに太陽光が, まさしくここに好ましいものがあった (perf. ind.)。こ

ここに明るさが、幅広い中空が。…（それ自身）供物である君（ソーマ）を、供物によって我々は祭ろう（pres. subj.）」

X 28,9 śasāḥ kṣurāṃ pratyañcam jagārá- 'adriṃ logéna vṛy ābhedaṃ ārāt | bṛhántaṃ cid ṛhaté randhayāni 「野うさぎは、剃刀を逆さまに呑み込んだ（perf. ind.）。巖を土くれで、遠くから私は砕き割った（aor. ind.）。高大な者をも、弱小の者に私は屈服させよう（pres. subj.）」

X 39,5 purāṇā vāṃ vīryā prá bravā jáné- 'atho hāsathur bhiśājā mayobhūvā | tā vāṃ nú návyāv āvase karāmahe 「君たち両者の以前の諸々の武勲を、部族の前で私は公言しよう。さらにまた、喜びとなる／を司る医者で〔も〕君たち両者はあった（perf. ind.）。その君たち両者を、今〔我々への〕助力のために、新たな状態に我々はしよう（pres. subj.）」。

X 108,9 evā ca tvāṃ sarama ājagānta prábādhitā sāhasā dáivyena | svāsāraṃ tvā kṛṇavai mā púnar gā āpa te gāvāṃ subhage bhajāma 「こうしてきみは、サラマーよ、神々に属する強制力に押し出されて、やって来たのだが／やって来たのなら（perf. ind.）…、君を、我が妹に私はしよう（pres. subj.）。君は戻って行くな（mā + aor. inj.）。君に、牛たちの〔一部を〕、よき天分持つ者よ、我々は分け与えよう（pres. subj.）」

[更に I 110,6 ā manīṣām ... srucéva gṛhātāṃ juhavāma vidmānā ... taraṇitvā yé asya saścira | ṛbhāvo vājam aruhan (aor. ind.), III 11,9# ... víśvāni vāryā ... sanīṣāmahe | t<sub>u</sub>vé devāsa [tā(ni)] érire (perf. ind.), III 55,18 vīrāsyā nú svāsavyaṃ ... prá nú vocāma vidúr (perf.-pres. ind.) asya devāḥ, X 44,2 mīmṃkṣa (perf. ind.) vājro ... gābhastau... vārdhāma te papūṣo vīṣṇyāni]

#### b) 聞き手／儀礼の対象への要求を伴う場合 (give-and-take)

聞き手／儀礼の対象を利用する内容の意志表明は、しばしば交換条件として話し手側から彼らへの要求を伴う。この関係は文字通り、条件節（接続法）+ 主文（1人称接続法）で表わされることもある：

X 108,3 ā ca gáchān mitráṃ enā dadhāmā- 「彼がやって来るなら（pres. subj.），当人と，契約を我々は定めよう（pres. subj.）」 → A 1.1.1

X 27,2 yádíd ahāṃ yudháye saṃnáyān<sub>y</sub> ádevayūn tan<sub>u</sub>vā śúsujānān | amā te túmraṃ vṛṣabhāṃ pacāni 「もしもわたしが、神々を求めない、いきり立っている者たちを、戦うために連れ集めることになるなら（pres. subj. ; i.e. 「君＝インドラの力で集めることが出来るなら」），家で、君に肉付きのいい牡牛を、私は調理しよう（pres. subj.）」 → 1.2.2 b)。

しかし多くの場合、こうした内容は 命令法や接続法と 1人称接続法とが前後する一組の

構造によって表わされる：「君は…しろ；私は…するから」，「君は…しろ；その代わり私は…しよう」。この二つの文の密接な意味的繋がり，時に X 2.2 のように動詞のアクセントによって表示される場合もある<sup>147</sup>：

I 16,9 *sémāṃ naḥ kāmam ā prṇa góbhīr áśvaiḥ śatakrato | stāvāma tvā s<sub>u</sub>vādh<sub>i</sub>yāḥ* 「そういう〔君，インドラ〕は，我々のこの望みを満たせ (pres. iptv.)，牛たちによって，馬たちによって，百の意志を持つ者よ。君を我々は称えよう (pres. subj.)，よき配慮を持つ者たちとして」

I 99,1# *jātāvedase sunavāma sómam arātiyato ní dahāti védah | sá naḥ parśad āti durgāni vísvā nāvēva síndhum duritāt<sub>i</sub>y agnīḥ* 「ジャータヴェーダス（アグニ）のために，ソーマを我々は搾ろう (pres. subj.)。出し惜しみする者の財を，彼は焼き落とすべし (pres. subj.)。彼は我々を，一切の艱難たちを越えて渡すべし (aor. subj.)」

X 2,2 *svāhā vayām kṛṇávāmā havīm̐si devó devān yajāt<sub>i</sub>y agnīr árhan* 「スヴァーハー，われわれは，供物たちをつくろう (pres. subj.)；（だから）神としてアグニは，神々を祭れ (pres. iptv.)，資格ある者として」

X 112,1 *índra píba pratikāmām sutásya ... | hársas<sub>u</sub>va hántave sūra śátrūn ukthébhiḥ te víryā prá bravāma* 「インドラよ，搾られた〔ソーマ〕の中から君は飲め (pres. iptv.)，望みに応じて。…奮い立て (pres. iptv.)，勇者よ，敵たちを打ち殺すために。讃辞たちによって，君の諸々の武勲を，我々は公言しよう (pres. subj.)」

[更に I 94,4 *bhārāmedhmām kṛṇávāmā havīm̐si te ... pratarām sādhayā* (pres. iptv.) *dhíyo 'agne sakhyé mā riṣāmā* (aor. inj.) *vayām táva*, I 27,13# *yājāma devān ... mā jyāyasah śám̐sam* (pres. inj.) *ā vr̥k̐si* (-si-iptv.) *devāḥ*, V 35,8# *asmākam ... rátham avā* (pres. iptv.) ... *diví stómam manāmahe*, VII 82,10# (=VII 83,10) *asmé ... dyumnām yachantu* (pres. iptv.) ... *devāsya ślókam savitúr manāmahe*]

全て宣言の場面に見られるこれらの用例は，RV においては，話し手たる詩人と聞き手たる神々との間に対等な取り引き関係（“give-and-take”）があったことを示していると言える。こうした関係を特に象徴的に表わすのは，詩人たちが神々に儀礼の場へ来るよう要求する一方で，彼らの方は供物を捧げるなどの行為を神々に約束する場面である。全ての用例に共通する特徴として，*ā* (*larvāñc-*) + 移動を表わす動詞 (*yā, ay/i, car*) の pres. iptv. が，1人称接続法に先行して現れる：

I 114,3 *sumnāyānn íd víso asmākam ā carā- ariṣṭavirā juhavāma te havīḥ* 「まさしく善意をなしつつ，われわれの諸部族のもとへ，君は歩んで来い (pres. iptv.)。男子たちを損なうこと

<sup>147</sup> 動詞のアクセントだけによる一連の従属節に属する，cf. DELBRÜCK 37ff., HETTRICH 157ff. この種の構文では，殆どの場合先行する動詞の方がアクセントを持つ。ただし，当節 c) 及び A 2.1 *étā* (...) subj. 1pl. [+ accent] を参照。

のない者たちとして、君（ルドラ）への供物を我々は献じよう（pres. subj.）」

III 35,5 *atīyāyāhi śāsṁvato vayāṁ té 'āraṁ sūtēbhiḥ kṛṇāvāma sōmaiḥ* 「彼ら（ライバルの祭主たち）を次々と越えて、君はやって来い（pres. iptv.）。われわれは、搾られたソーマたちによって、君に相応しく仕えよう（pres. subj.）」

VI 16,16 *ēhiy ū śu brāvāṇi té* 「さて、しかと、君はやって来い（pres. iptv.）。君（アグニ）に、私は言おう（pres. subj.）」

VIII 62,4 *ā yāhi kṛṇāvāma ta indra brāhmāṇi vārdhanā* 「君はやって来い（pres. iptv.）。我々はつくろう（pres. subj.）、君のために、インドラよ、言葉の霊力たちを、増強薬たちとして」

X 44,2 *śibham rājan supāthā yāhiy arvāṇ vārdhāma te papūṣo vṛṣṇi yāni* 「急いで、王よ、よき道を通して君はやって来い（pres. iptv.）、こちらへ向いて。我々は増大させよう（pres. subj.）、（ソーマを）飲み終えた君の、猛々しい力たちを」

特に最後の三箇所（VI 16,16, VIII 62,4, X 44,2）においては、命令と宣言とが矢継ぎ早に発せられており、1人称接続法はいずれも文頭に置かれて強調されている（アクセントを有している）。このように、意志表明と対になった神々への要求が、条件節などの複雑な表現や願望法を使わず、接続法や命令法によるものであることは、RVにおける人間と神々との関係をよく表わしていると思われる。恐らく詩人たちにとって、こうした一見直接的で無愛想にも思える要求と意志との提示は、神々との取り引きを成立させるための正式な言語表現であったと推察される。そこには、丁寧さや懇懇さといったものは感じられない。詩人と神々との間にあるのはあくまで対等の関係であって、言葉もこれに基づいて発せられる必要があったと言えるであろう。

### c) 要求の結果に対する意志表明

b) では、神々に歌や供物を献ずる意志表明と並んで、見返りの要求が命令法／接続法によってなされているのを見た。一方で詩人は、神々に要求する事態を1人称接続法により、自らの意志として表明する場合も見られる。多くの場合、同時に命令法による要求をも伴う。つまり1人称接続法と命令法とは、同じ内容（要求）を神々と人間という別の立場から述べた二つの表現形態と言える。ここでも、それら二つの文の密接な意味的關係は、b) に見た X 2,2 の場合と同様に、1人称接続法のアクセントによって明示される場合がある<sup>148</sup>：V 16,5, V

<sup>148</sup> Cf. X 2,2 ... *vayāṁ kṛṇāvāmā havīṁṣi, devó devān yajat*. 同様の現象は、以下に見る勧誘の機能においても見られる：A 2,1 *étā* (...) subj. 1pl. [+ accent].

75,2。その際これらの例が3つとも、1人称代名詞による強調をも伴っていることは注目に値する：X 2,2 (→ b) ) *vayám kṛṇávāmā havíṃṣi*, V 16,5 *yé vayám yé ca sūrāyaḥ ... dhāmahe*, V 75,2 *ahám sánā*, cf. A 1.2.1 a) :

I 15,8 *draviṇodā dadātu no vásūni yāni śṛṇviré | devēṣu tā vanāmahe* 「ドラヴィノーダスは我々に与えよ (pres. itpv.), (よく) 聞かれているところの (i.e. 名高い) 財物たちを。神々のもとで、それらを、我々は克ち得よう (aor. subj.)」

II 16,7 *prā te nāvaṃ ná sámāne vacasyúvaṃ brāhmaṇā yāmi sāvaneṣu dādhr̥ṣiḥ | ... índram útsaṃ ná vásunaḥ sicāmahe* 「君のために、舟を の如く、対戦において、雄弁な「言葉／讃歌」を私は「送り」出している。言葉の霊力によって、私は「前へ」進んでいる (pres. ind.), 諸々の「ソーマ」搾りにおいて、大胆な者として。… 財物の泉を の如く、インドラ「の力」を我々は汲み出そう (引き出そう) (aor. subj.)」

V 16,5# *nū na áhi vāryam ágne gṛṇāná ā bhara | yé vayám yé ca sūrāyaḥ sāvastī dhāmahe sácā* 「さて今、我々のもとへ君はやって来い (pres. iptv.). 望ましいものを、アグニよ、歌い迎えられつつ、君は持って来い (pres. iptv.). われわれ (詩人たち) と、そして主人 (祭主) なる者たちは共に無事を手にしよう (aor. subj.)」

V 75,2 *atīyāyātam aśvinā tiró viśvā ahám sánā* 「越えて、君たちはやって来い (pres. iptv.), 両アシュヴィンよ、一切の「歓迎歌」たちを通り抜けて；わたしが (i.e. 他の祭主たちではなく) 「君たちを」勝ち取ろう (aor. subj.)」

VIII 22,3 *arvācinā sāv āvase karāmahe* 「両アシュヴィンを、しかとこちらへ、我々は向けよう (aor. subj.), 助力のために」

VIII 63,11 *bád ṛtvīyāya dhāmāna ṛkvabhiḥ sūra nonumaḥ | jēśāmendra tvāyā yujā* 「確かに (君の) 時間通りの居場所のために、讃称者たちと共に、勇者よ、我々は鳴き声を挙げていゑ (pres. ind.). 我々は勝利しよう (aor. subj.), インドラよ、君を同盟者として」

X 19,6 *ā nivarta ní vartaya púnar na indra gā dehi | jīvābhir bhunajāmahai* 「引き返させる者よ、(牛たちを) 君は戻って来させよ。我々に、インドラよ、牛たちを君は返せ。生きている「牛」たちを、我々は役立てよう (pres. subj.)」

X 23,6 *stómaṃ ta indra vimadā ajījanann āpūrvyaṃ purutāmaṃ sudānave | ... ā pasūm ná gopaāḥ karāmahe* 「頌歌を、君のために、インドラよ、ヴィダマたち (詩人たち) は (今まさに) 生み出した (aor. ind.). 以前に属さない、最も多くの「頌歌」を、よき贈与を伴う「君」のために。… (インドラを) こちらへ、我々は引き寄せよう (aor. subj.), 家畜を牛飼いたちが の如く」

[更に I 53,11cd = X 115,8cd *stoṣāma ... drāghīya āyuh pratarāṃ dādhanāḥ*, V 44,10

*spṛṇavāma ... śaviṣṭham vājam*, VII 24,6# = VII 25,6# ... *na indra vār̥yasya pūrdhi* (aor. iptv.) # *prá te ... sumatīm vevidāma* # *īṣaṃ pinva* (pres. iptv.) ... # *yūyām pāta* (pres. iptv.) ... *naḥ*, VII 81,5 *tác citrām rādha ā bhara* (pres. iptv.) ... *tád rāsva* (aor. iptv.) *bhunājāmahai*, X 38,4 *arvāñcam indram ávase karāmahe*, X 59,2 *kārāmahe ... purudhá śrávāmsi*]

詩人たちは、言葉の持つ実現力 (*bráhman-*) に基づいて、然るべき讃歌を唱えれば必ず要求が叶えられることを確信している。上の用例の II 16,7, X 23,6, VIII 63,11 において、詩人が然るべき讃歌を歌った／歌っていることを直前で報告／確認しているのはその為である、cf. A 1.2.2 a) : X 39,14。これは神々への要求が間違い無く達成されるための念押しであり、極端に言えば彼らの論理に基づく脅迫であるとも言えよう。一部の例に見られる 1人称接続法のアクセントや代名詞の使用も、恐らくこうした強い語調の現れの一つと見る事が出来よう。しかし、念押し／脅迫の姿勢が最も端的な形で見られるのは、讃歌や儀礼が功を奏し要求の結果が既にもたらされたものとして——つまり結果を先取りして——意志表明する場合である。以下の例では、主語にかかる nominative が既に要求が満たされた後の状態を表わしており (proleptic nominative)、詩人はいわば「勝利宣言」をしていると言えるだろう：

I 114,3 *áristavīrā juhavāma te havīḥ* 「男子たちを損なうことのない者たちとして、君 (ルドラ) への供物を我々は献じよう (pres. subj.)」

VII 86,7 *āraṃ dāsó ná mīdhūṣe karāṇy* *ahám devāya bhūr̥ṇayé 'anāgāh* 「下男が の如く、わたしは相応しく仕えよう (aor. subj.)、報酬払う活動的な神 (ヴァルナ) に、咎無き者として」

VIII 53,7 (Vālakḥ.) *vayām hótrābhir utá deváhūtibhiḥ* *sasavāṃso manāmahe* 「われわれは、[ソーマの] 献注たちによって、そして神々への呼びかけたちによって (既に) 勝ち取った者たちとして 思考しよう / [詩歌を] 考え出そう (aor. subj.)」

IX 41,2 *suvitásya manāmahé* *'āti sétum durāv̥yam | śāhvāṃso dāsyum avratām* 「よき進行について我々は思念しよう (aor. subj.)、困難な災いを伴う跳び石を越えて、誓いを持たない夷狄を (既に) 征服した者たちとして」

#### 1.2.4 意志表明と否定

接続法の否定には原則的に *ná* だけが用いられる (cf. A 1.2.1 c) )<sup>149</sup>。意志表明においては、次の 6箇所 で例証されている。いずれも、何らかの否定的内容を (行為を行なわない

<sup>149</sup> HOFFMANN 51ff., 92ff. inj. との形態的類似性から、*mā* + inj. の構文で inj. として用いられた subj. 語形については op. cit. 92 を参照。

意志を) 表明する :

II 30,7 *ná vocāma mā sunotéti sómam | yó me prṇád yó dádad yó nibódhād yó mā sunvántam úpa góbbhir áyat* 「我々(祭官たち)は言うまい (aor. subj.) 『ソーマを搾るのを君たちは止めよ』と(は), (誰か) 私に贈り物をするであろう者 (pres. subj.), 与えるであろう者 (pres. subj.), [私に] 気付くであろう者 (pres. subj.) …があれば」(→ A 1.1.2 ; 1.2.2 b))

IV 18,2 *náham áto nír ayā durgáhaitát* 「わたし(インドラ)は, ここから出て行くまい (pres. subj.). 諸々の踏み込み難い場所がここにある」(→ A 1.1.3)

IV 18,3 *ná nánu gānīy ánu nú gamāni* 「決して, 私(インドラ)は(母に)ついては行くまい (aor. subj.). やはり, 私はついて行こう (aor. subj.)」(→ A 1.1.3)

VIII 61,11 *ná pāpāso manāmahe nārāyāso ná jádhavaḥ | yád ín nāv indram vṛṣaṇam sácā suté sákhāyam kṛṇāvāmahai* 「悪しき者たちとしては, 我々(祭官たち)は思考すまい / [詩歌を] 考え出すまい (aor. subj.). 財を出さない者たちとしては [思考す / 考え出す] まい, 今, 雄牛であるインドラを, 搾られた [ソーマ] のもとで [我らが] 盟友にすることになる (pres. subj.) まさにその時に」(→ A 1.1.2)

VIII 62,12# *satyám íd vā u tám vayám indram stavāma nántam* 「まさしく真実になつた(実現する) こととして, われわれ(祭官たち)は彼インドラを, 称えよう (pres. subj.), 真実になわない(実現しない) こととしてではなく」(→ A 1.1.2)

X 34,5 *yád ādídhye ná daviṣānīy ebhiḥ parāyádbhyó 'va hīye sákhībhyah* 「『これら(賽子たち)で, 私は賭博をするまい (aor. subj.)』—— 私が思いを決めていると, 去り行く仲間たちから, 私は取り残される」(→ A 1.1.3)

IV 18,3 *ná ná ... gāni* は二重否定=強い肯定であるか, 或いは強い否定であるか, 明らかではない(各論を参照)。上に挙げた意志表明の否定には, 近い(特定)未来を否定するもの(IV 18,2; 3, VIII 61,11, VIII 62,12 → A 1.2.2 a))と, 未来全般を否定するもの(つまり一般的心構え; II 30,7, X 34,5 → A 1.2.2 b))とが見られる。

一方, RV には見られないが, 話し手の意志表明の内容を聞き手が *ná* を用いて否定する場合が散文には見られる。以下の AB の用例はいずれも, 相手の意志表明を受けて, 自分にはその意志が無いことを伝えているものと思われる: 「そうはさせない / だめだ」:

ハリシュチャンドラ王は, 自分の息子を犠牲にしてヴァルナ(V.)への祭式を執り行うと約束する。息子が成長し, 約束を果たす決断をした王は息子にその意志を伝えるが, 息子はそれを拒絶する: AB VII 14,8-9 *tatāyam vai mahyam tvā adadād. dhanta tvayāham imam yajā iti. | sa ha nety uktvā dhanur ādāyāraṇyam apātasthau. sa samvatsaram araṇye cacāra* 「『坊や, こ

の者 (V.) が、私に君をくれたのだ。よし、君を用いて (犠牲獣にして) この者 (V.) を私は祭ろう』と (言った)。彼 (息子) は『いやだ』と言って、弓を取り、荒野へと逃れた。彼は一年間、荒野で彷徨った」；彷徨った息子は、自分の身代わりに犠牲になる人間を買い取ろうとして、貧しい聖者の家族に話を持ちかける：AB VII 15,7 *ṛṣe 'haṃ te śataṃ dadāmy. ahaṃ eṣāṃ ekenātmānaṃ niṣkrīṇā iti. sa jyeṣṭhaṃ putraṃ nigrhṇāna uvāca. na nv imam iti. no evemam iti kaniṣṭhaṃ mātā.* 「『聖仙よ、私は君に百 [頭の牛] をあげます。私は、この者たちの一人によって、自らを買い取ろう (買い戻そう) 』と (言った)。(すると) 彼 (聖仙) は長男を抱き寄せながら言った『この [子] は [渡し] ませんよ』と。『この [子] も [渡し] はしませんよ』と (言って) 母が末っ子を [抱き寄せながら言った] 」

1人称接続法が言葉に効力を持たすための正式な表明形式であったとすれば、その効力を打ち消す正式な言い方がこれらの例に認められるかもしれない。散文文献からは、より豊富な用例が期待される。それらの検討によって、RV の用例の理解を補強・修正することが、今後望まれる。

## 2 聞き手に対する勧誘

1人称接続法の双数・複数においては、話し手が主語全員の総意を代表して——全員が一斉に話すことは普通あり得ないので——意志表明をする場合 (前章) の他に、話し手が、話し手を含む主語全体に対して、自分の意志への賛同／意志の共有を確認・勧誘する場合がある<sup>150</sup>。以下この機能を勧誘と呼ぶ。日本語では「～しよう」を勧誘の意味で使うこともあるが、意志表明との混同を避けるため、本論では「～しようではないか」をその訳として用いる。意志表明 (意志の伝達) が主語以外の存在を聞き手とするのに対して、勧誘は聞き手を主語の中に包摂すると言える (cf. C 3)。勧誘は、意志表明のヴァリエーションであると考えられるが、それ自体勧誘という特別な発話目的を持つため、前者とは区別して理解される。殆どの用例は聞き手への命令を伴い、その結果を受けた聞き手と話し手との共同作業を促す。用例には双数形と複数形とがほぼ同数見られる：

### <双数形>

I 25,17 *sāṃ nū vocāvahai pūnar yāto me mādhuṇ ābhṛtam* 「さあ、我ら両者 (詩人シュナハシ

<sup>150</sup> DELBRÜCK 306f. (cf. Conj.Opt. 19f.) は更に、subj. 1du./pl. の用法として、聞き手 (だけ) に要求をする場合を設定している：「我々に…させてくれ」、「我々が…出来るよう取り計らえ」。しかし実例からは、そのような用法を認める必要はないと思われる。同書が挙げる用例のうち III 33,10 *śṛṇavāmā* は意志の伝達 (A 1.1.1), I 114,3 *juhavāma* 及び VIII 63,11 *jēṣāma* は宣言 (A 1.1.2) として、それぞれ理解される (VIII 63,11 *jēṣāma* は更に、要求の結果に対する意志表明 [A 1.2.3 c]) でもある。

エーパ=話し手とヴァルナ)は語り(謀り)合おうではないか(aor. subj.), もう一度。私によって, 蜜酒が運ばれて来たからには」

I 30,6 *ūrdhvās tiṣṭhā na ūtāye 'asmīn vāje śatakrato | sām anyeṣu bravāvahai* 「君(インドラ)は立ちそびえよ(pres. iptv.), 我らへの助力のために, この競走において, 百の意志力を持つ者よ。他の諸々の[競走]に関して(も), 我ら両者は共に語り(謀り)合おうではないか(pres. subj.)」

III 53,3 *śāṁsāvādhvāryo prāti me grñihī- ndrāya vāhaḥ kṛṇavāva jūṣṭam* 「我ら両者は言明しようではないか(pres. subj.), アドヴァリユよ。私に歌い答えよ(pres. iptv.)。インドラのために, 喜ばしい乗り物を, 我ら両者は作ろうではないか」

VIII 100,12 *sákhe viṣṇo vitarāṁ ví kramasva dyāur dehī lokāṁ vājraya viṣkábhe | hánāva vṛtrām riṇácāva síndhūn* 「盟友ヴィシュヌよ, より広く君は歩み渡れ(pres. iptv.)。天よ, 世界をヴァジュラに与えよ(aor. iptv.), (ヴェシュヌが世界を)広げ支えるために。ヴリトラを, 我ら両者(ヴィシュヌとインドラ)は打ち殺そうではないか(pres. subj.)。スインドゥ(河)たちを, 我ら両者は開放しようではないか(pres. subj.)」

X 95,1 *hayé jāye mánasā tiṣṭha ghore vácāṁsi miśrá kṛṇavāvahai nú* 「何とまあ。妻よ, 思考を——立ち止まれ(pres. iptv.), 恐ろしい女よ——織り交ぜた言葉たちを, 我ら(ブルーラヴァスとウルヴァシー)は交わそうではないか(pres. subj.), さあ」

[更に VI 55,1 *éhi vām ... saṁ sacāvahai*, X 83,6 *mānyo vajrin ... ā vavṛtsva | hánāva dāsyūn*, X 83,7 *ubhá ... pibāva*, X 86,21 *púnar éhi vṛṣākape # suvitā kalpayāvahai*, X 145,5 *ubhé ... sapátim me sahāvahai*]

<複数形>

III 29,1 *ástidám adhimánthanam ásti prajānanam kṛtām | etām viśpátim ā bharā- agnīm manthāma pūrváthā* 「在るのだ, ここに, 火鑽り場が。在るのだ, 生み出すもの(火鑽り棒)が, つくられて。この部族長の妻(火鑽り台)を, 持って来い(pres. iptv.)。祭火を, 我々は鑽り出そうではないか(pres. subj.), 太古と同じように」

X 53,8 *ásmanvaṭi rīyate sām rabhadhvam út tiṣṭhata prá taratā sakhāyah | átrā jahāma yé ásann ásevāḥ* 「石を伴う[川]が(今ここに)流れている。君たち(他の祭官たち)はつかまり合え(pres. iptv.)。君たちは立ち上がれ(pres. iptv.)。君たちは進み渡れ(pres. iptv.), 仲間たちよ。ここに 我々は置き去りにしようではないか(pres. subj.), 良からぬ者たちであった[人々を]」

X 101,5 *nír āhāvān kṛṇotana sām varatrā dadhātana | siñcāmahā avatām udrīṇam vayām suśekam ānupakṣitam* 「桶(釣瓶)たちを, 君たち(祭官たち)は出して揃えよ(pres. iptv.)。(桶の)縛り紐たちを, 君たちは結わえ合わせよ(pres. iptv.)。[自分たちのために]汲

もうではないか (pres. subj.), われわれは, 水を湛える井戸 (から水) を。よく汲める, 涸渴することのない [井戸 (から水)] を」

X 111,1 *māniṣiṇaḥ prā bharadhvaṃ maṇiṣām yāthāyathā matāyaḥ sānti nṛṇām | indram satyāir érayāmā kṛtébhiḥ sá hí vīró girvaṇasyúr vídānaḥ* 「計画を備えた者たちよ, [自分たちの] 計画を, 君たち (祭官たち) は提示せよ (pres. iptv.), 男たち (君たち) にある諸々の考えの, まさしくその通りに。インドラを, つくられた諸々の真実によって, 我々はこちらへ動かそうではないか (pres. subj.)。彼は (歓迎) 歌を好む勇者として知られているから」

[更に I 33,1 *étāyāmópa ... indram*, V 45,5 *éto ... bhāvāma*, (*prā duchúnām inavāmā ... | ... dvēṣāṃsi ... dadhāmāyāma*), V 45,6 *étā dhīyaṃ kṛṇāvāmā*, VIII 24,19a = VIII 95,7a = VIII 81,4a *éto ... indram stāvāma étā (...)* → A 2.1 を参照。また I 161,5 *hānāmainān íti tvāṣṭā ábravid*, IV 33,5 *trín kṛṇavāméty āha*, VIII 92,11 *áyāma* も恐らく勧誘と思われるが, 意志表明の可能性もある → A 2 補説 2)

I 30,6 では, 「一般的心構え」(意志表明) や「一般的見込み／一般論」(見込み) と同様に, 勧誘が未来全般に有効なものとして表現されていると言えよう: 「現在のこの競走においても (*asmín*), またこの先未来に行なう競走においても (*anyéṣu*)」。

1人称接続法の複数形と双数形の全体数 (それぞれ 172x, 23x) における勧誘の用例の割合は, 複数形 (16x<sup>151</sup>: 9%) に対し双数形 (12x: 52%) の高さが際立っている。このことから, 勧誘は基本的に, 話し手が他の個人に対して発する場合に特徴的な機能であると言える。双数の用例は, 神話における会話, 祭式儀礼における祭官から神々への発言, 或いは祭官から他の祭官へ発言と, 様々な場面に見られるが, 複数形の用例——話し手が複数の他者を勧誘する場合——は, 次節の *étā (...)* subj. 1pl. [+ accent] の用例も含め, 全て祭官から他の複数の祭官への発言のみに限られる。また, 双数形のうち半数が mid. で活用し, それらのほぼ全てが互惠的用法 (reciprocal; *±sám*) を示すのに対し<sup>152</sup>, 複数形の mid. は一度しか見られず, 互惠的な意味は見られない: X 101,5 *siñcāmahai* (「自分たちのために」?)。語幹に関しては, 全25例中 I 25,17 *vocāvahai* 以外全てが現在語幹であることが注目される。

## 2.1 *étā (...)* subj. 1pl. [+ accent]

勧誘においては, 特に *étā* + subj. 1pl. (有アクセント) からなる一連の表現が目立つ。こ

<sup>151</sup> このうち I 161,5 *hānāma*, IV 33,5 *kṛṇavāma*, VIII 92,11 *áyāma* は意志表明とも考え得る → A 2 補説 2。

<sup>152</sup> 但し X 145,5 *sahāvahai* は med. tant.。X 86,21 *kalpayāvahai* は恐らく possess.-affekt. → 各論。

の構造は従来多くの研究によって論じられてきたが<sup>153</sup>、用例が全て勧誘の機能に限られるという事実は、改めて指摘しておくべきであろう。*éta* は *ay/i*「行く」の古い full-gr. iptv. (2pl. act.)「行け」<sup>154</sup> もしくは前置詞 *á* + zero-gr. iptv. *ita*「来い」のいずれかと考えられるが、勧誘表現という性質上 *á-ita* の可能性が高いと思われる。ただしその際、*éta* が本来の意味を留めているのか、それとも既に聞き手に注意を促す為の間投詞に転化しているのかは、用例から判断することは出来ない：

I 33,1 *étāyāmopa gavyánta índram asmākaṃ sū prāmatim vāyrdhāti*「さあ（来い／行け）。牛を求めて我々（祭官たち）は、インドラにすがろうではないか（pres. subj.）。我々（へ）の気遣いを、しかと、彼は増大させるべし」

V 45,6 *éta dhīyaṃ kṛṇávāmā sakhāyo*「さあ（来い／行け）。思慮を、我々（祭官たち）は為そうではないか（pres. subj.）、同僚たちよ」

V 45,5 *éto nāv ādyā sudhīyò bhāvāma prá duchúnām inavāmā várīyaḥ | āré dvēṣāṃsi sanutār dadhāmā- āyāma prāñco yájamānam ácha*「さあ（来い／行け）、今日、よき思慮持つ者たちに、我々（祭官たち）はなろうではないか（pres. subj.）。不吉さをより離れた所へ、我々は駆逐しようではないか（pres. subj.）。遠い所に敵対関係を、我々は遠ざけようではないか（pres. subj.）。我々は前進しようではないか（pres. subj.）、祭主の方へと向かって」

VIII 24,19 *éto nāv índram stāvāma sakhāyaḥ stómīyaṃ náram | kṛṣṭír yó víśvā abhīy ástīy éka ít*「さあ（来い／行け）、今。インドラを、我々（祭官たち）は称えようではないか（pres. subj.）、盟友たちよ、称えられるべき男を、一人だけで一切の部族たちを圧倒しているところの[彼を]」

[VIII 24,19a = VIII 95,7a = VIII 81,4a]

用例は全て複数形であり、前節で指摘したように、祭官から他の祭官への勧誘に限られるため<sup>155</sup>、特に古い祭式儀礼の中で使われ固定した定型表現であった可能性が考えられる。アクセントが固定した背景には、本来 I 33,1 *#éta #áyāma...* に見られるような、二つの動

<sup>153</sup> Cf. DELBRÜCK 43, OLDENBERG Kl.Schr. 206f., DUNKEL IE hortatory \*éy, \*éyte (MSS 46) 51ff., HETTRICH 165ff., HOCK (2002) Vedic *éta ... stāvāma*: Subordinate, coordinate, or what?.

<sup>154</sup> DUNKEL op. cit. 56. “Full-grade athematic imperatives” については注134を参照。

<sup>155</sup> 同様の構造（「来い」＋勧誘）は *éhi* + 1 人称接続法双数形にも見られるが、その際動詞がアクセントを持つことは無く、また他の場合と同様に（前節）、神々に向けても、或いは神話の中の会話にも用いられる：VI 55,1 *éhi vām vimuco napād āghṛṇe sám sacāvahai*「やって来い（pres. iptv.）。我ら二人は、解放の子（プーシャン）よ、放熱する者よ、添い合おうではないか」、X 86,21 *pūnar éhi vṛṣākape suvitā kalpayāvahai*「戻って来い（pres. iptv.）、ヴルシャーカピよ、——【お互いが】うまくゆくこと事々を、我ら両者は計らおうではないか——」。

詞がそれぞれ文頭で強調を受けた (asyndetic な) 並列構造があったと推察される<sup>156</sup>。相手を呼んで行為を促すという二つの発言が、そのような強調と連続に置かれたことは想像に難くない。命令法と1人称接続法とがしばしば密接に関係した発話行為として扱われ、後者が文頭での強調を受ける (=アクセントを取る) という傾向は、先の意志表明の用例においても見られた: VIII 62,4 *ā yāhi kṛṇāvāma ... te ... brāhmāni*, VI 16,16 *ēhy ū śú brāvāni té*, X 44,2 ... *yāhy arvān, vārdhāma* (A 1.2.3 b)); VII 81,5 *tād rāsva bhunājāmahai* (A 1.2.3 c))。また、両文の意味的な繋がりが 1人称接続法のアクセントによって示される現象にも、やはり先に確認した X 2,2 ... *vayām kṛṇāvāmā havīmṣi, devó devān yajāt*<sub>u</sub> (A 1.2.3 b)) 及び V 75,2 *atyāyātam ... , ... ahām sánā* (A 1.2.3 c)) が比べられよう<sup>157</sup>。

散文文献では更に *éhi, préta* (prá-ita) + subj./fut. (有アクセント) の構文が報告されていることや (DELBRÜCK 43), また A 1.2.1 c) で見た *hánta* の構文の変遷 (RV: -accent → 散文: + accent) は、動詞のパラダイムから離脱した (化石化した) 語形が定型構文を形成してゆく過程を示唆する貴重な資料として、今後の構文研究に供されるべきであろう。

## 補説 2 勧誘／意志表明 ?

以下に見る 3例 (*kṛṇāvāma, hánāma, áyāma*) は、前節では勧誘として判断したが、ただし文脈からそれを確定するのが難しく、意志表明としても同様に理解可能である:

IV 33,5 と I 161,5 とは同じ神話に属する: リブ三神が工巧神トヴァシュトリが作った一つの盃を四つに作り替えてしまったため (IV 33,5), トヴァシュトリは怒って彼らを殺そうとする (I 161,5)。問題となるのは、2つの意志表明 *karā* に挟まれた *kṛṇāvāma* である:

IV 33,5 *jyeṣṭhá āha camasā dvā karēti kániyān trín kṛṇāvāmēt,y āha | kaniṣṭhá āha catūras karēti tváṣṭa ṛbhavas tát panayad váco vah* 「(リブたちの中の) 最年長の者が言う、『盃を二つに私はしよう (aor. subj.)』と。より年少の者が、『三つに我々はしようではないか／しよう (pres. subj.)』と言う。最年少の者が言う、『四つに私はしよう (aor. subj.)』と。トヴァシュトリは、リブたちよ、君たちのこの言葉を賞嘆する」

I 161,5 *hánāmainām iti tváṣṭa yád ábravic camasām yé devapānam ánindiṣuḥ | anyā nāmāni kṛṇvate suté sácām* 「『その者たち (リブ三神) を、我々は打ち殺そうではないか／打ち殺そう (pres. subj.)』、神々が飲むための盃を非難したところの [彼らを]』と、トヴァシュ

<sup>156</sup> DELBRÜCK, OLDENBERG, HETTRICH はアクセントの存在から主文—従属節 (HETTRICH では“Explikativsatz”「説明節」→ C 4) の構造を, DUNKEL, HOCK は二つの並列された主文を想定する。本論も並列構造を想定し、アクセントを (広い意味で) 強調に帰する点で DUNKEL に近い。HOCK op. (2002) 90, 95f. の、二つの動詞 (主文) が連続する場合の「アクセントの一致」は考え難い。

<sup>157</sup> 更に「来い!」に有アクセントの命令法が続く場合についても、上記参考文献を参照せよ。DUNKEL op. cit. 51–55 はそのような場合にも、概して動詞の前に文の切れ目を想定するなどしてアクセントを説明しようとするが、多くの場合無理があると言わざるを得ない, cf. HETTRICH 165 + n. 36。

トリが言った時、他の名たちを、搾られた〔ソーマ〕のもとで、彼ら（リブたち）は自らに付ける（pres. ind.）」

IV 33,5 *kṛṇavāma* は、長男と末っ子の意志表明に挟まれた次男の言葉であるが、既に A 1.1.1 で指摘したように、二つの *karā* は他の兄弟が自分の計画（能力）を主張し合っていると考えられ、また *kṛṇavāma* だけが pl. を示すことから、ここでは次男が他の二人に折衷案を提案（勧誘）しているものと考えられる。ただし、彼が pl. によって一方的に 3 人の総意を意志表明することで、かえって話し手の主張を強調している可能性も排除は出来ない。—— I 161,4 によれば、リブたちが作り替えた盃を見たトヴァシュトリは、一旦妻たち（女神たち）のもとに身を隠している<sup>158</sup>。第5詩節はこれに続く部分であるから、*hánāma* は彼女ら或いは他の神々に対してリブ殺害を持ちかけているものと思われる。ただしここでも、仲間の神々の総意として意志表明を表わしている可能性もある。

IV 33,5 *kṛṇavāma*, I 161,5 *hánāma* いずれの場合も、意志表明であれば独り言が想定されるが、A 1.1.3 で見たように、この機能は基本的に単数にのみ例証されている。

次の VIII 92,11 *áyāma* は、単独では勧誘／意志表明のいずれとも理解可能である。ただし先行詩節と合わせて考えるならば、A 2.1 で見た一連の *étā* (...) subj. 1pl. [+ accent] と同様に判断される。ここではインドラを呼び寄せて (*ā-yāhi*)、一緒に進むよう勧誘しているものと思われる<sup>159</sup>：

VIII 92,10 *átaś cid indra ṇa úpā- ā yāhi śatāvājayā | iṣā sahāsravājayā* 「ここ (?) からでも、インドラよ、我々のもとへ、君はやって来い (pres. iptv.)、百の戦利品をもたらす、千の戦利品をもたらす滋養を伴って」

VIII 92,11 *áyāma dhīvato dhíyó ... jáyema pṛtsú vajrivah* 「我々は進もうではないか／進もう (pres. subj. ; cf. GELDNER *áyāma* ‘Wohlan !’)。思慮を持つ〔君、インドラ〕の諸々の思慮を、… 諸々の戦いにおいて我々は勝ち得たい、ヴァジュラを持つ者よ」

<sup>158</sup> I 161,4cd *yadāvākyac camasāñ catúrah kṛtān ād it tvāṣṭā gnās v antár n y ānaje* 「盃が四つにされたのを目にすると、まさしくその後トヴァシュトリは、妻たちの間に身を潜めた」(cf. GELDNER ad loc. 4d)。

<sup>159</sup> *ā-yāhi* + 一人称接続法という形式的特徴からは、A 1.2.3 b) で見た（意志表明の）give-and-take のタイプと類似しているが、ここでは *áyāma* がインドラの利益となる行為とは考え難いため、そうした関係は想定出来ない。

### 3 見込み

II 接続法の基本機能 b) において、話し手がある事態を、未来に高い見込みで実現するものとして表現する機能を「見込み」と定義し、広く確信「きっと…のはずだ」、予言・推量・予測「(恐らく) …であろう」等々を含む概念として説明した。またその際、主文/主節における接続法が多くの場合、話し手の意志として解釈し得るため、見込みを確定出来る用例が少ないことをも指摘した。これは、2/3人称の文は話し手の外的存在や事態に関わるため、文脈からは話し手がそれらを意志しているのか予想等をしているのかが分かり難く、また、殆どが神々が主語となる2/3人称接続法には、単なる見込みよりも彼らに対する意志や要求を発していると理解する方が、多くの場合相応しいからである。しかし、接続法のこの一般的傾向に反して、1人称接続法には見込みの機能が想定される用例が少ない。それは、話し手自身に関わる事態については、それを意志表明しているか、或いは単に見込んでいるだけであるかが文脈から比較的判断し易いためと思われる。即ち、見込みが想定されるのは、多くの場合、話し手の未来の事態が神々や運命などの、自分の意志だけでは動かせない他の要因にかかっている時である。以下では、意志表明の場合と同様に、発言の目的や意義という観点から具体的な諸機能を整理し (3.1)、続いて他の指摘すべき用法上の特徴について議論する (3.2)。

#### 3.1 「見込み」の諸機能

##### 3.1.1 見込みの伝達

意志表明の場合と同様に、聞き手に話し手の見込みを伝えることを目的とする場合で、RVでは2詩節に3例が見られる。いずれも条件節を受ける主節に見られる (A 3.2 b) を参照)：

長らく禁欲生活を送ってきたアガスティヤ (A.) は、その妻ローパームドラー (L.) に誘惑を受ける。彼はそれを拒み、夫婦お互いが協力し合えば欲望にも打ち勝つことが出来るという「見込み」を、戦車競走の喩えを用いて述べ、彼女を説得しようとする：

L. : I 179,1 *mināti śrīyaṃ jarimā tanūnām āpy ū nū pātnīr vṛṣaṇo jagamyuh* 「老いは、体たちの美しさを損ないます。今すぐにでも、雄牛 (男) たちは、妻たちのもとへ向かうべきなのです」 ... 2 ... *sām ū nū pātnīr vṛṣabhir jagamyuh* 「今こそ、妻たちは、雄牛たちと交わるべきなのです」

A. : I 179,3 *nā mṛṣā śrāntām yād āvanti devā vīśvā it spṛdho abhy āśnavāva | jāyāvēd ātra śatānītham ājīm yāt samyāñcā mithunāv abhyājāva* 「神々が援助する努力 (苦行) [の結果] は、無駄ではない。あらゆる競争相手をも、我ら両者は征服することになる (pres. subj.),

この時、百の策略を伴う競争に、まさしく我ら両者は勝つことになる (*pres. subj.*), [我ら両者が]一組となって、同じ目標を向いて目がけて[戦車を]駆ることになるなら (*pres. subj.*)」

I 165,7 はインドラとマルト神たちとの会話である。先行詩節では、マルト神たち (M.'s) が自立性 (*svadhā-*「自らの決定権」) を有しインドラ (I.) と対等の (／優位の) 立場にあることを主張するが (5), I. は過去の出来事を持ち出してこれを否定する (6)。これに対するマルトたちの更なる反論が第7詩節である。三詩節全てに *hí* の使用が見られる:

M.'s: I 165,5 ... *indra svadhām ānu hí no babhūtha* 「インドラよ、我々自らの決定に、君は従ったのだ (*hí ... perf. ind.* Konstatierung)」

I.: I 165,6 *kāva syā vo marutaḥ svadhāsīd yān mām ékaṁ samādhattāhihātye | ahām hū ūgrās taviṣās tūviṣmān víśvasya śátror ānamaṁ vadhasnāhi* 「どこに、マルトたちよ、君たちのそういう (君たちが言っている) 自らの決定があったのか、蛇 (ヴリトラ) 殺しにおいて、わたし一人を、君たちが一緒になって放置した時に。(この) わたしが、強者として、力強い者として、力を備えた者として、個々の敵の [体を], 諸々の兵器によって押し伏せたのだ (*ahām hí ... aor. ind.* Konstatierung)」。

M.'s: I 165,7 *bhūri cakārtha yūjyebhir asmé samānébhir vṛṣabha páuṁsyebhiḥ | bhūriṇi hí kṛnāvāmā saviṣṭhé- indra krátvā maruto yád vásāma* 「多くの事々を君は為した、同盟者たち (我々) と共に、われわれのもとで、(お互いに) 同じ男らしさ [の発揮] によって、雄牛よ。多くの事々を、最も強大な者よ、我々 (インドラとマルト神たち) は為すことになる (*hí ... pres. subj.*), インドラよ、意志力によって、マルトたちよ、我々が意志することになれば<sup>160</sup> (*pres. subj.*)」

インドラとマルト神たちとは互いの正当性を主張し合っており、各詩節において用いられた *hí* は、第5, 6詩節では過去の確認 (*perf. ind.*) を、そして第7詩節では未来に対する見込みを、それぞれ聞き手に対して強調しているものと考えられる<sup>161</sup>。それぞれ、*hí* + *perf. ind.* 「～したではないか」、*hí* + *pres. subj.* 「必ずや～することになるであろう」のニュアンスに近いと思われる。

<sup>160</sup> *kṛnāvāmā* の主語はインドラとマルトたち、*vásāma* のそれはマルトたち。*yád* 条件節では、聞き手がそれまでのインドラから (話し手以外の残りの) マルトたちへと変わっている、GELDNER ad. loc.。

<sup>161</sup> Cf. DELBRÜCK 522, HETTRICH 180.

### 3.1.2 見込みの公言

見込みの公言は、意志表明における宣言と同様、祭式儀礼の場での発言に対して設定され、公に発語すること自体に重点が置かれていると考えられる。一例 (I 191,10) を除けば、見込みの伝達と同様に、全て何らかの条件を伴っているのが特徴的である (以下 A 3.2 b) を参照)。宣言の場合と同じく、儀礼の対象たる神々を聞き手=2人称とする場合 (a)、神々を 3人称に置く場合 (b)、更には聞き手や儀礼対象とは殆ど関係無く、話し手自身にのみ関する見込みを発言する場合 (c)、に分類することが出来る：

#### (a)

I 91,6 *t<sub>u</sub>vām ca soma no váso jivātum ná marāmahe* 「きみが、ソーマよ、我々の生きることが欲することになれば、我々は死なない (であろう) (aor. subj.)」

VIII 100,2 *ásaś ca tvām dakṣiṇatāḥ sákhā mé 'adhā vṛtrāṇi jaṅghanāva bhūri* 「きみ (ヴィシュヌ) が盟友として、私の右側に居ることになれば (pres. subj.), そうすれば、多くの障碍たちを、我ら両者は [一つ一つ] 打ち倒すことになる (intens. pres. subj.)」

X 83,7# *abhí prēhi dakṣiṇatō bhavā mé 'adhā vṛtrāṇi jaṅghanāva bhūri* 「向かって君 (マニユ：戦意) は進め (pres. iptv.)。私の右側に君は現れよ (pres. iptv.)。そうすれば、多くの障碍たちを、我ら両者は [一つ一つ] 打ち倒すことになる (intens. pres. subj.)」

#### (b)

VIII 95,6 *purūṇīy asya páuṃsīyā śiśāsanto vanāmahe* 「彼 (インドラ) の、多くの諸々の男らしさを勝ち取りたいと欲すれば、我々は克ち得ることになる (aor. subj.)」

IX 61,11 *enā víśvānīy aryá á dyumnāni mānuṣānām | śiśāsanto vanāmahe* 「この者 (ソーマ) によって、敵から、一切のマヌの子孫たちの諸々の輝かしさを勝ち取ろうと欲すれば、我々は克ち得ることになる (aor. subj.)」 (Pāda c = VIII 95,6d)

VII 88,3 *ā yád ruhāva váruṇas ca nāvam prá yát samudrám iráyāva mādhyam | ádhi yád apām s<sub>a</sub>núbhiś cárāva prá preṅkhā inkhayāvahai śubhé kām* 「[私と] ヴァルナとが舟に乗り込むことになれば (aor. subj.), [舟を] 海の真中へ送り出すことになれば (pres. subj.), 水たちの背中たち (水面) を通って進み行くことになれば (pres. subj.), ブランコに乗って我ら両者は身を揺らし合うことになる (pres. subj.), 華やぎ誇るために」

#### (c)

I 191,10 *sūrye viśám ā sajāmi dṛtīm sūrāvato grhé | só cin nú ná marāti nó vayām marāmā-ré asya yójanam hariṣṭhā mādhu t<sub>u</sub>vā madhulā cakāra* 「太陽 (スーリヤ) に、毒を私は引掛ける (pres. ind.)。革袋をスラー酒を持つ者の家に (のように ?)。決して彼 (患者) が死ぬことは無い (であろう) (aor. subj.)。一方われわれも死ぬことは無い (であろう)」

(aor. subj.)。ハリたちの上に立つ〔太陽〕は、それ(毒)の作用を遠くに〔した(遠ざけた)〕。君(毒)を甘く、それはした(perf. ind.)、甘味の〔薬草(解毒用の薬草)〕は」

[I 191,10d *nó vayám marāma* = 11d = 12d]

(a) と (b) の例はいずれも、神々からの力添えがあった場合に、話し手たち或いは話し手とその神々とが何らかの好ましい事態に至ることを確信もしくは予測する発言である。

(c) は、解毒用植物の作用を確認するとともに、その効果を想定している場面である。いずれの場合も話し手は、文の内容を公の場で——神々と人々が聞いているとの前提で——明言することによって、その言葉の実現力(*bráhman-*)を発効させて、実際にそうした事態が未来に起こる保証を得ようとしているものと考えられる。特に (a) や (b) の場合、これは儀礼対象の神々に対する婉曲的な念押し、或いは脅迫に近い発言とも言えよう。

### 3.1.3 独り言

意志表明における独り言と同様に、未来に予測される事態を話し手自身の独り言もしくは思考内容として表現する。2例のみ例証されており、1例は *íti* を伴う：

IV 18,2 *bahūni me ákṛtā kárt<sub>u</sub>vāni yúdhyaí t<sub>u</sub>vena sám t<sub>u</sub>vena prchai* 「多くの為されたことのない事々が、私(インドラ)によって為されるべきである。或る者とは、私は戦うことになる( pres. subj.)。或る者とは、私は協議し合うことになる( pres. subj.)」(出生の直前、母の胎内でのインドラの言葉、cf. A 1.1.3)

VIII 93,5 *yád vā pravṛddha satpate ná marā íti mányase | utó tát satyám ít táva* 「或いはもし、増長した略奪隊の長(インドラ)よ、『私は死ぬことはない(であろう)(aor. subj.)』と君が思っているなら、それもまた、君(にとって)のまさしく真実ではある」

## 3.2 見込みの諸相

### a) 見込みの表現形態：要求や条件の提示を伴う場合

見込みの用例は殆どの場合、聞き手＝2人称(公言の場合には儀礼対象＝3人称も)に対する要求や条件を伴って表わされる。その際、条件節には同じく接続法が用いられる。主文／主節の1人称接続法は、それら前提となる内容が実現した際に初めて可能となる事態を、聞き手＋話し手を主語として表現する。命令や条件の結果、実際に利益を蒙るのは話し手(詩人等)の方であるが、そのことを相手も含めた「我々」の事態として表現することで、話し手と聞き手(儀礼対象)とが密接な連携関係のもとで共同作業を行なうことを強調すると同時に、その事態が必ず実現することを相手に迫っているものと考えられる：

I 179,3 *vísṣvā it spṛdho abhyāśnavāva | jāyāvēd ātra śatānītham ājīm yāt samyāñcā mithunāv  
abhyājāva* 「あらゆる競争相手をも、我ら両者（アガスティヤとローパームドラー）は征  
服することになろう（pres. subj.），この時、百の策略を伴う競争に、まさしく我ら両者  
は勝つことになろう（pres. subj.），[我ら両者が] 一組となって、同じ目標を向いて目が  
けて[戦車を] 駆ることになるなら（pres. subj.）」

VIII 100,2 *āsaś ca tvām dakṣiṇatāh sākḥā mé 'adhā vṛtrāṇi jaṅghanāva bhūri* 「きみ（ヴィシュ  
ヌ）が盟友として、私の右側に居ることになれば（pres. subj.），そうすれば、多くの障  
碍たちを、我ら両者は[一つ一つ] 打ち倒すことになろう（pres. subj.）」

X 83,7# *abhī prēhi dakṣiṇatō bhavā mé 'adhā vṛtrāṇi jaṅghanāva bhūri* 「向かって君（マニユ：  
戦意）は進め（pres. iptv.）。私の右側に君は現れよ（pres. iptv.）。そうすれば、多くの障  
碍たちを、我ら両者は[一つ一つ] 打ち倒すことになろう（pres. subj.）」

これらの例が全て 1 人称接続法の双数形を示していることは、この表現形式の性格上、話  
し手と聞き手の間の個人的な関係性が強調されることが多いからであると思われる。次の  
VII 88,3 では、儀礼対象たるヴァルナは条件節・主節の両方に互って 1 人称主語の中に含  
まれている：

VII 88,3 *ā yād ruhāva vāruṇaś ca nāvaṃ prā yāt samudrām irāyāva mādhyam | ādhi yād apām  
sānūbhiś cārāva prā preṅkhā īṅkhayāvahai śubhé kām* 「[私と] ヴァルナとが舟に乗り込  
むことになれば（aor. subj.），[舟を] 海の真中へ送り出すことになれば（pres. subj.），  
水たちの背中たち（水面）を通して進み行くことになれば（pres. subj.），ブランコに乗  
って我ら両者は身を揺らし合うことになろう（pres. subj.），華やぎ誇るために」

ただしここでは、直接未来のことが言われているのではなく、かつて詩人とヴァルナとが  
緊密な協力関係にあったという過去のことが述べられている。接続法には過去形が存在しな  
いため表面的には区別出来ないが、文脈（→ 各論）からは、視点は過去に置かれていると  
思われる。詩人は昔の両者の関係をヴァルナに想起させることで、間接的に現在以降にも同  
様の関係を迫っているものと解される

逆に次の例では、条件節では 1 人称の意志作用だけが述べられ、主節では聞き手（インド  
ラ）も主語に含めて 1 人称接続法が使われている。この表現により話し手であるマルトたち  
は、彼らとインドラとの共同作業が、自分たちの意志の有無に左右されることを主張してい  
ると思われる：

I 165,7 *bhūri cakārtha yūjīyebhir asmé samānēbhir vṛṣabha páuṃsiyebhiḥ | bhūrīṇi hí kṛṇāvāmā*

*śaviṣṭhé-ndra krátvā maruto yád vásāma* 「多くの事々を君は為した，同盟者たち（我々）と共に，われわれのもとで，（お互いに）同じ男らしさ〔の発揮〕によって，雄牛よ。多くの事々を，最も強大な者よ，我々（インドラとマルト神たち）は為すことになるう (*hí ... pres. subj.*)，インドラよ，意志力によって，マルトたちよ，我々が意志することになれば (*pres. subj.*)」

このように「見込み」の用例には，条件となる内容を受け，その結果見込まれる事態を表わすという性質が顕著である。その際条件節には，相手への命令，相手と自分との共同作業，話し手だけの行為等が述べられるが，いずれの場合も，主節の1人称接続法が双数もしくは複数に置かれ，話し手と聞き手／儀礼対象の双方に関わる未来の事態を表現することは共通している。

#### b) 行為の実現時期：一般的（繰り返し有効な）見込み～条件付き見込み

意志表明の場合と違い，1人称接続法が発話直後や近い未来（同じ *Sūkta* の中など）に対する見込みを表わす例は，論理的に可能であっても，RV には見られない。このことは，想定された未来が発話時に近ければ近いほど，話し手がその実現力を握っているものとして——つまり意志表明として——表現されることが多くなる，という実際の事情を反映しているのかも知れない，cf. A 1.2.2 b)。このことは人称の別に関わらず当てはまると思われるが，1人称の場合には，話し手自身のことを対象にしているために，特にその傾向は強いと思われる。その一方で見込みの機能においては，意志表明には見られなかった比較的遠い未来を表わす用例が1例のみ例証されている。十分に予想されるにも関わらず用例が極めて少ないのは，恐らく RV の内容的な制約と「見込み」の全体数の少なさによると思われる：

IV 18,2 *bahūni me ākṛtā kṛt<sub>u</sub>vāni yúdhyaī t<sub>u</sub>vena sám t<sub>u</sub>vena pr̥chai* 「多くの為されたことのない事々が，私（インドラ）によって為されるべきである。或る者とは，私は戦うことになるう (*pres. subj.*)。或る者とは，私は協議し合うことになるう (*pres. subj.*)」(A 3.1.3)。

さて A 1.2.2 b) では，意志表明が未来全般を対象とすることにより，一般的心構えを表わし得ることを確認した。一方，II 接続法の基本機能 b) で見たように，見込みの機能も同様に，未来全般に該当する事態や何度も繰り返される事態を表わすことがあり，更には殆ど時間の観念が関係しない超時間的な一般論に近づくこともある。しかしながら1人称の場合には，こうした事例を確定するのは難しい。話し手が自分自身に起こる事態を未来全般に当てはまることとして，更には一般論として表現しているかどうかは，通常文脈からは判断し難いからである。しかしそれでも，そうした状況は論理的に可能であり，また以下 b) で

見るように、条件付きの見込みも文脈によっては一般論に近づくと言える。恐らく「見込み」の用例の中で、未来全般／一般論を表わす性格が唯一強く読み取れるのは否定文であろう：

VIII 93,5 ná *marā īti* mānyase ... 『私は死ぬことはない（であろう）(aor. subj.)』と君（インドラ）が思っているなら…』

I 191,10 *só cin nú ná marāti nó vayām marāmā- aré asya yójanam hariṣṭhā mādhu t<sub>u</sub>vā madhulā cakāra* 「決して、彼（患者）が死ぬことは無い（であろう）。一方、われわれも死ぬことはない（であろう）(aor. subj.)。ハリたちの上に立つ〔太陽〕は、それ（毒）の作用を遠くに〔した（遠ざけた）〕。君（毒）を、それは甘くした、甘味の〔薬草（解毒用の薬草）〕は」 [I 191,10d *nó vayām marāma* = 11d = 12d]

意志表明の否定が、未来全体を否定し得ることから一般的心構えを表わしたように（→ A 1.2.2 b)), 見込みの否定もしばしば一般論を表わす, cf. HOFFMANN 239。上の VIII 93,5 でも、インドラ神が神々の不死という性質を未来全般に亘って確信しているか、或いは一般論として語っているものと理解される。話し手が不死なる神々の一員であることを考慮すると、真実／一般論の可能性が高いと思われる。一方 I 191,10 は解毒を施す際の／解毒用の薬草を称える歌であるが、話し手はその解毒作用ゆえに「自分たちが死ぬことはなかろう」と推測・確信しているか、或いは薬草の絶対的な効用を、一般論として（「自分たちは決して死ぬことはない」）表わしているか、のいずれの可能性も同様にある。

このように、話し手の見込みが漠然と未来全般を対象とする場合は極めて少ない。その一方で、先に a) **見込みの表現形態**でも確認したように、話し手の見込みも時や条件によって限定される場合が多い：**条件付き見込み**。条件付き心構えの場合と同様に、そうした限定の提示には幾つかの文法手段が用いられ、従属節（条件節）では常に接続法が用いられることも、条件付き心構えと共通する特徴である：

<副詞的要素 (ptcpl.) による>

VIII 95,6 *purūṇi asya páuṃsya śiśāsanto vanāmahe* 「彼の多くの諸々の男らしさを、勝ち取りたいと欲すれば、我々は克ち得ることになろう (aor. subj.)」

[VIII 95,6d *śiśāsanto vanāmahe* (aor. subj.) = IX 61,11c]

<接続詞節（条件節）による>

I 91,6 *t<sub>u</sub>vām ca soma no váso jivātum ná marāmahe* 「きみが、ソーマよ、我々の生きことを欲することになれば (pres. subj.), 我々は死なない（であろう）(aor. subj.)」

I 165,7 *bhūriṇi hí kṛṇāvāmā śaviṣṭhé- ndra krátvā maruto yád vásāma* 「多くの事々を、最も力みなぎる者よ、我々（インドラとマルトたち）は為すことになろう (pres. subj.), イン

ドラよ、意志力によって、マルトたちよ、我々が意志することになれば (pres. subj.)」(→注160)

VIII 100,2 śasā ca tvām dakṣiṇatāh sākḥā mé 'adhā vṛtrāṇi jaṅghanāva bhūri 「きみ (ヴィシュヌ) が、盟友として私の右側に居ることになれば (pres. subj.), そうすれば、多くの障碍たちを、我ら両者は [一つ一つ] 打ち倒すことになろう (intens. pres. subj.)」

[更に I 179,3 jāyāva (pres. subj.) ... yād abhyājāva (pres. subj.), VII 88,3 yād ruhāva (aor. subj.)... prā yāt ... irāyāva (pres. subj.) ... yād ... cārāva (pres. subj.) ... prā ... inḥayāvahai (pres. subj.)]

<先行する命令文 + 接続詞 *adhā* による>

X 83,7# abhī prēhi dakṣiṇatō bhavā mé 'adhā vṛtrāṇi jaṅghanāva bhūri 「向かって君 (マニユ: 戦意) は進め (pres. iptv.). 私の右側に君は現れよ (pres. iptv.). そうすれば, 多くの障碍たちを、我ら両者は [一つ一つ] 打ち倒すことになろう (pres. subj.)」

VIII 100,2 と X 83,7 の主文／主節は同一 Pāda からなる。VIII 100,2 が接続詞 *ca* による条件節を伴うのに対して、X 83,7 には命令文 (pres. iptv. 2x) が先行する。いずれも主文／主節の *adhā* が先行文／節を条件として受けており、従属節と命令文とが事実上同等の価値で機能していることが伺える。

### 補説3 見込み／意志表明 ?

見込みの用例の中には「条件節 + 1人称接続法」、もしくは「2人称命令法 + 1人称接続法」からなる用例が見られる。一方で意志表明や勧誘の用例にも、これらと構造上極めて似た例が散見される。これらがそれぞれ別の機能で理解されるのは、純粹に内容的な解釈に基づく。例えば次の一組 (見込み—意志表明の順) は、いずれも条件節・主節に1人称接続法を持つが、I 179,3 では、主語が意図的にある行為を為せば (条件節) その結果を同じ主語が享受する (主節) ことを言っており、主節に意志表明は相応しくない。しかし X 27,2 の内容は、聞き手=インドラの力添えによって主語がある行為を為し得た際に (条件節), 主語がインドラにその見返りを贈る (主節) ことであるから、主節は意志表明としてのみ理解される:

I 179,3 viśvā it spṛdho abhy āśnavāva | jāyāvēd ātra śatānītham ājīm yāt samyāñcā mithunāv abhyājāva 「あらゆる競争相手をも、我ら両者は征服することになろう (pres. subj.), この時、百の策略を伴う競争に、まさしく我ら両者は勝つことになろう (pres. subj.), [我ら両者が] 一組となって、同じ目標を向いて目がけて [戦車を] 駆ることになるなら (pres. subj.)」

X 27,2 *yádíd ahám yudháye samnáyān.y ádevayūn tan<sub>a</sub>vā śúsujānān | amā te tūmram vṛṣabhām pacāni* 「もしもわたしが、神々を求めない、いきり立っている者たちを、戦うために連れ集めることになるなら (pres. subj.), 家で肉付きのいい牡牛を、君に私は調理しよう (pres. subj.)」

X 27,2 のような例では、交換条件を未来に予測される事態として（つまり見込みとして）表わすことで、give-and-take の関係を強調していると捉えることも不可能ではない：「私が～することになるなら、私は君に～するであろう」。しかし、A 1.2.3 b) で見た他の多くの例と同様、話し手側からの交換条件は意志表明によって提示されていると見るのが最も自然な解釈であり、言葉の現象を理解する上では中立的な作業仮説であると思われる。

次の 3 つの例（見込み—勧誘—意志表明の順）はいずれも、命令文の内容が実現した時に続いて起きる事態を表わしており、事実上「条件節 + 主節」と等価／類似の構造と言える。しかも、3 例とも「移動を表わす動作の 2 人称命令法 + 1 人称接続法」からなっており、X 83,7 と VI 55,1 とは、先行する命令法の主語が 1 人称主語に含まれるという点でも一致している。しかしそれぞれの文脈から判断すれば、これらは異なる機能によって理解されるべきである：X 83,7 は、命令が遂行された場合に両者にとって（実際は話し手にとってのみ → A 3.2 a)）利益が生まれることを表わしており、そのことを相手に誘いかけているとは考え難い。また、1 人称に聞き手も含まれるため、意志表明を表わす可能性も低い。一方 VI 55,1 では、1 人称接続法が表わす聞き手との共同作業は、話し手の望む事態であると考えられるため、呼び寄せた相手を次なる行為に勧誘していると理解するのが最も自然であろう：

X 83,7# *abhi prēhi dakṣiṇatō bhavā mé 'adhā vṛtrāṇi jaṅghanāva bhūri* 「向かって君（マニユ：戦意）は進め (pres. iptv.)。私の右側に君は現れよ (pres. iptv.)。そうすれば、多くの障碍たちを、我ら両者は「一つ一つ」打ち倒すことになるろう (pres. subj.)」

VI 55,1 *ēhi vām vimuco napād āghṛṇe sām sacāvahai* 「やって来い (pres. iptv.)。我ら二人は、解放の子（プーシャン）よ、放熱する者よ、添い合おうではないか (pres. subj.)」

I 114,3 *sumnāyānn id viśo asmākam ā carā- aṛiṣṭavīrā juhavāma te havīḥ* 「まさしく善意をなしつつ、われわれの諸部族のもとへ、君は歩んで来い (pres. iptv.)。男子たちを損なうことのない者たちとして、君（ルドラ）への供物を我々は献じよう (pres. subj.)」

恐らく見込み／意志表明の判断が最も難しいのは、一部の「神々への命令／神々が主語の条件節 + 1 人称接続法」の例であろう。次の 3 つの詩節はいずれも A 1.1 において意志表明と判断された例であるが、一方でまた、先行する神々への命令文や条件節が 1 人称接続法の表わす事態を可能たらしめているようにも見える。その場合、上に見た X 83,7 と同じく

見込みの機能が想定される：「…せよ。そうすれば我々は…であろう」。しかしながらこれらの例では、命令文／条件節と主節との間の因果関係や時間的前後関係が不確かである → A 1.2.2 b)。それに加えて、祭式儀礼の場では神々への要求に控え目で丁寧な物の言い方は使われず、直接的で半ば尊大な表現が好まれることや (A 1.2.3 b))、またその際には結果先取りの「勝利宣言」に典型的に見られるような一方的な意志表明が多用されること (A 1.2.3 c)) に鑑みれば、以下の例は、A 1.2.3 c) で判断したように、神々への要求と自らの意志とを同時に表現する、意志表明に特徴的な表現形態として理解するのが相応しいと結論付けられる。「条件節 + 1人称接続法」の例も、これに準じて判断される。また V 16,5 と VII 24,6 とは、一連の Sūkta の最後詩節における意志表明 (A 1.2.2 c)) にも属する：

V 16,5# *nū na áéhi vár,yam ágne grṇāná ā bhara* | *yé vayám yé ca sūrāyaḥ s<sub>u</sub>vastí dhāmahe sácā* 「さて今、我々のもとへ君はやって来い (pres. iptv.)。望ましいものを、アグニよ、歌い迎えられつつ、君は持って来い (pres. iptv.)。われわれ (詩人たち) と、そして主人 (祭主) なる者たちは共に無事を手にしよう (aor. subj.)」

VII 24,6# = VII 25,6# *evā na indra vár,yasya pūrdhi prá te mahīm sumatīm vevidāma* 「こうして、インドラよ、望ましいものの [中から]、我々に君は与えよ (aor. iptv.)。君の偉大なよき思考を、我々は繰り返し見出そう (intens. pres. subj.)」

VII 98,4 *yád yodháyā maható mányamānān sākṣāma tán bāhúbhiḥ śāsadānān* 「もし [自分たちを] 偉大であると思っている者たちを、君が (我々と) 戦わせることになるなら (pres. subj.)、我々は征服しよう (aor. subj.)、腕々を驕っているその者たちを」

## B 非疑問文——従属節

従属節には形式的にも意味的にも多様な文構造が存在するため、そこに現れる 1 人称接続法の機能を統一的に理解するのは困難である。しかしそれでも従属節という構造が、主文／主節とは異なる大きな特徴を共有していると考えられることから、以下ではそれらを文構造によって更に下位区分し、それぞれにおける 1 人称接続法の機能を検討・確認する。それは、今後の 2/3 人称接続法の研究、或いは各種の従属節に関する研究にとっても重要な視座を提供してくれるものと思われる。最初に、主文／主節において確認した意志表明や見込みといった機能が、従属節ではどのように現れ得るか、或いはそれらと違った機能を設定する必要があるかどうか、について検討する。

「意志表明」は、話し手の心的態度そのものの表出であるから（→ II 接続法の基本機能 a) ; A 1), 命令法と同じように、主文／主節でのみ起こり得るものであり、一般にそれらを説明的に補う役割しか持たない従属節の中には想定しにくい：??「君がしろ!／私がしよう! …の仕事」<sup>162</sup>。もし人の意志や意図が従属節の接続法に関わるとすれば、それは意志の直接的な発現ではなく、意志が記述され得るか否かという問題になろう。その場合、従属節の主語（1 人称＝話し手）の意志を述べる場合（「私が～しようとする／するつもりである」）か、主語（＝話し手）自身に対する話し手の意志（話し手自身の当為・必然）を表現する場合（「私は～すべきである」）が考えられる。しかし主語の意志は、fut. ind. や desid. ind. の機能領域と重なることが予想され（→ II 接続法の基本機能 a) 3), 4)), また実際にこの機能が疑われる用例は殆ど無いため、接続法の機能として設定されるべきか否かは疑わしい。二つ目の、話し手の自分自身に対する意志は、主文における 2/3 人称接続法と同じ意志の機能を、話し手自身つまり 1 人称に反射させたものと捉えることが出来る。しかし、話し手自身が自分に対する当為・必然を表現するということは、論理的には可能であるにしても、実際に発言された時点で、既にそれが話し手の意志であるのか、一般的義務としての表現であるのか、区別がつかない<sup>163</sup>。つまり、言葉の表現レベルにおいては、「私は～すべきである」という発言は、常に客観的に見た自らの義務の記述として理解され、そこに話し手（のみ）の意志を認めることは事実上不可能である。A 1.1 補説 1 では、主文でも 1 人称接続法に「私は～すべきである」（記述）の用例が見られないことを見たが、

<sup>162</sup> 発語行為という観点から見たこうした主文／主節と従属節の違いは、言語学的には“illocutionary act”「発語内行為」であるか否か（或いは“Illokutivität”の有無）ということの説明されるものと思われるが、本論ではそれらについての検討が十分でないことと、また極力一般的な言葉で説明することを目的とするために、“illocutionary act”等の概念や用語は用いないこととする。

<sup>163</sup> この問題は、法組織全体の議論に触れるのみならず、規定や義務を表わす願望法（→ II 接続法の基本機能 a) 2)) との関係にも関わるため、2/3 人称を含めた議論の中で扱われるべき課題である。

これはそもそも、この意味を接続法の機能から導くことが出来ないからではないかと推察される、cf. C 冒頭。換言すれば、1人称において話し手の意志が入る場合には、必ず「意志表明」という形で現れるものと理解される。そこでもし従属節の1人称接続法が、主語＝話し手の当為や義務を表わすことがあるとすれば、それは話し手の意志から直接導かれるのではなく、主文における2/3人称に対する話し手の意志が、一旦一般的な義務の表現へと移ったものを基点に捉える必要があろう。しかしながら、以下で見るように、従属節の1人称接続法に、実際にそうした解釈が要求される用例は見られない<sup>164</sup>、cf. C 2 疑問節。

従属節における接続法の用例に確実に見られるのは見込みの機能である。II 接続法の基本機能 b) では、主文における「見込み」も事態の実現度に対する一定の判断を表すという意味で、話し手の心的態度の一つであることを指摘した。しかしそれは、必ずしも「表明」のような強い態度の発現ではないため、従属節の中に想定することは可能と思われる：e.g. 「～するであろう時に；～であろう人」etc.。その一方で、多くの用例においてより自然な理解を可能にするのは、殆ど心的態度の要素が面に出ない、純粹に未来の事態に言及するだけの機能である：e.g. 「～する（ことになる）時に；～する（ことになる）人」。この機能は「見込み」の延長上で理解され、実際の文脈理解においても両者の明確な区別は必ずしも有意的ではないため、本論ではしばしば一緒に扱う。

実際の用例の解釈において、先に見た意志に関わる諸機能と、最後に見た「見込み～純粹な未来」の機能とを分ける最大の基準は、当該語形によって表わされる行為が文全体の基準時に対して現在の状態（意志）を表わしているのか、それとも未来において実際にその行為が遂行されることを指しているのか、ということである。例えば、α) 「もし彼女が出て行くつもりなら／出て行こうとするなら、私は彼女を引き止めるだろう」では、従属節が表わすのは未来時の行為そのものではなく、未来に行為を遂行する意志をその時点で持っているということである。これに対し、β) 「もし彼女が出て行くなら、私は彼女の後を追うだろう」の場合、従属節は未来時に実際に行為が行われることを表わしている。α) では、条件節の動詞の内容がまだ起こっていない為に主節の内容が意味を持つが、β) のように、主節の内容が条件節の行為の遂行を待って初めて成立するような場合には、条件節の動詞に未然の予定や意欲を想定することは不可能であろう。後者(β)のような場合には、1人称接続法は「見込み」や純粹な未来に言及する機能によってのみ理解可能である。

以上の観点を踏まえて、以下用例を大きく従属節(1)と関係節(2)という文構造によって分け、それぞれを更に形式的・意味的に分類した上で、1人称接続法の機能を検討する。

<sup>164</sup> 目的節等に日本語の「～すべく」を当てることは、ここでの議論とは何の関係もない。そもそも「すべき／すべく」は多義的であるし、また目的節は、以下の議論で見るように、主節の行為主体やそれが表わす事態に従属することから、必然的にこうした訳を必要とするに過ぎない。紛らわしさを避けるため、本論では目的節に「～すべく」は使わない。

## 1 従属接続詞節

1人称接続法が用いられる従属接続詞節は 23詩節に 25例が例証されている。複数の異なる接続詞が類似の意味概念を表わす場合もあるが、逆に同一の接続詞が異なる意味を導く場合も見られる。しかし、後者のような例 (e.g. *yád*) は少なく、大抵は一つの接続詞と一つの意味とが対応することと、同様の意味を導く接続詞であっても、実際には形式的・機能的に微妙に異なる性質を示すことから、以下では接続詞の種類ごとに大別し、複数の機能を持つ *yád* に関しては、更に意味の違いによって下位区分して検討する。なお、時を表わす節と条件節とは、未来の事態に関する限り、必ずしも明確には区別出来ない場合もある。しかしそれでも、時を表わす節は事態が起きることをある程度前提とした言い方であるのに対して、条件節はそうした可能性についての判断を入れずに言う表現であると言うことが出来よう (もちろん実際には, *pres. ind./opt./subj.* などが使われることで、話し手の判断が様々に入り込むことになるが)。この区別は、接続法の機能の解釈とある程度関係するために、本論でもこの二つの節を分けて扱うことにする。

### 1.1 *yadā* + 1 人称接続法 (時)

用例は III 53,4 の1例のみである。従属節の1人称接続法は、話し手＝主語の意志とは関わらない、未来に予測され、起こるであろうことを前提とした事態を表わし<sup>165</sup>、更にこの未来時が、*yadā kadā ca* によって一般論化を受けている。主節には 3人称接続法が現れ、条件節の事態が起こった時に (何度でも) 有効となる話し手の意志を表わす, cf. A 1.2.2 b):

III 53,4 *yadā kadā ca sunāvāma sómam agniṣ tvā dūtó dhan<sub>u</sub>vāt<sub>i</sub>y ácha* 「いつであれ、ソーマを我々が搾ることになる時には、(その度に) アグニが使者として、君 (インドラ) へ向かって走るべし (*pres. subj.*)」

### 1.2 *yádi* + 1 人称接続法 (条件)

2箇所で例証されており、2箇所とも主節にも1人称接続法を伴う。いずれの場合も、*yádi* 節の1人称接続法には意志の要素は見受けられず、いずれも何らかの外的な要因をきっかけに話し手が行なうことが予想される未来の事態を表す。主文ではその事態が起こった場合の、話し手の意志表明を表す：

I 27,13#cd *yājāma devān yádi śaknāvāma mā jyāyasah śamśam ā vrkṣi devāḥ* 「神々を我々は祭ろう (*pres. subj.*)、もし我々に出来るなら (*pres. subj.*)。より格上の者の (権威ある) 言明 (非難) を、神々よ、私が我が身に引き受けることが無いようにせよ (*mā* + *aor. inj.*)」

<sup>165</sup> HETTRICH 220.

X 27,2 *yádíd ahám yudháye samnáyāñy ádevayūn tan<sub>4</sub>vā súśujānān | amā te túmraṃ vṛṣabhám pacāni tivrám sutám pañcadaśám ní śīncam* 「もしもわたしが、神々を求めない、いきり立っている者たちを、戦うために連れ集めることになるなら／が出来たら (pres. subj.), 家で君に、肉付きのいい牡牛を、私は調理しよう (pres. subj.). 十五 (杯) の、搾られた鋭い (舌を刺す) [ソーマ] を、私は注ぎ込む (pres. inj. → I 3.2.2)」

X 27,2 のように条件節が話し手が強く望む事態を表している場合、結果的に「我々に～出来るなら」の意味に近いと言える。また I 27,13 では、「出来る」の意味が語彙的に表されており、これが事実上本動詞の代わりを果たしていると理解される: [yajádhyai etc. (inf.)] *śaknāvāma\** → B 3. いずれの例も、話し手の望みの達成を条件とした強い心構え (意志表明) を表わしており、以下に見る *yád* 条件節に比べると、条件と帰結との結びつきがより強調されているように思われる: 「もし～出来るなら、その時は [必ずや] …しよう」。

### 1.3 *yád* + 1 人称接続法

1 人称接続法が現れる *yád* 節には、時、条件、補足という 3 種類の意味が確認される。理由を表わす確実な用例は無いが、時を表わす節に分類した VIII 61,11 *yád ín nú ...* がそれに当たる可能性もある。また、目的を表わす *yád* 節にはそもそも 1 人称動詞が現れないことについては、以下 B 1.4 を参照。

#### 1.3.1 *yád* 条件節

*yád* 条件節の 1 人称接続法は 7 回例証されているが、いずれも先に見た *yádi* 節の場合と同様に、話し手の意志とは関係無く、未来に話し手が行なうことが予測される事態を表わし、主節はそれが起きた時に初めて当てはまる事態を表わす。条件節の内容には、話し手にとって望ましいもの (a) とそうでないもの (b) とがあるが、このいずれかによって主節の内容も一定の相違を示す。*yád* 節が望ましい内容である場合 (3x) には、主節では 1 人称接続法の「見込み」の機能が用いられ、条件の内容を受けた結果予想される好ましい事態を表わす。また条件節・主節ともに、主語は話し手 + 聞き手 (或いは儀礼の対象たる神) からなる → B 3.2 a)。なお、*yád* 節は主節に前置される場合と後置される場合とがあり、以下の用例は前置 (VII 88,3) — 後置 (I 179,3, I 165,7) の順で挙げる:

(a)

VII 88,3 *ā yád ruhāva váruṇas ca nāvam prá yát samudrám íráyāva mādhyam | ádhi yád apām s<sub>a</sub>núbhiś cárāva prá preñkhá inkhayāvahai śubhé kām* 「[私と] ヴアルナとが、舟に乗り込むことになれば (aor. subj.), [舟を] 海の真中へ送り出すことになれば (pres. subj.),

水たちの背中たち（水面）を通して進み行くことになれば（pres. subj.），ブランコに乗って，我ら両者は身を揺らし合うことになろう（pres. subj.），華やぎ誇るために」

- I 165,7 *bhūri cakārtha yūjyebhir asmé samānébhir vṛṣabha páuṃs;yebhiḥ | bhūrīni hí kṛṇāvāmā śaviṣṭhé-ndra krátvā maruto yád vásāma* 「多くの事々を君は為した，同盟者たち（我々）と共に，われわれのもとで，（お互いに）同じ男らしさ〔の発揮〕によって，雄牛よ。多くの事々を，最も強大な者よ，我々（インドラとマルト神たち）は為すことになろう（pres. subj.），インドラよ，意志力によって，マルトたちよ，我々が意志することになれば（pres. subj.）」（cf. 注160）

- I 179,3 *ná mṛṣā śrāntām yád ávanti devā víśvā ít spṛdho abhy áśnavāva | jáyāvéd átra śatánitham ājīm yāt samyāncā mithunāv abhyājāva* 「神々が援助する努力〔の結果〕は無駄ではない。あらゆる競争相手をも，我ら両者は征服することになろう（pres. subj.），この際，百の策略を伴う競争に，まさしく我ら両者は勝つことになろう（pres. subj.），〔我ら両者が〕一組となって同じ目標へ向いて，目がけて〔戦車を〕駆ることになるなら（pres. subj.）」

条件節の内容が話し手にとって望ましくない場合（4x），つまり話し手が自らの意志に反した行為を行なうことになる場合には，主節ではそれを回避する事態が神格等に命じられるか説明される。こうした内容的特徴から，条件節は結果的に譲歩的な意味を帯びることが多い：「～することになるとしたら＝なるとしても，…せよ」etc.。これら（b）の用例は，条件節における接続法が，基本的に話し手／主語の意志の要素を持たず，未来に見込まれるあらゆる出来事について中性的に述べる機能だけを有していることを示唆するものと思われる：

（b）（以下前二者と後二者とはそれぞれ事実上同一例である）

- VIII 48,9 *yāt te vayām pramināma vratāni sā no mṛḍa suśakhā deva vāsyah* 「もしわれわれが，君（ソーマ）との諸々の誓いを損なうことになれば／なるとしても（pres. subj.），そういう君は我々に寛容たれ（pres. itpv.）。よき盟友として，神よ，よりよいことへ〔（我々を）導け〕」

- X 2,4 *yád vo vayām pramināma vratāni vidúṣaṃ devā áviduṣṭarāsaḥ | agniṣ tād víśvam ā pṛṇāti vidvān yébhīr devāṃ ṛtúbhiḥ kalpáyāti* 「もしわれわれが，君たちとの諸々の誓いを——知者たち（君たち）との〔諸々の誓いを〕，神々よ，より無知なる者（我々）たちが——損なうことになれば／なるとしても（pres. subj.），その時は，知者であるアグニが一切を元通りに満たす（pres. ind.），それらに（合わせて）神々を，彼が配当することになる（そういう）諸々の時節（ごと）に」

- VII 57,4 *ṛdhak sā vo maruto didyúd astu yád va āgaḥ puruṣātā kārāma | mā vas tāsyaṃ āpi*

*bhūmā yajatrā asmé vo astu sumatís cániṣṭhā* 「君たちの、マルトたちよ、その一撃は脇に逸れてあれ、もし、人であること故に、君たちに対して過失を我々が為すことがあれば／になっても (aor. subj.). 君たちのそれ (一撃) の中に、我々が身を置くことがないようにせよ (*mā* + aor. inj.), 祭るに値する者たちよ。我々のもとに、君たちの最も好ましい善意があれ (pres. ind.)」

X 15,6 *mā hiṁsiṣṭa pitarah kéna cin no yád va ágaḥ puruṣátā kárāma* 「君たちは傷付けてはならない (*mā* + aor. inj.), 父祖たちよ、我々を、如何なる方法によっても、もし人であること故に、君たちに対して過失を我々が為すことになれば／になっても (aor. subj.)」

### 1.3.2 時を表す *yád* 節

3 例が例証されている。このうち 2 例は、*yádā* 節の場合と同様、話し手の意志如何に関わらず、未来に起こることを前提とした事態を表現する。主節はそれが起きた時に有効となる、話し手の要求 (iptv.), 既成事実 (perf. ind.) を表す:

V 60,6 *áto no rudrā utá vā nāv āsyā- agne vittād dhaviṣo yád yájāma* 「そこで、ルドラ (の子) たちよ、我々の——或いはまた今、アグニよ——この供物のことを知れ (perf. iptv.), 我々が (君たちを) 祭ることになる時には (pres. subj.)」

V 7,3 *sám yád iṣo vánāmahe sám havyā mānuṣānām | utá dyumnásya sávasa ṛtásya raśmím ádade* 「滋養たちを、完全に我々が克ち得ることになる時には (aor. subj.), 完全に、マヌの子孫たちの供物たちを [我々が克ち得ることになる時には], 明るさの漲る力によっても、天理の革紐 (手綱) を、彼 (アグニ) は手に取っている (perf. ind.)」

これに対して次の VIII 61,11 では、*yád* [*ín nū*] 節の 1 人称接続法には、複数の異なった解釈が可能である:

VIII 61,11 *ná pāpāso manāmahe nārāyāso ná jádhavaḥ | yád ín nāv índram vṛṣaṇam sácā suté sákhāyam kṛṇávāmahai* 「悪しき者たちとしては、我々は思考すまい / [詩歌を] 考え出すまい (aor. subj.). 財を出さない者たちとしては、[思考す / 考え出す] まい、今、雄牛であるインドラを、搾られた [ソーマ] のもとで [我らが] 盟友に我々がしようとしている / することになる (pres. subj.), まさにその時に」

ここでは、主節の意志表明 (subj.) (思考すること) は、従属節の事態 (インドラを盟友にすること) の前提をなすか、或いは少なくともそれと同時に起こるという関係にある。この解釈は、*yád ín nū* の表現の分析からも支持される → 各論。もし従属節の内容が先に起

き（始め）ているとしたら、その前提となる／同時に進行すべき主節の事態が後続することになり、意味を為さない。そこで、*yád* 節が時を表わしているとすれば、*kṛṇāvāmahai* は、未来時に見込まれる進行中の動作を表わすか、もしくは、主語（＝話し手）の意志を表わしている可能性も出てくる（B 冒頭の議論を参照）：「～しようという（～しようとしている）まさにその時に…」。

また、主節と従属節とが同時進行の事態を、*kṛṇāvāmahai* が主語の意志を表わし得ることを考え合わせると、*yád ín nú* が、現在（*nú*）の話し手の状態を主節の（発言の）理由として表現している可能性もあろう：「私は（今）～しようとしているのだから／しているからには」<sup>166</sup>。理由節としての理解が確かな例において、他の人称の接続法の機能がどのような現れ方をするか、この例とともに検討する必要がある。

### 1.3.3 補足節「…ということ」<sup>167</sup>

この *yád* は節全体を名詞化して、より大きな文の中に埋め込む役割を担う。この種の節は内容を提示することにのみ主眼を置くために、*inj.* が用いられることもある → I 3.2.2 4)。接続法が *inj.* と異なるのは、単なる内容の提示だけではなく、未来という時の要素をも表わし得る点であろう。一般に、補足節に用いられる接続法は未来に予測される事態を表し、それに応じて主節も未来に関わる内容を表す場合が多い、cf. HETTRICH 401ff.。1人称接続法の用例は次の一箇所のみであり、主節にも接続法が用いられ、話し手の見込みを表わしている：

X 27,10 *átréd u me maṁsase satyám uktám dvipāc ca yác cátuṣpāt saṁsṛjāni | strībhir yó átra vṛṣaṇam pṛtanyād áyuddho asya ví bhajāni védah* 「一方まさしくこの時、私（インドラ）によって言われたことを本当であると、君は思うことになろう（aor. subj.），（即ち）二本足のものと四本足のものを、私が寄せ集めることになる（pres. subj.），ということ。この際、女たちと共に、雄牛（インドラ＝話し手自身）に戦をしかける者があれば（pres. subj.），この者の財産を、戦わずして私は（他の者たちに）分け与えよう（pres. subj.）」

*yád ... saṁsṛjāni* は、主節の構成要素の一つである *me ... uktám* 「私によって言われたこと」の内容を言い換えた（補った）ものであり、その内容全体が未来に実現する（*satyá-*）ものとして表現されている。*yád* 節が実際に事態が起こることに言及していることから、1人称接続法は、未来に属する事態の内容を提示するだけの機能を持つものと解せられる。主語の意志「私が～つもりであること」を想定するのは上記文脈からは不必要であり、その意味を

<sup>166</sup> *yád* 節が主節の事態の理由を表わす場合については HETTRICH 413f. を、それが主節の発言の理由を表わす場合については 415ff. を参照。

<sup>167</sup> Cf. HETTRICH 395ff. “Explikativsatz”。

敢えて設定する必要は無いであろう。

#### 1.4 *yáthā* + 1 人称接続法 (目的)

目的を表わす *yáthā* 節では、常に接続法だけが用いられる。目的を表す構文には他にも *yád* + 接続法／願望法があり、いずれも常に主文に後置されるという点では共通しているが、(接続法に限らず) 1 人称動詞が用いられるのは *yáthā* 目的節だけに限られる。HETTRICH 281ff. によれば、*yáthā* 目的節は常に話し手の意図を表わすが、*yád* 目的節にはそうした限定が無いという(つまり、話し手の意図も主文の主語の意図も表し得る)。そのため同書 284, 291 は、*yáthā* 目的節を特に「話し手に関係付けられた目的節 (Sprecherbezogene Finalsätze)」と呼び、またその際、「意図された事態は、常に発話現在の状況 (aktuelle Sprechsituation) から生じる事態或いは願望を受ける」ものと定義している(同書 290)。しかし、*yáthā* 目的節の使用環境が上記のような限定を受けているにしても、目的節に特別「話し手に関係付けられた」ものがあるかどうかは経験的に疑う余地があろうし、また下で見るように、構造的に話し手の意図を表わすことと、文脈的にそう了解されることは、区別されるべきである。このことは、1 人称接続法の機能の理解にも関わってくるため、以下用例を基に検討する。

*yáthā* 目的節における 1 人称接続法は全部で 7 箇所所で例証されているが、確かにその殆どにおいて HETTRICH の言う特徴が当てはまる。即ち、主文においては 1 人称 pres./aor. ind. (話し手自身の行為の報告／確認)、1 人称 aor. inj. (Koinzidenzfall)、2 人称命令法 (聞き手への要求) が用いられており、*yáthā* 節は確かに話し手の目的を表していると言える (pres. ind. 2sg. の用例については以下参照)：

I 111,2 *ā no yajñāya takṣata ṛbhumád váyah krátve dáksāya suprajāvatim iṣam | yáthā kṣáyāma sárvavīrayā viśá tán naḥ sárdhāya dhāsathā sāv indriyám* 「我々の祭式のために、リブ [の力] を伴う活力を、君たち (リブたち) は作り出せ (aor. iptv.)、意志力のために、能力のために、よく子孫に富む滋養を、全き男子に富む部族とともに我々が住むことになるように (pres. subj.)。そういう (感覚器官の) 活力を、我々の群れのために君たちは置き定める (創造す) べし (aor. subj.)、しかと」

II 30,11# *tām vaḥ sárdham mārutam sumnayúr giró- āpa bruve námasā dáivyam jánam | yáthā rayīm sárvavīram násāmahā apatyasācam śrútyam divédive* 「君たちマルトたちからなるその群れに、神々に属する一族に、善意を抱いて、歓迎歌を伴って、敬意を伴って、私は話しかけている (pres. ind.)、全き男子からなる財を、日ごと、我々が手に入れることになるように (aor. subj.)、後裔に伴う／を伴う、聞かれるべき [財] を」

X 36,11 *mahád adyá mahatām ā vṛṇimahé āvo devānām bṛhatām anarvánām | yáthā vásu vīrājātam násāmahai* 「今日、偉大なる助力を、我々は選び取る (pres. ind.)、偉大なる、高大なる、

競争者を持たない神々の（助力を）、男子たちから生じた財物を、我々が獲得することになるように（aor. subj.）」

X 52,5 *ā vo yakṣya amṛtatvām suvīram yāthā vo devā vārivaḥ kārāṇi* 「君たちの、よき男子からなる不死性を、私は祭って手に入れる（aor. inj., Koinzidenzfall）、君たちの、神々よ、広大な空間を、私がつくることになるように（aor. subj.）」

X 159,6 *sām ajaiṣam imā ahām sapātnīr abhibhūvarī | yāthāhām asyā virāsyā virājāni jānasya ca* (Pāda d = X 174,4d) 「すっかり打ち負かしたぞ（aor. ind.）、わたしは、これらの（ライヴァルである）妻たちを、優越する者として、わたしがこの勇士と民とを、遍く支配することになるように（pres. subj.）」

X 174,4d *asapatnāḥ kīlābhuvam – 5# asapatnāḥ sapatnahā- bhīrāṣtro viśāsahīḥ | yāthāhām eṣām bhūtānām virājāni jānasya ca* (Pāda d = X 159,6d) 「ライヴァルを持たぬ者に、明らかに私はなった（aor. ind.）、」 — 「ライヴァルを持たぬ者、ライヴァルを殺す者、王権を目指す者、繰返し獲得する者（として、／に[私はなった]）、わたしがこの（地上の）生き物たちと民とを、遍く支配することになるように（pres. subj.）」

最後の例は、主節と目的節とが詩節の境界を跨ぐ場合である。また次の I 173,9 では、詩節の前半と後半それぞれが「接続法 + *yāthā* ...」で構成されている。*yāthā* 目的節において動詞（接続法）だけが *yāthā* に前置される（i.e. Pāda の先頭に置かれる）構造は他にも見られることから<sup>168</sup>、ここでも主節が先行詩節にないかどうか疑われる<sup>169</sup>：

I 173,8cd *viśvā te ānu jōṣyā bhūd gāuḥ sūrīṁś cid yādi dhiṣā vēṣi jānān* 「一切の喜ばれるべき牝牛（ミルク）が君（インドラ）に従う（aor. inj.）、もし誰であれ主人（祭主）である人々を、祭りに際して／とともに（？）君が追い求めるならば（pres. ind.）」；9 *āsāma yāthā suśakhāya ena sāvabhiṣṭāyo narāṁś ná śāṁsaiḥ | āsad yāthā na índro vandaneṣṭhās turó ná kārma nāyamāna ukthā* 「当人（インドラ）とよき盟友たちで、我々があるように（？）、よき助力（者）を持つ者たちで[あるように]、男たちによる諸々の賞讃によっての如く。インドラが、我々の称讃の中にとどまる者であるように（？）、やり遂げる者が諸々の仕事をの如く、讃辞たちを引き連れつつ」

第8詩節は、一般化された条件節 *sūrīṁś cid yādi ... vēṣi* (pres. ind.) 及びその主節 *bhūd* (aor.

<sup>168</sup> GRASSMANN 1084 を参照：VI 23,10, VI 34,5 *āsad yāthā* ..., VI 36,5, VII 24,1, X 44,5 *āso yāthā* ..., VI 44,16 *mātsad yāthā* ..., VII 64,3 *brāvad yāthā* ..., VII 100,2 *pārco yāthā*, X 2,4 *bhūvo yāthā* ... (VI, VII 巻が多い)。

<sup>169</sup> そのような *yāthā* 目的節は他にも例証されている，DELBRÜCK 326, HETTRICH 288。

inj.: generell)<sup>170</sup> から、全体として一般論を表わすものと考えられる。しかし第9詩節では、話し手たち自身という特定の人間に関する事態が述べられていることから、*yáthā* ... が第8詩節 *bhūd* の（或いは *yádi* ... *vési* の？）目的節として機能している可能性は極めて低いと判断される<sup>171</sup>。また両詩節の内容的な繋がり乏しさからも、これらが主節—目的節を構成しているとは考え難い。その結果、当箇所を独立の文として理解するのが最も妥当と思われる。恐らくここでは、*ásāma/ásad* が主節の動詞として機能しており、*yáthā* 節内には同じ動詞 (*as*) が省略されているものと解される：*\*ásāma/ásad yáthā* ... [*ásāma/ásad*]「我々／彼は…であるように、あろう／ある」>「我々は…（のようで）であろう／あるべし」。同一の文の中で同じ動詞が省略されるのは通常の現象であり、またここでは特に *as* が単なる連結辞 (copula) として機能していることから、そのような冗長な表現が簡略されたと考えるのが自然であろう。或いは、もともと *yáthā* 節単独で話し手の意図や目的が表現している可能性もあろう。その場合、主節に当たる何らかの動詞が省略されており——pres. ind. や pres./aor. inj. (Koinzidenzfall) ——目的にあたる部分だけが強調された結果、それが事実上独立の文として機能しているものと解せよう：「我々が／彼が～であるように〔私は要求する／意志する etc.〕」>「我々が／彼が～であるように！」<sup>172</sup>。

以上で見た *yáthā* 目的節 + 1人称接続法の用例は全て、その意味を何が担っているかは別にして、内容上話し手の意図・目的を表す場面に用いられてる。しかし次の IX 76,5 では主節の動詞が pres. ind. 2sg. であり、*yáthā* 節は主節の主語（≠話し手）の目的を表わしていると言える：

IX 76,5# *sá indrāya pavase matsaríntamo yáthā jēsāma samithé t<sub>u</sub>vótayah* 「その〔君、ソーマ〕は、インドラのために清まる (pres. ind. 2sg.)、最も酔わせる者として、君による助けを伴って、合戦において、我々が勝利することになるように (aor. subj.)」

<sup>170</sup> *bhūd* に iptv. (hortativ) の価値を想定する (HETTRICH 290) のは無理。inj. が iptv. の代わりに使われるのは、対応する iptv. 語形が欠如している場合に限られるため、*bhūd* には当てはまらない、→ III 53,3 注を参照。

<sup>171</sup> HETTRICH 290 は、*yáthā* 目的節が話し手自身の発話時点と結びついた意図を表わすと論じているにも関わらず、第8-9詩節に主文（一般論）—目的節（現時点）の関係を認めることは可能であるとする：「*[bhūd]* が inj. hortativ でないとすれば（注170参照）… inj. は一般論的な意味であるかも知れない、そうすると、単に現時点の状況 (aktuelle Situation) を記述しているだけではなくなる。しかしそれでも、そのような一般論的な発言を通して、現時点の状況もまた同時に把握されているのである」(loc. cit. n. 99)。彼のこの主張は、HOFFMANN 130ff. を参考にしたものであるが、後者の議論はむしろ、目の前で起こっていること（通常 pres. ind.）が、主語の一般的な性質として inj. (generell) によっても表わし得ることを述べたものである（「彼は今煙草を吸っている」＝「彼は喫煙者である」）。このことが、しかし、主文と従属節——特に「常に話し手の意図を表わし、発話現在の状況にかかる」*yáthā* 目的節——との間で起こり得るとは考えられない。

<sup>172</sup> 例えば日本語でも、「時間通りに来い」とも「時間通りに来るように！」とも言える。この場合、後者の方が少し間接的で柔らかな感じがある。

ここでは、発話時に目で行なっているソーマ搾りのことが述べられており、その意味では確かに「従属節で述べられた事態は主節の主語のみならず、少なくともそれと同じくらい、話し手の関心事でもある」(HETTRICH 282f.)と言える。また、*yáthā* 節が明らかな主節の主語(≠話し手)の意図を表わすような用例(e.g.「我々が喜ぶように、彼は贈り物をよこした」等々)が他に見られないことから、*yáthā* 節が常に話し手の目的を表わすものであると結論付けることは可能であろう。しかしながら、IX 76,5のように文脈的な理解から結果的に意図の担い手=話し手が了解されることと、*yáthā* 節更には接続法が話し手の意志を表わすこととは別のレベルで考える必要がある。*yáthā* + 1人称接続法が明確に主節の主語の意図を表わすような文脈はそもそも RV では殆ど起こらず、1人称の利益が目的節で述べられる場合の多くは、他の *yáthā* 節の例と同様、主節もまた話し手=1人称自身の行為や、他人への命令や要求であるのが普通である。つまり、上で見た殆どの *yáthā* 節に話し手の意図が理解されるのは、主節が全て話し手自身の行為や、話し手による要求等を表わすことから必然的に導かれる結論でもあり、*yáthā* 節が「話し手に関係付けられた目的節」であることを積極的に支持するものではない。むしろ IX 76,5のような例や、主節を補足するという従属節の性質一般から考えて、*yáthā* 節は構造上、話し手に関係付けるよりも主節の事態の(よって主節の行為主体の)目的を表わすと考えるのが自然であろう。それが文脈から「話し手の関心事でもある」かどうかは、解釈上の二次的問題に過ぎない。

以上に見た *yáthā* 節の性質からも、また B の冒頭で確認した従属節一般の性質からも、*yáthā* 節の目的の意味が1人称接続法の機能に由来する可能性は考え難い。また、何らかの意志が関わる可能性として、fut. ind. や desid. ind. に相当する機能を想定するのも難しい。そうした主語の意志の記述は、それ自体目的を表わす *yáthā* 節においては、また別の意味を生み出すことになろう:「私が～するつもりでいるために／～しようとするように」。一方、一般的な当為・必然の記述を表わす機能もここでは相応しくない。この場合も、*yáthā* 節が単なる目的節以上の意味を担うことになるからである:e.g.「彼は、妹が掃除をしなければならぬように、画策した」。以上の考察の結果、*yáthā* 節の目的の意味は、話し手の意志が直接関わるものでも、また何らかの意志が記述されたものでもないと判断される。IX 76,5を含め、上に扱った全ての用例において、*yáthā* 節の1人称接続法そのものは純粹に未来の事態に言及する機能しか持たず、それが目的節という意味的な枠組みと組み合わせることによって、全体が主節の意図・目的を表わす構造として機能しているものと理解される。

## 2 関係節

関係節は、主節との関わり方及び接続法の機能から、同格的関係節と限定的関係節とに分けて考察される。前者は、先行詞の表す概念が主節において完全に特定されている場合であ

る。よってその際関係節が表すのは、先行詞に対する追加的な情報である。典型的な例として、先行詞が固有名詞や人称代名詞の場合が挙げられる。これに対して限定的関係節は、先行詞の表す概念が関係文による限定を伴って初めて特定される場合である。典型的な例として、先行詞が指示代名詞であり、後で関係節によって更なる情報が補完される場合である。よって、先行詞が特に修飾語を伴わない一般名詞の場合には、基本的に同格的／限定的のいずれの可能性も持つことになる (cf. HETTRICH 508ff., 738ff.) → B 2.3。

## 2.1 同格的関係節

同格的関係節において1人称接続法が用いられる場合 (10x), 主文の動詞は 2/3人称命令法 (8x: 殆どが2人称) が大半を占め, 1人称接続法「意志表明」(1x), 3人称 pres. ind. (1x) と続く。つまり殆どの場合, 関係節は話し手自身の行為や要求に含まれる何らかの要素を先行詞としていることになる。その結果, 1人称接続法を含む関係節は主節の内容の目的に相当する事態を表す場合が多い (そのため HETTRICH 671ff. は, こうした関係節は「目的節と同等」であるとする: “finalsatzäquivalent”)。主節の動詞の種類や, 主文—関係文の順序などが *yáthā* 目的節 (B 1.4) と同じ特徴を示すことも, 同格的関係節のこうした性質とよく対応する。関係代名詞が取る格には nom., acc., instr., gen. loc. が例証されているが, 最も多いのは instr. である。これは, instr. が理由や原因を表し得る格であることから, 関係節の中で主節の目的や結果を導くのに最も適しているからであろう。本論では, 目的の意味を表示する一方で, *yáthā* 目的節との違いを明確にするために, 関係代名詞 (nom. 以外) を「それ」etc. によって, また関係節全体を目的節と同様「～ように」と訳す (cf. 限定的関係節 → B 2.2)。以下, 主節の動詞の種類に従って用例を挙げる:

<主節が2/3人称命令法の場合>

I 8,1 *éndra sānasīm rayīm sajítvānaṃ sadāsāham vārṣiṣṭham ūtāye bhara* — 2 *ní yéna muṣṭihatyāyā ní vṛtrā ruṇádḥāmahai* | *tāvótāso nīy árvatā* 「こちらへ, インドラよ, 勝利をもたらす, 共に勝利する, 常に凌ぎ優る, 最高級の財を, 君はもたらせ (pres. iptv.), (我々への) 助力のために」 — 「それ (= 財) によって, 拳闘に際して, 競走馬 (の競走) に際して, 障碍たちを, 君に助力されて, 我々が [自分たちから] 防ぎ止めることになるように (pres. subj.)」 (→ 注184)

VI 19,8 *ā no bhara vṛṣaṇaṃ śúśmaṃ indra dhanaspṛtaṃ śūsuvāṃsaṃ sudākṣaṃ* | *yéna vāṃsāma pṛtanāsu sātṛūn tāvotībhīr utā jāmiṃr ājāmin* 「我々のために雄々しい激昂 (lit. 鼻息) を, 君は持って来い (pres. iptv.), インドラよ, 財産を獲得する, 力みなぎった, よく能力を発揮する [激昂] を, それによって (instr.) 諸々の戦において, 敵たちに我々が打ち克つことになるように (aor. subj.), きみの諸々の助力によって血縁者たちをも, (また) 非血縁者たちを」

VIII 60,11 *ā no agne vayovṛdham rayīm pāvaka śāṁsīyam | rāsvā ca na upamāte puruspṛham*  
*sūnītī svāyaśastaram* — 12 *yéna váṁśāma pṛtanāsu śárdhataś tāranto aryā ādīśaḥ* 「こちらへ、  
 アグニよ、我々に、精力を増大させる、公言されるべき財を、清き者よ、[君は持ってこ  
 い]。そして我々に贈り与えよ (aor. iptv.)、取り計らう者よ、多く欲しがられる、より  
 自らの名声を伴う [財] を、よき導きによって」 — 「それ (=財) によって (instr.)、諸々  
 の戦において、力を誇示している者たちに我々が打ち克つことになるように (aor. subj.)」

X 113,10 *tuvām purūṇīy ā bharā svāśvyā yébhīr māmśai nivācanāni śāṁsan* 「きみは、沢山の、  
 よき馬からなる諸々の財を持って来い (pres. iptv.)、それらによって (instr.) [自分が]  
 献呈の言葉たちを宣言しているものと、私が思うことになるように (aor. subj.)」。

[更に I 186,5 *māyas kaḥ* (aor. inj.: iptv. の機能で → 各論) ... *yéna ... junāma*, V 73,10 *imā*  
*brāhmāṇi vārdhanā ... santu* (pres. iptv.) ... *yā tākṣāma*, VI 49,15 *kṣāyam dāta* (aor. iptv.) ... *yéna ...*  
*abhī cakrāmāma*, X 85,37 *tām erayasva* (pres. iptv.) ... *yāsyām ... yā ... yāsyām ... prahārāma*]

<主節が1人称接続法「意志表明」の場合>

I 53,11# *yā udṛcīndra devāgopāḥ sākḥāyas te śivātām āsāma | tvāṁ stośāma tuvāyā suvīrā*  
*drāghīya āyuh pratarām dādhanāḥ* 「[唱え] 終わりに、インドラよ、神々を牛飼いとする、  
 君の最も幸ある盟友たちで (nom.) 我々があるように (pres. subj.)、きみを、我々は称  
 えよう (pres. subj.)、君によってよき男子に富み、[我らの] 命をより先へ延長させつつ」

<主節が3人称 pres. ind. (pass.) の場合>

IX 108,13 *sā sunve yó vásūnām yó rāyām ānetā yā idānām | sómo yāḥ suksitīnām* — 14 *yāsya*  
*na indrah pibād yāsya marúto ... | ā yéna mitrāvāruṇā kārāmahé- indram āvase mahé* 「彼が  
 (今) 搾り出されている (pres. ind.), 財物たちを、財たちを、滋養たちを、よき居住地  
 を持つ者たちを、連れ来る者であるソーマが」 — 「我々の (ために) (gen.), それ (ソー  
 マ) の中から、インドラが飲むことになるように、その中からマルトたちが… [飲むこ  
 とになるように]、それによって (instr.), ミトラ・ヴァルナを、こちらへ、インドラを  
 こちらへ、大いなる助力のために、我々が引き寄せることになるように (aor. subj.)」

このように同格的関係節は、主節との意味的關係において *yāthā* 目的節に似た特徴を示  
 していると言える。ただしここでも、それが話し手の目的として理解されるかどうかは疑わ  
 しい。上の用例のうち最後の IX 108,13 は、B 1.4 で見た IX 76,5 *sā (sómah) ... pavase* (pres.  
 ind. 2sg.) ... *yāthā jēsāma samithé* ... と同じ問題を提起している。内容的にもよく似た IX 76,5  
 と同様に、ここでも主文の動詞 (3人称受動態 pres. ind. 「ソーマが搾られる」) が話し手 (祭  
 官) の行なっている行為「ソーマを搾る」の言い換えであるとの理由で、関係節が話し手の  
 目的を表わしているとは言い難い。その意味はあくまで、文脈によって二次的に理解される  
 事柄である。更に *yāthā* 目的節と異なるのは、関係節自体は本来、何ら目的を表わす構造

ではないという点であろう。*ā yéna mitráváruṇā kārāmahe ...* という構造自体が表わすのは、「ソーマが搾られている」という主節の事態に伴って或いはその結果起こる事態であって、それが文脈や状況から二次的に主節の内容の目的として解釈されるに過ぎない。

同格的関係節における接続法の機能も、*yáthā* 節のそれに準じて判断される。確かに関係節の場合、*yáthā* 節と違ってそれ自体に目的の意味は含まれていない。そのため、接続法自体に一般的な当為・必然を表わす機能を設定することで、目的の意味を導くことも可能ではあろう：「それによって (etc.) 我々が～すべきであるところのそれを…」>「それによって、我々が～すべく／するように」。しかし、*yáthā* 目的節の場合と同様に、こうした解釈は必ずしも必要ではない。接続法には見込みや純粋な未来を表わす機能を想定し、そこから結果的に目的の意味を得ることは常に可能である：「それによって (etc.) 我々が～するであろうところの／することになるそれを…」>「それによって、我々が～することになるように」。次に見る限定的関係節も含めて、主節と関係節との間にはしばしば因果関係を想定することが可能であり、発話状況や文脈から関係節が主節の事態の目的に相当するという状況は頻繁に起こり得る。しかし、その際に接続法の機能がどれほど積極的に関わっているかは疑わしい。構造上の違いはあるにしても、結果的に主節の事態の目的を表し得る *yáthā* 節と関係節とにおいて、接続法が全く異なる機能を持つとは考え難い。以上の考察に基づく限り、同格的関係節における 1 人称接続法は全て、*yáthā* 目的節の場合と同様に、見込み／純粋な未来の機能によって理解されるべきものと思われる。もちろんこの結論は、他の人称の用例の検討と目的節全般の研究との比較を踏まえた上で、もう一度検討される必要がある。

## 2.2 限定的関係節

1 人称接続法が用いられる限定的関係節 (15x) は、同格的関係節のように統一的な特徴を示すことはない。主節が先行する場合と関係文が先行する場合とが半分ずつ存在し、主文の動詞も 2 人称命令法 (6x)、3 人称接続法 (「見込み」: 2x)、1 人称 aor. opt. (3x)、3 人称 aor. opt. (1x)、1 人称 pres. ind. (2x)、inf. (1x) と多岐にわたる。関係代名詞は、instr. と acc. が例証されている。確かにここでも要求や願望を表す動詞や発言が半数以上見られ、その場合には、同格的関係節と同様主節の事態の目的に近い意味を表すと言えそうである。しかしながら、後者との間には明らかな違いが存在する。同格的関係節においては先行詞が主文において既に特定化されているため、主節と関係節との間に思考上の区切りが認められるが、限定的関係節の場合は、関係節が参加して初めて主文の文意が完結する為、主節と関係節とは不可分の関係にあると言える。同格的関係節の場合に比べて、主節と関係節とが二つの詩節にまたがる例が殆ど見られないのもそのためであろう (cf. HETTRICH 624, 726f.; 1 人称接続法では用例無し)。その意味で、限定的関係節が主節の事態の目的として機能しているように見える場合でも、同格的関係節に比べると、その意味は純粋に文脈上の理由によるところ

が大きいと言える (cf. 同書 508ff., 592ff., 738ff.). 以下では、主節の目的としての理解が可能な場合には、通常の訳に加えてその訳も並記する：

<主節が2人称命令法の場合>

I 92,13 *úṣas tāt citrām ā bharā-* *smābhyam vājinivati | yēna tokām ca tānayaṃ ca dhāmahe* (Pāda c=IX 74,5d → B 2.3) 「ウシャスよ、その輝かしい[品]を、君は持って来い (pres. iptv.), われわれのために、競走馬を伴う女よ (?), それによって、種と子孫とを、[自らのもとに] 我々が置き定めることになるところの／なるように (aor. subj.)」

I 102,3 *tām smā rátham maghavann prāva sātāye jāitram yām te anumādāma saṃgamé* 「この戦車を、有力な者よ、いつも、前へ君は援助[して進ま]せよ (pres. iptv.), 獲得するために、君の、勝者に属する車として、合戦において、それに (acc.) 我々が喝采を送ることになるところの／なるように (pres. subj.)」

II 11,13 *śuśmīntamaṃ yām cākānāma devā-* *asmé rayīm rāsi vīrávantam* 「神(インドラ)よ、我々が気に入るであろうところの／あろうように (perf. subj.), 最も鼻息(激昂)に満ちた財を、われわれのもとに君は贈り与えよ (aor. iptv.), 男子に富む[財]を」

X 156,2 *yáyā gā ākārāmahe sēnayāgne tāvot,yā | tām no hinva maghātaye* 「その軍隊によって、牝牛たちを、アグニよ、君の助けによって、我々がこちらへ向けることになるところの／なるように (aor. subj.), それ(軍隊)を、我々に君は送れ (pres. iptv.), 能力の賦与のために」

[更に VI 56,4 *yād ... brāvāma ... tát ... no mánma sādahaya* (pres. iptv.) → 以下も参照, IX 97,51 *abhí ... arṣa* (pres. iptv.) ... *abhí yēna ... aśnavāmābhy āṛṣeyām ...*]

<主節が3人称接続法「見込み」の場合>

X 97,17 *avapātantīr avadan divā ōṣadhayas pári | yām jivām aśnavāmahai ná śá riṣyāti pūruṣaḥ* 「彼らはしゃべった、薬草たちは、天から落下しながら：「[誰にであれ] 生きている者に我々が至る(であろう)ならば (aor. subj.), その者は傷つくことはない(であろう) (pres. subj.)」

[更に IV 2,10 *yāsya tvám ... adhvarām jújoṣo* (perf. subj.) ... *mārtasya ... rārāṇaḥ # prítéd asad* (pres. subj.) *dhótrā śá ... āsāma yāsya vidható vṛdhāsaḥ* : 関係節は独立の従属節として機能 → B 2.2.1]

<主節が1人称 aor. opt. の場合>

VIII 27,22 *aśyāma tād ādityā júhvato havír yēna vásyō nāsāmahai* 「それを、我々は獲得したい (aor. opt.), アディティの子たちよ、供物を献じつつ、それによって、よりよいものを、我々が獲得することになるところの／なるように (aor. subj.)」

X 53,4 *tád adyá vacáḥ prathamám masiya yénāsurām abhí devā ásāma* 「それを、今日、言葉の最初のものであると私は思いたい (aor. opt.), それによって、アスラたちを、我々神々が圧倒するであろうところの／圧倒することになるように (pres. subj.)」 (C 2 も参照)

[更に I 166,14 *yéna ... śūśāvāma ... tád abhí ... aśyām* (aor. opt.)]

<主節が3人称 aor. opt. の場合>

X 37,5 *yád adyá tvā sūrīyopabrāvāmahai tam no devā ānu maṁsirata krátum* 「今日、スーリヤよ、君に宛てて我々が話そうとしている／話すであろうこと (pres. subj.), それを神々は、我々の意志として認めて欲しい (aor. opt.)」

<主節が1人称 pres. ind. の場合>

V 54,15 *tád vo yāmi dráviṇam sadyaūtayo yénā sāvār ná tatānāma nṛñr abhí* 「君たちに、その財産を私は請う (pres. ind.), すぐさま助力をもたらす者たちよ、それによって、太陽光がの如く、(他の) 男たちを我々が圧倒して広がっていることになるところの／なるように (perf. subj.)」

[更に I 165,10 *yā nú ... kṛṇāvai ... (yāni cyāvam) índra íd íśa* (pres. ind.) *eṣām* → 以下も参照]

<主節が inf. の場合>

X 2,3 *ā devānām āpi pānthām aganma yāc chaknāvāma tád ānu právoḥum* 「神々の(通る)道 (= 祭式) の中へと、我々は到達した (aor. ind.), 我々に [為すことが] 出来る限りのこと (pres. subj.), それを [道に] 沿って実現するために (inf.)」

このように、事実上主節の内容の目的としても理解出来る多くの例では、主節—関係節の位置関係など目的節の形式的特徴に関して統一性が無いことや、また上に述べた同格的関係節との構造上の違いから見ても、同格的関係節と同様の主節—目的節に相当する意味関係を確立することは難しい。また、IV 2,10, X 2,3, X 97,17 のように、関係節の事態が時間的・論理的に主節の事態に先行するような場合には——むしろこれらの方が限定的関係節に特徴的であるが——、1人称接続法は明らかに事態が実際に起こる時のことを指しており、見込み／単純な未来を表わす機能によってのみ理解される。

一方、例えば次の I 165,10, VI 56,4, X 37,5 では、1人称接続法が主節の表わす事態にとって、主語の未然の行為、つまり主語の意志でもあっても解釈に支障はなさそうに見える：

I 165,10 *ékasya cin me vibhāv āstāv ójo yā nú dadhṛṣvān kṛṇāvai manīṣā ... yāni cyāvam índra íd íśa eṣām* 「一人であっても私には、卓越した力があれ。今、勇ましくなって、計画力によって私が為すことになる事々(／為そうとしている?) (pres. subj.), …私が執り行う事々 (pres. inj.), これらのことを、まさにインドラとして私は意のままにする (pres. ind.)」

- VI 56,4 *yád adyá tvā puruṣtuta brāvāma dasra mantumah | tāt sū no mánma sādahaya* 「今日、君に、多く称えられる者よ、力量ある者よ、知略に富む者よ、言うことになる（／我々が言おうとしている？）（pres. subj.）、我々のその考えを、君は成就させよ（pres. iptv.）」
- X 37,5 *yád adyá tvā sūryopabrāvāmahai tam no devā ānu maṁsīrata krátum* 「今日、スーリヤよ、君に宛てて我々が話すであろうこと（／話そうとしている？）（pres. subj.）、それを神々は、我々の意志として認めて欲しい（aor. opt.）」

しかしながら、これらのいずれにおいても、実際に行為に及ぶことの重要性の方が高いと解釈される。I 165,10 では、インドラが実行する行為が全て彼自身の意図によって執り行われることが強調されていると思われるし、残りの2例でも *yád adyá tvā ... (upa-)brāvāma* が指すのは、「今日この祭式で／今日これから」詩人らが実際に発語する言葉であって、発語された言葉の実現力を確信しているからこそ、主節ではその効力がもたらすべき事柄が要求されていると理解する方が、むしろ RV における詩人の表現形態に適うものであろう、cf. A 1.1.2, A 1.2.3 c), A 3.2 a)。

このように、形式的にも意味的にも多様性を示す限定的関係節では、*yáthā* 目的節や同格の関係節の場合と同じように、接続法の機能を統一的に理解するのは容易ではない。関係節が主節の事態の目的に当たるような例もあれば、逆にその前提となっている場合もある。各用例の文脈に従って、複数の可能性が吟味されるべきである。しかし、一部に疑われた主語（＝話し手）の意志としての解釈は、不可能ではないにしても、それが優先されるべき例は見られなかった。考察の結果、全ての用例は、少なくとも未来に見込まれる事態、或いは純粋に未来の事態を表わすだけの機能によって理解するのが自然であるか、また多くの例では、むしろその方が好ましいと判断される。

### 2.2.1 一般論を表す限定的関係節

限定的関係節と主節の双方（或いはいずれか）において接続法が見込みを表す場合、複文全体が一般論的な性格を帯び、「格言的複文」と言われる一連の表現を形成することは既に指摘した → II 接続法の基本機能 b)。ただし事実上こうした意味は、典型的には3人称の文に見られるもので、特に話し手自身である1人称が主節の主語の時には、それと判別し難いことも確認した → A 3.2 b)。1人称接続法を伴う関係節では、以下の2例にのみ一般論的な事態が疑われる。ただしいずれも主節には3人称接続法が用いられており、話し手が関わる事柄が普遍的なものであること、または未来において繰り返し起こることを確信しているか、或いは一般論として述べているものと思われる：

- IV 2,10 *yásya tvām agne adhvarām jújoṣa devó mártasya súdhitam rárāṇah | prítéd asad dhótāra*

*sā yaviṣṭhā- aśāma yasya vidható vṛdhāsaḥ* 「神であるきみが、アグニよ、ある人の (*yasya ... mātasya*) よく設置された儀礼を、贈与者として (気前よく) 喜ぶことになるならば (perf. subj.), 彼女「ホートラー」／その献注は、まさしく満足させられたものとなる (であろう) (pres. subj.), 最も若い者よ、その分配者を (*yasya vidható*) 増大させる者たちで、我々があるなら (pres. subj.)」

X 97,17 *avapātantir avadan divā ōṣadhayas pári | yām jīvām aśnāvāmahai ná śa riṣyāti pūruṣaḥ* 「彼らはしゃべった、薬草たちは、天から落下しながら：「[誰にであれ] 生きている者に我々が至る (ことになる) ならば (pres. subj.), その者は傷つくことはない (であろう) (pres. subj.)」

IV 2,10 では、関係代名詞がかかるべき先行詞が主節の中に存在しないが、RV ではこの種の文はそれほど珍しくない (HETTRICH 617ff. “Sätze mit ‘prägnantem’ Relativpronomen”). その場合、関係節は独立に何らかの従属的な意味を表していることが多い。特に格言的複文のように一般論を表現する関係文では、関係節は意味上条件節と同様の機能を果たすために (：「…するものがいれば、その者は…」), 関係詞がかかるべき先行詞を主節に持たず、従属接続詞の条件節と同じように機能することがある。当詩節もこれに当たり、*yasya* によって関係節が導かれながらも、それを受ける関係代名詞が主文には見られない。しかし主文との意味関係は明らかである。(誰であれ) アグニ (祭火) が喜ぶような者がいれば、そして話し手たちがその者を力づけるものであれば、(必ず) ホートラー (献注が神格化されたものか) は満足する、という確信或いは一般論的表現であり、そこには「[その者に] 満足する」／「[その者の儀礼に] 満足する」等の意味が当然含意されている。話し手の行為が必ずある結果を生み出すということを公言し、その実現性を強めているものと思われる。また X 97,17 は薬草たちの言葉であるが、自分たちが触れる者は絶対に死なないということを、不変の真実として明言しているのであろう。A 3.2 b) で見た、主文 (否定文) で一般論が想定される例と比べよ：(インドラの言葉) VIII 93,5 *nā marā iti mānyase utó tát satyām it tāva* 「『私は死ぬことはない (であろう) (aor. subj.)』と君 (インドラ) が思っているなら (pres. ind.), それもまた、君 (にとって) のまさしく真実 (実現すること) である」。

### 2.3 同格的／限定的関係節？

B 2 で既に述べたように、関係節が同格的であるか限定的であるかの基準は、先行詞が主節において既に特定化されているかどうかということである。しかし実際には、文脈からはその区別が明確に出来ない——つまり、関係節が同格的であるのか限定的であるのか特定出来ない——用例 (4x) が存在する。次の例では、先行詞は一般名詞であるが、主節の中で様々

な限定を受けているため、当該関係節によって修飾されるか否かに関わらず、既に特定の対象を指している可能性も排除出来ない：

X 98,3 *asmé dhehi dyumátim vācam āsān br̥haspate anamivām iṣirām | yáyā vr̥ṣṭīm śāntanave vānāva* 「われらのもとに、輝き持つ言葉を、口の中に君は置き定めよ (pres. iptv.), ブリハスパティよ、病を持たない、活力ある[言葉]を、それによって雨を、シャントヌの為に我ら両者(話し手 + Śant.) が克ち得ることになるところの／なるように (aor. subj.)」

次の詩節は、限定的関係節に典型的な *tá- ... yá-* の構造を示すものの、先行する二つの関係節によって既に限定を受けているため、当該関係節は同格的であるとも考えられる：

IX 101,9 *yá ójīsthas tám ā bhara pávamāna śravāy, yam | yáh páñca carṣanīr abhí rayīm yéna vānāmahai* 「最も力のあるそれを、君(ソーマ)は持って来い (pres. iptv.), 清まりつつある者よ、耳にされるべき[それ]を、五つの部族どもを圧倒しているところの財を、それによって我々が打ち克つことになるところの／なるように (aor. subj.)」

更に次の例では、関係節が Pāda ab の *śrávaḥ/kṣatrām* を受けるのか(その場合恐らく同格的)、後続 Pāda d の *ójo* を受けるのか(限定的)によって、構造の理解が変わってくる：

I 160,5# *té no ... máhi śrávaḥ kṣatrām dyāvāpr̥thivī dhāsatho br̥hāt | yénābhī kṛṣṭīs tatánāma viśvāhā panāy, yam ójo asmé sám invatam* 「その両者は…我々に大きな聞こえを、高大な支配権を、天地両界よ、与えるべし (aor. subj.), それによって、至る所で諸部族を、我々が圧倒して広がっていることになるところの／ように (perf. subj.), 賞嘆されるべき力を、われわれのもとに、完全に、君たち両者は送れ (pres. iptv.)」

一方、判断の難しさが文脈・文意の不明瞭さに起因する場合もある：IX 74,5 *ārāvid aṁśúh ... devāyāṁ mānuṣe pīnvati tvācam | dādhatī gár̥bham āditer upāstha ā yéna tokām ca tánayaṁ ca dhāmahe* 「ソーマ(の茎)が(今)鳴き声を挙げた (aor. ind.) …。神々を追い求める革袋を、マヌシュ(人間)のために、それは膨らませている (pres. ind.)。アディティのお腹に、胎児を、それは置く (pres. ind.), それによって、種と子孫とを、[自らのもとに]我々が置き定めることになるところの／なるように (aor. subj.)」。各論及びその注を参照。

これらのように、同格的か限定的かの区別が付けられない——より正確には恐らく区別を付けることに殆ど意味がない——場合の用例は、1人称以外でも見られる、cf. HETTRICH 738ff.。その場合に、もしこの二つの構造の違いが接続法の機能の違いを伴うものであるならば、接続法の機能の理解はかなり窮屈にならざるを得ないであろう。文構造の違いに関わらず、1人称接続法を全て見込み／単純な未来とすることには確かに問題もあろうし、しかもそれが

1人称接続法の用例だけから導き出されるものであればなおさらである。しかしそれでも、それによってほぼ全ての用例を理解することができ、また上で見たように、文構造がどちらの場合でも解釈出来るような機能を想定する方が、実際の言語運用という観点からも理解し易いのではないかと推察される。その機能が具体的な文脈の中で、どのように特殊化した意味を持ち得るかは、他の人称の用例も含めて改めて分類すべきであろう。

### 3 従属節における *vás, śak* の1人称接続法

*vás*「欲する」と *śak*「出来る」とは、話し手の態度や可能といった助動詞的な意味を語彙的に表す動詞である。これらの1人称接続法は従属節の中で3箇所例証されており、いずれも主節に用いられる具体的な動詞（本動詞）、或いは「する」などの一般的な動詞の代わりに用いられていると理解される：

I 27,13# *yájāma devān yádi śaknāvāma* 「神々を我々は祭ろう、もし我々に[祭ることが]出来るなら」

I 165,7 *bhūrīni hí kṛṇāvāmā śaviṣṭhé- indra krátvā maruto yád vásāma* 「多くの事々を、最も力みなぎる者よ、我々（インドラとマルト神たち）は為すことになるろう、インドラよ、意志力によって、マルトたちよ、我々が[為そうと]意志することになれば」

X 2,3 *ā devānām āpi pānthām aganma yác chaknāvāma tát ānu právoḥum* 「神々の（通る）道（＝祭式）の中へと、我々は到達した（aor. ind.）、我々に[為すことが]出来る限りのこと、それを[道に]沿って実現するために」

語根 *vás*「欲する、意志する」の subj. は全て従属節に見られ、しかも、主節の事態に伴う様態を表す *yátha* 節（‘like .../as ...’）と、時・条件を表す節とに限られる。前者（*yátha* + *vás* subj.）は「（主語が）欲するままに；意のままに」を<sup>173</sup>、後者は（*yád* etc. + *vás* subj.）は「（主語が）欲すれば、しようと思えば（いつでも）」を意味する定型表現と考えられる。これらの動詞は、もともと話し手の心的態度を含む意味領域を担っているため、1人称接続法語形そのものは、単純に未来に想定される事態を表わすに過ぎないと解される。

<sup>173</sup> GOTÖ 294. 名詞句 *vásāñ ānu* (5x)「好きなように、意のままに」も同様の意味で用いられる。後者の用例は全て、Pāda の最終4音節に固定されている：I 82,3, VIII 4,10, X 142,7（8音節の後半）、I 181,5, X 91,7（12音節の cadence）。

#### 4 従属節における1人称接続法の機能

以上で1人称接続法が例証される全ての従属節を文構造別に考察したが、概して見込み、特に純粹に未来の事態を表わす機能によって理解され(得)る例が殆どであった。見込みと、その現れの一つである純粹な未来とは、必ずしも明確に区別出来るものではないが、少なくとも話し手の態度が比較的強く出る確信、予測、推量などの意味は、主文の場合と逆で余り確認されなかった。これは、従属節が文字通り主節に従属し、それを意味的に補足するだけの構造であることから、そこに話し手の態度が入り込む余地が少ないためと考えられる。

純粹に未来の事態に言及する機能は、時や条件を表わす従属節の殆どに、また限定的関係節の一部に、最も顕著に見られた。*yáthā* 目的節でも、1人称接続法自体は単純な未来を表わし、それと目的節という構造上の性格によって、結果的に主節の事態の目的を表現しているものと理解された。また、同格的関係節及び限定的関係節の一部にも、*yáthā* 節と同様の目的の意味が想定され、その場合接続法の機能もそれに準じて理解される。関係節自体は目的の意味をもたらさないが、主節—関係節の関係など文脈的な解釈から、見込み／単純な未来の機能が結果的に目的の意味に解されるものと考えられる。特に同格的関係節は、形式的にも *yáthā* 節との共通性が顕著であり、関係節と *yáthā* 節とにおける接続法が同様に機能している可能性を示唆するものと言える。一方、従属接続詞節及び限定的関係節の僅かの例においては、1人称接続法に (fut. ind. や desid. ind. と同様の意味での) 主語 (=話し手) の意志を表わす可能性も疑われた: VIII 61,11 *yád ín nú ... kṛṇāvāmahai* (B 1. 3. 2); X 27,10 *yád ... saṃsrjāni* (B 1. 3. 3); I 165,10 *yā nú ... kṛṇāvai*, VI 56,4 *yád adyá ... brāvāma*, X 37,5 *yád adyá ... upabrāvāma* (B 2. 2)。しかし VIII 61,11 以外では全て、その理解は不必要であるか (X 27,10), もしくは文脈の検討からはむしろ可能性が低いと判断される (I 165,10, VI 56,4, X 37,5)。恐らく VIII 61,11 だけが、特に主節と従属節との時間的關係や、一定の形式 *yád ín nú* の理解などから、主語の意志を表わす可能性も考えられる (その場合 *yád* が理由節として機能している可能性もある)。ただし、これもあくまで可能性の一つであって、この例だけから上記の機能を確定するには、なお議論の余地があろう。また一方、接続法自体に一般的な当為や義務の意味を設定すべき確かな用例も見られなかった。関係節の目的の意味をそうした機能から導くことは全く不可能ではないにしても、*yáthā* 節との密接な関係や、明らかに見込みの機能を示す他の (限定的) 関係節の存在からは、その必要性は無いと判断される。

以上の考察の結果、従属節における1人称接続法の機能は、用例全体に互って見込み／純粹な未来を表わす機能によって理解され、個々に可能な意味は、各構造の性質と文脈に由来するものとして判断される。ただしこの結論は、あくまで1人称の用例のみに基づく暫定的なものである。1人称接続法は「主語＝話し手」という特別な性質のために、ある機能や意味が主語／話し手のいずれに関係しているのかが必ずしも明確ではなく、そのため実際には

2/3人称の用例を考え合わせなければ一定の結果が出せない場合が多い。このことは、比較的明快に機能を特定し得る主文／主節の場合に比べて、従属節では特に当てはまる。また、ここで扱った各種の従属節は、それ自体が一つの大きな考察の対象であるし、しかも機能によっては、複数の従属節が同時に検討されなければならない場合もあろう。本論で得られた理解は、そうした節構造ごとの理解と、2/3人称も含めた接続法の機能全体の理解の中で再度捉え直されるべきものと思われる。

### C 疑問文／疑問節

ETTER 168f. によれば、RV において疑問文に用いられる動詞としては接続法が圧倒的に多い。その全体数は、一部の不確実語形を除けば 100 例弱を数えるが、このうち 1 人称の用例は全部で 18 詩節 18 例であり、接続法全体の人称別の数の偏り（→ 序論）と丁度対応している。疑問文における動詞の機能を理解するのは簡単ではない。それは、疑問文全体の意味が、以下確認するように、動詞の機能と文構造自体の機能とが複雑に重なりあって導き出されるものだからである。また 1 人称の場合は、話し手＝主語に関する事態が話し手自身によって「疑問」の中に置かれるという特殊な事情も存在する。そのため、疑問文の 1 人称接続法の正確な理解には、他の人称の用例の検討とその結果とのすり合わせが極めて重要となるのは言うまでもない。本論では、1 人称接続法の用例の検討だけに基づいて、それが上記のような「特殊な」事情の中でどのように理解され得るかについて、可能な限り柔軟な提案を行なうことを試みる。

疑問文における 1 人称接続法の機能には、大きく分けて、話し手の義務を表わす場合（義務）と、単純な未来を表わす場合（見込み）とが見られる。以下ではこれらの用例を、非疑問文の場合と同様に、文構造によって主文（疑問文）と従属節（疑問節＝間接疑問文；ただし 1 例のみ）とに分けて検討する。またそれぞれの機能の用例は、表現のレベルから質問文、自問文、そして 1 例のみではあるが、協議文に区別して提示する。一方、文／節の区分という観点からの分類が難しい「*kuvíd* + 1 人称接続法」については、最後に別途扱うこととする。

なお、疑問文には、ある事態の内容全体を問う場合（一般疑問）と、その一部の要素だけを問う場合（特殊疑問）とがあり、その際に用いられる疑問詞によっても（特に後者の場合）更なる分類が可能である。しかしこうした分類は、接続法の機能を理解する際に直接有意的ではないと考えられるため、本論では別途議論はせず、ここに一覧として示すに留める：

#### <特殊疑問>

疑問代名詞：I 24,1 *kásya*; *katamáśya*, I 165,2 *kéna*, IV 43,1 *kásya*, V 48,1 *kád*, VIII 75,7 *kám*  
VIII 100,3 *kám*, X 52,1 *yád*, X 95,2 *kím* ;

疑問副詞：I 25,5 *kadā*, I 41,7 *kathā*, IV 23,6 *kadā*, V 29,13 *kathó* (= *kathā u*), V 41,11 *kathā*,  
VII 86,2 *kadā*, VIII 70,13 *kathā*, X 52,1 *yéna* (*pathā*), X 64,1 *kathā*。

#### <一般疑問>

疑問詞：II 29,3 *kím*, VIII 91,4 *kuvíd*。

## 1 疑問文（主文）

## 1.1 義務

話し手は自分が何を為すべきかについて、つまり自分自身の義務を問う。質問文（4x）、自問文（7x）ともに例証されている。協議文（→ 1.2）が例証されていないのは、恐らく単なる偶然と思われる。質問文では、必然的に聞き手にとっての自分の義務を聞いていることになるが、自問文の場合は、話し手が自分の義務を客観的に思案する場合に見られる。その場合、話し手の義務に何らかの外的な強制力が想定されるとすれば、話し手の属する社会や世間一般を考えることが出来る。しかし逆に、義務として想定される行為そのものの主体性は、話し手本人にあると言える。話し手はその行為の選択や判断を、他者に求めていることになろう。全般に「…すべきか」と訳することが出来るが、質問文の場合には、口語で言う「…しろというのか」にも当たる：

## &lt;質問文&gt;

II 29,3 *kīm ū nū vah kṛṇavāmāpareṇa kīm sánena vasava āpiyena* 「では（もし今日助力を得られないなら）、君たち（一切神）との、これからの仲間関係を、昔からの〔仲間関係〕を、よき者たちよ、我々はどうすればよいのか（pres. subj.）」＝「これからの仲間関係など、何の役に立つだろうか」（反語的；*kīm* + instr. + *kar/kr* については 注301 を参照）

IV 23,6 *kīm ād āmatraṃ sakhīyāṃ sākhibhyah kadā nū te bhrātaram prā bravāma* 「それから、（君との）同盟関係は、同盟者たちにとってどのような器であるのか。一体いつ、君（インドラ）との兄弟関係を、我々は公言すればよいのか（pres. subj.）」

V 29,13 *kathó nū te pári carāṇi vidvān vīryā maghavan yā cakārtha* 「どのようにして今、君（インドラ）に私は仕えるべきか（pres. subj.），有力者よ、君が為した諸々の武勲を知っている者として」<sup>174</sup>

X 95,2 *kīm etā vācā kṛṇavā távāhām prākramiṣam uśāsām agriyēva* （ブルーラヴァスが、出て行った元妻ウルヴァシーにもう一度話し合おうと要求したのに対して）「これらが何ですって——〔何を〕きみの言葉によって、なせばいいのです（pres. subj.），わたしは。私は出て行ったのです、曙たちの中の最初の〔それ〕が のように」

## &lt;自問文&gt;

I 24,1 *kásya nūnāṃ katamāsyāmr̥tānām mánāmahe cāru devásya nāma* 「今、誰の、不死なる者たちの中でどの神の、慶ばしい名前を、我々は思念すべきか（aor. subj.）」

<sup>174</sup> インドラに話しかけてはいるが、実際には直後で自答されているため、聞き手を前にした自問文である可能性が高い → 各論。

- I 165,2 *kásya bráhmāṇi jujuṣur yúvānaḥ kó adhvaré marúta ā vavarta | śyenāṁ iva dhrájato antárikṣe kēna mahá mánasā rīramāma* 「誰の言葉の靈力たちを、若者たち（マルト神たち）は喜んだのか。誰が、祭儀へとマルトたちを振り向かせたのか。鷹のように、中空において滑空する〔彼ら〕を、如何なる偉大な思考によって（彼らを）我々は止まらせるべきか（aor. subj.）」
- IV 43,1 *ká u śravat katamó yajñīyānām vandāru devāḥ katamó juṣāte | káśyemām devīm amṛteṣu préṣṭhām hṛdī śreṣṭhāma suṣtutīm suhavyām* 「さて、誰が聞くことになろうか（aor. subj.），祭式に値する者たちの中でどの者が。誉め言葉を、どの神が喜ぶことになろうか（pres. subj.）。不死の者たちの中で誰の心臓に、この神的な最も好ましい、よき供物を伴うよき称讃を、我々は寄せ掛けるべきか（aor. subj.）」
- V 41,11 *kathā mahé rudrīyāya bravāma kád rāyē cikitūṣe bhágāya* 「如何にして、ルドラに属する大いなる〔群れ〕（マルト神群）に、我々は言うべきか（pres. subj.）。何を、財〔である神〕に、（事情を）理解しているバガ（分配神）に〔我々は言うべきか〕」
- V 48,1 *kád u priyāya dhām<sub>a</sub>ne manāmahe svákṣatrāya svāyaśase mahé vayām* 「さて、何を、好ましい定位置のために、われわれは考え出すべきか（aor. subj.），自らの支配権を持つ、自らの名声を持つ偉大な〔定位置〕のために」
- VIII 100,3 *néndro astīti néma u tva āha ká im dadarśa kām abhī śtavāma* 「『インドラは存在しない』と、或る者は、また或る人は言っている。『誰がこの者を見たのか。誰に向かって、我々は称えかければよいのか（pres. subj.）』（と）」（反語的）
- X 64,1 *kathā devānām katamāsya yāmani sumāntu nāma śṛṇvatām manāmahe | kó mṛdāti katamó no máyas karat katamā ūtī abhīy ā vavartati* 「どのようにして、途上で聞いている神々の中のどの者の、よく思念される名前を、我々は思念すべきか（aor. subj.）。誰が、寛容であるだろうか（pres. subj.）。どの者が、我々に喜びをなすだろうか（aor. subj.）。どの者が、援助を伴って、こちらに対して振り向くであろうか（aor. subj.）」

自問の内容が話し手自身の意志によって決められる場合（I 165,2）や、或いは実際に後続詩節で自答されるような場合（I 24,1, V 41,11, IV 43,1）には（→ 各論；I 24,1 については A 1.1 補説 1 も参照），話し手は自らの意志を問うているとも解釈出来る，e.g. 「私は敵をどうやって打ちのめそうか／どう料理しようか？」等々。日本語訳の「～しようか？」は、一見すると意志表明の「～しよう」と並行的に考え得るようにも思われる。しかし、疑問という行為は、「表明」と同じレベルの発話行為であると考えられるため（人は表明しながら尋ねることはない），意志表明と疑問文とは両立しない。「～しようか？」は、「義務」の機能が上記のような文脈で用いられた際に、二次的に現れる表現上のヴァリエーシ

ョンとして理解すべきであろう。

## 1.2 見込み

話し手が自分自身に関する未来の事態を、誰の態度や意志も入らないものとして疑問に置く場合である (4x)。全体数は「義務」の半数以下であり、質問文は1例が確認されるのみである。一方ここでは、話し手が、話し手自身を含む主語全体に問い掛ける協議文が見られる (以下参照)。見込みの用例は、概して「～ことになるのか／～であろうか」と訳すことが出来る。疑問に置かれた内容は殆ど場合、話し手が望んでいるものの、その遂行が話し手の力だけではどうにもならない事態を表わすという点で、先に見た義務とは文脈を異にする。見込みの例は、こうした性質から「～出来る」と言い換えられる状況に使われることが多い：

### <質問文><sup>175</sup>

I 41,7 *kathā rādhāma sakhāya stōmaṃ mitrāsya<sub>a</sub>ryamñāḥ | māhi psāro vāruṇasya* 「いかにして、我々（祭官たち）は果たすことになるだろうか (aor. subj.)、盟友たち（アーディティア神たち）よ、ミトラへの、アリヤマンへの頌歌を、ヴァルナへの大きな喜ばせを」

### <自問文>

I 25,5 *kadā kṣatraśrīyaṃ nāram ā vāruṇaṃ karāmahe | mṛḍikāyorucākṣasam* 「何時（になれば）、支配権において華々しい男を、ヴァルナを、こちらへ我々は引き寄せることになるのか (aor. subj.)、（我々への）寛大さのために、幅広い眼差しを持つ [ヴァルナ] を」

VII 86,2 *utā svāyā tan<sub>u</sub>vā sām vade tāt kadā n<sub>u</sub>v āntār vāruṇe bhuvāni | kīm me havyām āhṛnāno juṣeta kadā mṛḍikāṃ sumānā abhī khyam* 「そして、自分自身と、そのことを私は議論している。さて何時、ヴァルナのもとに、（家の）中に、私は身を置くことになるのか (aor. subj.)。私の供物を、憤怒せずに、彼は喜ぶであろうか (pres. opt.)。何時、寛大さを、機嫌よく私は見迎えるのか (aor. inj.)」

### <協議文>

VIII 70,13 *sākhāyaḥ krātum ichata kathā rādhāma śarāsya | ūpastutim bhojāḥ sūrīr yó āhṛayaḥ* 「盟友たち（祭官たち）よ、意志力を、君たちは求めよ。いかにして、我々は果たすことになるだろうか (aor. subj.)、シャラを賞讃することを、気前のいい主人であるところの、恥知らずであるところの [シャラを] <sup>176</sup>」 (反語的)

[cf. I 41,7 *kathā rādhāma* (上記)]

<sup>175</sup> 形式的には質問であるが、実際には聞き手を前にして自問しているものと思われる、→各論。

<sup>176</sup> VIII 70,13-15 は、いつも祭式の報酬として、全祭官で一匹の仔牛しかくれない祭主シャラのことを、皮肉を込めて歌ったもの、GELDNER ad loc.。

VII 86,2では、文脈上は inj. *khyam* が subj. と殆ど機能的な差異無しに用いられているように見えるが、それぞれの文法機能は区別されるべきである。即ち、接続法は未来の事態を対象とし、inj. はそもそも事態が起こるかどうかなどだけを問題としている。ただし I 3.2.1 3)で確認したように、否定や疑問に置かれた場合には、事実上二つの機能の違いを読み取ることは難しい (HOFFMANN 245f.<sup>177</sup>)。二つが並んで用いられている当箇所は、疑問文においてこの両機能が接近することをよく示している。

協議文 (VIII 70,13) は、聞き手に問い掛けるという意味では質問文であるが、聞き手が主語の中に含まれるという点では自問文である。自問行為に聞き手を参加させていると理解すれば、主文における「勧誘」(→ A 2)に比べることが出来る。協議文の例は、接続法の機能と連動するものではないと思われるため、義務の機能に例証されていないことは単なる偶然と見なすべきであろう：e.g. 「我々はどうすべきか (= どうすべきだと皆は思うか / どうしたらいいだろうか) ?」。

### 1.3 義務／見込み？

次の例は、接続法が義務を表わすのか見込みを表わすのかが判断出来ない例である：

VIII 75,7 *kām u ṣvid asya sēnayā- agnēr āpākacakṣasaḥ | pañīm gōṣu starāmahe* 「今度は一体、離れたところに視線の届くこのアグニの軍隊によって、牛たちをめぐって、どの者をパニとして、我々は叩きのめすことになるのか / 叩きのめすべきか (aor. subj.)」

話し手が、自分らが果たすべき任務を思案しているとすれば (義務)、行為自体はあくまで話し手たちだけで行なうこととして想定されており、「どの者を叩きのめすか」という判断を、他者に委ねるか客観的な目を通して熟慮していることになる。もしどうなるか分からない未来の状態を問うているなら、行為の遂行には、神々の意志や運命などの様々な他の要因が関係するものとして捉えられていることになる。「このアグニの軍隊によって」は、表面上、後者の理解に合うように思われるが、実際には、行為遂行の際に話し手が自由に「アグニの軍隊」を使えるものとして表現することで、アグニの助力を迫っているものとも解釈可能である。各論も参照。

<sup>177</sup> 「否定文における接続法と inj. との機能的な接近に鑑みれば、修辭疑問の中で接続法が現れることも納得出来る、…。接続法と inj. との交換可能性は、修辭的な性質の疑問全てに広がっているようである、…」。

## 2 疑問節（従属節）＝ 間接疑問文

疑問の従属節，いわゆる間接疑問文における1人称接続法は，次の1詩節においてのみ見られ，それぞれ接続法を含む2つの節が例証されている：

X 52,1 *vísve devāḥ śāstāna mā yátthehá hótā vṛtó manávai yān niśádyā | prá me brūta bhāgadhéyaṃ yáthā vo yéna pathá havyám á vo váhāni* 「一切神たちよ，私に君たちは教えよ，ホートリとして選ばれた〔私〕が，ここで，腰を下ろしてから，どのように，何を考えればよいのかを (aor. subj.)。私に，君たちは公言せよ，君たちの定められた分け前が，どのようなものであるかを，供物を君たちのもとへ，どの道を通して私が運べばよいのかを (pres. subj.)」

ヴェーダ語では（後のサンスクリット語でも），疑問節は疑問代名詞 *ká-* ではなく，関係代名詞と同じ *yá-* によって導かれる（ETTER 195）。当箇所計3つの疑問詞も，名詞，副詞に関わらず，*yád*, *yáthā*, *yéna* が用いられており，それぞれ主文（疑問文）における *kád/kím*, *kathá*, *kéna* に相当する。ただしこのことは一方で，疑問節と関係節とが同じ構造を示すという結果につながる。実際多くの場合，この両者を明確に区別することは不可能である：「彼が言ったことを，私は理解出来なかった」～「彼が何を言っているのか，私は理解出来なかった」。この区別やその判断基準に関する先行研究及び議論については ETTER 195ff. に詳しいが，ここでは少なくとも，2つの *yáthā* がそれぞれ節全体を導いており，*yéna pathā* も *yáthā* 文の一つに含まれること，「教えよ／公言せよ」の目的語として，*yád*, *yéna pathā* には具体的な実体詞よりも，節全体を理解する方が相応しいこと，そして何より，限定的関係節において想定し難い話し手の義務が文脈から明らかに読み取れること（以下 4 を参照），などの理解の総合すると，当箇所に関係節が理解される可能性は想定し難い。一方次の例は，限定的関係節としての解釈が相応しいと思われる：X 53,4 *tád adyá vācāḥ prathamām masīya yénāsurāṃ abhí devā āsāma* 「それを，今日，言葉の最初のものであると，私は思いたい (aor. opt.)，それによってアスラたちを，我々神々が圧倒するであろうところの〔それを〕 (pres. subj.)」。ETTER 198 は，GELDNER 訳に従って *masīya* (-s-aor. opt. 1sg. → 注567) を 'erdenken' と訳すが，恐らくそのために，ここで間接疑問文を想定しているものと思われる：「何によって，我々が～出来るかを，考え出したい」（*tád* はその場合，*yéna* を受けるとも，間接疑問全てを受けるとも考えられる，cf. loc. cit.）。しかし，動詞 *man* の -s-aor. が pres. *mányate* (fientiv : 「思われる，～と思う」) に対応することを考慮すれば（→ I 24,1），ここで疑問の意味は考え難い。*yéna* 以下は *tád* を修飾する限定的関係節と解釈する方が相応しいと思われる。

### 3 *kuvíd* + 1 人称接続法

HETTRICH 104ff., 142ff. は、RV 及び散文において、主文（独立文）と従属節との間に「補足文（Ergänzungssätze）」というカテゴリーを設定している。それは、*kuvíd* (RV), *néd*, *hí* + 動詞のアクセント、または動詞のアクセントのみによって表される文の総称であり、「隣接の文に対して意味的な補足を行なう一方で、発語内的な（illokutiv）特徴を示すカテゴリーに属する」ものであるという（同書 112）。つまり、動詞にアクセントを持ち、意味的に隣接する文を補うという意味では従属節の特徴を示すが、その発語が聞き手に対する何らかの発語行為——報告、命令、警告、質問 etc. ——を表すことが出来る（＝発語内的である）という意味では主文の性格を持つ文である。これは、動詞のアクセントを伴う文の理解にとって有効な議論であると思われる。

*kuvíd* 文の場合も独立の自問文を表わすが、殆どが動詞にアクセントを伴い、「先行する文を意味的に補う。即ちそれは、「先行の文が発語される時、或いは先行の文の表す行為が起こる時に存在する期待や想定を表現する；疑問文という形式は、それらの期待や想定が実現するかどうか、話者にとって不確かであることを強調している」（同書 149）<sup>178</sup>。先行の文と必ずしも直接的な関係が無い場合も、それは「述べられていない考えに、内的に依拠している」（DELBRÜCK 551）と言える。訳としては、「果たして／一体～であろうか [と私は疑う、思う]」が相応しいと思われる（‘Ob ...?’ DELBRÜCK, HETTRICH）<sup>179</sup>。33 箇所ある *kuvíd* 文（繰り返しは除く）の動詞は、大多数を占める接続法が 29 箇所、願望法が 2 箇所、そして過去時制が 2 箇所（aor. ind.<sup>180</sup>, ipf.）である。接続法が大多数を占めるのは、期待や想定が未来に関係することが圧倒的に多いからであろう（HETTRICH 152；cf. VIII 91,4, I 33,1）。

1 人称接続法では、VIII 91,4 の一箇所のみが例証されている。ここでは、恐らく思春期の体の悩みを抱える娘が、インドラにソーマを献じて大人の体にしてもらおうとしている場面であると解される（→ 各論）。ソーマを献じた後、望みが叶うかどうか不安に感じた彼女の言葉が第4詩節である。先行する三つの *kuvíd* 文も含め、接続法の用法は「未来（見込み）」である：

VIII 91,4 *kuvíc chákāt kuvít kárat kuvín no vásyasas kárat | kuvít patidvíšo yañir índreṇa saṃgāmāmahai* 「果たして、彼は出来るであろうか（aor. subj.），果たして、彼は為すであろうか（aor. subj.）。果たして、我々（＝私）をよりよく彼はするであろうか（aor. subj.），果たして、主人を厭いつつも、インドラと、我々是一緒になるであろうか（aor. subj.）[私は不安だ etc.]」

<sup>178</sup> Cf. ETTER 224f. : 「… *kuvíd* は、一方である種の不確実性を、また一方では、従属節において言われた出来事が恐らく起こるであろう或いは起こったであろうという想定を表現するのである」。

<sup>179</sup> Cf. ETTER: ‘Ist es wohl so, daß ...?’ / ‘Ist es denn nicht so, daß ...?’

<sup>180</sup> X 119,1-10 (Labasūkta) の全てにおいて繰り返される *kuvít sómasyāpām iti* をまとめて一箇所とする。各論 X 119,9; 10 を参照のこと。

#### 4 疑問文／節における 1 人称接続法の機能

以上で検討した用例から、疑問文／節における 1 人称接続法の機能について——特に非疑問文には見られなかった義務の機能を中心に——説明を試みる。最初に、疑問文に含まれる複数の異なる機能レベルと接続法の機能とを分けておく必要がある。まず、ある事態をありのまま捉えるか、それとも疑問の中に置くかは、発話以前の、話し手の心理的作用のレベルであると理解される：疑問「彼が何を食べているか」:: 非疑問「彼がリンゴを食べている」。そしてその疑問を実際に発話する際に、どう表現するか——誰かに投げ掛ける、つまり人に「問い掛ける」のか（主文＝疑問文：「彼は何を食べているのか？」）、それともそれを単に記述するのか（従属節＝疑問節：「彼が何を食べているのか、誰も知らない」）——という発話のレベルがある。なお、実際に「問い掛ける」相手としては、他人の場合（質問：「彼は何を食べているのか？」）と、自分自身の場合（自問：「彼は何を食べているのだろうか？」）とがであろう。これは表現上の（修辞上の）レベルと言えよう。疑問文／節における接続法は、恐らく他の法も同様に、この諸レベルのうち発話以前の部分（心理作用のレベル）に関わっていると考えられる。話し手は、非疑問文におけるのと同様に、疑問の中に置かれた事態に対して、様々な心的態度を持つことが出来る（当為・必然／見込み／可能／非現実 etc.）：「彼はもう寝ているのか；彼に事実を言うべきか；次の選挙では誰が当選するであろうか；水の上を走ることなど出来るであろうか」等々。

これらのうち発話のレベルにおいては、接続法本来の機能と疑問文の性質とが相容れない場合も存在する。その典型は 1 人称接続法の意志表明の機能である。主文／主節でのみ可能な「表明」という行為は、それ自体「問い掛け」と同じ発話レベルの行為と考えられるため、疑問文とは両立し得ない → C 1.1。しかし、態度の発現以前の、心的作用だけが問題となっているレベルであれば、それ全体を疑問という枠に入れることが可能である<sup>181</sup>。最もこの枠に入りやすいのは、見込み、特に単に未来の事態に言及するだけの機能であろう。見込みのうちでも、心的態度が比較的強く現れる確信や強い推測等は想定し難い。それは恐らく、これらの意味要素が「疑問」という行為そのものと矛盾するからである（人は確信しながら疑うことは出来ない）。1 人称接続法においても見込みの機能が多く見られたのは、C 1.2 で見た通りである。

その一方で、人の意志や意図が疑問文の接続法に関係しているとすれば、それはちょうど従属節の場合と同様に、話し手の意志が直接発現するのではなく、意志の記述や説明という形で現れていないかどうか（主語の意志）、或いは 2/3 人称に対する話し手の意志が、話

<sup>181</sup> 疑問に置かれた事態が、そこから更に問い掛けられるか（疑問文）、単に記述されるだけか（疑問節）はまた別の問題である。

話し手自身に向けられていないかどうか（話し手自身に対する当為・必然）を検討する必要がある。——しかし、前者の主語に関わる意志が想定される用例は見られない。「私は～しようとしているのか／～するつもりなのか？」という発言は確かに自問文では可能であろうが、こうした修辭的発言が起こる可能性はそもそも低く、また起こり得たとしても恐らくそれは fut. ind. や desid. ind. の機能領域であると予想される<sup>182</sup>。——これに対して、話し手の自分に対する意志を表わす機能は、疑問文の場合重要な意味を持つ。主文／節では、話し手が自分の義務を表明／記述する例は見られないが（→ A 1.1 補説 1）、それは、そうした意味が常に客觀的に見た自らの義務として述べられているものと解釈され、そこに話し手（個人）だけの意志が関わるという状況が想定し難いからである（B 冒頭）。しかし疑問文では、むしろ話し手が自分の義務を問う場合の方が多く見られる → C 1.1。この事実は B の考察と矛盾するものではなく、むしろそれを補強するものであると思われる。つまり疑問文では、話し手は文字通り文の内容を「問う」という行為に伴って、動詞の（即ち文全体の）内容に対する心的態度の担い手自体を自分以外のところ（他人や世間一般）に移していると理解することが可能である。その結果、ちょうど非疑問文の 2/3 人称接続法が、2/3 人称に対する話し手の意志を表わすように、疑問文の 1 人称接続法は、話し手以外からの話し手に対する意志を表現することになる。その際、話し手以外の意志が発話レベルで聞き手に向けられれば（質問文）、結果的に相手の意向を尋ねることになろうし、自らに向ける場合（自問文）には、しばしば特定の人物を離れ、共同体や社会一般における自分の義務を問うことになろう、cf. C 1.1。少なくともこうした理解は、1 人称接続法が疑問文でのみ「義務」の意味を担うことを説明する手段の一つである。

しかしその一方で、義務の機能を見込み／単純な未来を表わす機能からの展開として捉えることも、同様に可能である。接続法の本来的な機能としては単に未来のことに言及するだけであっても、それが疑問という行為に置かれた時には——質問文であれ自問文であれ——話し手自身の未来の事態について、誰かしら（実際の／仮想の相手、自分自身、世間一般など）が知っている、或いは強制力を持っているという前提で発言されていることになる。その場合、その「知っている」人が実際の聞き手であれば、結果的に相手の意向を問うことになろうし、自問する場合であれば、漠然と誰かの意志或いは運命や予定を問うことになり、いずれの場合からも義務の意味が発展するであろうことは容易に予想される：「私は～しよう／～することにな（って）いるのか？」>「～しろということなのか／～せざるを得ないのか／すべきなのか？」etc.。つまり、義務の意味は接続法から直接導かれるものではない。

<sup>182</sup> 同様の予想は、確かに従属節の場合にも有効であるが（実際に従属節の desid. のが主語の意志を表わすことは普通の現象である → HETTRICH 353；本論 II 接続法の基本機能 a) 4)), そこでは一部にその可能性が疑われる接続法の用例が実際に存在したこと（e.g. 「私が～しようという／しようとしている時に…」）が、疑問文の場合とは異なる。

く、見込みの機能が疑問という発話行為の枠によって規定された結果であると捉えられる。

「義務」の意味を、意志の担い手が他者に移ったものとして理解するか、或いは未来の機能が疑問という枠によって展開したものとするかのいずれにしても、その意味は特定の他者や聞き手にとっての当為・必然という意味だけではなく、常に一般的な義務の意味に広がり得るものと予想される。ただし、疑問文以外の接続法にこうした意味が認められるか否かについては、慎重な議論が必要であろう。少なくとも1人称接続法の用例においては、主文／主節や従属節に義務の意味が理解される確かな例は見られなかった。一方で、C2に見た疑問節（間接疑問文）における1人称接続法は、唯一、義務の意味に関して非疑問文／疑問文いずれにも関係するという点で興味深い。疑問節は、構造上関係節と変わらないものの、明らかに義務の意味を有する：「私に君たちは教えよ…（私が）どのように、何を考えればよいのかを」。その際、疑問文（主文）における義務の意味が節の中にも持ち込まれたとするのが一つの考え方であろう。他方で、限定的関係節と疑問節とが同じ構造を示すことは、非疑問文／節も義務の意味を担い得ることを示唆していると思われる。特に従属節は、話し手の意志が入り得ない構造であるという点で、主文に比べると、話し手以外から見た（一般的な）当為や義務の意味に馴染みやすいと言える。こうした意味要素の発生過程を論じることは本論の目的ではないが、当節で扱った疑問節における義務の意味は、そうした問題に一つのヒントを与えてくれるものと思われる。英語の“must, should”などが担う、いわゆる助動詞的な意味領域は、言語一般にとってある程普遍的なものであると思われるが、これがヴェーダ語において如何なる切り取られ方をし、如何なる文法手段によって表わされていたのかは、接続法の機能を理解する際の一つの大きな着眼点となる。接続法の「話し手の」意志という要素が、文構造や文脈によってより一般的な意味に推移していないかどうか、またその場合、規定や義務を表わす願望法（→ II 接続法の基本機能 a 2））との関係をどう考えるべきかということも、2/3人称接続法の検討と一般言語学の成果を踏まえた上で、今後吟味されるべき重要課題であると思われる。

## 総論への補説

本論では、1人称接続法の機能を、文献学的方法に基づいて、形態・機能の両側面から調査・検討した。ただし、主に形態論全般と機能の非疑問文（主文／主節）の部分を除いては、1人称だけの用例から接続法全般に関わる議論に踏むには限界があり、ここで得られた暫定的な結論は、2／3人称接続法の研究を待って再検証すべきものである。最後に、1人称の用例から、今後接続法全体を通して確認される必要性が明らかになった諸点を列挙する。

### 1 接続法とアスペクトとの関係

ヴェーダ語の接続法語幹は全て、「時制語幹」から作られる。時制語幹の大部分は「現在語幹」と「アオリスト語幹」の二つに大別される。これらはいわゆる時（現在、過去、未来など）の観念とは関係なく、動作の観方・捉え方（アスペクト）の違いに基づいて成立した区別である。動作をその進行や時間的流れの中で捉える観方を「途中観（Verlaufsschau）」と呼び、動作を時間の広がり無しに全体として捉える観方を「全体観（Gesamtschau）」と呼ぶ。途中観は現在語幹（pres[ent stem].）によって、そして全体観はアオリスト語幹（aor[ist stem].）によってそれぞれ表わされる。これら二つの基本的な時制語幹以外に、「（現在の）到達した状態」を表わす完了語幹も時制語幹の名のもとに理解される<sup>183</sup>。こうした時制語幹の持つアスペクトの違いが、リグヴェーダでどの程度残っているのかは、動詞研究のうちの最も興味深い問題の一つである。HOFFMANN (1967) は、injunctive の機能、特に *mā + inj.* の禁止構文において、その区別がかなり明確に読み取れることを明らかにしたが（*mā + pres. inj.*：中断の命令「～するのを止めよ」:: *mā + aor. inj.*：予防的命令「（これから）～するな」）、それ以外の動詞語形については、十分に研究が進んでいるとは言い難い。接続法もこの観点から総合的に研究されるべきであるが、1人称接続法の用例からは、少なくとも次の諸点が問題として提起される：

IV 18,2 *nāhām āto nīr ayā durgāhaitāt tiraścātā pārśvān nīr gamāṇi* 「わたしは、ここから、出て行くまい（pres. subj.）。諸々の踏み込み難い場所が、ここにある。横切って、脇腹から、私は出て行こう（pres. subj.）」では、*nīr-ayā*（現在語幹）がある程度時間をかけて通常の産道（*durgāhā*: pl.）を通ることを表わすのに、*gamāṇi*（アオリスト語幹）が脇腹を裂いて一気に飛び出す行為を表わす、或いは「出て行くこと」そのものだけに着目した表現であるとすれば、ここでは、それぞれの動作の捉え方を表すのに最も適したアスペクトが用いられている可能性がある。

VIII 74,13 *ahām huvānā ārkṣe śrutārvaṇi madacyūti ... mṛkṣā śirṣā caturṇām* 「わたしは、呼

<sup>183</sup> アスペクトや語幹形成の概観、及び用語の日本語訳については、後藤 スケッチ 104ff. を参照。

ばれば、リクシャの子、酩酊なすシュルタルヴァン [王] の前で (もとで), … 四 [頭の馬] の頭を、撫でよう (aor. subj.)」。aor. ptcpl. *huvānāḥ* が条件文として機能している。「全体観」アспектを持つアオリスト幹が条件文に用いられると、主文の動詞が起こる前に完了する事態を表す、→ X 34,5 注を参照。ptcpl. *huvānāḥ* と *mṛkṣā* との間にも同様の関係が想定される：「呼ばれたら、私は撫でよう」。当箇所では主文にもアオリスト幹の動詞が用いられ、全体として、条件が成立すれば即座に主文の行為が遂行されることを強調しているのかも知れない。

X 34 は博打打ちの歌であるが、そこでは別々の場面に同じ動詞語根の pres. inj. と aor. subj. が見られる。X 34,13 *akṣāir mā dīvyāḥ kṛṣīm ít kṛṣasva* 「賽子たちで賭博をするのを止めよ、耕地をこそ君は耕せ (pres. iptv. 2sg.)」では、上で触れた *mā* + pres. inj. が見られ、既に博打に浸っている博打打ちに対して「これ以上賭博を続けるな」と命じていることが明らかである。一方、X 34,5 *yād ādīdhye ná daviṣāṇy ebhiḥ parāyādbhyó 'ava hiye sākhibhyaḥ* 「『これら (賽子たち) で、私は賭博をすまい (aor. subj.)』 — 私が思いを決めていると、去り行く仲間たちから私は取り残される」の *ná daviṣāṇi* (aor. subj.) は、「金輪際、二度と賭博はすまい」という博打打ちの決意を表すものと考えられ (→ A 1.2.2 b)), 未来において博打行為に及ぶことそのものを否定しているという点で、アオリスト語幹の使用が最もよく理解される。各論も参照。

III 33,10 *ní te naṁsai pīpīyānéva yósā mārāyeva kaṇṇā śasvacāi te* 「君に、私は身を屈めよう (aor. subj.)、(乳で) 膨らんだ若い女が (子に対して) のように；青年に、娘が のように、君に、私は身を低めていよう (perf. subj.)」。当箇所は、川が Bharata 族が渡れるように水位を下げようと言っているところである。両文の動詞 *naṁsai* (aor.), *śasvacāi* (perf.) は、語彙的には恐らくほぼ同じ動作を表していると思われるが、その一方で、それぞれ語幹のアспектの違いを反映しているものと解釈される。川は、一旦アオリスト語幹によって表現した (瞬間的・一度的な) 「身を屈める」という動作そのものを、次に完了語幹を用いて、(Bharata 族が全員河を渡りきるまで) 「ずっと身を低めたまま でいよう」と言い直していると解釈出来る。

完了語幹の接続法の用例は、二大時制語幹に比べると極端に少なく、その機能は必ずしも明らかではない。1人称接続法の用例のうち、上記 *śasvacāi* (ただし形態的に問題有り → 各論) を除く5例は全て関係節に見られ、事実上、主節の事態の目的に相当する内容を表わす (ただし I 166,14 *sūśāvāma* ?)。完了語幹が現在の状態を表わす語義を持っている場合には、事実上現在語根の接続法として理解し得る (I 166,14 *sūśāvāma* 「力みなぎっている」, II 11,13 *cākānāma* 「気に入っている」, I 160.5 *abhi ... tatānāma*, V 54,15 *tatānāma ... abhi* 「圧倒

して（広がって）いる」）。しかし、VI 49,15 *abhí-cakrāmāma* 「攻め寄る」のように瞬間的な行為の結果／影響を表わすような語幹は、同じ「圧倒する」等の意味を含む上記 *abhí ... tatánāma* も含め、行為を最後までやり遂げること——行為の完全性——を表わす可能性が無いかどうか、今後検討する価値があると思われる、cf. I 3.2.1 3) IV 42,6 *cakaram*。その場合も完了語幹の「達成」という意味の延長で理解されるが、ただし達成された「状態」というよりもむしろ、達成する「過程」の方に力点が置かれていると言えるであろう：e.g.

V 54,15# *tád vo yāmi dráviṇaṃ sadyaūtayo yēnā sāvār ná tatánāma nṛm abhí* 「君たちに、その財産を、私は請う（pres. ind.）、すぐさま助力をもたらす者たちよ、それによって、太陽光がの如く、（他の）男たちを、我々が圧倒して広がっていることになるところの／なるように（／圧倒して〔限無く〕広がりおこせる／広がり増えることになるように？）（perf. subj.）」

VI 49,15 *nú no rayīm rathīyaṃ carṣaṇiprām puruvīraṃ ... kṣāyaṃ dātājāraṃ yēna jānān spṛdho ādevīr abhí cakrāmāma vīsa ādevīr abhī āśnavāma* 「今、我々に、車に積む、（諸々の）境界を満たす、多くの男子からなる財を、…不朽の定住地を、君たち（一切神）は与えよ（aor. iptv.）、それによって（他の）人たちに、神々に非ざる競争相手たちに、我々が攻め寄っていることになるように（／攻め寄って圧倒する／完全に攻め寄ることになるように）（？）（perf. subj.）、神々を求める諸部族を、我々が征服することになるように（pres. subj.）」

その他、接続法の特定の機能とアスペクトとが関係している可能性もある。1人称接続法の場合の最も顕著な例としては、勧誘の機能を示す24（ないし25）例中23（ないし24）例が現在語幹を示すことが挙げられる。この事実は、接続法の機能とアスペクトとの関係を理解する上で重要な意味を持つと考えられるが、現段階で何らかの結論を出すことは出来ない。

## 2 接続法と動詞の語彙的意味との関係

以下の2詩節の接続法は、接続法と動詞の語彙的意味との関係について、重要な視点を提供してくれる：

I 53,11# *yá udṛciṇḍara devāgopāḥ sākḥāyas te śivātama āsāma | tvāṃ stoṣāma ...* 「[[唱え] 終わりに、インドラよ、神々を牛飼いとする、君の、最も幸ある盟友たちで、我々があるように（pres. subj.）、きみを、我々は称えよう（aor. subj.）」

I 179,3 *... vīsvā it spṛdho abhī āśnavāva | jāyāvēd ātra śatānītham ājīm yāt samyāncā mithunāv abhyajāva* 「あらゆる競争相手をも、我ら両者は征服することになろう（pres. subj.）、こ

の際、百の策略を伴う競争に、我ら両者はまさしく勝つことになるろう (pres. subj.), [我ら両者が] 一組となって、同じ目標に向いて、目がけて [戦車を] 駆ることになるなら (pres. subj.)」

DELBRÜCK 302ff. は、主文における1人称接続法と1人称願望法との使われ方から、動詞の中には本質的に1人称接続法をとるものと1人称願望法をとるものとが存在し、それは、意志内容の実現が話し手の支配下にあるものと認識されるか (接続法)、そうでないか (願望法) にかかっていると結論づけた。それによると、動詞 *as* は後者に属するものの、目的節では接続法でのみ例証されている。一方、*naš/aš* と *jay/ji* とは本質的に1人称願望法を取る動詞に属するが、いずれも唯一の例外が I 179,3 であるという。もちろん、接続法が動詞の語彙的意味によって作られやすいものと、そうでないものがあるのは確かであろう。しかし、接続法/願望法の機能と、語彙自体が持つ性質 (Verhaltensart 「動作様態」：ここでは意志性の有無) とは、独立した機能領域である。2つの法は、基本的に語彙自体の意味とは無関係に、それぞれの機能によって (接続法：話し手の意志；願望法：話し手の願望) 選択されるものと考えべきである。ある目的節で subj. *ásāma* が、別の所で opt. *syāma* が用いられるならば、それは、話し手が目的節の実現度に対して異なる姿勢を持つことの顕れと見ることも出来るし、また *naš/aš, jay/ji* に意志の接続法が用いられることも当然考えられる：「我々は敵たちに匹敵しよう/するぞ」；「我々は競争に勝とう/勝利するぞ」。各論をも参照。

### 3 人称語尾

第一/第二人称語尾の分布と偏りについては、1人称の場合形態論的な要因が大きいと判断されたが (→ I 2.3.5), 今後更に、いずれの語尾も用いられる2/3人称接続法も含めた総合的な検討が必要となる。

## 各論

## I 8,1

ā́ndra sānasīm rayīm sajítvānam sadāsāham |  
 várṣiṣṭham utāye bhara ||

こちらへ、インドラよ、勝利をもたらす財を、  
 共に勝利する、常に凌ぎ優る、  
 最高級の「財」を、君はもたらせ (pres. iptv.), (我々への) 助力のために。

## I 8,2

ní yéna muṣṭihatyāyā ní vṛtrā ruṇádḥāmahai |  
 tvā́ótāso nīy árvatā ||

それ (=財) によって<sup>184</sup>, 拳闘に際して<sup>185</sup>  
 競走馬 (の競走) に際して、障碍たちを  
 君に助力されて、我々が「自分たちから」防ぎ止めることになるように (pres. subj.)。

ní ... ruṇádḥāmahai rodh/rudh 「阻む、妨げる」 nasal pres. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> ní .... ruṇádḥāmahai (同格的関係節) : 見込み

<sup>184</sup> yéna は先行詩節の rayi- を受ける。rayi- の特定化が、先行詩節の多くの形容詞によって既になされているのか (yéna 以下は補足的=同格的), 或いは yéna 以下の限定を待って初めて完了するのか (yéna 以下は限定的) の判断は難しい (HETTRICH 741), cf. B 2.3. しかし、主文 (先行詩節) において既に特定の対象が考えられている可能性が高く (GELDNER ad loc. “Nach den Beiwörtern ist der Schatz an Männern und Söhnen”), また, “iptv. ... yéna + subj.” の構造からも、当詩節は主節の目的に相当する (finalsatzäquivalent, op. cit. 671ff.) 同格的関係構文である可能性が高い, cf. X 113,10 t<sub>a</sub>vām purū́ṇīy ā́ bhará s<sub>a</sub>vás<sub>vyā</sub> yébhīr máṁsai nivācanāni sāmśan 「きみは、沢山の、よき馬からなる諸々の財を持って来い (iptv. 2sg.), それらによって [自分が] 献呈の言葉たちを、宣言しているものと私が思うことになるように (subj. 1sg.)」, VIII 60,11 rās<sub>va</sub> ... na(h) ... purusp<sub>r</sub>ham svāyāsastaram [rayīm] — 12 yéna váṁśāma ... sār<sub>d</sub>hata 「我々に、君は贈り与えよ (iptv. 2sg.), 多く欲しがられる、より自らの名声を伴う [財を], それによって、力を誇示している者たちに、我々が打ち克つことになるように (subj. 1pl.)」, IX 108,13–14. <sup>185</sup> instr. は機会・契機・場面などを表わすものと思われる: 「～の場を以て、～の機会に、～(の場)に (際して)」等々, cf. I 166,1 yudhēva śakrās taviṣāṇi kartana 「戦いに際してのように、強力な者たちよ、諸々の力強い [行為] を、君たち (マルトたち) は為せ」。

## I 15,8

*draviṇodā dadātu no vásūni yāni śṛṇviré |*  
*devéṣu tā vanāmahe ||*

ドラヴィノードスは、我々に与えよ (pres. iptv.),  
 (よく) 聞かれているところの (i.e. 名高い) <sup>186</sup> 財物たちを。  
 神々のもとで、それらを、我々は克ち得よう (aor. subj.).

*vanāmahe*          *van* 「打ち克つ、克ち得る (pres. *vanóti*)」          root-aor. 1pl. mid.

<機能> *vanāmahe* (主文) : 意志表明

## I 16,9#

*sémam<sup>187</sup> naḥ kāmam ā pṛṇa góbhīr áśvaiḥ śatakrato |*  
*stávāma tvā s<sub>u</sub>vādh<sub>ṣ</sub>vāḥ ||*

そういう [君, インドラ] は、我々のこの望みを、満たせ (pres. iptv.),  
 牛たちによって、馬たちによって、百の意志を持つ者よ。  
 我々は称えよう (pres. subj.), 君を、よき配慮を持つ者たちとして。

*stávāma*          *stav/stu* 「称える」          root-pres. 1pl. act.

<機能> *stávāma* (主文) : 意志表明

<sup>186</sup> KÜMMEL Stativ 115ff. 参照。

<sup>187</sup> *sá imām* (Pp.). 代名詞 m.nom.sg. *sá* と後続母音との contraction については, OLDENGERG Prolog. 463, Kl.Schr. 265 を参照。III 53,4 も参照。

I 24,1<sup>188</sup>

*kásya nūnām katamáśyāmṛtānām mánāmahe cāru devásya nāma |*

*kó no mahyá áditaye púnar dāt pitāraṃ ca dṛśéyaṃ mātāraṃ ca ||*

今、誰の、不死なる者たちの中で、どの

神の、慶ばしい名前を、我々は思念すべきか (aor. subj.)。

誰が我々を、偉大なアディティに返すのか (i.e. 我々を再び解放するのか) (aor. inj.)<sup>189</sup>。

父と母とを、私は見たい (aor. opt.)<sup>190</sup>。

**mánāmahe**      *man* 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」      root-aor. 1pl. mid.

語根 *man* には既にインド・イラン共通祖語の段階で、意味の違いを伴う二系列の活用があったことが、インド及びイラン側の資料から知られている、JOACHIM, 1978 121f. (現在形について); GOTO 239 n. 526, Material. (1997) 1016ff., 1024, 1058: pres. *mánya-<sup>te</sup>* (*mānye*, *mānyate*, OAv. *ma'niiete*) は、意志によらない、自発的な「考える」=「思われる、(～を) …と思う」を意味し (fientiv), 一方 pres. *manu-<sup>te</sup>* (*ámanuta*, *manvaté* 3. pl.) は、意志的に、積極的に「考える」=「思念する、考え出す」を意味する (facientiv). *mánya-* に対しては -s-aor. *maṁs-* (*maṁsi*, -*maṁsta*, OAv. *māṅghī*, *māstā*) が、*manu-* には root-aor. *man-* (*á-mata*, *á-manmahi*, OAv. *manṭā*) がそれぞれ対応し、現在幹・アオリスト幹ともに mid. でのみ活用する。VIII 61, 11 も参照せよ。*mánai* は OAv. *mānāi-cā* に正確に対応する。-s-aor. *māṁsai* = OAv. *māṅghāi* については X 113,10 を参照。

<機能> **mánāmahe** (疑問文): 義務

当詩節の自問に対する答えは、次の第2詩節において、対応する平叙文によって自答されている (→ 次詩節)。

<sup>188</sup> AB VII 13-18 の Śunaḥśepa (当詩節の詩人の名前) の物語に引用される Sūkta。王子に買われて人身祭儀の犠牲にされそうになった Śunaḥśepa が、諸神格に助けを求める際に、神々に助けを求めて歌う詩節である (次注参照)。続く第 2 詩節でこの自問に自ら答えを与え、のち順番に様々な神格を称えてゆくごとに、彼の体に巻き付けられた縄がほどけていく。

<sup>189</sup> *á-diti-* はここでは、神格の名前であると同時に、抽象名詞 *á-diti-* 「拘束されないこと、罪の無いこと」として用いられていると考えられる: 「我々を、無拘束に返す」=「我々を再び自由にする、無罪放免にする」, BRERETON *Ādityas* 203f., cf. GELDNER ad loc., cf. I 24,15 *áthā vayám āditya vraté tavā- 'anāgasō áditaye sṣyāma* 「そうして、われわれは、アディティの子 (ヴァルナ) よ、君との誓いにおいて、無拘束 (= 無罪の状態) のために (／アディティのために)、咎無き者たちでありたい」(BRERETON op. cit. 203)。また「無拘束に返す」とは、Mārtāṇḍa- の神話を背景として、死後原初の存在に回帰することを (も) 言っている可能性がある, cf. X 72 (後藤 人類と死の起源 420)。

<sup>190</sup> つまり「死にたくない／生き続けたい」, GELDNER ad loc.

## I 24,2

*agnér vayám prathamáśyāmṛtānām mánāmahe cāru devāsya nāma |*

*sá no mahyā áditaye púnar dāt pitāram ca dṛśeyam mātāram ca ||*

われわれは、不死なる者たちの中で最初の者である<sup>191</sup> アグニの  
慶ばしい名前を、思念しよう (aor. subj.)。

彼が我々を、偉大なアディティに返す (i.e. 我々を再び解放する) (aor. inj.)。

父と母とを、私は見たい (aor. opt.)。

*mánāmahe*      *man* 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」      root-aor. 1pl. mid.

語幹の意味については、I 24,1 を参照。

<機能> *mánāmahe* (主文): 意志表明

詩人は、先行詩節 (I 24,1) における自問に対し、殆ど同じ表現を用いて自答しているが、それと同様の機能 (義務: 「我々は～すべきである」) の可能性は低い。II A 1.1 補説 1 を参照。

## I 25,17

*sám nú vocāvahai púnar yáto me mádhuv ābhrtam |*

*hóteva kṣádase priyám ||*

さあ、我ら両者 (詩人シュナハシェーパ=話し手とヴァルナ) は語り (謀り) 合おうではないか (aor. subj.), もう一度。

私によって<sup>192</sup>, 蜜酒が運ばれて来たからには,<sup>193</sup>

ホートリ (祭官) が、好ましい [蜜酒] を、饗するために<sup>194</sup> [運んで来る] ように。

<sup>191</sup> 「最も新しい」とも解される, cf. FORSSMAN MSS 56 (1996) 49, 58f. (文献呈示有り), 更に Pāṇ. VI 2, 56.

<sup>192</sup> *me* は *vadj. ābhrtam* の動作主を表すものと解した。

<sup>193</sup> *yátas* は、関係代名詞 *yá-* の *abl.* として機能し得る一方で、先行詞の数に関係無く単数形しか持たないなど、不変代詞的な性質をも有している。更に当詩節のように、もはや何らかの先行詞を想定することが出来ない場合、*yátas* は独立の従属接続詞としてのみ理解が可能である, HETRICH 318–327 を参照。ただし接続詞の場合も、*abl.* の意味を留めた「～した後で、～するとすぐに」(GELDNER, 同じく HETRICH) を基本に設定すべきである。このような独立用法 (5x) のうち当詩節を除く 4 箇所が、全てアグニの誕生に言及しているという事実は注目される, *op. cit.* 325f.。

*sám ... vocāvahai* vac 「話す, 言う」 redupl. aor. 1du. mid. (reciprocal + *sám*)

*sám-vac* は「共に謀り合う, 協議する, 共同でことに当たる」の意味。

「話す, 言う」を意味する動詞は, 現在語幹では語根 *brav/brū* を, その他の語幹では *vac* を (完了語幹では *ah* も) 用いる「補完現象」(suppletion)を示す<sup>195</sup>, cf. I 30,6 *sám anyēsu bravāvahai* 「他の諸々の〔競走〕に関して (も), 我ら両者は共に語り (謀り) 合おうではないか」。1sg. の用例も参照せよ: X 39,5 *purāṇā vām vīryā prā bravā jāne* 「君たち両者 (アシュヴィン双神) の以前の諸々の武勲を, 部族の前で私は公言しよう」:: VI 59,1 *prā nū vocā sutēsu vām vīryā yāni cakráthuh* 「今, 私は公言しよう, 君たち両者の〔ために〕搾られた〔ソーマ〕たちの前で, 君たち両者が為した諸々の武勲を」。

<機能> *sám ... vocāvahai* (主節): 勧誘

## I 25,5

*kadā kṣatraśríyaṃ náram ā várūṇaṃ karāmahe* |

*mṛḍikāyorucākṣasam* ||

何時 (になれば), 支配権において華々しい男を<sup>196</sup>,

ヴァルナを, こちらへ, 我々は引き寄せることになるのか (aor. subj.),

(我々への) 寛大さのために, 幅広い眼差しを持つ〔ヴァルナ〕を。

<sup>194</sup> GELDNER 訳, GOTÖ 122 n. 130 と共に, 動詞 *kṣad* 「(食事を) 出す, ご馳走する」(GOTÖ 122f.) の infinitiv とする (GELDNER は 'vorkosten' 「予め味わってみる」と訳出。SGALL 181, 198 もこれに従う)。通常 inf. の意味上の主語 (*hótar-*) が主格に置かれるのは, inf. *-dhyai* の場合に限られる, cf. SGALL 238 + n. 132; しかもこの現象は, *-dhyai* が iptv. つまり述部として使われるという統辞的特徴と深く関係している, op. cit. 155f.。inf. *kṣádase* を支配する本動詞としては, Pāda b と同じ *ā-bhar/bhṛ* が想定される。

<sup>195</sup> DELBRÜCK 274; Altindische Wortfolge 93; Grundriß der vergleichenden Grammatik (= Vergl.Synt. II) IV-2 256ff., OSTHOFF Vom Suppletivwesen der indogermanischen Sprachen 11f.。注127も参照。

<sup>196</sup> 一般には「支配権を完全にする」或いは Bahuv. 「栄華を支配権において持つ」という解釈がなされている, cf. SCARLATA 549。後者の場合, アクセントの位置は説明を要する。op. cit. 553f. によれば, *-śrī-* を後半要素とする複合語は, *mārya-śrī-* 「若い女の華々しさを持つ」以外, 全て後半にアクセントを持ち (cf. WACKERNAGEL/DEBRUNNER Nachtr. ad II-1 83), Bahuv. としての解釈も可能であるという, cf. WACKERNAGEL/DEBRUNNER II-2 39 (NARTEN *śrīṇāti* 282 n. 19 は *agnīśrī-*, *hariśrī-*, *ghṛtaśrī-*, *māryaśrī-*, *darśataśrī-* に Bahuv. を認める)。SCARLATA は, Tatp. 「～を完全にする」のタイプと, 規則的に後半のアクセントを持つ *su-śrī-* との影響により, Bahuv. *°śrī-* が標準化した可能性を指摘している。

á ... *karāmahe* kar/kr 「為す, 作る」 root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> á ... *karāmahe* (疑問文): 見込み

当該 Sūkta では, ヴァルナは最初と最後の三詩節(第1-3詩節及び第19-21詩節)においてのみ2人称に置かれ, 間の第4-18詩節では一貫して3人称に置かれている。よって当詩節も, ヴァルナへの質問文ではなく, ヴァルナを前にして詩人が自問しているものと判断される, cf. VII 86,2, I 41,7, IV 43,1。

### I 26,8<sup>197</sup>

*s<sub>u</sub>vagnáyo hí vār<sub>i</sub>yam devāso dadhiré ca naḥ |*

*s<sub>u</sub>vagnáyo manāmahe ||*

よき祭火を伴って, 神々は, 望みのものを,

自らに定め置いたのだから<sup>198</sup> (perf. ind.)<sup>199</sup>, そして我々の「望みのもの」を<sup>200</sup>。

よき祭火を伴って, 我々は思考しよう / 「詩歌を」考え出そう (aor. subj.)。

*manāmahe* man 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」 root-aor. 1pl. mid.

<sup>197</sup> 第 7-9 詩節は, 神々と人間との関係 (give-and-take) におけるアグニ (祭火) の役割について歌ったもの, GELDNER ad loc.: 7 *priyó no astu viśpátir hótā mandró váreṇ<sub>i</sub>yah | priyāḥ s<sub>u</sub>vagnáyo vayám* 「部族の主人 (アグニ) は, 我々にとって好ましくあれ / 我々の一員であれ (cf. GOTÖ Anusantatyai 86-88)。ホートリ祭官は, 悦ばしい者は。よき祭火を伴ったわれわれは, (神々にとって) 好ましい / (神々の) 一員である」—— 8 当詩節 —— 9 *áthā na ubháyeṣ<sub>a</sub>ām ámrta márt<sub>i</sub>yān<sub>a</sub>ām | mithāḥ santu prāsastayah* 「そして, 我々両方の者たちには, 不死なる者よ, [不死なる者たちと (cf. 次注)] 死すべき者たちとの間には, お互い, 諸々の約束があれ」。要約: 祭火が我々にとって *priyá-* であれば, i.e. よい祭火を伴って (設置して) いれば, 我々は神々にとって *priyá-* である (7)。かつて神々もよい祭火を持っていたため, 自分たちの望み (祭式における歌やご馳走) と, その見返りとして人間たちの望みを叶えることが出来たのだから。これからまた, 我々はよい祭火を伴って讃歌を歌うので (8), 神々と我々とは互いに (望みのため) 実現力ある言葉を交わし合おう (9)。

<sup>198</sup> 先行詩節の内容に対する理由, →上注197を参照。

<sup>199</sup> 前後の文脈から (上注), perf. ind. の価値は, 過去の確認であると判断される (恐らく KÜMMEL Perf. 77f. “konstatierend oder besser faktisch” に当たる)。

<sup>200</sup> 背後には, X ca Y の構文があると思われる。しかし X にあたる「自分たち (=主語) の (*téṣām* etc.)」は, 動詞 *dadhire* の mid. possess.-affekt. によって表現されているため省略されていると考えられる。KLEIN Disc.Gram. I 211ff. は GELDNER 訳に従い, *ca* に副詞的な意味 “also, even” を想定しているが (“... the heavenly ones bring about [brought about の誤りか, cf. GELDNER “bringen”] the desirable thing also for us”), 他に同様の用例はないとしている (KLEINが挙げるもう一つの例 X 115,1 *ádthā ca nú* も他の解釈を許す)。またその場合, mid. の価値を理解することも出来ない。—— X Y *ca* (Z *ca*) の構文において X (=主語) が省かれる場合として, VIII 88,3, X 157,1 も参考にせよ。

語幹の意味については、I 24,1 を参照。

<機能> *manāmahe* (主文)：意志表明

*man* の root-aor. は、nasal pres. *manu*<sup>1e</sup>「思念する、考え出す」(facientiv, 意志的)に対応するアオリスト語幹である、→ I 24,1。当箇所は、詩人たちがよき祭火を伴って神々を称えることを強く宣言する場面であり(注197参照)、-s-aor.「思われる、(～を)…と思う」(fientiv, 自発的：-yá-pres. *mánya*<sup>1e</sup>に対応)の意味を想定すること(cf. HARBARDON Wurzelaorist 104. n. 49：「自分たちを、よき祭火を持つ者たちであると、我々は思おう」?)は不可能である。*manāmahe* は絶対的に用いられているか、或いは *stómam* などの目的語が省略されているとも考えられる。詳しくは VIII 61,11 を、また V 50,5 をも参照せよ。

#### I 27,13#

*námo mahádbhyo námo arbhakébhyo námo yúvabhyo náma āśinébhyaḥ |*

*yājāma devān yádi śaknāvāma mā jyāyasaḥ śāmsam ā vrkṣi devāḥ ||*

偉大な者たちに、敬礼(あれ)。弱小な者たちに、敬礼(あれ)。

若い者たちに、敬礼(あれ)。年取った者たちに、敬礼(あれ)。

神々を、我々は祭ろう(pres. subj.)、もし我々に出来るなら(pres. subj.)。

より格上の者の(権威ある)言明(非難)を、神々よ、私が我が身に引き受けることが<sup>201</sup>無いようにせよ(*mā* + aor. inj.)<sup>202</sup>。

<i>yājāma</i>	<i>yaj</i> 「称讃する、祭る」	full-gr. them. pres. 1pl. act.
<i>śaknāvāma</i>	<i>śak</i> 「能力がある、…出来る」	nasal pres. 1pl. act.

<機能> *yājāma* (主節)：意志表明

*śaknāvāma* (*yádi* 条件節)：見込み

<sup>201</sup> *ā-varj/vrj* (mid.) は「(自分の)身を向ける」或いは「～を(自分の方へ)向ける」を意味する。ここでは後者の意味が想定される：OLDENBERG Noten ad loc. (可能性の一つとして)“möge ich nicht den Fluch ... auf mich ziehen”, Hoffmann bei NARTEN Kl.Schr. 5 “nicht möchte ich mir den Machtspruch eines Stärkeren zuziehen”, HOFFMANN 49“lasst nicht zu ... dass ich zuziehe”, cf. GELDNER 訳。特に NARTEN Kl.Schr. 4f. を参照。

<sup>202</sup> より格上の詩人(祭官)が公に発する言葉は、自分のものよりも実現力を持つため、それが自分を攻撃することがないように神々に求めている。

条件付き心構え (*yājāma*) については A 1.2.2 b) を, *Sūkta* の最終詩節における意志表明については, A 1.2.2 c) を。 *yád(i) śaknāvāma* については B 3 を参照。

## I 30,6

*ūrdhvās tiṣṭhā na ūtāye 'asmín vāje śatakrato |*

*sām anyēṣu bravāvahai ||*

君 (インドラ) は立ちそびえよ (pres. iptv.), 我らへの助力のために,

この競走において, 百の意志力を持つ者よ。

他の諸々の [競走] に関して (も), 我ら両者は共に語り (謀り) 合おうではないか (pres. subj.)。

*sām ... bravāvahai* *brav'/brū* 「話す, 言う」 root-pres. 1du. mid. (reciprocal + *sām*)

<機能> *sām ... bravāvahai* (主文): 勧誘

話し手は, 「現在のこの競走においても (*asmín*), またこの先未来に行なう競走においても (*anyēṣu*)」, 自分と同盟関係を結ぶようインドラに促している。一般論や一般的心構え (意志表明) と同様に, ここでは「勧誘」が未来全般に有効なものとして表現されていると考えられる → A 2。

## I 33,1

*étāyāmó<sub>pa</sub> gavyānta índram asmākaṃ sú prāmatiṃ vāvṛdhāti |*

*anāmṛṇāḥ kuvíd ād asyā rāyó gāvām ketaṃ páram āvárjate naḥ ||*

さあ (来い/行け)。牛を求めて, 我々はインドラにすがろうではないか (pres. subj.)。

われわれ (へ) の気遣いを, しかと, 彼は増大させるべし (perf. subj.)<sup>203</sup>。

さて, 果たして, 妨げない者として<sup>204</sup> [彼は], この財への (i.e. この財を欲する),

<sup>203</sup> *vāvṛdhāti* は, 完了語幹が幹母音化 (現在語幹化) した形 (*vāvṛdhá-*) に基づく接続法 (THIEME Plusquamperf. 48, KÜMMEL Perf. 471。III 33,10 を参照)。

<sup>204</sup> *ā-mar'* 「妨げる」の派生語であろうが, 語形形成の仕組みは明らかではない, cf. INSLEER III 13 93 “non-hindering” + n. 38, NARTEN Kl.Schr. 264。

牛たちへの (i.e. を欲する) 我々の最高の意図に, 加担するであろうか (aor. subj.)<sup>205</sup>。

*áyāma*                      *ay/i* 「移動する, 進む」                      root-pres. 1pl. act.

<機能> *áyāma* (主文): 勧誘

*éta* ... subj. 1pl. → A 2.1。

### I 41,7

*kathā rādhāma sakhāya stōmaṃ mitrásyā<sub>a</sub>ryamñáḥ |*

*máhi psáro váruṇasya ||*

いかにして, 我々は果たすことになろうか (aor. subj.), 盟友たちよ,

ミトラへの, アリヤマンへの頌歌を,

ヴァルナへの, 大きな喜ばせを。

*rādhāma*                      *rādh* 「成功する, うまくいく」                      root-aor. 1pl. act.

動詞の中には, 表す行為自体は自動詞的 (fientiv/facientiv) であるが, 絶対用法を除いて, 行為の遂行にとって何らかの補足要素 (acc.) を必要とするものがある (ただし, 他動詞のように主語が何らかの形でその対象に働き掛けたり, 影響を与えたりすることはない), GOTÖ Funktionen des Akkusativs 29f.: Verba mit “Bedingungsakkusativ”<sup>206</sup>. *rādh* 「成功する」 (fientiv) もこのグループに属すると考えられ, 目的語 (acc.) を取る場合には, 「～を対象として, ～に関してうまくいく」<sup>207</sup> > 「～に (首尾よく) 到達する; ～を (うまく) 為し遂げる, 果たす」等の他動詞的な意味を持つ, KÜMMEL Perf. 423, cf. Stativ 91 n. 161. 動作様態が fientiv であることは, 絶対用法の場合も, acc. を取る場合も変わらない<sup>208</sup>。

<機能> *rādhāma* (疑問文): 見込み

聞き手はアーディティヤたちであるが, 当詩節だけからは, 話し手が彼らに質問している

<sup>205</sup> *kuvíd* 文については, C 3 を参照。

<sup>206</sup> Cf. GOTÖ 26f.: (facientiv oder fientiv) mit affiziertem Objekt.

<sup>207</sup> 限定の対格としても理解できよう。

<sup>208</sup> Cf. KÜMMEL Stativ 91: aor. mid.-pass. *árādhi* → fientiv :: root-aor. act. → agentiv-transitiv.

のか、あるいは彼らを前に自問しているのかを決定することは出来ない。しかし後続の詩節を考慮すれば、後者の可能性が高いと思われる：8 *mā vo ghnántam mā śápanam prāti voce devayántam | sumnáir íd va ā vivāse* 「神々を求める者を打ち殺している者に対して、君たちのために、私が自ら言い返すことがないようにせよ<sup>209</sup>，[神々を求める者を] 罵っている者に対して [言い返すことが] ないようにせよ。善意によってのみ、君たちを、我々は（自分たちに）勝ち得ようとしている」，9 ... *nā duruktāya sprhayet* 「悪く言われた [言葉，i.e. 悪口] を、人は求めるべきではない」。これらの詩節で詩人は、アーディティヤたちへの頌辞と喜ばせの為の条件 (i.e. *kathā* ... に対する答え) として、神々への要求と自らの意志、そして一般的な禁止事項を確認しているものと思われる。よって第7—9詩節は、神々を前に詩人が自問自答しているものと判断される，cf. VII 86,2, IV 43,1, I 25,5。

## I 53,11#

*yá udṛcīnd<sub>a</sub>ra devágopāḥ sákhāyas te śívátamā āsāma |*

*tvāām stoṣāma t<sub>a</sub>vāyā suvīrā drāghīya āyuh pratarām dādhanāḥ ||* Pāda cd = X 115,8

[唱え] 終わりに<sup>210</sup>，インドラよ，神々を牛飼いとする<sup>211</sup>，  
君の，最も幸ある盟友たちで，我々があるように (pres. subj.)  
きみを，我々は称えよう (aor. subj.)，君によって，よき男子に富み  
[自分たちの] 命を，より先へ延長させつつ。

*āsāma*

as 「存在する，…である」

root-pres. 1pl. act.

<sup>209</sup> *mā* + aor. inj. 1pers., HOFFMANN 47f.

<sup>210</sup> *udṛc-* は *úd-arclṛc* の動作名詞で、「唱え終わり，唱え切り」または「最後の詩節」を指すと思われる（動作名詞は常に具体的な実体詞に移行し得るので，必ずしも他に Tatpuruṣa 「最後の ṛc-」の可能性を考える必要は無い，cf. SCARLATA 66f.）。例証される唯一の定動詞形 AV *ud-anṛcur* (perf. ind.) は「唱えて（牛を）外に出す」（Vala 神話）の意味で用いられるが，これは，同神話の RV の表現 *ārcantaḥ ... gā āvidan* 「唱えながら，牛たちを彼らは見つけた」（I 62,2），*udājan ... gomāyaṃ vāsu* 「牛たちからなる財物を，彼らは駆り立てて外へ出した」（X 62,2）等に基づく特別な用法である。OLDENBERG Noten ad I 113,18 及び GELDNER ad I 113,18 は，同じ *úd-arclṛc* の派生名詞である *udarká-* にも，この神話的意味の影響（i.e. 「唱えて報酬を引き出すこと／払わせること」）を想定している：RV I 113,18 *sūṇṛtānām udarké*，OLDENBERG “‘Heraussingen der Freigebigkeit’. d. h. ihr Hervorbefördern durch rituellen Gesang”，GELDNER “wenn die Schenkungen (schnell) ... herausgesungen werden”。しかし，*sūṇṛtā-* は「気前の良さ，報酬」ではなく，「よき男らしさを持つこと，勇敢さ／よい男があること」（<\*su-Hnṛ-tā-）を意味し，直接称える対象を表わすので，*udarká-* にも *udṛc-* と類似の意味が想定される。いずれの語も Sūkta の終わり（近く）に現れることに注意すべきである，cf. SCARLATA loc. cit.。

<sup>211</sup> 自分たちを牛の群れに，神々をその護り手たる牛飼いに喩えている，cf. V 45,11, VII 64,3。

*stoṣāma*                      *stav/stu* 「称える」                      -s-aor. 1pl. act.

*stav/stu* の -s-aor. は, ind. では mid. で活用するが, subj. は全て act. 活用を示す: *stoṣat* (2x), *stoṣāma* (4x: I 53,11, VI 55,4, VII 2,2, X 115,8)。mid. 活用の動詞が aor. subj. においてのみ act. を示す用例については, HOFFMANN Aufs. I 249 n. 10, NARTEN 256 + n. 798, INSLEER IF 73 (1968) 317 n. 7, GOTÖ 67 n. 40, 144 n. 195 を参照。

<機能> *ásāma* (同格的関係節): 見込み

DELBRÜCK 302ff. は, 主文における1人称接続法と1人称願望法との使われ方から, 動詞の中には本質的に1人称接続法をとるものと1人称願望法をとるものとが存在し, それは, 意志内容の実現が話し手の支配下にあるものと認識されるか (subj.), そうでないか (opt.) にかかっていると結論づけた。それによると, 動詞 *as* は後者に属するものの, 目的節では subj. でのみ例証されている。HETTRICH (DELBRÜCK loc. cit. の議論を踏襲) によると, これは, 目的節では subj. が opt. の機能領域をも余分に負担している (subj. の機能領域が opt. のそれへも広がった) ためであるという, op. cit. 286f., 390f., 673, 678.<sup>212</sup> しかしながら, 語彙自体が持つ性質 (意志性の有無) と叙法の機能とは, それぞれ別次元に属する事柄であり, subj. と opt. とは, 語彙の意味とは離れて, 全てその機能自体によって理解出来る。ある目的節で subj. *ásāma* が, 別の所で opt. *syāma* が用いられるならば, それは, 話し手が目的節の実現度に対して異なる姿勢を持つことの顕れと見るべきであろう<sup>213</sup>。その違いを訳出できるか否かは別の問題である (従属節, 特に目的節の場合は難しい)。I 179,3 の議論も参照せよ。

<機能> *stoṣāma* (主文): 意志表明

Sukta の最終詩節における意志表明については A 1.2.2 c) を参照。

## I 62,1

*prá manmahe śavasānāya śūśám āṅgūśám gírvaṇase āṅgirasvát |*

<sup>212</sup> subj./opt. の両方が用いられ得るのは, HETTRICH 287 によれば, 例えば *yátha* 目的節の場合, 主節の事態がまだ実現しておらず, 目的節に示された意志の実現が前者の実現如何にかかっている場合のみであるという。主節の事態が既に実現している場合 (pres. ind., aor. ind.) には subj. だけが用いられるという。

<sup>213</sup> 実際に HETTRICH の議論 (subj. による opt. の機能領域への侵害) が有効性を持ち得るのは, 叙法の機能と語彙的意味との不一致が問題になる時ではなく, 主節, 目的節のそれぞれに用いられる法どうしの機能的整合性が説明出来ない時であろう。その時に初めて, 法の機能以外の要因——法の一致, 法の attraction, 法の suppletion など——を考える必要が生じる。

*svṛktībhi stuvatā ṛgmiyāyā- ārcāmā<sub>a</sub>rkām náre víśrutāya ||*

強大なる者（インドラ）のために、我々は考え出す（pres. ind.），力みなぎる  
 誉め歌を、（歓迎）歌を好む者のために、（かつての）アンギラスたちのように。  
 称えている者（私）のよき讃歌たちによって、讃歌に値する者のために、  
 詩歌を、我々は唱えよう（pres. subj.），広く聞こえた（名高い）男のために。

*ārcāmā*                      *arc/ṛc* 「（讃歌を）歌う、唱える」                      full-gr. them. pres. 1pl. act.

<機能>    *ārcāmā*（主文）：意志表明

# I 82,1<sup>214</sup>

*úpo śú śṛṇuhí gíro    mághavan mātathā iva |*

*yadā naḥ sūnṛtāvataḥ    kára ād artháyāsa íd    yójā nāv índra te hárī ||*

しかと、君は耳を傾けよ（pres. iptv.），歌たちに。

有能な者よ、応じぬ者のようでは<sup>215</sup> あるな。

もし我々を、十分な雄々しさを備えた者に

君がすることになるならば（aor. subj.），そうすれば、まさに〔自らの〕目的を君は得ること  
 になろう（pres. subj.）。<sup>216</sup>

さあ、インドラよ、君の二頭のハリたちを<sup>217</sup>，私は繋ごう（aor. subj.）。

<sup>214</sup> 1-5 詩節は全て、Anuṣṭubh に *yójā nv índra te hárī* が付加された 5 Pāda から成っており（つまり Pañkti），最終詩節だけ Jagati で歌われている。RV では、一篇の最後の歌だけがそれまでと異なる韻律で歌われることがあるが（OLDENBERG Proleg. 144ff.），このように Jagati が最後に現れるのは極めて異例である（op. cit. 147）。——当該 Sūkta 全体の解釈および背景にある思想については、堂山「新しい歌」（2000）及び *Ṛgveda I 82*（2001）を参照。

<sup>215</sup> Pp. と共に *mā átathāḥ* と分解し、副詞を後半要素とする Bahuvrīhi *átathā-* 「『はい』と言わない者」を想定する、cf. WACKERNAGEL/DEBRUNNER II-1 124, HOFFMANN 54 n. 32。

<sup>216</sup> *yadā* に導かれる条件節は、時間的に主節の内容に先行して後者が起こる為の原因・きっかけとなる事態を表す（HETTRICH 216ff.）。散文での用法と同様に、「～すれば必ず／たちまち；～する度に」のニュアンスが感じられる、cf. III 53,4 *yadā kadā ca sunāvāma somām* → 各論。ここでは主文・従属節ともに subj. が使われているので、未来の事態が起こるための前提条件とその帰結を示している：「自分たちの望みを相手が叶えて初めて、こちらも相手の望みに応じるであろう」。

<sup>217</sup> *hári-* は「黄緑色の」を意味する形容詞。しばしば馬の色（黄みがかった褐色）として用いられ、主としてインドラの戦車を牽く二頭の馬（*hári du.*）の名前を表わす。

yó jā

yoj/yuj 「つなぐ」

root-aor. 1sg. act.

&lt;機能&gt; yó jā (主文): 意志表明

意志表明 (yó jā ...) は以下1-5詩節に亘って繰り返され、直後の最終詩節において実現されるものとして述べられている → A 1.2.2 b)。以下、後続の詩節を全て挙げる：

I 82,2 ákṣann ámīmadanta hīy áva priyā adhūṣata | ástoṣata svābhānavo víprā náviṣṭhayā matī  
yó jā n<sub>u</sub>v ... ||

彼らは食べた (aor. ind.)。彼らはまさしく酔った (aor. ind.)。好ましい [品々を] <sup>218</sup> 彼らは振るい落とした (aor. ind.) <sup>219</sup>。自らの輝きを持つ、[昂揚に] 震える詩人たちは、最新の詩 (「思考」) によって、称えられた (aor. ind.)。さあ、… 私は繋ごう (aor. subj.)。

I 82,3 susaṃdṛṣaṃ t<sub>u</sub>vā vayāṃ mághavan vandiṣtmāhi | prā nūnāṃ pūrṇāvandhura stutó yāhi  
vāsāṃ ānu yó jā n<sub>u</sub>v ... ||

良き全貌を備えた君を、我々は、有能な者よ、誉め称えたい (aor. opt.) <sup>220</sup>。戦車の座席を一杯にして、今こそ称えられて、君は発進せよ (pres. iptv.)、望みのままに <sup>221</sup>。さあ、… 私は繋ごう (aor. subj.)。

I 82,4 sá ghā tām vṛṣaṇaṃ rátham ádhi tiṣṭhāti govīdam | yāḥ pātraṃ hāriyojanāṃ pūrṇāṃ  
indra cīketati yó jā n<sub>u</sub>v ... ||

その人こそは、この雄々しい戦車に乗ることになろう (pres. subj.)、牛たちを手に入れる [戦車] に、もし彼が、ハリ繫ぎに属するコップが一杯に満たされているのに、インドラよ、気付くことになるならば (perf. subj.)。 <sup>222</sup> さあ、… 私は繋ごう (aor. subj.)。

<sup>218</sup> マルト神たちは一般にモンスーンの象徴と見なされ、その場合「好ましい品々」は稲光や雨を意味すると考えられる。しかしこの歌は牛の掠奪行がテーマと思われ、雨が降れば牛の足跡を辿ることが出来ず (cf. KRICK Das Ritual der Feuergründung 1982, 306 n. 787), また河川が干上がっていなければ部隊の動きが取り難いと考えられるので、ここでは初夏 (雨期の前) の強い陽射し、或いは初春の陽光が意図されているとも考えられる。掠奪行の時期については、op. cit. 41, 309 n. 803, 421 を参照。

<sup>219</sup> aor. ind. は、今目前で起こったばかりのことを (“aktuell”), 或いは過去の事実をそのようなこととして確認する (“Konstatierung”) 機能を持つ。ここで一貫して使われる aor. ind. には前者の機能が想定され、インドラに随行する若い神々 (マルト神たち) が供物やソーマを受納し、その証拠として好ましい品々を振るい落としたこと、よって讃歌が受け入れられたことを、詩人が目前で起こったばかりの出来事として表現している。

<sup>220</sup> 「良き全貌を備えた君を誉め称えるする」とは、称讃によってインドラを「欠陥の無い完全な姿」或いは「機嫌の良い顔」にすることを表すと考えられる。

<sup>221</sup> vāsāṃ ānu: yāthā vāsas (subj.) などと同様、「意のままに・好きなように」を意味する表現、→ 注173。

<sup>222</sup> 関係文では、subj. が未来全般への言及を通じて、特定の時に限定されない普遍的・一般的事態を表すことが多い:「～する者は、いつでも～」→ I 3.2 冒頭, II 3.2。同様の機能を持つ pres. ind. と inj. もこの種の意味の複文 (“gnomische Periode”, HOFFMANN 115, 238) に用いられることがあるが、殆どの

I 82,5 *yuktás te astu dáksina utá savyáh śatakrato | téna jāyám úpa priyám mandāno yāh<sub>i</sub>y  
ándhaso yó<sub>jā</sub> n<sub>ā</sub>v... ||*

繋がれて、あれ (pres. iptv.), 君の右側の[馬]は、そして左側の[馬]も、百の念力を持つ者よ。これによって、好ましい妻の下へと、君は走れ (pres. iptv.), [ソーマの]若芽たちに酔って。さあ、… 私は繋ごう (aor. subj.).

I 82,6 *yuná<sub>jmi</sub> te bráhmanā keśínā hári úpa prá yāhi dadhiśé gábhas<sub>i</sub>yoh | út tvā sutāso rabhasā  
amandiśuh pūṣaṇvān vajrin sám u pátn<sub>i</sub>yā mada<sub>h</sub><sup>223</sup> ||*

言葉の霊力 (bráhman-) によって、私は繋ぐ (pres. ind.)<sup>224</sup>, たてがみ持つ君の二頭のハリたちを。君は(妻の)下へと発進せよ (pres. iptv.). [自らの]両手に[手綱を/ヴァジュラを]君は置き添えた (perf. ind.)<sup>225</sup>. 君を、搾られた[ソーマ]たちが、激しく酔い昂らせた (aor. ind.). 妻と伴に、ヴァジュラを持つ者よ、プーシャンを伴う君は酔う (pres. inj.).

## I 91,6

*t<sub>ā</sub>vām ca soma no váso jīvātum ná marāmahe |*

*priyástotro vānaspátih ||*

きみが、ソーマよ、我々が生きることを

欲することになれば (pres. subj.)<sup>226</sup>, 我々は死なないで(あろう) (aor. subj.),

場合、主節と従属節とに同じ mood が使われる → HOFFMANN Aufs. I 29 を参照 (但し機能の類似性ゆえに、異なる mood が主文、従属節に別れて現れることもある, cf. HOFFMANN 238f.). ここでも主文及び関係節双方に subj. が使われており、「ハリ繋ぎに属する盃」のことに気付いて (cīketati), つまりその重要性を理解した上で、これをインドラに供する者だけが牛の掠奪に成功する[戦車に乗る] (tiṣṭhāti), という一般的表現と解釈出来る。一般論で述べることによって、繰り返し「ハリ繋ぎ」への意志を表明してきた詩人たちが自身が、当然この記述に当てはまるべき者であるということを、論理的要請として半ば脅迫的に確認・強調していると考えられる。

<sup>223</sup> Pp. amada<sub>h</sub> (ipf.) に反して mada<sub>h</sub> (pres. inj.) と解釈した、Pp.に反する同様の解釈例は HOFFMANN 297 に集められている。inj. pres.は、諸々の神格の性質や行いを一般論として表すことが多く (genereller Sachverhalt), この機能はインドラ讃歌でも多く見出される, HOFFMANN 119ff. (特にインドラ讃歌におけるこの機能については 124f.を参照)。mada<sub>h</sub>も同様に、インドラがソーマのもてなしを受け、妻のもとへ戻った後もその効力(酔い)の中にいるということを、インドラに常に当てはまる性質・個性として表していると考えられる。

<sup>224</sup> 詩人は二頭のハリを繋ぐ号令をかけた後、今現に繋いでいるものと想像しているので、pres. ind. yuná<sub>jmi</sub> には Koinzidenzfall の機能が考えられる → I 3.2.

<sup>225</sup> perf. ind. dadhiśé は Perf.本来の「到達・達成した状態 (erreichter Zustand)」を表し、インドラが手綱/ヴァジュラを手に取り終え、現在持った状態にあることを示している, cf. KÜMMEL Perfekt 272.

<sup>226</sup> 従属節(条件文)を導く ca が理解される, cf. HETTRICH 252ff.. KLEIN Disc.Gram. I 244f. は、それと同時に、先行詩節との等位接続の機能が重ねられているとする: I 91,5 *t<sub>ā</sub>vām somāsi sátpatis t<sub>ā</sub>vām*

好ましい詠唱を伴う、木々の主人である[君]が(欲することになれば)。

**marāmahe**      *mar/mṛ* 「死ぬ」      root-aor. 1pl. mid.

*mar/mṛ* は, aor. subj. 以外は全て mid. でのみ活用するが (pres., fut., perf., aor. ind./opt.), aor. subj. は act./mid. いずれの活用をも示す: mid. *marai* (VIII 93,5), *márate*, *marāmahe*; act. *marāma* (I 191,10-12), *marāti*, *maranti*. mid. 活用の動詞が aor. subj. で act. だけを示すタイプについては, I 53,11 を参照。Cf. I 191,10-12。

<機能> **marāmahe** (主節): 見込み

話し手たちが死なないという未来の事態は, ソーマが欲するという行為にかかっているの  
で, *marāmahe* に話し手の意志は入り得ない。複文全体で条件付き見込みを表わしているが  
(→ A 3.2 b)), その見込み (*ná ... marāmahe*) はその条件のもとでの未来全体を否定する  
ため, 一般論に近い意味が想定される, cf. X 97,17 *yám jivám aśnāvāmahai ná sá riṣyāti*  
*pūruṣaḥ* 「[誰にであれ] 生きている者に, 我々(薬草たち)が至る(であろう)者がいれば,  
その者は傷つくことはない(であろう)」。

## I 92,13

*uṣas tác citrám á bharā- aśmábhyaṃ vājinīvati* |

*yéna tokám ca tánayaṃ ca dhāmahe* ||      Pāda c = IX 74,5d

ウシャスよ, その輝かしい[品]を, 君は持って来い (pres. iptv.),

われわれのために, 競走馬を伴う女よ(?)<sup>227</sup>,

それによって, 種と子孫とを, [自らのもとに] 我々が置き定めることになるところの／な  
るように (aor. subj.).

**dhāmahe**      *dhā* 「置く; 置き定める」      root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

*rājota vṛtrahá* | *tuvám bhadró asi krātuḥ* 「きみは, 略奪隊の主ソーマである。きみは王である。そしてヴ  
リトラを殺す者である。きみは, 恵みある意力である」 — 6 *tuvám ca ...* 「そしてきみは…」。

<sup>227</sup> *vājinīvati*-f. は, Uṣas, Sārasvatī に対して多く用いられる (cf. *vājini*- = Uṣas III 61,1; = Sārasvatī VI 61,6)。  
「競走馬 (*vājin*-) を伴う」或いは「戦利品 (*vāja*-) をもたらす」の意味が想定される。後者の場合,  
同様に所有を表わす接尾辞 *-in-* と *-vant-* とによる過剰表示か, cf. *śiprín-* ~ *śipra-vant-* ~ *śiprīni-vant-*  
「口ひげをたくわえた」(いずれの場合も *-i-* は不明)。

<機能> *dhāmahe* (限定的関係節) : 見込み

関係節 *yéna ... dhāmahe* は *tác citráṃ* に対して限定的に機能していると思われる : *tád ... yéna ...* 「…であるところの, その～」, cf. IX 74,5d. その際, 関係節は事実上主文の目的を表わしているとも理解出来る (HETTRICH 592), cf. X 156,2, VIII 27,22, (IX 101,9). 同様に目的を表わし得る同格的関係節との構造上の違いについては, B 2 及び 2.2 を参照。

I 94,4

*bhārāmedhmāṃ kṛṇāvāmā havīṃsi te citáyantaḥ párvatā-parvatā vayám |*  
*jīvātave pratarāṃ sādhyā dhíyó 'agne sakhyé mā riṣāmā vayám táva*<sup>228</sup> ||

焚き木を, 我々は運ぼう (pres. subj.), 君への供物たちを, つくろう (pres. subj.),  
 気を付けながら, 節目ごとに<sup>229</sup>, われわれは。

先々まで (我々が) 生きる為に, (我々の) 諸々の思慮を君は成就させよ (pres. iptv.)<sup>230</sup>。  
 アグニよ, きみとの同盟関係において, われわれが傷つくことがないようにせよ (*mā* + aor. inj.)。

<i>bhārāma</i>	<i>bhar/bhṛ</i> 「運ぶ, 持って行く」	full-gr. them. pres. 1pl. act.
<i>kṛṇāvāmā</i>	<i>kar/kr</i> 「為す, 作る」	nasal pres. 1pl. act.

<機能> *bhārāma/kṛṇāvāmā* (主文) : 意志表明

未来において, 何度でも繰り返し運ぶ/つくる用意があることを表明している : 条件付き心構え。繰り返しの意味は, ここでは時の instr. の *āmredita párvatā-parvatā* によって示されている ; 他の文法手段として例えば : IV 20,10 *návyē deṣṇé ... prá bravāma*, VII 24,6 = VII25,6 *prá ... vevidāma ... pinva maghāvadbhyaḥ ... pāta svastībhiḥ* (cf. VI 59,1 *prá nú vocā sutéṣu vām vīryā*) → A 1.2.2 b)。

<sup>228</sup> Pāda d は第 1—14 詩節全ての Jagatī に共通。最後の 2 詩節 (15, 16) はいずれも Triṣṭubh。

<sup>229</sup> つまり「新月, 満月ごとに」。

<sup>230</sup> Cf. VI 56,4 *mānma sādhyā*。

I 99,1#<sup>231</sup>

*jātāvedase sunavāma sómam arātīyató ní dahāti védaḥ |*

*sá naḥ parṣad áti durgāṇi víśvā nāvéva síndhum duritātīy agnīḥ ||*

ジャータヴェーダスのために、我々は搾ろう (pres. subj.), ソーマを。

出し惜しみする者の財を、彼は焼き落とすべし (pres. subj.)。

彼は我々を<sup>232</sup>, 一切の艱難たちを越えて、渡すべし (aor. subj.)。

舟によって、大河を のように、危難たちを越えて、アグニは。

*sunavāma*

*sav/su* 「搾る」

nasal pres. 1pl. act.

<機能> *sunavāma* (主文): 意志表明

## I 102,3

*tām smā ráthaṁ maghavann práva sātáye jáitram yám te anumádāma saṁgamé |*

*ājā na indra mánasā puruṣtuta t<sub>u</sub>vāyádbhyo maghavañ chárma yacha naḥ ||*

その戦車を、有力な者よ、いつも<sup>233</sup> 前へ、君は援助 [して進ま] せよ (pres. iptv.), 獲得するために、

君の、勝者に属する車として、合戦において、我々が喝采を送ることになるところの／ように (pres. subj.)。

戦車競走において、我々のために、多く称えられたインドラよ、思考によって

君を求める我々のために、有力な者よ、避難所／庇護を、君は保持せよ (pres. iptv.)<sup>234</sup>。

*anu-mádāma*

*mad* 「酔う、悦ぶ」

full-gr. them. pres. 1pl. act.

<sup>231</sup> RV で唯一、1 詩節だけからなる Sūkta。

<sup>232</sup> 恐らく歌い手たちのこと、cf. III 20,4 *pārṣad víśvāti duritá gṛñántam* 「歌い手を、一切の困難たちを越えて (アグニは) 渡すべし」, cf. GELDNER ad loc.。

<sup>233</sup> *smā* 「いつでも、常に」, TICHY -tar- 131f. n. 23 を参照。

<sup>234</sup> loc./dat. + *sárma yam* については、VIII 47,3 注を参照せよ。

<機能> *anu-mādāma* (限定的関係節): 見込み

### I 103,6

*bhūrikarmaṇe vṛṣabhāya vṛṣṇe satyāśuṣmāya sunavāma sómam |*

*yá adṛtyā paripanthíva śúrō 'ayajvano vibhājann éti védaḥ ||*

多くの行為を為す、猛々しい雄牛（インドラ）に、

実現する激昂を持つ者に、ソーマを、我々は搾ろう (pres. subj.),

追い剥ぎのように、(囲いを) 破って [牛/財産を] 手に入れ<sup>235</sup>,

祭式を行なわない者の財産を、(他の者たちに) 分け与えながら進む (pres. ind.) 勇者 [インドラに]。<sup>236</sup>

*sunavāma*

*sav/su* 「搾る」

nasal pres. 1pl. act.

<機能> *sunavāma* (主文): 意志表明

### I 110,6

*ā manīṣām antárikṣasya nṛbhyah<sup>237</sup> srucéva ghṛtām juhavāma vidmánā |*

<sup>235</sup> *ā-dar*<sup>(i)</sup> / *dṛ* (~*dṛ*) ; 語根 *dar*<sup>(i)</sup> 「砕く、割る」は、全ての派生名詞及び動詞語形のほぼ全てにおいて *anī* 語形を示すことから (*dartár-*, *darmán-*, *dṛti-* etc. ; root-aor. inj. *dart*, -*si*-iptv. *darṣi*, perf. ptcpl. *dadr̥vāṁs-* etc.), 本来の語根は laryngeal を持たない (*anī*) と考えられる。intens. 及びその他の RV 以降の *seṭ* 語形は、類推等による二次的な発展である、→ PRAUST Altindisch *dṛ-/dṛ-* 425ff. *ā-dar*<sup>(i)</sup> は、大きく 1 [城壁、囲い等を] 割って開ける (3x), 2 (城壁、囲い等を) 割って [牛、物等を] 手に入れる (12x), 3 [敵を] 粉碎する (2x), の三つの意味を持ち、特に 1 と 2 とはインドラ等による牛の略奪・解放の神話 (Vala 神話) の文脈に多く見られる。gerund *ā-dṛtyā* は当箇所と VIII 66,2 に見られるが、いずれも目的語を持たない。ここでは Pāda cd の内容から、牛の強奪が想定されていると考えられるため、*gāv-* (e.g. VIII 34,14, VIII 32,18) 或いはより一般的な *vāja-* 「戦利品」 (e.g. II 12,15, IV 16,8, V 39,3) や *rādhas-* 「恩恵」 (I 110,9) が目的語として了解される (VIII 66,2 も同様, GELDNER ad loc. 参照), cf. III 30,21 *ā no gotrā dardḍhi gopate gāh sām asmābhyam sanāyo yantu vājāḥ* 「我々に、[一家分の] 牛の群れを、君 (インドラ) は (囲いを) 破碎してもたらせ、牛たちの主よ、牛たちを。われわれのために、戦勝品たちが、戦利品たちが、集まれ」。

<sup>236</sup> Cf. X 27,10 *sribhīr yó ātra vṛṣaṇam pṛtanyād āyuddho asya ví bhajāni védaḥ* 「この時、女たちと共に、雄牛 (インドラ) に戦をしかける者がいるなら、この者の財産を、戦わずして、私 (インドラ) は (他の者たちに) 分け与えよう」。

<sup>237</sup> 恐らく二音節 ; *Triṣṭubh* + *Jagati* (3x) は第 7 詩節にも見られる, OLDENBERG Noten ad loc.。

*taraṇitvā yé pitúr asya saścirá ṛbhávo vājam aruhan divó rájah ||*

(我々の) 計画を、中空に属する男たちに

知識によって、我々は献じよう (**pres. subj.**), グリタ (液体バター) を、スルチュ (木製の柄杓) によって のように。

これ (スルチュ) の<sup>238</sup> 父の遂行力を、体得したところの (**perf. ind.**)<sup>239</sup>

リブたちは、報賞として<sup>240</sup>, 天の空間へ昇った (**aor. ind.**)。

*á ...juhavāma hav/hu* 「(火中に) 献じる・注ぐ」 **redupl. pres. 1pl. act.**

<機能> *á ...juhavāma* (主文): 意志表明

## I 111,2

*á no yajñāya takṣata ṛbhumád váyah krátve dáksāya suprajāvatīm īṣam |*

*yáthā kṣáyāma sáravirayā viśā tán naḥ sárdhāya dhāsathā sāv indriyám ||*

我々の祭式のために、リブ [の力] を伴う活力を、君たち (リブたち) は作り出せ (**aor. iptv.**),

意志力のために、能力のために、よく子孫に富む滋養を、

全き男子に富む部族とともに、我々が住むことになるように (**pres. subj.**)。

そういう (感覚器官の) 活力を、我々の群れのために、君たちは置き定める (創造す) ベシ (**aor. subj.**), しかと。

*kṣáyāma kṣay/kṣi* 「住む」 **root-pres. 1pl. act.**

<機能> *kṣáyāma* (*yáthā* 目的節): 見込み

<sup>238</sup> DELBRÜCK 28f.によれば、アクセントのない代名詞 *a-* (schwach anaphorisch) は常に実体詞を指すという (V 60,6 を参照)。これに基づき、GELDNER ad loc.とともに、当箇所 *asya* 「それ」 = *camasá-* 「コップ」 (第3詩節; 内容としては *srúc-* f. ?) と考え、「これの父」とは「これを作った者」、即ちトゥヴァシュトリであると理解した、(背景にある神話については、IV 33,5, I 161,5 を参照), cf. OLDENBERG Kl.Schr. 260: “dieses Vaters”。

<sup>239</sup> *sac* + instr.: 「～を従える、引き連れる、伴う; 取得する」, cf. HETTRICH Rektionaler und autonomer Kasusgebrauch (1990) 88ff. (89に当箇所)。*sac* + acc. の違いを含め、詳しくは IX 74,5 を参照。

<sup>240</sup> *vājam* は Inhaltsakk.: 天の空間へ昇ったことが、即ち報賞である, cf. VIII 62,12。

## I 114,3

*aśyāma te sumatīm devayajyāyā kṣayādvīrasya tāva rudra mīdh<sub>u</sub>vah |*

*sumnāyānn id viśo asmākam ā carā- ariṣṭavirā juhavāma te havīḥ ||*

我々は獲得したい (aor. opt.), 君の善意を, 神々を祭ることによって,  
男子たちを支配する君の [善意を], 報酬払うルドラよ。

まさしく, 善意をなしつつ, われわれの諸部族のもとへ, 君は歩んで来い (pres. iptv.).  
男子たちを損なうことのない者たちとして, 君への供物を, 我々は献じよう (pres. subj.).

*juhavāma*      *hav/hu* 「(火中に) 献じる・注ぐ」      redupl. pres. 1pl. act.

<機能> *juhavāma* (主文): 意志表明

献じた結果, 男子 (兵力) を失わない者になるという意味。結果を先取りして表現すること (proleptic nominative, cf. IX 97,4), 讃歌や儀礼の奏功を確認したり, 或いはその見返りを神々に迫っているものと思われる → A 1. 2. 3 c), cf. VIII 53,7, IX 41,2.

## I 122,12

*etām śārdham dhāma yāsya sūrér ity avocan dāsatayasya nāmśe |*

*dyumnāni yēsu vasūtātī rārān viśve sanvantu prabhṛthēṣu vājam ||*

「この (マルトたちの) 群れを, 我々は置き定めよう (aor. subj.), どんな主人のものとしても」<sup>241</sup>

と, 彼ら (詩人たち) は言ったのだ (aor. ind.), 十からなる [食物] に<sup>242</sup>あり着く時に<sup>243</sup>,  
「諸々の壮麗さが, 裕福さが, そこに憩うところの (perf. inj.) [者たちは]」<sup>244</sup>

<sup>241</sup> 詩人 (祭官) は報酬 (*dāsataya-*, 次注参照) を出す祭主がいれば, その者をインドラに見立てて, マルト神たちをその味方につけようと宣言している。

<sup>242</sup> 後続詩節 *dāsatayasya dhāsér* のことと思われる: I 122,13 *māndāmahe dāsatayasya dhāsér dvīr yāt pāñca bībhṛato yānti ānnā* 「10 からなる食べ物 (の) を我々は喜ぼう, 5 つの食べ物たちを, 二度, 彼ら (給仕たち) が携えて進む時に (5×2=10)」。

<sup>243</sup> *nāmśa-* 「達すること」 ← *naś/āś, aśnóti*, cf. X 86.21 注を参照。

<sup>244</sup> *yēsu* は, GELDNER に従って, *viśve* にかかる関係代名詞と解釈した。*rārān* (*raṇ* perf. inj. 3sg.) の主語は *dyumnāni* (neut. pl) と *vasūtātīḥ* (f.sg.)。数の異なる主語が二つ以上並ぶ場合, 動詞の数は一番近くに位置するものに一致する, DELBRÜCK 85。(或いは「裕福さが喜ぶところの (*yēsu vasūtātī rārān*) 諸々の壮麗さを (*dyumnāni*) [我々は定めよう]」?)

皆、戦利品を、勝ち得よ (pres. iptv.), 諸々の (詩の) 献呈に際して」

**dhāma**                      dhā 「置く；置き定める」                      root-aor. 1pl. act.

当箇所 *dhāma* は韻律上3音節と判断されるため, subj. 語形と理解同定される: *dhāma* = OAv. *dāmā* (HOFFMANN/FORSSMAN 225) < PIIr. *\*d<sup>h</sup>aH-āma* < PIE *\*d<sup>h</sup>eh<sub>1</sub>-o-me*, cf. inj. *dhāma* \*<sup>245</sup> < *\*d<sup>h</sup>aH-ma* < PIE *\*d<sup>h</sup>eh<sub>1</sub>-me*. この理解は文脈にも反しない。一方で 3sg. *dhāti*, 1pl. *dhāmahe* (→ I 92,13, V 16,5) の場合は, その第一語尾のゆえに subj. と同定される, cf. OAv. subj. 2sg. *dāhi*, 3sg. *dāti*, 3pl. *dān*. Cf. root-aor. subj. 3sg. act. *dhat*: kurzvokalischer Konjunktiv → 注15。

<機能> **dhāma** (主節): 意志表明

*yāsya sūrér* を一般論的・譲歩的表現と考えるため (下注参照), *dhāma* の意志表明は特定の機会・対象に限られない話し手の心構えを表わすもの判断される, → A 1.2.2 b)。

#### I 159,5#

*tād rādho adyā savitūr vāreṇyaṃ    vayāṃ devāsya prasavé manāmahe |*  
*asmābhyaṃ dyāvāprthivī sucetúnā    rayīm dhattāṃ vāsumantaṃ satagvīnam ||*

サヴィトリの, その望ましい恩恵を, 今日

われわれは, [その] 神の督励のもとに (*prasavé*), 思念しよう (aor. subj.)。

われわれに, 天・地両界よ, よき注意力をもって

財を, 君たち両者は置き定めよ (pres. iptv.), 財物に富む, 百の牝牛を伴う [財] を。

**manāmahe**                      man 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」                      root-aor. 1pl. mid.

<機能> **manāmahe** (主文): 意志表明

語幹の意味については, I 24,1 を参照。

<sup>245</sup> 確実な用例は見られない。VI 2,9 *dhāma* を動詞語形として理解するのは難しい → 注28。

## I 160,5#

*té no gr̥ṇāné mahinī máhi śrávaḥ kṣatrām dyāvāpṛthivī dhāsatho brhát |*  
*yénābhī kṛṣṭís tatánāma viśváhā panāyāyam ójo asmé sám invatam ||*

その両者は、偉大な両者よ、歓迎歌によって迎えられつつ、我々に、大きな聞こえを、  
 高大な支配権を、天地両界よ、与えるべし (aor. subj.),  
 それによって、至る所で、諸部族を、我々が圧倒して広がっていることになるところの／よ  
 うに (perf. subj.)<sup>246</sup>,  
 賞嘆されるべき力を、われわれのもとに、完全に、君たち両者は送れ (pres. iptv.)。

*abhí ... tatánāma*

*tan* 「張る、延ばす；延びる」

perf. 1pl. act.

*tan* の perf. subj. は全て、完了語幹の意味「達成された状態」（「広がっている」）に基づく  
 くという (KÜMMEL Perf. 208)。ただし、総論への補説 1 も参照。

<機能> *abhí ... tatánāma* (同格的／限定的関係節)：見込み

*yéna ...* が *kṣatrām* にかかるのか(主節は Pāda ab), 或いは *ójo* にかかるのか(主節は Pāda d) は決定できない。前者の場合、「2人称接続法 + *yéna ...* 1人称接続法」の構造から、目的節として機能する同格的関係節の可能性が高い, cf. X 156,2, I 92,13, VIII 27,22, IX 101,9, V 54,15。一方後者の場合、関係節は限定的である可能性が高い。但しその場合も、関係節は事実上、主節の事態の目的に当たる内容を表わすと言える (HETTRICH 741)。B 2.3 を参照。

I 161,5<sup>247</sup>

*hánāmainām íti tváṣṭā yád ábravīc camasām yé devapānam ánindiṣuḥ |*

<sup>246</sup> *abhí-tan* については VI 49,15 及び注426を参照, cf. V 54,15。「諸部族を圧倒する」の表現については、IX 101,9 及び注521を参照。

<sup>247</sup> 工巧神トヴァシュトリは、自分が作った盃がリブたちによって見事に作り変えられたのを見ると (→ 第2詩節, cf. IV 33,5), 恥じて女たちの間に一旦身を隠す (→ 第3詩節), cf. TS VI 5,8,4, JB II 155,2。その後トヴァシュトリがリブたちを殺そうとすると (ab), 彼らはそれを逃れるため、各々自分の名前を変えてソーマ祭へ現れるようになる (c)。Pāda d *kanyā* が指すものは明らかではないが (cf. GELDNER ad loc.), ここでは、一般に若い娘が諸々の技能を身に付けるためには、技術神リブたちを上記の別の名で呼ぶべきだ、との教訓、ことわざの類と理解した。その場合, subj. *sprarat* は、話し手の意志に限定されない、社会一般の義務を表すと言えよう：「…するべきだ、…するものだ」。「意志」の担い手が、話し手を含むより広い範囲へと容易に移行し得るのは、他に、聞き手を特定しない疑問文などでも見られる現象である。

*anyā nāmāni kṛṇvate suté śacām*<sup>248</sup>      *anyāir enān kaṇṇyā nāmabhi sparat* ||

「その者たち（リブ三神）を、我々は打ち殺そう／打ち殺そうではないか（pres. subj.）、神々が飲むための<sup>249</sup> 盃を、非難したところの〔者たちを〕（aor. ind.）」と、トヴァシュトリが言った時（ipf.）,

他の名たちを、搾られた〔ソーマ〕のもとで、彼ら（リブたち）は自らに付ける（pres. ind.）。他の名たちによって、彼らを、娘は獲得すべきである（aor. subj.）。

*hánāma*                      *han* 「打つ、殺す」                      root-pres. 1pl. act.

<機能>    *hánāma*（主文）：勧誘／意志表明

# I 165,2<sup>250</sup>

*kāśya brāhmāṇi jujuṣur yúvānaḥ*      *kó adhvaré marúta ā vavarta* |

*śyenām iva dhrājato antárikṣe*      *kéna mahā mānasā rīramāma* ||

誰の言葉の霊力たちを、若者たち（マルト神たち）は喜んだのか（perf. ind.）。

誰が、祭儀へと、マルトたちを振り向かせたのか（perf. ind.）。

鷹のように、中空において滑空する〔彼ら〕を、

如何なる偉大な思考によって（彼らを）我々は止まらせるべきか／止まらせようか（aor. subj.）。

*rīramāma*                      *ram* 「止む、止まる」                      redupl. aor. (faktitiv) 1pl. act.

<機能>    *rīramāma*（疑問文）：義務

<sup>248</sup> *śacām* = *śacā*. X 34,5 注を参照。

<sup>249</sup> *devapāna-*: Bahuvrīhi, アクセントについては WACKERNAGEL/DEBRUNNER II-1 300 を参照。

<sup>250</sup> 詩人（祭官）アガスティアの祭式へ向かうインドラは、同じに祭式に向かおうとするマルト神たちを見出す。彼らはインドラに対して挑戦的で、高慢な発言を繰り返すが、自信に満ちたインドラは次第に彼らを圧倒してゆく、cf. GELDNER ad loc.。第 1, 2 詩節は、最初にマルトたちを見つけた時のインドラを言葉であると思われるが、しかし、マルトたちが現れたことに驚いた詩人たちの言葉である可能性も残る（*rīramāma* 1pl.!).

## I 165,7

*bhūri cakartha yújyebhir asmé samānébhir vṛṣabha páuṃs,yebhiḥ |*

*bhūriṇi hí kṛṇávāmā śaviṣṭhé- ndra krátvā maruto yád vāsāma ||*

多くの事々を、我々のもとで、君（インドラ）は為した（perf. ind.），同盟者たち（我々）とともに、

（お互いに）同じ男らしさ〔の発揮〕によって、雄牛よ。

多くの事々を、最も力みなぎる者よ、我々（インドラとマルト神たち）は為すことになるろう（pres. subj.），

インドラよ、意志力によって、マルトたちよ、我々が意志することになれば（pres. subj.）<sup>251</sup>。

*kṛṇávāmā* kar/kr 「為す，つくる」 nasal pres. 1pl. act.

*vāsāma* vaś 「（意のままに出来るものとして）欲する，意志する」 root-pres. 1pl. act.

<機能> *kṛṇávāmā*（主節）：見込み

*hí kṛṇávāmā* → A 3.1.1

*vāsāma*（*yád* 条件節）：見込み

*yád vāsāma* → B 3

I 165,10<sup>252</sup>

*ékasya cin me vibhāv āstāv ójo yá nú dadhṛṣván kṛṇávai manīṣá |*

*ahám hy ūgró maruto vídāno yāni cyávam índra íd íśa eṣām ||*

一人であっても、私には、卓越した力が、あれ（pres. iptv.）。

今、勇気を奮い起こして、計画力によって、私が為すことになる事々（pres. subj.），

——わたしは、マルトたちよ、強者として 知られているから<sup>253</sup>——

<sup>251</sup> *kṛṇávāmā* の主語はインドラとマルトたち、*vāsāma* のそれはマルトたち。*yád* 条件節では、聞き手がそれまでのインドラから（話し手以外の残りの）マルトたちへと変わっている、GELDNER ad. loc.。

<sup>252</sup> Sūkta の背景については、I 165,7 も参照。

<sup>253</sup> Cf. X 111,1d *sá hí vīró girvaṇasyúr vídānaḥ* 「彼は（歓迎）歌を好む男子として知られているから」。GELDNER ZDMG 71 (1917) 331 n. 1 によれば、ptcpl. *vidāna-*, *vidāná-* はいずれも *ved/vid* 「知る」に属し、RV において前者は受動的、後者は能動的との使い分けがあるという：“*vidāna-* gehört immer zu *vid*

私が執り行う（ことになる）事々（pres.inj.），これらのことを，まさにインドラとして，私は意のままにする（pres. ind.）。

*kṛṇávai*                      *kar/kr* 「為す，作る」                      nasal pres. 1sg. mid. (affekt.)

<機能> *kṛṇávai* (限定的関係節)：見込み

*yā ... kṛṇávai* と *yāni cyávam* とは，同様に *eṣām* にかかる関係節と考えられる。*kṛṇávai* が主語（＝話し手）の意志を表わす可能性については，B 2.2 を参照。*cyávam* は，*kṛṇávai* との平行構造から subj. として機能している可能性も否定は出来ないが（cf. HOFFMANN 247）<sup>254</sup>，主文の pres. ind. *iṣe* との関係からは，むしろ，関係節 [inj.] + 主節 [pres. ind.] で一般論を表わしているものと理解される（cf. “gnomische Periode” HOFFMANN 238）→ I 3.2.2 3)。その際，subj. *kṛṇávai* も同様に一般論的な機能を担っているか<sup>255</sup>，或いは先の関係節（Pāda b）で未来の行為として述べたことを（*nú* + subj.），後の関係節（Pāda d）では一般化して言い直しているか，のいずれかであると解される。

#### I 166,1<sup>256</sup>

*tán nú vocāma rabhasāya jánmane pūrvam mahitvām vṛṣabhāsya ketāve |*

*aidhēva yāman marutas tuviṣvaṇo yudhēva śakrās taviṣāni kartana ||*

それを，今，我々は話そう（aor. subj.），荒々しい一族（マルト神たち）に，雄牛（インドラ）の，太古の偉大さを，（彼の）証のために。

諸々の火付け行為を<sup>257</sup> のように，（行軍の）途上で，威力あるマルトたちよ，

“wissen”. Und zwar ist *vidāna*- im RV paasivisch: ‘bekannt’ (als) ... Dagegen ist *vidānā*- stets aktivisch: ‘kennend’ ...” (KÜMMEL Stativ 103 も参照)。これに対し SEEBOLD \**uejd*- (Sprache 19) 23ff. は，*vidānā*- は「知る」に，*vidāna*- は「見つける」に属する可能性を提案しているが，自らもこれを証明するには至っていない，cf. KÜMMEL loc. cit. n. 192。少なくとも当箇所及び X 111,1 (上掲) は，「知られている」によってのみ理解可能である。

<sup>254</sup> *cyávam* が本来の *cyávai* (*cyāvā indra*) から，何らかの理由で ac hoc に改変された形であるとすれば，通常 mid. のみで活用する *cyav/cyu* が act. 活用していることも説明出来る，GOTÖ 144。

<sup>255</sup> 同様に一般論を表わす複文で，主文に pres. ind.，二つの関係節にそれぞれ pres. inj. と pres. subj. とが用いられる用例 (VII 100,1) を，HOFFMANN 238 は報告している。

<sup>256</sup> 先行 *Sūkta* はマルトたちとインドラとの会話篇。インドラに挑戦的な態度を取ったマルトたちがインドラに圧倒される話，I 165,2 を参照。

戦いに際して<sup>258</sup> のように、強力な者たちよ、力強い[行為]たちを、君たちは為せ (aor. iptv.)。

*vocāma*

*vac* 「話す, 言う」

redupl. aor. 1pl. act.

<機能> *vocāma* (主文): 意志表明

### I 166,14-#<sup>259</sup>

*yéna dīrghām marutaḥ śūśāvāma yuṣmākena pārīṇasā turāsaḥ |*

*ā yāt tatānan vṛjāne jānāsa ebhūr yajñēbhis tād abhiṣṭim aśyām ||*

それによって、長い間、マルトたちよ、我々が力みなぎる者であろうところの (perf. subj.),  
君たちの貯えによって、貫徹する者たちよ、

(他の) 人たちが、群れの中に広げ満たしているであろうところの (perf. subj.)<sup>260</sup>,  
それを目指して、私は祭りを遂行したい (aor. opt.)<sup>261</sup>, これらの祭式たちによって。

*śūśāvāma*

*śav/śū* 「膨らむ, 膨れる」

perf. 1pl. act.

完了語幹は達成された状態を示し (「膨らんでいる; 力みなぎっている」, KÜMMEL Perf. 536), 関係節はその状態が長く続く (*dīrghām*) ことを意味している。

<sup>257</sup> *aidhá iva* と分解されると思われるが, *aidhá* は語形・意味ともに不明。語根名詞 \**idh-* 或いは派生名詞 \**edha-* (< *edh/idh* 「火を付ける, 燃え上がらせる」, cf. *édha-* m. 「薪」, もしくは < *ā-edh/idh?*) からの Vṛddhi 形 \**aidhá-* n. 「火を付けること (?)」を想定し, その nom./acc.pl. と考えるべきか。 *aidhá* を, Pāda d *yudhéva* = *yudhá iva* と同様に instr. と考えるのは難しい (instr. 語尾 *-ā* は, *-a-* 語幹名詞では例外的にしか認められない: *yajñā-yajñā* I 168,1, VI 48,1, cf. HOFFMANN/FORSSMAN 118)。語形, 意味の考察は, OLDENBERG Noten ad loc. 及び SCARLATA 51f. を参照。

<sup>258</sup> instr. は, 機会・契機・場面を表わすと思われる, cf. I 8,2 *ní yéna muṣṭihatyāyā ní vṛtrā ruṇádhamahai | tāvótāso nṛy árvatā* を「それ (= 財) によって, 拳闘に際して, 競走馬 (の競走) に際して, 障碍たちを, 君に助力されて, 我々が [自分たちから] 防ぎ止めることになるように」, I 8,2 (C 2.1) 注185を参照。

<sup>259</sup> 第 15 詩節は I 165–168 全ての最終詩節として繰り返される。

<sup>260</sup> I 160,5, V 54,15 *tatānāma* を参照せよ。

<sup>261</sup> *tād abhi* 「それを目指して」 *iṣṭim aśyām* 「祭りを遂行したい」, OLDENBERG Noten ad loc.。 *iṣṭi-* は, ここでは「祭ること」という行為名詞 (抽象名詞) であり (X 169,2 *iṣṭyā* も同様; X 147,2 *iṣṭisu* は恐らく具体的な祭式行為を指す), *iṣṭim naślaś* で「祭ることに至る」= 「祭りを首尾よく遂行する, やり遂げる」を意味すると考えられる (同書は *dhiṭim naślaś* も同様に解釈する: VI 15,11 *tām agne pāsṛy utá tām piparṣi yās ta ānaṭ kavāye sūra dhiṭim* 「その者を, アグニよ, 君は守る, そしてその者を君は救助する, もし誰か, 見者である君のために, 勇者よ, 慮るに至る (= ぬかりなく君に配慮する) 者がいれば (?)」, cf. GELDNER ad loc. “*iṣṭim* ist eine Art Infin. von *aś* abhängig, wie *ārābham* in 10, 62, 9”。

<機能> *sūśāvāma* (限定的関係節): 見込み

#### I 170,4

*āraṃ kṛṇvantu védīm sám agnīm indhatām purāḥ |*

*tātrāmṛtasya cétanaṃ yajñāṃ te tanavāvahai ||*

ヴェーディ<sup>262</sup>を、彼らはしつらえよ (pres. iptv.)。

祭火を、(その) 前で、彼らは燃え上がらせよ (pres. iptv.)。

そこにおいて、不死なる君 (インドラ) への

際立つ祭式を、我ら両者は<sup>263</sup> (自分たちのために) 繰り広げよう (pres. subj.)。

*tanavāvahai*

*tan* 「張る, 延ばす; 延びる」

nasal pres. 1du. mid. (affekt.)

<機能> *tanavāvahai* (主文): 意志表明

#### I 173,1<sup>264</sup>

*gāyat sāma nabhanīyaṃ yāthā vér ārcāma tād vāvṛdhānām sāvārvat |*

*gāvo dhenāvo barhīṣy ādabdhā ā yāt sadmānaṃ divīyāṃ vīvāsān ||* (Pāda c: 10 syl.)

割れんばかりの旋律 (サーマン) を、(ウドガートリは) 歌う (pres. inj.), 鳥が のように。

増大すると太陽光をもたらすそれを、我々 (ホートリたち) は唱えよう (pres. subj.),

紛れもない<sup>265</sup>, 乳出す<sup>266</sup> 牝牛たちが、敷き草の上へ、

<sup>262</sup> 祭場の中で祭火の前にある、敷き草を敷いた場所のこと。

<sup>263</sup> 話し手 (= Agastya = Māna) と Mānya (恐らく Agastya の息子。一緒に歌や祭式行為に関っている人物), cf. GELDNER ad I 165,14.

<sup>264</sup> 祭式開始の場面。ウドガートリ祭官が旋律付きで (*sāman-* として) 歌ったその詩節 (*tād*) を、ホートリ祭官が旋律無しで (つまり *arkā-* として) 唱えることを意味する。IX 97,4 では、更にアドヴァリュ祭官の任務が加えられている: *prā gāyatābhy ārcāma ... sōmaṃ hinota*。「君たち (ウドガートリたち) は歌い出せ。我々 (ホートリたち) は唱えかけよう, ... ソーマを君たち (アドヴァリュたち) は送り出せ」。

<sup>265</sup> つまり「正真正銘の」。

<sup>266</sup> *dhenú-* は、ここでは実体詞「牝牛, 乳出す牛」ではなく, *gāv-* の形容詞 (「乳を出す」) として用いられている, GRASSMANN s. v. 5) 及びその用例を参照 (GELDNER passim *gāv- dhenú-* 'Milchkuh'), cf.

天に属する者（インドラ）を，座を占める者として克ち得ようとするように（pres. subj.）<sup>267</sup>。

*ārcāma*                      *arc/ṛc* 「（讃歌を）歌う，唱える」                      full-gr. them. pres. 1pl. act.

<機能> *ārcāma*（主文）：意志表明

Pāda a ではウドガートリ祭官の職務が inj. によって一般論として述べられているのに対して，*ārcāma* は，話し手が属するホートリ祭官の任務を遂行する意志を宣言している<sup>268</sup>。  
*ārcāma* が話し手の義務を表す可能性（「我々は…すべきである」）は低い → A 1.1 補説 1。

#### I 173,9

*āsāma yāthā suṣakhāya ena s<sub>a</sub>vabhiṣṭāyo nar<sub>a</sub>ām ná sāṃsaiḥ* |

*āsad yāthā na índro vandaneṣṭhās turó ná kárma náyamāna ukthā* ||

当人（インドラ）と，よき盟友たちで<sup>269</sup>，我々があるように（pres. subj.），  
よき助力（者）を持つ者たちで<sup>270</sup> [あるように]，男たちによる諸々の賞讃によって の如く。  
インドラが，我々の称讃の中にとどまる者で，あるように（pres. subj.），  
やり遂げる者が，諸々の仕事を の如く，讃辞たちを引き連れつつ<sup>271</sup>。

*āsāma*                      *as* 「存在する，…である」                      root-pres. 1pl. act.

<機能> *āsāma*（*yāthā* 目的節）：見込み

文の構造も含め，詳しい考察は B 1.4 を参照。

NARTEN Kl.Schr. 184 n. 67: *āghnya-* (...) *dhenú-* の表現に関して “In seinem realen Bezug auf die Milch- und Mutterkuh steht *āghnyā-* (*āgh*°) dem Femininum *dhenú-* semantisch nahe, das ... als Apposition bzw. – bei adjektivischer Auffassung – als Attribut dient.”。

<sup>267</sup> Pāda cd は *ārcāma* を受ける目的節。献ずるミルクのことを牝牛と表現している。そのミルクによって，インドラを祭場へ呼び寄せることが目的の内容。

<sup>268</sup> Cf. HOFFMANN 143 + n. 73: ‘Wir (die Hotṛ) sollen ... rezitieren’; “... er wird dadurch veranlasst, deren rituelle Aufgabe als ‘aktuell’ (‘wir sollen, haben die Aufgabe’) darzustellen”。

<sup>269</sup> *suṣakhāy-* + instr. → HOFFMANN Aufs. 832. *suṣakhāy-* については，VIII 48,9 注も参照。

<sup>270</sup> 複合語の後半は *abhiṣṭi-* f. 「助力」，或いは *abhiṣṭi-* m. 「助力者」，cf. LIEBERT -*tí-* 35. 前者の場合，Bahuvrīhi におけるアクセント移動が想定される，WACKERNAGEL/DEBRUNNER II-1 294 § 114 b) d)。

<sup>271</sup> Cf. I 61,13 *asyéd u prá brūhi pūrv<sub>i</sub>yāni turāsyā karmāni nāvya ukthāiḥ* 「一方，まさしく彼の，やり遂げる者の太古の諸々の行為を，新たに君は公言せよ，讃辞たちによって」。

I 179,3<sup>272</sup>

*ná mṛṣā śrāntām yád ávanti devā víśvā ít spṛdho abhi-áśnavāva |*  
*jáyāvéd átra śatánītham ājīm yát samyāñcā mithunāv abhi-ájāva ||*

神々が援助する (pres. ind.) 努力 [の結果] は、無駄ではない。

あらゆる競争相手をも、我ら両者は征服することになる (pres. subj.)<sup>273</sup>,

この際、百の策略を伴う競争に、我ら両者はまさしく勝つことになる (pres. subj.),

[我ら両者が] 一組となって、同じ目標に向いて、目がけて [戦車を] 駆ることになるなら (pres. subj.)<sup>274</sup>

<i>abhi-áśnavāva</i>	<i>naś/aś</i> 「到達する, 獲得する」	nasal pres. 1du. act.
<i>jáyāva</i>	<i>jay/ji</i> 「勝つ, 勝ち得る」	full-gr. them. pres. 1du. act.
<i>abhi-ájāva</i>	<i>aj</i> 「駆り立てる」	full-gr. them. pres. 1du. act.

<機能> *abhi-áśnavāva* / *jáyāva* (主節): 見込み

*abhi-ájāva* (*yád* 条件節): 見込み

DELBRÜCK 302ff. の, 1人称接続法と1人称願望法の分布に関する考察によると (→ I 53,11 の議論), *naś/aś* も *jay/ji* も, 本質的に1人称願望法を取る動詞に属するが, いずれも唯一の例外が当箇所であるという<sup>275</sup>。DELBRÜCK は, *áśnavāva* 及び *jáyāva* が上記の傾向に反し

<sup>272</sup> 長らく禁欲生活を送ってきた Agastya は, その妻 Lopāmudrā に誘惑 (第一, 第二詩節) を受ける。当詩節はそれを拒む Agastya の言葉である。彼は妻に対して, 夫婦お互いが協力し合えば, いかなる欲望 (競争相手) にも打ち勝つことができる, と説得している, THIEME Kl.Schr. 207f., Rig-Veda 76f. + n. 3, OLDENBERG Kl.Schr. 487, cf. GELDNER 訳 + ad loc.

<sup>273</sup> *abhi-naś* → VI 49,15.

<sup>274</sup> *ājīm* (c-Pāda) などの表現から考えて, Pāda cd は戦車競争の比喻と考えるのが自然であろう。その際, *abhi-ájāva* の目的語は補って理解される: 「[目標 etc.] に向かって (*abhi*) [戦車を] 駆る (*aj*)」 (OLDENBERG op. cit. 487f. n. 4 は *abhi-aj* の目的語に *ājīm* を想定し, \*[*ājīm*] *abhi-aj* に *ājīm aj* と同じ意味を認めている)。Pāda cd についての他の見解も参照: GELDNER “wenn wir als vereintes Paar (das Schiff) steuern”; *abhi-aj* が舟の操舵について使われる例として次の箇所而言及: ŚB II 3,3,16 *sá yát prān upodāiti | tād enām prācīm abhy ājati | svargām lokām. abhi tāya svargām lokām sám aśnute* 「東を向いて彼 (*kṣirāhotar-*「牛乳を献じる者」) が歩み出てやって来る時, その時, 当のもの (*nāu-*「舟」) を東の方へと彼は進めている, 天界へと向かって。それによって, 天界へと彼は到達する»; THIEME Kl.Schr. loc. cit. “wenn wir beide aufs gleiche Ziel gerichtete Paarhälften entgegen [dem Feind] führen”; Rig-Veda 77 + n. 4 “wenn wir die beiden [Heer-] Hälften dem gleichen Ziel entgegenführen”: 夫婦が結束した軍隊の両翼の隊長に例えられているとして, (*samyāñcā*) *mithunāu* を *abhi-aj* 「両軍を駆り立てる, i.e. 率いて突進する」の目的語 (acc. du.) と考える。この見解には, *sam-yāñc-* のもとにある動詞 *sám-añc-* (-y- は *praty-añc-* etc. からの混入, WACKERNAGEL/DEBRUNNER II-2 153) が「四肢 (翼) を閉じる」を意味することが参照される, e.g. ŚB VIII I,4,7, cf. VādhAnvākh II 6 (ed. IKARI) *sam-as-*.

<sup>275</sup> HETTRICH 286 は上記 DELBRÜCK loc. cit. の議論を援用しているが, 主文における *naś/aś* は「例外

て subj. をとっていることは、これらがいずれも「未来」（本論でいう見込み）の用法で用いられていることに関係していると考えているようである。この理解に従えば、主文では、1人称接続法も1人称願望法も（広い意味で）同様に話し手の意志（意志、願望）を表すことができ、その限りにおいてどちらが使われるかは、動詞語根の持つ意味によって左右されるが、未来を表す場合には、1人称接続法が使われる、ということになるろう<sup>276</sup>。

以上の見解は、語彙自体が持つ性質、Verhaltensart「動作様態」（ここでは意志の有無）のレベルと、subj. や opt. の機能のレベルとが、あたかも連動しているかのような印象を与える。しかし、これら二つのレベルは互いに独立した関係にあり、よって subj. と opt. とは、基本的に語彙自体の意味とは無関係に、それぞれの機能によって（subj. → 話し手の意志；opt. → 話し手の願望）選択されるものと考えることが出来る。動詞 *naś/aś*, *jay/ji* が他に opt. しか持たず、唯一の subj. *aśnavāma*, *jáyāva* がいずれも「未来」の用法であるという事実は、RV の限られたコーパスを考えれば、偶然に負うところが大きい。これらの語根に subj. 「意志」が用いられることも当然考えられる：「我々は敵たちに匹敵しよう／するぞ」；「我々は競争に勝とう／勝利するぞ」<sup>277</sup>（I 53,11も参照）。ただし一方で、実現性が話し手の支配下になく語義を持つ動詞が subj. 「意志」と組み合わせられる用例が少ないこと——つまりある程度、語彙自体の意味と法のカテゴリーとが関連すること——もまた、当然期待されることではある。

# I 186,5

*utá nó 'āhir budhnyò máyas kaḥ śísuṃ ná pipyúṣīva veti síndhuḥ |*

*yéna nāpātam apāām junāma manojúvo vṛṣaṇo yām váhanti ||*

そして、アヒ・ブドウニヤは、我々に、喜びを為せ（aor. inj.）<sup>278</sup>。

幼子に〔乳で〕膨らんだ牝〔牛〕が のごとく<sup>279</sup>、スィンドウ川は（出来立ての）<sup>280</sup>〔歌を〕

なく」opt. であるとしており、当箇所は考慮していない（*jay/ji* に関しては指摘有り）。

<sup>276</sup> HETRICH loc. cit. は更に、このような語根の意味による 1subj. と 1opt. との使い分けを、目的を表す文（*yáthā-Satz*）の一部にも認めている、→ I 53,11。

<sup>277</sup> もし上記の二つのレベルが連動しているとすれば、極めて意図的な動作を表す動詞 *han* 「打つ、殺す」からは opt. 「願望」が作られ得ず（e.g. 「私は敵を打ち倒したい」）、また、意図的でない動詞 *as* 「存在する、～である」からは subj. 「意志」を形成し得ないことになるろう（e.g. 「私は優しい人間でいよう」）、GOTÖ Aśvin-（印佛 39-2）977（78）n. 9 を参照。

<sup>278</sup> *kar/ky* aor. inj. 3sg./pl. は、対応する iptv. 語形の欠如から、iptv. の価値で用いられることがある、HOFFMANN 264。

<sup>279</sup> 同一の句を構成する二つの要素（ここでは *śísuṃ* と *pipyúṣī*）に、それぞれ *ná* と *iva* とが（二重に）付いている。他の例は GRASSMANN u. *iva* を参照。

<sup>280</sup> *veti* の目的語（m./n. sg. = *yéna*）には、Pāda b の喩えや、Pāda c の関係節の内容から、今歌っている

追う (pres. ind.),

それによって、アパーム・ナパートを、我々が急がせることになるように (pres. subj.),  
 思慮の如く素早い、雄々しい [馬] たちが<sup>281</sup> 運んでいるところの (pres. ind.) [A. N. を]。

*junāma*

*jav<sup>i</sup>/jū* 「急ぐ; 急がせる」

nasal pres. 1 pl. act.

facient.-intrans. *jāvate* 「急ぐ」 :: facient.-trans. *junāti* 「急がせる」。同一語根における語幹形成法による意味の違い—— full-gr. them. pres. mid. = fient./facient.-intrans. :: nasal-pres. act. = faktitiv (= facient.)-trans. ——については、GOTŌ 61 を参照。

<機能> *junāma* (同格的関係節): 見込み

# I 191,10<sup>282</sup>

*sūrye viṣām ā sajāmi dṛtiṃ sūrāvato grhé |*

*só cin nú ná marāti nó vayām marāmā-* (Pāda c: 7 syl.?: Pāda d: 6 syl.?)

*aré asya yójanaṃ hariṣṭhā mādhu t<sub>u</sub>vā madhulā cakāra ||* (Pāda e, f → 注285)

太陽 (スーリヤ) に、毒を、私は引掛ける (pres. ind.)。

革袋を、スラー酒を持つ者の家に (のように ?)。

決して、それでも (u) 彼 (患者) が<sup>283</sup> 死ぬことは無い (であろう) (aor. subj.)。

一方、われわれも、死ぬことは無い (であろう) (aor. subj.)。

ハリたちの上に立つ [太陽] は、それ (毒) の作用を<sup>284</sup> 遠くに [した (遠ざけた)]。 <sup>285</sup>

る「新しい歌」が補われるべきと考えられる: 「仔牛のあとを母牛がついていくように、幼い (= 生まれたばかりの) 歌をスィンドウ (川) が追い求める。それによってまた、アパーム・ナパート (水たちの子) をも駆り立てることが出来る」, cf. GELDNER ad loc.。ただし具体的に想定されている語は不明 (cf. 第4詩節 *arkā-*)。II 31,5,6 も比べよ。

<sup>281</sup> 恐らく, *vṛṣan-āśva-* 「雄々しい雄馬, 種馬」のこと, GELDNER ad loc. n. 1. *apām nāpāt-* は, *āsuhēman-* 「駿 [馬] を駆る者」と呼ばれている: II 31,6, VII 47,2。

<sup>282</sup> I 191 は虫・動物の毒を静めることを主題としており, 当詩節以降は特にサソリの毒を念頭に置いたものである, cf. 第16詩節 *vṛṣcikasyārasām viṣām arasām vṛṣcika te viṣām* 「さそりの毒は, 精髓を無くした。サソリよ, 君の毒は精髓を無くした」。Pāda c-f は後続の2詩節においても繰り返される (但し cf. 12c; 13 では Pāda e-f のみの繰り返し)。

<sup>283</sup> *só* = *sá* + *u*, cf. 第11詩節 *só* = *sā* (*śakuntikā*) + *u*。

<sup>284</sup> *yójana-* はここでは「つなぐこと」 (cf. *hariyójana-* 「二頭のハリ (黄緑色の馬) をつなぐこと」) ではなく, 「(毒が) 活動を始めること・作用を及ぼすこと」 (= *yóga-*) を意味すると思われる, cf. GELDNER 訳 “seine Verwendung”。

君（毒）を、甘く、それはした（perf. ind.），甘味の〔薬草（解毒用の薬草）〕は。

*marāmā*                      *mar/mṛ* 「死ぬ」                      root-aor. 1pl. act.

*mar/mṛ* の活用と態については I 91,6 を参照。aor. subj. の act. 語形 (*marāmā*, 3sg. *marāti*, 3pl. *maranti*) は全て、当 Sūkta I 91,10-12（以下参照）に現れる。そのうち当詩節にも見られる *marāti* は、接続法語幹母音の「過剰表示」(Hypercharakterisierung, → I 2.2) を受けた形である：*marāti* < \**mar-a-a-ti* ← \**mar-a-ti*, cf. 3sg. mid. *márate*。

<機能> *marāmā* (主文)：見込み

話し手の意志表明の可能性は低い：「我々は決して死ぬまい」(?), cf. HOFFMANN 51。実際に毒を遠ざける主体は詩人たち自身ではなく、太陽（スーリヤ）であると考えられているので、その結果彼らが死なないという事態は、彼らの意志であるよりは予測の対象である。話し手は、薬草の解毒作用への確信、推測を語っているか、或いはその絶対的な効用から、殆ど疑いようの無い真実として「死ぬことはない」。と言っているとも解される → A 3.2 b), cf. VIII 93,5 *yád ... ná marā ití mányase* 「もし…『私は死なない（であろう）』と、君（インドラ）が思っているなら」。後続の2詩節でも、殆ど同じ文脈で *nó vayám marāmā* が繰り返される：

I 91,11 *iyattikā śakuntikā sakā jaghāsa te viśám | só cin nú ná marāti nó vayám marāmā-  
aré asya ... ||*

これほど小っちゃな小ウズラが、そのちびさんが、君の毒を、喰らった（perf. ind.）。決して、それでもそれが<sup>286</sup> 死ぬことは無い（であろう）（aor. subj.）。一方、われわれも…（省略）

I 91,12 *trīḥ saptá viṣpulingakā viśasya púṣyam akṣan | táś cin nú ná maranti nó vayám  
marāmā- aré asya ... ||*

三度、七つの火の粉たちが<sup>287</sup>、毒の花びらを、喰らった（aor. ind.）。決して、それでもそれらが死ぬことは無い（であろう）（aor. subj.）。一方、われわれも…（省略）

<sup>285</sup> Pāda c 以下の韻律は不明, GELDNER ad loc. “halb prosa”. OLDENBERG Proleg. 160 は Pāda c 以下を全て同じ 6 音節ないし 7 音節で区切るが (*só ... # nó ... # aré ... # hariṣṭhā ... # madhulā ...*), 少なくとも Pāda e 以降に関しては、最も自然な文意の切れ目 (*aré ... hariṣṭhā # madhulā ... cakāra*, GELDNER) から、10 音節 (unterzählig) ×2 を想定するのが最も相応しいと思われる。OLDENBERG Noten ad loc. は後者の考えに傾いている。Pāda e には f. と同じ動詞 *cakāra* を補って理解する。

<sup>286</sup> *śakuntikā* を受けているので, *só = sā + u*; cf. 第 10 詩節 *só = sā + u*。

<sup>287</sup> 或いは「小雀たち」? (Sāy.)。

II 11,6<sup>288</sup>

*stāvā nū ta indra pūrvīyā mahānīy utā stavāma nūtanā kṛtāni |*

*stāvā vājraṃ bāhuvōr uśāntaṃ stavā hārī sūriyasya ketū ||*

私は称えよう (pres. subj.), 今, 君の, インドラよ, 以前の諸々の偉大な [武勲] を。

また, 我々は称えよう (pres. subj.), 今為されたことたちを。

私は称えよう (pres. subj.), 両腕の中でうずいているヴァジュラを。

私は称えよう (pres. subj.), 両ハリたちを, 太陽の二つのしるしたちを<sup>289</sup>。

*stāvā* (3x) / *stavāma*

*stav/stu* 「称える」

root-pres. 1sg/1pl. act.

<機能> *stāvā, stavāma* (主文): 意志表明

II 11,13<sup>290</sup>

*sīyāma té ta<sup>291</sup> indra yé ta ūtī avasyāva ūrjaṃ vardháyantaḥ |* (Pāda b: 10 syl.)

*śuśmīntamaṃ yāṃ cākānāma devā- aśmé rayīm rāsi virāvantam ||* (Pāda d: 10 syl.)

君のために, インドラよ, そういう者たちで, 我々はあるたい (pres. opt.), (つまり) 君の助力を (いつも) 伴う者たちで,

援助を求めて, (君の) 栄養を増大させつつ。<sup>292</sup>

神よ, 我々が気に入るであろうところの / あろうように (perf. subj.), 最も鼻息 (激昂) に満ちた

財を<sup>293</sup>, われわれのもとに, 君は贈り与えよ (aor. iptv.), 男子に富む [財] を。

<sup>288</sup> II 11 の韻律については OLDENBERG Proleg. 86–90 を, 特に当詩節 Pāda a に関しては OLDENBERG op. cit. 90 n. 1, Noten ad loc. を参照。

<sup>289</sup> GELDNER 訳に従う。或いは「太陽の, 黄緑色の二つの徴たち (i.e. ハリたち, → I 82,1 注) を」, cf. RENOUEVP XVII 55 “emblèmes-lumineux du soleil”。

<sup>290</sup> 韻律については, OLDENBERG Proleg. 86ff. を参照。

<sup>291</sup> BRERETON IJ 28 (1985) 249, 262 n. 25 “Omit *te*. The word occurs after *té* because of the following *yé te*” は根拠無し。「君の助力を伴う」ことが「君のため」であるのは, インドラと詩人とが相互に依存関係にあるからである。Pāda b もこのことを表わしている。

<sup>292</sup> GELDNER 訳は, *yé* 以下 *vardháyantaḥ* までを関係節としている: ‘Wir möchten dir die sein, o Indra, die schutzsuchend deine Kraft zur Hilfe stärken’ (*ūtī* を dat. と理解している, cf. V 51,12)。

<sup>293</sup> 「最も鼻息 (激昂) に満ちた, 男子に富む財を」, i.e. 「よき種牛を」。

*cākānāma*      *kan<sup>i</sup>* 「～を (loc., acc., instr.) 気に入る, ～に喜ぶ」      perf. 1pl. act.

<機能> *cākānāma* (限定的関係節): 見込み

完了語幹には「気に入っている, 喜んでいる」等の状態的な意味が想定されるが, 接続法の場合は必ずしもそれが明らかではない, cf. KÜMMEL Perf. 130f.

## II 16,7<sup>294</sup>

*prá te nāvam ná sámāne vacasyúvam bráhmanā yāmi sávanēṣu dādhr̥ṣiḥ |*

*kuvín no asyá vácaso nibódhiṣad índram útsam ná vásunaḥ sicāmahe ||*

君のために, 舟を の如く, 対戦において, 雄弁な [言葉/讃歌] を, 私は [送り] 出している。

言葉の霊力によって, 私は [前へ] 進んでいる (pres. ind.), 諸々の [ソーマ] 搾りにおいて, 大胆な者として。<sup>295</sup>

果たして, 我々のこの言葉に, 彼は気付くであろうか (aor. subj.).<sup>296</sup>

財物の泉を の如く, インドラ [の力] を, 我々は汲み出そう<sup>297</sup> (引き出そう) (aor. subj.).

*sicāmahe*      *sec/sic* 「注ぐ」      them. aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *sicāmahe* (主文): 意志表明

<sup>294</sup> インドラを取り合って複数の祭式が行われているか (Saṃsava), 或いは懸賞を懸けて詩人たちが戦っているものと思われる, GELDNER ad loc.

<sup>295</sup> (雄弁な) 言葉の発語はしばしば, 舟を送り出す様にたとえられる: X 116,9 *préndrāgnībhyām suvacasyām iyarmi sīndhāv iva prérāyam nāvam arkāiḥ* 「インドラ・アグニ両者のために, よき雄弁さを, 私は送り出す, スィンドウ (河) に舟を送り出す (inj.) かのように, 讃歌たちによって」; II 42,1 *kānikradaj janūsam prābruvānā iyarti vācam aritēva nāvam* 「繰り返し鳴き声を挙げながら (自分の) 生まれを告げつつ, (鳥は) 言葉を動かす, 漕ぎ手が舟を のように」; 他に IX 95,2 も参照, cf. GELDNER ad II 16,7, OLDENBERG Noten ad II 16,7. 当詩節 *suvasasyú-* adj. には, *vācas* (c-Pāda) か「讃歌, 頌歌」等の実体詞を補う, cf. V 14,6 *agnīm ghṛtēna vāvṛdhu stómebhir viśvācarṣanīm | sāvādhībhir vacasyúbhiḥ* 「アグニを, 彼らは増大させた, 液体バターによって, 甘く雄弁な頌歌たちによって, あらゆる部族に属する [彼] を」)。また上掲 X 116,9, II 42,1 などから, 動詞 *prá ... [iyarmi/irayāmi]* の省略を想定する, cf. GELDNER ad loc.

<sup>296</sup> *kuvíd* 文に関しては, C 3 を参照

<sup>297</sup> *utsām* (acc.) *sec/sic* は, 「泉 [の/から水] を汲み出す/汲む」を意味するので (詳しくは X 101,5 参照), *índram sec/sic* は恐らく, 「インドラの/から, 力, 助力を引き出す」ことを意味すると思われる。

## II 28,8

*nāmaḥ purā te varuṇotā nūnām utāparām tuvijāta bravāma |*

*t<sub>u</sub>vé hí kaṁ<sup>298</sup> párvate ná śrítān<sub>i</sub>y ápracyutāni dūdabha vratāni ||*

敬意を、君に、ヴァルナよ、以前に、そして今も

そしてこれからも、生まれつき強力な者よ、我々は述べよう (pres. subj.)。

君の上には、山の上に のように、依拠しているのだから

揺らぐことのない誓いたちが、欺き難い者よ。

*bravāma*      *brav<sup>i</sup>/brū* 「話す、言う」      root-pres. 1pl. act.

<機能> *bravāma* (主文): 意志表明

*bravāma* は過去、現在、未来にわたり述べる用意がある(あった)ことを表すと思われる。これから「述べる」ことと、過去に「述べた」(e.g. aor. ind. *āvocāma* etc.) ことが、一種の「くびき語法」(“Zeugma”)によって表されているか (GELDNER 訳)、或いは、subj. は過去における話し手の意志や過去から見た未来をも表し得るため (→ VII 88,3), ここでは全ての時制における意志を表明している可能性もあろう, cf. A 1.2.2 b)。

II 29,3<sup>299</sup>

*kīm ū nú vaḥ kṛṇavāmāpareṇa kīm sánena vasava āpiyena |*

*yūyām no mitrāvaruṇādite ca s<sub>u</sub>vastīm indrāmaruto dadhāta ||*

では、君たちとの、これからの仲間関係を、

昔からの[仲間関係]を、よき者たちよ、我々はどうすればよいのか (pres. subj.)<sup>300</sup>。

<sup>298</sup> アクセントの無い *kaṁ* は, *hí, sú, nú + kaṁ* の定型句でのみ用いられる。統語上の、また韻律上の位置と分布については, ETTER *kām-ákam* 220f. を, とともに用いられる動詞については, DELBRÜCK 503f. を参照。意味の確定は困難。

<sup>299</sup> 第2詩節 *adyā ca no mṛdayatāparām ca* 「今日も、これからも、我々に君たちは寛容たれ」を受けた発言。背景に「もし今日助力を得られないなら」が想定される, GELDNER ad loc.

<sup>300</sup> *kīm + instr. + kar/kr* は, 「～を持って何をするのか, ～をどうしたらいいのか」, 更に修辭的に「～を持っていて何になるのか, ～が何の役に立つのか」を意味する, cf. I 164,39 *ṛcá akṣāre paramé viyōman yāsmín devā ādhi viśve niṣedúh | yās tán ná veda kīm ṛcā kariṣyati yā ít tát vidús tá imé sám āsate* 「最上の天蓋において, 一切神たちがその上に腰を下ろしているところの, 詩節の音節, それを知らない者であれば, 詩節が何の役に立つだろうか。それを知っている者たち, そういう者たちこそがここに一緒に座

きみたちは、ミトラ・ヴァルナよ、そしてアディティよ<sup>301</sup>、  
インドラ・マルトラよ<sup>302</sup>、我々の無事を、定め置け (pres. iptv.)。

*kṛṇavāma*      *kar/kr* 「為す, 作る」      nasal pres. 1pl. act.

<機能> *kṛṇavāma* (疑問文): 義務

## II 30,7

*nā mā taman nā śraman nótā tandran nā vocāma mā sunotéti sómam* |

*yó me prñād yó dádad yó nibódhād yó mā sunvántam úpa góbhīr áyat* ||

私を、消耗させるべからず (aor. subj.)。疲れ果てさせるべからず (aor. subj.)。そしてまた、  
疲労させるべからず (subj. <sup>303</sup>)。

我々は言うまい (aor. subj.) 「ソーマを搾るのを君たちは止めよ (pres. iptv.)<sup>304</sup>」 と (は) <sup>305</sup>,

っている」, SB I 16,1,19 *sá ha nv èvāinaṃ jayai yò 'sya dvārāni véda. kīm hí sá táir ghāhīh kuryād yān antarātó nā vyavavidyād* 「それ (一年) の諸々の扉を知っている者、その者だけが当のものを勝ち得る訳である。なぜなら、もし人が屋内にいて邸宅 [の各部] を見分けられないならば、その [邸宅] が何の役に立つであろうか」。DELBRÜCK 135, また SPEIJER Sansk.Synt. 56 §75 も参照せよ。

<sup>301</sup> *ca* が二つの vocative をつなぐ構造が想定される場合、二つ目の語は nom. に置かれるのが普通である, e.g. DELBRÜCK 105, 二つとも voc. に置かれた当箇所は, RV において唯一の例外である, KLEIN *váyav indraś ca* (MSS 40) 87 n. 1, Disc.Gram. I 78, 277 n. 1 “an isolated solecism”。

<sup>302</sup> それぞれ単数の神格からなる Dvandva では、前半要素が nom./acc du. で固定し、複合語全体が dual で活用するタイプが最も多い, cf. *mitrávárūṇābhyām, indrāgnyós*, WACKERNAGEL/DEBRUNNER II-1 153 §63 e)-f)。しかし *indrāmarut-* では、後半要素のマルトたちは複数であるため、複合語全体も plural で活用している, op. cit. 156 §66 a), cf. *pitṛaputrāḥ* (MS)。

<sup>303</sup> 語根 *tam, śram* は自動詞であり通常は人が主語であるが、ここではいずれも他動詞 (facient.-faktiv) として用いられている。Pāda b 以降の一連の subj. から、*tamat, śramat* はいずれも root-aor. subj. と考えられる, NARTEN 259, HOFFMANN 240。両語根は共通して -yá-pres. (*tāmyati* KS+, *śrāmyanti* RV+) 及び them. aor. (*tamas* TS, *aśramat* AV) を形成するが、them. aor. は本来あった root-aor. からの拡張形成であると考えられる。このことは、特に *śram* の場合、当該 root-aor. subj. *śramat* 及び、root-aor. から二次的に作られたと考えられる -iṣ-aor. (*śramiṣma*: full-gr.!) の存在によっても支持される, NARTEN loc. cit. + 53。subj. *tandrat* は、形容詞 *átandra-* 「ぐったりしていない」から、*tamat, śramat* に倣って作られた Augenblicksbildung である, HOFFMANN loc. cit., GOTÖ 158f., cf. OLDENBERG Noten ad loc.。

<sup>304</sup> 2pl. は恐らく他の詩人 (祭官) を表わす。HOFFMANN 45ff. は、現在とアオリストというアスペクトの差によって、*mā* + aor. inj. = 禁止 (präventiv: 「これから～するな」) :: *mā* + pres. inj. = 中止 (inhibitiv: 「～しているのを止める」) の区別が存在することを明らかにした。そして当箇所 (*mā* + pres. inj.) についても「搾っているのを止める」、「これ以上搾るな」の意味を想定している (op. cit. 82, cf. n. 159)。報酬を払う祭主が存在する限り (<機能>を参照)、これまでと同様、これからもソーマ搾り (祭式) を止めることはない、という宣言である。

<sup>305</sup> *mā sunota ... sómam* は一文を構成すると思われるが、*iti* の位置が異例である。「韻律上の必要から」 (DELBRÜCK 531) *iti* が *sómam* の前へ割り込んだのか, cf. V 53,3 *té āhur ... imān pásyan iti ṣuhi* 「彼ら

(誰か) 私に、贈り物をするであろう者 (pres. subj.), 与えるであろう者 (pres. subj.), [私に] 気付くであろう者 (pres. subj.),

[ソーマを] 搾っている私のそばへ、牝牛たちを伴って、やって来るであろう者が (pres. subj.) あれば。

*vocāma*

*vac* 「話す, 言う」

redupl. aor. 1pl. act.

<機能> *vocāma* (主節): 意志表明

Pāda c, d の関係節はそれぞれ、主文の中でかかるべき先行詞を持たず、独立に従属節として機能していると思われる<sup>306</sup>, cf. HETTRICH 617ff. “Sätze mit ‘prägnantem’ Relativ-pronomen”. この種の関係節の多くは条件文と同様の機能を持つ。(先行詞を伴う) 関係節がしばしば先行詞を一般化し、条件文に近い意味を有することから (*yá- ... sá-/tá- ...* 「～するところの者, その者は／が…」 ～ 「～する者が居れば, その者は／を (必ず) …」 etc.), 当箇所関係節 (*yó ... subj.*) にも一般論的な条件を表わす機能が想定される。つまり、主文の *vocāma* には、条件付き心構えが想定される: 「～するものがいれば, 必ず我々は…しよう」, cf. A 1. 2. 2 b)。

## II 30,11#

*tām vaḥ śārdham mārutaṃ sumnayúr giró- āpa bruve námasā dáivyaṃ jánam |*

*yáthā rayīm sāraviraṃ nāsāmahā apatyasācam śrútyaṃ divédive ||*

君たちマルトたちからなる, その群れに, 善意を抱いて, 歓迎歌を伴って

敬意を伴って, 私は話しかけている (pres. ind.), 神々に属する一族に,

全き男子からなる財を, 日ごと, 我々が手に入れることになるように (aor. subj.)

後裔に伴う／を伴う<sup>307</sup> 聞かれるべき [財] を。

は私に言う…『この者たちを見ながら, 称えよ』と」。或いは, *sómam* を “A[kkusativ] der Beziehung”, DELBRÜCK 165, GOTÖ Funktionen des Akkusativs 68 (Beziehungsakkusativ) としても理解可能か: 『君たちは搾るのを止めよ』と, 我々は言うまい, ソーマのことを」。

<sup>306</sup> 或いは, 関係節がかかるべき先行詞として主文に *indrāyātásmai* 等を補って考えることも可能と思われる, cf. GELDNER 訳。

<sup>307</sup> *apatyasāc-* (*-sāc-* ?) は RV で 3 回例証されており, 全ての箇所が *apatyasācam śrútyaṃ* で現れる (当箇所及び I 117,23 では, *rayīm* にかかり, VI 72,5 でも恐らく「財」等の実体詞が想定される)。この複合語の背景には, instr. + *sac* 「～に従える, 引き連れる, 伴う」, もしくは acc. + *sac* 「～に伴う, 付いて行く; ～に達する」の構文が考えられる (IX 74,5 注を参照)。しかし, 前者の主語は常に神々か人

*násāmahai**naś/aś* 「到達する, 獲得する」

root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *násāmahai* (*yáthā* 目的節): 見込み

---

に限定されるので (loc. cit.), *apatyasác-* は後者の構文を前提とした複合語であり, 「後裔に伴う／に達する」, i.e. 「末代までとどまり続ける」を意味すると思われる, cf. SCARLATA 587 (instr. + *sac* を想定: “von Nachkommen begleitet, in Begleitung von Nachkommen”). Cf. I 98,3 *váisvānara táva tát styám astuv asmān rāyo maghāvānaḥ sacantām* 「ヴァイシュヴァーナラよ, 君にとって, それは本当のことであれ (pres. iptv.): (即ち) 我々に (acc.), 諸々の財が, 有力者たちが, 伴え (pres. iptv.)」, I 136,6 *jyóg jivantah prajāyā sacemahi* 「長く生きつつ, 子孫を (instr.) 我々は伴いたい／獲得したい (pres. opt.)」。

## III 11,9#

ágne víśvāni vār<sub>i</sub>yā vājeṣu *saniṣāmahe* |

*t<sub>u</sub>vé devāsa érire* ||

アグニよ、一切の望ましいものたちを

諸々の競争において、我々は勝ち取ろう (aor. subj.)。

神々は 君のもとに、[それらを] 移動させてある (perf. ind.)<sup>308</sup>。

*saniṣāmahe*

*san*<sup>i</sup> 「勝ち取る、獲得する」

-iṣ-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *saniṣāmahe* (主文)：意志表明

話し手は、神々が使者たるアグニのもとに、彼らの望みのものを既に集め終えていることを確認 (perf. ind.) している：現状の確認を伴う意志表明、→ A 1.2.3 a)。

## III 29,1

ástidám adhimánthanam ásti prajānanaṃ kṛtām |

etām viśpátinīm ā bharā- agnīm *manthāma* pūrváthā ||

在るのだ (pres. ind.), ここに、火鑽り場が。

在るのだ (pres. ind.), 生み出すもの (火鑽り棒) が、つくられて。

この、部族長の妻 (火鑽り台) を、持って来い (pres. iptv.)<sup>309</sup>。

祭火を、我々は鑽り出そうではないか (pres. subj.), 太古と同じように。

*manthāma*

*manth/math* 「かき混ぜる、(火を) 鑽る」

full-gr. them. pres. 1pl. act.

<sup>308</sup> *ā-ar/ṛ* mid. は「～を…まで(自分とともに)移動させる」を意味する。なお、KÜMMEL Perf. 122 が *ā-ar/ṛ* の意味を、「√1dha Med. (i.e. *dadhāti*) の意味に対応して」“etw. Akk. (für sich) wohin Lok. setzen” [～を (acc.) (自分のために) …に (loc.) 置く] とする根拠は不明、cf. IV 34,2 *suvíram asmé rayīm érayadhvam* 「よき男子からなる財を、我々のもとに、君はもたらせ」。perf. ind. の価値は resultativ, op. cit. 122。今既に移動させ終えた状態にあることを指す (上記本論を参照)。

<sup>309</sup> 二つの *araṇi* (火鑽り木, du.) のうち、火鑽り棒が *prajānana-* に、火鑽り台が *viśpátinī-* にあたり、それぞれ男性と女性とに比べられている。*adhimánthana-* は、これらを使って火を鑽る場所 (となる土台) を表わしていると考えられる、→ GELDNER ad loc., KRICK Feuergründung 228 + n. 573。

<機能> *manthāma* (主文): 勧誘

### III 32,14

*vivēṣa yān mā dhiṣāṇā jajāna stāvai purā pārīyād indram áhnaḥ |*

*ámhaso yātra pīpārad yáthā no nāvēva yāntam ubháye havante ||*

ディシャナーが(私に)作用した時に、私を(新しく)生み出した時に(perf. ind.),<sup>310</sup>

私は称えよう(pres. subj.), インドラを。向こう側に属する日(新年の日, 元日)より前に,

その時に、我々を、困窮から彼が救うことになるように(aor. subj.)<sup>311</sup>。

舟によって進んでいる者を のように、双方の者たちが[彼を]呼んでいる(pres. ind.).<sup>312</sup>

*stāvai*

*stav/stu* 「称える」

root-pres. 1sg. mid. (affekt.)

*stav/stu* は、古くは pres. act. = extend.-gr (inj. *staut* RV) :: pres. mid. = full-gr. (ind. 3sg. *stáve*, ptcpl. *stávāna*- RV) という Ablaut (akroodynamisch) を持っていた。一方で, mid. だけで活用

<sup>310</sup> 文意不明。Dhiṣāṇā は祭式に関わる神格と思われるが (GELDNER ad IX 59,2c), その性質は明らかではない (dhiṣāṇā- の語源的解釈については EWAia I 792 を参照, cf. 西村 印佛研 52 474 n. 1)。ここでは GELDNER に従い, *vivēṣa* と *jajāna* の主語はいずれも *dhiṣāṇā*- であり, Pāda a 全体を *yád* 節であると見なした (KÜMMEL Perf. 186 は GELDNER に従うが, 同書 502 は別の解釈をとる: “Ich habe gewirkt, da die Dhiṣāṇā mich (neu) geboren hat; ...”)。

<sup>311</sup> 目的を表わす *yáthā* 節と *áhnaḥ* を受ける関係節 *yātra* ... とが同時に用いられていると思われる (= *átra* ... *yáthā* ?), GELDNER ad loc. “Die bekannte Doppelung des Relativs: auf daß – an welchem = auf daß an ihm (dem Entscheidungstag).”, cf. OLDENBERG Noten ad loc.。ただし厳密には “Doppelung des Relativs”ではなく、従属接続詞節と関係節という異なるレヴェルの文構造が混交した構文と見るべきである, DELBRÜCK 328, cf. 326, HETTRICH 305f n. 115. GELDNER loc. cit. が参考に挙げる X 52,1 では、同じ間接疑問に属する二つの構造が並べられているに過ぎない: X 52,1 *vísve devāḥ śāstāna mā yáthehá hótā vṛtō manávai yān niśádyā* 「一切神たちよ、私に君たちは教えよ、どのように、ここで、ホートリとして選ばれた[私]が、腰を下ろしてから、何を考えればよいのかを」。

<sup>312</sup> KUIPER *pārye divi* (III 5) 169–183 (178 に当箇所) は, *pārya*- のもとにある *pāra*- がしばしば *tāmas*-, *ámhas*- とともに用られ (*tāmasaḥ pāram/pāram ámhasaḥ* 「闇/困窮の向こう・果て・終わりに」), これらが年の終わりに言及する場面で用られることや, *ámhasaspatī*- (VS) が閏月の名称として使われていることなどから, *ámhas*- は「年末における宇宙の危機的状況」“the critical period (the period of cosmic crisis) at the end of the year”を表すと考え。そこから, *pāram ámhasaḥ* は *ámhas*- の向こう側、即ち「新年」のことを、また *pārya*- *dyú*- (ここでは *áhan*-) 「(年末の) 向こう側に属する日」は「元日」のことを意味すると論じている。これに従えば, *ámhasas par/pṛ* 「困窮から(～を)救う」とは, II 33,3 *pārṣi naḥ pāram ámhasaḥ sāvastí* 「我々を、無事のために、困窮の向こうへ、君は渡せ」、X 63,6 *yó naḥ pārṣad áty ámhasaḥ sāvastáye* 「我々を、無事のために、困窮を越えて渡すことになるところの…」などと同様に、「困窮＝年末を越えて向こう側(新年)に渡(らせ)る」、「無事に新年を迎える/迎えさせる」ことを表す表現であると言える。更に op. cit. 171, 173, 178 は, Pāda d の背後に、新年祭で行われたであろう二組に分かれての競技 (*vívāc*- “das Gegeneinanderrufen, gegeneinander rufend” → “Streit, Wettkampf; Streiter Kämpfer”, GRASSMANN 1292) の存在を想定する。

する full-gr. them. pres. *stáv-a-* も RV では用いられる (3sg. *stavate*, ptcpl. *stávamāna-*)<sup>313</sup>。subj. mid. 1sg. は幹・非幹母音幹に関わらず全て語尾 *-ai* を持つため (→ I 2.3.3), 当箇所 *stávai* が本来の root-pres. mid. (<\*stáv-āi) であるのか, 或いは幹母音幹 *stáv-a-* から作られた形 (<\*stáva-āi) であるのかは確定出来ない, NARTEN 101 n. 26。

<機能> *stávai* (主文): 意志表明

### III 33,10<sup>314</sup>

ā te karo śṛṇavāmā vácāṁsi yayātha dūrād ānasā rāthena |  
 ní te naṁsai pīpīyānéva yóṣā máryāyeva kanīyā śaśvacái te ||

君の, 賞讃する者よ, 言葉たちを, 我々は聞き入れよう (pres. subj.).

君は走つ (て来) た (perf. ind.), 遠くから, 荷車を伴って, 戦車を伴って。

君に, 私は身を屈めよう (aor. subj.), (乳で) 膨らんだ若い女が (子に対して) のように;

青年に, 娘が のように, 君に, 私は身を低めていよう (perf. subj.).

ā ... śṛṇavāmā	śrav/śru 「聞く」	nasal pres. 1pl. act.
ní ... naṁsai	nam 「身を屈める」	-s-aor. 1sg. mid.

語根 *nam* (pres. *nám-a-*) のアオリスト語形は, *-s-aor. subj. 1sg. mid. naṁsai* と 3pl. mid. *naṁsante* (RV; 他の文献の用例は以下参照), また後には *-siṣ-aor.* が例証されている (NARTEN 159)。一般に, *-s-aor. subj.* には mid. 語形が非常に少なく, 特に 1sg. と 3pl. とでは, 同じ語根構造を持つ *man* 「考える; 思う」 (med. tant.) の *maṁsai*, *maṁsante* だけが他に回収される。*man* の *-s-aor.* は本来の root-aor. (→ *manai*, *manāmahe*) と並んで用いられるが,

<sup>313</sup> この語幹は, ind. 1sg. mid. \*stave が幹母音幹としての再解釈を受けて形成されたとも (NARTEN Kl.Schr. 104f.), 或いは (恐らく同時に), 本来の “Stativ” 3sg. \*stáy-a-i (> stáve 「称えられる」, patientiv) の形から stáva- の部分が現在語幹 (幹母音幹) として認識された (GOTÖ Colloq. Delbrück 181f.) とも考えられる。

<sup>314</sup> III 33 は, Bharata 族の詩人 (祭官) である Viśvāmitra と, 彼らが渡ろうとしている川たちとの会話である。当詩節では, 川たちが Viśvāmitra の再三の要求を受け入れ, 渡りやすいように水位を下げようと約束している, GELDNER ad III 33。河たちは, 前節で言われた Viśvāmitra の要求と殆ど同じ言葉を用いて返答している: III 33, 9 ó [< ā u] śú svasārah kārāve śṛṇota yayāu vo dūrād ānasā rāthena | ní śú namadhvam bhāvatā supārā adhoakṣāḥ sindhavaḥ srotīyābhiḥ 「一方, しかと, 姉妹たちよ, 聞き届けよ。君たちのもとへ, 遠路遙々私は走 (つて来) た, 荷車を伴って, 戦車を伴って。しかと, 君たちは身を低めよ。良い渡し手となれ。川たちよ, 流れどもにおいて, 車軸の下にあるものたちと [なれ]」。

後者とは意味 (Verhaltensart) を異にすることから (→ I 24,1), インド・イラン共通祖語の段階で root-aor. と区別する為形成されたものと考えられる (cf. OAv. *mānghāi* = Ved. *maṁsai*, NARTEN 37, 187)。 *naṁsai*, *naṁsante* は、韻律<sup>315</sup>その他の理由から、これら *maṁsai*, *naṁsante* に倣って (*nam* の動詞パラダイムからは独立して) 作られた -sa-subj.<sup>316</sup> である可能性が高い, NARTEN 38ff., 158f.。 *nam* の -s-aor. には, RV 以外にも ind. 3sg. act. *anān* KS, ind. 3pl. mid. *anaṁsata* KB, ŚB が見られるが (MS *anaṁsata* も追加すべき → GOTÖ 196 n. 373), NARTEN 159 はいずれの形も、独立に出来た Augenblicksbildung であるとしている。

*śaśvacāi*      *śvañc/śvac* 「身を低める」      perf. (?) 1sg. mid.

perf. subj. と思われるが、語根部分が zero-gr. を示すことと、アクセントが語尾に置かれていることなどから、本来の形とは考えられない<sup>317</sup>。恐らく、現在の意味を有していたであろう perf. ind. 1sg. mid. \**śaśvacé* (「身を低めたままではいる」) が、上の二つの特徴を示す現在語幹 zero-gr. them. pres. (第六類動詞, e.g. pres. ind. 1sg. mid. *viśé* AV, subj. *viśāi* TS) への類推により形成されたものと考えられる, → THIEME Kl.Schr. 7f. n. 1。ただし孤立語形の *śaśvacāi* が、現在語幹 \**śaśvacá-<sup>1e</sup>* のパラダイムを前提としている可能性は低い<sup>318</sup>, → KÜMMEL Perf. 535。しかし, Pāda c *naṁsai* の単なる言い換えとして「身を低める」という瞬間的な動作を表わすのであれば、完了語幹を用いる必要は無い。状態の継続を表明しているものと判断すべきである。: 「(Bharata 族が全員無事に渡れるよう) じっと身を低めたままではよう」。いずれにしても解釈は当箇所本文構造の理解と関る (以下参照) <sup>319</sup>。

<機能>    *ā ... śṛṇavāmā* (主文) / *ní ... naṁsai* (主文) / *śaśvacāi* (主文 ?) : 意志表明

<sup>315</sup> *maṁsai* 及び *naṁsai* は Triṣṭubh の opening 第3, 第4音節; *naṁsante* は Dvipadā の後半5音節を, *naṁsante* は Triṣṭubh の opening 第3, 第4, 第5音節を構成する。

<sup>316</sup> 本来 -s-aor. のパラダイムを持たないが、類推その他の作用により、接尾辞 -sa- の接続法だけを持つもの, NARTEN 38。

<sup>317</sup> perf. subj. の場合、語根部分は full-gr. を示し、アクセントは語根または reduplication の部分に置かれるのが普通である。

<sup>318</sup> これに対して、完了語幹から広く現在語幹を形成した動詞に *vardh/vṛdh* がある: pres. ind./perf. subj. mid. *vāvṛdhate*, *vāvṛdhé* (AV), pres. iptv. *vāvṛdhásva*; subj. act. *vāvṛdhāti*, pres. ptcl. *vāvṛdhánt*, THIEME Plusquamperf. 48, Kl.Schr. 7f. n. 1, KÜMMEL Perf. 471。[最初の *vāvṛdhate* が pres. ind./perf. subj. のいずれに属するかによって (いずれも可能, cf. ETTER 252 n. 675), *vāvṛdh-a-* の形成過程も様々に解釈される。もしそれが pres. ind. であれば, *śaśvacāi* と同様に perf. ind. 1mid. *vāvṛdhé* を通じての幹母音化が先ず疑われる (THIEME loc. cit.; KÜMMEL loc. cit. は, perf. iptv. \**vāvṛtsva* が別の語根 *vart/vṛt* に属する *vāvṛtsva* との混同を避けるために *vāvṛdhásva* を先ず形成し、そこから他の幹母音幹が広まったと考えている)。一方 *vāvṛdhate* が perf. subj. であるなら、接続法語幹に基づく iptv. *vāvṛdhásva* の形成を経た後、そこから幹母音幹が広まった可能性が考えられる (接続法語幹から作られた iptv. については, HOFFMANN Aufs. 386, NARTEN 151 n. 423, 185, GOTÖ 234 n. 511 を参照)]。

<sup>319</sup> Cf. KÜMMEL op. cit. 535 (上記の語形の分析から): “es ist eher statisches ‘will mich gebeugt halten’ zu verstehen als dynamisches ‘will mich beugen’”。

Pāda d は Pāda c と意味的にパラレルをなしているので、*śaśvacāi* には *nī ... naṁsai* と同じ「意志表明」の機能が想定される。その場合、*śaśvacāi* のアクセントは、それが先行文の内容を何らかの形で補足していることを示すと考えられる<sup>320</sup>：“Sätze ohne segmentalen Subordinator”「分節的従属接続詞を伴わない文」、HETTRICH 155ff.<sup>321</sup>。しかし Pāda c, d の意味関係は明らかではない。先行文が後続文の理由・目的を表しているとは考えられない (OLDENBERG Kl.Schr. 206)<sup>322</sup>, cf. HETTRICH 167 n. 41。また、両文の間に反意・対照の意味関係を認めることも難しい, cf. GELDNER ‘Während ...’<sup>323</sup>。

ここでは、後続文が先行文の内容に対する補足、或いは言い直しになっているものと解釈した。二つの比喩がそれぞれ異なる人間関係を表していることは注目に値する：母が子に対して（母乳を与える為に）身を屈めるのと<sup>324</sup>、娘が若者に対してかしく態度と。また、この比喩表現の違いに加えて、両文の動詞 *naṁsai* (aor.), *śaśvacāi* (perf.) がそれぞれ語幹のアスペクトの違いを反映して、異なる動作状況を表わしているものと解釈される。その場合、川は一旦アオリスト語幹によって表現した瞬間的・一度的な「身を屈める」という行為を、直後に完了語幹を用いて、(Bharata 族が全員河を渡りきるまで)「ずっと身を低めたままでいよう」と言い直していることになる。

### III 35,5<sup>325</sup>

*mā te hāri vṛṣaṇā vitāpṛṣṭhā nī rīraman yājamānāso anyé |*

<sup>320</sup> DUNKEL MSS 46 (1985) 55 は、*māryāyeva kanyā* と *pīpyānéva yōsā* をどちらも *nī te naṁsai* にかかる比喩とし、*śaśvacāi* を文頭語のアクセントによって説明する (GELDNER ad loc., OLDENBERG Kl.Schr. 214 も同様の可能性を指摘), cf. OLDENBERG Noten ad loc. (アクセントを削除)。この解釈の可能性は否定出来ないが、意味的には、二つの Pāda がそれぞれ動詞と比喩とを一つずつ含む別の文であると考えの方がより自然に思われる, cf. HETTRICH 167f.

<sup>321</sup> HETTRICH 142ff. はこの種の文を、隣接の（特に先行する）文を意味的に補う「補足文 (Ergänzungssätze)」(→X 119,9) の一つに数えている（本論で用いる「補足節」とは何の関係もない → II B 1.3.3）。「補足文」には他に、*hī* (理由), *néd* (否定的目的), *kuvíd* (→X 119,9) などの「分節的従属接続詞」を伴った文が含まれる。

<sup>322</sup> DELBRÜCK 43 は、従属接続詞の無い従属節が主文に後置される場合の一つとして、前文に「やって来い」などの動きを表す動詞の iptv. が現れ、その後に来る 1subj. (アクセント有) が前文の目的・理由を表す用例を考察している。OLDENBERG loc. cit. はこれを受けて、当箇所がそのタイプのヴァリエーションである可能性を示唆している。

<sup>323</sup> HETTRICH 167 n. 41 によれば、従属接続詞の無い文がそのような意味関係を表す時は、常に主文に前置されるという。

<sup>324</sup> Cf. KWELLA Flussüberschreitung 32f. は Pāda c をセックスの描写としている。

<sup>325</sup> 近隣の祭主どうしが、同時にソーマ祭を行なってインドラの取り合いをしている：*saṁsava-*。詩人はインドラに、他の祭主らを通り過ぎて、自分たちのもとへ来るよう呼びかけている。Pāda b と同じ文句は、II 18,3 *mó śu tvām ātra ... nī rīraman yājamānāso anyé* 「決してこの際、きみ（インドラ）を、他の祭主たちが〔自分のもとに〕止まらせることがないようにせよ」及び X 160,1 *indra mā tvā yājamānāso anyé ... nī rīraman* にも見られる、MYLIUS Der Saṁsava 39ff. を参照。

*atīyāyahi śásvato vayám té 'áram sutébhiḥ kṛṇavāma sómaiḥ ||*

君（インドラ）の、真直ぐな背中を持つ、猛々しい両ハリたちを

他の祭主たちが「自分のもとに」止らせることがないようにせよ（*má* + aor. inj.）。

彼らを、次々と越えて、君はやって来い（pres. iptv.）。われわれは、君に

搾られたソーマたちによって、相応しく仕えよう（pres. subj.）。<sup>326</sup>

(*áram ...*) *kṛṇavāma*

*kar/kr* 「為す，作る」

nasal pres. 1pl. act.

<機能> (*áram ...*) *kṛṇavāma* (主文)：意志表明

2人称命令文 + 1人称接続法 (give-and-take) の表現形態については、II A 1.2.3 b) を参照，cf. e.g. V 75,2, VI 16,16。

### III 53,3

*śāmsāvādhvaryo prāti me gr̥ṇihī- īndrāya vāhaḥ kṛṇavāva jūṣtam |*

*édam barhīr yájamānasya sīdā- áthā ca bhūd ukthām īndrāya śastām ||*

我ら両者は言明しようではないか (pres. subj.)，アドヴァリウよ。私に歌い答えよ (pres. iptv.)。

インドラのために、喜ばしい乗り物を<sup>327</sup>，我ら両者は作ろうではないか (pres. subj.)。

祭主の、このバルヒスに、君は腰を下ろせ (pres. iptv.)。

そうすれば<sup>328</sup>，讃辞が、インドラのために、言明されたものとなる (aor. inj.)。

<sup>326</sup> Cf. VII 86,7 *āram dāsó ná mīdhūse karāṇy* 「下男が のごとく，報酬を払う [ヴァルナ] に，相応しく私は仕えよう」。

<sup>327</sup> Pada d の *ukthā-* のことを指す。インドラは *ukthā-vāhas-* 「讃辞を乗り物とする者」とも呼ばれる：X 104,2, VIII 96,11; VI 59,10 (インドラとアグニ)，cf. VIII 12,13 (詩人たち)。

<sup>328</sup> KLEIN Disc.Gram. I 226f., II 69 は cd-Pada を，純粋に時間的後続を導く *áthā* 「次に／それから」と，文をつなぐ *ca* とによって結ばれた並列構造と見なし，aor. inj. *bhū* に，*sīdā* 同様 iptv. の価値を想定している (“Sit down ..., and then let the hymn be proclaimed ...”; GELDNER も同様に二つの命令文の並列として訳出)。しかし，特定の動詞 (*dā, dhā, gā, vac*) において，inj. aor. 2/3sg. が aor. iptv. の価値で使われるのは，原則として，対応する iptv. 語形が欠如している場合である，HOFFMANN 256, 268f.。これに対して，aor. iptv. 3sg. *bhūtu* は十分に例証されているので，*bhūt* を iptv. として解釈するのは難しい (HOFFMANN loc. cit. もそうした *bhūt* の例を挙げていない)。むしろここでは，時制に捕らわれない (普遍的) 事柄，或いは繰り返し起こる事態 (“genereller/iterativer Sachverhalt”，op. cit. 135ff.) を表す aor. inj. の機能を考慮すべきである。その場合，*áthā ca* は単に時間的後続を導くだけでなく，先行する subj. や iptv. を受けて帰結を導く副詞として機能していると考えられる：「そうすれば，そうしたら」(KLEIN op. cit. II 76ff. が分類する，並列関係にない二つの節を論理的につなぐ *áthā* “(and) now”

<i>śāṁsāva</i>	<i>śāṁs/śas</i> 「言明する, 賞讃する」	full-gr. them. pres. 1du. act.
<i>kṛṇavāva</i>	<i>kar/kr</i> 「為す, つくる」	nasal pres. 1du. act.

<機能> *śāṁsāva* / *kṛṇavāva* (主文): 勧誘

### III 53,4

*jāyéd āstaṃ maghavan séd<sup>329</sup> u yónis tād ít tvā yuktā hārayo vahantu |*

*yadā kadā ca sunāvāma sómam agnīṣ tvā dūtó dhan<sub>u</sub>vā<sub>ti</sub> y ácha ||*

妻こそは、有能な者よ、我が家である。彼女こそが、また、居間である。

まさしくそこへ、君（インドラ）を、つながれたハリたちは、運べ (pres. iptv.).

いつであれ、ソーマを、我々が搾ることになる時には (pres. subj.),

(その度に) アグニが、使者として、君へ向かって、走るべし (pres. subj.).

<i>sunāvāma</i>	<i>sav/su</i> 「搾る」	nasal pres. 1pl. act.
-----------------	--------------------	-----------------------

<機能> *sunāvāma* (時を表わす *yadā* 節: *yadā kadā ca*): 見込み

*yadā kadā ca ...* は、条件が成立する時が任意であることを表す<sup>330</sup>。そのため、*sunāvāma* 「未来」と主節の *dhanvāti* 「話し手の意志表明」とは、いずれも未来全般を指示対象にしている

に比べられる。彼はこの機能を語源的に様態の副詞から説明する: 'in this way'。そしてその帰結内容は、事柄そのものだけを端的に述べる aor. inj. の超時間的な性質によって、むしろ強調されていると考えられる (aor. inj. 1sg. が特定の時間を問題にせず、発話と行為の共起, "Koinzidenzfall", HOFFMANN 251ff. や、発話の直後に控える行為, "unmittelbar bevorstehende Handlung", op. cit. 250f. を表すことをも参照せよ)。このような、事態が起こるか否かだけを問題にする aor. inj. の機能の背景には、アオリスト語幹が持つ全体観 ("Gesamtschau/perfektiver Aspekt", cf. HOFFMANN 105f., 269ff.) というアスペクトが作用していると思われる, cf. op. cit. 270. *āthā ca bhūt* にはまた, *ādāhā nú* + aor. inj. (HOFFMANN 270 n. 9: 先行の内容に直接引き続いて起こる事態を導く) に類する構造を想定することが出来る。その際, *ādāhā nú* が先行の内容に対して軽い逆説を導くのに対して (「ここで今や」 > 「ところが今や」, cf. GOTÖ Vasiṣṭha und Varuṇa 151 n. 13), *āthā ca* には順接的な意味合いが認められる。

<sup>329</sup> 主語代名詞は述語名詞 (*yónis* m.nom.sg.) の性・数・格に一致するので, *séd* は *sá* + *íd* と理解される (*sá* と後続母音との contraction については, I 16,9 の参考文献を参照), cf. Padapāṭha *sá íd*; GELDNER ad loc., OLDENBERG Noten ad loc.. 代名詞が指すのは *jāyā*。インドラが帰る場所としての妻については, I 82,6 も参照。

<sup>330</sup> Cf. VādhAnvākh II 8 (ed. IKARI) *kāman tu haivaṃviduṣo 'nyo 'gniṣu kṣīram ā ca siñced yadā kadā ca* 「一方、このように知る者(祭主)の任意で、他の者が諸祭火にミルクを注ぎ込んでもよい、いつであつても」(誰が祭主の代わりに注ぐか、また何時注ぐかは、任意である)。

と言える。或いは、そのような未来の時の観念さえも薄れて、一般的化されたアグニの義務を表わしているとも考えられる：「アグニとは、…すべきものである」。意志表明に一般的心構えが想定されたように (cf. A 1.2.2 b)), 2/3人称の意志の機能にも同様の理解が可能であろう。

### III 55,18<sup>331</sup>

*vīrásya nú s<sub>u</sub>vás<sub>i</sub>yaṃ janāsaḥ prá nú vocāma vidúr asya devāḥ |*

*ṣoḍhā yuktāḥ páñcapañcā vahanti mahād devānām asuratvām ékam ||*

男子（インドラ？）が、今や、良き馬に富む [という] ことを、人々よ、  
今、我々は宣言しよう (aor. subj.)。神々は、そのことを、知っている (perf. ind.)。  
五匹ずつ [の馬] が、六重につながれて、[彼を] 運んで行く (pres. ind.)。  
唯一、偉大なことは、神々が主人たることである。

*prá ... vocāma*

*vac* 「話す、言う」

redupl. aor. 1pl. act.

<機能> *prá ... vocāma* (主文)：意志表明

<sup>331</sup> 謎掛けの歌。詩節の意図は不明。

## IV 2,10

yásya tvám agne adhvarám jújoṣo devó mártasya súdhitam rārāṇaḥ |

prítéd asad dhót<sub>a</sub>rā sā yaviṣṭhā- *āsāma* yásya vidható vṛdhāsah ||

神であるきみが、アグニよ、或る人の (yásya)

よく設置された儀礼を、贈与者として (気前よく) 喜ぶことになるならば (perf. subj.), <sup>332</sup>

まさしく満足させられたものと、なろう (pres. subj.), 彼女「ホートラー」は／その献注は

(?) <sup>333</sup>, 最も若い者よ,

その分配者を (yásya) 増大させる者たちで、我々があるなら (pres. subj.).

*āsāma*

as 「存在する、…である」

root-pres. 1pl. act.

<機能> *āsāma* (限定的関係節／条件節)：見込み

IV 18,<sup>334</sup>

nāhām áto nír *ayā* durgáhaitát tiraścātā pārś<sub>u</sub>vān nír gamāṇi |

bahūni me ákṛtā kárt<sub>u</sub>vāni yúdh<sub>yai</sub> t<sub>u</sub>vena sám t<sub>u</sub>vena pṛchai ||

わたしは<sup>335</sup>, ここから、出て行くまい (pres. subj.). 諸々の踏み込み難い場所が、ここに

<sup>332</sup> Pāda ab の関係節は主文 (Pāda c) のどの要素にも関係しない独立の従属節を形成しているか (HETTRICH 620), 或いは、主節に関係代名詞を受ける *tá-* の何らかの形が補われるべきかと考えられる。しかし後者の場合、主文における先行詞の役割は明確ではない (\**tásya prítá* 「彼によって喜ばされた」?)。恐らく、主文の先行詞を前提として関係節が発せられた後に、主文ではあたかも (従属接続詞による) 条件文を受けるかのような構造に変化したものと思われる (anacoluthon)。二つ目の *yásya* も最初の *yásya* と同じ対象 (祭主) を指す。Pāda d は Pāda ab の表現を祭官の側から言い換えたものである：祭主がアグニの喜ぶ儀礼を催す＝自分たちが祭官として儀礼を遂行する。

<sup>333</sup> *hótrā-* はしばしば *bhārati-*, *idā-*, *sárasvati-* と並んで言及される女神のことと思われる, I 142,9, II 1,11 (cf. III 62,3)。II 1,11 ではアグニと同一視されている。ここでもアグニのことを指すか、或いは少なくともアグニに関係の深い神格であると考えられる。

<sup>334</sup> IV 18 はインドラの出生に関する歌 (→ IV 18,3 注)。当箇所はインドラと母アディティとの会話。先行詩節においてアディティは、胎内にいるインドラに通常の産道から生まれるよう説得する：IV 18,1 *ayám pánthā ánuvittah purāṇó yáto devá udājāyanta víśve | átaś cid á janīṣiṣya prāvṛddho má mātāram amuyá páttave kah* 「これが昔からの踏襲されてきた道だ、あらゆる神々がそこから生まれでてきたところの (ipf.)。そこから、大きくなったおまえは生まれてくれ (aor. iptv.)。母を無惨に破滅させるな (*má* + aor. inj.)」(上村・宮元 1994, 14: 後藤訳)。これに対してインドラは、産道 (恐らく *durgāhā* と表現されているもの) を通らずに脇腹から出ていこうと決意している。英雄が脇腹から生まれるという神話的モチーフが見られる。

<sup>335</sup> 文頭に置かれた *nā-ahām* は、「昔からの踏襲されてきた道から生まれ出てきたあらゆる神々」(前注

ある。

横切って、脇腹から、私は出て行こう (pres. subj.)。

多くの、為されたことのない事々が、私によって、為されるべきである。

或る者とは、私は戦うことになろう (pres. subj.)、或る者とは、私は協議し合うことになろう (pres. subj.)

<i>nír-ayā</i>	<i>ay/i</i> 「移動する、進む」	root-pres. 1sg. act.
<i>nír-gamāṇi</i>	<i>gam</i> 「(歩いて) 行く < PIE *踏みしめる」	root-aor. 1sg. act.
<i>yúdhyai</i>	<i>yodh/yudh</i> 「戦う」	-ya-pres. 1sg. mid. (reciprocal)
<i>sám ... pṛchai</i>	<i>praś/prś</i> 「尋ねる、問う」	-śke-pres. 1sg. mid. (reciprocal + sám)

<機能> *nír-ayā* / *nír-gamāṇi* (主文) :

通常の産道 (*durgāhā*: pl.!) を通るのがある程度時間を要する行為であり (morativ/momentativ), 一方、脇腹を裂いて飛び出すのが瞬間的 (punktuell) な行為であるとするなら、ここでは、それぞれを表すのに最も適したアスペクトが用いられていると考えられよう: 現在幹 (*ayā*) → 行為をその進行の中で捉える見方 (途中観) :: アオリスト幹 (*gamāṇi*) → 行為を全体として捉える見方 (全体観)。

<機能> *yúdhyai*, ... *pṛchai* (主文) : 見込み

まだ母胎の中にいるインドラが、将来我が身に起こるであろう、不特定の者たちとの (*tvena*) 行為を予言・予告しているものと考えられる<sup>336</sup>。

#### IV 18,3

*parāyatīm mātāram ānv acaṣṭa ná nānu gāṇy ānu nū gamāni |*  
*tvāṣtur gṛhē apibat sómam índrah śatadhanyām camāvòḥ sutásya ||*

去り行く 母の後を 彼は目で追っていた (ipf.)<sup>337</sup>,

参照) に対し、「自分はそうではない」ことを強調するものと思われる。

<sup>336</sup> Cf. HOFFMANN 250 (話し手の意志表明と理解)。

<sup>337</sup> IV 18 については、IV 18,2 を参照。当詩節は、既にインドラが (恐らく脇腹から) 生まれた後の話。「去りゆく母」とは (脇腹を破られたために) 「死んでいく」母 (cf. Sāy. *mriyamāna*-) であるとも考えられるが、後続の諸詩節からは、母がインドラを捨てたものと解される (GELDNER ad loc.), e.g. IV 18,4 *kīm sā řdhak kṛṇavad yām sahásram māsó jabhāra śaradaś ca pūrvīḥ* 「何で彼女は見捨てようとするのか、

「決して ついては行くまい (aor. subj.)<sup>338</sup>。やはり ついて行こう (aor. subj.)」。

トヴァシュトリの 家で インドラは ソーマを 飲んだ (ipf.),

百 [頭] の財産に値する [ソーマ] を, 両桶に 搾られた [ソーマ] の [中から]。<sup>339</sup>

*ánu-gāni*                      *gā* 「(歩いて) 行く < PIE \*跨ぐ」                      root-aor. 1sg. act.

*ánu ... gamāni*                      *gam* 「(歩いて) 行く < PIE \*踏みしめる」                      root-aor. 1sg. act.

<機能> *ánu-gāni* / *ánu ... gamāni* (主文): 意志表明

#### IV 20,10

*mā no mardhīr ā bharā daddhī tán naḥ      prá dāsūṣe dātave bhūri yāt te |*

*návyē deṣṇē śasté asmīn tā ukthé      prá bravāma vayām indra stuvántaḥ ||*

我々を, 君は見捨てるな (*mā* + aor. inj.). 君は持って来い (pres. iptv.). 我々に, それを, 君は与えよ (pres. iptv.),

[祭式を] 捧げる者に差し出すために<sup>340</sup>, 君にある, 豊富な [それ] を。

新たな贈り物があれば<sup>341</sup>, この, 言明された, 君への讃辞の形で<sup>342</sup>

千の月々と多くの年の間身籠もっていた [彼を]。], 5 *avadyām iva mānyamānā gūhākar indram mātā vīryēṇā nyṣṣam* 「非難されるべきもののようと思って隠した, 母は活力にはちぎれるインドラを」(上村・宮元 1994, 14: 後藤訳)。

<sup>338</sup> 言いかけた否定文 (*ná ...*) を, 再度言い直している (*nānu gāni*) と思われる, cf. HOFFMANN 249. 二重否定を肯定とする解釈もある, GELDNER ad loc.: 「母について行く決心は, 最初は消極的に, その後でかえって強く表現されている」(‘Ich will nicht nicht folgen, ich will doch folgen’), OLDENBERG Noten ad loc.: 「二度置かれる否定は, 強い否定である可能性もあるが, 大抵は肯定を表す」(‘Ich will nicht unterlassen nachzugehen. Nachgehen fürwahr will ich’).

<sup>339</sup> *pā* + acc./gen. acc. は, 飲んだ対象が何であるのか, 或いは飲んだ全体量を表し (GAEDICKE Acc. 43: “bestimmte Quantitäten und der Stoff stehen im Accusativ”), 一方 gen. は, 飲んだものの出所, 或いは飲んだものが何かの一部であることを表している (op. cit. 47: “...tritt im Veda der Genitiv zuweilen statt des Objectsaccusativs ein, um nur einen Theil des Nominalbegriffs, eine Art desselben, auf das Verb beziehen zu lassen.”). 当詩節では, まずインドラが「*śatadhanyā-* なソーマを飲んだ」ということが, 次に実際は「その中の一部を飲んだ」ことが順に示されている。次の例では, この二種の表現が逆順に用いられている: VIII 101,10 *ádhā niyutva ubháyasya naḥ piba śúcim sómaṁ gāvāsīram* 「それから, 専用の牽引馬を有する者 (ヴァーユ) よ, 我々の両方の [中から] 君は飲め, (即ち) 純粋なソーマを (そして) 牛乳を混ぜ物として持つ [ソーマ] を」。行為対象の「全体性」を表す acc. と, 部分を表す gen. との機能的な違いについては, GOTÖ Funktionen des Akkusativs 27, 37, 41f. を参照。

<sup>340</sup> *prá ... dātave* infinitive において, 前綴りと動詞本体とが他の語によって分断される現象 (tmesis) は, inf. -*dhyai* 以外では異例である。SGALL 173 によれば, RV においてはこれが唯一の例であろうという (他のより不確実な用例に関しては, op. cit. 187 n. 159 を参照)。

われわれは[その贈り物を／君の武勲たちを]<sup>343</sup> 公言しよう (pres. subj.), インドラよ, [君を] 称えつつ。

*prá-bravāma*

*brav<sup>i</sup>/brū* 「話す, 言う」

root-pres. 1pl. act.

<機能> *prá-bravāma* (主文): 意志表明

詩人は, 事実上 Sūkta の最後にあたる当詩節において, 既に歌い終えた讃辞に対し, 未来のことに言及している。*návyē deṣṇé* (下注参照) ... *prá bravāma* は, 何度でも新たな贈り物を望む度にインドラを称える意志があること(条件付き心構え)を表すと考えられる, cf. VI 59,1 *prá nú vocā sutéṣu vām vīryā*, VII 24,6 = VII25,6 *prá ... vevidāma ... pinva maghāvadbhyaḥ ... pāta svastībhiḥ*, I 94,4 *bhārāma ... kṛṇávāmā ... párvanā-parvanā*, → A 1.2.2 b)。

#### IV 21,4

*sthūrāsya rāyó bṛható yá íše tám u śtavāma vidátheṣu v indram |*

*yó vāyúnā jáyati gómatīṣu prá dhr̥ṣṇuyā náyati vásyo ácha ||*

堅牢な, 高大な財産を, 意のままにするところの,

そういうインドラを, また, 我々は称えよう (pres. subj.), 諸々の分配において。

ヴァーユとともに, ゴーマティー流域<sup>344</sup> において, 勝利するところの (pres. ind.),

敢然と, よりよいことへと向かって, [我々を] 先導するところの [彼を] (pres. ind.)。

*stavāma*

*stav/stu* 「称える」

root-pres. 1pl. act.

<機能> *stavāma* (主節): 意志表明

<sup>341</sup> *deṣṇá-* は, 常に神々から人間への贈り物を指す。*návyē deṣṇé* (loc. [absol.]) は, 「我々が新たに神々から贈り物を得ようとする時には」の意味と考えられる。

<sup>342</sup> 或いは「この讃辞は君に言明されたので」。

<sup>343</sup> GELDNER 訳は, *prá bravāma* の目的語に, c-Pāda に言われた「贈り物」を補う。その場合, 望みのものをインドラの前で公に告げることを, 宣言していることになる。一方, 目的語に *vīryā* 「諸々の武勲」を想定することも可能である, cf. X 39,5 *purāṇā vām vīryā prá bravā jáné-*, VI 59,1 *prá nú vocā sutéṣu vām vīryā yāni cakráthuh*。RV の詩人は, 神々の過去の偉業を称え直すことによって, 彼らを再度望みの行為へと駆り立てることが出来ると考えていた(堂山「新しい歌」85f. を参照)。つまり当箇所では, 詩人が将来新たな望みを要求する際に, インドラの武勲を称えることを宣言しているとも解せよう。

<sup>344</sup> GELDNER ad. loc.。

## IV 23,6

*kīm ād āmatraṃ sakh<sub>i</sub>yām sākhibhyaḥ kadā nū te bhrāt<sub>a</sub>rām prā bravāma |*

*śriyē sudṛśo vāpur asya sārgāḥ s<sub>a</sub>vār nā citrātamaṃ iṣa ā gōḥ ||*

それから、(君との) 同盟関係は、同盟者たちにとって、どのような器であるのか。

一体いつ、君(インドラ)との兄弟関係を、我々は公言すればよいのか (pres. subj.)。

〈よき容貌持つ〔牛〕たちは、栄華のためにある。(牛の) 群れは、彼(インドラ)の驚異〔の姿〕である。

太陽光の如く、最も彩り豊かな〔彼〕を、牛に至るまで(牛の中にまで ?)、私は求める (aor. inj.<sup>345</sup>)<sup>346</sup>

*prā-bravāma*

*brav<sup>i</sup>/brū* 「話す、言う」

root-pres. 1pl. act.

<機能> *prā-bravāma* (疑問文): 見込み

## IV 25,4

*tāsmā agnīr bhārataḥ śārma yaṃsaj j<sub>i</sub>yók paśyāt sūr<sub>i</sub>yam uccārantam |*

*yā índrāya sunāvāmēt<sub>i</sub>y āha nāre nāryāya nṛtamāya nṛṇām ||* Pāda c = V 37,1d

その者のために、バラタ族に属するアグニは、避難所／庇護を保持すべし (aor. subj.)<sup>347</sup>,

長い間、太陽が昇って行くのを、彼は見(守)るべし (pres. subj.),

「インドラのために〔ソーマを〕我々は搾ろう (pres. subj.)」<sup>348</sup>と言う者がいれば (perf. ind.),

「男のために、男らしい者のために、男たちの中で最も男である者(インドラ)のために」(と)。

*sunāvāma*

*sav/su* 「搾る」

nasal pres. 1pl. act.

<sup>345</sup> GOTŌ Material. (1993) 125 + n. 36.

<sup>346</sup> Pāda cd は文意不明。

<sup>347</sup> loc./dat. + *śārma yam* については、VIII 47,3 注を参照せよ。

<sup>348</sup> Cf. VIII 91,1de *indrāya sunavai t<sub>a</sub>vā* (i.e. *sōmam*) *śakrāya sunavai t<sub>a</sub>vā*.

<機能> *sunāvāma* (主文): 意志表明

*nāre nāryāya* は *indrāya* の言い換えであり, *ity āha* を隔てた二つの部分の一つの文を構成している。全体としては一つの主文であるから, 動詞のアクセントは異例である。*īti* でくくられた発話文は, 主節・従属節いずれの中に埋め込まれたとしても, アクセントを持たないのが通例である (OLDENBERG Kl.Schr. 213 n. 4 を参照), e.g. VIII 93,5 *yád ... ná marā īti mānyase ...* 『『私は死なないであろう (*marai*)』と君が思っているなら, …』。しかしここでは, 文が *ity āha* によって分断されているために, 後にまだ文の構成要素が続くということを, *sunāvāma* のアクセントによって示しているとも解釈出来る: “antithetischer Akzent” (A 1.2.3 b, c) も参照)。

*tásmai ... yaṁsat ... paśyāt, yá ... ity āha* は, 繰り返し或いは超時間的に作用する話し手の意志を表わす: 「…する者が [いれば], (いつでも) その者のために…べし」, cf. V 37,1.

IV 32,10

*prá te vocāma vīryā yā mandasāná ārujah |*  
*púro dāsir abhītya ||*

我々は宣言しよう (aor. subj.), 君 (インドラ) の, 諸々の武勲を,  
 酩酊しつつ, 敵に属する, どの  
 城塞たちを, 押しかけて行って, 君が破壊したかを (ipf.)<sup>349</sup>。

*prá ... vocāma*                      *vac* 「話す, 言う」                      redupl. aor. 1pl. act.

<機能> *prá ... vocāma* (主節): 意志表明

<sup>349</sup> GELDNER に従い, *vīryā* の具体的な内容が *yā* 以下の間接疑問文 (関係節) で言い換えられているものと理解する: *yā(h) ... ārujah ... púro dāsir* (f. acc. pl.; *yāh* は *púro dāsir* の性・数に一致) 「どんな城塞たちを破壊したのか」。これに対して ETTER 205 は, *yā* は *vīryā* (n. acc. pl.) を受ける間接疑問と考え, *abhītya* に支配されるものと解釈している: *vīryā yā ... abhītya* 「どんな武勲たちに至って, 城塞たちを破壊したのか」, cf. loc. cit. n. 567, op. cit. 212.

IV 33,5<sup>350</sup>

jyeṣṭhā āha camasā dvā karēti kānīyān trīn kṛṇavāmētīy āha |

kaniṣṭhā āha catūras karēti tvāṣṭa ṛbhavas tát panayad váco vaḥ ||

最年長の者が言う (perf. ind.)<sup>351</sup>, 「盃を、二つに、私はしよう (aor. subj.)」と。

より年少の者が「三つに、我々はしよう／しようではないか (pres. subj.)」と言う (perf. ind.)。

最年少の者が言う (perf. ind.), 「四つに、私はしよう (aor. subj.)」と。

トヴァシュトリは、リブたちよ、君たちの、この言葉を賞嘆する (pres. inj.)<sup>352</sup>。

**karā** (2x)            kar/kr 「為す, 作る」            root-aor. 1sg. act.

**kṛṇavāma**            kar/kr 「為す, 作る」            nasal pres. 1pl. act.

<機能> **karā** (2x) (主文): 意志表明

**kṛṇavāma** (主文): 意志表明／勧誘

話し手が三人の意志を代表して表明しているのか、或いは、話し手が他の二人のリブたちに対して勧誘しているのかは、決められない (cf. HOFFMANN 249 n. 272), cf. A 2 補説 2。

<sup>350</sup> 工巧神トヴァシュトリは、自分が作った盃がリブたちによって見事に四つに作り変えられるのを見て、彼らを殺そうと謀る, cf. I 20,6; 161,1-5, 9。更に詳しくは I 161,5 注を参照。

<sup>351</sup> āha は通常 pres. ind. の意味で使う動詞であるが、当詩節では形通り perf. ind. (その場合「過去の確認」が考えられる) として用いられていないかどうか検討する必要がある。なぜなら、当該 Sūkta 全体に亘りリブたちの過去の行為が aor., ipf., perf. ind. によって列挙、確認されており、また後続の詩節でも当詩節の話の続きが過去のこととして確認されているからである, IV 33, 6 satyām ūcur nāra evā hi cakrūr ānu svadhām ṛbhāvo jagmur etām | vibhrājamānāṁś camasām āhevā- avenat tvāṣṭa catūro dadṛśvān 「男たち (リブたち) は本当のことを言った (perf. ind.)。そのように、彼らはしたのだから (perf. ind.)。リブたちは、この自らの定めに従った (perf. ind.)。さんざめく盃たちを、日々を のように、凝視していた (ipf.), 四つの [盃] を見たトヴァシュトリは」。しかしながら, Pāda d に見られる pres. inj. (panayad) は、それ自体時制的概念や確認といった要素を含まず、既に了解済みの (神話的) 場面の中の事実「言及」するだけの機能しか持たないため (HOFFMANN 163), ここで āha にのみ perf. ind. の機能 (「過去の確認」) を認めることは難しい。よって、当箇所 *āha* は pres. ind. の機能を、しかも恐らく pres. inj. *panayad* と同等の機能 (「言及」) を担っているものと理解されよう。その際, pres. ind. の「現在時」や「報告」といった意味は有意的ではなく、むしろ pres. ind. が、時制・法のいずれに関しても inj. に次いで最も無色なカテゴリーとして認識されているものと思われる, cf. HOFFMANN 165: 「(inj.) の『言及的記述 (erwähnende Beschreibung)』が持つ非時間的性質が、純粋な過去時制と余りに強く対照をなすため、injunctive に代わって pres. ind. が立つこともあり得る」。このように pres. ind. が pres. inj. に容易に近づき得ることは、両者が、特定の時に縛られない一般論 (“genereller, allgemeiner Sachverhalt”) を表す場面においてもしばしば並んで用いられることと一致する (HOFFMANN 115ff.)。同じ神話的事実を過去のこととして報告するか、単に言及するか、確認するか等々は、詩人の選択に委ねられており、当該 Sūkta のように、同じ神話の記述の中でこれらが混ざって用いられる用例は他にも見られる (HOFFMANN 163ff. を参照)。

<sup>352</sup> *panayad* は、トヴァシュトリが (自分の作品を作り変えようという) リブたちの言葉を聞いて、単に驚愕したのか、或いは、(あしらうように) 驚き感心して見せたか、のいずれかと思われる。

## IV 39,1

*āsūṃ dadhikrāṃ tām u nū śtavāma divās pṛthivyā utā carkirāma |*  
*uchāntīr mām uśasaḥ sūdayant<sub>u</sub>v āti víśvāni duritāni parṣan ||*

俊足のダディクラーを、さあ、この者を、また、我々は称えよう (pres. subj.)<sup>353</sup>。

天と大地のことを<sup>354</sup>、我々は誉め称えよう (pres. subj.)。

曙光を放ちつつあるウシャス (曙, f.) たちは、わたしを、準備の出来た状態にせよ (pres. iptv.)。

一切の、危難どもの向こうへ、[私を] 彼女らは渡すべし (aor. subj.)。

*stavāma* stav/stu 「称える」 root-pres. 1pl. act.

*carkirāma* kar<sup>i</sup>/kṛ 「誉め称える」 intens. I pres. 1pl. act.

kar<sup>i</sup>/kṛ の現在語幹は intens. 語幹のみ。恐らく語根はもともと「(神々等を) 想起して称える」を意味し, intensive \*「何度も何度も想起して口にする」>「誉め称える」の意味変化を辿ったと考えられる, SCHAEFER 108 を参照。

非幹母音幹の intens. では, 語根部分は通常 Ablaut (zero-gr./full-gr.) を示すが, 接続法語形は一貫して zero-gr. からつくる (→ I 2.1.1 2), cf. X 119,10 *jañghānāni*, VII 24,6 = VII 25,6 *vevidāma*), op. cit. 35ff.。その際, subj. *carkirāma* は本来の語根の laryngeal を反映しているように見える: PIIr. \*čar-kṛH-V > *carkir*-V。しかし PRAUST Altindisch *dṛ-/dṛ-* 431f. は, 接続法以外の全動詞語形及び名詞の一部が *aniṭ* 語根を示すこと (ind. 1sg. *carkarmi*, 2/3sg. *cārḱṣe*, iptv.II *carkṛtāt*, gerdv. *carkṛtya-*; *carkṛti*-「誉め称え, 名声」<sup>355</sup>), そしてアヴェスタの語形にも laryngeal の痕跡が見られないこと (ind. 1pl. *car<sup>o</sup>kər<sup>o</sup>mahī*; *car<sup>o</sup>kər<sup>o</sup>ḍra-*) などから, laryngeal はインド・イラン共通祖語の段階で既に消失しており<sup>356</sup>, ヴェーダ語の接続法語幹 *carkir-* は, *jañghan-a-*と同様 (→ X 119,10), *aniṭ* 語根の zero-gr. から “LINDEMAN

<sup>353</sup> *u* は通常文の二番目を占めることから, 文頭の 3 語が句をなすのではなく, まず主題の語句が文頭に提示され, それが再び指示代名詞によって取り上げられたものと考えられる, KLEIN Particle *u* 11f.。これは, 主題として文頭に置かれた語句には, 文を始める力がない (cf. vocative) という前提に基づく (ただし KLEIN op. cit. 56 は, 本来の文を \**āsūr dadhikrās tām u nū śtavāma* ‘Swift is Dadhikrā. That one shall we praise now’ と復元し, 最初の 2 語に *tām* からの attraction を想定している)。一方, IV 40,1 *dadhikrāvṇa id u nū carkirāma* では主題の前置は起きておらず, 通常の語順が見られる (*id* と *u* とが文の 2 番目を争う時, 有アクセントの方が先に立つという原則が当てはまる, DELBRÜCK 22, cf. V 29,13 *préd u*。定型句 *tām u śtavāma* については, A 1.2.1 b) を参照。

<sup>354</sup> X Y *utā* のタイプ (KLEIN Disc.Gram. 344ff.) と考えられる (V 41,11 も参照; ただし, cf. X 88,3 *pṛthivīm dyām utémām*)。KLEIN op. cit. 369f. は, 文接続の *utā* (*stavāma ... utā carkirāma*) を前提とし, これが *divās pṛthivyā* の句接続をも担っているとする。

<sup>355</sup> 恐らく intens. では, redupl. にアクセントが落ちることによって語根部分の *H* が弱化を受けたものと思われる, cf. PIIr. \**kṛH-ti-* > *kṛti-*「言及, 名誉」。

<sup>356</sup> laryngeal の消失に関しては, 参考文献も含め PRAUST loc. cit. + n. 22, SCHAEFER 107f. を参照。

(/SIEVERS) の法則”によって出来た形であると論じている：\*\**car-kr-V* > \**car-kar-V* > *car-kir-V*。

<機能> *stavāma* (主文) / *carkirāma* (主文)：意志表明

#### IV 40,1

*dadhikrāvṇa id u nū carkirāma víśvā ín mām uśásah sūdayantu |*

*apām agnér uśásah sūrīyasya bṛhaspáter āṅgirasásya jiṣṇóḥ ||*

さて、今、まさしくダディクラーヴァンのことを、我々は誉め称えよう (pres. subj.),  
—まさしく一切のウシャス (曙) たちは、私を準備のできた状態にせよ (pres. iptv.) —<sup>357</sup>  
水たちのことを、アグニのことを、ウシャス (曙) のことを、スーリヤ (太陽) のことを、  
アンギラスの子、勝利するブリハスパティのことを。

*carkirāma* *kar<sup>i</sup>/kṛ* 「誉め称える」 intens. I pres. 1pl act.

語形については IV 39,1 を参照。

<機能> *carkirāma* (主文)：意志表明

#### IV 43,1

*ká u śravat katamó yajñīyānām vandāru devāḥ katamó juṣāte |*

*káśyemām devīm amṛteṣu présthām hṛdí śreṣṭhāma suṣtutīm suhavyām ||*

さて、誰が、聞くことになろうか (aor. subj.), 祭式に値する者たちの中で、どの者が。  
誉め言葉を、どの神が、喜ぶことになろうか (aor./pres. subj.).  
不死の者たちの中で、誰の心臓に、この、神的な、最も好ましい  
よき供物を伴う、よき称讃を、我々は寄せ掛けるべきか／寄せ掛けようか (aor. subj.).

<sup>357</sup> Cf. IV 39,1abc *āsúm dadhikrām tám u nū ṣṭavāma divás pṛthivyā utá carkirāma uchántir mām uśásah sūdayant<sub>u</sub>v*.

*śreṣāma*                      *śray/śri* 「寄り掛かる；寄せ掛ける」    -s-aor. 1pl. act.

<機能> *śreṣāma* (疑問文)：義務

詩人は、アシュヴィン双神が聞いているという前提のもとで自問しているものと判断される<sup>358</sup>, cf. VII 86,2, I 41,7, I 25,5.

#### IV 58,2

*vayāṃ nāma prā bravāmā ghṛtāsyā- aśmín yajñé dhārayāmā nāmobhiḥ |*

*ūpa brahmā śṛṇavac chasyāmānaṃ cātuḥśṛṅgo 'avamīd gaurā etāt ||*

われわれは、グリタ（液体バター）の名を、公言しよう（pres. subj.）。

この祭式において、（その名を）我々は保持しよう（pres. subj.），敬意たちを伴って。

ブラフマン祭官は「それが」言明されるのに、耳を傾けるべし（pres. subj.）。

四つの角を持つ、ガウラ牛（ソーマ）は、これ（その名）を、吐き出した（aor. ind.）<sup>359</sup>。

*prā-bravāmā*                      *brav'/brū* 「話す，言う」                      root-pres. 1pl. act.

*dhārayāmā*                      *dhar/dhṛ* 「保持する」                      caus. pres. 1pl. act.

<機能> *prā-bravāmā / dhārayāmā* (主文)：意志表明

<sup>358</sup> 第2詩節では *ká-*, *katamá-* = アシュヴィン双神であることを、より具体的に暗示しつつ更に自問を続け、第3詩節で初めてアシュヴィン双神に話しかけていることを明らかにする：

2 *kó mṛdāti katamá āgamiṣṭho devānām u katamāḥ śāmbhaviṣṭhaḥ | rátham kām āhur dravádaśvam āśúm yām sūrīyasya duhitāvṛṇīta* 「誰が寛容であろうか、どの者が最もよく駆けつける者であるか。また、神々の中でどの者が、最も幸いとなる者であるか。どの（＝誰の）戦車を、失踪する馬を伴う足早のものと、[人々は] 言っているのか、スーリヤの娘が選び取るところの[それを]」

3 *makṣū hí śmā gácchatha ívato dyūn indro ná śaktīm páritakmīyāyam | divá ājāta divīyā suparṇā káyā śácīnām bhavathaḥ śáciṣṭhā* 「いつでも、急いで、君たちは進み行くではないか、このような日々において。インドラが、重大な転機において、能力の発揮へと（向かう）ように。天から生まれた、天に属する、よき羽持つ双鳥として、諸々の力の中でどの[力]によって、最も強力な両者で君たちはあるのか」。

第2詩節までの疑問文では、神々の代表形として m. sg. (*káh*, *katamó*, *kásya*) が使われていたのに対して、第3詩節以降では全て du. に変わっていることに注意。

<sup>359</sup> 「四つの角を持つガウラ牛」とは、ソーマのこと。「ソーマ」という言葉がグリタの秘密の呼び名であることを、ソーマ自身が漏らしたということ、cf. GELDNER ad loc.。

## V 7,3

*sám yád iṣó vānāmahe sám havyā mānuṣāṇām |*

*utá dyumnāsya śávasa ṛtāsya raśmím ā dade ||*

滋養たちを、完全に、我々が克ち得ることになる時には (aor. subj.),  
完全に、マヌの子孫たちの、供物たちを [我々が克ち得ることになる時には],  
明るさの、漲る力によっても<sup>360</sup>  
天理の、革紐(手綱)を、彼(アグニ)は手に取っている (perf. ind.).<sup>361</sup>

*sám ... vānāmahe* van 「打ち克つ、克ち得る (pres. *vanóti*)」 root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *sám ... vānāmahe* (時を表わす *yád* 節): 見込み

## V 13,2

*agné stómam manāmahe sidhrám adyá divispṛśah |*

*devāsya draviṇasyāvaḥ ||*

アグニの前で、成功する頌歌を、我々は考え出そう (aor. subj.).  
今日、天に触る (i.e. 天に届く)  
神(アグニ)への [頌歌] を、家財を求める者たちとして。

*manāmahe* man 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」 root-aor. 1pl. mid.

<機能> *manāmahe* (主文): 意志表明

<sup>360</sup> *utá* は、或いは主語にかかるか、cf. GELDNER “..., dann ergreift auch er ...”, KLEIN Disc.Gram. I 447f. “..., (then) he as well ... grasps ...”.

<sup>361</sup> 滋養、即ち供物を完全に確保してアグニに捧げる時には、アグニは既に天理を発動させる準備ができています。つまり、主文の perf. ind. *ā dade* は、従属節の表わす時点(未来, aor. subj.)で既に完了している行為の結果を表していると思われる (resultativ), KÜMMEL Perf. 240f. ただし *ā dade* には pres. ind. の可能性も否定出来ない (KÜMMEL loc. cit. 参照), cf. GELDNER, KLEIN 訳 (前注)。

## V 16,5#

*nū na áēhi vārīyam ágne gr̥ṇāná ā bhara |*

*yé vayám yé ca sūrāyah svastī dhāmahe sāco- utáidhi pr̥tsú no vrdhé ||*

さて、今、我々のもとへ、君はやって来い (pres. iptv.)。望ましいものを

アグニよ、歌い迎えられつつ、君は持って来い (pres. iptv.)。

われわれ（詩人たち）と、そして主人（祭主）たちなる者たちは（といえ、そうすれば）

共に、無事を<sup>362</sup>、手にしよう (aor. subj.)。

そしてまた、諸々の戦において、我々のもので、君はあれ (pres. iptv.)、増強のために。

*dhāmahe*

*dhā* 「置く；置き定める」

root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

mid. 「自らに置き定める」 (affekt.) > 「自分のものにする；手にする」

<機能> *dhāmahe* (主文)：意志表明

Pāda cd が一つの文をなすものと理解する。Pāda c の主語は、それぞれ *vayám, sūrāyah* だけを述語名詞とする二つの関係節が *ca* によってつながれたもので、*sācā* はこれら両主語の協調関係を強めていると考えられる<sup>363</sup>：「我々と主人たちとが一緒になって」。動詞 *dhāmahe* のアクセントは、この文が何らかの形で前文を意味的に補う文であることを表わす：「補足文」<sup>364</sup> → C 3, cf. HETTRICH 167 n. 40。当箇所では *dhāmahe* が、先行の命令に相当する内容を、意志表明として言い換えているものと思われる<sup>365</sup> → A 1.2.3 c), cf. A 3 補

<sup>362</sup> *svastī-* は通常女性名詞であるが (< \**h<sub>1</sub>su-ns-ti-*), 中性名詞も例証されている, e.g. X 14,11 *svastī cāsmā anamivām ca dhehi* 「無事と無病とを、彼に君 (Yama) は置き定めよ」。SCHINDLER *cvi-Bildungen* 301 n. 19 は、本来の「我々を (*naḥ* acc.) 無事と一緒に (*svastī* instr. sg. = \**svastī*; instr. sg. -ī → 注394) 置く／する (*dhā, kar/kr̥*)」という構文が、「我々に (*naḥ* dat.) 無事を (*svastī* acc.) 置く／する」と再解釈されたために、n. *svastī-* が出来たと想定する (dat. として用いられる *svastī* の形成過程については V 51,12 を参照)。この仮定に基づけば、背景にある構文を当箇所にも認めることも出来よう：「我々と主人たちと共に、我々は〔自分たちを〕無事と一緒にすることになるであろう」。但しその場合、*naḥ* (acc.) の存在が想定されている以上、mid. 活用による affekt. の表示は余計である。

一方、*svastī-* が非屈折語として定着し、*svastī* のまま acc./instr. 語形として用いられている可能性も否定出来ない (V 51,12 を参照)。

<sup>363</sup> Cf. KLEIN *Disc.Gram.* I 110f., II 20: "... merely stylistic anaphoric figures rather than true coreferential relative clauses. ... (instead of \**vayám sūrāyaś ca*) ..."

<sup>364</sup> 動詞のアクセントだけによって表される補足文には、主文に前置されるものと、当箇所のように後置されるものがあるが、後者の例は非常に少ない、HETTRICH 165ff.

<sup>365</sup> Pāda cd 全体を一つの関係節とすることで *dhāmahe* のアクセントを説明するならば、関係節が単独で従属節を形成していると考えられよう (cf. II 30,7)。その場合、目的・理由を表わす従属節としての機能が想定される。ただし、この種の関係節が目的・理由を表わす用例は、他には見られない (HETTRICH 623 が挙げる唯一の用例 X 72,1 には他の解釈を優先すべきである)。

説 3。Sukta の最終詩節における意志表明に関しては、A 1.2.2 c) を参照。

### V 29,13

*kathó<sup>366</sup> nú te pári carāṇi vidvān vīryā maghavan yā cakārtha |*

*yā co nú nāvya kṛṇāvah śaviṣṭha prēd u tā te vidátheṣu bravāma ||*

どのようにして、今、君（インドラ）に、私は仕えるべきか／仕えようか（pres. subj.），

有力者よ、君が為した（perf. ind.），諸々の武勲を知っている者として。

片や今、最も力みなぎる者よ、君が為すことになる（pres. subj.）諸々の新たな〔武勲〕<sup>367</sup>，

それらを君に、諸々の分配（の場）において<sup>368</sup> 我々はまさしく公言しよう（pres. subj.）。<sup>369</sup>

*pári-carāṇi*                      *car* 「動き回る，活動する」                      full-gr. them. pres. 1sg. act.

*prá ... bravāma*              *brav/brū* 「話す，言う」                      root-pres. 1pl. act.

<機能> *pári-carāṇi*（疑問文）：義務

詩人はインドラの存在を想定して話しているが、疑問は自身に向けられており（Pāda ab），その答えも彼自身によって与えられている（Pāda cd）。

*prá ... bravāma*（主節）：意志表明

<sup>366</sup> *kathá-u* の連続は RV で当箇所のみ（ETTER 42）→ 注369。

<sup>367</sup> ETTER 207, 212 は、*yā* を間接疑問代名詞／形容詞とする。間接疑問文の判断基準の一つとして、先行詞が関係節の中に含まれるという構造が挙げられるが（e.g. 「どんな武勲を君が為すことになるのかを、…」，cf. HETTRICH 522ff.），当詩節の Pāda c では先行詞に相当する *vīryā* が明示されておらず、それが主節／関係節のいずれに属するのかは明らかではない。*tā* - *yā* の照応関係からも、通常の限定的関係節と理解するのが最も自然な解釈と思われる（HETTRICH 525 n. 85），cf. III 60,1 *uśijo jagmur abhi tāni* (n. acc. pl.) ... *yābhir māyābhiḥ* (f. instr. pl.) ... *yajñīyaṃ bhāgām ānaśa*. C 2 の議論も参照。

<sup>368</sup> *vidátha-* 語根 *vīdhā*（或いは *vidh*）と接尾辞 *-átha-* による派生名詞，HOFFMANN Aufs. 242, 265 n. 1。「分配」或いは「分配の為の集会」。

<sup>369</sup> Pāda ab と cd とをそれぞれ別の複文と理解した。後者においては、主節・関係節それぞれに置かれた *u* が、代名詞と関係代名詞の同一指示性（coreference）を強めている，cf. III 53,21 *yám u dviśmās tám u prāṇo jahātu* 「我々が憎んでいるそういう者を、氣息は置き去りにせよ」，KLEIN Disc.Gram. I 219f.。当箇所が通常の語順 *tā* - *u* を示していない（*u tā*）のは、*u* が文の二番目の位置に固定されているためと思われる（*id* との位置関係は IV 39,1 を参照），loc. cit., Particle *u* 113 [KLEIN は後者の書では Pāda a/bcd と分け、*u* に *pári carāṇi* (a) と *prá bravāma* (d) とをつなぐ接続詞的な価値（Disc.Gram. II 30ff.）を優先したが、Disc.Gram. loc. cit. では ab/cd との分け方に改めている]。また、*u* はそのような指示的機能を持つと同時に、*ca* とともに（*co*），（別々の主文に属する）二つの関係節（b *vīryā* ... *yā cakārtha*, perf. ∴ c *yā* ... *nū nāvya kṛṇāvah*, subj）の内容どうしを対比させる機能を有すると思われる：「そして一方、片や」，cf. KLEIN op. cit. I 220: “a loose sentential conjunction”。

## V 30,3

*prá nú vayám suté yā te kṛtānī- indra brāvāma yāni no jújoṣaḥ |*  
*védad ávidvāñ chṛnāvaca ca vidvān váhate 'yām maghāvā sárvasenaḥ ||*

われわれは、今、搾られた[ソーマ]の前で、君の爲したこと事々を、  
 インドラよ、公言しよう (pres. subj.), 我々の(歌う)それらを 君が喜ぶことになるよう  
 に (perf. subj.).

(まだ)知らない者は、知るべし (perf. subj.)<sup>370</sup>。また(既に)知っている者は、聞くべ  
 し (pres. subj.).

ここに、完全な軍を持つ、有能な者が、進み行く (pres. ind.).

*prá ... brāvāma*                      *brav/brū* 「話す、言う」                      root-pres. 1pl. act.

<機能> *prá ... brāvāma* (主文): 意志表明

## V 35,8#

*asmākam indra éhi<sup>371</sup> no rátham avā púramdhiyā |*  
*vayām saviṣṭha vāriyam divi śrávo dadhīmahī divi stómam manāmahe ||*

われわれの —— インドラよ、我々のもとへ 君はやって来い (pres. iptv.) ——<sup>372</sup>  
 戦車を、君は援助せよ (pres. iptv.), 巨富 (Puramdhi) によって。<sup>373</sup>

<sup>370</sup> KÜMMEL Perf. 496 は、*ved/vid* (perf.) の法語形は全て、indicative と同様、状態的な 'wissen' 「知っている」の意味で理解可能であり、'erkennen, zur Kenntnis nehmen' etc. 「知る、分かる」などの動詞・始動的な意味を設定する必要はないとする。当箇所においても、*védad* は ptcpl. *ávidvān* と対をなすとして、状態的に理解している: "Wissen soll der Unwissende, und hören der Wissende". しかし、*védad ávidvān* は、後続の *śṛnāvaca ca vidvān* との対比からも、「まだ知らない状態にある者が、(詩人の言葉によって) 知ようになる」という文意が最も自然であると思われる、cf. GELDNER "Es soll sie der Unkundige kennen lernen". SEEBOLD \**uejd-* (Sprache 19) 26 "... kennenlernen soll (sie) der Unwissende (= der sie noch nicht kennt), ...".

<sup>371</sup> 前置詞 *á* が前後の母音と Samdhi を起こす場合、まず先行する *-ā* と、その後に後続の *ī*-, *ū*- と結合するのが通常である: *indra á íhi* → *indrā + íhi* → *indrēhi*, OLDENBERG Noten ad I 9,1, CALAND ŠBK Introd. 35, HOFFMANN Aufs. 554 n. 5 (他の用例・文献紹介あり) を参照; WACKERNAGEL/DEBRUNNER I 319f. は(恐らく OERTEL Dat.fin. 119 = Kl.Schr. 1488 n. 4 も)、*á* が後続の母音と先に結合し、先行する *-ā*- はその後で脱落すると考えているようである。

<sup>372</sup> *éhi* が別の命令文 (*asmākam ... rátham avā*) の中に挿入されている、cf. VIII 64,10 *tásyéhi* (Samdhi! → 上注) *prá dravā pība* 「それ(ソーマ)の中から——君はやって来い、君は走れ——君は飲め」。

われわれは、最も強大な者よ、望みのものを、  
 天において<sup>374</sup>、聞こえを、自らに置き定めたい (pres. opt.).  
 天において、頌歌を、我々は考え出そう (aor. subj.).

**manāmahe**      *man* 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」      root-aor. 1pl. mid.

<機能>      **manāmahe** (主文): 意志表明

### V 37,1

*sám bhānūnā yatate sūr<sub>i</sub>yasyā- ajúhvāno ghṛtápṛṣṭh<sub>a</sub>h suváñcāh |*  
*tásmā ámr̥dhrā uśáso v<sub>i</sub>y ùchān      yá índrāya sunávāmét<sub>i</sub>y áha ||*      Pāda d = IV 25,4c

太陽の光輝とともに、彼（アグニ）は位置に付いている (pres. ind.).  
 （液体バターを）注がれつつ、液体バターを背中に載せて、よく身をたわめて。  
 その者のために、ぞんざいでないウシャス（曙）たちは、広く曙光を放つべし (pres. subj.),  
 「インドラのために [ソーマを] 我々は搾ろう (pres. subj.)」<sup>375</sup> と言う者が [いれば] (perf. ind.).

**sunávāma**      *sav/su* 「搾る」      nasal pres. 1pl. act.

<機能>      **sunávāma** (主文): 意志表明

**sunávāma** のアクセントは、同一 Pāda である IV 25,4c (antithetischer Akzent の可能性有り → IV 25,4) が持ち込まれたか、或いはそれに影響された可能性がある。*tásmāi ... ùchān, yá ... íty áha* は、繰り返し或いは超時間的に有効な話し手の意志を表わす: 「～する者がいれば、(いつでも) その者のために…べし」, cf. A 1.2.2 b)。

<sup>373</sup> つまり「巨富を戦車に積み込め」或いは「戦車の戦いを助け、巨富を得さしめよ」。

<sup>374</sup> *diví*, cf. GELDNER “heute”。同所は更に、*diví pāryé* (III 32,14 注参照) を指す可能性も指摘する。

<sup>375</sup> Cf. VIII 91,1de *índrāya sunavai t<sub>u</sub>vā* (i.e. *sómam*) *śakráya sunavai t<sub>u</sub>vā*。

## V 41,11

*kathā mahé rudrīyāya bravāma kád rāyé cikītúṣe bhágāya |*

*āpa óṣadhīr utá no 'avantu dīyáur vānā girāyo vṛkṣákeśāḥ ||*

如何にして、ルドラに属する、大いなる〔群れ〕に、我々は言うべきか (pres. subj.).

何を、財〔である神〕に、(事情を)理解しているバガ(分配神)<sup>376</sup>に〔我々は言うべきか〕。

水たちは、また草たちも<sup>377</sup>、我々を助力せよ (pres. iptv.),

天は、木々は、木々を髪とする山々は。

*bravāma*

*brav<sup>i</sup>/brū* 「話す、言う」

root-pres. 1pl. act.

<機能> *bravāma* (疑問文): 義務

当詩節の疑問は、後続の第13詩節 (V 41,13) において詩人自らによって応えられている (マルトたちへの讃辞が述べられている)。

## V 41,13

*vidā cin nú mahānto yé va évā bravāma dasmā vārīyaṃ dádhanāḥ |*

*vāyaś canā subhāvā āva yanti kṣubhā mártam ānuyataṃ vadhasnāiḥ ||*

今や、まさしく君たち (マルトたち) は知っているとも (perf. ind.), 偉大な者たちよ、君たちの、諸々の行程が何であるかを。

我々は言おう (pres. subj.), 驚くべき者たちよ、〔君たちに〕望ましいものを〔我々の中から〕定め置きながら、

<sup>376</sup> Bhāga は財 (rayí-) や財物 (vāsu-) を支配する神である: V 42,5 devó bhāgaḥ savitā rāyo 「神であるバガ、財を駆り立てる者が」、VII 41,6 X 42,3 vasuvīdam bhāgam 「財物を見つけ出すバガを」、cf. HILLEBRANDT Ved.Myth. II 83。ここでは、その財 (rayí-) 自体が抽象化・神格化されて、bhāga- と同格に置かれていると思われる; 同様に VIII 31,11, IX 101,7 rayír bhāgaḥ。ただし、rayí- と bhāga- とが別々の神格を表わす可能性も否定出来ない (OLDENGERG Noten ad V 50,5, GELDNER 訳 passim), cf. HILLEBRANDT op. cit. 395。V 50,5 も比べよ——或いは、rāyé cikītúṣe (attraction) ← \*rāyás cikītúṣe 「財のことに気付いている [bhāga- のために]」も可能か、cf. VII 95,2 rāyás cétantī (i.e. sárasvatī)。

<sup>377</sup> X Y utá のタイプ (X utá Y のヴァリエント) と考えられる、KLEIN Disc.Gram. 345f. (IV 39,1 も参照せよ)。これに対し、āpa, óṣadhīr と Pāda d とが utá でつながれている (: X Y utá Z) 可能性は低い。それは、Pāda c で述部が完結していることと (loc. cit.), 何より、utá と Z とが Pāda の切れ目に跨がるということが無いという事実による、op. cit. I 328-330 を参照 (V 60,6 も比べよ)。d-Pāda の三つの同格主語は、āpa óṣadhīr utá に対し asyndetic に追加されたものと思われる。

——よき性持つ鳥たちでさえ[知ら]ない——:[マルトたちが]降り来る<sup>378</sup> (pres. ind.) (と  
いうことを),

動揺によって, 諸々の兵器によって, 服従させられた人間のもとへ。<sup>379</sup>

*brāvāma*                      *brav<sup>i</sup>/brū* 「話す, 言う」                      root-pres. 1pl. act.

<機能> *brāvāma* (主文): 意志表明

意志された行為は, 直後の Pāda で実行されている。

#### V 42,6

*marútvato āpratītasya jiṣṇór      ājūryataḥ prā brāvāmā kṛtāni |*

*nā te pūrve maghavan nāparāso      nā vīryam nūtanah kās canāpa ||*

マルトたちを伴う, 手向かい得ない, 勝利する,

朽ちることのない者 (インドラ) によって, 為されたことたちを, 我々は公言しよう (pres.  
subj.):

太初の者たちも, 有能な者よ, 後に続く者たちも

今の如何なる者も, 決して, 君の武勇に到達してはいない (perf. ind.)<sup>380</sup>。

*prā-brāvāma*                      *brav<sup>i</sup>/brū* 「話す, 言う」                      root-pres. 1pl. act.

<機能> *prā-brāvāma* (主文): 意志表明

<sup>378</sup> 或いは *ā-vayanti* と読み, 「緯糸を (こちら向きに) 織り込む, 織り込んで確保する (自らのものに  
する)」(「または [ものを] もたらす」とも) → 「支配する」等の意味を想定出来るか。

<sup>379</sup> 詩節全体の意味: 人間に襲いかかる雷雨, 暴風は, マルト神たちが舞い降りてくることが原因であ  
る。この秘密を, マルトたち自身は当然分かっているが, 自分たち (話し手, 詩人) もまた, 知ってい  
る。空を舞う鳥たちですら知らないというのに。 *brāvāma* の内容は *āva yanti* 以下全て。鳥たちへの言  
及 (*vāyaś canā subhvā*) は挿入文。

<sup>380</sup> perf. ind. (*nā*) *āpa* の表す状態が, 過去, 現在, 未来にわたって当てはまることを表す。未来に関し  
て subj. が省略されたと考えれば, 一種の「くびき語法」(‘Zeugma’) を想定することも可能であるが,  
perf. ind. 「達成された状態」は本来時制的観念とは無関係であり, 一般論をも表し得ることから  
(HOFFMANN 115), (*nā*) *āpa* は未来全般も含めた普遍的真実を表すものと理解される (恐らく subj. 「未  
来」によっても表現可能, cf. II 28,8, *brāvāma*: 過去, 現在, 未来にわたる話し手の「意志表明」)。一  
般論的な表現には, 当箇所のように, 否定辞を伴う用例が多く含まれている, op. cit 239 (subj.)。それ  
は, ある行為が「起こらない」と言う場合, 特定の時とのつながりが極度に薄れるためと思われる。

意志された行為は、直後の Pāda で実行されている。

# V 44,10<sup>381</sup>

*sá hí kṣatrasya manasasya cūtibhir evāvadasya yajatasya sādhereḥ |*  
*avatsārasya sprṇavāma rānvabhiḥ śaviṣṭham vājaṃ vidūṣā cid ārdhṇyam ||*

確かに、それは<sup>382</sup>、諸々の注意を伴い、クシャットラ・マナサに属している、  
 ありのままに話す、ヤジャタに、サドウリに属している（けれども）、<sup>383</sup>  
 アヴァットサーラの、戦好きの「兵士」たちによって、我々は手に入れよう（pres. subj.）、  
 最も強大な戦利品を、知っている者によってであれば、せしめられるべき「戦利品」。

*sprṇavāma* spar/spr 「手に入れる、獲得する」 nasal pres. 1pl. act.

<機能> *sprṇavāma* (主文)：意志表明

# V 45,5

*éto naḍv ādyā sudhṇyò bhāvāma prā duchúnām inavāmā<sup>384</sup> váriyaḥ |*  
*āre dvēṣāmsi sanutār dadhāmā- ayāma prāñco yājamānam ácha ||*

さあ（来い／行け）、今日、よき思慮持つ者たちに、我々はなろうではないか（pres. subj.）。  
 不吉さを、より離れた所へ、我々は駆逐しようではないか（pres. subj.）。  
 遠い所に、敵対関係を、我々は遠ざけようではないか（pres. subj.）。  
 我々は前進しようではないか（pres. subj.）、祭主の方へと向かって。

<sup>381</sup> 当詩節は Dānastuti と思われるが、文意の詳細は不明。特に Pāda ab の訳文は仮のものとする。

<sup>382</sup> それ (sá) は後出の vāja- のことと思われる、cf. OLDENBERG Noten ad loc.: sá = Kravaṇa (先行第 9 詩節 ātra ná hārdi kravaṇasya rejate yātrā matir vidyāte pūtabāndhani 「ここでは、クラヴァナの心臓は震えることがない、そこにおいて、清まった「ソーマ」を味方につける思考が見出されるところの「心臓は」」。

<sup>383</sup> hí はここでは、文全体を強めることによって、後続文に対する譲歩文を形成していると考えられる、cf. HETTRICH 176f.

<sup>384</sup> Ed. AUFRECHT duchúnā minavāmā (Pp. duchúnāḥ minavāmā) → duchúnām inavāmā, THIEME Kl.Schr. 7-10.

<i>bhāvāma</i>	<i>bhav/bhū</i> 「生じる, ~になる」	full-gr. them. pres. 1pl. act.
<i>prá ... inavāma</i>	<i>ay/i</i> 「追い立てる, 送る」	nasal pres. 1pl. act.
<i>dadhāma</i>	<i>dha</i> 「置く ; 置き定める」	redupl. pres. 1pl. act.
語幹の形成については, I 2.1.1 5) を参照。		
<i>áyāma</i>	<i>ay/i</i> 「移動する, 進む」	root-pres. 1pl. act.

<機能> *bhāvāma* / *prá ... inavāma* / *dadhāma* / *áyāma* (主文): 勧誘

*éta ... subj.* 1pl. [+ accent] の構文については, A 2.1 を参照。

#### V 45,6

*éta dhíyam kṛṇāvāmā sakhāyó 'āpa yá mātām<sup>385</sup> ṛṇutá vrajām góḥ |*

*yáyā mánur viśiṣiprām jigāya yáyā vaníg vankúr āpā pūriṣam ||*

さあ (来い/行け)。思慮を, 我々は為そうではないか (pres. subj.), 同僚たちよ。

母として, 牛の囲いを, 動かし除けるところの (pres. inj.)<sup>386</sup>,

それによって, マヌがヴィシシプラに勝利したところの (perf. ind.),

それによって, ずる賢い商人が (富の) 源泉へ (?) 達したところの (perf. ind.) [思慮を]。

*kṛṇāvāmā* *kar/kr* 「為す, 作る」 nasal pres. 1pl. act.

<機能> *kṛṇāvāmā* (主文): 勧誘

*éta ... subj.* 1pl. [+ accent] の構文については, A 2.1 を参照。

<sup>385</sup> Pāda の最終音節における -ā の鼻音化については, X 34,5 を参照。この現象が Pāda の内部で見られるのは, OLDENBERG Proleg. 470 によれば, -ā と次の母音とがそれぞれ韻律上異なる単位に属する場合に限られるという。ここでも -ām # ṛṇu- は, opening と break との境界である。

<sup>386</sup> OLDENBERG Noten ad loc., GELDNER ad loc. は, yá を instr. (=yáyā) と考え, mātām を Uṣas とする。しかしここでは, HOFFMANN 164 n. 113 に従い, yá を語形通り dhíyam を受ける nom.sg. と考えた。つまり dhí- は, Pāda b では行為の主体として, Pāda cd では手段として表されていることになる。その場合, Pāda b の関係節 (ṛṇutá inj.) は dhí- の普遍的な性質を表し (HOFFMANN loc. cit.), 一方 Pāda cd の perf. ind. は過去の出来事の確認 (Konstatierung) として機能していると考えられる。KÜMMEL Perf. 119 は āpā に “faktisch” (= “konstatierend”, cf. 77f.), または “komprehensiv” (現時点を含まない, 現在までの継続, cf. 73ff.) を想定。

## V 48,1

*kád u priyāya dhāma<sub>a</sub>ne manāmahe svākṣatrāya svāyaśase mahé vayám |*  
*āmen<sub>i</sub>yāsya rájaso yád abhrá ām<sup>387</sup> apó vṛṇānā vitanóti māyīni ||*

さて、何を、好ましい定位置のために<sup>388</sup>、考え出すべきか (aor. subj.)。

自らの支配権を持つ、自らの名声を持つ、偉大な〔定位置〕のために、われわれは。

〈妾を持たない／計り取られるべき (?), 空間に属する雨雲の中に  
 魔力 (計算能力) を備えた〔夜／大地?〕が、水を選んで張り巡らす (配置する) 時に (pres. ind.)。〉<sup>389</sup>

*manāmahe*      *man* 「-s-aor.: 思われる／root-aor.: 思念する」      root-aor. 1pl. mid.

<機能>      *manāmahe* (疑問文): 義務

## V 50,5#

*eśa te deva netā rāthaspātīḥ śām rayīḥ |*<sup>390</sup>

<sup>387</sup> = ā → X 34,5 注を参照。

<sup>388</sup> *dhāman-* はここでは天と地の間、つまり中空のことを言っており (Pāda cd を参照), 一切神 (当 Sūkta の対象), 或いはヴァルナの居場所として考えられていると思われる, cf. VII 87,2 *antār mahī bṛhatī ródasimé víśva te dhāma varuṇa priyāni* 「この偉大な, 高い天地両界の間に, 君の, ヴァルナよ, 好ましい定位置たちがある」。

<sup>389</sup> Pāda cd の文意は明らかではない: Pāda c *āmenyā-* hap.leg., 語形・意味ともに不明。OLDENBERG Noten ad loc. 及び GELDNER ad loc. は, *ā-may* の intens. gerd. *\*āmemya-* 「傷つけられるべき」が dissim. を受けた形を想定する, cf. *carkṛtya-* 「誉め称えられるべき」。形の上では他に, *ā-mā (mimīte)* の *-enya-* 派生形: *\*ā-mH-enya-* 「計り取られるべき (?)」(ただしアクセントは通常 *-énya-*), 或いは *amenā-* 「妾 (*ménā-*) を持たない」からの *Vṛddhi* 形 (意味は同じ?, 以下参照) が考えられる (但し否定辞 *a-* を前半要素とする複合語から *Vṛddhi* 形が作られる場合, 接尾辞 *-ya-* を伴わないのが普通: *āmitrā-* 「非同盟者 (*amitra-*) に属する」, WACKERNAGEL/DEBRUNNER II 2 120)。—— Pāda d *māyīni* f. が何を指すかは不明。冷氣を伴う「夜」(*nākt-, rātrī-*), 或いは, 地上の水分 (水蒸気) を上空へ送り出すものとして「大地」(*prthivī-*) の可能性が考えられる (大地は天とのみ一組をなすので, 「妾を持たない」の形容詞が最も相応しい, 上記参照)。Uśas 「曙光」(OLDENBERG Noten ad 1,2) は無理。GELDNER ad loc. は Say. に従い中空に響く「雷鳴」を想定し, V 63,6 を参考に挙げる: *vācam sū mitrāvaruṇāv īrāvatiṃ parjanyaś citrām vadati tvīṣimatīm | abhrā vasata marútaḥ sū māyā dyām varṣayatam aruṇām arepāsam* 「パルジャニヤは, ミトラ・ヴァルナよ, 滋養に富む, 輝かしい, 荒れ狂う言葉 (i.e. 雷鳴) を, しかと発する。マルトたちは, 魔力によって雨雲たちを, しかと纏う。汚れの無い赤みがかった天に, 君たち両者は雨を降らせよ」

<sup>390</sup> Pāda a, b はいずれも 7 音節, cf. GELDNER ad loc. *netā* は 2 音節; RV の新しい層において, *netār-/netṛ-* が二次的に 3 音節になる場合については, TICHY -tar- 35f. を参照 (cf. OLDENBERG Noten ad loc. “*nētaḥ*”, Proleg. 38 n. 3)。

*sám rāyē sám s<sub>u</sub>vastāya iṣastúto manāmahe devastúto manāmahe* ||

この、戦車の主人が、天に属する導き手よ<sup>391</sup>,

君のもので(あれ)、首尾よく、財[である神]が(君のもので)(あれ)<sup>392</sup>。

首尾よく、財のために、首尾よく、安寧のために、

諸々の滋養を称える者たちとして<sup>393</sup> 我々は思念しよう/[詩歌を]考え出そう(aor. subj.)。

神々を称える者たちとして、我々は思念しよう/[詩歌を]考え出そう(aor. subj.)。

*manāmahe* (2x)    *man* 「-s-aor.: 思われる/root-aor.: 思念する」    root-aor. 1pl. mid.

<機能> *manāmahe* (主文): 意志表明

nom. (=話し手) + *man* root-aor. 「～として思考する/[詩歌を]考え出す」については、VIII 61,11, I 26,8 を参照。

## V 51,12

*s<sub>u</sub>vastāye vāyūm úpa bravāmahai sōmaṃ s<sub>u</sub>vastī bhūvanasya yás pátih* |

*bṛhaspátim sárvagaṇaṃ s<sub>u</sub>vastāye s<sub>u</sub>vastāya ādityāso bhavantu naḥ* ||

[我々の] 無事のために、ヴァーユに、我々は話しかけよう(pres. subj.)。

生類(世界)の主人であるソーマに、[我々の] 無事のために<sup>394</sup>,

<sup>391</sup> 恐らくサヴィトリのこと, GELDNER ad loc.

<sup>392</sup> Pāda b *rayīḥ* は, *rāthaspátih* と同様, 神格化された存在を示していると思われる, cf. OLDENBERG Noten ad loc. + n. 2)。これらはいずれも, 神格の列挙において Bhaga と並んで現れることが多い: X 64,10; 93,7 (*rāthaspátir bhágah*), VIII 31,11, IX 101,7 (*rayír bhágah*), V 41,11 (*rāyē ... bhágāya*)。 *rayīḥ* は Bhaga の別称である可能性もある, V 41,11 注を参照。一方 Pāda c *rāyē* は, *svastāye* とともに, 普通名詞として理解した。導き手である神が, それぞれ戦車(戦争を象徴)と財産とを司る神格を伴って, 詩人たちの集団に財と安寧とをもたらすよう要求しているものと思われる, cf. OLDENBERG loc. cit.

<sup>393</sup> *iṣastútaḥ* < *iṣaḥ-stútaḥ* (Padapāṭha)。前半要素は *īṣ-* の acc.pl., cf. WACKERNAGEL/DEBRUNNER Nachtr. ad I 343, 194.

<sup>394</sup> *svastī* は Pāda a,c *svastāye* と同様, dat. sg. として機能していると思われる, LANMAN Inflexion 383, GRASSMANN s. v. (後続の第 13 詩節 Pāda d に見られる *svastī* は, 同詩節 Pāda a,b,c *svastāye* にも関らず, Inhaltsakk. 或いは adv. として理解可能: V 51,13 *s<sub>u</sub>vastī no rud<sub>u</sub>rāḥ pāt<sub>u</sub>v āñhasaḥ* 「ルドラは, 我々を困窮から守って無事となせ/無事に守れ」)。この語形の理解には, SCHINDLER *cvi*-Bildungen 391 による dat.sg. *utī* (f. *utī*-) の考察が有用である。それによれば, *utī* (*utī*- instr.sg.) *bhav*/*bhū* 「助力を伴う > 助けになる」という表現 (cf. II 11,13 *utī* [as] 「助力を伴う > 助けを得る」) が, 類似の表現 *utāye* (dat.sg.) *bhav*/*bhū* 「助けになる」の影響を受けた結果, *utī* が dat.sg. としても解釈されるに至ったという, cf. WACKERNAGEL/DEBRUNNER III 150。dat.sg. *svastī* も, 恐らくこれへの類推作用によって instr.sg. *svastī* (=

完全な群れを伴う、ブリハस्पティに、[我々の] 無事のために。

[我々の] 無事のために、アーディティア神たちは、我々のものになれ (pres. iptv.)。

*úpa-bravāmahai* *brav/brū* 「話す, 語る」 root-pres. 1pl. mid. (possess.-affekt.)

<機能> *úpa-bravāmahai* (主文): 意志表明

### V 54,1

*prá śárdhāya mārutāya svābhānava imāṃ vācam anajā parvatacyúte |*  
*gharmastúbhe divá<sup>395</sup> ā pr̥sthayáivane dyumnáśravase máhi nṛṇām arcata ||*

自らの輝きを伴う、マルトたちからなる一群に

この言葉を、私は塗り飾ろう (pres. subj.), 山を揺り動かす [一群] に<sup>396</sup>。

天から、熱によって歓声を挙げる<sup>397</sup>, [天の] 背の上で祭りを為す,

明るさを聞こえ (名声) として持つ [一群] に、大いなる男気を、君たちは歌え (pres. iptv.)<sup>398</sup>。

*prá ... anajā* *añj/aj* 「塗る」 nasal preṣ. 1sg. act.

*svastí*, LANMAN op. cit. 380f., WACKERNAGEL/DEBRUNNER III 146) から再解釈されたものと推察される。また同書 (loc. cit. n. 19) によれば, instr. *svastí-* は中性名詞 *svastí-* をも生み出す原因になったという, V 16,5 を参照。これらのことから *-i-* 語幹名詞の f. instr. sg. *-í/i* は, 格表示機能に関しては, 他の特徴的な語尾 *-yā* に比べて極めて不安定であり, 再解釈の可能性を多分に孕んでいたと言える。また, RV において *-i-* 語幹 adj. m. instr. sg. の語尾が, *-yā* から *-inā* に移行する傾向が強いことも, *-yā* が f. instr. sg. 専用の語尾として確立しつつあったことを示すと思われる。

一方, *svastí-* に非活用のパラダイムが併存していた可能性も否定できない。*svastí-* は本来, *su-* と動詞 *nas, nása-te* 「(家に) 集う, 団欒する」の *-ti-* 派生名詞 (f.) とからなる Tatpuruṣa であるが (*svastí- < \*h<sub>1</sub>su-ns-tí-* 「よき無事の帰還」, GOTÖ 200, 後藤 *Aśvin-* 980 [75]), これが既に *su + ásti* (動詞 *as* の pres. 3sg. act.) として再解釈されていたとすれば (cf. WACKERNAGEL/DEBRUNNER II-1 123, II-2 638), *svastí* が語幹のまま dat. sg. として用いられている可能性も残る。

<sup>395</sup> OLDENBERG Noten ad loc. に従い, *divāḥ* は, *gharmastúbhe divá ā* 「天から…歓声を挙げる」と, *divá ... pr̥sthayáivane* 「天の背の上で…」の両方の構造にかかるものと理解した。

<sup>396</sup> *cyav/cyu* の現在語幹 *cyáv-a-te* (act. *cyávam* については I 3.2.1 を参照) は自動詞で「(揺れ) 動く」, 他動詞で「執り行う」を意味するが, ヴェーダ語で複合語後半に現れる *-cyút-* は, 前者に対する使役的 (他動詞的) な意味「(揺り) 動かす」(caus. *cyāváyā-* に対応) を表わす, GOTÖ 144 n. 199。

<sup>397</sup> 熱せられた水蒸気が空へ上がり, それがまた雨となって降り注ぐことから, 暴風雨神であるマルトたちは, 上がってきた熱 (水蒸気) を喜ぶ者たちであると言える。

<sup>398</sup> 詩人が自分自身に対して命令している。このスタイルについては, I 3.1.2 を参照。

<機能> *prá ... anajā* (主文) : 意志表明

#### V 54,15#

*tád vo yāmi dráviṇaṃ sadyaūtayo yēnā sāvār nā tatānāma nṛ̥mr abhí |*

*idāṃ sú me maruto haryatā váco yásya táremā tárasā śatām hímāḥ ||*

君たちに、その財産を、私は請う (pres. ind.), すぐさま助力をもたらす者たちよ、それによって、太陽光が の如く、(他の) 男たちを、我々が圧倒して広がっていることになるところの／なるように (perf. subj.)<sup>399</sup>。

しかと、私のこの言葉を、マルトたちよ、君たちは悦べ (pres. iptv.), その遂行力によって、百の冬たちを、我々が乗り越えることが出来るように (pres. opt.)。

*tatānāma ... abhí tan* 「張る、延ばす；延びる」 perf. 1pl. act.

*tan* の perf. subj. は全て、完了語幹の意味「達成された状態」「広がっている」に基づくという (KÜMMEL Perf. 208)。ただし、総論への補説 1 も参照。

<機能> *tatānāma ... abhí* (限定的関係節) : 見込み

限定的関係節 (*tád ... dráviṇaṃ ... yēnā ... tatānāma*) は、事実上主節の事態の目的に当たる, cf. X 156,2, I 192,13, VIII 27,22, IX 101,9, I 160,5. 同様に目的を表わし得る同格の関係節との構造上・意味上の違いについては、B 2 及び 2,2 を参照。

#### V 56,8

*ráthaṃ nú mārutaṃ vayāṃ śravasyúm ā huvāmahe |*

*ā yásmin taṣṭháu surāṇāni bíbhrati śacā marútsu rodasí ||*

今、マルトたちに属する戦車を、われわれは

<sup>399</sup> *abhí-tan* については VI 49,15 注を参照, cf. I 160,5. 「諸部族を圧倒する」の表現については, IX 101,9 注を参考にせよ。

呼び寄せよう (aor. subj.), 名声を求める [それ] を,  
それに, よき喜びたちを担う両者, 天地両界が,  
マルトたちと一緒にあって, 乗り込んでいるところの。

*ā-huvāmahe*      *hav<sup>i</sup>/hū* 「呼ぶ」      zero-gr. them. aor. 1pl. mid.

*hav<sup>i</sup>/hū* は, *-āya-pres. hvāya-<sup>ti</sup>*, full-gr. them. pres. *háva-<sup>te</sup>*<sup>400</sup>, そして zero-gr. them. aor. *huvá-/h<sub>(u)</sub>va-* (*huvé, áhuve, áh<sub>(u)</sub>vat áh<sub>u</sub>vāma* etc.)<sup>401</sup> を形成する。しかし, 昔から *huvá-/hva-* の一部に別の現在語幹 (zero-gr. them. pres.: 「第六類動詞」) を認める考えがあったことや, またこれ以外にも一連の root-pres. と思しき諸語形 (*hūmáhe, áhūmahi, huvāná-*) が見られることが, 事態を複雑にしている。*huvá-* に現在語幹を想定するのは, 恐らく *huvé, huvāmahe* が現在直説法の意味で理解されることに依拠している: 「神々を (今ここに) 私/我々は呼んでいる」 (Koinzidenzfall)。しかし GOTÖ 349f. は, *huvé* が zero-gr. them. aor. inj. としても同じ機能で理解され得ることを示した上で, この機能的な共通性ゆえに, *bruvé, \*brūmáhe, \*abrūmahi, bruvāná-* といった root-pres. への類推が起こり, *huvé, hūmáhe, áhūmahi, huvāná-* が新たな一つのパラダイムとして人工的に形成された可能性を指摘している。この説明によって, 無駄に現在語幹 *huvá-* を設定する必要が無くなるのみならず<sup>402</sup>, 上記の *hūmáhe* 等の諸語形が, *huvá-* を除いて RV のみに限られるという事実 (loc. cit.) についても, 整合性のある理解が得られる<sup>403</sup>。以上の理解に基づけば, RV で二度例証されている *huvāmahe* は, いずれも接続法の意志表明の機能によって理解可能であることから, aor. subj. 1pl. mid. として同定される。その際, pres. ind. 「我々は (今ここに) 呼んでいる」と subj. 「(これから) 我々は呼ぼう」とが, 文脈上区別不可能であることを考えれば, むしろ *huvāmahe* も, 現在語幹への類推作用の一端を担ったと言うことが出来よう。更に aor. subj. *huvāmahe* の存在は, 同じ zero-gr. them. aor. *sicāmahe* とともに, 幹母音幹の subj. 1pl. mid. が, pres. ind. と混ざる危険の無いアオリスト幹でのみ, 通常の第一語尾を用いる (cf. pres. subj. *yājāmahai*) という形態論的考察を支持するものであろう → I 2.3.5。

#### <機能> *ā-huvāmahe* (主節): 意志表明

話し手の意志表明は, 直後の最終詩節で実現されるものとして述べられている: V 56,9# *tām*

<sup>400</sup> *háva-<sup>te</sup>* は祭式において神々を呼び寄せる場合に特化された用法を示すが, *hvāya-<sup>ti</sup>* にはそのような限定はない, GOTÖ 348 + n. 858。

<sup>401</sup> *-huv/h<sub>(u)</sub>v-* の音価及び正書法の違いは, いずれも二次的な発展と考えられる, GOTÖ 349。

<sup>402</sup> RV *juhūmāsi* については, GOTÖ 350 n. 861 を参照。

<sup>403</sup> ただし現在でも, *huvá-* を現在語幹とする考えは根強く, その場合自ずとアオリスト語幹の設定も異なる, cf. LUBOTSKY Concordance II 1658ff., RIX LIV<sup>2</sup> 180f. + n. 2 (M. KÜMMEL)。

*vaḥ śārdhaṃ ratheśúbhaṃ tveṣām panasyúṃ á huve | yásmín sújātā subhágā mahiyáte sácā marútsu mīdhuṣī* 「戦車の上で華やぐ、君たちのその一群を、私は（ここに）呼び寄せている（aor. inj.: Koinzidenzfall）、荒ぶる、驚嘆すべき様をした〔一群〕を、その中で、よき生まれの、よき天分持つ、報酬を払う両者（天地両界）が、マルトたちと一緒にあって、敬われるところ」。

# V 60,6

*yád uttamé maruto madhyamé vā yád vāvamé subhagāso divi śthá |*

*áto no rudrā utá vā nāv āsyā- agne vittād dhavīso yád yājāma ||*

天の最上に、マルトたちよ、或いは真中に、

或いは最下に、君たちが居ようとも（pres. ind.）<sup>404</sup>、よき天分持つ者たちよ、

そこで、ルドラ（の子）たちよ、我々の——或いはまた今、アグニよ<sup>405</sup>——この<sup>406</sup>

供物のことを知れ（perf. iptv.），我々が（君たちを）祭ることになる時には（pres. subj.）<sup>407</sup>。

<sup>404</sup> *yád (vā) ... yád (vā) ...* 「・・・であっても、或いは・・・であっても」、cf. HETTRICH 375–385 “Konditionalsätze mit mehrfacher Protasis (mmP)”. 意味的・構造的には *yád* 節どうしの接続であるが、実際の選択対象句だけが一つの *yád* 節内で句接続に簡略化される場合も多い。当箇所においても、後者 (*yád X ... Y vā*) と前者のタイプとが (*yád X ... yád vā Y*) 混在して見られるが、三つの要素 *uttamé, madhyamé, avamé [divi]* が意味的に同じレベルで並んでいるのは明らかである、KLEIN Disc.Gram. II 176f. Cf. I 108, 7 *yád indrāgni mādathah své duroṇé yád brahmāni rājani vā yajatra | átaḥ pári vṛṣaṇāv á hí yātām áthā sómasya pibataṃ sutásya* 「インドラ・アグニよ、自分の住処で君たち両者が酔っているにせよ、ブラフマン祭官のもとで、或いは王のもとで [酔っているにせよ]、祭るに相応しい両者よ、そこから、両雄牛たちよ、こちらへこそやって来い。そうして 搾られたソーマの [中から]、君たち両者は飲め」。更に HETTRICH 376ff., KLEIN op. cit. II 173ff. を参照。

<sup>405</sup> KLEIN Disc.Gram. I 283 は当箇所を、*utá* が二つの *voc.* をつなぐ例とする、cf. V 46,2 # *śārdhaḥ ... mārutoṭá viṣṇo*, X 53,4 # *úrjāda utá yajñiyāsaḥ* (II 29, 3 *mitrāvaruṇādite ca* も比べよ) しかし、*voc.* に限らず *X utá Y* の構文では、*utá* と *Y* とが異なる *Pāda* に跨がる用例は他に見られない、op. cit. I 299 + n. 28. ここではむしろ、詩人が Marut たちへの命令を言いかけてから、目の前にいる Agni への命令を挿入したものと考えられる。つまり、背景に二つの命令文が想定されるので、*utá vā* による通常の文接続 (op. cit. II 195ff.) が理解される。堂山 *Ṛgveda V 60,6* (2003) を参照。

<sup>406</sup> *vittād* の目的語 (*asyā... havīso*) に *asyā/asya* のいずれを想定すべきかは、*Samdhi* のため断定できない。DELBRÜCK 28f.によれば、代名詞 *a-* が形容詞の時是有アクセント (deiktisch)、実体詞の時是有アクセント (deiktisch/stark anaphorisch) もしくは無アクセント (schwach anaphorisch) である。これに対し OLDENBERG Kl.Schr. 259 + n. 2 は形容詞の無アクセント形 (deiktisch) を認め、当該詩節でも Pp. に従い *asya* の可能性を指摘する。しかし OLDENBERG は *yád yājāma* に関係節を想定しているため (次注)、この箇所は根拠とはならない。DELBRÜCK に従い *asyā* を想定するのが自然と思われるが (「他ならぬ我々のこの供物」)、*asya* の可能性も排除できない。I 110,6 も比べよ。

<sup>407</sup> 従来、*yád yājāma* は *havīso* にかかる関係節、*havīso* は *yājāma* の目的語と解されてきた (e.g. GELDNER “... von der Opferspende, die wir weihen wollen”, RENOU EVP “... oblation-ci que nous offrons”). しかし *yaj* 「称讃する、祭る」の目的語 (acc.) は通常、称えられる／祭られる神々或いはこれに準ずる対象であり、その他が acc. に置かれる場合は全て Inhaltsakkusativ (*yajñām, adhvarām, °yājām, ṛtām, hotrām* etc.)

*yājāma*                      *yaj* 「称讃する, 祭る」                      full-gr. them. pres. 1pl. act.

<機能> *yājāma* (時を表わす *yád* 節): 見込み

*yājāma* の具体的内容として, 「この供物」=ソーマは直後に神々に献ぜられている: 7 *agnís ca yán maruto viśvavedaso divó váhadhva úttarād ádhi śnúbhīḥ | té mandasānā dhúnayo riśādaso vāmām dhatta yājamānāya sunvaté* 「アグニと, あらゆることについて知っているマルトたちよ, 天の上方から [天の] 背中たちの上を通して君たちが進む時 (pres. ind.: i.e. 「現に進みつつある今」), その, 酪酊を伴う, 響きわたる [君たち] は, 食物をむしり取る者たちよ (?), [ソーマを] 搾りつつある祭主のために好ましいものを定め置け (pres. iptv.)」; 8ab *agne marúdbhīḥ śubháyadbhir íkvabhīḥ sómam piba mandasāno gaṇasríbhīḥ* 「アグニよ, 自らを飾る, 讃歌を歌う, 群れ (として) の華々しさを持つマルトたちとともに, ソーマを飲め (pres. iptv.), 酪酊を伴う [君] は」。

### V 66,3

*tá vām éše ráthānāām urvīm gavyūtim eṣāām |*  
*rātāhavyasya suṣṭutīm dadhīk stómair manāmahe ||*

その, 君たち両者 (ミトラ・ヴァルナ) に, [我々は求める], 戦車たちを追いかけて (て分捕) ることにおいて<sup>408</sup>,

それらの (ための), 幅広い牧草地を。<sup>409</sup>

ラータハヴィア (詩人=話し手) の, よき称讃を<sup>410</sup>

によって理解される (「～を捧げる, 献じる; ～を神聖視する, 聖別する; ～を祭式によってもたらす」等の意味は存在しない, cf. GELDNER 訳 *passim*, GRASSMANN 1070 u. v. *yaj*, GAEDICKE Akk. 119 + 49 n.\*\*). よって, *yád yājāma* が *haviṣo* 「供物」を受ける関係節であるとは考えられない。更に, 主文の *iptv. II vintād* は未来の時の指定を前提とするため (cf. DELBRÜCK 363f.; Die altindische Wortfolge 2ff., HOFFMANN Aufs. II 369, FORSSMAN Gram.Kateg. 184), *yád yājāma* は時を表わす従属節として最もよく理解される。その際, *yaj* の目的語には, ここで呼びかけられているアグニ, マルトたちが補って理解される。*yaj* の意味と格支配及び *iptv. II* の機能による, 当詩節の詳細な解釈については, 堂山 *Rgveda V 60,6* (印佛 2003) を参照。

<sup>408</sup> *éša-* は *eṣ/īṣ* (*īṣyati*) ではなく, *eṣ/īṣ* (*icchāti*) に属する: 「求めること」, OLDENBERG Kl.Schr. 286f., GOTÖ Material. (1993) 127 + n. 56, cf. GELDNER “im Rennen der Wagen”, ad loc. “... das Subst. zu dem Adj. *eṣá* [「急いだ, 急いた」] ... mit bekanntem Akzentwechsel.” (ただし GELDNER は, 次の箇所では「求めること」と訳している: V 41,5, 8 *rāyá éše* ‘im Streben nach Reichtum’, X 48,9 *gávām éše* “auf der Suche nach Rindern”。

<sup>409</sup> *Pāda ab* は *Pāda cd* の比喩表現であり, *rātha-* は *suṣṭutī-* (或いは *stóma-*) のことを指す (GELDNER ad loc.)。またよき称讃を考え出すための (言葉の) 源を「幅広い牧草地」と呼んでいると思われる。

<sup>410</sup> アトリ家の *Rātahavya* は当 *Sūkta* の詩人の名前。ここでは彼自身の名を 3 人称に置き, 詩歌を歌う

頌歌たちによって<sup>411</sup>, 大胆に, 我々は考え出そう (aor. subj.).

*manāmahe*      *man* 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」      root-aor. 1pl. mid.

<機能> *manāmahe* (主文): 意志表明

### V 73,10

*imā brāhmāṇi vārdhanā- aśvibhyāṃ santu śāntamā |*

*yā tākṣāma rāthāṃ ivā- avocāma bṛhān nāmaḥ ||*

この 言葉の霊力たちが

両アシュヴィンにとって 最も幸ある 増強薬たちで あれ (pres. iptv.)<sup>412</sup>,

それら (増強物たち) を 戦車たちを のように, 我々が形作ることになるように (aor. subj.).

我々は (言葉にして) 語った (aor. ind.), 高大なる敬意を。

*tākṣāma*      *takṣ* 「工作する, 形作る; 仕上げる」      them. aor. 1pl. act.

*takṣ* は root-pres. *tāṣṭi* (AB, ind. 3sg.), *takṣati* (ind. 3pl.) :: them. aor.: *ātakṣat* (3sg. ind.) を形成するので (NARTEN 124ff.), *tākṣāma* は形態上, aor. inj., aor. subj., pres. subj. の三つの可能性を持つ。しかしこの中で幹母音幹の 1pl. inj. は, 恐らく subj. との同形を避けるため, 第二語尾 *-ma* を取ることはない<sup>413</sup>, cf. HOFFMANN 143 n. 73, 254. 残る aor. subj., pres. subj. のうち, 当箇所想定される *resultativ*, *Konstatierung* といった要素とアオリスト語幹との強い結びつきから (<機能>を参照), ここでは aor. subj. としての理解が優先される。

<機能> *tākṣāma* (同格的関係節): 見込み

当詩節は *Sūkta* の最後であり, *imā brāhmāṇi* は第 1-9 詩節を指していると考えられる。RV では, *Sūkta* の最後に, それまでの詩節が *brāhmaṇ-* として歌われたことを aor. ind.

行為を, 彼を含む詩人/祭官全体の意志として表現している。

<sup>411</sup> よき称讃を (*suṣṭutīm*) 頌歌の形にして (*stómair*) 考え出す (発語する) ことを意味する, cf. VII 66,12 *tād ... manāmahe sūktāir*.

<sup>412</sup> dat./gen. + *brāhmaṇ-* + *vārdhana-* + *as*, *bhav'*/*bhū* については, VIII 62,14 を参照。

<sup>413</sup> ただし *mā* + inj. の構文では例証されている: e.g. I 94,1 *mā riṣāma* them. aor. → I 2.3.2.

(“aktuelle Vergangenheit”, HOFFMANN 219f.) によって確認する場面が随所に見られる<sup>414</sup>。NARTEN 125 は当箇所でも同様に、既に作られた *bráhman-* を想定し, *tákṣāma* を “resultativer Inj.Aor.” として説明している: ‘diese Brahmas, die wir wie Wagen zubereitet haben’。しかし上で見たように, *tákṣāma* が inj. 語形である可能性は極めて低い。それに加えて, HOFFMANN 214-219 によれば, inj. aor. が過去に関して使われるのは, 過去に起こった出来事の結果が現在そして未来にまで影響し続けることを確認する時であり (“resultative Konstatierung”), その用例は全て神話上の出来事に限られている<sup>415</sup>。従って, ここで直前に歌ったばかりの *bráhman-* を形容するために aor. inj. が用いられる可能性は低い (aor. ind. が予想されるところである)。また, *imá bráhmāni* (=第 1-9 詩節) を受ける関係節の中に aor. inj. “generell” を想定することも, 同様に難しい。

*tákṣāma* は, 形の上からも (上記参照), 以下の統辞的理由からも, subj., しかも aor. subj. と理解すべきである。関係節 *yá tákṣāma ...* は *várdhanā* にかかり, 主節の命令 (*imá bráhmāni várdhanā ... santu*) が実現した結果起こる未来の事態, もしくは主節の目的を表すと考えられる: 今詩人たちが作った *bráhman-* が両アシュヴィンの *várdhana-* である (となる) なら, 即ち彼らは *várdh°* を作ったのと同じことになる<sup>416</sup>。同格的関係節に subj. が用いられ

<sup>414</sup> 例えば: VII 70,7# *imá bráhmāni yuvayún,y agman* 「これらの *bráhman-* たちが, 君たち両者を求めて行った (aor. ind.)」, I 61,16# *evā te hāriyojanā suvṛktī- indra bráhmāni gótamāso akran* 「こうして, ハリ繋ぎに属する者よ, 君のために, よき歌によって, インドラよ, *bráhman-* たちを, ゴータマたちは (今ここに) 形作った/仕上げた (aor. ind.)」, V 29,15# *indra bráhma kriyāmānā juṣasva yá te saviṣṭha áviyā ákarma | vāstrevā bhadrá súkṛtā vasūyú rátham ná dhīraḥ s.vápā atakṣam* 「インドラよ, *bráhman-* たちが作られたつあるのを君は喜べ, 君の為に, 最も強大な者よ, 新しく (新しいものとして) 我々が (今ここに) 形作った/仕上げた (aor. ind.) とする。幸ある, よく作られた着物たちを のように, 財物を求めて (*bráhman-* を) 私は (今ここに) 形作った/仕上げた (aor. ind.), 思慮深い, よい仕事をすする者が戦車を のように」, IV 16,20-# *evéd indrāya ... bráhmākarma* (aor. ind.), IV 16,21# *ákāri* (aor. ind. mid.-pass.) *te ... bráhma návyam* (cf. I 63,9#)。上掲 V 29,15 と同様に *takṣ* を使った例として: I 62,13-# *sanāyaté gótama indra návyam átakṣad bráhma hariyójanāya* 「古くからあるハリ繋ぎのために, ゴータマは, インドラよ, 新しい *bráhman-* を (今ここに) 形作った/仕上げた (aor. ind.)」, X 39,14# *etám vām stómam ásvināv akarmā- átakṣāma bhṛḡgavo ná rátham* 「君たち両者のために, この頌歌を, 両アシュヴィンたちよ, 我々は (今ここに) 作った (aor. ind.), 我々は (今ここに) 形作った/仕上げた (aor. ind.), ブリグたちが戦車を のように」 (更に II 31,7 *átakṣan* を参照)。また, A 1.2.3 a) 及び 同 c) も参照。

<sup>415</sup> E.g. I 64,4 *agnír bhuvad rayipátī rayinām* 「アグニは, 財たちの, 財の主となった (なっている)」, VII 4,4 *márteṣu agnír amṛto ní dhāyi* 「アグニは死すべき者たちの中に, 不死なる者として据え置かれた (置かれている)」, X 73,1 *jāniṣṭhā ugrāḥ sáhase turāya* 「(君, インドラ) は生まれた (生まれて存在している), 強靱な者として, やり遂げる克服力の為に」。

<sup>416</sup> HOFFMANN 254 も *tákṣāma* を subj. と理解するが, *imá (bráhmāni)* を「この様な, この種の」と解することによって, 主文の命令 (*santu*) にも, よって *yá tákṣāma ...* にも, 当 Sūkta に限定されない未来の事態を想定している (同書はまた, *tákṣāma* が inj. の場合には, 関係節が一般論を表わす可能性を示唆する: 「我々が (いつでも) 形作るところの」)。—— op. cit. 226 は, 代名詞 *imá* が「この様な」を表わす例として次の詩節を引く: X 148,4-# *imá bráhma, indra túbhyaṁ śaṁsi dā nṛbhiyo nṛṇām śura sāvah* ‘solche Brahman-Worte wie diese (eben gesprochenen) werden nur für dich (immer wieder) zum Vortrag gebracht’ 「[この (今まさに話された) ような Brahman の言葉たちが, インドラよ, 君だけのために (何度でも) 公言される (aor. inj. mid.-pass.)]。男たちに, 男たちの漲る力を, 勇者よ, 君は与えよ」。しかしここでも *imá* を文字通り, 今話した *bráhman-* そのものと考えるなら, inj. に Koinzidenzfall を想定することも可能と思われる: 「これらの *bráhman-* たちが今ここに公言されている」, cf. MUMM Verba et

る場合、殆どが目的節と同等の価値で使われているという事実も、この解釈を裏付ける、HETTRICH 671ff.: “finalsatzäquivalent”。中でも、[主節:] iptv. + [関係節:] subj. はその典型的な構造の一つである<sup>417</sup>、→ B 2.1。一方、[主節:] iptv. + [関係節:] inj. の用例では (cf. V 49,5, VI 43,1, VIII 63,12, X 29,5; 148, 1), inj. はいずれも resultative Konstatierung 或いは generell を表し、*imá* のように発話時点に限定された語句にかかることはない。

以上の解釈に従えば subj. *tákṣāma* は、未来において「形作る」ことではなく、未来において「(既に) 形作ったこと」を確認していることになる。つまり接続法が、いわば、過去の出来事の結果を未来において確認する機能 (“resultative Konstatierung in Zukunft”) を持つ可能性が考えられる。この仮定に基づけば、*tákṣāma* にはアオリスト語幹が最もよく想定されよう。「(過去の) 結果の確認」の機能は、現在語幹には認められないからである。こうして、未来における過去を確認する aor. subj. と現在における過去を確認する aor. inj. とは、確認の時点だけを異にしていることになる。この差は、未来を対象にする subj. と発話時に強く結びついた aor. inj. (Koinzidenzfall, unmittelbare Zukunft) との違いに帰せられるであろう。一方、両方に共通する「過去の結果の確認」は、aor. 幹の持つ、行為を全体として捉えるアスペクト (全体観) から導かれ得るものと思われる。以上の統辞的な考察により、*tákṣāma* はアオリスト語幹に属するものと判断される。

## V 75,2

*atīyāyatam aśvinā tiró viśvā ahām sánā |*

*dāsra hiraṇyavartanī sūsumnā sīndhuvāhasā mādhvī māmā śrutam hāvam ||*

越えて、君たちはやって来い (pres. iptv.), 両アシュヴィンたちよ、

一切の [歓迎歌] <sup>418</sup>たちを通り抜けて; わたしが [君たちを] 勝ち取ろう (aor.subj.). <sup>419</sup>

驚くべき両者よ、金の軌道を持つ両者よ、

Structurae (1995) 181 (但し HOFFMANN 251–253 には、1sg. inj. 以外の Koinzidenzfall は報告されていない)。KÜMMEL Stativ 108f. + n. 207 は、Pāda b inj. *dāh* が iptv. の代わりに使われていることから (HOFFMANN 262), *saṁsi* にも同様の機能 (「公言されよ」) を想定する (但し HOFFMANN 255–264 には、aor. inj. mid.-pass. に iptv. の機能が想定される例は報告されていない)。しかし、当箇所が Sūkta の終わりに近いことを考慮すれば、ここでそのような命令がなされるよりもむしろ、現に今詩人たちによって言葉が発せられている (Koinzidenzfall) と考える方が自然であろう。

<sup>417</sup> X 113,10, I 8,2, VIII 60,12 及び HETTRICH loc. cit. の用例を参照。

<sup>418</sup> 他、同様にアシュヴィン双神を迎え入れようとしている者たちの歌、言葉のことと思われる。

<sup>419</sup> Cf. III 35,5 *atīyāhi śāsvato vāyām té 'aram sūtēbhiḥ kṛṇavāma sōmaiḥ* 「彼らを、次々と越えて、君 (インドラ) はやって来い (pres. iptv.)。われわれは、君に搾られたソーマたちによって相応しく仕えよう (pres. subj.)」

よき善意を持つ両者よ、スインドゥ〔河〕を乗り物とする両者よ、  
蜜に属する両者よ、わたしの呼び掛けを、君たち両者は聞け (pres. iptv.)。

*sānā*                      *san*<sup>i</sup> 「勝ち取る, 獲得する」                      them. aor. 1sg. act.

幹母音幹であるが、代名詞 *ahām* の存在から iptv. 2sg. act. としての解釈が成立たないため, subj. 1sg. act. と理解される (cf. VIII 74,13 *mṛkṣā*) → I 3.1. VIII 61,9 *ahamsana-* (voc. *āhamsana*, i.e. *indra*) 「我こそは勝ち取ろうとする者」は, 恐らく当箇所 *ahām sānā* の構造が名詞化されたものと思われる, GELDNER ad loc., WACKERNAGEL/DEBRUNNER III 437, Nachtr. ad II-1 327: p. 91, cf. PW s. v., OLDENBERG Noten ad loc.<sup>420</sup>

<機能> *sānā* (主文): 意志表明

詩人は, 他の場所で行われている祭式との間で, アシュヴィン双神の取り合いをしている。*ahām sānā* は, 彼らを味方に付けるのは他ならぬ自分であることを強調して宣言しているか或いはアシュヴィン双神に宛てて予告しているものと思われる。*sānā* のアクセントは, この意志表明が直前に命令された事態そのものの言い換えとして, 命令文を意味的に補足していることを表わす, cf. C 3 (*kuvīd* ...)。2人称命令文 + 1人称接続法 (±アクセント) の構文については, III 35,5, VI 16,16 及び A 1.2.3 c) を参照。

<sup>420</sup> GOTÖ Material. 1997: 1035 + n. 194 は, 当箇所にも名詞 *ahamsana-* を想定し得ることを指摘している: *tiró víśvā ahām sānā* 「全ての “Ich-will-gewinnen” を通り越して」。

## VI 16,16

éhi y ū śú brávāṇi té 'agna itthétarā gírah |

ebhír vardhāsa indubhiḥ ||

さて、しかと、君はやって来い (pres. iptv.)。君に、私は言おう (pres. subj.) :

アグニよ、他の歓迎歌たちは、こういう風である<sup>421</sup>。

ここにある [ソーマの] 滴りたちによって、君は増大すべし (pres. subj.)。<sup>422</sup>

*brávāṇi*                      *brav/brū* 「話す、言う」                      root-pres. 1sg. act.

<機能> *brávāṇi* (主文) : 意志表明

話し手の意志は、直後に実行されている (*brávāṇi* の内容が Pāda b にあたる) → A 1.2.2 a)。2人称命令文 + 1人称接続法 (±アクセント) の構文については、III 35,5, V 75,2 及び A 1.2.3 b) を参照。

## VI 19,8

ā no bhara vṛṣaṇaṃ śúśmam indra dhanaspr̥taṃ śūśuvāṃsaṃ sudākṣam |

yéna váṃsāma pṛtanāsu sátrūn távotíbhīr utá jāmiṃr ájāmin ||

我々のために、雄々しい激昂 (lit. 鼻息) を、君は持って来い (pres. iptv.)、インドラよ、

財産を獲得する、力みなぎった、よく能力を発揮する [激昂] を、

それによって、諸々の戦において、敵たちに、我々が打ち克つことになるように (aor. subj.)、

きみの諸々の助力によって、血縁者たちをも、(また) 非血縁者たちを<sup>423</sup>。

<sup>421</sup> 軽蔑するような身振りを伴って言っているものと思われる, GELDNER ad loc.

<sup>422</sup> 他の (ライバルの) 祭式と競ってアグニの取り合いをしている, MYLIUS *Der saṃsava* 177ff. = *Das altindische Opfer* 2000, 38ff.。敵方の祭式の歓迎歌は「この程度の」(取るの足りない) ものであるから、自分たちの歌・供物を受け入れるよう、アグニに要求している。文頭に置かれた *ebhír* (アクセント有) は、敵方の (*ítara*-「他方の、あちら側の」) ソーマに対して、自分たちの (こちら側の) ソーマを強調している。

<sup>423</sup> *utá* が *jāmiṃr* と *ájāmin* とを並列接続しているとすれば、*utá* の位置は極めて異例, KLEIN *Disc.Gram.* I 356f., cf. VI 25,3 *jāmāya utá yé 'jāmayah*, X 69,12 *ájāmiṃr utá vā víjāmin* → op. cit. II 169 n. 22.

váṁsāma

van 「打ち克つ、克ち得る (pres. vanóti)」

-s-aor. 1pl. act.

&lt;機能&gt; váṁsāma (同格的関係節) : 見込み

## VI 49,15

nú no rayīm rathīyām carṣaṇiprām puruvīraṁ mahá ṛtasya gopām |

kṣāyām dātājāraṁ yéna jánān spṛdho ádevīr abhī cakrāmāma<sup>424</sup> víśa ádevīr abhīy āśnāvāma ||

今、我々に、車に積む、(諸々の) 境界を満たす、

多くの男子からなる財を、大いなる天理の守り手を、

不朽の定住地を、君たち(一切神)は与えよ(aor. iptv.)、それによって(他の)人たちに、

神々に非ざる<sup>425</sup> 競争相手たちに、我々が攻め寄っていることになるように(perf. subj.)<sup>426</sup>、神々を求める<sup>427</sup> 諸部族を、我々が征服することになるように(pres. subj.)。<sup>424</sup> Ed. AUFRECHT *ca krāmāma* (Pp. *ca krāmāma*) → *cakrāmāma*, OLDENBERG *Noten ad loc.*<sup>425</sup> *ádeva-* (°vi- f.) Tatp. 「非デーヴァ；神々に非ざる(者)」, cf. HALE *Āsura-* 3, 83: *ádeva-* “not devas”, “ungodly” :: *adevā-* (1x, VIII 96,9 *ásurā adevāḥ*) Bahuv. “without devas, godless”.<sup>426</sup> *abhī* + acc. 「〜へ向かって」はしばしば、対象への作用、圧倒、征服の意味を表す, DELBRÜCK 448f., e.g. IX 101,9 *yāḥ pāñca carṣaṇīr abhī* 「5つの部族たちを、圧倒しているところの[財] …」。動詞と組み合わされた時も、同様の意味を付加する, e.g. *abhī-kram* 「(歩み進んで) 圧倒する」(当箇所), *abhī-naś/āś* 「達して圧倒する、征服する」(当箇所, I 179,3), *abhī-tan* 「延び広がって圧倒する」(V 54,15, I 160,5, V 54,15), *abhī-prathī* 「圧倒して=越えて広がる」(VII 69,2)。 *abhī-naś/āś* は、上記箇所以外では(8x) 物が目的語であり、「圧倒して獲得する」を意味する(e.g. IX 97,51 *dráviṇam*)。<sup>427</sup> *ádeva-*, °vi- は前置詞限定複合語(präpositionalen Rektionskompositum): 「神々へ(*devā-*) 向いた(*ā*), 神々を求める」, WACKERNAGEL II-1 312 ‘den Göttern zustrebend’, GELDNER ad IV 1,1 ‘götterfreundlich’。ただし、*ádeva-* = *ádeva-*, °vi- との判断も各所に見られる: WACKERNAGEL II-1 131, GELDNER ad loc. et al., GRASSMANN 177, cf. VIII 96,15 *víśo ádevīr abhy ācarantīr bṛhaspátinā yujéndraḥ sasāhe* 「神々を持たない部族たちが練り歩いてくるのを、インドラはブリハस्पティを同盟者として、迎え撃った」SADOVSKI は *Entheos-Komposita und präpositionale Rektionskomposita* (2000) 及び *Bahuvrīhi und Rektionskomposita* (2001) において、前置詞を前半要素に持つ複合語を二種類扱っている: 1) *Bahuvrīhi* = “*Entheos-Komposita* (EK)”, e.g. ’év-θεός 「神を中に持つ」, *abhī-kratu-* 「念力を[何かに]向けた」, *úd-bāhu* 「腕を上にした」; 2) 前置詞限定複合語 (PRK), e.g. ’év-άλιος 「海の中にいる」, *ati-rātr-ā-* 「夜を越える/越えて続く」。原則として前者は suffix を持たず前半にアクセントを持つのに対し、後者は suffix \*- (i)io-/o- を持ち、その上にアクセントを持つ。op. cit. (2000) 468, (2001) 111–113 によると、*ádeva-* はアクセントからもまた内容的にも——*ádeva-* が形容する Agni は多く場合神々を地上へ連れてくるものと記述されるから——「神々を(*devā-*) こちらに(*ā*) 持つ/する=神々を連れてくる・もたらす」を意味する“faktitiver Bahuvrīhi”である, cf. *vī-dveṣas-* ‘Haß wegmachend/entfernend’ (op. cit. 2000, 111), HOFFMANN *Aufs.* 297 n. 26 “... OAv. *vidaēuua-* ‘daēva-feindlich’, das dann eigentlich ‘ab(geschworene) Daēvas habend’ hiesse”(ただし HOFFMANN は, BENVENISTE *Henning Mem.* Vol. 70ff. と同じく, *vī daēuuāiš ... sarām mruīē* からの syntaktisches Kompositum を考えている); その一方で、アグニは神々と人間との間を行き来するので、人間のもとから「神々へ向かう」(前置詞限定複合語)の意味にも再解釈されるようになったとする。当箇所では更に、心理的な意味「神々を求める」で用いられていると言えよう。

*abhí-cakrāmāma* *kram* 「大股で歩く，闊歩する」 perf. 1pl. act.

完了語幹本来の意味「達成された状態」からは，*abhí-cakrāmāma* が事実上，後続の pres. subj. *abhí-aśnāvāma* に先行する未来の行為を表わすとも解せよう（KÜMMEL Perf. 146f.）。一方でまた，perf. subj. が，行為そのものの完全性「～しおおせる」を表す可能性も考えられる（「完全に攻め寄る～攻め寄って圧倒する」）。I 3.2.1 3) 及び II 総論への補説 1 を参照。

*abhí-aśnāvāma* *naś/aś* 「到達する，獲得する」 nasal pres. 1pl. act.

<機能> *abhí-cakrāmāma* / *abhí-aśnāvāma*（同格的関係節）：見込み

#### VI 55,1

*éhi vām vimuco napād āghṛṇe sám sacāvahai* |

*rathír ṛtāsya no bhava* ||

やって来い（pres. iptv.）。我ら二人は，解放の子（プーシャン）よ，  
放熱する者よ，添い合おうではないか（pres. subj.）。  
天理の御者と，君はなれ（pres. iptv.），我らのために。

*sám-sacāvahai* *sac* 「付いて行く」 full-gr. them. pres. 1du. mid.  
(med. tant.; reciprocal + *sám*)

<機能> *sám-sacāvahai*（主文）：勧誘

#### VI 55,4

*pūśāṇaṃ n<sub>u</sub>v àjāś<sub>u</sub>vam úpa stoṣāma vājīnam* |

*svásur yó jārā ucyáte* ||

今，山羊を馬として持つ<sup>428</sup> プーシャンを  
我々は称え崇めよう（aor. subj.），馬力のある〔彼〕を，  
妹の<sup>429</sup> 情夫と言われているところの（pres. ind.）〔彼を〕。

<sup>428</sup> i.e. 「馬の代わりに山羊を持つ」。

*úpa-stoṣāma*                      *stav/stu* 「称える」                      -s-aor. 1pl. act.  
*stav/stu* -s-aor. の活用については, I 53,11 を参照。

<機能> *úpa-stoṣāma* (主節): 意志表明

#### VI 56,4

*yád adyá tvā puruṣtuta brāvāma dasra mantumah |*  
*tát sú no mánma sādahaya ||*

今日、君に、多く称えられる者よ、  
 力量ある者よ、知略に富む者よ、言うことになる (pres. subj.)<sup>430</sup>  
 我々の その考えを 君は成就させよ (pres. iptv.)<sup>431</sup>。

*brāvāma*                      *brav<sup>i</sup>/brū* 「話す、言う」                      root-pres. 1pl. act.

<機能> *brāvāma* (限定的関係節): 見込み

#### VI 59,1

*prá nú vocā sutēsu vām vīryā yāni cakráthuh |*  
*hatāso vām pitāro devásatrava índrāgni jīvatho yuvām ||*

さあ、私は宣言しよう、君たち両者の（為に）搾られた [ソーマ] たちの前で、  
 君たち両者が為した、諸々の武勲を。

<sup>429</sup> = ウシャス (Sāy.)。

<sup>430</sup> RV において「話す、言う」を意味する動詞 (*brav<sup>i</sup>/brū*, *vac*) が二つの accusative 「～に…を言う」を支配する用例は少ない (通常 dat. + acc. が用いられる), GAEDICKE Acc. 268f., DELBRÜCK 180 “nicht häufig”. *brav<sup>i</sup>/brū* では当箇所のみ (cf. GRASSMANN 918 “auch andere Auffassung möglich”), *vac* では (前者との補完現象については I 25,17 を参照) 次の箇所にもみられる: X 80,7 *agnīm mahām avocāmā suvṛktīm* 「アグニに、大きなよき称讃を我々は述べた」(GAEDICKE loc. cit. が他に挙げる I 182,8 は他の解釈を許す)。

<sup>431</sup> Cf. I 94,4 *sādhayā dhíyo*。

神々を敵とする父祖たちは、君たち両者によって、殺された。

インドラ・アグニよ、きみたち両者は生きている。

*prá ...vocā*                      *vac* 「話す，言う」                      redupl. aor. 1sg. act.

→ I 3.1。

<機能> *prá ....vocā* (主文)：意志表明

HOFFMANN 253：「複数形 *sutésu* からは，今現在の状況が考えられているだけでなく，一般的な心構え (*allgemeine Bereitschaft*) が意味されていると想定することができる」，cf. A 1.2.2 b)。ただしその場合，文頭の *nú* は「現に今」の意味ではなく，*Sūkta* の開始を導く役割を担っていることになる，cf. IV 20,10 *návyē deṣṇé ... prá bravāma*, VII 24,6 = VII25,6 *prá ... vevidāma ... pinva maghāvadbhyaḥ ... pāta svastībhiḥ*, I 94,4 *bhārāma ... kṛṇávāmā ... párvanā-parvanā*。

## VI 67,10

*ví yád vācam kīstāso bhārante śāṁsanti ké cin nivīdo manānāḥ |*

*ād vām bravāma satīyānīy ukthā nákir devébhīr yatatho mahitvā ||*

詩人たちが，言葉を〔自らの中から〕開示する時 (pres. ind.)，

ある者たちは，献呈の言葉たちを考え出しながら，言明する (pres. ind.)。

そこで，君たち両者 (ミトラ・ヴァルナ) に，我々は言おう (pres. subj.)，真の讃辞たちを：決して (他の) 神々と，君たち両者が競い合うことはない (pres. ind.)，偉大さに関して。

*bravāma*                      *brav/brū* 「話す，言う」                      root-pres. 1pl. act.

<機能> *bravāma* (主文)：意志表明

意志された行為は，直後の *Pāda* で実行されている → A 1.2.2 a)。

## VII 2,2

*nārāśāṃsasya mahimānam eṣām úpa stoṣāma yajatāsyā yajñāih |*  
*yé sukrátavaḥ śúcayo dhiyandhāḥ svádanti devā ubháyāni havyā ||*

この者たち（神々）への、祭るに相応しいナラーシャンサ（男たちによる賞讃）の  
 大きさを、我々は称え崇めよう（aor. subj.）、祭式たちによって、  
 よき意力を持ち、輝きを放ち、思慮を置き定める者たちとして  
 両方の献供物たちを<sup>432</sup>、美味しくするところの（pres. ind.）神々 [への]。

*úpa-stoṣāma* stav/stu 「称える」 -s-aor. 1pl. act.  
 stav/stu -s-aor. の活用については、I 53,11 を参照。

<機能> *úpa-stoṣāma*（主節）：意志表明

## VII 24,6# = VII 25,6#

*evā na indra vārjasya pūrdhi prá te mahīm sumatīm vevidāma |*  
*īṣaṃ pinva maghávadbhyaḥ suvīrām yūyám pāta sāvastíbhiḥ sádā naḥ ||*

こうして、インドラよ、望ましいものの [中から]、我々に、君は与えよ（aor. iptv.）。  
 君の、偉大なよき思考を、我々は繰り返し見出そう（pres. subj.）。  
 よき勇者に富む滋養を、有力者たちのために、君は膨らませよ（pres. iptv.）。  
 きみたちは、諸々の安全さによって、いつも、我々を護れ（pres. iptv.）。

*prá ... vevidāma* ved/vid 「見つける」 intens. I pres. 1pl. act.

intens. 語幹 *vevid-* は、形の上では「知る」、「見つける」のいずれにも属し得るが、用例  
 (RV 6x) は全て後者の意味を示す、SCHAEFER 183。語根部分の zero-gr. については、I 2.1.1  
 2) を参照、cf. X 119,10, IV 39,1。

<sup>432</sup> 両方の献供物とは、実際の供物と讃歌のことと思われる、OLDENBERG Noten ad VII 1,17, GELDNER ad loc.。GELDNERによれば、実際の供物を美味にするのは詩人の言葉（讃歌）であるが、その言葉自体も、実際は神々が与える詩的靈感によるものなので、結局は神々が両方とも美味しくしていることになる、という。

当箇所 *intens.* の機能は「単純な繰り返し」で、「同一の行為が、同じ対象において何度も遂行される」場合に当たる, SCHAEFER 85, 183, cf. 「単純な繰り返し」: X 119,10 *jaṅghānāni* ; 「対象の分割」: VIII 100,2, X 83,7 *jaṅghanāva*。以下<機能>も参照。

<機能> *prá ... vevidāma* (主文) : 意志表明

Pāda *acd* の命令が満たされることが、即ちインドラの「よき思考を見出す」ことである。要求と並んで、話し手が同等の内容を意志として表明するする場合については、A 1.2.3 c) を参照。話し手は *Sūkta* の最終詩節で、将来全般にわたり、何度でも「見出す」心構えを持つことを表明している：一般的心構え → A 1.2.2 b)。

#### VII 57,4

*śdhak sā vo maruto didyúd astu yád va ágaḥ puruṣátā kārāma* | Pāda b = X 15,6d

*mā vas tásyām ápi bhūmā yajatrā asmé vo astu sumatís cániṣṭhā* ||

君たちの、マルトたちよ、その一撃は、脇に逸れて、あれ (*pres. iptv.*),  
もし、人であること故に、君たちに対して、過失を、我々が為すことがなれば／なっても (*aor. subj.*)。

君たちのそれ（一撃）の中に、我々が身を置くことがないようにせよ (*mā + aor. inj.*), 祭るに値する者たちよ。

我々のもとに、君たちの、最も好ましい善意が、あれ (*pres. iptv.*)。

*kārāma*                      *kar/kr* 「為す, 作る」                      root-aor. 1pl. act.

<機能> *kārāma* (*yád* 条件節) : 見込み

*yád* 節は条件節であるが、主節の内容との関係から、譲歩条件として機能していると言える → B 1.3.1, cf. VIII 48,9, X 2,4, X 15,6。

#### VII 66,12

*tád vo adyá manāmahe sūktáih sūra údite* |

yád óhate váruṇo mitró aryamā yūyám ṛtásya rathīyah ||

それを、君たちのために、今日、我々は考え出そう (aor. subj.),  
讃歌たちによって<sup>433</sup>, 太陽が<sup>434</sup> 昇った時に,  
ヴァルナが、ミトラが、アリヤマンが、誉めるところの (pres. ind.) <sup>435</sup> [それを]。  
きみたちは、天理に属する, [天理の] 御者たちよ。<sup>436</sup>

manāmahe man 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」 root-aor. 1pl. mid.

<機能> manāmahe (主文): 意志表明

## VII 81,5

tác citrām rādha ā bharó- ṣṣo yád dīrghaśrúttamam |

yát te divo duhitar martabhójanam tād rāsya bhunájāmahai ||

その、輝かしい恩恵を、君は持って来い (pres. iptv.),  
ウシャス (曙) よ、最も長く人が耳にするところの [恩恵を]。  
君に、天の娘よ、人間にとって享受するものがあるなら<sup>437</sup>,  
それを、君は贈り与えよ (aor. iptv.). (それを) 我々は享受しよう (pres. subj.).

<sup>433</sup> 「それ」を (tád ... yád ...) 讃歌の形にして (sūktáir) 考え出す (発語する) ことを意味する, cf. V 66,3 *suṣṭutím ... stómair manāmahe*.

<sup>434</sup> *sūre: sūra-* loc.sg., *sūra-* は恐らく *svār-* gen.sg., *sūras* から二次的に作られた形。gen.sg. *sūre* (*duhitā*, RV I 34,5) については WITZEL Tracing Dialects 187, MIGRON III 42 (1999) 33f. 参照。

<sup>435</sup> *oh/uh* root-pres. (Narten-pres.) 3pl. *oh/uh* は「はっきりに述べる」が原義と考えられる, NEISSER zum Wörterbuch I 200–202 “laut und feierlich aussprechen”. 目的語を取る場合, 人間と神々のいずれも主語となりうる。前者の場合「(神々 etc. を) 言葉によって称える」, 後者には「(称讃の言葉 etc. を) 誉め称える, 評価する, 認める」等の意味が設定される, cf. BAUNACK KZ 35 (1898) 502 “(für sich) gelten lassen, würdigen, den vorzug geben”, OLDENBERG Noten ad X 71, 8 (Baunack に従い) “es bedeutet transitiv rühmendes Anerkennen oder Würdigen”, NEISSER op. cit. I 202 “die Ehrung gutheissen”, “gelten lassen”. ここでは神々が主語であり, 詩人は神々がよしとする [歌, 言葉 etc.] を考え出そうとしている; GELDNER “Das ersinnen wir für euch ..., was Varuṇa, Mitra, Aryaman löblich finden”.

<sup>436</sup> *ṛtásya rathīyah* 全体を voc. と考えることは, 述語が無くなるという点でも (主語 *yūyám*), アクセントの点でも無理 (voc. にかかる gen. は通常アクセントを持たない, HASKELL Vokative-Accent (JAOS 11, 1885) 59, 64f., DELBRÜCK 33f., WHITNEY 108f. § 314d)。恐らく, *\*yūyám ṛtásya* 「君たちは天理に属する」と *\*ṛtásya rathīyah* 「天理の御者たちよ (voc.)」とが混交したものと考えられる (或いは “prädikativer Vokativ” ?, GELDNER ad loc., cf. DELBRÜCK 106, BRUGMANN Grundriß II-2,2 647 § 533)。

<sup>437</sup> *yát te* 「君にあるもの, 君のもの」(‘Deines’), cf. X 95,13 *prá tát te hinavā yé te asmé*, IV 20,10 *daddhí tán nah ... bhūrī yát te*, VI 15,14 *havyā vaha ... yā te adyā*.

*bhunājāmahai*      *bhoj/bhuj* mid. 「[自分に] (～を, instr.) 役立てる,  
(～を) 享受する」<sup>438</sup>      nasal pres. 1pl.

<機能> *bhunājāmahai* (主文): 意志表明

## VII 82,10# = VII 83,10

*asmé índro váruṇo mitró aryamā dyumnām yachantu máhi śárma sapráthaḥ |*  
*avadhrām jyótir áditer ṛtāvṛdho devásya ślókam savitúr manāmahe ||*

われわれの上に、インドラ、ヴァルナ、ミトラ、アリヤマンは  
明るさを、保持せよ (pres. iptv.), 広がりのある、大きな覆いを,<sup>439</sup>  
アディティの、壊されることない光を、天理を増大させる者たちは<sup>440</sup>。  
駆け立てる神 (サヴィトリ) への、誉め歌を、我々は考え出そう (aor. subj.)。

*manāmahe*      *man* 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」      root-aor. 1pl. mid.

<機能> *manāmahe* (主文): 意志表明

## VII 86,2<sup>441</sup>

*utá sváyā tanvā sām vade tát kadā nāv àntár váruṇe bhuvāni |*  
*kīm me havyām áhrṇāno juṣeta kadā mṛḍikām sumánā abhí khyam ||*

そして、自分自身と、そのことを、私は議論している (pres. ind.)。  
さて何時、ヴァルナのもとに、(家の) 中に、私は身を置くことになるのか (aor. subj.)。<sup>442</sup>

<sup>438</sup> Cf. act. 「(人に) 役立てる > 満足させる; 贖罪をなす」, HOFFMANN 96.

<sup>439</sup> 「明るさ」の言い換えである *śárma-* は、明るさを伴う覆い、つまり天の半球 (天蓋) を指すものと思われる。loc./dat. + *śárma yam* については、注462 (VIII 47,3) を参照。

<sup>440</sup> 或いは「天理を増大させるアディティには (*áditer ṛtāvṛdho*, gen.sg.) …光がある」。

<sup>441</sup> *Sūkta* の内容については VII 86,7 を参照。

<sup>442</sup> *ántár váruṇe* (loc.) *bhav* は、実際に「(家の) 中に入る (*ántár bhav*)」ことと、「ヴァルナのもとに生じる・現れる (*váruṇe bhav*)」(更に「ヴァルナの支配・管理のもとに入る; 仲間に入る」) ことを同時に表していると思われる (cf. GRASSMANN 943 (*ántár bhav*): “an jemandem (geistig) sein, in ihn eindringen”)。前者に関しては、ヴァスィシュタが眠りの中でヴァルナの家に進出し、ヴァルナに捕まって縛られたと

私の供物を、憤怒せずに、彼は喜ぶであろうか (aor./pres. opt.).

何時、寛大さを、機嫌よく、私は見迎えるのか (aor. inj.).

*bhuvāni*      *bhav<sup>i</sup>/bhū* 「生じる、～になる」      root-aor. 1sg. act.

*bhav<sup>i</sup>/bhū* のアオリスト語幹は, subj. も含め, 全て zero-gr. を示す: ind. *ābhūt*, *ābhūma*, *ābhūvan*, inj. *bhūs/bhúvas*, *bhūt/bhúvat*, *bhūvan*, subj. *bhúvas*, *bhúvat*, *bhúvan* etc.<sup>443</sup>. 一方, 古アヴェスタ語の aor. subj. には, zero-gr. *buua-* の他に full-gr. *bauua-* も例証されている。このことから, 本来 aor. subj. は *\*bhaū-a-* であったが, これが現在幹として用いられるようになったために (ipf. *ābhavat*, OAv. *abauuat*), 新たな aor. subj. を, aor. ind. と同じ zero-gr. *\*bhuū-a-* から作り直したとする説がある<sup>444</sup>. しかし, GOTÖ 229f. に従い, ind. 全てで zero-gr. *bhū-*, subj. のみで full-gr. *\*bhāū-a-* という Ablaut 体系が極めて異例であることから, *\*bhuū-a-* を本来の aor. subj. と見なし<sup>445</sup>, 古アヴェスタ語では, pres. *\*bhāū-a-* が未来の事態を表しうる状況から二次的に subj. としても転用されたものと理解する (I 2.1.11) も参照)。

<機能> *bhuvāni* (疑問文): 見込み

ヴァシシュタは第 1 詩節でヴァルナの過去の偉業を, またここでは自らの願いを, いずれもヴァルナを3人称に置いて語っている一方, 第 3 詩節以降ではヴァルナに直接話しかけている。このことから当詩節の疑問文は, ヴァルナに直接話しかけているのではなく, その存在を想定した上で自問の形をとっているものと考えられる, cf. I 41,7, IV 43,1, I 25,5.

三つの疑問文にはそれぞれ異なった法が使われている。subj. と inj. とが, 疑問文 (特に修辭疑問文) において機能的に見分けの付かない使われ方をすることについては<sup>446</sup>,

いう BrhDev. VI 11-15 の話を参照。後者の表現に対しては, 同様にヴァルナに宛てた歌の続きである次の詩節を参照: VII 87,7 *vayām siyāma vāruṇe ānāgāḥ* 「われわれは咎無き者たちとしてヴァルナのもとにありたい/ヴァルナの仲間 (同盟者) に入りたい」, cf. GELDNER “Wir wollen vor Varuṇa ... sündlos erscheinen”, DELBRÜCK 118, “möchten wir schuldlos sein gegenüber Vāruṇa”。

<sup>443</sup> ind./inj. 3pl. (*ā*)*bhūvan* (音韻規則的には *\*(ā)bhuvan < \*(ā)bhuH-an*) は, 語尾が子音で始まる他の活用形 (*ābhūma* etc.) の影響で *-ū-* を持つにいたったが, 一方 subj. 3pl. *bhūvan* は, *-u-* を示す他の subj. 語形 (*bhúvas*, *bhúvat* etc.) のためその影響を受けなかったと考えられる, HOFFMANN 237. 幹母音化した inj. (*bhúvas*, *bhúvat*) は, 1sg. *bhuvam* の影響による, loc. cit.。

<sup>444</sup> 参考文献については GOTÖ 229 n. 493 を参照。異なる立場の先行研究は, MAYRHOFER EWAia. II 256 に概観されている。

<sup>445</sup> このことはヴェーダ語において, 本来の inj. 3pl. *\*bhūvan* が subj. との同形を避けて *bhūvan* に改変されたこと (前注) から支持される。しかしその一方, 同じく subj. と同形の幹母音化した inj. (前注) が大量に作られたという事実は, むしろ本来の subj. が異なる形 (i.e. *\*bhāū-a-*) を示していた可能性を示唆しているとも言えよう。

<sup>446</sup> このことは他の多くの用例によっても支持されるため, *khyam* に subj. を認めるべき理由はない, cf. ETTER 169 n. 461, 179, 244 n. 647。

HOFFMANN 246 を参照。juṣeta が opt. に置かれていることは、これだけが 3 人称（ヴァルナ）であり、しかも joṣ/juṣ 「気に入る、喜ぶ」という極めて自発的な行為——つまり、内容の実現性に対して話し手の意志や見込みが関与し難い行為——を表わしていることに関係している、cf. 総論への補説 2。

# VII 86,7<sup>447</sup>

āraṁ dāsó ná mīdhūṣe karāṇi ahāṁ devāya bhūrṇayé 'anāgāḥ |  
ācetayad acīto devó aryó gṛtsaṁ rāyē kavítaro junāti ||

下男がのごとく、報酬を払う<sup>448</sup> [ヴァルナ] に<sup>449</sup>、相応しく仕えよう (aor. subj.),  
わたしは、活動的な神である [ヴァルナ] に、咎無き者として。  
部族長に属する<sup>450</sup> 神は、気付かない者たちに、気付かせた (ipf.).  
聡い者を、他に優って見者である [彼] は、財のために、急がせる (pres. ind.).

(āraṁ ...) karāṇi kar/kr 「為す、作る」 root-aor. 1sg. act.

<機能> (āraṁ ...) karāṇi (主文)：意志表明

Cf. III 35,5 vayāṁ té 'raṁ sutébhiḥ kṛṇavāma 「われわれは、君に、搾られたソーマたちによって相応しく仕えよう」。

# VII 88,3<sup>451</sup>

<sup>447</sup> ヴァルナの不興を買ったヴァスィシュタが、彼に許しを請うている、GELDNER ad VII 86。

<sup>448</sup> GOTÖ Vasiṣṭha 147 n. 1 を参照。

<sup>449</sup> 或いは「下男が報酬を払う [主人] に対して [するか]のごとく」(GELDNER 訳)。

<sup>450</sup> aryāḥ は nom. sg. であり、devó aryāḥ は VII 64,3, VII 65,2 と同様ヴァルナのことを指す、OLDENBERG loc. cit., THIEME Fremdling 79f. (cf. THIEME 訳 “der fremdlingbeschützende Himmlische” [よそ者を保護する神])。

<sup>451</sup> Sūkta 全体の神話的背景とその解釈については、GOTÖ Vasiṣṭha und Varuṇa (Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik 147–161) を参照。当詩節の背景には、インド・イラン共通時代に遡る、夜海に沈んだ太陽の光を取り戻す神話がある。ヴァスィシュタはかつて、沈んだ太陽を再び昇らせる職能を担う詩人／祭官であったが、今はそれを失っている。彼は、再びヴァルナの許可と助力とを得て、その任務に復帰することを願い、過去の両者の協力関係に言及している：Pāda abc は、両者が夜の太陽を救い出すべく海へと漕ぎ出していくことを、Pāda d は、その結果太陽を昇らせることを述べている。「ブランコ」

á yád *ruhāva* váruṇas ca nāvaṃ prá yát *samudrām iráyāva* mādhyam |

ádhi yád apāṃ s<sub>a</sub>núbhiś *cārāva* prá preṅkhá *īṅkhayāvahai* śubhé kām ||

〔私と〕ヴァルナとが<sup>452</sup>、舟に、乗り込むことになれば (aor. subj.),

〔舟を〕海の真中へ、送り出すことになれば (pres. subj.),

水たちの背中（水面）たちを通過して、進み行くことになれば (pres. subj.),

ブランコに乗って我ら両者は身を揺らし合うことになろう (pres. subj.), 華やぎ誇るために。

á ... <i>ruhāva</i>	roh/ruh 「登る, 上がる」	zero-gr. them. aor. 1du. act.
prá ... <i>iráyāva</i>	ar/ṛ 「動く／動かす, 送り出す」	caus. pres. 1du. act.
<i>cārāva</i>	car 「動き回る, 進み行く」	full-gr. them. pres. 1du. act.
prá ... <i>īṅkhayāvahai</i>	īṅkh 「(前後に) 揺れる」	caus. pres. 1du. mid. (reciprocal)

<機能> á ... *ruhāva* / prá ... *iráyāva* / *cārāva* (時を表わす yád 節): 見込み

prá ... *īṅkhayāvahai* (主節): 見込み

接続法によって表された内容は、後続詩節で、既に実現されたものとして確認される:

VII 88,4 *vásiṣṭham ha váruṇo nāvīy ādhād ṛṣīm cakāra s<sub>a</sub>vápā māvobhiḥ | stotāram viprah sudinatvé áhnām yān nú dyāvas tatānan yād uśāsaḥ* 「ヴァスィシュタを、ヴァルナは確かに舟に載せ置いた (aor. ind.), リシにした (perf. ind.), よい仕事をなす [ヴァルナ] は 諸々の偉大さによって, [興奮に] 震える詩人として [ヴァスィシュタを] 誉め歌を歌う者に [ヴァルナはした], 日々がよき明るさを持つことに関して, 日々が続くであろう限り, 曙たちが [続くであろう] 限り」。<sup>453</sup>

とは、天にぶら下がり、輪を描いて巡る日輪のことを指し、それを「揺らす」とはずみがつき、再び上昇するものと考えられていた, GOTÖ op. cit. 153 + n. 19.

<sup>452</sup> 文の主語として X Y ca が想定される場合, X = 話し手 (*ahám, vayám*) 或いは X = 聞き手 (*tvám, yūyám*) である時は, X が省略されることがある, KLEIN Disc.Gram. I 126ff. この種の省略は三つ以上の主語の場合にも起こるが (cf. X 157,1 *śiṣadhāmēndras ca víśve ca devāḥ* 「[私／我々と] インドラと一切神とは, 成就させよう」), 殆どの例は X Y ca であり, よって動詞の双数形と共に用いられる。このことから KLEIN op. cit. I 128f. は, これら二つの主語が必ずお互いを, そしてお互いのみを必要とするような, 密接な関係を形成していることを明らかにした。VII 88,3 はその典型と言えよう。Vasiṣṭha は, 他の詩人ではなく, まさに自分とヴァルナだけの共通体験に言及することによって, 両者の親密な関係を再び取り戻そうとしているのである。

<sup>453</sup> ヴァスィシュタがヴァルナとの協力のもと, 海に沈んだ太陽を救い出しに舟に乗り込んだことが (Pāda a), またそれによって日々太陽を昇らせる職務を任されたという事実が (Pāda bcd), それぞれ aor. ind., perf. ind. によって確認されている (注 403 を見よ)。

つまり、当詩節の subj. は全て、過去の時点から見た未来を表していることになる<sup>454</sup> (GOTÖ Vasiṣṭha und Varuṇa 152)。ヴェーダ語は、過去時制と法とを同時に表現する手段（形態）を持たないため、過去における未来を接続法だけによって表していると考えられる。そのような表現上の制約がある場合、その機能をどの文法カテゴリーが担うか、或いは新しい形態を作り出すかは、言語によって異なる。ヴェーダ語の場合は、過去から見た未来を、現在を基準とした時間軸の中で捉えるのではなく、語りの時点を過去へと移動させることによって、通常の法を用いる方法を取ったと言えよう、cf. HOFFMANN 244: “Konjunktiv in präteritalem Sachverhalt”<sup>455</sup>。

#### VII 98,4

*yád yodháyā maható mányamānān sākṣāma tān bāhúbhiḥ śāśadānān |*

*yád vā nṛbhir vṛta indrābhiyúdhyaś tāṃ tvāyājīm sauśravasām jayema ||*

もし「自分たちを」偉大であると思っている者たちを、君が（我々と）戦わせることになるなら (pres. subj.),

我々は征服しよう (aor. subj.), 腕々を驕っている、その者たちを。

或いはもし、男たちと共に、（敵の）軍隊へ<sup>456</sup>、インドラよ、君が戦い挑むことになるなら (pres. subj.),

君と共に、その競争に、我々は勝利してよき名声を持つに至りたい (pres. opt.)<sup>457</sup>。

*sākṣāma*                      *sah* 「克服する、克つ」                      -s-aor. 1pl. act.

<sup>454</sup> 更に、第二詩節でヴァスィシュタによって述べられる *niniyāt* (optativ 「願望」) も、過去の時点における願望である、GOTÖ op. cit. 151f.。

<sup>455</sup> HOFFMANN はこの用語を、複文中の *yád* 目的節に現れる subj. に対して用いている。その場合、基準時となる過去時制は、既に主文の動詞 (aor. ind., perf. ind.) によって明示されている。これに対して当詩節では、主節の動詞 (*inkhayāvahai*) も subj. に置かれているため、複文全体が過去に属するものであるということは、前後の文脈からしか伺えない。

<sup>456</sup> *vṛ-t-* 「(防衛) 軍、軍隊」 < \* 「防衛」 < - *var/vṛ, vṛṇó-ti* 「包囲する、防御する」, SCHINDLER Wurzelnomen 45 (SCARLATA 505)。

<sup>457</sup> 定型表現 *ājīm jay/ji* 「(戦車) 競走に勝つ／を制する」 (cf. I 179,3) が、行為の内容／結果を表わす Inhaltsakkusativ *sauśravasām* とともに用いられていると考えられる：競争に勝つことが、よき名声を得ることを意味する／競争に勝った結果、よき名声を手に入れる、堂山 *Rgveda* V 60,6 § 3.1b を参照。或いは、*ājīm jay/ji* の表現と「物 (acc.) を勝ち得る」の表現が重ねられている可能性もある：「競争に [勝利して]、名声ある状態を勝ち得たい」。

＜機能＞ *sākṣāma* (主節): 意志表明

話し手たちは前半で、インドラが敵と戦う機会を与えてくれる時には、必ず彼らを倒すもりであることを宣言し (subj.)<sup>458</sup>、後半では、インドラ自らが敵に攻め入ってくれるのであれば、それに加わって自分たちも勝利を分かち合いたいと願っている (opt.)。後半の願望法は、勝利の実現力を担うのが話し手だけではないということに関係していると思われる; cf. 総論への補説 2。

<sup>458</sup> Cf. X 27,2 *yádīd ahám yudháye samnáyān, y ádevayūn tanavā súśujānān | amā te túmraṃ vṛṣabhám pacāni tīvrām sutām pañcadaśám ní śiñcam* 「もしもわたしが、神々を求めない、いきり立っている者たちを、戦うために連れ集めることになるなら、家で君に、肉付きのいい牡牛を、私は調理しよう。十五杯の鋭い (舌を刺す) 搾られた [ソーマ] を私は注ぎ込む」。

## VIII 11,5

*mártā ámartiyasya te bhūri náma manāmahe |*  
*víprāso jātávedasaḥ ||*

死すべき者たちとして、不死なる君の

多くの名前たちを、我々は思念しよう (aor. subj.),

[昂揚に] 打ち震える [我々] は / 詩人たちとして、ジャータヴェーダス (アグニ) の [名前たちを]。

*manāmahe*      *man* 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」      root-aor. 1pl. mid.

<機能> *manāmahe* (主文): 意志表明

## VIII 22,3

*ihá tyá purubhūtamā devā námobhir aśvínā |*  
*arvācīnā sāv ávase karāmahe gántārā dāsúšo grhām ||*

(今) ここで、例の、最も多く現れる

双神を、両アシュヴィンを、敬意たちによって

しかと、こちらへ、我々は向けよう (aor. subj.), 助力のために、

捧げる者の家へ (いつも) 向かう両者を<sup>459</sup>。

*karāmahe*      *kar/kr* 「為す, 作る」      root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *karāmahe* (主文): 意志表明

<sup>459</sup> *gántar-* は常にアシュヴィン双神に対して用いられる: 「好んで / いつも [祭式へ] 向かう; 向かうことを常とする」, TICHY -tar- 72。

## VIII 24,19

éto n<sub>ā</sub>v índraṃ stāvāma sákhāyaḥ stóm<sub>i</sub>yaṃ náram | Pāda a = VIII 95,7a, VIII 81,4a

kṛṣṭīr yó víśvā abh<sub>i</sub>y ást<sub>i</sub>y éka ít ||

さあ（来い／行け），今。インドラを，我々は称えようではないか（pres. subj.），  
盟友たちよ，称えられるべき男を，  
一人だけで，一切の部族たちを，圧倒しているところの〔彼を〕（pres. ind.）。

stāvāma

stav/stu 「称える」

root-pres. 1pl. act.

<機能> stāvāma（主文）：勧誘

éta ... 1pl. subj. → A 2.1.

## VIII 27,22#

vayāṃ tād vaḥ samrāja á vṛṇīmahe putró ná bahupáya<sub>i</sub>yaṃ |

aśyāma tād ādityā jūhvato havír yéna vásyo náśāmahai<sup>460</sup> ||

われわれは，君たちの（＝君たちから）それを，大王たちよ，（今ここに）選び取る（pres. ind.）。  
息子が の如く，多くを守護する〔それ〕を。<sup>461</sup>  
それを，我々は獲得したい（aor. opt.），アディティの子たちよ，供物を献じつつ，  
それによって，よりよいものを，我々が獲得することになるところの／なるように（aor. subj.）。

náśāmahai

naś/aś 「到達する，獲得する」

root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<sup>460</sup> Ed. AUFRECHT 'náśāmahai (Pp. anáśāmahai) → naśāmahai, OLDENBERG Noten ad loc.。

<sup>461</sup> Pāda ab は，先行詩節全体からなる従属節を受けた主文：VIII 27,21 yād adyā sūra údite yān madhyāmdina ātūci | vāmāṃ dhatta mánave víśvavedaso jūhvānāya prācetase 「今日，太陽が昇った時に，真昼において，〔夜の〕とばりにおいて（？），望ましいものを，一切の知識を有する者たちよ，献供しつつある，注意を向けるマヌに，君たち（アーディティアたち）が与える時，」。よって当詩節 Pāda a tād は先行詩節の vāmāṃ を受ける。一方，c tād (n.) は d yéna と対応し，漠然と「もの」を表わすか，或いは前出の vāmā- を指す可能性もある。

＜機能＞ *nāsāmahai* (限定的関係節)：見込み

関係節 *yéna ... nāsāmahai* は先行詞 *tád* を限定的に修飾しているが、事実上主文の目的を表わしているとも理解出来る (HETTRICH 593), cf. X 156,2, I 192,13, (IX 101,9)。同様に目的を表わし得る同格的関係節との構造上・意味上の違いについては、C 2 及び 2,2 を参照。

### VIII 47,3

*vṛy āsmé ādhi śārma tát pakṣā váyo ná yantana |*

*viśvāni viśvavedaso varūthyaṇ manāmahe 'nehaso va utāyaḥ suūtāyo va utāyaḥ ||*

われわれの上に、その覆いを、君たち（アーディティヤ神たち）は

広げたままでいよ (aor. iptv.), 鳥たちが、両翼を のように<sup>462</sup>。

一切の、あらゆることについて知っている者たちよ、

保護行為たちを、我々は思念しよう (aor. subj.)。

君たちの、諸々の助力は、欠点を持たない。

君たちの、諸々の助力は、よいものである<sup>463</sup>。

<sup>462</sup> loc. + *śārma* (*śārman-* acc. sg.) *yam* (pres. *yáccha-ti*) 「～の上に（庇護のための）覆いを保持する」。当箇所 *śārman-* には、下にあるものを保護するための具体的な覆いが想定されていると思われる。同様に VII 82,10=VII 83,10 *asmé índro váruṇo mītró aryamā dyumnām yachantu máhi śārma sapráihah* 「われわれの上に (loc.), インドラ、ヴァルナ、ミトラ、アリヤマンは、明るさを保持せよ、広がりのある大きな覆いとして」(当該箇所参照)。一方, dat. + *śārma yam* の用例では, *śārman-* はむしろ覆いによって作られた避難所、或いは広く庇護行為を意味する可能性が高い: IV 25,4 *tásmā agnir bhārataḥ śārma yaṁsaj* 「その者のために (dat.), バラタ族に属するアグニは、避難所／庇護を保持すべし」, I 102,3 *tāvāyādbhyo maghavañ chārma yacha nah* 「君（インドラ）を求める我々のために (dat.), 有力な者よ、庇護／避難所を君は保持せよ」。

<sup>463</sup> *suūtī-* はここにしか見られない (WACKERNAGEL/DEBRUNNER II 1 190 *\*súuti-* → *\*suūtī-*)。su- + -ti- 派生名詞からなる複合語では、アクセントの位置だけによって Bahuv. か Tatp. かを確定することは難しい, cf. op. cit. II 1 293 (Bahuv.); 231 (Tatp.)。一般的傾向からは前者が想定されるが (cf. GELDNER 訳, GRASSMANN, WACKERNAGEL/DEBRUNNER Nachtr. I 144 ad I 261), Tatp. も例証されている, e.g. *sumatī-*, *suṣṭutī-*, *svastī-*。当箇所 *suūtī-* も、以下の理由から後者に属すると思われる。即ち, *suūtī-* = Tatp. である場合, Pada f の表現「助力がよき助力である」が古インド・イラン語に共通の表現形式である可能性が高いからである——古インド・イラン語には、質の良さを表す一般的な形容詞／副詞「よい／よく」が欠如していた。Ved. *sú*, Av. *hū*, OPers. *u* はこの意味で用いられ得るが、単独で使うことが出来ず常に複合語の前半要素としてのみ現れるという制限があった（独立の Ved. *sú* は意味が異なる）。その為、これが述語をなす（形容詞）或いは修飾する（副詞）ためには、複合語 [*sú* + 述語と同語根の名詞] を用いた同語反復の表現に頼らざるを得なかったと考えられる: RV V 8,7 *suṣamīdhā sám idhire* 「よき燃え立たせによって (instr.), 彼らは〔火を〕燃え立たせた, i.e. 彼らはよく〔火を〕燃え立たせた」; (OPers.) Darius Behistan I 21-22 *avam ubartam abaram* 「私はかの者を、よく養われた者として (acc.) 養った, i.e. 私はかの者をよく養った」; PS III 27, 4 *yathāsaḥ samrāt susamrād* 「君が大王としてよき大王である (nom.) ように, i.e. 君が大王としてよき者であるように」。これらの表現形式と用例及び二次文献については, HOFFMANN Aufs. 834ff., GOTÖ Akk. 33 + n. 21 を参照。——当箇所でも同様に, Tatp.

*manāmahe*      *man* 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」      root-aor. 1pl. mid.

<機能> *manāmahe* (主文): 意志表明

### VIII 48,9

*tvām hí nas tanāvāḥ soma gopā      gātre-gātre niṣasátthā nṛcákṣāḥ |*

*yát te vayám pramināma vratāni      sá no mṛḍa suśakhá deva vásyah ||*      Pāda c ≡ X 2,4a *yád vo ...*

きみは、ソーマよ、我々の体の、守り手であり、

(体の) 各部位に、君は座を占めているのだから (perf. ind.) <sup>464</sup>, 男たちに眼差しを向ける者として。

もし、われわれが、君との諸々の誓いを、損なうことになれば / なるとしても (pres. subj.), そういう君は、我々に寛容たれ (pres. iptv.)。よき盟友として<sup>465</sup>, 神よ、よりよいことへ [(我々を) 導け] <sup>466</sup>

*pra-mināma*      *mayi/mī* 「損なう」      nasal pres. 1pl. act.

語幹の形成については、I 2.1.1 5) を参照。

<機能> *pra-mināma* (*yád* 条件節): 見込み

*yád* 節は条件節であるが、主節の内容との関係から、譲歩条件として機能していると言える → B 1.3.1, cf. VII 57,4, X 2,4, X 15,6。

*suūtáyah* は主語 *ūtáyah* が「よい, *su*」ということを述語として述べるための一種の装置であると考えられる。その際後半要素 *-ūtáyah* は, *sú* を用いる為の「統語上の支え」(HOFFMANN op. cit. 836) に過ぎないと言えよう。

<sup>464</sup> 前詩節 *má no aryó anukāmám pára dāḥ* 「決して我々を、敵の望み通りに、君は放棄するな」を受けている。Pāda a, b をそれぞれ二つの文とし、前者は名詞構文として理解した。*hí* に複数の述語が続く場合、*hí* が支配する全ての動詞にアクセントが付き得るため、*niṣasátthā* によって ab を一文と判断することは出来ない、cf. HETTRICH 187ff. + n.71。

<sup>465</sup> *su-śakhāy-* (当箇所 *-śakhāy-*) の意味については、HOFFMANN Aufs. 832f. を参照。

<sup>466</sup> *sá no mṛḍa* と *suśakhá deva vásyah* の二つの文として理解される。後者には、多くの用例を持つ表現、*vásyas (prá) nayi/nī* 「(…を) よりよいこと (*vásyas-*) へと導く」が想定される、HOFFMANN Aufs. 833 + n. 7 “als guter Kamerad (führe uns), o Gott, zu größerem Glück”, cf. GELDNER 訳, RENOU 訳, OLDENBERG Noten ad loc., GRASSMANN, GAEDICKE Acc.: *vásyah* を副詞的に理解: 「～に向かって、～のために」 etc.。

## VIII 53,7 (Vālakḥ.)

yás te sādhiṣṭho 'avase té s;vāma bhāreṣu te |

vayám hótrābhir utá deváhūtibhiḥ sasavāṁso<sup>467</sup> manāmahe ||

君（インドラ）の援助に、最もかなう者

君にとって、そういう者たちで<sup>468</sup>、我々はあるたい（pres. opt.）、諸々の分捕りにおいて。

われわれは、[ソーマの] 献注たちによって、そして、神々への呼びかけたちによって

（既に）勝ち取った者たちとして、思考しよう／[詩歌を] 考え出そう（aor. subj.）。

manāmahe      man 「-s-aor. : 思われる／root-aor. : 思念する」      root-aor. 1pl. mid.

<機能> manāmahe (主文) : 意志表明

nom. (=話し手) + man root-aor. 「～として思考する／[詩歌を] 考え出す」については、VIII 61,11, I 26,8 を参照。

sasavāṁso は manāmahe が表わす行為の結果を表わしている：インドラのために思考した（讃歌を歌った）結果、詩人たちは見返りとして望みのものを勝ち得る。つまり、主語（の修飾句）が動詞の表わす行為の結果を先取りして表わしていると言える（結果先取りの nominative), cf. IX 97,4 svādúḥ pavāte áti vāram ávyam 「甘い [ソーマ] は、羊毛のろ過器を通り抜けて、（ソーマは）清まるべし、i.e. 清まって甘くなるべし」。この種の nom. が主文の意志表明に伴う場合、話し手の意志や要求が既に達成されたものとの確信が強調され、更には殆ど脅しに近い見返りへの要求として機能していると考えられる → A 1.2.3 c), cf. I 114,3, IX 41,2。

<sup>467</sup> san<sup>i</sup> (pres. sanóti) perf. ptcpl. 音韻規則通りであれば、\*sasāvāṁs- < \*sa-sṇH-úās- (~sasanúṣ- < \*sa-sṇH-ús-, cf. sasanúṣi- f. Kh., MS, TS) が予想されるが、RV では一貫して sasāvāṁs- である。HOFFMANN Aufs. 545 によれば、IV 47,10 の Opening (4 syl.) 後の Break において、本来の \*sasāvāṁso が通常の 2 syl. break の影響によって sasa- となり、またそれが \*sasa-vāṁs- 「栄養 (sasá-) に富む」と再解釈された為に (\*sasa-vāṁs-, \*sasa-vant- いずれも m.nom.sg. \*sasaván) この形が出来たとする。このような異形は、権威あるテキストを編纂する段階で他の \*sasāvāṁs- の箇所にも一貫して持ち込まれたとされる, op. cit. 546.

<sup>468</sup> 文の構造からは、yás (sg.) を té (pl.) が受けていると考えざるを得ない、GELDNER ad loc. “yáh – té ist Anakoluthie”. yás には、té (vayám) の中の個々の人間が意識されているか、或いは Pāda a が次の箇所から修正 (yás → yé) 無しに当箇所へ引用された可能性もある、V 35,1ab yás te sādhiṣṭhó 'avasa índra kráuṣ tām á bhara 「君の援助に最もかなう、そういう意力を、インドラよ、君は持って来い」、cf. OLDENBERG Noten ad loc.

## VIII 60,11

ā no agne vayovṛdham rayīm pāvaka śāmsyam |

rāsvā ca na upamāte puruṣpṛham sūnītī svāyaśastaram ||

こちらへ、アグニよ、我々に、精力を増大させる、

公言されるべき財を、清き者よ [君は持ってこい]。

そして、贈り与えよ (aor. iptv.), 我々に、取り計らう者よ、多く欲しがられる、

自らの名声を一層伴う [財] を、よき導きによって。

## VIII 60,12

yéna váṁśāma pṛtanāsu śārdhataḥ tāranto aryā ādīśaḥ |

sá tvām no vardha prāyasā śacivaso jīnvā dhīyo vaṣuvīdaḥ ||

それ (=財) によって<sup>469</sup>、諸々の戦において、力を誇示している者たちに<sup>470</sup>、我々が打ち克つことになるように (aor. subj.),

敵の狙いどもを、越え渡りつつ。

そのきみ (アグニ) は、我々 (から) の好みの品によって、増大せよ (pres. iptv.), 能力を財物とする者よ、

財物を見つける思慮たちを、君は活気づけよ (pres. iptv.)。

váṁśāma

van 「打ち克つ、克ち得る (pres. vanóti)」

root-aor. 1pl. act.

<機能> váṁśāma (同格的関係節): 見込み

<sup>469</sup> yéna は先行詩節の rayí- を受ける。yéna 以下が, rayí- に対して同格的である限定的であるかは断言出来ないが, 先行詩節 (=主文) における多くの修飾句及び, [主文:] iptv. ... [関係節:] yéna + subj. の構造から, 当詩節は目的を表わす (finalsatzäquivalent, op. cit. 671ff.) 同格的関係構文である可能性が高い (→ B 2.3), cf. I 8,1 éndra sānasīm rayīm sajítvānam sadāsāham | várṣiṣṭham ūtāye bhara — 2 ní yéna ... vṛtrā ... ruṇádhamahai 「こちらへ、インドラよ、勝利をもたらす財を、共に勝利する、常に凌ぎ優る、最高級の [財] を、君はもたせ (iptv. 2sg.), (我々への) 助力のために」 — 「それ (=財) によって…障碍たちを、我々が [自分たちから] 防ぎ止めることになるように (subj. 1pl.)」, X 113,10 tvām purūṇy ā bhara s.vāśvyā yébhīr máṁsai nivācanāni śāmsan 「きみは、沢山の、よき馬からなる諸々の財を持って来い (iptv. 2sg.)。それらによって [自分が] 献呈の言葉たちを、宣言しているものと私が思うことになるように (subj. 1sg.)」, IX 108,13–14。

<sup>470</sup> śārdh/śrdh + aryās (arí- acc. pl./gen. sg.) 「敵 (たち) に力を誇示する」の表現は VII 21,5, VII 34,18 に見られるが (GOTO 306), 当箇所は補語を取らない絶対用法であると考えられる。aryās (gen. sg.) は ādīśaḥ にかかり、更に aryā ādīśaḥ を tāranto が支配している。

## VIII 61,11

*ná pāpāso manāmahe nārāyāso ná jádhavaḥ |*

*yád ín n<sub>dv</sub> índraṃ vṛṣaṇaṃ sácā suté sákhāyaṃ kṛṇávāmahai ||*

悪しき者たちとしては、我々は思考すまい／[詩歌を] 考え出すまい (aor. subj.)。

財を出さない者たちとしては、[思考す／考え出す] まい、愚かな／力衰える (?) 者たちとしては、[思考す／考え出す] まい、

今、雄牛であるインドラを、搾られた [ソーマ] のもとで

[我らが] 盟友にすることになる／しようとしている (?) (pres. subj.), まさにその時に。

*manāmahe*            *man* 「-s-aor.: 思われる／root-aor.: 思念する」    root-aor. 1pl. mid.

*kṛṇávāmahai*        *kar/kr* 「為す, 作る」                            nasal pres. 1pl. mid. (possess.-affekt.)

<機能> *manāmahe* (主節): 意志表明

語根 *man* は、現在・アオリスト語幹のそれぞれにおいて、意味の違いを伴う二系列の語幹を形成する: pres. *mánya-*, -s-aor. *maṁs-* → 「思われる, ~を…と思う」(自発的):: pres. *manu-*, root-aor. *man-* → 「思念する, 考え出す」(意志的); I 24,1 を参照。GOTÖ 239 n. 526 によって明確化されたこの図式は RV の全用例に当てはまり、もはや疑いの余地は無いと思われるが、HARÐARSON Wurzelaorist 104ff. n. 49 はこれを認めず、*manāmahe* を含む root-aor. の用例の多くは自発的な意味でも用いられ得ると論じている。しかしその主張は、文献学的な用例の検証に基づくというよりは、目的語 (acc.) の無い「nom. (= 主語) + *man*」の構文を一様に、「自分のことを…と思う」の意味に理解したことに拠ると思われる。彼が挙げる用例は全て、個々の文脈・文意を詳細に吟味するならば、むしろ上記の区別を支持するものである<sup>471</sup>。当該 Sūkta では、詩人がインドラへ送る歌・言葉とそれに対する自分たちへの見返りを確認した後 (第9詩節)、インドラを讃歌によって呼んでいる (第10詩節)。その際に、「我々は自分たちを悪しき者…と思わないようにしよう」との表明は、意味を為さない。むしろ詩人たちは、自分たちがそのような者ではなく、インドラを盟友にするに相応しいことを、積極的に訴えかける場面である。よってここでは、「悪しき者として思考すまい」=「悪しき考えはすまい」、「財を出さない者として思考すまい」=「けちな考えはすまい」といった *man* の絶対用法を想定するか、或いは *man* の目的語として「讃歌、頌辞」

<sup>471</sup> 同様に KÜMMEL Perf. 362ff. (Exkurs 4) も、GOTÖ loc. cit. に対する HARÐARSON の反論が無効であり、そこに提示された用例はむしろ前者の議論を支持するものであるとして、それらを *man* の絶対用法 (以下参照) によって正しく訳し直している。

等の概念を補って理解するのが<sup>472</sup>、文脈に適した解釈と考えられる (I 26,8, V 50,5 も同様)。ただし主語を修飾する nom. には、他の更なる解釈も可能である。即ち、nom. が動詞の行為の根拠になっているとも (「～ではない者たちとして、思考しよう」>「～ではないのだから…」)、或いは行為の結果を先取りして表現している (A 1.2.3 c)) とも解釈し得る：「思考して (その結果) 悪い者たちとはなるまい」。根拠を表わす場合、詩人たちは自分らの資格を明言していることになろうし、結果先取りの nom. は強い要求の裏返しと言えよう。

<機能> *kṛṇāvāmahai* (時を表わす *yád* 節)：見込み (／主語の意志？)

当箇所 *yád* 節には、文脈から目的、時、理由を表わす節のいずれかが可能であるが、目的を表わす *yád* 節に1人称の動詞が使われることはないので、時、理由のどちらかであると判断される。ここでは、*yád ín nú* の理解が重要な鍵を握っている。*yád ín nú* は当箇所の他に I 52,11 に見られ、同じく主節、*yád* 節ともに subj. が用いられる：I 52,11 *yád ín núv índra pṛthiví dāsabhujir áhāni víśvā tatánanta kṛṣṭáyah | áthātra te maghavan víśrutam sāho dyām ānu śavasā barhāṇā bhuvat* 「インドラよ、大地が十倍に、(そして) 諸部族が毎日広がりゆくことになる (perf. subj. *tatánanta*<sup>473</sup>) まさにその時、ここ (地上) で、君の広く聞かれた克服力は、有能な者よ、みなぎる力において、強大さにおいて、天に並ぶことになる (aor. subj. *bhuvat*<sup>474</sup>)」<sup>475</sup> (インドラが *Vṛtra* を殺し大地を広げたという武勇に、アーリア人が新しい土地へと進出していった歴史的事実を帰したものと考えられる、cf. GELDNER ad loc.)。当箇所と共通して言えることは、主文の内容が *yád* 節の事態を契機とし、なおかつそれと同時進行で起こり始めるという点である。この解釈は、*yád* 節全体を強調する *íd* や、*nú* 「今、さて」といった要素のそれぞれの意味・機能とも合致する。当箇所の場合、詩人たちは、これからインドラにソーマを献じて助力を要求するその際に、悪しき姿勢で思考する／讃歌を歌うようなことはすまいと決意しているのである (上記 *manāmahe* の議論も参照)。以上の解釈に基づけば、*yád* 節には、時／理由の副詞節いずれもが考えられる：「まさに～することになるその時に／まさに～することになるのだから」。こうした文意を考慮すると、ここでは更に *kṛṇāvāmahai* が主語 (=話し手) の意志 (desid. ind. と同様の意味で) を表わしている可能性も考えられる：「～しようとしているまさにその時に／～しようとしているのだから」。ただし従属節に主語の意志が確定出来る例は他に殆ど無く、更に慎重に検討する必要がある → B 1.3。

<sup>472</sup> V 13,2 *stómam manāmahe sidhrām*, V 35,8 *stómam manāmahe*, V 48,1 *kád* (恐らく「歌として」) ... *manāmahe*, V 66,3 *suṣṭím ... stómair manāmahe*, VII 66,12 *manāmahe sūktáih*, VII 82,10=VII 83,10 *ślókam ... manāmahe* の各箇所を参照せよ。

<sup>473</sup> MEIER-BRÜGGER Konj.Opt. には未収録。

<sup>474</sup> HETTRICH 373 n. 175, cf. HOFFMANN 236f.

<sup>475</sup> GELDNER “Sobald ... da ...”, HETTRICH (試訳) 373 n. 175 “Auch wenn ... sollte, wird ...”, cf. OLDENBERG Noten ad loc.

## VIII 62,4

ā yāhi kṛṇāvāma ta indra brāhmāṇi vārdhanā |

yébhiḥ śaviṣṭha cākāno bhadram ihā śravasyaté bhadrá indrasya rātāyaḥ<sup>476</sup> ||

君はやって来い。我々はつくろう (pres. subj.), 君のために  
インドラよ、言葉の霊力たちを、増大させるものたちとして<sup>477</sup>,  
それらに、最も強大な者よ、君が喜ぶことになるように (perf. subj.).  
ここで、名声を求めている[私]に、恵みあれ。  
インドラの贈り物たちは、幸あるものである。

kṛṇāvāma

kar/kṛ 「為す, 作る」

nasal pres. 1pl. act.

<機能> kṛṇāvāma (主節): 意志表明

## VIII 62,12#

satyām id vā u tāṃ vayām indraṃ stavāma nāṇṭam |

mahām āsunvato vadhó bhūri jyōtīṃṣi sunvató bhadrá indrasya rātāyaḥ ||

<sup>476</sup> Pāda e は第 1—12 詩節において, Anuṣṭubh の最後に付加されている, cf. I 82,1–5.

<sup>477</sup> adj. vārdhana- 「増大させる, 増強する」はしばしば, インドラその他の神々を「増大させるもの, 増強薬」を意味する実体詞 (n.) として用いられる。とりわけ brāhmaṇ- 「言葉の霊力」に対して使われることが多く, 「神々にとって／のために (dat./gen.), brāhmaṇ- が／を, vārdhana- となる・として存在する／つくる」は, 頻繁に見られる定型表現である: dat./gen. + brāhmaṇ- + vārdhana- + as, bhav/bhū: I 52,7 brāhmāṇindira tāva yāni vārdhanā 「I. よ, きみにとって vārdh. であるところの br. たち」, II 12,14 yāsa (= indrasya) brāhma vārdhanam, VI 23,5 indrāya brāhma vārdhanam yāthāsat 「I. にとって br. が vārdh. であるように」, V 73,10 imā brāhmāṇi vārdhanā- āśvībhyām santu 「この br. たちは, 両 A. にとって vārdh. であれ」, VIII 1,3 asmākam brāhmedām indra bhūte te ... vārdhanam 「我々のこの br. は, I. よ, 君にとって vārdh. となれ」; 但し cf. X 4,7 brāhma ca te namaś ca ... gīḥ ... vārdhanī bhūt 「br. と敬礼と歓迎歌は, 君を／にとって増大させるものである (adj.; gīḥ f. nom. sg. に一致)」; dat./gen. + brāhmaṇ- + vārdhana- + kar/kṛ: II 39,8 etāni vām āsvinā vārdhanāni brāhma stōmaṃ ... akran 「これらの vārdh. たちを, 両 A. よ, br. を, 詠唱を, 君たち両者のために彼らはつくった」(三つは並列ではなく言い換えと思われる, cf. GELDNER 訳), X 49,1 brāhma kṛṇavam māhyaṃ vārdhanam 「br. を私(自分)のために vārdh. として私はつくる」(cf. VI 23,6 brāhmāṇi hí cakṛsé- vārdhanāni, mid. affekt. !), VII 22,7 tūbhyam brāhmāṇi vārdhanā kṛnomi 「きみのために…」, VIII 62,4 kṛṇāvāma ta indra brāhmāṇi vārdhanā (当箇所)。I 80,1 brahmā cakāra vārdhanam 「brāhmaṇ- に与る者=祭官は (m. !), vārdhana- をつくった」も, 同じ内容を意味すると思われる, cf. GELDNER ad loc.。他にも, vārdhana- が ukthā- (I 10,5) 「讃辞」, vācas- (I 114,6) 「言葉」, ghṛtā- (X 69,2) 「液体バター」などを指す用例が見られる。

まさしく、真実にかなったこととして<sup>478</sup>、われわれは、彼を、  
 インドラを、称えよう (pres. subj.), 虚偽としてではなく：  
 大いなる兵器が、[ソーマを] 搾らない者にはあり、  
 [ソーマを] 搾る者には、沢山の光たちがある。  
 インドラの贈り物たちは、幸あるものである。

*stavāma*                      stav/stu 「称える」                      root-pres. 1pl. act.

<機能> *stavāma* (主文) : 意志表明

Pāda cde が真実の言葉として *stavāma* の内容を表しているとすれば、意志は直後で実行されていることになる。或いは、詩人がこの最終詩節で、これからもインドラを称える意志があることを表明しているとすれば、Koinzidenzfall または未来全般に対する話し手の心構えを表明していることになる、→ A 1.2.2 c)。

### VIII 63,11

*bād ṛtvīyāya dhāmāna ṛkvabhiḥ sūra nonumaḥ |*

*jéṣāmendra tváyā yujā ||*

確かに、(太陽の) 時節通りの、定位置のために  
 称讃者たちと共に、勇者よ、我々は(今ここに) 鳴き声を挙げている (pres. ind.).  
 我々は勝利しよう (aor. subj.), インドラよ、君を同盟者として。

*jéṣāma*                      jay/ji 「勝利する、勝ち得る、打ち勝つ」                      -s-aor. 1pl. act.

<機能> *jéṣāma* (主文) : 意志表明

<sup>478</sup> *satyām* は、動詞の行為 (*īndram stavāma*) によって体現される概念を表す *Inhaltsakkusativ* と考えられる、cf. I 110,6 (二次文献を含め、堂山 *yaj* 2003 + n. を参照)。「インドラを称えることが即ち真実である」とは、つまり、その行為(称讃、発語)が実現力を持つことを意味する：*satyakriyā*-の観念 → 注 631。ここでは *satyām* を副詞と解しても、結果的に同様の意味が得られる、cf. GELDNER “nur der Wahrheit gemäß” (次の例では発言内容を強める副詞としてのみ理解可能である：VIII 100,3 *yādi satyām āsti* 「もし本当に彼(インドラ)が存在するのなら」)。

## VIII 67,1

*tīyān nú kṣatṛīyāṁ āva ādityān yāciṣāmahe |*

*sumṛḍikāṁ abhiṣṭaye ||*

今、例の、支配権に与る

アディティの子らに、助力を、我々は頼もう (aor. subj.),

よき寛大さを持つ者たちに、(我々への) 助成のために。

*yāciṣāmahe*

*yāc* 「請う」

-iṣ-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *yāciṣāmahe* (主文) : 意志表明

VIII 68,13<sup>479</sup>

*urūṁ nṛbhya urūṁ gāva urūṁ rāthāya pānthāṁ |*

*devāvītim manāmahe ||*

男たち (i.e. 兵隊) にとって幅広い、牛にとって幅広い

戦車にとって幅広い道として

神々の追跡を<sup>480</sup> 我々は思念しよう (aor. subj.)。

*manāmahe*

*man* 「-s-aor. : 思われる / root-aor. : 思念する」

root-aor. 1pl. mid.

<機能> *manāmahe* (主文) : 意志表明

<sup>479</sup> 当詩節は4人の祭主に対する Dānastuti「祭主の報酬を誉め称える歌」(第14-19詩節)の導入部分。詩人(祭官)たちが、祭主の戦勝と戦利品(牛)とを願って行なう祭式に言及している。

<sup>480</sup> 本来「神々を(祭場へ呼ぶべく)追い求めること」を意味するが、ここでは *man* の目的語として、具体的にその役割を担う「讃歌、言葉」が想定されていると思われる。同様に、アグニ、ソーマ、[ソーマによる] 酔い (*māda-*) などは、*devavī-*「神々を追ひ求める」と呼ばれる。

VIII 70,13<sup>481</sup>

*sākhāyaḥ krátum ichata kathā rādhāma śarāsya |*

*úpastutim bhojáḥ sūrír yó áhrayaḥ ||*

盟友たち（祭官たち）よ、意志力を、君たちは求めよ（pres. iptv.）。

いかにして、我々は果たすことになるのか（aor. subj.），シャラを

賞讃することを、気前のいい主人であるところの、恥知らずであるところの [シャラを]。

*rādhāma*

*rādh* 「成功する，うまくいく」

root-aor. 1pl. act.

<機能> *rādhāma*（疑問文）：見込み

当箇所疑問文は、聞き手への問い掛けであるという点では質問文であるが、主語（1pl.）の中に聞き手が含まれるという点では自問的な性質を持つ：協議 → C 1.2。

## VIII 74,13 (Dānastuti)

*ahám huvāná ārkṣé<sup>482</sup> śrutārvaṇi madacyúti |*

*śárdhāṁśiva stukāvinām mṛkṣā śīrṣā caturṇāām ||*

わたしは、呼ばれれば、リクシャの子

酩酊なす<sup>483</sup> シュルタルヴァン [王] の前で（もとで），

（馬の）群れを のように、たてがみ持つ

四 [頭の馬] の頭を、撫でよう（aor. subj.）。<sup>484</sup>

*mṛkṣā*

*marj/mṛj* 「撫でる」

-sa-aor. 1sg. act.

語幹 *mṛkṣā-* は、RV では *dhukṣā-* (*doh/duh*) に次いで用例の多い -sa-aor. (形成過程については NARTEN 77, 196f. を参照)。当箇所 *mṛkṣā* は、幹母音幹であるにも関わらず、1人称

<sup>481</sup> VIII 70,13-15 は、いつも祭式の報酬として、全祭官で一匹の仔牛しかくれない祭主シャラのことを、皮肉を込めて歌ったもの、GELDNER ad loc.。

<sup>482</sup> unterzählig (OLDENBERG Proleg. 37 + n. 2), 或いは *aarkṣé* (OLDENBERG Noten ad loc.) ?

<sup>483</sup> -cyút- → V 54,1 を参照。

<sup>484</sup> NARTEN 197 n. 573 に従う。詩人は大群を望みつつも、四頭で満足しようと宣言している。

代名詞 *ahám* の存在から subj. 1sg. と同定される<sup>485</sup> (cf. V 75,2 *sánā*), → I 3.1。一般に -sa-aor. の活用は殆ど ind./inj. act. に限られ, 法語形は他に inj. *mṛkṣatam* (iptv. の機能で) 及び iptv. *dhukṣasva* が例証されるのみである (NARTEN 75)。

<機能> *mṛkṣá* (主文): 意志表明

aor. ptcpl. *huvānāḥ* が条件文として機能している。「全体観」アспектを持つアオリスト幹が条件文に用いられると, 主文の動詞が起こる前に完了する事態を表す, → X 34,5 注を参照。ptcpl. *huvānāḥ* と *mṛkṣá* との間にも同様の関係が想定される: 「呼ばれたら, 私は撫でよう」。当箇所では主文にもアオリスト幹の動詞が用いられ, 全体として, 条件が成立すれば即座に主文の行為が遂行されることを強調していると思われる → 総論への補説 1。意志表明は, 条件付き心構え (→ A 1.2.2 b)) を表わす。

### VIII 75,7

*kām u śvid asya sēnayā- agnér āpākacakṣasaḥ |*  
*pañim gōṣu starāmahe ||*

今度は, 一体, どの者を, パニとして  
離れたところに視線の届く, このアグニの軍隊によって,  
牛たちをめぐって, 我々は叩きのめすことになるのか/叩きのめすべきか (aor. subj.)。

*starāmahe*      *star/str* 「叩きのめす, 叩きつけて潰す」      root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *starāmahe* (疑問文)      義務/見込み

接続法の機能が義務か見込みかは決められない → C 1.3。義務の場合, subj. の表わす事態が「アグニの軍隊」の力を借りて為されることや, 後続詩節 8 *mā no devānām víśaḥ ... hāsur* (-s-aor. inj.) 「神々の諸々の族(やから)が, 我々を見捨てることがないようにせよ」, 9 *mā naḥ ... aṁhatīḥ ... ā vadhīt* (-iṣ-aor. inj.) 「我々を, 苦難が打ち殺すことがないようにせよ」などから, 結果的に *kām ... starāmahe* が話し手の意志選択「どの者を…しようか」の意味にも理解される, cf. C 1.1。

<sup>485</sup> OLDENBERG Noten ad loc., NARTEN 197 (cf. loc. cit. n. 571)。NARTEN は, 統辞的に平行する後続詩節において, 同様に subj. *vákṣan* が用いられていることに参照している。

## VIII 81,4

éto n<sub>u</sub>v índraṃ stávāmé- śānaṃ vásvaḥ svarājam | Pāda a = VIII 24,19a, VIII 95,7a  
ná rādhasā mardhiṣan naḥ ||

さあ（来い／行け）、今。インドラを、我々は称えようではないか（pres. subj.）。

財物を、意のままにする、自ら支配する〔彼〕を。

恩恵に関して、我々を、彼はぞんざいにすべきではない（aor. subj.）。

stávāma stav/stu 「称える」 root-pres. 1pl. act.

<機能> stávāma（主文）：勧誘

éta ... 1pl. subj. → A 2.1.

VIII 91,1<sup>486</sup>

kaṇṭhā vār avāyati sómam āpi srutávidat |  
ástam bháranty abravīd índrāya sunavai t<sub>u</sub>vā śakráya sunavai t<sub>u</sub>vā ||

娘が、水のもとへ、降りて行きつつ

ソーマを、進路（道）において<sup>487</sup>、見つけた（aor. ind.）。

家へ（それを）持って行きつつ、彼女は言った（ipf.）：

「インドラのために、私は搾ろう（pres. subj.）、君を。

力強い〔彼〕のために、私は搾ろう（pres. subj.）、君を」<sup>488</sup>

sunavai (2x) sav/su 「搾る」 nasal pres. 1sg. mid. (affekt)<sup>489</sup>

<sup>486</sup> 陰部に毛が無いことで悩む思春期の娘 Apāla が、川辺で見つけたソーマをインドラに捧げて大人の体にしてもらおうとする話。当詩節前半は詩人による導入部であり、後半から第六詩節まで彼女の言葉が続く。Sūkta 全体の概要については、SCHMIDT, H.-P. Some Women's Rites and Rights in the Veda 22 を、また第4詩節については VIII 91,4 を参照。

<sup>487</sup> āpi srutá loc. sg. srutí-（語の意味「途 < 行路 < 流れ」については LIEBERT -ti- 39 を参照）。āpi + loc. については DELBRÜCK 448 を参照。

<sup>488</sup> Cf. IV 25,4cd yá índrāya sunāvāmét<sub>y</sub> āha (= V 37,1d) náre náryāya nṛtamāya nṛṇām 「『インドラのために〔ソーマを〕我々は搾ろう』と言う者がいれば、『男のために、男らしい者のために、男たちの中で最も男である者のために』[と]、...」。

<機能> *sunavai* (主文): 意志表明

ここでは、意志表明の直接の聞き手はソーマ (2人称) であるが、発言を聞かせたい相手 (儀礼対象) は、インドラである。詳しくは、A 1.1.2 c) を参照。

### VIII 91,4<sup>490</sup>

*kuvíc chákāt kuvít kárat kuvín no vásyasas kárat |*

*kuvít patidvíšo yatír índreṇa saṃgāmāmahai ||*

果たして、彼は出来るであろうか (aor. subj.), 果たして、彼は為すであろうか (aor. subj.)。

果たして、我々を<sup>491</sup>、よりよく彼はするであろうか (aor. subj.)<sup>492</sup>,

果たして、主人を厭いつつも<sup>493</sup>

インドラと、我々と一緒にになるであろうか (aor. subj.)。

*saṃ-gāmāmahai gam*「(歩いて)行く <PIE \*踏みしめる>root-aor. 1pl. mid. (reciprocal + sám)

<機能> *saṃ-gāmāmahai* (疑問文): 見込み

<sup>489</sup> GOTŌ Material. (1991) 689.

<sup>490</sup> Sūkta の概要については VIII 91,1 を参照。主人公の娘アパーラーは、インドラらしき一人の男にソーマを捧って捧げるが、当箇所では彼女は、この者が本当にインドラであるかどうか、そして自分の望みを叶えてくれるのかどうか心配になり自問している。

<sup>491</sup> 恐らく同じ年頃の娘を代表して言っている; 3 も同様: *á caná tvā cikitsāmó- 'adhi caná tvā nēmasi*「君に、私たちは注意を向けたくない。(でも) 君に、私たちは気づかないことはない」。ただし、1 *indrāya sunavai* (1sg.) *tvā*, cf. HETTRICH 670.

<sup>492</sup> 「よりよくする」とは、彼女を大人の体にする (毛を生えさせる) ことを指す, SCHMIDT, H.-P. Women's Rites and Rights 15.

<sup>493</sup> *patidvíṣ-* を、多くの注釈や翻訳のように「主人によって憎まれた」と考えるのは難しい。他の、*-dvíṣ-* を後半要素とする複合語と同様に (cf. SCARLATA 246ff.), 「主人を憎む」と理解すべきである (この語に関する二次文献は SCHMIDT op. cit. 15f. を参照)。まだ成熟しきっていない (しばしば思春期に多い問題を抱えた) 体のため、妻として娶ってもらえない (結婚相手を寄せ付けない) という意味か、或いは、性的成熟に達していないために、自ら相手を嫌がるという意味かのいずれかと考えられる。ここでは SCHMIDT op. cit. 16 に従い、*-dvíṣ-*「憎む」を文字通り主体的な動作とする後者の解釈を優先する。前者に関しては、*rodh/rudh ruṇáddhi*「困う・妨げる」を使った類似の用法が比べられる: X 34,2 *ánuvratām āpa jāyām arodham*「(賭博ばかりしていた為に) 本意に合った (誠実な) 妻を、私は遠ざけ [てしまっ] た」, GOTŌ 276 n. 637 を参照。—— *patidvíšo yatír* は、動作の継続を表す [分詞 + *ay/i*] の構文に類して理解される: *patidvíṣ-* が分詞の役割を担う, cf. DELBRÜCK 390。また pres. ptcpl. *yatír* には譲歩的な意味が想定される。アパーラーは体が未成熟なため (将来の) 主人を拒んでいるが (上記参照), インドラはそんな自分とでも交わってくれるだろうかと心配しているのであろう (*sám-gam* は性的な交わりを意味する)。

「先行の文を意味的に補う」独立疑問文 *kuvíd* ... に関しては, C 4 を参照。当箇所 *kuvíd* 文も全て, 先行詩節の要求に際しての話し手の期待や不安を表わしている (HETTRICH 150 n. 22), VIII 91,3 *śánair iva śanakáir ivé- ndrāyendo pári srava* 「段々と, 少しずつ, インドラのために, 滴りよ, 君 (ソーマ) はめぐり流れよ」。 *kuvíd* 文が必然的に自問文であることと, 当箇所の見込みの機能との間には, 何ら直接の関係はない。「*kuvíd* + 1人称接続法」に義務の用例 (「果たして私は～すべきか ?」) が見られないのは, 単なる偶然であろう, cf. VIII 75,7.

## VIII 92,11

*áyāma dhívalo dhíyó 'arvadbhīḥ śakra godare |*

*jáyema prtsú vajrivah ||*

我々は進もう (ではないか) (pres. subj.). 思慮を持つ [君, インドラ] の諸々の思慮を<sup>494</sup>, 競走馬たちとともに, 強力な者よ, 牛の群れを切り分ける者よ, 諸々の戦いにおいて, 我々は勝ち得たい (pres. opt.), ヲアジュラを持つ者よ。

*áyāma* ay/i 「移動する, 進む」 root-pres. 1pl. act.

<機能> *áyāma* (主文): 意志表明／勧誘

文脈からは, 標記のいずれの機能で用いられているか判断出来ない。A 2 補説 2 を参照。

## VIII 92,27

*parākāttāc cid adrivas tvāṁ nakṣanta no girah |*

*āraṁ gamāma te vayām ||*

遠く [向こう] からでさえ, [挽き] 石を伴う者よ, きみ (インドラ) へ 達するべし (pres. subj.)<sup>495</sup>, 我々の 歓迎歌たちは。

<sup>494</sup> OLDENBERG Noten ad loc. 及び GELDNER 訳は, *dhívalo dhíyó ... jáyema* に, 敵対する詩人の思慮を打ち負かすことを想定している。しかし他の用例 (VI 55,3, VII 83,8, VIII 2,40) では, *dhívant-* が敵対者を表すことはない。ここでは, 聞き手であるインドラを指す形容詞と理解した。話し手である詩人は, そのインドラの思慮を, 敵対者に打ち勝って手に入れたいと願っているものと思われる。

<sup>495</sup> *nákṣa-*<sup>tilte</sup> 「到達する」, GOTÖ 191f.; 語根 *naś/ś* からの派生の可能性については NARTEN 160 を参

君のために 馳せ参じよう (aor. subj.), われわれは。

(*āraṃ-*)*gamāma* *gam* 「(歩いて) 行く < PIE \*踏みしめる」 root-aor. 1pl. act.

*āraṃ gam* (+ dat.) は RV で3回例証されており、いずれもアオリスト語幹でのみ見られる：X 9,3 *tásmā āraṃ gamāma vo*, VII 68,2 *āraṃ gantam* (iptv. 2du.) *haviṣo vītāye me*。これらの動詞形は、恐らく名詞 *araṃ-gamā-* 「(必要な時にいつでも) 駆けつける, 助けに出向く」 (VI 42,1, VIII 46,17 *araṃgamāya jāgmaye* 「助けに出向く, 何時でも出向く [インドラに]」) から逆形成されたものと考えられ、意味もこれに準じて判断される：「(～のもとに, dat.) 駆けつける, 馳せ参じる, 助けに出向く」 etc.。

<機能> (*āraṃ-*)*gamāma* (主文)：意志表明

### VIII 93,5

*yād vā pravṛddha satpate ná marā iti mānyase* |

*utó tát satyám ít táva* ||

或いは、もし、増長した略奪隊の長よ、

「私は死ぬことはない(であろう) (aor. subj.)」と、君が思っているなら (pres. ind.)<sup>496</sup>, それもまた<sup>497</sup>, 君(にとって)の、まさしく真実ではある。

*marai*

*mar/mṛ* 「死ぬ」

root-aor. 1sg. mid.

照。*nakṣanta* は subj., inj. いずれとも解釈可能。*gamāma* を考慮すると, subj. である可能性は高い。同様に *nakṣanta* VII 42,1, VIII 103,1 及び *nákṣanta* X 88,17 も subj. であると思われる, HOFFMANN 258 n. 296. mid. 活用は, affekt. 「自分のために到達する」, つまり「自ら選んで～に到達する」, 「意図的に～を目指して到達する」を意味すると思われるが (cf. X 97,17 *aśnāvāmahai*), 単に *-anta* が 3pl. act. の語尾 *-an* の代わりに使われている可能性も残る, cf. JAMISON *-anta* (III 21) 149–169 (ただし *nákṣanta* は論文で扱われておらず, この現象に特有とされる音節や韻律上の特徴も *nákṣanta* には当てはまらない)。

<sup>496</sup> *yād* 条件節 (“eventualer Konditionalsatz”, HETTRICH 357ff.) には subjunctive が用いられることが多いが, これは, 仮定された行為が殆ど未来に関することだからである。当箇所のように, 現在のことが仮定条件として述べられる場合は, ind. pres. が用いられる (2x), HETTRICH 359。一方, 極端に実現性の低い行為についての条件節 (“fiktiver Konditionalsatz”, HETTRICH 361ff.) においては, 常に opt. が用いられる。

<sup>497</sup> *tát* は *yát* を受ける時の副詞ではなく, インドラが考えた内容「…」自体を受ける指示代名詞である, KLEIN Disc.Gram. I 450 (cf. loc. cit. n. 86)。 *utó* はこの *tát* にかかる。

*mar/mṛ* の活用と態については I 91,6 を参照。Cf. I 191,10–12 *marāma*。

<機能> *marai* (主文) : 見込み

インドラは、自分が未来永劫死ぬことはないということを、普遍的真理として語っている可能性が高い → A 3.2 b), cf. I 191,10 *marāma*。

*mar/mṛ* の接続法 (aor. subj.のみ) は全て否定文で用いられ、見込みの機能を持つ。

### VIII 95,6

*tām u śtavāma yām gīra indram ukthāni vāvṛdhúh |*

*purūṇīy asya páuṃsīyā śiśāsanto vanāmahe ||* Pāda d = IX 61,11c

その者を、また、我々は称えよう (pres. subj.), 歓迎歌たちが、讃辞たちが (既に) 増大させてある (perf. ind.) インドラを。

彼の、多くの諸々の男らしさを

勝ち取りたいと欲すれば、我々は克ち得ることになろう (aor. subj.)。

*stavāma*                      *stav/stu* 「称える」                      root-pres. 1pl. act.

*vanāmahe*                      *van* 「打ち克つ、克ち得る (pres. *vanóti*)」                      root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *stavāma* (主文) : 意志表明

*vanāmahe* (主文) : 見込み

*san*<sup>i</sup> 「勝ち取る、獲得する」は事実上 *van* の同義語として用いられており, desid. pres. ptcple. *śiśāsanto* は、「主語 (=話し手) が欲すればいつでも」を意味する条件節として機能している : 条件付き見込み, → A 3.2 b)。ほぼ同様の中味は, *yád + vaś* 「欲する, 意志する」の subj. によっても表される : I 165,7 *bhūrīni hí kṛnāvāmā śaviṣṭhé- indra krátvā maruto yád vāsāma* 「多くの事々を、最も強大な者よ、我々は為すことになろうとも、インドラよ、意志力によって、マルトたちよ、我々が意志することになれば」, → B 3。

## VIII 95,7

éta n<sub>iv</sub> indram stāvāma śuddhām śuddhéna sām<sub>a</sub>nā | Pāda a = VIII 24,19a, VIII 81,4a

śuddhāir ukthāir vāvṛdhvāṁsam śuddhā āśīrvān mamattu ||

さあ（来い／行け），今。インドラを，我々は称えようではないか（pres. subj.），

清らかな〔彼〕を，清らかな旋律によって，

清らかな讃辞たちによって，（既に）増大した〔彼〕を<sup>498</sup>。

ミルクの混ざった，清らかな〔ソーマ〕は，（彼を）酔わせよ（perf. iptv.）。

stāvāma

stav/stu 「称える」

root-pres. 1pl. act.

<機能> stāvāma（主文）：勧誘

éta ... 1pl. subj. → A 2.1。

## VIII 96,6

tām u śtavāma yā imā jajān viśvā jātān<sub>i</sub>y āvarāṇ<sub>i</sub>y asmāt |

indreṇa mitrām didhiṣema gīrbhīr ūpo nāmobhir vṛṣabhām viṣema ||

その者（インドラ）を，また，我々は称えよう（pres. subj.），これらの，一切の

彼より後に生まれた者たちを，生み出したところの〔彼を〕（perf. ind.）。

インドラと，契約を，我々は定めたい（pres. opt.）<sup>499</sup>，歌たちによって。

<sup>498</sup> vārdh/vṛdh の現在語幹では，自動詞「増大する」は mid. によって（vārdha-<sup>ie</sup>），他動詞「増大させる」は act. によって表される（vārdha-<sup>ii</sup>），HOFFMANN Aufs. 253, 262（他の参考文献は GOTÖ 290 n. 683 を参照）。アオリスト語幹（root-aor.: vārdh-/vṛdh-）および完了語幹の中には，act. 語形の自動詞が少なからず見られることから，語根本来の意味は「増大する」であり，もともとは，現在語幹＝mid. ∴ アオリスト／完了語幹＝act.，という態の分布を有していたと考えられる，GOTÖ 67, 291. perf. act. の他動詞的用法は，pres. vārdhati に対応して発展した後の転用である，KÜMMEL Perf. 470, 473. 当詩節と先行詩節 VIII 95,6 においては，同一の内容が，perf. act. の自動／他動それぞれの用法によって表現されている：

VIII 95,6 tām u śtavāma yām gīra indram ukthāni vāvṛdhūh 「その者を，また，我々は称えよう，歓迎歌たちが，讃辞たちが（既に）増大させてあるインドラを」

VIII 95,7 indram stāvāma ... ukthāir vāvṛdhvāṁsam 「インドラを，我々は称えようではないか，…讃辞たちによって（既に）増大した〔彼〕を」

<sup>499</sup> desid. 語幹から形成された opt., cf. dā 「与える」 desid. opt. 1sg. act. dūtseyam. 当箇所においては，Pāda d viṣema (pres. opt.) との機能的な差異を認めることは出来ない，cf. MEIER-BRÜGGER Konj.Opt. 165.

敬礼たちを伴って、雄牛（インドラ）に、我々は身を寄せたい（pres. opt.）。

*stavāma*                      *stav/stu* 「称える」                      root-pres. 1pl. act.

<機能> *stavāma*（主節）：意志表明

### VIII 100,2<sup>500</sup>

*dādhami te mādhuṇo bhakṣām āgre hitās te bhāgāḥ sūtó astu sómah |*

*ásaś ca tvām dakṣiṇatāḥ sákhā mé 'adhā vṛtrāṇi jaṅghanāva bhūri ||*      Pāda d = X 83,7b

密酒を味わうことを、初めに、君（ヴィシュヌ）に、私は定める（pres. ind.）。

君の分け前として、搾られたソーマが、定められて、あれ（pres. iptv.）。

きみが、盟友として、私の右側に、居ることになれば（pres. subj.），<sup>501</sup>

そうすれば、多くの障碍たちを、我ら両者は[一つ一つ]打ち倒すことになろう（pres. subj.）。

*jaṅghanāva*                      *han* 「打つ、殺す」                      intens.I pres. 1du. act.

語幹形成については、X 119,10 を参照。

intensive の機能は「対象の分割」「Objektsdistribution」：動詞の表す行為は「複数の対象に向けられており、それが各対象に対し個別に遂行されるという理解において、『繰り返し』行われる」，SCHAEFER<sup>502</sup> 86f., 204, cf. 「単純な繰り返し」：X 119,10 *jaṅghānāni*, VII 24,6 = VII 25,6 *vevidāma*。

<sup>500</sup> 当詩節と X 83,7 とは、同一 Pāda (d-Pāda = X 83,7b) を含むこと以外にも、多くの類似点を示す：密酒の献納につい (ab-Pāda) → cf. X 83,7cd；神格を自分の右側へ呼ぶことについて (c-Pāda) → cf. X 83,7a。

<sup>501</sup> *ca* が従属接続詞として機能する場合は条件文を導くことが多く、その際殆どが subj. を動詞にとる。参考文献を含め KLEIN Disc.Gram. I 238–256, HETTRICH 250–260 を参照，cf. KS XI,6: 151,9 *ca* + future, Pat. Mahābhāṣya ad Pān. VIII 1,30 *ca* + future (HOFFMANN 216 n. 205 より)；ŚB VI 2,2,29 *ca* + optativ (ŚB では従属接続詞の *ca* はこの一箇所のみ，DURKIN Konditionalsätze 39f.)。当箇所 *ca* + subj. にも条件文が想定される，KLEIN op. cit. I 242, HETTRICH 253 (X 108,3 も参照，cf. 時を表す *ca* 文 → X 34,5, X 108,9?)。当詩節に見られるように、従属節を導く *ca* の多くは、4 Pāda からなる詩節の第三 Pāda に（二番目の要素として）現れる (X 108,3 も参照)。KLEIN op. cit. I 239ff. は、元々は前半 2 Pāda と、複文である後半 2 Pāda とをつないでいた等位接続の *ca* が、本来動詞のアクセントだけで従属節をマークしていた第三 Pāda の文の従属接続詞として再解釈されたと考える。そのため彼は、*ca* を含む文（第三 Pāda）と前半 2 Pāda との間にも「ゆるやかなつながり」を認めている：“and if …”。

<sup>502</sup> DRESSLER Verbale Pluralität 69 の用語 “objektsdistributiv” を踏襲。

＜機能＞ *jaṅghanāva* (主文)：見込み

話し手（詩人）とその集団は、障碍を倒すためにヴィシュヌの助力を求め、密酒を献じている。ヴィシュヌがそれに応じた場合の結果として (*ādha* 「その時は」), ヴィシュヌへの勧誘文は想定し難い。話し手は、ヴィシュヌの協力があれば必ず敵を倒すことが出来るという確信を述べており、またそれが密酒を献じる理由でもある。

当詩節の *ca* 条件文に対する帰結文 = Pāda d は X 83,7 にも現れるが、後者においては iptv. 2sg. が条件節としての機能を担っていると言える：*abhī prēhi dakṣiṇatō bhavā mé 'adhā vṛtrāṇi jaṅghanāva bhūri* 「向かって君（マニユ）は進め。私の右側に君は現れよ（pres. iptv.）。そうすれば、多くの障碍たちを我ら両者は「一つ一つ」打ち倒すことになる（pres. subj.）。いずれも条件付き見込み → A 3.2 b)。

### VIII 100,3

*prā sú stōmaṃ bharata vājayānta indrāya satyām yādi satyām āsti |*

*néndro astīti néma u tva āha ká iṃ dadarśa kām abhī śtavāma ||*

しかと、頌辞を、君たちは提示せよ (pres. iptv.), 戦利品を求めつつ、

真実にかなった[頌辞]を<sup>503</sup>, インドラに、もし、本当に、彼が存在するのであれば (pres. ind.)。

「インドラは存在しない (pres. ind.)」と、或る者は、また或る人は<sup>504</sup>, 言っている (perf. ind.)。

「誰が、この者を、見たのか (perf. ind.)」<sup>505</sup>。誰に向かって、我々は称えかければよいのか (pres. subj.)」(と)。

*abhī-śtavāma*

*stav/stu* 「称える」

root-pres. 1pl. act.

<sup>503</sup> = 「実現力のある讃辞」, → VIII 62,12。

<sup>504</sup> *u tva-* (indef. pron.) の連続は RV で 5 回例証されている, KLEIN Particle *u* 92ff.。いずれも先行する別の (*u*) *tva-* と関係しており, *u* は conjunctive として機能する, e.g. VII 101,3 *u tvad ... u tvad ...*, X 71,8 *tvam ... u tve ...* 「或る… (は), …また/そして, 或る… (は)」(KLEIN loc. cit. によれば, これらの用例の一部は \**utā tvaḥ* から syncope によって出来たものであるという)。op. cit. には当箇所への言及はなく, また同著者 Disc.Gram. II 9 も “uncertain” な用例とするのみである。しかし, 当箇所では *u* が *néma-* と *tva-* とをつないでいるのは間違いないと思われる。*tva-* に類似の indef. pron. *néma-* が用いられることは想像に難くなく, その上で他の 5 箇所と異なっているのは, *néma-* と *tva-* とが動詞 (*āha*) を共有している点だけである。従って, *néma u tva* は, (*u*) *tva-* ... *u tva-* ... の一種と判断される。conjunctive として機能する *u* については, IV 21,4, VIII 95,6 も参照せよ。

<sup>505</sup> perf. ind. *dadarśa* は, 過去の「見る」という行為を経験として現在持っていることを表す: 「…したことがある」。これは, KÜMMEL Perf. の定義では “resultativ-charakterisierend” にあたる, cf. op. cit. 7f., 231f.。ただし, 否定文や(反語的)疑問文においては, 同書が別途設定する “komprehensiv” (「これまでずっと～してきた」)との境界は必ずしも明らかではない, cf. op. cit. 73f.。

<機能> *abhī-ṣṭavāma* (疑問文): 義務

# VIII 100,12

*sákhe viṣṇo vitarām ví kramasva dyáur dehí lokām vájrāya viṣkábhe |*

*hánāva vṛtrām riṇácāva síndhūn índrasya yantu prasavé vísrṣṭāḥ ||*

盟友ヴィシュヌよ、より広く、君は歩み渡れ (pres. iptv.)。

天よ、世界を、ヴァジュラに与えよ (aor. iptv.), (ヴェシュヌが世界を) 広げ支えるために。

ヴリトラを、我ら両者 (ヴィシュヌとインドラ) は打ち殺そうではないか (pres. subj.)。

スインドゥ (河) たちを、我ら両者は開放しようではないか (pres. subj.)。

インドラの督励のもとに、進め (pres. iptv.), 解き放たれた [河] たちは。

<i>hánāva</i>	<i>han</i> 「打つ, 殺す」	root-pres. 1du. act.
<i>riṇácāva</i>	<i>rec/ric</i> 「置いていく, 後にする」	nasal pres. 1du. act.

<機能> *hánāva* (主文) / *riṇácāva* (主文): 勧誘

IX 41,2<sup>506</sup>

*suvitāsya manāmahé 'āti sétuṃ durāvṛyām |*

*sāhvāṃso dāsyum avratām ||*

よき進行について、我々は思念しよう (aor. subj.)<sup>507</sup>,

困難な災いを伴う<sup>508</sup>, 跳び石を<sup>509</sup> 越えて,

誓いを持たない, 夷狄を, 征服した者たちとして。

*manāmahe*      *man* 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」      root-aor. 1pl. mid.

<機能> *manāmahe* (主文): 意志表明

*sāhvāṃso* 「(既に) 征服した者たちとして」は, *manāmahe* の結果を先取りして表す nominative: 「思念した結果, 征服する」(cf. IX 97,4 *svādúḥ pavāte*)。これと意志表明とによって, 讃歌や儀礼の奏功を確認したり, 或いはその見返りを神々に迫っているものと思われる → A 1.2.3 c), cf. I 114,3, VIII 53,7。

## IX 53,2

*ayā nijaghnīr ójasā rathasaṃgé dhāne hité |*

*stāvā ābibhyuṣā hṛdā ||*

打ち倒す者として, この [讃歌] によって, 力によって

<sup>506</sup> 第 1-2 詩節では, 外敵 (*dāsyu-*) たちを倒して進む様子が語られている, cf. IX 41,1 *ghnāntaḥ kṛṣṇām āpa tvācam* 「黒い皮膚 (= *dāsyu-*) を打ち払いながら [我々は...]」。ここでは, 危険に満ちた橋 (跳び石; 以下参照) を無事越えて進軍することが, ソーマがろ過器を通り抜けて清まっていく様に比べられている, cf. GELDNER ad loc., OLDENBERG ad loc.。

<sup>507</sup> *man* (*mānu-*<sup>ie</sup>, facient.) + gen. の用例は *man* + acc. に比べて非常に少ない: VI 47,29 *te*, V 22,3 *te āvasaḥ*, V 52,15 *eṣām*, X 2,5 *yajñāsya*, cf. GAEDICKE Accusativ 46。後者が何らかの対象そのものを思念する / 考え出すことを表すのに対して, *man* + gen. は, 対象の内容について考えを巡らせる・思索することを表す。これは, 対象を全体的に捉えるか (acc.) 或いは部分的に捉えるか (gen.) という格の機能の違いに帰せられる, cf. GOTÖ Funktionen des Akkusativs 27, 37。

<sup>508</sup> *durāvī-* は, *dur* + *āvī-* (f. 「病, 苦痛」TS+ ← \*「(痛みが) 襲うこと ('Anfall')」< *ā* + *vay*<sup>i</sup>/*vi*, HOFFMANN Aufs. 395) からなる Bahuvrihi と解釈した, cf. OLDENBERG loc.cit., SCARLATA 497 “schwer zugänglich” (\**āvī-* 「近寄ること (“Zugang”)」を前提とした Bahuv. として); RV *durāvṛyām* の対応箇所 SV *durāvṛyām*, WACKERNAGEL/DEBRUNNER Nachtr. I 115 ad I 209。

<sup>509</sup> *sétu-* は, 川を渡る為の踏石・飛石のことと思われる, cf. X 53,8 *ásmanvati* 「石を伴う [川]」。橋としての役割を担うものとして, ここでは特に「跳び石」という訳語を用いる。

戦車合戦において、置かれた財産をめぐって

私は称えよう<sup>510</sup> (pres. subj.), 怯えていない心臓を伴って。

*stávai*

*stav/stu* 「称える」

root-pres. 1sg. mid. (affekt.)

語幹については, III 32,14 を参照。

<機能> *stávai* (主文): 意志表明

### IX 61,11

*enā víśvān,ī aryá ā dyumnāni mānuṣān,ām |*

*síṣāsanto vanāmahe ||* Pāda c = VIII 95,6d

この者(ソーマ)によって、敵から<sup>511</sup>, 一切の

マヌの子孫たちの、諸々の輝かしさを

勝ち取ろうと欲すれば、我々は克ち得ることになろう (aor. subj.)。

*vanāmahe*

*van* 「打ち克つ, 克ち得る (pres. *vanóti*)」

root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *vanāmahe* (主文): 見込み

*síṣāsanto* は *vanāmahe* の条件として機能する: 条件付き見込み, → A 3.2 b)。VIII 95,6 も参照。

### IX 74,5

*ārāvid aṁśúḥ śacamāna ūrmīnā devāv,yaṁ mānuṣe pinvati tvācam |*

*dádhdāti gárbham áditer upásttha ā yéna tokāṁ ca tánayaṁ ca dhāmahe ||* Pāda d = I 92,13c

<sup>510</sup> 恐らくソーマが目的語として想定されるが、ここで強調されているのは、詩人が称えるという行為において「怯えていない心臓をもって」いることである。

<sup>511</sup> *aryáḥ* (abl. sg.) + *ā* としての解釈は、敵の手にある諸々の良いものを神々の力によって獲得するというモチーフに最もよく合致する, OLDENBERG Kl.Schr. 78ff., THIEME Fremdling 60f., 68: "... gewinnen wir alle [Herrlichkeiten] vom Fremdling fort, [alle] die Herrlichkeiten der Menschen".

ソーマ（の茎）が、（今まさに）鳴き声を挙げた（aor. ind.）、波を伴いながら<sup>512</sup>。  
 神々を追い求める<sup>513</sup> 革袋を<sup>514</sup>、マヌシュ（人間）のために、それは膨らませている（pres. ind.）。  
 アディティのお腹に、胎児を、それは置く（pres. ind.）、  
 それによって、種と子孫とを、[自らのもとに] 我々が置き定めることになるところの／な  
 るように（aor. subj.）。

*dhāmahe*

*dhā* 「置く；置き定める」

root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *dhāmahe*（同格的／限定的関係節）：見込み

関係節が限定的であるか同格的であるかは判断出来ない。なお、I 92,13c に見られる同一  
 の関係節は、限定的に機能している：*tác citrām ... yéna tokām ca ...*。

#### IX 76,5#

*vṛṣeva yūthā pári kósam arṣasṛy apām upásthe vṛṣabhāḥ kánikradat |*

*sá índrāya pavase matsaríntamo yáthā jéṣāma samithé t<sub>u</sub>vótayaḥ ||*

雄牛が（牧牛の）群れ[の回り]を のように、桶の回りを、君（ソーマ）は巡っている（pres. ind.）。

水たちの膝の上で、繰り返し叫び声を挙げている雄牛（君）は。

その[君]は、インドラのために、清まる（pres. ind.）、最も酔わせる者として、

<sup>512</sup> 動詞 *sac* は acc., instr., loc. を支配し得るが、特に前二者が多く用いられる。*sac* + acc. は、対象に対する空間的な動きを強く表す：「～に伴う、付いて行く；～へ向かう、～に達する、～に加わる」, cf. II 30,11 *apatyasāc-*。これに対して *sac* + instr. は、むしろ対象へと到った結果、それと一緒にいる／それを伴っていることに重点を置いた表現である、HETTRICH *Rektionaler und autonomer Kasusgebrauch* (1990) 88, 95ff.。その際、主語（nom.）は必ず神々か人で、常に主体性を持ち、instr. はその付添人／付随物を表す（op. cit. 93）：「～を従える、引き連れる、伴う；取得する」, cf. I 110,6。当箇所 *sācamāna* (ptcpl.) *ūrmīnā* (instr.) は、ソーマが水と混ぜ合わされて後、それが波を伴った（i.e. 水面を波立たせて音を立てている）状態にあることを表している（cf. Sāy.）。一方、*sac* + acc. が用いられた場合には、ソーマが水と混ざり合う過程が動的に捉えられていると言えよう：IX 86, 8 *rāja samudrām nadyò ví gāhate 'apām ūrmīm sacate sīndhuṣu śrītāḥ* 「王（ソーマ）は海に、川たちに流れ込む。水たちの波に、それは添い行く／交わる、大河たちの上に寄り掛かって」。

<sup>513</sup> *devāvī-* (Pāda の先頭) ~ *devāvī-* (その他), GRASSMANN s. v., cf. SCARLATA 499. *-vī-* の意味は語根に忠実に訳した、SCARLATA 498: “auf die Götter zugehend, den Göttern zugewandt” (cf. GELDNER “den göttereinladenden Schlauch”; ad IX 1,4b + n. 2)。

<sup>514</sup> *tvāc-* は、GELDNER ad loc. によれば、ここではソーマ祭式に使う革袋そのものではなく、ソーマ桶の比喩である。また次 Pāda の「アディティの下腹部」も、同様にソーマを桶を指すという。

君による助けを伴って、合戦において、我々が勝利することになるように (aor. subj.)。

*jéṣāma*                      *jay/ji* 「勝利する、勝ち得る、打ち勝つ」                      -s-aor. 1pl. act.

<機能> *jéṣāma* (*yáthā* 目的節) : 見込み

#### IX 97,4

*prá gāyatā<sub>a</sub>bh<sub>i</sub>y ārcāma devān sómaṃ hinota mahatē dhānāya |*

*svādúḥ pavāte āti vāram ávyam á sidāti kaláśaṃ devayúr naḥ ||*

君たち（ウドガートリたち）は歌い出せ (pres. iptv.)。我々（ホートリたち）は唱えかけよう (pres. subj.)、神々に。

ソーマを、君たち（アドヴァリュたち）は送り出せ (pres. iptv.)<sup>515</sup>、大いなる財産のために。<sup>516</sup>

羊毛の濾過器を通り抜けて、（ソーマは）清まって甘くなるべし (pres. subj.)<sup>517</sup>。

我々の桶へと、彼は腰を下ろすべし (pres. subj.)、神々を求めて。

*abhí-arcāma*                      *arc/ṛc* 「(讃歌を) 歌う、唱える」                      full-gr. them. pres. 1pl. act.

<機能> *abhí-arcāmā* (主文) : 意志表明

<sup>515</sup> ソーマを馬に見立てて、インドラを連れてくるよう送り出している、cf. 第 5cd—6ab 詩節: *nṛbhi stāvāno ānu dhāma pūrvam āgann indram mahatē sāubhagāya || stotrē rāyē hārīr arṣā punānā indram mado gachatu te bhārāya* 「男たちによって称えられつつ、以前からの定位置（道筋？）に沿って、インドラの方へ彼（ソーマ）は進んだ、大きな幸運のために」、「称え手のために、財産を求めて、黄緑の[馬]として、清められつつ君（ソーマ）は走れ。インドラの方へ、君の酔いが進め、(財の) 収穫のために」。

<sup>516</sup> Pāda ab には、3種の祭官の職能が認められる: *udgātār*-「ウドガートリ祭官」→サーマン (*sāman*-), つまり旋律 (付きの詩節), を歌う (*gā*); *hótar*-「ホートリ祭官」→RV 詩節 (*ṛc*-) を旋律無しで、つまり *arká*-として唱える (*arc/ṛc*), cf. 林能輝 印佛研 50 「R̥g-Veda における *arká*-の語義について」; *adhvaryú*-「アドヴァリュ祭官」→諸々の祭式行為を実行する。前二者については次も参照: I 173,1 *gāyat sāma ... ārcāma tād* 「旋律（サーマン）を（ウドガートリは）歌う、…それを、我々（ホートリたち）は唱えよう」。

<sup>517</sup> *svādúḥ pavāte* 「甘いものとして清まる」=「清まった結果甘くなる」: 結果を先取りして表わす nominative。意志表明と用いられる場合に関しては、A 1.2.3 c) 及び I 114,3, VIII 53,7, IX 41,2 を参照。

## IX 97,51

*abhí no arṣa div<sub>i</sub>yá vásūn<sub>i</sub>y abhí víśvā páṛthivā pūyámānaḥ |*

*abhí yéna dráviṇam aśnávāmā- abh<sub>i</sub>y āṛṣeyám jamadagniván naḥ ||*

我々のために、天に属する財物たちへ向かって、君（ソーマ）は流れ行け（pres. iptv.），  
清められつつ、一切の、大地に属する〔財物〕たちへ向かって、  
それによって、財産を、我々が獲得することになるところの／なるように（pres. subj.）<sup>518</sup>，  
我々のリシたることへ向かって<sup>519</sup>，ジャマッドアグニの（時の）ように。

(abhí ...) aśnávāmā      naś/aś 「到達する、手に入れる」      nasal pres. 1pl. act.

Pāda c の解釈によって、abhí ... aśnávāmā<sup>520</sup> 或いは aśnávāmā, 下注を参照。

<機能> (abhí ...) aśnávāmā (限定的関係節)：見込み

yéna が āṛṣeyám を受けるとの前提で（下注），yéna ... aśnávāmā は目的節と同様に機能する限定的関係節と判断する → B 2.2.

## IX 101,9

*yá ójīṣṭhas tám ā bhara pávamāna śravāy<sub>i</sub>yam |*

*yāḥ páñca carṣaṇīr abhí rayīm yéna vānāmahai ||*

最も力のあるそれを、君（ソーマ）は持って来い（pres. iptv.），  
清まりつつある者よ、耳にされるべき〔それ〕を、  
五つの部族どもを<sup>521</sup>，圧倒しているところの<sup>522</sup>

<sup>518</sup> GELDNER とともに、yéna は āṛṣeyám を受けるものと理解した。或いは、Pāda a-d 全てに abhí (arṣa) + 名詞の平行構造を想定し、yéna は省略された abhí の目的語 (vásu- etc.) を受けると考えるべきか：HETTRICH 550 “... (fließe uns das) zu, wodurch wir Reichtum erlangen werden, ...”。後者の解釈には、先行する二つの詩節が比べられる：X 97,49; 50 abhí ... arṣa ... abhí ... abhí ... abhí ...

<sup>519</sup> RENOU EVP IX 51 “afin l’état de Prophète”, cf. GELDNER “um ... den Namen eines Ṛṣi zu gewinnen”

<sup>520</sup> abhí-naś/aś → VI 49,15.

<sup>521</sup> páñca carṣaṇī- 「五つの部族」は、páñca kṛṣṭí-/kṣití- 或いは páñca jáná-/mánuṣa-/mánáva- 「五つの民たち」とも呼ばれ、RV, AV を中心に (TS, KS, AB, BĀU にも) 頻繁に言及されている、MACDONELL/KEITH Vedic Index I 466 n. 1 を参照。特に páñca (~víśva-) carṣaṇī- は、RV では全て 8 音節の定型表現に現れる：V 86,2 yā páñca carṣaṇīr abhí (i.e. indrāgní-), VII 15,2 yāḥ páñca carṣaṇīr abhí (i.e. agní-), V 23,1, IV 7,4 víśvā yāś carṣaṇī abhí (i.e. agní-), = I 86,5 (i.e. Opferer, cf. GELDNER I 111 n. 3)：「五つの／全ての部族を

財を、それによって、我々が打ち克つことになるところの／なるように (aor. subj.)<sup>523</sup>。

*vānāmahai*      *van* 「打ち克つ、克ち得る (pres. *vanóti*)」      root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *vānāmahai* (同格的／限定的関係節)：見込み

関係節 *yéna ... vānāmahai* は、既に多くの(限定的)関係節及び形容詞によって修飾された先行詞 (*tám ... rayím*) を受けるため、限定的／同格的のいずれかを確定することは困難である (cf. HETTRICH 741) → B 2.1。代名詞の照応関係 (*tám ... yéna*) 及び他の二つの関係節を考慮すれば限定的に考えられるが、一方、「2人称命令法 + *yéna ...* 1人称接続法」の構造は、目的を表わす同格的関係節の可能性を示唆する, cf. B 2.1。ただし前者の場合も、事実上主文の目的を表わすものと理解される, cf. X 156,2, I 192,13, VIII 27,22, I 160,5, V 54,15。目的を表わし得る同格的関係節と限定的関係節との構造上・意味上の違いについては, B 2 及び 2.2 を参照。

#### IX 108,13

*sá sunve yó vásūnām      yó rāyām ānetā yá ídānām |*

*sómo yáh sukṣitīnām ||*

彼(ソーマ)が、(今)搾り出されている (pres. ind.), 財物たちを

財たちを、滋養たちを、

よき居住地を持つ者たちを、連れ来る者である、ソーマが。

#### IX 108,14

*yásya na índrah píḇād yásya marúto      yásya vāryamāṇā bhágah |*

*ā yéna mītrāvāruṇā kārāmahé-      ndram āvase mahé ||*

圧倒している (*abhí [sánti]*) とところの [アグニ etc.]。しかし、「五つの部族」等が具体的に何を指すのかは明らかではない。MACDONELL/KEITH op. cit. I 466ff. によれば、(神々やガンダルヴァなど) 人間以外を多く含む五種の存在 (AB, Yaska), 4 Varṇa の人々 + Niśāda (Sāyana 他), 地上の全部族=四方角の非アーリア部族+アーリア人 (ROTH, GELDNER) など諸説があるが、同書が有力と見ているのは、RV の中で一組で扱われることのあるアーリア諸部族——Anu, Druhyu, Yadu, Turvaśa, Pūru——を表していたとする ZIMMER Altindisches Leben 119ff. (loc. cit.) の説である。詳しくは loc. cit. を参照。

<sup>522</sup> *abhí* + acc. については VI 49,15 を参照。

<sup>523</sup> *van* の絶対用法であるか (GELDNER “durch den wir Sieger sein werden”), 或いは「よりよい財」(cf. VIII 27,11 *tād ... yéna vásyo nāsāmahai*)、**「敵」等の省略とも考えられる。**

我々の(ために), それ(ソーマ)の中から<sup>524</sup>, インドラが, 飲むことになるように (pres. subj.),  
 その中から, マルトたちが,  
 或いは, その中から, バガが, アリヤマンを伴って [飲むことになるように],  
 それによって, ミトラ・ヴァルナをこちらへ,  
 インドラをこちらへ, 大いなる助力のために, 我々が引き寄せることになるように (aor. subj.).

*á ... kárāmahe*      *kar/kr* 「為す, 作る」      root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *á ... kárāmahe* (同格的関係節): 見込み

<sup>524</sup> *yásya* は先行詩節の *sómah* を受ける, cf. I 8,1-2, VIII 60,11-12.

## X 2,2

*vēṣi hotrām utá potráṃ jánānām mandhātási draviṇodá ṛtāvā |*  
*svāhā vayám kṛṇávāmā havíṃṣi devó devān yajat<sub>u</sub> agnír árhan ||*

人々の、ホートリ祭官たることを、またポートリ祭官たることをも、君は遂行する (pres. ind.)。

理性ある者、家財を与える者、天理にかなう者で、君はある (pres. ind.)。

スヴァーハー。われわれは、供物たちを、つくろう (pres. subj.)；

(だから) 神として、アグニは、神々を祭れ (pres. iptv.)、資格ある者として。

*kṛṇávāmā*      *kar/kr* 「為す、作る」      nasal pres. 1pl. act.

<機能> *kṛṇávāmā* (主文)：意志表明

*kṛṇávāmā* がアグニに対する詩人たちの意志表明であるの対して、*yajatu* はそれに対するアグニへの要求である。二つの文は、両者の間の取引き関係 (give-and-take) を表わす表現であると言える → A 1.2.3 b)。 *kṛṇávāmā* のアクセントは恐らく、二つの文の内容が一組として関係づけられていることを示し、後ろの文を意味的に補足していると考えられる<sup>525</sup>。

## X 2,3

*ā devānām āpi pánthām aganma yác chaknávāmā tát ānu právoḍhum |*  
*agnír vidvān sá yajāt séd u hótā só adhvarāṃ sá ṛtūn kalpayāti ||*

神々の (通る) 道 (= 祭式) の中へと、我々は到達した (aor. ind.)，

我々に出来る限りのこと (pres. subj.)，それを [道に] 沿って、実現するために。

アグニは、知者である<sup>526</sup>。彼は、祭式を行なうべし (pres. subj.)。彼こそは、また、ホートリ祭官である。

<sup>525</sup> HETRICH の言う「補足文」に当たる、cf. *kuvíd* 文 → C 3。当箇所のように、動詞のアクセントだけが前後の文との密接な関係を表わしていると思われるものに、V 16,5, V 75,2 がある → A 1.2.3 c)。

<sup>526</sup> perf. ptcpl. が定動詞の代わりに使われている可能性もある：「アグニは知っている」、cf. HOFFMANN Aufs. 158f., THIEME Kl.Schr. I 619。

彼は、諸々の祭儀（の道筋）を、彼は（そのための）諸々の時節を、しつらえるべし（pres. subj.）。

*śaknāvāma*

*śak* 「能力がある、…出来る」

nasal pres. 1pl. act.

<機能> *śaknāvāma*（限定的関係節）：見込み

## X 2,4

*yád vo vayám pramināma vratāni viduṣaṃ devā áviduṣtarāsaḥ | Pāda a = VIII 48,9c yát te ...*

*agnīṣ tād víśvam ā prṇāti vidván yébhīr devāṃ ṛtúbhiḥ kalpáyāti ||*

もし、われわれが、君たちとの諸々の誓いを——知者たち（君たち）との〔諸々の誓いを〕、神々よ、より無知なる者たち（我々）が——損なうことになれば／なるとしても（pres. subj.），

その時は、知者であるアグニが、一切を、満たす（修復する）（pres. ind.），

それらに（合わせて）神々を、彼が配当することになる（pres. subj.）（そういう）諸々の時節（ごと）に。<sup>527</sup>

*pra-mināma*

*may/mī* 「損なう」

nasal pres. 1pl. act.

語幹の形成については、I 2.1.1 5) を参照。

<sup>527</sup> 先行詞にあたる *ṛtú-* は、関係節の中だけでなく、主文においても instr. として機能しており、後者においては時を表す instr. が想定される（「acc. を instr. で満たす」は無理）。RV における *ṛtú-* の instr. の用例（22x）は全てこの用法である、e.g. I 15,1 *índra sómam píba ṛtúnā* 「インドラよ、ソーマを、（然るべき）時節に、飲め」... 9 *neṣṭrād ṛtúbhir iṣyata* 「ネーシュトリ（祭官）に属する〔杯〕から、諸々の時節に〔ソーマを〕君たち（祭官たち）は送り出せ」... 10 *yát tvā turíyam ṛtúbhir dráviṇodo yájāmahe* 「君を、ドラヴィノダーよ、4度目に、諸々の時節に我々が祭る時…」, IV 53,7 *ágan devá ṛtúbhir* 「神（サヴィトリ）は、諸々の時節に、やって来た」（GRASSMANN *ṛtú-* を参照；HETTRICH 578 が想定する loc. [ \**ṛtúsu* ? ] の用例は見られない）。—— 一方関係節 *devāṃ ṛtúbhiḥ kalpáyāti* は、「各神を（acc.），それぞれ祭るべき時節と（instr.）正しく合わせる・一致させる／時節に割り当てる」ことを意味すると思われる、cf. TS II 2,11,3 *yathādevatām avadāya yathādevatām yajed. bhāgadhéyenaivāinān yathā-yathām kalpayati* 「神格に応じて〔パンケーキを〕切り分けた後、神格に応じて祭式を為すべし。まさしく定められた取り分と、当の者たちを、相応しく一致させるべし／取り分に、当の者たちを割り当てるべし」（cf. PW “in eine entsprechende Verbindung bringen mit (instr.), Jmd (acc.) Etwas (instr.) zuteilen”）。アグニは祭官として祭式に通じている（*vidván*）。よって人間が正しくそれを実行出来ない時は、アグニが代わりに、各神を所定の時節ごとに正しく祭り、傷ついた誓いを修復する。以下 X 15,6 も、同じ内容を言っていると考えられる（以下参照）。

<機能> *pra-mināma* (*yád* 条件節) : 見込み

*yád* 節は条件節であるが、主節の内容との関係から、譲歩条件として機能していると言える → B 1.3.1, cf. VII 57,4, VIII 48,9, X 15,6。

### X 9,3<sup>528</sup>

*tāsmā āraṃ gamāma vo yāsya kṣāyāyā jīnvatha |*

*āpo janáyathā ca naḥ ||*

彼のために、君たち（水たち）のもとに、我々は馳せ参じよう (aor. subj.),

その者の安住地のために、水たち [君たち] が

我々を、生気で満たし (pres. ind.), そして、生み出すところの (pres. ind.) [彼のために]。

(*āraṃ-*)*gamāma* *gam* 「(歩いて) 行く < PIE \*踏みしめる」 root-aor. 1pl. act.

*aram gam* (+ dative) については、VIII 92,27 を参照。

<機能> (*āraṃ-*)*gamāma* (主節) : 意志表明

### X 15,6

*ācyā jānu dakṣiṇatō niṣādye- mām yajñām abhī grṇīta víśve |*

*mā hiṃsiṣṭa pitarah kēna cin no yád va āgaḥ puruṣātā kārāma ||* Pāda d = VII 57,4b

ひざを畳んで、右側（南側）に、腰を下ろしてから

この祭式に、[君たちは] 皆、歓迎の意を表わせ (pres. iptv.)。

君たちは傷付けてはならない (*mā* + aor. inj.), 父祖たちよ、我々を、如何なる方法によっても<sup>529</sup>,

<sup>528</sup> 祭主の家へ向かっている詩人（祭官）が、祭場への途上で祭式のための沐浴をしている、GELDNER ad loc. *tāsmāi* (... *yāsya*) は祭主のこと。

<sup>529</sup> Pāda d は VII 57,4b と同じであるが、HETTRICH 370 + n. 171, 557 は後者の *yád* を接続詞、当箇所のを *kēna* (= *āgas-*) にかかる関係代名詞としている（その場合、理由・根拠を表わす instr. が想定される）。しかし、op. cit. 557 によれば、一般論的・譲歩的關係節 *yá- ká- calcid* ... 「どのような…であ

もし、人であること故に、君たちに対して、過失を、我々が為すことになれば／なっても (aor. subj.)。

*kārāma*                      *kar/kr* 「為す, 作る」                      root-aor. 1pl. act.

<機能> *kārāma* (*yád* 条件節) : 見込み

*yád* 節は条件節であるが、主節の内容との関係から、譲歩条件として機能していると言える → B 1. 3. 1, cf. VII 57,4, VIII 48,9, X 2,4,。

#### X 19,6

*ā nivarta ní vartaya púnar na indra gā dehi!*

*jīvābhir bhunajāmahai ||*

引き返させる者よ<sup>530</sup>, (牛たちを) 君は戻って来させよ (pres. iptv.)。

我々に、インドラよ、牛たちを、君は返せ (aor. iptv.)。

生きている [牛] たちを、我々は役立てよう (pres. subj.)。

*bhunajāmahai*                      *bhoj/bhuj* mid. 「[自分に] (～を, instr.) 役立てる,  
(～を) 享受する」<sup>531</sup>                      nasal pres. 1pl.

<機能> *bhunajāmahai* (主文) : 意志表明

れ」では、*ká- calcid* が主文の中に入る用例は他にはない。当箇所でも、VII 57,4 と同様に、*yád* を接続詞と考えることは十分に可能である。その際、*kéna cid* は方法・手段を表わす instr. と理解される。

<sup>530</sup> *nivarta-* は hap. leg.。X 19 は消えた (はぐれた) 牝牛を取り戻すことをテーマにしている (西村 博士論文 225ff. を参照)。全詩節を通じて、牝牛たちが戻ること、或いは神々がそれらを戻すこと、が要求されており、*ā/ní-vart/vrt* は動詞・名詞ともに非常に好んで用いられている: 1 *ní vartadhvam*, 2 *púnar ... ní vartaya*, 4,5 *āvartanam, nivartanam*, 6 *ā nivarta ní vartaya*, 8 *ā nivartana vartaya ní nivartana vartaya ... ní vartaya*。文脈から *nivarta-* は、第 8 詩節の *nivartana-* 「引き返させる者 (インドラ) よ」と同じ意味で用いられており、後者の韻律上のヴァリエントとして ad hoc に作られた語形と考えられる, cf. GELDNER “Heimführer”, GRASSMANN “Umkehr schaffend, umkehren machend”。

<sup>531</sup> Cf. act. 「(人に) 役立てる > 満足させる; 贖罪をなす」, HOFFMANN 96。

## X 23,6

*stómam ta indra vimadā ajījanann āpūrvyaṃ purutāmam sudānave |*

*vidmā hīy āsya bhōjanam ināsya yād ā paśūm ná gopāḥ karāmahe ||*

頌歌を、君のために、インドラよ、ヴィダマたち（詩人たち）は、（今まさに）生み出した（aor. ind.）。

以前に無かった、最も多くの「頌歌」を、よき贈与を伴う「君」のために。<sup>532</sup>

我々は知っているのだから（perf. ind.）、頑強な彼の、享受物が、何であるか（を）<sup>533</sup>。

（インドラを）、こちらへ、我々は引き寄せよう（aor. subj.）、家畜を、牛飼いたちがのよ  
うに。

*ā... karāmahe*      *kar/kr* 「為す、作る」      root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *ā... karāmahe*（主文）：意志表明

X 27,2<sup>534</sup>

*yādīd ahām yudhāye samnāyānīy ādevayūn tanvā śūśujānān |*

*amā te tūmraṃ vṛṣabhām pacāni tīvrām sutām pañcadaśām nī śīncam ||*

もしも、わたしが、戦うために<sup>535</sup>、連れ集めることになるなら（pres. subj.）、

神々を求めない、いきり立っている者たちを<sup>536</sup>、

<sup>532</sup> 当詩節は Sūkta の最後から二番目にあたり、先行する諸詩節においてインドラへの頌歌を歌ったことが aor. ind. *ajījanann* で確認されている。「以前に属さない頌歌」とは、RV にしばしば見られる「新しい歌」の概念を表わすものと考えられる。新しい、即ち出来たばかりの讃歌には、歌われた内容や歌い手の願望を実現させる力（*brāhmaṇ-*「言葉の持つ実現力、霊力」）が宿と考えられていたが（→ V 73,10）、その為には、思想的にも言語的にも詩人の伝統に従う一方で、以前の歌の単なる繰り返しではなく、新しさを持ったものでなければならなかった（二次文献を含め、堂山「新しい歌」8-13を参照）。ここでも *āpūrvya-*「以前に無かった」はそのような新しさ（斬新さ）を表わし、詩人たちはそれを *purutāmam*「最も多く（*stómam* にかかる adj.）」歌ったのだと主張しているのであろう、cf. VI 32,1 *āpūrvyā purutāmāny asmai ... śāmtamāni ... vácāṁsi ... takṣam*「以前に属さない、最も多くの、最も幸ある言葉たちを、彼（インドラ）のために、私は（今ここに）形作っている（aor. inj. Koinzidenzfall）」、VIII 66,11 *vayām ... te āpūrvyā ... brāhmāni ... purūtāmāsaḥ ... prā bhārāmāsi*「われわれは、君（インドラ）に、以前に属さない言葉の霊力たちを、最も多く（*vayām* にかかる adj.）、（今）提示している（pres. ind.）」。

<sup>533</sup> 間接疑問と理解した（ETTER, HETTRICH には扱われていない）。

<sup>534</sup> X 27 はインドラと詩人の会話篇。当箇所は詩人の言葉。X 27,10 も参照。

<sup>535</sup> つまり「私がその者たちと戦えるように」、SGALL 212。

家で、君に、肉付きのいい牡牛を、私は調理しよう (pres. subj.)。

十五 (杯) の、搾られた、鋭い (舌を刺す) [ソーマ] を、私は注ぎ込む (pres. inj.)。<sup>537</sup>

*saṃ-náyāni*      *nay<sup>i</sup>/nī* 「導く」      full-gr. them. pres. 1sg. act.

*pacāni*      *pac* 「調理する」      full-gr. them. pres. 1sg. act.

<機能> *saṃ-náyāni* (*yádi* 条件節) : 見込み

*pacāni* (主節) : 意志表明

話し手たちは、インドラが不遜の敵たちを連れ出してくれれば必ず彼らを倒せるという前提のもと、その見返りとしてインドラのためにソーマ祭を行なう意志を表明・約束している、cf. VII 98,4 *yád yodháya maható mányamānān sākṣāma tām bāhúbhiḥ śāsādānān | yád vā nṛbhir vṛta indrābhiyúdhyaś tām tvāyājīm sauśravasām jayema* 「もし [自分たちを] 偉大であると思っている者たちを、君が (我々と) 戦わせることになるなら、我々は征服しよう、腕々を驕っているその者たちを。或いはもし、男たちと共に (敵の) 軍隊へ、インドラよ、君が戦い挑むことになるなら、君と共に、その競争に我々は勝利してよき名声を勝ち得たい」。

*nī-ṣiñcam* (pres. inj./subj.?) の形と機能については、I 3.2.2 1) を参照。

## X 27,10<sup>538</sup>

*átréd u me mañsase satyám uktām      dvipāc ca yác cátuṣpāt saṃsrjāni |*

*strībhir yó átra vṛṣaṇam prṭanyād      áyuddho asya ví bhajāni védaḥ ||*

一方、まさしくこの時<sup>539</sup>、私 (インドラ) によって言われたことを、本当であると、君は

<sup>536</sup> *súsujāna-* は RV で当箇所と X 34, 6 の二箇所では例証されており、いずれも *tanvā* と共に用いられている。GOTÖ Rev. of Werba 1997 (Kratylos 46, 2001) 72 に従い、*śav<sup>i</sup>/śū* の perf. ptcpl. mid. *sūsuvāna-* 「膨らんだ」が、*toj/tuj* の perf. ptcpl. mid. *tūtujāna-* 「突進する・はやる」と混交して「激情や興奮で膨れ上がる・はやる・いきり立つ」の意味で使われた口語表現と理解する (cf. 更に EWAia. II 652)。

<sup>537</sup> 15 日間続くソーマ祭を行なうということ。

<sup>538</sup> X 27,2 を参照。

<sup>539</sup> 「この時」：先行詩節 *átra ...* と同様、同詩節の *yád* 節 (時を表わす) を受ける帰結文、X 27,9 *sám yád váyam yavasādo jánānām      ahám yavāda ur<sub>a</sub>vājre antáh | átrā yuktò 'avasātāram ichād      átho áyuktam yunajad vavanvān* 「(他の) 人たちに属する、牧草を食むものたちを、麦を食むものたちを、幅広の野の中でわたしが、追い集める (ことになる) 時 (pres. inj.)、この時、つながれた [馬] は (綱を) ほどく者を求めるであろう。また一方、打ち克った者は、つながれていない [馬] をつなぐであろう」。

思うことになる (aor. subj.), (即ち) 二本足のものと、四本足のものを<sup>540</sup>, 私が寄せ集めることになる (pres. subj.), ということ。

この際, 女たちと共に, 雄牛 (インドラ=話し手) に, 戦をしかける者があれば (pres. subj.), この者の財産を, 戦わずして, 私は (他の者たちに) 分け与えよう (pres. subj.)<sup>541</sup>。

<i>saṃ-srjāni</i>	<i>sarj/srj</i> 「解き放つ, 投げ放つ」	zero-gr. them. pres. 1sg. act.
<i>vī-bhajāni</i>	<i>bhaj</i> 「分け与える」	full-gr. them. pres. 1sg. act.

<機能> *saṃ-srjāni* (yād 節: 補足節): 見込み

*vī-bhajāni* (主節): 意志表明

*saṃ-srjāni* が主語の意志を表わす可能性については, B 1.3.3 を参照。

#### X 28,<sup>542</sup>

*śaśāḥ kṣurāṃ pratīyāñcam jagārā- adriṃ logéna vṛy ābhedaṃ ārāt |*  
*bṛhāntaṃ cid ṛhaté randhayāni vāyad vatsó vṛṣabhāṃ sūśuvānaḥ ||*

野うさぎは, 剃刀を, 逆さまに呑み込んだ (perf. ind.).

巖を, 土くれで, 遠くから, 私は碎き割った (aor. ind.).

高大な者をも, 弱小の者に, 私は屈服させよう (pres. subj.).

仔牛は, 力をつければ, 雄牛を, 追いかけることになる (pres. subj.).

<i>randhayāni</i>	<i>randh/radh</i> 「屈する」	caus. pres. 1sg. act.
-------------------	-------------------------	-----------------------

<機能> *randhayāni* (主文): 意志表明

<sup>540</sup> *dvipād, cātuspād* n. acc. sg., WACKERNAGEL/DEBRUNNER III 235 を参照。

<sup>541</sup> Cf. I 103,6 *yá ... áyajvano vibhájann éti védah* 「祭式を行なわない者の財を, (他の者たちに) 分け与えながら進む [インドラに] …」。

<sup>542</sup> X 28 は, インドラと彼の子 Vasukra (或いは詩人 Kutsa?, cf. GELDNER ad X 28) とその妻 (インドラの義娘) との会話。インドラになりきり驕り高ぶる V. を, 本物のインドラが戒めている。当詩節では V. が, インドラの再三の警告にも関わらず, 弱者でも強者に勝ち得ることを動物の寓話を引用して主張している, cf. GELDNER ad loc.。「野うさぎでさえ, 獵師の刃物を逆さまに呑み込んで応戦した」の意か。

## X 33,5

yásya mā haríto ráthe tisró váhanti sādhyá |

stávai sahásradakṣiṇe ||

その者の、三頭の黄緑色した [馬] たちが、私を、戦車の上で  
真直ぐに運んでいくところの (pres. ind.)

千 [頭の牛] を報酬とする [祭主] のもとで、私は (神々を) 称えよう (pres. subj.).<sup>543</sup>

stávai stav/stu 「称える」 root-pres. 1sg. mid.

語幹については、III 32,14 を参照。

<機能> stávai (主文) : 意志表明

詩人は、彼のパトロンであった Kuruśravaṇa 王が他界した後、新王となったその息子 Upamaśravas 王には優遇されなかったと見られる。この歌は新王に向けられた歌で、詩人が先王に優遇されていた時のことを回想しているか、もしくは再び先王の時代の状況が復活することを希望しているものと思われる、cf. GELDNER ad. loc.. 前者の場合、過去のことに対して subj. が使われていることになり (cf. VII 88,3), 後者の場合は (或いは前者の場合も ?), 話し手の一般的心構えが表されていることになる : 「千 [頭の牛] を報酬とする祭主がいれば、いつでもその者のもとで…」 → A 1.2.2 b)。

## X 34,5

yád ādīdhye ná daviṣāṇy ebhiḥ parāyādbhyó 'ava hīye sākhibhyaḥ |

nyūptāś ca babhrāvo vācam ākrataṁ<sup>544</sup> émīd eṣāṁ niṣkṛtām jārīṇiva ||

<sup>543</sup> GELDNER は、yásya の先行詞 (「祭主」 etc.) を stávai の目的語として補い、sahásradakṣiṇe は「祭式」を形容するものとして理解している : 「千 [頭の牛] を報酬とする [祭式] において」 (HETRICH 713 もこれに従う)。しかし形容詞 sahásradakṣiṇa- (2x) は、他の用例では人間 (王族階級の者、祭主) に対して用いられている : X 154,3 yé yúdhyanṭe pradhāneṣu sūrāso yé tanūtyājāḥ | yé vā sahásradakṣiṇās tāṁś cid evāpi gachātāt 「財産をめぐって戦っている、身体を投げ打つ者である勇者たち、或いは千 [頭の牛] を報酬とする者たち、まさにこの者たちのもとへも、彼 (死者 = Yama ?) は行け」。当箇所においても、この語が祭主を指し、yásya を受ける先行詞であると考えすることに障害はない。その場合、stávai は目的語無しで用いられ、一般に神々を称えることを表していると思われる、cf. IX 53,2 stávai.

<sup>544</sup> ākrataṁ = ākrata. RV では、Pāda の最終音節をなす -ā は、次の Pāda の第一音節 e-, o- 及び ṛ- (ā- の後のみ) の前で -āṁ と伝承されることがある、OLDENBERG Proleg. 469–472, Noten I 33f. を参照。

「これら（賽子たち）で<sup>545</sup>，私は賭博をすまい（aor. subj.）」—— 私が思いを決めていると（perf. ind.）<sup>546</sup>，

去り行く仲間たちから，私は取り残される（pres. ind.）<sup>547</sup>。

播き入れられた，茶色の「実：賽子」たちが，言葉を発したとたんに（aor. ind.）<sup>548</sup>，

彼らとの待ち合わせ場所へ，私は向かっている（pres. ind.），愛人を持つ女が のように。

*daviṣāṇi*      *dev/div ~ d(y)ū* 「賭博をする／賽子遊びをする」      -iṣ-aor. 1sg. act.

Cf. pres. inj. *dīvyas* (RV), perf. ind. *didēva* (AV), vadj. *dyūtā-* (AV+). aor. 語形は subj. *daviṣāṇi* しか例証されていないが，語幹の full-gr. は -iṣ-aor. subj. 本来の Ablaut を示している。通常，母音・流音・鼻音で終わる *seṭ*-語根の -iṣ-aor. は，二次的に ind. act. と subj. とで同じ extend.-gr. を示す場合が多いが<sup>549</sup>，*daviṣāṇi* は，*saṇiṣat* (:: ind. *asāṇiṣam*) と並び本来の full-gr. を維持しており，インド・イラン段階に遡るか（cf. *naṣ*/*nī* subj. *neṣat* = Av. *naēšaṭ* < PIIr.\**naṣiṣat*），少なくとも，その時代の -iṣ-aor. subj. に倣って作られた語形と考えられる，NARTEN 142。

<機能> *daviṣāṇi* (主文)：意志表明

<sup>545</sup> *ebhiḥ* = *sākhāy-* の可能性（「この者たちとは 賭博はすまい」）もあるが，第 13 詩節 *akṣāir mā dīvyah* から，*ebhiḥ* = *akṣāir* であると判断される，OLDENBERG *Noten ad loc.*。

<sup>546</sup> *ādīdhye* perf. ind., cf. ptcpl. *dīdhyāna-*, pluperf. *ādīdhet*. *dhay/dhi* 「観察する；考えを持つ・慮る」は完了語幹しか持たず（cf. perf. から再形成された pres. ptcpl. *dīdhyat-* RV+），常に現在の意味で用いられる（アクセントは red. pres. に倣う），KÜMMEL Perf. 257ff.。語根本来の意味には，「視野に入れる，目取る」という瞬間的な行為が想定される，LIV 141f., KÜMMEL loc. cit.。

<sup>547</sup> *ava hā* (pass.) + abl. (*parāyādbhyó ... sākhibhyaḥ*) は，*hā* の行為者が instr. で表される場合に比べて（cf. VII 104,10 *nī ṣa hiyatām tanvā tānā ca* 「彼は 身体と子孫とによって置き去りにされよ」），より自動詞的な性質が強いと思われる「～から離れて（abl.）後に残る・遅れをとる」。ここでは，話し手自らの決意によって仲間に加わらないのであるから，仲間たちに「置き去りにする」主体性は無いに等しいか，或いは重要ではない。次の用例では，より自動詞的な用法が見られる：TS 5,6,8,1 *suvargāl lokād yājamāno hiyeta* “der Opferer würde den Himmel nicht erreichen”, DELBRÜCK 109f.。

<sup>548</sup> *ca* が時を表す従属接続詞として機能している，cf. HOFFMANN 216 n. 205: “sobald als”, cf. KLEIN *Disc.Gram.* I 243: “But when”, cf. *ca* 条件節 → VIII 100,2, X 108,3, (X 108,9?). aor. ind. が従属節に現れる場合，主文の動詞の行為の直前に起こる行為（Vorzeitigkeit/unmittelbare Vergangenheit）を表すことが多い：（「～すると直ぐに／～した途端」）。これは，aor. 幹が持つ「全体観」アスペクトに起因するものと思われる（HOFFMANN 157）。その際，主文では pres. ind. が一般論を表すことが多いため，複文全体が一般論的な意味を帯びることになる。当詩節でも，*ca ... ākrata* (aor. ind.)，*émi* (pres. ind.) ... に同様の構造が認められる。博打打ちは「すまい」と決心していても，賽の音を聞いた途端，思わず賭博場へ足が向いてしまう，という賭博師の性質を歌っているものと考えられる。Cf. I 82,1, X 27,10.。

<sup>549</sup> E.g. ipf. *ātārit*, subj. *tāriṣat*, root-aor. から二次的に作られた -iṣ-aor. が，ind./inj. act. と subj. とで同じ full-gr. を示すため（e.g. *vādhiṣas* :: *āvadhīt*），Ablaut の違い（ind./inj. act. extend.-gr. :: subj. full-gr.）を保っていた本来の -iṣ-aor. もその影響を受け，subj. と ind./inj. とで同じ extend.-gr. を示すようになった（NARTEN 64f.）。

aor. subj. *daviṣāṇi* と第13詩節 pres. inj. *dīvyah* とは、アスペクトの違いによって時制幹が使い分けられていると思われる。アオリスト語幹は、動作を時間幅の無い全体として捉えるため（全体観）、*daviṣāṇi* は新たに賭博をする意志を否定している：「二度と賭博をすまい」→ A 1. 2. 2 b)。一方、現在語幹は動作をその進行の中で捉えるため（途中観）、X 34,13 *akṣāir mā dīvyah* は、今すでに賭博行為にひたっている賭博師に対し、それを止めるよう命令している：「賽子たちで賭博をするのを止めよ、これ以上賭博を続けるな」。これらのアスペクトの差による意味の違いについては、NARTEN 143 を、特に X 34,13 *mā dīvyah* については HOFFMANN 81f. を参照。また 総論への補説 1 も参照。

### X 36,11

*mahād adyā mahatām ā vṛṇimahé āvo devānām bṛhatām anarvāṇām |*  
*yāthā vāsu vīrājātaṃ nāsāmahai tād devānām āvo adyā vṛṇimahe<sup>550</sup> ||*

今日、偉大なる助力を、我々は選び取る（pres. ind.）、偉大なる  
 高大なる、競争者を持たない、神々の [助力を]、  
 男子たちから生じた財物を<sup>551</sup>、我々が獲得することになるように（aor. subj.）。  
 神々の、その助力を、今日、我々は選ぶ（pres. ind.）。

*nāsāmahai*      *naś/aś* 「到達する、獲得する」      root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *nāsāmahai* (*yāthā* 目的節)：見込み

### X 37,5

*viśvasya hī prēṣito rākṣasi vratām āheḍayann uccārasi svadhā ānu |*  
*yād adyā tvā sūr yopabrāvāmahai taṃ no devā ānu maṁsīrata krātum ||*

<sup>550</sup> Pāda d は第 1–12 詩節で繰り返される。

<sup>551</sup> 「男子（若武者、兵隊）によってもたらされた財物」、cf. X 36,10（先行詩節）*yād vo devā īmahe tād dadātana jāitram krātum rayimād vīrāmad yāśas* 「神々よ、我々が請うところの、君たちのそれを、君たちは与えよ、勝者に属する意力を、財を伴う、男子を伴う名声を」。

遣わされて、一切のものの誓いを、君は見守っているのだから (pres. ind.).

(それらを) 怒らせることなく<sup>552</sup>, 君は昇るのだから (pres. ind.), 自らの決定に従って。

今日, スーリヤよ, 君に宛てて, 我々が話すであろうこと (pres. subj.),

それを<sup>553</sup>, 神々は, 我々の意志として, 認めて欲しい (aor. opt.).

*upa-brāvāmahai* *brav' / brū* 「話す, 語る」 root-pres. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *upa-brāvāmahai* (限定的関係節): 見込み

*upa-brāvāmahai* が主語の意志を表わす可能性については, B 2.2 を参照。

#### X 38,4

*yó dabhrébhīr hāvīyo yás ca bhūribhīr yá abhīke varivovín nṛṣāhīye |*

*tām vikhādé sásnim adyá śrutām nāram arvāñcam índram ávase karāmahe ||*

少ない者たちによって呼ばれるべきところの, そして, 多くの者たちによって (も) [呼ばれるべき] ところの,

交戦において, 男たちの征服に際して, 広い [陣] 地を見出す者であるところの

その, 繰り返し勝ち取る, 聞こえ高い男を, 熾烈な戦いにおいて<sup>554</sup>, 今日

インドラを, 助力のために, こちらへ, 我々は向けよう (aor. subj.).

*karāmahe* *kar/kr* 「為す, 作る」 root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<sup>552</sup> *heḍ/hīd* 「怒る」は, 現在語幹以外では mid.=自動詞/act.=他動詞の区別を持つ: mid. 「怒る」, perf. ind. *jihidé* RV, AV :: act. 「怒らせる」, perf. ind. *jihīda* RV, redupl.-aor. ind. *ājihīdat* AV。これに対して現在語幹 full-gr. them. pres. -*heḍa-* では, mid./act. とともに自動詞として用いられる: pres. ptcpl. mid. *āheḍamāna-* (RV), act. *āheḍant-* (RV, YS), (ipf. act. \**ahēdat*/\**ahīdat* ? GB)。従って, caus. -*heḍaya-* (RVのみ) は, 他語幹の act. に対応する他動詞の現在語幹と位置づけられる。GOTÖ 350f., Rev. of Jamison (III 31) 308 を参照。

<sup>553</sup> *tá-* (= n. *yád*) は述語名詞 m. *krátum* の性に一致。

<sup>554</sup> *vikhādé*: loc. sg. *vikhādá-* ← *ví-khād* 「噛みちぎる」, cf. GELDNER “bei dem Sichverbeissen” (ad loc. n. 1 “D.h. im erbitterten Kampfe”)。以下の *khādí-* の例も参照せよ: X 38,1 *asmín na índra pṛtsutáu yásasvati śīmivati krándasi práva sātāye | yātra gósātā dhṛṣitéṣu khādīṣu víśvak pátanti didyávo nṛṣāhīye* 「インドラよ, この栄誉ある戦争において, 我々を, 威勢ある雄叫びにおいて, 君は助けて前進させよ, 勝ち取るために, 敢行された熾烈な攻撃たち (?) において, 矢たちが乱れ飛ぶところの牛たちの獲得において, 男たちの征服において」。*vi-khid* 「引きちぎる」と関係する可能性については, Gotö 127 n. 143 を参照。

<機能> **karāmahe** (主節) : 意志表明

### X 39,5

*purāṇā vām viryā prā bravā jáné- 'atho hāsathur bhiṣājā mayobhūvā |*  
*tā vām nú návyāv ávase karāmahe 'ayām nāsatyā śrād arír yáthā dádhat ||*

君たち両者の、以前の諸々の武勲を、部族の前で、私は公言しよう (pres. subj.)。

さらに、また、喜びとなる／を司る<sup>555</sup> 医者で [も]、君たち両者はあった (perf. ind.)<sup>556</sup>。

その君たち両者を、今 [我々への] 助力の為に、新たな状態に我々は為そう (aor. subj.)<sup>557</sup>，

ここにいる首長が<sup>558</sup>，両ナーサッティアたちよ、信頼を置くように (pres. subj.)。

<i>prā-bravā</i>	<i>brav<sup>1</sup>/brū</i> 「話す、語る」	root-pres. 1sg. act.
<i>karāmahe</i>	<i>kar/kr</i> 「つくる、為す」	root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> **prā-bravā** (主文) : 意志表明

**karāmahe** (主節) : 意志表明

### X 44,2

*suṣṭhāmā ráthaḥ suyāmā hárī te mimyákṣa vājro nṛpate gábhastau |*  
*śíbhama rājan supáthā yāh<sub>i</sub>y arvāñ vārdhāma te papūṣo vṛṣṇ<sub>i</sub>yāni ||*

<sup>555</sup> *mayobhū-*「(人の) 喜びとなる」か (医者であるから)、あるいは背景に *idam bhū* の構文 (HOFFMANN Aufs. 557–559) を想定し、「喜び (または滋養) を司る、管理する、左右する」の意味も考えられる。

<sup>556</sup> *as* の perf. ind. は、確認 (Konstatierung) の機能で用いられていると考えられる (→ A 1.2.3 a))。GOTO Material. *as/s* 1006 を参照, cf. KÜMMEL Perfekt 111ff. (112: faktisch = konstatierend), ETTER 164.

<sup>557</sup> 「人 (acc. *vām*) 〜に (acc. *návyau*) する (*kar/kr*)」との構造と理解される。次の例も同様: VIII 22,3 *arvācīnā* (i.e. *aśvīnā*) *sāv ávase karāmahe*, X 38,4 *arvāñcam índram ávase karāmahe*。アシュヴィンたちを、彼らが以前そうであったのと同じ状態 (つまり、武勲を為し得る状態) に、今新たにすることである (そのために必要となる「新しい歌」の概念については、二次文献を含め 堂山「新しい歌」8–13 を参照, cf. X 23,6)。*ávase* は通常の目的を表す dat. と考えて問題はないが、dat. inf. + *kar/kr* 「〜させる (使役, faktitiv)」の構文が想定されている可能性もある: 「新しい君たちに (新たに、君たちに)、(我々を) 援助させよう」, JAMISON -*áya-* 37ff. + n. 26: “quasi-infinitives” (*ávase, ūtáye*)。-*ti-* 派生形が抽象名詞を表し、しばしば dat. inf. として用いられ得ることについては LIEBERT -*ti-* 118f. を参照。

<sup>558</sup> Cf. THIEME Fremdling 39: “Fremdling”。

よき立ち場所を持つ戦車が、よく制御される両ハリたちが<sup>559</sup>、君（インドラ）にはある。  
 ヴァジュラが、男たちの主人よ、（君の）両手に、収まった（perf. ind.）。  
 急いで、王よ、よき道を通して、君はやって来い（pres. iptv.）、こちらへ向いて。  
 我々は増大させよう（pres. subj.）、（ソーマを）飲み終えた君の、猛々しい力たちを。

*vārdhāma* *vardh/vṛdh* 「増大、増強する（mid.）／させる（act.）」 full-gr. them. pres. 1pl. act.

<機能> *vārdhāma*（主文）：意志表明

現状の確認（perf. ind.）を伴う意志表明については、A 1.2.3 a）を、神々への要求（iptv. 2sg.）を伴う意志表明については、A 1.2.3 b）を参照。

## X 52,1

*vísve devāḥ śāstāna*<sup>560</sup> *mā yáthehá* *hótā vṛtó manávai yán niśádyā* |  
*prá me brūta bhāgadhéyaṃ yáthā vo yéna pathā havyám á vo váhāni* ||

一切神たちよ、私に、君たちは教えよ（pres. iptv.）、どのように、ここで  
 ホートリとして選ばれた[私]が、腰を下ろしてから、何を、考えればよいのかを（pres. subj.）。  
 私に、君たちは公言せよ（pres. iptv.）、君たちの定められた分け前が、どのようなか。  
 どの道を通して、供物を、君たちのもとへ、私が運べばよいのかを（pres. subj.）。

*manávai* *man* 「-s-aor.：思われる／root-aor.：思念する」 nasal pres. 1sg. mid.

語根 *man* の二系列の語幹については、I 24,1 を参照。また二種類の意味の現れ方については、VIII 61, 11 も参照。

*á ... váhāni* *vah* 「運ぶ」 full-gr. them. pres. 1sg. act.

<機能> *manávai* / *á ... váhāni*（疑問節＝間接疑問文）：義務

<sup>559</sup> I 82,1 注を参照。

<sup>560</sup> 本来予想されるアクセントは \**śāstāna*, cf. ind. 2sg. act. *śāssi*, NARTEN Kl.Schr. 102 n. 40.

## X 52,5

ā vo yakṣiḥ amṛtatvām suvīraṃ yáthā vo devā várivah kárāṇi |

ā bāhuvóṛ vājraṃ indrasya dheyām áthemā vísvāḥ pṛtanā jayāti ||

君たちの、よき男子からなる不死性を<sup>561</sup>、私は祭って手に入れる (aor. inj.) <sup>562</sup>,

君たちの、神々よ、広大な空間を、私がつくることになるように (aor. subj.).

インドラの両腕の中に、ヴァジュラを、私は置きたい (aor. opt.).

そうすれば<sup>563</sup>、これら一切の戦いたちに、彼は勝利することになろう (pres. subj.) <sup>564</sup>.

kárāṇi

kar/kr 「為す, 作る」

root-aor. 1sg. act.

<機能> kárāṇi (yáthā 目的節): 見込み

## X 53,2

ārādhi hótā niṣádā yājīyān abhí práyāṃsi súdhitāni hí khyát<sup>565</sup> |

yājāmahai yajñīyān hánta devāṃ ídāmahā idīyān ājīyena ||

よりよく祭式を為すホートリ祭官 (アグニ) は、腰を下ろすことによって、(今まさに) 相応しくなった (aor. ind.: aktuell).

好みのものたちが、よく配置されてこそ (それらに) 彼は目を留める/留めよ (aor. inj.) <sup>566</sup>.

我々は [自分たちのために] 祭ろう (pres. subj.), よし、祭式に値する神々を。

我々は崇めよう (pres. subj.), 崇めらるべき [神々] を、塗りバターを用いて。

<sup>561</sup> 「男子 (子孫) に富んで、家系が続いていくこと」。子孫が絶えないということが、即ち amṛtá-であるということ。

<sup>562</sup> yakṣi には形態上 inj. と -si-iptv. の両方の可能性があるが、ここでは詩人が自分自身に命令するという解釈 (→ I 3.1) が成り立たないので、前者と判断される。inj. 1sg. は「直後に控えた行為」の予告を表わすと思われる、HOFFMANN 253. ā yaj (mid., affektiv): 「こちらへと祭る」>「祭式を行って〜を (acc.) 手に入れる」, GOTÖ 254.

<sup>563</sup> áthā 「そうすれば・その時は」: “temporal conjunctive value ‘(and) then’”, KLEIN Disc.Gram. II 67, 72f. (KLEIN によれば, áthā が文と文をつなぐ場合は殆どがこの用法であるという)。

<sup>564</sup> jayāti (pres. subj.) は「未来」。

<sup>565</sup> Pāda b = VI 15,15a abhí práyāṃsi súdhitāni hí khyás.

<sup>566</sup> aor. inj. khyát は一般論としてアグニの性質を述べているか、或いは aor. iptv. 語形の欠如のため、その代わりに用いられている可能性もある、HOFFMANN 222. 後者の現象に関しては、I 186,5 も参照。

<i>yājāmahai</i>	yaj 「称讃する, 祭る」	full-gr. them. pres. 1pl. mid. (affekt.)
<i>īdāmahai</i>	īd 「呼びかける; 崇める; 頼む」	root-pres. 1pl. mid.

<機能> *yājāmahai* / *īdāmahai* (主文): 意志表明

*hānta* ... + 1人称接続法 → A 1.2.1 c)。

#### X 53,4

*tād adyā vācāḥ prathamāṃ masīya yénāsuraṁ abhī devā āsāma* |

*ūrjāda utā yajñīyāsaḥ pāñca jānā māma hotrām juṣadhvam* ||

それを, 今日, 言葉の最初のものであると, 私は思いたい (aor. opt.)<sup>567</sup>,

それによって, アスラたちを, 我々神々が圧倒するであろうところの [それを] (pres. subj.)。

養分を食べる者たちよ, そして, 祭式に値する者たちよ<sup>568</sup>,

(君たち) 五つの部族たちは<sup>569</sup>, 私のホートリ祭官たることを, 喜べ (pres. iptv.)。

<i>abhī ... āsāma</i>	as 「存在する, …である」	root-pres. 1pl. act.
-----------------------	-----------------	----------------------

<機能> *abhī ... āsāma* (限定的関係節): 見込み

関係節は事実上, 主節の事態の目的を表わすとも言える → B 2.2. *yéna* ... を疑問節とする解釈については C 2 を参照。

#### X 53,8<sup>570</sup>

*ásmanvatī rīyate sām rabhadhvam út tiṣṭhata prá taratā sakhāyaḥ* |

*átarā jahāma yé ásann ásevāḥ śivān vayām út taremābhī vājān* ||

<sup>567</sup> *masīya* < \**maṁsiya*, -s-aor. opt. 1sg. mid. (HOFFMANN Aufs. II 366, NARTEN 188f.)。

<sup>568</sup> *utā* が二つ以上の vocative をつなぐ例は, 他に一箇所のみ, KLEIN Disc.Gram. I 283 : V 46,2 *ágna índra váruṇa mītra dévāḥ* | *śárdhah prá yanta mārutotá viṣṇo* 「アグニよ, インドラよ, ヴァルナよ, ミトラよ, 神々よ, マルトに属する群れよ, そしてヴィシュヌよ, (庇護を) 君たちは差し出して保持せよ」。また, *ca* が複数の voc. をつなぐ用例については, II 29,3 を見よ。

<sup>569</sup> IX 101,9 *pāñca-carṣanī-* を参照。

<sup>570</sup> 祭式の成功を, 川を渡り切ることによって喩えている。それは同時に, 向こう岸へ渡る自分たち (味方) と, 川のこちらに残る者たち (敵) との決別を意味する (Pada c), GELDNER ad loc.。

石を伴う〔川〕が<sup>571</sup>（ここに）流れている（pres. ind.）。君たちはつかまり合え（pres. iptv.）<sup>572</sup>。  
 君たちは立ち上がれ（pres. iptv.）。君たちは進み渡れ（pres. iptv.），仲間たちよ。  
 ここに，我々は置き去りにしようではないか（pres. subj.），良からぬ者たちであった〔人々  
 を〕（ipf.）<sup>573</sup>。  
 われわれは，幸ある戦利品たちへ向かって，（川を）渡り抜きたい（pres. opt.）。

*jahāma*                      *hā* 「置いて行く，あとにする」                      redupl. pres. 1pl. act.

<機能> *jahāma*（主文）：勧誘

#### X 57,3<sup>574</sup>

*māno nāv ā huvāmahe nārāśaṁśéna sómena |*

*pitṛṇāṁ ca mánmabhiḥ ||*

今，思考を，我々は呼び寄せよう（aor. subj.），  
 ナラーシャンサ（男たちによる賞讃）に属するソーマによって  
 そして，祖父たちの諸々の思索（詩作）によって。

*ā-huvāmahe*                      *hav<sup>i</sup>/hū* 「呼ぶ」                      zero-gr. them. aor. 1pl. mid.

語幹については，V 56,8 を参照。

<機能> *ā-huvāmahe*（主文）：意志表明

<sup>571</sup> 恐らく，（渡るための）「跳び石」（*sétum*，→ IX 41,2 注参照）が配置された川の意味であろう，GELDNER ad loc.。

<sup>572</sup> *rābha<sup>-te</sup>* は mid. でしか活用しないため，*sám* によって reciprocal の意味を明確にしているものと思われる。

<sup>573</sup> 関係節を受ける先行詞（*jahāma* の目的語として acc. の名詞／代名詞）が書かれていない文（HETTRICH 513f. n. 69 に参考文献）。

<sup>574</sup> Asamāti 王により Purohita の地位を追われた 4 兄弟のうち，Subandhu が，王の新たな Purohita の呪力により殺されてしまう。当 Sūkta では，残った 3 兄弟が Subandhu を生き返らせようとする場面，GELDNER ad X 57–60。ここでの *mānas-* は，Subandhu の思考作用（靈魂のようなものが想定されているか，cf. GELDNER “Geist”）。

X 59,2<sup>575</sup>

*sāman nū rāyē nidhimān n<sub>iv</sub> ānnaṃ kārāmahe sū purudhā śrāvāṃsi |*

*tā no viśvāni jaritā mamattu parātarāṃ sū nīrtir jihitām ||*

旋律において、今、財のために、食物を、今、蓄えあるものと

(そして) [自分たちの] 諸々の名声を、多様に、しかと我々は為そう (aor. subj.).<sup>576</sup>

それら一切が、我々のものである。歌い手 (Subandhu) は、喜べ (perf. iptv.).

より向こうへ、しかと、破滅 [の女神] は移れ (pres. iptv.).

*kārāmahe*

*kar/kr* 「為す、作る」

root-aor. 1pl. mid. (possess.-affekt.)

<機能> *kārāmahe* (主文): 意志表明

## X 64,1

*kathā devānāṃ katamāsya yāmani sumāntu nāma śṛṇvatām manāmahe |*

*kó mṛdāti katamó no máyas karat katamá ūtí abh<sub>iv</sub> ā vavartati ||*

どのようにして、途上で聞いている<sup>577</sup>神々の中の、どの者の

よく思念される<sup>578</sup>名前を、我々は思念すべきか (aor. subj.).

誰が、寛容であるだろうか (pres. subj.). どの者が、我々に、喜びをなすであろうか (aor. subj.).

どの者が、援助を伴って、こちらに対して、振り向くであろうか (aor. subj.)<sup>579</sup>.

<sup>575</sup> 前注を参照。ここでは、Yama のもとから生き返った詩人 Subandhu が (X 58), 長生きをして歌い手 (詩人) としての職務に従事出来るよう願っている, GELDNER ad X 59.

<sup>576</sup> 「食物を蓄えあるものとする」と「名声を多様にする」とが asyndetic に並べられている。食料の確保は生き長らえることを意味する, cf. 前注。

<sup>577</sup> 「祭場へ向かう途上で」, cf. X 92,13 *yāmani śrutam* (iptv.).

<sup>578</sup> 「(それを) 思念するのが吉である」 / 「思念し易い」 / 「十分に (詩人によって) 思念される = 頻繁に思念される」のいずれかの意味と思われる。

<sup>579</sup> *vavartati* redupl. aor. subj. act. (intrans.). perf. subj. act. (intrans.) と同語形を示すが、当箇所に見られる他の aor. subj. *manāmahe*, *karat* の存在から (*marḍ/mṛḍ* はアオリスト語幹を欠く), *vavartati* もアオリスト語幹である可能性が高い。ただし、本来使役的 (他動詞的) な意味を持つ redupl.-aor. (faktitiv, pres. *varṭayati* に対応) が自動詞として用いられているのは、完了語幹 *vavart-/vavṛt-* (intrans.) の影響であると考えられる (他にも X 27,6 *vavṛtur opt. intrans.*), HOFFMANN Aufs. 592, cf. KÜMMEL Perf. 465: *vavartati* perf. subj.).

*manāmahe*      *man* 「-s-aor. : 思われる / root-aor. : 思念する」      root-aor. 1pl. mid.

<機能> *manāmahe* (疑問文) : 義務

当該 Sūkta (一切神たちへの讃歌) では、第5詩節まで同様の自問文が続き、第6詩節以降に神々に対する呼びかけや要求が続く。つまり、詩人による自問自答の形式と考えられる。

X 72,1<sup>580</sup>

*devānām nú vayām jānā      prá vocāma vipanyāyā |*

*ukthēsu śasyāmāneṣu      yāh páśyād úttare yugé ||*

神々の、諸々の誕生を、今、われわれは

宣言しよう (aor. subj.), 昂揚のうちに / を伴って<sup>581</sup>

言明されつつある讃辞において / の形で、

もし人が、後の (この) 時代において (も) (それらを) 見ることになるならば (pres. subj.)<sup>582</sup>。

*prá-vocāma*      *vac* 「話す、言う」      redupl. aor. 1pl. act.

<機能> *prá-vocāma* (主文) : 意志表明

話し手たちの意志は、直後に実行される (上注参照)。

<sup>580</sup> 当 Sūkta は、複数の詩人が「神々の諸々の誕生」(*devānām ... jānā*) についての諸説を、輪唱形式で歌い合うものである、cf. THIEME Kl.Schr. 940。当詩節も含め、Sūkta 全体に関する最新の研究として、後藤 人類と死の起源 ―リグヴェーダ創造讃歌 X 72― を参照。

<sup>581</sup> *vipanyā-* f. 「(昂揚、靈感に) 打ち震えること」 <*vep/vip* 「(興奮、昂揚で) 震える」, GOTÖ III 32 (1989) 281–284 (283: *vipanyāyā* ‘in [seherischer] Erregung’)

<sup>582</sup> *yāh* にはかかるべき先行詞がなく、また先行詞の省略もここでは考えにくいので、関係節は単独で何らかの従属節を構成していると考えられる、cf. II 30,7。その際、*páśyād* の目的語には「神々の誕生」が補われ、また *úttare yugé* は神々の誕生の場面とされる *pūrvyē yugé* (第2詩節), *yugé prathamé* (第3詩節) に対して「後の時代」、つまり現在のことを指すと思われる、GOTÖ III 32 283: “in [diesem?] späteren Weltalter”。以上のことから、*yāh* 以下は、「もし誰か、後の世である現在においても、太古の神々の誕生が見える者がいるならば」を意味する一般論的条件節と判断される；GELDNER も恐らく同様の状況を想定している：“Nun wollen wir ... verkünden, wenn sie einer in dem späteren Zeitalter noch zu erschauen vermag” (これに対する HETTRICH 623 n. 207 の批判は当たらない)。そして詩人 (話し手) たちは、まさにそれらが「見える」者として (cf. *kavī-* 「見者、詩人」), 「神々の誕生」を詩歌の形で述べようと宣言しているのである。HETTRICH 623 は *yāh* に目的節の意味を想定する。その場合、後の世になっても人が見る (思い浮かべる?) ことができるように、太古の神々の誕生を今讃辞にして残す、という意味になろう。

X 77,1<sup>583</sup>

abhraprúṣo ná vācā **pruṣā** vásu havíṣmanto ná yajñā vijānūṣaḥ |  
 sumārutam ná brahmānam arháse gaṇám astoṣy eṣām ná śobhāse ||

雨雲を撒き散らす者たちが<sup>584</sup>のごとく、言葉によって、私は撒き散らそう (subj.), 諸々の財物を,

供物を伴う、様々に生み出す<sup>585</sup> 祭式たちがのごとく。

〈よき、マルトたちに属する〔天気〕を伴う如き祭官に、適するために、

彼らの一群を、私は称えた (aor. ind.)<sup>586</sup>, [それを] 奇麗にするためにのごとく。〉<sup>587</sup>

**pruṣā**                      proṣ/pruṣ 「撒き散らす」      root-aor. (?) 1sg. act.

proṣ/pruṣ は, pres. pruṣnuvānti (ind.), pruṣnávati (subj.) に対し, root-aor. を想定させるが, その場合 Ablaut (zero-gr.) は異例である (\*proṣā ?). abhraphrúṣ- と押韻して形成された Augenblicksbildung であると思われる (JOACHIM Mehrfachprä. 112f.). I 2.1.1 4) を参照。

<sup>583</sup> X 77, 78 における韻律の問題については, OLDENBERG Proleg. 92ff., Noten ad X 77 を見よ。

<sup>584</sup> abhraphrúṣo 「雨雲を撒き散らす」; 具体的にはマルト神たちを指すと思われる, cf. vi-prúṣ- 「火の粉」 (GOTÖ 211). 語形はいくつかの可能性が考えられるが, ここでは nom. pl. として解釈した: 「abhraphrúṣ- であるマルトたちのように, 私も proṣ/pruṣ しよう」, cf. RENOU EVP X 52: "... comme les (dieux) qui font-fuser la nuée".

<sup>585</sup> vijānūṣ-: OLDENBERG Noten ad loc. はこの形を, BARTHOLOMAE に従って, vi-jñā の pres. ptcpl. vi-jānatāḥ と perf. ptcpl. vi-jajñūṣaḥ との混交形と解釈し, 後者の -ūṣaḥ という形が入り込んだのは, 先行する abhraphrúṣo や pruṣā の影響であるとする。しかしむしろ, 語根 (vi-)jan<sup>i</sup> 「(様々に) 生み出す」からの派生名詞 (adj.) を想定した方が, 「財物を撒き散らす」ものの例えとしては相応しいと思われる。ただし語形の派生法は不明である。jan<sup>i</sup> の派生形の一つ janús- m./f., n. 「生まれ」(RV+; cf. RV janú- f. 「生まれ」, ŚB sa-janú- 「同じ生まれを持つ」) と, 例えば jayús- adj. 「勝利する」~ jāyú- adj. 「勝利する, 勝ち得る」との類推によって \*jānū(s)- adj. 「生み出す」(cf. āyu[s]- n. 「生命」) が形成された可能性もあろう。一方, -jānús- が直接印欧祖語に遡り得るとすれば, jan<sup>i</sup> の -o-full-gr. による派生名詞とも考えられるが (cf. āyuṣ- < \*h<sub>2</sub>óǵi-us-), その場合語根の laryngeal の消失を想定する必要がある: -jānuṣ- < \*-ǵonus- < \*-ǵonh<sub>1</sub>-us-. laryngeal の消失については, KUIPER Fs. Vogel (1947) 198-212 に基本的な言及がある。よく知られている dā (< \*deh<sub>1</sub>) の場合は, アクセントが前綴りにある場合にのみ laryngeal の消失が見られるが (ā-/pári-/prá-tta- < \*-d-ta- < \*-dH-ta-), 接尾辞にアクセントがある場合にも類似の現象が見られる: jantú-, cf. inf. jānitoh, op. cit. 206.

<sup>586</sup> stav/stu の -s-aor. ind. は, ヴェーダ語では受動態も含め mid. でのみ活用する: astoṣi, astoṣta, ástoḍhvam, ástoṣata (X 88,3 を参照)。これに対して subj. は全て act. で活用する, X 88,3 を参照 (cf. inj. stoṣam I 187,1); mid. 活用の動詞が aor. subj. においてのみ act. を示す用例については X 88,3 を参照。NARTEN 276f. + n. 876 によればこれらの形は全て, stav/stu の二系統の現在幹のうち, 同じく受動態も含め mid. でのみ活用する幹母音幹 stáv-a- (ptcpl. stávamāna- RV) に対応するものであるという (III 32,14 も参照)。

<sup>587</sup> cd-Pāda の文意は不明, cf. GELDNER 訳: (Pāda c) 「見事なマルト [に属する] 天気をなす (操る) 呪術師 ("Beschwörer") に匹敵するためであるかのように」。gaṇám ... eṣām は, astoṣi 及び inf. śobhāse 双方の目的語 (acc.) を構成しているか (inf. + acc., SGALL 195ff.), 或いは, śobhāse は目的語として eṣām だけを共有しているかと思われる (inf. + gen., SGALL 211); 一つの語が異なる構造に同時に参与する場合については, V 54, 1 diváh も比べよ。encl. eṣām の前で文を切ることはできない。また eṣām の後ろで文を切るならば, ná は否定辞と判断せざるを得ない: 「私は称えた。奇麗にするためではない」(?)。

<機能> *pruṣā* (主文): 意志表明

### X 83,6

*ayām te asmīy ūpa méhīy arvān praticināḥ sahure viśvadhāyaḥ |*

*mānyo vajrinn abhī mām ā vavṛtsva hānāva dāsyūṁr utā bodhīy āpēḥ ||*

ここに居る[私]は、君のもので、ある (pres. ind.)。私のそばへ、君はやって来い (pres. iptv.),  
こちらを向いて、

面と向かって、克服する者よ、全てを育む者よ。

マニユよ、ヴァジュラを持つ者よ、私の方に、君は向け (aor. iptv.),

——ダスユ (敵対者) たちを 我ら両者は打ち殺そうではないか (pres. subj.)<sup>588</sup>—— そ  
して、仲間 (私) のことに、君は気付け (pres. iptv.)<sup>589</sup>。

*hānāva*                      *han* 「打つ、殺す」                      root-pres. 1du. act.

<機能> *hānāva* (主文): 勧誘。

### X 83,7<sup>590</sup>

*abhī prēhi dakṣiṇatō bhavā mé 'adhā vṛtrāṇi jaṅghanāva bhūri |*      Pāda b = VIII 100,2d

*juhómi te dharúṇam mādhuvo ágram ubhā upāṁśú prathamā pibāva ||*

向かって君 (マニユ) は進め。私の右側に、君は現れよ (pres. iptv.)。

そうすれば、多くの障碍たちを、我ら両者は [一つ一つ] 打ち倒すことになるう (pres. subj.)。

君に、私は献じる (pres. ind.), 容器ごと、密酒の最もよいところを<sup>591</sup>。

<sup>588</sup> 等位接続された二つの命令文, c-Pāda (vavṛtsva iptv.) ... utā bodhy (iptv.) āpēḥ の間に、聞き手に対する勧誘文 *hānāva dāsyūn* が挿入されている, KLEIN Disc.Gram. I 371f., cf. GELDNER ad loc.:

<sup>589</sup> GOTÖ 218 n. 454.

<sup>590</sup> 当詩節と VIII 100,2 との類似点については、同箇所を参照。

<sup>591</sup> 「(密酒の入った) 容器」と「(容器の中味である) 密酒」という異なる表現が *juhómi* の目的語として並んでいる。前者は恐らく、通常の目的語である後者に対し「容器ごと全部、まるごと」の意味を付加する表現である。その際 *dharúṇam* においては、accusative の持つ「全体性」が有意的に作用してい

我ら両者は、黙って、最初の者たちとして、飲もうではないか (pres. subj.).

*jañghanāva*      *han* 「打つ、殺す」      intens. I pres. 1du. act.

語幹形成については、X 119,10 を参照。intens. の意味については、VIII 100,2 を参照。

*pibāva*      *pā* 「飲む」      redupl. (them.) pres. 1du. act.

<機能> *jañghanāva* (主文) : 見込み

当詩節の Pāda b と同一の文が VIII 100,2 にも現れるが、そこでは *ca* によって導かれた条件節が前文を為す。しかしここでも、先行する iptv. 2sg. が事実上条件節としての機能を担っていると言える：条件付き見込み → A 3.2 b)。VIII 100,2 も参照。

*pibāva* (主文) : 勧誘

X 85,22<sup>592</sup>

*úd irṣvāto viśvāvaso nāmaseḍāmahe t<sub>u</sub>vā |*

*anyām icha prapharvīyām sām jāyām pátīyā sṛja ||*

ここから<sup>593</sup>、君は立ち去れ (pres. iptv.), ヴィシュヴァーヴァスよ。

敬礼を伴い、君に、我々は頼もう／呼びかけよう (pres. subj.).

他の、年頃の娘を、君は探せ (pres. iptv.).

妻を、夫と、君は一緒にせよ (pres. iptv.).

*iḍāmahe*      *iḍ* 「呼びかける；崇める；頼む」      root-pres. 1pl. mid.

と思われる (参考文献も含め、IV 18,3 注を参照)。

<sup>592</sup> 結婚式の歌。ヴィシュヴァーヴァスはガンダルヴァの名前で、未婚の女性は彼に属するものと考えられていた。第 21—22 詩節では、今新婦が結婚するに際して、彼に新婦から離れるよう要請している、cf. 第 21 詩節 *úd irṣvātaḥ pátivatī hīy èṣā viśvāvasuṃ nāmasā gīrbhīr iḍe | anyām icha pītṛśādaṃ vīyāktām sá te bhāgó janúṣā tāsya viddhi* 「ここから君は立ち去れ、彼女は夫を持つ身であるから。ヴィシュヴァーヴァスに、敬礼を伴い、讃歌たちを伴い、私は頼む／呼びかける (pres. ind.)。他の、父のもとに居座る、化粧をした [女] (i.e. 未婚の女) を、君は探せ。それが、生まれながらに、君の取り分である。そのことを君は知れ」。これら類似の構造を持つ両詩節の解釈と、それに伴う *prapharvī-* の意味の理解については、NARTEN Kl.Schr. 332 を参照。X 85,37 も比べよ。

<sup>593</sup> 或いは「この女から」。átas が人について用いられる用例は、GRASSMANN 27 を参照。ただし、女性に対して用いられる例は他にはない。

<機能> *iḍāmahe* (主文) : 意志表明

# X 85,37<sup>594</sup>

*tām pūṣaṇ chivátamām érayasva yásyām bījaṁ manuṣyā vāpanti |*

*yā na ūrú usatí viśráyāte yásyām usántaḥ prahárāma sépam ||*

その、最も幸多き〔女〕を、プーシャンよ、こちらへ連れてこい (pres. iptv.),  
彼女の中に、マヌの子孫たち (人間たち) が、種を蒔くところの (pres. ind.) [彼女を],  
彼女が、我々のために、欲情して (自分の) 両腿を開くことになるように (pres. subj.)<sup>595</sup>,  
彼女の中に、欲情して、男性器を、我々がもたらすことになるように (pres. subj.).

*pra-hárāma*

*har/hṛ* 「取る、持って行く」

full-gr. them. pres. 1pl. act.

語根 *har/hṛ* は本来、有始点的 (anfangsterminativ)<sup>596</sup>な意味「取る、持ち去る」を持つが、実際の用例では、有終点的 (endterminativ) な意味の語根 *bhar/bhṛ* 「持って行く」と混交して用いられる場合がある、GOTÖ 346f. + n. 854. 当箇所 *prá-har/hṛ* も loc. (*yásyām*) とともに用いられ、有終点的な意味を持つ。

<機能> *pra-hárāma* (同格的関係節) : 見込み

Pāda b では新婦の一般的な性質として、子を作ることが述べられ、Pāda c, d は、その性質が実際にこれから新郎とその家にとって当てはまるべきことを述べている。Pāda cd は、目的節に準ずる関係節であると理解される。

<sup>594</sup> 結婚式の歌。先行詩節と当詩節で記述されているのは、新郎が新婦の手を握る儀式。X 85,22 も比べよ。

<sup>595</sup> *śray/śrī* は通常 act. (他動詞) :: mid. (自動詞) の使い分けを持つので、*viśráyāte* は act. 語形を前提とした、possess.-affekt. の mid. (「自分の～を開ける」) と理解される、GOTÖ 312f.

<sup>596</sup> 動詞の語彙自体が持つ性質の一つとして、語根が表示する動作が時間軸の中にどう位置づけられるかに基づいた分類がある (Aktionsart 「活動様式」)。これは更に、動作の要する時間や、動作が始点や終点を持つか、などの観点から下位分類出来る。GOTÖ Coloq. Delbrück 168, 後藤 スケッチ 103 を参照せよ。日本語の訳語は後者に従う。

X 86,21<sup>597</sup>

*púnar éhi vṛṣākape suvitā kalpayāvahai |*

*yá eṣā svapnanāṁśano 'astam éṣi pathā púnar víśvasmād índra úttaraḥ ||*

戻って来い (pres. iptv.), ヴルシャーカピよ,

—— [お互いが] うまくゆくことを, 我ら両者は計らおうではないか (pres. subj.) ——

眠りに就く者<sup>598</sup> として, 今ここに

道を通して, 家へ戻って行く [君] は (pres. ind.)<sup>599</sup>.

あらゆるものより, インドラは, 優れている。

*kalpayāvahai kalp/kḷp* 「しつらえる」 caus. pres. 1du. mid. (possess.-affekt.)

<機能> *kalpayāvahai* (主文): 勧誘

## X 88,3

*devébhīr nāv īṣitō yajñīyebhīr agnīm stoṣāṇy ajāram brhántam |*

*yó bhānūnā prthivīm dyām utémām ātatāna ródasī antárikṣam ||*

今, 祭式に値する神々に, 動かされて

アグニを, 私は称えよう (aor. subj.), 歳を取らない, 背の高い [アグニ] を,

光によって, 大地に, 天にそしてここに<sup>600</sup>

<sup>597</sup> インドラのお気に入りの猿 (ヴリシャーカピ) は, 彼の妻インドラーニーの不興を買い彼女に疎んじられるが, 最後にはインドラによって (第 20 詩節), またインドラーニーによっても (当箇所), 再び彼らの家に戻るようなだめられている。Sūta 全体の概要及び解釈については, 参考文献を含め, THIEME Kl.Schr. II 921-931 を参照。ヴリシャーカピが「古典インド演劇における道化師」役に当たることについては, op. cit. 926 を参照。

<sup>598</sup> OLDENBERG Noten ad. loc., pw に従い, 複合語の後半要素に *naś/āś, āśnóti* の派生形を想定する: 「眠りに (svapna-) 到達する, 就く (-náṁśana-) [者]」。GELDNER ad loc., PW, THIEME op. cit. 926 は, Ya. XII 28 *svapnān nāśayati* に従い *naś (nāśyati)* の caus. 「無くならせる」に帰しているが (「眠りを無くす/追い払う [者]」), -m- の存在からその可能性は低い。I 122,12 *dāśatayasya nāmśe* 「10 からなる [食物] にあり着く時に」も比べよ。語根 *naś/āś* に *naṁś* の形が見られるのは, これらの名詞形及び perf. ind. *ānāmśa* RV, AV に限られる (VI 51,12 *nāmśi* inf./inj.?, OLDENBERG Noten ad loc., HOFFMANN 219, cf. WATKINS Idg.Gram. III-1 139: inj.; KÜMMEL Perf. 284 n. 452: inf. 'loc. Sg.'). 語根の歴史的な背景については, KÜMMEL op. cit. 287, LIV 283 \**h<sub>2</sub>nek-* n. 11, 12 (KÜMMEL) を参照。

<sup>599</sup> 関係節 *yá ...* は Pāda a *éhi* の主語を形成する。Pāda b は挿入文, cf. X 95,1.

天地両界に、中空に、伸び広がっているところの [アグニを] (perf. ind.).

*stoṣāṇi* stav/stu 「称える」 -s-aor. 1sg. act.

stav/stu -s-aor. の活用については、I 53,11 を参照。

<機能> *stoṣāṇi* (主文) : 意志表明

### X 89,1

*īndraṃ stavā nṛtamaṃ yāsya mahnā vibabādhé rocanā ví jmó ántān |*

*ā yāḥ paprau carṣaṇīdhīd vārobhiḥ prá síndhubhyo riricānó mahitvā ||*

インドラを、私は称えよう (pres. subj.), 最も男である [彼] を、彼 (自ら) の<sup>601</sup> 偉大さによって

光る空間たちを<sup>602</sup> 押しやって広げたところの (perf. ind.)<sup>603</sup>, 地の端々を [押しやって]

<sup>600</sup> *pr̥thivīm dyām utémām* は、他の箇所 (III 32,8, III 34,8, X 121,1) においても *Triṣṭubh* の break + cadence の位置に現れ、また共通して Opening を perf. 語形 (CāCaCa) + *yāḥ/sāḥ* の組み合わせによって形成するため、Pāda 全体が韻律上の要請に合った定型句としても用いられていると考えられる。

*pr̥thivīm dyām utémām* に X Y *utá* の構文 (→ KLEIN op. cit. 344 ; IV 39,1, V 41,1) を想定した場合、*imām* を *pr̥thivīm* にかけることは難しい (「天とこの大地に」), cf. KLEIN Disc.Gram. I 345: “It is a metrical variant of *pr̥thivīm utá dyām* which allows the ‘heaven and earth’ collocation to occur in lines with early caesura.”, 348. また一方で、「大地 (*pr̥thivīm*) とこの天に (*dyām ... imām*)」という解釈も (GELDNER, RENOU), *idám* が目の前にあるものや心理的に話し手に属するものを指すことから、相応しくない。ここでは KRICK Feuergründung 224 に従い、*pr̥thivīm* 「大地に」と、*dyām utémām* 「天とこれ (大地) に」、という二つの句が asyndetic に並んでいるものと理解した (似た構造は例えば V 85,4 *bhūmim pr̥thivīm utá dyām* 「地上を、大地と天を」にも見られる)。*dyām utémām* は、*pr̥thivīm* に新たな要素を加えて拡大した表現である。更に Pāda d では、それを別の言葉で言い換えたもの (*ródasi*) に、「中空に」を加えている。つまりこれら全体で、大地から天・空・地に至る段階的な表現を構成していると理解される。

<sup>601</sup> *yāsya* は、関係節の主語を受ける再帰代名詞 (の genitive) として用いられている、NEISSER Kl.Schr. 242, OLDENBERG Noten ad IV 21, 1, GELDNER n. ad loc., RENOU Gram.véd., HETRICH 664–668. 同格的関係節において、このように先行詞の指す内容が関係節の主語であると同時に、その所有 (・再帰) の gen. としても機能する場合——つまり *yó asya*, *yé eṣām* 等が予想される場合——通常 gen. の方だけが関係代名詞に置かれる: *yāsya/yéṣām*, HETRICH 666.

<sup>602</sup> *rocanā-* は、接尾辞 *-ana-* を持つ実体詞のうち、中性形としては唯一語末にアクセントを有する。これは、形容詞 *rocanā-* 「光る、明るい」(AV+) が実体詞化したものであり、形容詞のアクセントを引きずっているためである、LUBOTSKY Nominal Accentuation 111f.

<sup>603</sup> 同様の (*bādh* を使った) 表現のパラレル箇所については、GOTO 216 n. 448 を参照、e.g. X 98,1 *ā paprau p̄rthivam rájo badbadhé rocanā diví | ná tvāvam indra kás canā ná jātó ná janīsyaté 'ati víśvam vavakṣitha* 「地に属する空間を、彼は満たした (perf. ind.)。光る空間たちを、天に、彼は押しやった (perf. ind.)。決して君のような者は、インドラよ、誰も生まれたことはなく、生まれることもないだろう (fut.)。一切を超えて、君は大きくなった (perf. ind.)」。

広げたところの、

境界を保持する者として<sup>604</sup>、諸々の広がりによって、[天地両界を] 満たしたところの (perf. ind.) [彼を]、<sup>605</sup>

大きさにおいて<sup>606</sup>、大河よりも、越え優っている者として。

*stavā*

*stav/stu* 「称える」

root-pres. 1sg. act.

<機能> *stavā* (主節) : 意志表明

**X 94,1**<sup>607</sup>

*prāité vadantu prá vayām vadāma grāvabhyo vācam vadatā vādadbhyaḥ |*

*yād adrayaḥ parvatāḥ sākām āśavaḥ ślókam ghóṣam bhārathéndrāya somīnaḥ ||*

このもの (石臼) たちは、声を出せ (pres. iptv.)。われわれは (も) 声を出そう (pres. subj.)、  
——声を挙げている石臼たちに、言葉を、君たち (祭官たち) は発せよ (pres. iptv.) ——  
岩々よ、山々よ、一斉に、足早に  
音を、響きを、インドラのために、君たちがたてている時に (pres. ind.)、ソーマを伴う [君  
たち] が。

*prá ... vadāma*

*vad* 「声を出す、しゃべる」

full-gr. them. pres. 1pl. act.

<機能> *prá ... vadāma* (主文) : 意志表明

祭官たちは、石臼たちに命令を発する一方、自分たちも同様に声を出す、i.e. 讃歌を唱えること、を宣言している。聞き手には基本的に石臼たちが想定されており (Pāda acd), *vadāma* が他の祭官たちへの勧誘を表わす可能性は低い。Pāda b の他の祭官への命令は、挿入句的に理解される。

<sup>604</sup> THIEME Kl.Schr. 239, “die Grenzen festmachend, erhaltend” に従う。

<sup>605</sup> 「インドラ自身の広がり [が] 天地両界を満たした」の意味、cf. IV 18,5 *ā ródasī aprñāj jáyamānaḥ* 「生まれつつ、天地両界を、彼 (インドラ) は満たしていた」、GELDNER ad loc..

<sup>606</sup> *várobbhiḥ* は述語内容の限定や基準を表しているとも考えられる：「広がり [の点で] / に関して」、GELDNER III 284 n. 1, cf. DELBRÜCK 128 §87, 137 §92.2.

<sup>607</sup> 祭式の場合において、石臼がソーマを搾る音と、祭官が唱える言葉とが比べられている。

X 95,1<sup>608</sup>

hayé jāye mānasā tīṣṭha ghore vācāṃsi miśrā kṛṇavāvahai nú |  
 ná nau mántrā ánuuditāsa eté máyas karan páratatare canāhan ||

何とまあ。妻よ、思考を——立ち止まれ (pres. iptv.), 恐ろしい女よ——  
 織り交ぜた言葉たちを、我らは交わそうではないか (pres. subj.), さあ。  
 我ら (二人) の諸々の考えが、口に出されなければ、これらは  
 満足を為さないであろう (aor. subj.), より先の日においても。

kṛṇavāvahai kar/kr 「為す, 作る」 nasal pres. 1du. mid. (reciprocal)

<機能> kṛṇavāvahai (主文): 勧誘

X 95,2<sup>609</sup>

kím etā vācā kṛṇavā távāhām prākramiṣam uśāsām agriyéva |  
 pūruravaḥ púnar ástaṃ parehi durāpanā vāta ivāhām asmi ||

これらが<sup>610</sup>, 何ですって——[何を] きみの, 言葉によって, なせばいいのです (pres. subj.),  
 わたしは。<sup>611</sup>

<sup>608</sup> X 95 は, 天女ウルヴァシー (U.) と人間の王ブルーラヴァス (P.) との話。結婚時の掟を破った P. は, 約束通り彼のもとを去った U. を呼び戻そうと様々なやり方で説得するが, 全て断られることになる (cf. X 95,13)。当詩節は, U. が去って後, 彼女と再会した P. が最初に言う言葉である。これに対する U. の答えとして後続詩節 X 95,2 も参照せよ。

<sup>609</sup> 第一詩節 (→X 95,1) のブルーラヴァス (P.) の言葉に対する, ウルヴァシー (U.) の答え。

<sup>610</sup> 先行詩節 mānasā ... vācāṃsi miśrā 「思考の混ざった (=こもった) 言葉たち」を指す。

<sup>611</sup> 従来「この言葉によって (instr. etā vācā)」と考えられてきたが (例えば GELDNER), -ā- 語幹代名詞の f. instr.sg. は原則的に -āyā であるため, instr. etā を認めることはできない, STRUNK Anusantatyai 256ff. (X 75,6 tyā < \*tyāyā については op. cit. 256f. を参照)。etā には m. nom./acc. du. または n. nom./acc. pl. (~ etāni) の可能性があるが, ここでは先行詩節の vācāṃsi を受けているため, 後者が相応しいと考えられる。その際, Pada a 全体の統語構造には幾つかの解釈が考えられる。STRUNK は, etā を kṛṇavā の目的語 (acc.), kím を疑問副詞と解釈する: “Warum soll ich diese (i.e. mit Überlegung versehenen Worte) durch deine Rede (veranlasst) tun/sprechen” (op. cit. 259)。本論では, 冷たく返答する U. の言葉として, kím etā 「これら [の言葉] が何なの?」と, [kím] vācā kṛṇavā távāhām 「きみの言葉によって, [何を] すればいいの, わたしは?」という二つの構造を想定した。

この詩篇では, P. が言ったのと同じ/類似の言葉に, U. が別の意味 (皮肉) を込めて返答する場面が目立つ, e.g. 第 13 詩節 (HOFFMANN 206 を参照), 第 12 詩節。当箇所恐らく, P. が二人で交わし合うものと表現した vācas- 「言葉」を, U. は P. が一方的に話した効果のない「言葉」という意味で用い

私は出て行ったのです (aor. ind.), 曙たちの中の, 最初の [それ] が のように。

プルーラヴァスよ, 家へ, 君は帰り去りなさい (pres. iptv.).

風のように, 得がたいもの (f.) なのです (pres. ind.), わたしは。

*kṛṇavā*

*kar/kr* 「為す, 作る」

nasal pres. 1sg. act.

<機能> *kṛṇavā* (疑問文): 義務

### X 95,13

*prāti bravāṇi vartáyate áśru cakrán ná krandad ādhīyè śivāyai |*

*prá tát te hinavā yát te asmé<sup>612</sup> párehīy ástaṁ nahí mūra māpaḥ ||*

(その子に) 私は答えましょう (pres. subj.), 涙を流す [彼] のために。

車輪が のように, (子は大声で) 泣き叫ぶものです (pres. inj.)<sup>613</sup>, 愛情ある配慮を求めて。

私たちのもとに, 君のもの (i.e. 君の子) があるなら, それを<sup>614</sup>, 君に, 私は送り出しましょう (pres. subj.).

家へ, 帰り去れ (pres. iptv.), 愚かな人よ, 私を, 君が手に入れることはないのだから (perf. subj.)<sup>615</sup>。

ている。また, P. が *kṛṇavāvahi* (1du. mid.) によって二人の間の話し合いを勧誘したこととは対照的に, U. は自分に為す術無しとの考えを *kím ... kṛṇavā* (1sg. act.) という反語表現によって表わしている, STRUNK op. cit. 260.

<sup>612</sup> opening が 3 音節の unterzählig, OLDENBERG Proleg. 79f. を参照, 同 80 n. 3 は, *prá* に “zweisybig mit Svaravakti ?” の可能性をも示唆 (Noten ad loc. を比べよ)。

<sup>613</sup> X 95 については X 95,1 (→ A 1.1.1) を参照。先行の第 12 詩節でプルーラヴァス (P.) は, 二人の間に生まれることになる子どもに言及して ウルヴァシー (U.) を引き留めようとする: X 95,12 *kadā sūnūh pitāraṁ jātā ichāc cakrán nāśru vartayad vijānān* 「いつ, 生まれたばかりの息子は, 父を求めるだろうか (pres. subj.)。車輪が のように (子はとめどなく) 涙を流すものだ (pres. inj.), 自覚するようになれば」。U. はこれに対して, P. が用いたのと同じ比喩表現を, 皮肉をこめた文脈で使い直している: P. は止めどなく涙を流す子の例えに, 一方 U. はうるさく金切り声をあげる子の例えに, それぞれ車輪の比喩を用いている, HOFFMANN 206。

<sup>614</sup> 文脈から *tát ... yát ...* は子供のことを指していると考えられる。一般に赤子を neut. sg. で受ける現象も考えられるかも知れないが, P. が子のことを言うのをうるさく思った U. の苛立つ態度の顕れ (“geringschätzig”, HOFFMANN 206 + n. 192, 前注も参照) と思われる。

<sup>615</sup> *nahí ... āpaḥ*: 接続法「未来」の否定は, 未来全般を否定することから, しばしば超時間的な一般論を表わし得る, HOFFMANN 239, 241 (当箇所について op. cit. 206, 101 n. 220)。

<i>prāti-bravāṇi</i>	<i>brav<sup>i</sup>/brū</i> 「話す, 言う」	root-pres. 1sg. act.
<i>prá ... hinavā</i>	<i>hay/hi</i> 「送る」	nasal pres. 1sg. act.

<機能> *prāti-bravāṇi* (主文) / *prá ... hinavā* (主節): 意志表明

### X 97,1

*yā ōśadhiḥ pūrvā jātā devébhyas triyugām purā |*  
*mānai nú babhrūṇām ahām śatām dhāmāni saptā ca ||*

太初の者たちとして, 神々よりも

三ユガ期<sup>616</sup> 前に生まれたところの, 葉草たち

わたしは, 今, 思念しよう (aor. subj.), 茶褐色の [それら] の

百と七つの, 定位置たちを。

*mānai*                      *man* 「-s-aor.: 思われる / root-aor.: 思念する」      root-aor. 1sg. mid.

語幹の意味については, I 24,1 を参照。

<sup>616</sup> GAEDICKE Accusativ 176 は *triyugām* を, 動詞の行為の時間幅 (「～の間ずっと」) を表す acc. に分類している。しかし当箇所 acc. は明らかに, *devébhyas ... purā* 「神々より前に」という副詞句を, 具体的な時間の分量 (i.e. どれだけ前であるか) によって限定している。分量 (Mass) を表す acc. は, acc. の独立的 (副詞的) 用法である「時の acc. (Acc. der Zeit)」や「空間的広がりを表す acc. (Acc. der Raumerstreckung)」の延長上で理解される。これらと異なるのは, 時間概念や空間概念を静的に捉える点であり, それは当箇所のように, 状態を表す要素 (形容詞, 副詞) とともに用いられる際に典型的に見られる。ただしヴェーダ語の acc. は殆どの場合, 動作を表す動詞とともに用いられるので, 概ね「時の acc.」や「空間的広がりを表す acc.」による解釈が可能である (後者の独立用法自体も, 用例の殆どが “Inhaltsakkusativ” の機能によっても理解可能なため明確には認識されていない → GOTÖ Funktionen des Akkusativs. 38f.). 分量の acc. が多くの印欧諸語に記述される一方で, ヴェーダ語では積極的に認められていないのもこのためである (GAEDICKE op. cit. 84)。それでも上記の acc. の独立用法は常に, 動詞の意味に従って, ある時は行為の続く時間・空間全体を表わし (「彼は三日間ずっと旅を続けた」; また「昼」のような「全体」が意味を持たない単なる時の指定も表わす), またある時は, 当箇所に見られるように, 状態の度合いや分量を表し得る (「彼は三日ほど前に家を出た」) と言える。

GAEDICKE op. cit. 84f. は, ヴェーダ語で分量を表す他の表現法の一つとして, 複合語の “adverbialer Accusativ” による場合を挙げている: SB I 6,3,11 *tásmād ū ha iṣumātrām evā tiryān vardhate* 「それゆえ, 矢の長さだけ, 横に彼は成長するわけである」。しかし, 「副詞的 acc.」*iṣumātrām* は, まさに当箇所と同じ「分量の acc.」によって説明可能と思われる (動的な動詞のため, 空間的広がりを表しているとも言えるが, cf. 本注前段落)。複合語であるかどうかはその際重要ではない。むしろ, *tri-yugā-* や *iṣu-mātrā-* (← *mātrā-*) のような, 「数詞 etc. + 実体詞 + -ā-」からなる複合語 (“SOMMERkompositum”) は全体量を一括して言う表現法であり, acc. の全体性 (“Gesamtheit”, GOTÖ op. cit. 37f., 42) を強く示す「空間的広がり」を表す acc. の一つとして最も良く理解されよう。

<機能> *mānai* (主節) : 意志表明

### X 97,17

*avapātantīr avadan divá ōṣadhayas pári |*

*yám jīvám aśnāvāmahai ná sá riṣyāti pūruṣaḥ ||*

彼らはしゃべった／論じた (ipf.), 薬草たちは

天から, 落下しながら :

「[誰にであれ] 生きている者に, 我々が至る (であろう) ならば (pres. subj.)

その者は, 傷つくことはない (であろう) (pres. subj.)」

*aśnāvāmahai*

*naś/aś* 「到達する, 獲得する」

nasal pres. 1pl. mid.<sup>617</sup>

<機能> *aśnāvāmahai* (限定的関係節) : 見込み

一般論を表わす典型的な表現である「格言的複文」に属すると思われる : 「…であれば／…する者は, (必ず) …ことになる」。薬草たち自身が, 自分たちの効用を一般的事実として述べていると思われる → B 2.2.1。次の例では逆に, 人間が神々の力によって (条件節) 不死となり得ることを述べている : I 91,6 *t<sub>u</sub>vām ca soma no váso jivātum ná marāmahe* 「きみが, ソーマよ, 我々の生きることを欲することになれば, 我々は死ぬことはない (であろう)」。

### X 98,3<sup>618</sup>

*asmé dhehi dyumātīm vācam āsán bṛhaspate anamivām iṣirām |*

*yáyā vṛṣṭīm śántanave vānāva divó drapsó mādhumāñ ā viveśa ||*

われらのもとに, 輝き持つ言葉を, 口の中に, 君は置き定めよ (pres. iptv.),

<sup>617</sup> 「自分のために到達する」とは, ここでは「自ら選んでその目的に達する」, 「意図的にその目的を目標して到達する」の意味と思われる, cf. VIII 92.27 *nakṣanta*.

<sup>618</sup> 話し手のデーヴァービは, シャンタヌ王の筆頭祭官 (*puróhita*-) として, 王のために雨乞いの祭式を行なっている。プリハスパティは, 彼と神々との間の仲介役を担う。

ブリハस्पティよ、病を持たない、活力ある〔言葉〕を、  
それによって、雨を、シャントヌのために、我ら両者<sup>619</sup> が克ち得ることになるところの／  
なるように (aor. subj.)<sup>620</sup>。

天の、蜜に富む一滴が、(私の中に) 入り込んでいる (perf. ind.)<sup>621</sup>。

*vānāva*

*van* 「打ち克つ、克ち得る (pres. *vanóti*)」

root-aor. 1du. act.

<機能> *vānāva* (同格的／限定的関係節 → B 2.3 及び下注)：見込み

# X 101,5<sup>622</sup>

*nīr āhāvān kṛṇotana sām varatrā dadhātana* |

*siñcāmahā avatām udriṇaṃ vayām suṣékam ānupakṣitam* ||

桶（釣瓶）たちを、君たち（祭官たち）は出して揃えよ (pres. iptv.)。

（桶の）縛り紐たちを、君たちは結わえ合わせよ (pres. iptv.)。

〔自分たちのために〕汲もうではないか (pres. subj.)、われわれは、水を湛える井戸（から水）を<sup>623</sup>。

<sup>619</sup> 話し手であるデーヴァーピとシャントヌ王。

<sup>620</sup> 当詩節のように、先行詞 (*vác-*) が一般名詞であり、かつそれが主文の中で既に多様に限定されている場合 (*dyumátim, anamivām, iṣirām*)、関係節 (*yáyā ...*) が限定的であるか同格的であるかを決定するのは難しい。前者の場合、関係節は他の修飾語とともに先行詞を性格付けるための不可欠な要素であるが、後者の場合は、既に特定化された先行詞について付加的な情報を与えるに過ぎない、cf. HETTRICH 740f.

<sup>621</sup> 詩人が、Pāda ab で要請した *vác-* を得るためにソーマを飲んだことを表す。*ā-viveśa* は、perf. 本来の「達成された状態」を表しており、今現に雨粒が降ってきたことを表す (Say.) とは考えにくい（その場合アオリストが予想される）。ただし GELDNER ad loc. も参照。

<sup>622</sup> 早朝の祭式儀礼を日常生活の場面に喩えて記述している、GELDNER ad loc.。ここでは、ソーマを汲む行為を、井戸の水汲みという日常行為によって表わしている。

<sup>623</sup> *sec/sic*, pres. *siñcati* が取る目的語は大きく、1) 液体、2) 液体の入った容器、3) 液体を注ぐ対象、の三つに分けられる、cf. GOTÖ Funktionen des Akkusativs 40. *avatām* 「井戸」や *utsām* 「泉」の場合は 2) に類して判断されるが、その際 *sec/sic* は「汲んでから注ぐ」までを表すよりも、むしろ単に「汲む」の意味で用いられていると考えられる、cf. GELDNER ad loc., II 24, 4d (*utsām sec/sic*)。続く二詩節も参照せよ：X 101, 6 *īṣṣṭāhāvam avatām suvaratrām suṣecanām | udriṇaṃ siñce ākṣitam* 「(その為の) 釣瓶が揃えられた、よき縛り紐を伴う、よく汲める井戸（から水）を、水を湛える、尽きることのない〔井戸（から水）〕を私は汲んだ」（形容詞 *suṣecanā-* も、当詩節 *suṣéka-* と同様「汲む」の意味を前提としている）、7 *drónāhāvam avatām āsmacakraṃ āṁsatrakośam siñcatā nṛpānam* 「ソーマ桶を釣瓶として持つ、石（臼）を車輪として持つ、甲冑を桶として持つ、男たちが飲む井戸（の水）を君たちは汲め」（ここではソーマ用の桶を「井戸」と呼んでいる）。一方次の箇所では、井戸を容器のように直接ひっくり返して水を注ぐ話が述べられている：I 116, 9 *pāravatām n. āsatyānudethām uccābudhnam cakrathur*

よく汲める、涸渇することのない〔井戸（から水）〕を。

*siñcāmahai*

sec/sic 「注ぐ」

them. (nasal) pres. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *siñcāmahai* (主文) : 勧誘

### X 108,3<sup>624</sup>

*kīdīññ indraḥ sarame kā dṛśikā yāsyedām dūtīr āsaraḥ parākāt |*

*ā ca gāchān mitrām enā dadhāmā- āthā gāvām gópatir no bhavāti ||*

インドラは、どのような見かけをしているのか、サラマーよ、どのような容貌を持つのか、その者の使者として、あちら側から、君が走っ〔て来〕たところの (aor. ind.) [彼は]。彼がやって来るなら (pres. subj.)<sup>625</sup>、契約を、当人と、我々は定めよう (pres. subj.)。そうすれば、我々の牛たちの、牛の主人に、彼はなるであろう (pres. subj.)。

*dadhāma*

*dhā* 「置く ; 置き定める」

redupl. pres. 1pl. act.

語幹の形成については、I 2.1.1 5) を参照。

<機能> *dadhāma* (主節) : 意志表明

*jihmābāram | kṣārann āpo ná pāyānāya rāyé sahāsrāya tṛṣyate gótamasya* 「井戸を向こうへ、両ナーサティヤたちよ、君たち両者は突き飛ばした。地面を上を、君たち両者は為した。〔井戸を〕縁が傾いたものに〔した〕。水たちは、財物を流れもたらず、〔水たちが〕飲ませることのために のように、ゴータマに属する、喉の渴いている千〔人〕のために」; I 85, 10-11 *ūrdhvām nunudre 'avatām, tā ójasā ... jihmām nunudre 'avatām táyā diśā- siñcann utsam gótamāya tṛṣṇāje* 「力づくで、井戸を彼ら（マルト神たち）は突き上げた。…井戸をその方角に、彼らは突き傾けた。喉の乾いたゴータマのために、泉（の水）を彼らは注いだ」。

<sup>624</sup> Paṇi 族 と牝犬 Saramā との対話。X 108,9 (以下参照) を見よ。

<sup>625</sup> *ca* は Pāda cd の従属接続詞として機能しており、*ca* + subjunctive によって条件文を導いている、VIII 100,2 を参照、cf. 時を表す *ca* 文 → X 34,5, X 108,9。当詩節は前半が疑問文、後半が表明文であることから、*ca* に ‘and if’ を想定すること (KLEIN Disc.Gram. I 242) は難しい (→ VIII 100,2 注)。—— GONDA Particle *ca* (Vāk 5) 52 が *gāchān* に主語の意志を認めているのに対し、HETTRICH 253f. は、*yādi* 節及び *yād* 節を含む全ての条件節の subj. は、prospektiv で理解可能であると正しく指摘している。

X 108,9<sup>626</sup>

evā ca tvām sarama ājagāntha prābādhitā sāhasā dāivyaena |

svāsāraṃ tvā kṛṇavai mā pūnar gā āpa te gāvāṃ subhage bhajāma ||

こうして、きみは、サラマーよ、やって来たのだが／やって来たのなら (perf. ind.), <sup>627</sup>

神々に属する強制力に、押し出されて、

君を、我が妹に、私はしよう (pres. subj.)。君は戻って行くな (mā + aor. inj.)。

君に、牛たちの [一部を]、よき天分持つ者よ、我々は分け与えよう (pres. subj.) <sup>628</sup>。

kṛṇavai	kar/kṛ 「為す, 作る」	nasal pres. 1sg. mid. (possess.-affekt.)
āpa ... bhajāma	bhaj 「分け与える」	full-gr. them. pres. 1pl. act.

<機能> kṛṇavai (主文): 意志表明

āpa ... bhajāma (主文): 意志表明

## X 111,1

mānīṣiṇaḥ prā bharadhvaṃ mānīṣāṃ yāthā-yāthā matāyaḥ śānti nṛṇām<sup>629</sup> |

<sup>626</sup> 当 Sūkta は牛の略奪に関する一連の Vala 神話に属する。Paṇi 族によって Aṅgiras たちのもとから奪われた牛を取り返すべく、インドラを先頭とする神々と詩人 (Ṛṣi) らは牝犬 Saramā を探索に送り出す。X 108 は、Paṇi たちの居場所を見つけた Saramā と彼らとの会話から構成されている。当詩節では、当初強がっていた Paṇi たちが Saramā の言葉に次第に不安になり、ついには Saramā を味方に引き入れようとしている。

<sup>627</sup> ca は Pāda ab の従属接続詞として機能している。ca に導かれた従属節は多くの場合条件文を表すが (→ VIII 100,2, X 108,3; cf. 時を表す ca 文 → X 34,5), 当箇所では理由を表すとの解釈が多い: GELDNER 'Da du ..., so will ich ..', HOFFMANN 216 n. 205: "Kausalsatz", KLEIN Disc.Gram. I 246f.: "causal nuance". しかし、本文脈 (前注) を考慮するならば、むしろ反対・対比を表す文か、或いは過去に対する条件文を想定した方がよいと思われる「きみは神々に無理やり派遣されたが、それに対して我々の方は君を優遇しよう」／「きみが…派遣された (ということ) ならば、我々の方は…」; HETTRICH 256 は、当箇所も含め機能を確定できない ca 文の用例を提示している。彼が当箇所に対して付した見出し "ter-Bezug" からは、過去に対する条件文を支持しているように思われるが、GELDNER 訳 (上記) を提示するに留めているため意見が不明瞭である。

<sup>628</sup> 同語根 bhaj の語による一種の言葉遊びであろう。Paṇi たちは、subhage の -bhāga- 「天分, 運」に、bhāgā- 「分け前・取り分」の意味を懸けていると思われる。

<sup>629</sup> 韻律から、nṛṇām = \*nṛṇām. -ar/-ṛ- 語幹の gen. pl. は, RV, AV で一貫して ṛṇām であるが, nár-/nṛ- の場合だけ常に nṛṇām と書かれる。Paṇ. VI 4,6 は nṛ-/nṛ- のいずれも可としている。WACKERNAGEL/DEBRUNNER III 210f. を参照。

*īndraṃ satyāir érayāmā kṛtébhiḥ sá hí viró girvaṇasyúr vídānaḥ ||*

計画を備えた者たちよ、[自分たちの] 計画を、君たちは提示せよ (pres. iptv.),

男たち (君たち) にある (pres. ind.), 諸々の考えの、まさしくその通りに<sup>630</sup>。

インドラを、つくられた諸々の真実によって<sup>631</sup>, 我々はこちらへ動かそうではないか (pres. subj.)。

彼は、(歓迎) 歌を好む勇者として、知られているから<sup>632</sup>。

*ā-irayāmā*

*ar/ṛ* 「動く／動かす, 送り出す」

caus. pres. 1pl. act.

<機能> *ā-irayāmā* (主文): 勧誘

#### X 112,1

*īndra pība pratikāmāṃ sutāsya prātaḥsāvās tāva hí pūrvāpītiḥ |*

*hārṣasva hāntave śūra sātṛūn ukthébhiḥ te viryā prā bravāma ||*

インドラよ、搾られた [ソーマ] の中から、君は飲め (pres. iptv.), 望みに応じて。

朝の [ソーマ] 搾り、最初に飲むことは、君のものであるから。

奮い立て (pres. iptv.), 勇者よ、敵たちを打ち殺すために。

<sup>630</sup> *yátha-yatha* (接続詞の *āmredita*) は、分配的な意味で用いられているか (「男たちそれぞれにある考えを、各自が…」), 或いは、正確さの強調を表わしているか (「男たちに考えがある、まさにその通りに…」), いずれの可能性もある; SAKAMOTO-GOTŌ *Anusantatyai* (Fs. Narten) 233 を参照。ここでは、詩人が思考=詩歌を正確に言葉に出すことが問題となっていることから、後者であると理解した。

<sup>631</sup> Pāli 語でいう *saccakiriya-* の觀念が見られる (= Skt. *satyakriyā-*; ただしこの形は一般に無いと言われている)。 *satyám kar/ṛ* 「真実をつくる／為す」とは、過去或いは未来に関する事実や誓いを、偽り無く特定の文章形式にして発語することを意味する。そのようにして発せられた言葉は、その内容や話し手の願望を実現させる力 (ヴェーダの詩句の場合には *bráhman-*) を持つと考えられていた; 重要な二次文献を含め、最も最近の二文献、八木 *Saccakiriya-* (東方学 104) 1-14 [154-141] (特に 2, 8ff.) 及び WAKAHARA *The Truth-utterance (satyavacana) in Mahāyāna Buddhism* (龍谷佛教學會「佛教學研究」56) 58-69 を参照。この觀念は、後の文献 (特にパーリ仏典) においては極めて頻繁に用いられるテーマであるが、既に RV においても随所に見出すことが出来る, e.g. THIEME *Kl.Schr.* 1182f. (RV では更に、言葉・讃歌が「新しいものである」ことも重要な要素であった, cf. 堂山「新しい歌」)。当箇所 (第 1 詩節) でも詩人は、インドラの諸々の武勲を真実に違ふことなく讃歌 (詩節) という形で唱えることにより、望み通りインドラを味方につける (祭場へ呼ぶ) ことを確信しているものと考えられる, cf. GELDNER *ad loc.* VIII 62,12 *satyám ... īndraṃ stavāma* も参照せよ。

<sup>632</sup> Cf. I 165,10c *ahám hy ūgró maruto vídāno* 「わたし (インドラ) は、マルトたちよ、強者として知られているから」。 *vídāna-* 「知られている」については前掲箇所を参照。

讃辞たちによって、君の諸々の武勲を、我々は公言しよう (pres. subj.).

*prá-bravāma*      *brav<sup>i</sup>/brū* 「話す、言う」      root-pres. 1pl. act.

<機能> *prá-bravāma* (主文) : 意志表明

### X 113,10

*t<sub>u</sub>vām purūṇ<sub>i</sub>y ā bharā s<sub>u</sub>vāśvyā yēbhir māmśai nivācanāni śāmśan |*  
*sugēbhir víśvā duritā tarema vido<sup>633</sup> śú ṇa urviyā gādhām adyā ||*

きみは、沢山の、よき馬からなる諸々の財を、持って来い (pres. iptv.),  
 それらによって [自分が] 献呈の言葉たちを<sup>634</sup>, 宣言しているものと、私が思うことになる  
 ように (aor. subj.).

行き易い道たちを通して、一切の困難たちを、我々は渡りおおせたい (pres. opt.).

さあ、しかと、我々に、浅瀬を、幅広く、君は見つけよ (aor. iptv.), 今日。<sup>635</sup>

*māmśai*      *man* 「-s-aor. : 思われる / root-aor. : 思念する」      -s-aor. 1sg. mid.

-s-aor. 語幹は、意志によらない自発的な意味を表し、現在形 *mānye, mānyate* に対応する。  
*man* 二系統の語幹の意味については、I 24,1 を参照。*māmśai* は OAv. *māṇghāi* に正確に  
 対応する。root-aor. *manai* = OAv. *mānāi-cā* については I 24,1 を参照。

<機能> *māmśai* (同格的関係節) : 見込み

### X 115,8

*ūrjo napāt sahasāvann iti tvo-<sub>u</sub>pastutāsya vandate vṛśā vāk |*  
*tv<sub>a</sub>ām stośāma t<sub>u</sub>vāyā suvīrā drāghiya āyuh pratarām dādhanāḥ ||*      Pāda cd = I 53,11

<sup>633</sup> aor. iptv. *vidā* + ptcl. *u*, HOFFMANN 263.

<sup>634</sup> 「(称える) 相手だけに属する献呈の言葉」, cf. *nivīd-*.

<sup>635</sup> GELDNER ad cd: “Bildlich zu verstehen. Der Sänger wünscht alle Klippen der Rede glücklich zu umgehen.”.

「力を備えた、滋養の子よ」と（言って）、君（アグニ）を  
 ウパストウタ（話し手＝詩人）の言葉が、牡牛として、誉め称えている（pres. ind.）。  
 きみを、我々は称えよう（aor. subj.）、君によって、よき男子に富み  
 [自分たちの] 命を、より先へ延長させつつ。

*stoṣāma*                      stav/stu 「称える」                      -s-aor. 1pl. act.

stav/stu -s-aor. の活用については、I 53,11 を参照。

<機能> *stoṣāma* (主文)：意志表明

「我々は称えよう（aor. subj.）、君によって、よき男子に富み、[自分たちの] 命を、より先へ延長させつつ」は、要求の結果を先取りした意志表明 → A 1.2.3 c)。

#### X 119,9<sup>636</sup>

*hántāhām pr̥thivīm imām ní dadhānīhá vehá vā |*

*kuvīt sómasyāpām iti ||*

「よし、わたしは、この大地を  
 定め置こう（pres. subj.）、ここに、或いはここに。

—（それとも）一体、ソーマを、私は飲んだのだろうか（aor. ind.）—」（私は思う）<sup>637</sup>。

<sup>636</sup> 当 Sūkta の歌い手とされるラバ (*labā-* Sarvānukramaṇī; Yāska VII,2 *labasūkta-*) は鳥（ウズラ）であるとも、神々（インドラ或いはその息子、アグニ）であるとも言われている、cf. OLDENBERG *Noten ad loc.*, GELDNER *ad X 119*, STUHRMANN *StII 11/12* (1986 [1987]) 299。現実／比喩如何に関らず、話し手が何らかの鳥と同一視されていることは間違い無いと思われる、cf. GELDNER *loc. cit.*。その際インドの伝統及び欧米の解釈学の中にも、ウズラ（Wachtel）を想定するケースが多いが、STUHRMANN の「タゲリ」（チドリ科）とする説は興味深い。それによれば（op. cit. 301f.）この鳥の巧みな曲芸飛行が、ソーマを誤飲して酔った際の「千鳥足」として描かれているという。更に、Sūkta を通して繰り返される疑問詞 *kuvīt* は、ドイツ語 Kiebitz 「タゲリ」（＜擬声語 “kiwitt”）と同様、タゲリの鳴き声の擬声語としても用いられているとする。第 9, 10 詩節は、ソーマによる酔いのために自分の体が膨張した（と感じた）話し手（鳥）が、その羽（手）で大地を叩きつけようとする状況（或いは鳥が何度も急降下する様？, op. cit. 306）を表わすと考えられる。前後の諸詩節も参考にせよ：7 *nahī me ródasī ubhé anyām pakṣām canā prāti | kuvīt ...* 「天地両界はいずれも、私の一方の翼にさえ匹敵していないのだから。…」, 8 *abhī dyām mahinā bhuvam abhīmām pr̥thivīm mahīm | kuvīt ...* 「大きさにおいて、天を私は圧倒する。この大きな地を圧倒する。…」, 11 *divī me an(yā)h pakṣò 'dhó anyām acikṛṣam | kuvīt ...* 「天に、私の片方の翼がある。片方を、下に、私は引きずった。…」, 12 *ahām asmi mahāmahò 'bhinabhyām údīṣitaḥ | kuvīt ...* 「わたしは、巨大である。雲に至るまで、私は上昇した。…」。

*ní-dadhāni**dhā* 「置く；置き定める」

redupl. pres. 1sg. act.

語幹の形成については、I 2.1.1 5) を参照。

<機能> *ní-dadhāni* (主文)：意志表明

*hānta* ... + 1人称接続法 → A 1.2.1 c)。

### X 119,10

*ośām ít prthivīm ahām jaṅghānānīhā vehā vā |*

*kuvīt sómasyāpām iti ||*

「まさに激しく、大地を、わたしは

何度も叩き打とう (pres. subj.), ここに、或いはここに。

— (それとも) 一体 ソーマを、私は飲んだのだろうか (aor. ind.) —」と<sup>638</sup>。

*jaṅghānāni**han* 「打つ、殺す」

intens. I pres. 1sg. act.

非幹母音幹の intens. subj. は、語根部分で例外無く zero-gr. を示すため (*carkirāma* IV 39,1, *vevidāma* VII 24,6 = VII 25,6)<sup>639</sup>, *jaṅghan-a-* は本来の zero-gr. *\*g<sup>wh</sup>én-g<sup>wh</sup>n-o/e-* からの形成が予想される。その際 *-ghan-* の形は「SIEVERS の法則」を経て (*\*g<sup>wh</sup>én-g<sup>wh</sup>ṇn-o/e-*) 生じたとするのが一つの考え方である (同様に subj. 2sg. *jaṅghan-as*, 3sg. *jāṅghan-at*) → SCHAEFER 43, 70. しかし、この「法則」は二音節以上の要素が後続する場合には適用されず<sup>640</sup>, また

<sup>637</sup> *kuvíd* ... については C 3 を参照。33 箇所ある *kuvíd* 文 (繰り返しは除く) の中で, subj. が大多数を占めるのは、この文が表す話し手の期待や想定が未来に関係することが圧倒的に多いからである (VIII 91,4, I 33,1), HETTRICH 152. しかし過去のことに言及している状況では、当箇所のように、当然過去時制が使われる, ETTER 229. ここでは過去の、しかも自分自身のことについて問いかけている (自問), VIII 91,4 も参照。

*Pāda d* は X 119,1-10 全てにおいて繰り返されている。 *iti* があるのは第 1 詩節の構造を引きずっているためである: X 119,1 *iti vā iti me māno gām āsvaṃ sanuyām iti | kuvīt sómasyāpām iti* 「私の考えはこう、つまりこうなのだ: 『牛を、馬を、私は勝ち得たい』と。『—— (それとも) 一体、ソーマを私は飲んだのだろうか——』と (私は思う)」。

<sup>638</sup> X 119 について、また *kuvíd* ... *iti* については、X 119,9 を参照。

<sup>639</sup> 他にも例えば, *gar<sup>i</sup>/g<sup>r</sup>* 「飲み込む」, 2subj. *jalgulas; karṣ/kṛṣ* 「引きずる; (犁で) 耕す」, 3sg. *carkṛṣat; dar<sup>(i)</sup>/dr<sup>(i)</sup>-dṛ* 「砕く、割る」, 3sg. *dardirāt; barh/bṛh* 「力づける、強大にする」, 3sg. *(-)bārbṛhat* などが見られる, SCHAEFER 37ff. を参照。

<sup>640</sup> Cf. SCHINDLER Rev. of Seebold (Sprache 23) 62.

このことが pres. ptcpl. m. nom./acc. sg. *jāṅghan-at* :: gen. sg. *jāṅghn-atas* にも反映している  
とすれば (SCHAEFER 70), subj. 1sg. act. には本来やはり \**jāṅghn-āni* が想定される。  
*jāṅghān-āni* が本来の語尾を持つ \**jāṅghan-ā* に基づく可能性も排除は出来ないが、恐らく  
は, intens. の他の定動詞語形 (subj. 2/3sg. *jāṅghanas*, *jāṅghanat*; pres. ind. 3sg. -*jāṅghanti*)  
——更には root-pres. *hān-* の subj. 1du/pl. *hānāva/hānāma*, 1sg. *hānāni* MS+——からの類推  
作用 (-*ghan*-[*han*-] の均一化) や, 3子音連続の回避といった発音上の事情などが, 複合的  
に作用して *jāṅghān-* の形が定着したものと思われる。他の intens. 語幹をも含めた議論は I  
2.1.1 2) を参照。subj. 1du: act. *jāṅghan-āva* (→ VIII 100,2, X 83,7) の場合も同様に理解  
される。

*jāṅghānāni* は, *han* の全 intens. 語形の中で唯一, 語根部分にアクセントを持つ, cf. inj. 3pl.  
mid. *jāṅghananta*, subj. *jāṅghanas*, *jāṅghanat*, ptcpl. *jāṅghanat*, *jāṅghnatas* (上記参照), SCHAEFER  
203。異例のアクセント位置は, 話し手の言葉が酔いによって (→ 注636) 乱れていること  
を表す可能性もある。

SCHAEFER 84ff. は, RV の用例に基づく intensive の機能を下位分類しているが, 当箇所  
は「単純な繰り返し」“einfache Wiederholung” にあたり (cf. VII 24,6 = VII 25,6 *vevidāma*),  
その中でも, 「動詞の表す行為は一個の対象に向けられているが, ただし [同対象の内の]  
複数の場所で行われる」<sup>641</sup> 場合の一つである, op. cit. 85, 204。ただし, *han* の intens. の  
用例のうち大部分は, 複数の対象に向けられた「対象の分割」“Objektsdistribution” の用法  
である (op. cit. 204f.), → VIII 100,2, X 83,7 *jāṅghanāva*。

<機能> *jāṅghānāni* (主文): 意志表明

#### X 124,6

*idām s<sub>4</sub>vār idām id āsa vāmām ayām prakāśā ur<sub>4</sub>v āntārikṣam |*

*hānāva vṛtrām niréhi soma haviṣ tvā sāntam haviṣā yajāma ||*

ここに, 太陽光が, まさしくここに, 好ましいものが, あった (perf. ind.)。

ここに, 明るさが, 幅広い中空が [あった]。

ヴリトラを, 我ら両者は打ち殺そうではないか (pres. subj.)。出てこい (pres. iptv.), ソー  
マよ。

<sup>641</sup> DRESSLER Verbale Pluralität 73, 74 の “lokal-/modal-distributiv” に相当。

(それ自身) 供物である君 (ソーマ) を, 供物によって, 我々は祭ろう (**pres. subj.**)。

<i>hánāva</i>	<i>han</i> 「打つ, 殺す」	root-pres. 1du. act.
<i>yajāma</i>	<i>yaj</i> 「称讃する, 祭る」	full-gr. them. pres. 1pl. act.

<機能> *hánāva* (主文): 勧誘  
*yajāma* (主文): 意志表明

#### X 145,5<sup>642</sup>

*ahám asmi sáhamānā- 'atha tvám asi sāsahīḥ |*  
*ubhé sáhasvatī bhūtvī sapátnīm me sahāvahai ||*

わたしは, 克服する者 (f.) である。

そして, きみ (草) は, 打ち克つ者である。

[我ら] 二人は, 克服力を持つ者となって,

(ライヴァルである) 妻を, 克服しようではないか (**pres. subj.**)。

<i>sahāvahai</i>	<i>sah</i> 「克服する, 克つ」	full-gr. them. pres. 1du. mid.
------------------	-----------------------	--------------------------------

<機能> *sahāvahai* (主文): 勧誘

#### X 156,2

*yáyā gā ākārāmahe sénayāgne távoti yā |*  
*tām no hinva maghāttaye ||*

その軍隊によって, 牝牛たちを, アグニよ,

<sup>642</sup> 1 人の女 (Sarvānukramaṇī によれば, インドラの妻 Indrāṇī) が, 魔法の草を使った魔術によって, 他の妻 (恋敵) を倒す場面が歌われている。当箇所では, 女がその草に向かって話しかけている。GELDNER III 378f. + n. 1 を参照。

君の助けによって、我々がこちらへ向けることになるところの／なるように (aor. subj.),  
それ (軍隊) を、我々に、君は送れ (pres. iptv.), 能力の賦与のために。

*ā-kārāmahe*      *kar/kr* 「為す, 作る」      root-aor. 1pl. mid. (affekt.)

<機能> *ā-kārāmahe* (限定的関係節): 見込み

*yāyā ... kārāmahe* (限定的関係節) は主文の目的を表わしているとも考えられる (HETTRICH 593) → B 2.2, cf. I 92,13, VIII 27,22, (IX 101,9)。同様に目的を表わし得る同格的関係節との構造上・意味上の違いについては, B 2 及び 2.2 を参照。

#### X 157,1

*imā nū kaṃ<sup>643</sup> bhūvanā siṣadhāmé- ṇdraś ca víśve ca devāḥ<sup>644</sup> ||*

この生類たち (世界) を、今、我々は成就させよう (繁栄させよう) (aor. subj.),  
[我々と] インドラと一切神たちとが<sup>645</sup>。

*siṣadhāma*    *sādh* 「目的に到達する, 成就する; 成就させる」    redupl. aor. (fakt.) 1pl. act.

時制幹は恐らく幹母音幹: *siṣadha-*, cf. 3sg. act. *siṣadhāti*。MEIER-BRÜGGER Konj.Opt. 116 は 2sg. *siṣadhas* (2x) が subj. である (subj. *vócat* ~ inj. *vócati* のように非幹母音幹 *siṣadh-* をも持つ) 可能性を想定するが、用例からはそれを証明することは出来ない, cf. I 2.1.2。

<機能> *siṣadhāma* (主文): 意志表明

#### X 159,6

*sám ajaiṣam imā ahám    sapátnir abhibhūvari |*

*yāthāhám asyá virásya    virājāni jánasya ca ||*    Pāda d = X 174,5d

<sup>643</sup> II 28,8 *hí kaṃ* を参照。

<sup>644</sup> 主語を構成する三つの要素 [X Y ca Z ca] のうち, X=話し手 (*ahám, vayám*) が省略されている, KLEIN Disc.Gram. I 197。この種の表現については, VII 88,3 を参照。

<sup>645</sup> 8 音節 (或いは *ṇdraś ca víśve unterzählig* ?, cf. OLDENBERG ad loc.)。

すっかり、打ち負かしたぞ (aor. ind.), わたしは、これらの  
 (ライヴァルである) 妻たちを、優越する者として、  
 わたしが、この勇士と  
 民とを、遍く支配することになるように (pres. subj.)。

*vi-rājāni*                      *rāj* 「支配する」                      them. pres.<sup>646</sup> 1sg. act.

<機能>    *vi-rājāni* (*yāthā* 目的節) : 見込み

# X 165,1

*dēvāḥ kapóta iṣitō yād ichān    dūtō nūrtyā idām ājagāma |*

*tāsmā arcāma kṛṇāvāma niṣkṛtiṃ    śaṃ no astu dvipāde śaṃ cātuspade ||*

神々よ、鳩が、送り出されて、何かを求めて

破滅の女神の使者として、ここにやって来たとしたら／としても (perf. ind.),

それに対して<sup>647</sup>, 我々は唱えよう (pres. subj.), 取り消し／回復を, 我々は為そう (pres. subj.)。

——我々の、両足持つ者に、幸いあれ (pres. iptv.), 4本の足持つ者に、幸い [あれ] —— <sup>648</sup>

*arcāma*                      *arc/ṛc* 「(讃歌を) 歌う, 唱える」                      full-gr. them. pres. 1pl. act.

*kṛṇāvāma*                      *kar/kr* 「為す, 作る」                      nasal pres. 1pl. act.

<sup>646</sup> 語幹形成の問題に関しては Gotō 271 を参照。

<sup>647</sup> dat. が, 反抗や対立の対象を表していると思われる, cf. II 30,3 *ūrdhvó hīy ásthād ádhīy antárikṣé 'adhā vṛtrāya prā vadhām jabhāra* 「中空に彼 (インドラ) はそびえ立ったからである。それから, ヴリトラに向かって (dat.) 武器を, 彼は持ち出した」 (→ VII 88,3), I 32,13 *nāsmāi vidyūn ná tanyatūḥ siṣedha ná yām mīham ákirad dhrādūniṃ ca* 「彼 (インドラ) に対しては, 稲光も, 雷鳴も (I. を) 押しとどめなかった, 彼 (ヴリトラ) が撒き散らした霧と雹も」。また次の例では, dat. が回避・避難の対象を表している: VādhAnvākh II 1 (ed. IKARI) *sa prajāpatim atsyato rūpeṇābhipalāyata. tasmā udamrāt* 「その彼 (アグニ) は, 食べようとする者の姿を伴い, プラジャーパティへと向かって行った。その彼 (A.) を避けて, (P. は) [火の粉を] 払い上げた」(その結果 P. の髪が燃えてしまう; cf. loc. cit. *tad asmai nyasyat* 「すると (今度は), 彼 (A.) に対抗して, (P. は) [火の粉を] 投げ落とした」)。

<sup>648</sup> Pada d は, 破滅 (死) を取り消すために唱える言葉そのものと考えられる。

<機能> *arcāma / kṛṇāvāma* (主文): 意志表明

X 174,4

*yénéndro haviṣā kṛtvṇy ábhavad dyumnṇy úttamaḥ |*  
*idám tát akri dev<sub>a</sub>ā asapatnáḥ kílābhuvam ||*

それによって、インドラが（祭式を）為してから  
 明るさを伴う者に、最高の者に、なったところの (ipf.),  
 その供物を、ここで<sup>649</sup>、私は作った (aor. ind.), 神々よ。  
 ライヴァルを持たぬ者に<sup>650</sup>、明らかに、私はなった (aor. ind.)。

X 174,5#

*asapatnáḥ sapatnahā- ábhírāṣtro viṣāsaḥīḥ |*  
*yáthāhám eṣāṃ bhūtānāṃ virājāni jánasya ca ||* Pāda d = X 159,6d

ライヴァルを持たぬ者、ライヴァルを殺す者、  
 王権を目指す者、繰り返し獲得する者（として、／に「私はなった」）。  
 わたしが、この（地上の）生き物たちと  
 民とを、遍く支配することになるように (pres. subj.)。<sup>651</sup>

*vi-rājāni*                      *rāj* 「支配する」                      them. pres. 1sg. act.

<機能> *vi-rājāni* (*yáthā* 目的節): 見込み

<sup>649</sup> *yéna* を受けるのは *tát* であり、*idám* は副詞「ここで」として理解すべきと思われる (HETTRICH 571 n. 146)。

<sup>650</sup> Cf. I 159, 4 *asapatná* (f. nom. sg.!).

<sup>651</sup> *yáthā* 文は第 4 詩節 Pāda d にかかる。Pāda ab の四つの nom. sg. は、主文の動詞 *abhuvam* の補語であるとも、*yáthā* 文内における *virājāni* の同格主語とも解釈できる。

## 参考文献

## 【一次文献】

- RV Ed. AUFRECHT, Theodor: Die Hymnen des Rigveda 2 Bde. 2. Auflage. Bonn 1877  
 Ed. Max MÜLLER, F.: Rig-Veda-Samhitâ. The sacred hymnes of the Brâhman together with the commentary of Sâyanâkârya. 4 vols. London 1890, 1890, 1892, 1892  
 Ed. VISHVA BANDHU (et al.): Rgveda with the Padapâṭha and the available portions of the Bhâṣya-s by... 8 vols. Hoshiarpur 1965, 1963, 1963, 1964, 1964, 1964, 1965, 1966 (Vishveshvaranand Indological Series 19-26)  
 (翻訳については, 二次文献 GELDNER, RENOU EVP を参照)
- AV Ed. ROTH, R./WHITNEY, W.D.: Atharva Veda Sanhita. Erster Band. Text. Berlin 1856  
 Ed. ROTH/WHITNEY/LINDENAU: Atharva Veda Sanhita. Herausgegeben von R. ROTH und W. D. WHITNEY, W.D. Zweite verbesserte Auflage besorgt von Max Lindenau. Berlin. 1924  
 Ed. VISHVA BANDHU (et al.): Atharvaveda (Śaunaka) with the Pada-pāṭha and Sāyaṇâcārya's commentary. I, II, III, IV-1, IV-2. Hoshiarpur 1960, 1961, 1961, 1962, 1964 (Vishveshvaranand Indological Series 13-17)  
 (翻訳については, 二次文献 WHITNEY/[LANMAN] を参照)
- AVP Faksimile-Ed. BLOOMFIELD, M./GARBE, R.: The Kashmirian Atharva-Veda (School of the Pāippalādas). Reproduced by chromophotography from the manuscript in the University Library at Tübingen. 3 vols. Baltimore 1901  
 Ed. BARRET, LeRoy Carr: The Kashmirian Atharva Veda :  
 Book one: JAOS 26 (1906) 197-295  
 Book two: JAOS 30 (1910) 187-258  
 Book three: JAOS 32 (1912) 343-390  
 Book four: JAOS 35 (1915) 42-101  
 Book five: JAOS 37 (1917) 257-308  
 Book six: → Ed. EDGERTON  
 Book seven: JAOS 40 (1920) 145-169  
 Book eight: JAOS 41 (1921) 264-289  
 Book nine: JAOS 42 (1922) 105-146

- Book ten: JAOS 43 (1923) 96–115
- Book eleven: JAOS 44 (1924) 258–269
- Book twelve: JAOS 46 (1926) 34–48
- Book thirteen: JAOS 48 (1928) 34–65
- Book fourteen: JAOS 47 (1927) 238–249
- Book fifteen: JAOS 50 (1930) 43–73
- Books sixteen and seventeen: American Oriental Series 9 (1936)
- Book eighteen: JAOS 58 (1938) 571–614
- Books nineteen and twenty: American Oriental Series 18 (1940)
- Ed. EDGERTON, Franklin: The Kashmirian Atharva Veda. Book six. JAOS 34 (1915), 374–411
- Ed. Raghu Vira: Atharva Veda of the Paippalādas. 3 parts. Lahore 1936, 1940, 1941
- PS Ed. Durgamohan BHATTACHARYYA: Paippalāda Saṃhitā of the Atharvaveda. First Kāṇḍa. Calcutta 1964 (Calcutta Sanskrit College Research Series 26); ds. Volume two (: II–IV). Calcutta 1970 (ds. 62)
- SV Ed., transl. etc. BENFEY, Theodor: Die Hymnen des Sāma-Veda. 2 Bde. Leipzig 1848
- Kh. Ed. SCHEFTELOWITZ, Isidor: Die Apokryphen des Ṛgveda. Breslau 1906 (Indische Forschungen 1)
- Ed. SĀTAVALEKAR, Ṛgveda-Saṃhitā, Pāraḍī 1957 (“tṛtīya vāra”), p.769–791
- VS Ed. WEBER, Albrecht: The Vājasaneyi-Saṃhitā in the Mādhyandina- and the Kāṇva-Çākhā with the Commentary of Mahîdhara. Berlin-London 1852 (= Chawkhamba Sanskrit Series 103, Varanasi 1972) (The White Yajurveda, Part I)
- MS Ed. SCHROEDER, Leopold von: Mâitrāyaṇī Saṃhitā. 4 Bde. Leipzig 1881, 1883, 1885, 1886
- KS Ed. SCHROEDER, Leopold von: Kâṭhakam. Die Saṃhitā der Kaṭha-Çākhā 3 Bde. Leipzig 1900, 1909, 1910
- KpS Ed. RAGHU VIRA: Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṃhitā. A Text of the Black Yajurveda. 2<sup>nd</sup> ed. Delhi 1968 (1<sup>st</sup> ed.: Lahore 1932)
- TS Ed. WEBER, Albrecht: Die Taittirīya-Saṃhitā. 2 Bde. Leipzig 1871, 1872. Indische Studien 11, 12
- AB Ed. AUFRECHT, Theodor: Das Aitareya Brāhmaṇa. Mit Auszügen aus dem Commentare von Sāyaṇācārya und anderen Beilagen herausgegeben von Th° A°. Bonn 1879
- KB Ed. LINDNER, B.: Das Kāushītaki Brāhmaṇa. Herausgegeben und übersetzt von B.L°. I. Text. Jena 1887

- Ed. E.R. Sreekrishna SARMA: Kauṣītaki-Brāhmaṇa. 1.Text. Wiesbaden 1968 (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland. Supplementband 9,1)
- JB Ed. RAGHU VIRA/LOKESH CHANDRA: Jaiminiya-Brahmana of the Samaveda. Complete Text critically edited for the first time by R° V° and L° Ch°. Nagpur 1954 (Sarasvati-Vihara-Series 31)
- TB Ed. Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ 37: Kṛṣṇayajurvediyaṃ Taittirīyabrāhmaṇam, Śrīmatśāyaṇācāryaviracitabhāṣyasametam. 3 vols. 3<sup>rd</sup> ed. Poona 1979
- DUMONT, Paul-Émile (text, transl.):
- I 4,3-4: Mél. Renou (1968) 243-253
- II 1: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 108, No.4 (1964) 337-353
- II 6: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 109, No.6 (1965) 309-341
- II 8: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 113, No.1 (1969) 34-66
- III 1: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 98, No.3 (1954) 204-223
- III 2: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 101, No.2 (1957) 216-243
- III 3: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 103, No.4 (1959) 584-608
- III 4: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 107, No.2 (1963) 177-182
- III 5: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 104, No.1 (1960) 1-10
- III 6: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 106, No.3 (1962) 246-263
- III 7,1-6; 11: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 105, No.1 (1961) 11-36
- III 7,7-10; 12-14: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 107, No.5 (1963) 446-460
- III 8-9: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 92, No.6 (1948) 447-503
- III 10-12: Proc. Amer. Philos. Soc. Vol. 95, No.6 (1951) 628-675
- SB Ed. WEBER, Albrecht: The Śatapatha-Brāhmaṇa in the Mādhyandina-Çākḥā with extracts from the commentaries of Śāyaṇa, Harisvāmin and Dvivedaganga. Berlin-London 1855 (The White Yajurveda, Part II). (=Chawkhamba Sanskrit Series 96, Varanasi 1964)
- Ed. Kalyan-Bombay: Shrimad-Vajsaneyi-Madhyandin-Shatpath-Brāhmaṇam with Vedarthaprakash commentary by Shrimat-Trayibhashyakar Sayanacharya, and Sarvavidyanidhana Kavindracharya Saraswati Shri Hari Swami. Edited by several learned persons. 5 vols. 1940
- Ed. CHINNASVĀMI ŚĀSTRĪ et al.: Śatapatha Brāhmaṇa of the White Yajurveda in the Mādhyandina Recension (Kāshī-Sanskrit-Series 127). 3<sup>rd</sup> ed. Varanasi 1998
- SBK Ed. CALAND, W.: The Śatapatha Brāhmaṇa in the Kāṇvīya recension. 2 vols. Lahore 1926, 1939 (Punjab Sanskrit Series; Punjab Oriental Series). (Reprint: Delhi 1983)
- GB Ed. GAASTRA, Dieuke: Das Gopatha Brāhmaṇa. Leiden 1919
- Ed. RĀJENDRALĀLA MITRA/HARACHANDRA VIDYĀBHUṢHAṆA: The Gopatha

- Bráhmana of the Atharva Veda... Calcutta 1872 (Bibliotheca Indica 69)
- VādhAnvākh Ed. IKARI, Y.: Vādhūla-Anvākhyāna (in preparation)
- Up. (anthologies) Ed. V. P. LIMAYE/R. D. VADEKAR: Gandhi Memorial Edition. Eighteen Principal Upaniṣads (Aṣṭādaśa-Upaniṣadaḥ). Vol. I (Upaniṣadic text with parallels from extant Vedic literature, exegetical and grammatical notes). Poona (Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala) 1958
- Ed. Wāsudev Laxmaṇ Shāstrī PaṇṣīKAR: One hundred & eight Upanishads (Īśha & others) with various readings. 3rd edition. Bombay (Nirnayasagar) 1925. (≈:1913≈ Vārānasi 1983)
- BĀU Ed. MAUE, Dieter: Bṛhadāraṇyakopaniṣad I. Versuch einer kritischen Ausgabe nach akzentuierten Handschriften der Kāṇva-Rezension mit einer Einleitung und Anmerkungen. Dissertation Gießen 1976
- BĀU(M) Ed. in ŚB (: X 6,4–5 XIV 4–9)
- Ed., transl. BÖHTLINGK, O.: Bṛhadāraṇjakopanishad in der Mādhyamīdina-Recension. Herausgegeben und übersetzt von O.B°. St. Petersburg 1889
- ŚāṅkhŚrSū Ed. HILLEBRANDT, Alfred: The Śāṅkhāyana Śrauta Sūtra together with the commentary of Varadattasuta Ānartīya. Vol. I. Text of the Sūtra, critical notes, indices. Calcutta 1888 (Bibliotheca Indica 99)
- Yā. Ed., transl. LAKSHMAN SARUP: The Nighaṇṭu and the Nirukta. 2<sup>nd</sup> reprint. Delhi-Varanasi-Patna 1967
- Bṛhad-Devatā Ed., transl. MACDONELL, Arthur Anthony: The Bṛhad-Devatā, attributed to Śaunaka, a summary of the deities and myths of the Rig-Veda. 2vols. Cambridge, Mass. 1904 (Harvard Oriental Series 5, 6)
- Ed. TOKUNAGA, Muneo: The Bṛhaddevatā, text reconstructed from the manuscripts of the shorter recension with introduction, explanatory notes, and indices. Kyoto 1997
- Pāṇ. Aṣṭādhyāyī Ed., transl. BÖHTLINGK, Otto: Pāṇini's Grammatik. Leipzig 1887
- Pat. Ed. KIELHORN, F./ABHYANKAR, K.V.: The Vyākaraṇa = Mahābhāṣya of Patañjali. Edited by F. K°. (First edition 1880, 1883, 1885; second edition 1892, 1906, 1909.) Third edition revised and furnished with additional readings, references, and select critical notes by K.V.A°. 3 vols. Poona 1962, 1965, 1972

## 【二次文献】

BAUNACK, Th.

1898 "Bhujyu, ein schützling der Açvin" KZ 35: 485–563

BENDAHMAN, Jadwiga

1991 Der reduplizierte Aorist. (Diss. Albert-Ludwigs-Universität [Freiburg], 未出版)

BÖHTLINGK, Otto

1879–1889 Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung. 7 Bde. St. Petersburg

BÖHTLINGK, Otto/ROTH, Rudolph

1855–1875 Sanskrit-Wörterbuch. 7 Bde. St. Petersburg

BRERETON, Joel Peter

1981 The Ṛgvedic Ādityas. Connecticut

1985 "Style and purpose in the Ṛgveda" IJ 28: 237–262

BRUGMANN, Karl/DELBRÜCK, Bert(h)old

1916 Grundriß der vergleichenden Grammatik der indogermanischen Sprachen. (von K° B° und Berthold Delbrück.) Vergleichende Laut-, Stammbildungs- und Flexionslehre nebst Lehre vom Gebrauch der Wortformen der indogermanischen Sprachen. II 3/2. Straßburg

CARDONA, G.

1960 The Indo-European thematic Aorist. (Diss. Yale University, 未出版)

DELBRÜCK, Bert(h)old

1871 Der Gebrauch des Conjunctivs und Optativs im Sanskrit und Griechischen (Syntaktische Forschungen I). Halle

1878 Die Altindische Wortfolge aus dem Çatapathabrāhmaṇa (Syntaktische Forschungen III). Halle

1879 Die Grundlagen der Griechischen Syntax (Syntaktische Forschungen IV). Halle

1888 Altindische Syntax (Syntaktische Forschungen V). Halle

1897 Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen. Zweiter Theil. Straßburg (= BRUGMANN/DELBRÜCK Grundriß IV 2 [1900])

DOYAMA, Eijiro

2001 "Ṛgveda I 82 – "Das neueste Lied" und die 1. Sg. Konjunktiv–" Journal of Indian and Buddhist Studies, Vol. 49, No. 2: 1038–1040

DRESSLER, W

1968 Studien zur verbalen Pluralität. Wien

DUNKEL, George. E.

1985 "IE hortatory \*éy, \*éyte : Ved. éta...stāvāma, Hitt. eḫu=wa it, Hom. εἰ δ' ᾿άγε" MSS Heft 46, Festgabe für Karl Hoffmann Teil III: 47–79

## DURKIN, Desmond

- 1991 Konditionalsätze im *Śatapathabrāhmaṇa*. (Freiburger Beiträge zur Indologie, Band 26). Wiesbaden

## ERHART, Adolf

- 1985 Zur Entwicklung der Kategorien Tempus und Modus im Indogermanischen. Innsbruck

## ETTER, Annemarie

- 1985 Die Fragesätze im *Ṛgveda*. Berlin, New York  
1986 "Vedisch *kām-ākam*" o-o-pe-ro-si (Fs. Risch zum 75. Geburtstag): 220–228.

## FORSSMAN, Bernhard

- 1985 "Der Imperativ im urindogermanischen Verbalsystem" Grammatische Kategorien Funktion und Geschichte: 181–197  
1996 "Jaiminiya-Brāhmaṇa III 352 und eine homerische Parallele" MSS 56: 45–60

## FRISK, Hjalmar

- 1973 Griechisches etymologisches Wörterbuch Band I, II. Heidelberg

## GAEDICKE, Carl

- 1880 Der Accusativ im Veda. Breslau

## GELDNER, Karl Friedrich

- 1917 "Zur Erklärung des *Rigveda*" ZDMG 71: 315–346  
1951 Der *Rig-Veda*. Aus dem Sanskrit ins Deutsche übersetzt und mit einem laufenden Kommentar versehen. 3 Bde. Cambridge, Mass. (Harvard Oriental Series 33, 34, 35)  
1957 do. 4. Bd. Namen- und Sachregister zur Übersetzung dazu, Nachträge und Verbesserungen aus dem Nachlaß des Übersetzers. Herausgegeben, geordnet und ergänzt von Johannes NOBEL. Cambridge, Mass.

## GONDA, Jan

- 1980 The Character of the Indo-European Moods. Wiesbaden  
1941 "Ein neues Lied" WZKM 48: 275–290  
1957 "The Use of the Particle *ca*" Vāk 5: 1–73

## GOTŌ, Toshifumi

- 1987 Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen. Untersuchung der vollstufigen thematischen Wurzelpresentia (Österreichische Akad. d. Wiss., Philos.-hist. Klasse, Sitzungsber., 489. Band). Wien  
1988 Rev. of JAMISON 1983: *-āya-* Formations. IJ 31: 303–321  
1989 "Ṛgvedisch *vipanyā-*, *vipanyú-* und *vipanyāmahe*" IJ 32,4: 281–284  
1990 Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen: 1–3 (Bulletin of the National Museum of Ethnology Vol. 15 No. 4: 987–1012)  
1991 do.: 4–7 (do.: Vol. 16 No. 3: 681–707)  
1993 do.: 8–15 (do.: Vol. 18 No. 1: 119–141)

- 1997 do.: 16–29 (do.: Vol. 16 No. 3 : 1001–1059)
- 1997 “Überlegungen zum urindogermanischen «Stativ»” Berthold Delbrück y la sintaxis indoeuropea hoy. 1997. Wiesbaden: 165–192
- 2000 “Vasiṣṭha und Varuṇa in RV VII 88” Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik: 147–161. Wiesbaden
- 2001 Rev. of WERBA, 1997: Verda Indoarica. *Kratylos* 46: 62–73
- 2002 “Funktionen des Akkusativs und Rektionsarten des Verbums” Indogermanische Syntax: 21–42. Wiesbaden
- GRASSMANN, Hermann
- 1872–1875 Wörterbuch zum Rig-Veda. Leipzig
- HAHN, E. Adelaide
- 1953 Subjunctive and Optative. Their Origin as Futures. New York
- HALE, Wash Edward
- 1986 Āsura- in Early Vedic Religion. Delhi
- HARÐARSON, Jón Axel
- 1993 Studien zum urindogermanischen Wurzelarist. Innsbruck
- HASKELL, Willabe
- 1885 “Accentuation of the Vocative Case in the Rig and Atharva-Vedas” *JAOS* 11: 57–66
- HETRICH, Heinrich
- 1988 Untersuchungen zur Hypotaxe im Vedischen. Berlin/New York
- 1990 “Rektionaler und autonomer Kasusgebrauch” Sprachwissenschaft und Philologie: 82–99
- HILLEBRANDT, Alfred
- 1927, 1929 Vedische Mythologie. Second revised edition, 2 vols. Breslau
- HOCK, Hans Henrich
- 2002 “Vedic *éta* ... *stāvāma*: Subordinate, coordinate, or what?” Indo-European Perspectives (ed. SOUTHERN, R.V.): 89–102
- HOFFMANN, Karl
- 1967 Der Injunktiv im Veda. Eine synchronische Funktionsuntersuchung. Heidelberg
- 1975, 1976 Aufsätze zur Indoiranistik. Herausgegeben von Johanna NARTEN. 2 Bde. Wiesbaden
- 1992 Aufsätze zur Indoiranistik. Band 3. Wiesbaden
- HOFFMANN, Karl/FORSSMAN, Bernhard
- 1996 Avestische Laut- und Flexionslehre (Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft, Bd. 84). Innsbruck
- INSLER, Stanley
- 1967 “Vedic *tvāyā*” *IF* 71-3: 221–235
- 1968 “The Origin of the Sanskrit Passive Aorist” *IF* 73: 312–346

- 1971 "Rigvedic *āmur-*, *āmaritr-*, *marmartu*, etc." IJ 13: 81–94
- JAMISON, Stephanie W.  
 1979 "Voice Fluctuation in the Rig Veda: Medial *-anta* in Active Paradigms" IJ 21: 149–169  
 1983 Function and Form in the *-āya*-Formation in the Rig Veda and Atharva Veda (KZ-Ergänzungshefte 31). Göttingen
- JASANOFF, Jay  
 1978 Stative and Middle in Indo-European. Innsbruck  
 [1998 "The Thematic Conjugation Revisited" *Mír Curad* (Studies in honor of Calvert Watkins. Innsbruck) : 301–316]
- JOACHIM, Ulrike  
 1978 Mehrfachpräsentien im R̥gveda. Frankfurt am Main/Bern/Las Vegas
- KELLENS, Jean  
 1984 Le verbe avestique. Wiesbaden
- KENT, Roland G.  
 1953 Old Persian. New Haven/Connecticut
- KLEIN, Jared  
 1978 The Particle *u* in the Rigveda. Göttingen  
 1981 "The Origin of the Rigvedic *vāyav indraś ca* Construction" MSS 40: 73–91  
 1985 Toward a Discourse Grammar of the Rigveda. 2 Bde. Heidelberg
- KLINGENSCHMITT, Gert  
 1982 Das altarmenische Verbum. Wiesbaden  
 [1994 [1995] "Das Albanische als Glied der indogermanischen Sprachfamilie" (Tischvorlage) In Honorem Holger Pedersen (Kolloquium der Indogermanischen Gesellschaft in Kopenhagen 1993). Wiesbaden: 221–233]
- KRICK, Hertha  
 1982 Das Ritual der Feuergründung (Agn̥yādheya). Herausgegeben von Gerhard OBERHAMMER. Wien
- KRISCH, Thomas  
 1996 Zur Genese und Funktion der altindischen Perfekta mit langem Reduplikationsvokal. Innsbruck
- KUIPER, F. B. J.  
 1947 "Traces of Laryngeals in Vedic Sanskrit" *India Antiqua* (Fs. Vogel): 198–212  
 1961–62 "Rigvedic *pārye divī*" IJ 5: 169–183
- KULIKOV, Leonid  
 2001 The Vedic *-ya*-presents. Diss. Leiden (未出版)
- KÜMMEL, Martin Joachim  
 1996 Stativ und Passivaorist im Indoiranischen. Göttingen  
 2000 Das Perfekt im Indoiranischen. Eine Untersuchung der Form und Funktion einer

ererbten Kategorie des Verbums und ihrer Weiterentwicklung in den altindoiranischen Sprachen. Wiesbaden

KWELLA, Peter

1973 Flußüberschreitung im Rigveda. RV III, 33 und Verwandtes. Wiesbaden

LANMAN, Charles R.

1877 "Nouninflection in the Veda" JAOS 10: 325–602

LEHMANN, Christian

1984 Der Relativsatz. Tübingen

LIEBERT, Gösta

1949 Das Nominalsuffix *-ti-* im Altindischen. Lund

LUBOTSKY, Alexander M.

1988 The System of Nominal Accentuation in Sanskrit and Proto-Indo-European. (Memoires of the Kern Institute edited by J. C. HEESTERMAN and E. J. M. WITZEL, No. 4) Leiden, New York, København, Köln

1997 A Rgvedic Word Concordance. Part I: A–N, Part II: P–H. (American Oriental Series Vol. 82) New Haven, Connecticut

MACDONELL, Arthur Anthony

1910 Vedic Grammar (Grundriß d. Indo-Ar. Philologie I, 4). Straßburg

MACDONELL, A. A./KEITH, A. B.

1912 Vedic Index of Names and Subjects. Vol. I, II. London

MAYRHOFFER, Manfred

Etymologisches Wörterbuch des Altindoiranischen. 3 Bde: I 1992, II 1996, III 2001. Heidelberg

MEIER-BRÜGGER, Michael

1980 Konjunktiv und Optativ im Rigveda (Habilitationsschrift Zürich)

2002 Indogermanische Sprachwissenschaft (8. Aufl.) Berlin, New York

MIGRON, Saul

1999 "Another Rigvedic Genitive Singular in *-E > -AS?*" IJ 42: 33–34

MUMM, Peter-Arnold

1995 "Verbale Definitheit und der vedische Injunktiv" Verba et Structurae: 169–194

MYLIUS, Klaus

1968 "Der saṁsava" Wissenschaftliche Zeitschrift der Martin-Luther-Universität-Gesellschafts- und Sprachwissenschaftliche Reihe 17, 6: 117–138

2000 Das altindische Opfer: ausgewählte Aufsätze und Rezensionen: mit einem Nachtrag zum "Wörterbuch des altindischen Rituals". Wichtrach

1924, 1930 Zum Wörterbuch des Rgveda. Zwei Hefte. Leipzig [Nachdruck Nendeln 1966]

1980 Kleine Schriften. Herausgegeben von Rahul Peter DAS. Wiesbaden

NARTEN, Johanna

1964 Die sigmatischen Aoriste im Veda. Wiesbaden

- 1995            Kleine Schriften. **Band 1**. Wiesbaden
- OERTEL, Hanns
- 1994            Kleine Schriften. Ed. H. HETTRICH, Th. OBERLIES. 2 Bde. Stuttgart
- OLDENBERG, Hermann
- 1888            Die Hymnen des R̥gveda. Herausgegeben von Hermann OLDENBERG. Band I. Metrische und textgeschichtliche Prolegomena. Berlin
- 1909            R̥gveda. Textkritische und exegetische Noten. Erstes bis sechstes Buch. Abhandlungen d. königl. Gesellschaft d. Wiss. zu Göttingen, Philol.-hist. Klasse, Neue Folge Bd. XI. Nro.5. Berlin
- 1912            do. Siebentes bis zehntes Buch. ds. Bd. XIII. Nro.3. Berlin
- 1967            Kleine Schriften. Herausgegeben von Klaus L. JANERT. 2 Teile. Wiesbaden
- 1993            Kleine Schriften. Herausgegeben von H.-P. SCHMIDT. 3. Teil. Stuttgart
- OETTINGER, Nobert
- 1979            Die Stammbildung des hethitischen Verbums. (Erlanger Beiträge zur Sprach- und Kulturwissenschaft, Bd. 64) Nürnberg
- OSTHOFF, Hermann
- 1899            Vom Suppletivwesen der indogermanischen Sprachen. Heidelberg
- PRAUST, Karl
- 2000            "Altindisch *dr-/dṛ-*: *seṭ* oder *aniṭ* ?" Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik: 425–441
- RASMUSSEN, Jens Elmegård
- 1985            "Der Prospektiv – eine verkannte indogermanische Verbalkategorie?" Gramatische Kategorien (Akten der VII. Fachtagung der Indogermanischen Gesellschaft, Berlin 1983) Wiesbaden: 384–399
- REICHELT, Hans
- 1909            Awestisches Elementarbuch. Heidelberg
- RENOU, Louis
- 1952            Grammaire de la langue védique. Lyon
- Études védiques et pāṇinéennes (EVP). I–XVII. 1955, 1956, 1957, 1958, 1959, 1960, 1960, 1961, 1961, 1962, 1963, 1964, 1964, 1965, 1966, 1967, 1969. Paris
- RIX, Helmut
- 1986            Zur Entstehung des urindogermanischen Modusystems. Innsbruck
- 1992            Historische Grammatik des Griechischen. 2. Aufl. (1. Aufl. 1976) Darmstadt
- RIX, H. et al.
- 1998            Lexikon der indogermanischen Verben (LIV). Die Wurzeln und ihre Primärstammbildungen. Unter Leitung von Helmut RIX und der Mitarbeit vieler anderer bearbeitet von Martin KÜMMEL, Thomas ZEHNDER, Reiner LIPP, Brigitte SCHIRMER. Wiesbaden

- 2001 do. Zweite, erweiterte und verbesserte Auflage bearbeitet von Martin Kümmel und Helmut Rix
- 2001 LIV Add: Addenda und Corrigenda zur ersten Auflage zusammengestellt von M. KÜMMEL (e-Text)
- SADŌVSKI, Velizar
- 2000 "Die exozentrischen Zusammensetzungen mit Vorderglied Präverb/ Präposition im Ṛgveda: Entheos-Komposita und präpositionale Rektions-komposita" Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik: 455–473. Wiesbaden
- 2001 "Bahuvrīhis und Rektionskomposita im Ṛgveda und Avesta" Norm und Abweichung. Akten des 27. Deutschen Orientalistentages: 101–120. Würzburg
- SAKAMOTO-GOTO, Junko
- 1993 "Zu mittelindischen Verben aus medialen Kausativa" Jain Studies in Honour of Jozef DELEU. Edited by Rudy SMET and Kenji WATANABE. Tokyo
- 2000 "*kathām-katham agnihotrām juhutha* –Janakas Trickfrage in ŚB XI 6,2,1–" Anusantatyai (MSS Beiheft 19: Fs. NARTEN): 231–252. Dettelbach
- SCARLATA, Salvatore
- 1999 Die Wurzelkomposita im Ṛg-Veda. Wiesbaden
- SCHAEFER, Christiane
- 1994 Das Intensivum im Vedischen (HS-Ergänzungsheft 37). Göttingen
- SCHERER, Anton
- 1973 "Die ursprüngliche Funktion des Konjunktivs" Indogermanische und allgemeine Sprachwissenschaft: 99–106
- SCHMIDT, Hans-Peter
- 1987 Some Women's Rites and Rights in the Veda. Poona
- SCHINDLER, (Hans) Jochem
- 1972 Das Wurzelnomen im Arischen und Griechischen. Diss. Würzburg
- 1977 "Notizen zum Sieversschen Gesetz" (= Rev. of SEEBOLD Das System der indogermanischen Halbvokale. 1972) Sprache 23: 56–65
- 1980 "Zur Herkunft der altindischen *cvi*-Bildungen" Lautgeschichte und Etymologie: 386–393
- SEEBOLD, Elmar
- 1972 Das System der indogermanischen Halbvokale. Heidelberg
- 1973 "Die Stammbildungen der idg. Wurzel \**ueid*- und deren Bedeutungen" Sprache 19: 21–38
- SGALL, Petr
- 1958 Die Infinitive im Ṛgveda. (=Acta Universitatis Carolinae – Philologica No. 2, p. 135–268). Praha
- SPEIJER, J. S.
- 1886 Sanskrit Syntax. Leiden

STRUNK, Klaus

- 1972 "Ai. *babhūva*, av. *buuāuua*: ein Problem der Perfektbildung im Indo-Iranischen"  
KZ 86: 21–27
- 2000 "Vedisch *etā* RV X 95, 2a" Anusantatyai (MSS Beiheft 19: Fs. NARTEN):  
253–261. Dettelbach

STUHRMANN, Rainer

- 1986 [1987] "Ṛgveda X.119: Der Rausch des Kiebitz" StII 11/12: 299–309.

SZEMERÉNYI, Oswald

- 1990 Einführung in die Vergleichende Sprachwissenschaft. 4., durchgesehene Auflage  
(1. Aufl. 1970) Darmstadt

THIEME, Paul

- 1929 Das Plusquamperfektum im Veda. Göttingen
- 1938 Der Fremdling im Ṛgveda. Eine Studie über die Bedeutung der Worte *ari*, *arya*,  
*aryaman* und *ārya* (Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes XXIII 2).  
Leipzig
- 1964 Gedichte aus dem Rig-Veda. Stuttgart. (Reclam)
- 1971 Kleine Schriften. Herausgegeben von Georg BUDDRUSS. 2 Teile. Wiesbaden

TICHY, Eva

- 1995 Die Nomina agentis auf *-tar-* im Vedischen. Marburg

VISHVA BANDHU ŚĀSTRĪ

- Vaidika-Padānukrama-Koṣaḥ. A Vedic Word-Concordance. I. Saṁhitās 6 vols.  
<sup>1</sup>1942/<sup>2</sup>1976, 1955, 1956, 1959, 1962, 1963; II. The Brāhmaṇas and the  
Āraṇyakas 2 vols. <sup>1</sup>1935, 1936; <sup>2</sup>1973, 1973; III. Upaniṣads 2 vols. 1945, 1945.  
Lahore, (from 1955:) Hoshiarpur (Shantakuti Vedic Series)

WACKERNAGEL, Jacob/DEBRUNNER, Albert

- Altindische Grammatik. Einleitung 1896; Introduction générale (L. RENOU)  
1957; Bd. I Lautlehre 1896; Nachträge zu Bd. I 1957; Bd. II, 1 Einleitung zur  
Wortlehre. Nominalkomposition 1905; Nachträge zu Bd. II, 1 1957; Bd. II, 2  
Die Nominalsuffixe 1954; Bd. III. Nominalflexion —Zahlwort—Pronomen  
1930; Register zur Altindischen Grammatik von J. WACKERNAGEL und A.  
DEBRUNNER (Bd.I–III) 1964 (Richard HAUSCHILD). Göttingen

WAKAHARA, Yusho

- 2002 "The Truth-utterance (satyavacana) in Mahāyāna Buddhism" The Studies in  
Buddhism [Bukkyogaku-Kenkyu] 56: 58–69 (Buddhist Research Institute,  
Ryukoku Univ.)

WATKINS, Calvert

- 1969 Indogermanische Grammatik. Band III/1: Formenlehre. Geschichte der  
indogermanischen Verbalflexion. Heidelberg

WHITNEY, William Dwight

- 1889 Sanskrit Grammar (2nd ed.) Cambridge, Mass.  
 WHITNEY(/LANMAN)
- 1905 Atharva-Veda Saṁhitā. Translated into English with a critical notes and exegetical commentary by William Dwight WHITNEY. Revised ... and edited by Charles Rockwell LANMAN. 2 vols. Cambridge, Mass.
- WITZEL, Michael
- 1989 "Tracing the Vedic Dialects" Dialectes dans les littératures indo-aryennes. 1989. Paris [Ed. Caillat]: 97-265
- ZIMMER, Heinrich
- 1879 Altindisches Leben. Berlin
- 上村 勝彦・宮元 啓一 (編)
- 1994 インドの夢 インドの愛; サンスクリットアンソロジー. 東京
- 後藤 敏文
- 1991 「Aśvín- と Nāsatya-」 『印度學佛教學研究』 39-2: 977-982
- 1992 「インド・ヨーロッパ祖語における動詞表現の諸カテゴリー」 岩手大学人文社会科学部総合研究委員会 1991年度教育研究学内特別経費研究報告: 99-121
- 2004 「人類と死の起源」 『インド学諸思想とその周延』 仏教文化学会十周年・北條賢三博士古稀記念論文集: 415-432
- 堂山 英次郎
- 2000 「Ṛgveda I 82 hariyójana-, bāhmaṇ-, 「新しい歌」, 1. Sg. Konjunktiv」 『論集』 (印度学宗教学会) 27: 75-95
- 2004 「Ṛgveda V 60,6 —yaj の意味と格支配, Imperativ II -tāt の機能を中心に——」 『印度學佛教學研究』 52: 61-65 (894-890)
- 西村 直子
- 2003 放牧と敷き草刈り ——Yajurveda-Saṁhitā 冒頭の mantra 集成とその brāhmaṇa の研究—— 博士論文 東北大学
- 2003 「Yajurveda のマントラ g(h)oṣad asi をめぐって」 『印度學佛教學研究』 52: 16-21 (479-474)
- 林 能輝
- 2002 「Ṛg-Veda における arká- の語義について」 『印度學佛教學研究』 50: 64-67 (973-970)
- 八木 徹
- 2002 「Saccakiriyā- (“眞實” の “定式化”)」 『東方学』 104: 141-154

## 取扱箇所一覧 (RV) : 詩節番号順

	1 人称接続法	ページ
I 6,3		38
I 6,6		57
I 8,1-2	<i>ruṇádhāmahai</i>	129, <b>154</b> , 249 n. 469
I 15,1; 9; 10		274 n. 527
I 15,8	<i>vanāmahe</i>	72, 99, <b>155</b>
I 16,9	<i>stāvāma</i>	76, 94, 97, <b>155</b>
I 22,1		28
I 24,1	<i>mānāmahe</i>	79f., 140, 141, <b>156</b>
I 24,2	<i>mānāmahe</i>	76, 80, 82, <b>157</b>
I 24,15		156 n. 189
I 25,5	<i>karāmahe</i>	59f., 140, 143, <b>158f.</b>
I 25,17	<i>vocāvahai</i>	102f., <b>157f.</b>
I 26,7		159 n. 197
I 26,9		159 n. 197
I 26,8	<i>manāmahe</i>	77, 95, <b>159f.</b>
I 27,7		5 n. 16
I 27,13	<i>yājāma, śaknāvāma</i>	76, 91, 94, 97, 120f., 137, <b>160f.</b>
I 30,6	<i>bravāvahai</i>	103, <b>161</b>
I 32,1		45
I 32,13		312 n. 647
I 33,1	<i>áyāma</i>	105, <b>161f.</b>
I 37,4-5		32
I 41,7	<i>rādhāma</i>	140, 143, <b>162f.</b>
I 41,8; 9		163
I 44,5		58
I 46,1		15 n. 35
I 46,9		30
I 52,1		31
I 52,7		252 n. 477
I 52,11		251
I 53,11	<i>āsāma, stoṣāma</i>	76, 93, 99, 130, 152f., <b>163f.</b>
I 61,13		181 n. 271
I 61,16		227 n. 414
I 62,1	<i>ārcāma</i>	74, <b>164f.</b>
I 62,2		163 n. 210
I 62,13		227 n. 414
I 64,1		27
I 64,4		227 n. 415
I 77,2		49
I 80,1		252 n. 477
I 82,1-6 [1-5]	<i>yójā</i> (5x)	76, 87, <b>165ff.</b>

I 85,10–11		303 n. 623
I 91,5		167f. n. 226
I 91,6	<i>marāmahe</i>	110, 114, <b>167f.</b>
I 92,13	<i>dhāmahe</i>	132, <b>168f.</b>
I 94,4	<i>kṛṇāvāmā, bhārāma</i>	76, 82, 91, 97, <b>169</b>
I 98,3		191 n. 307
I 99,1	<i>sunavāma</i>	75, 97, <b>170</b>
I 102,3	<i>mādāma</i>	132, <b>170f.</b> , 246 n. 462
I 103,6	<i>sunavāma</i>	69f., <b>171</b>
I 108,7		224 n. 404
I 110,6	<i>juhavāma</i>	76, 96, <b>171f.</b>
I 111,2	<i>kṣāyāma</i>	125, <b>172f.</b>
I 114,3	<i>juhavāma</i>	69, 97f., 100, 116, <b>173</b>
I 116,9		302f. n. 623
I 122,12	<i>dhāma</i> (3 syl.)	71, 79, 89f., <b>173f.</b>
I 122,13		173 n. 242
I 132,1		27
I 136,6		191 n. 307
I 155,5		62
I 159,5	<i>manāmahe</i>	70, 81f., 82, 93, <b>174</b>
I 160,5	<i>tatānāma</i>	136, 151, <b>175</b>
I 161,4		107 n. 158
I 161,5	<i>hānāma</i>	104, 106f., <b>175f.</b>
I 164,39		188f. n. 300
I 165,2	<i>rīramāma</i>	140, 142, <b>176</b>
I 165,5, 6		109
I 165,7	<i>kṛṇāvāmā, vāsāma</i>	109, 112f., 114f., 121f., 137, <b>177</b>
I 165,9		23
I 165,10	<i>kṛṇāvai</i>	23, 51, 133f., 138, <b>177f.</b>
I 166,1	<i>vocāma</i>	74, 87, 154 n. 185, <b>178f.</b>
I 166,14	<i>śūśāvāma</i>	133, 151, <b>179f.</b>
I 170,4	<i>tanavāvahai</i>	69, <b>180</b>
I 173,1	<i>ārcāma</i>	40 n. 75, 77, 80, 108, <b>180f.</b>
I 173,2		80, 108
I 173,3		80f., 108f.
I 173,8		126f.
I 173,9	<i>āsāma</i>	126f., <b>181</b>
I 179,3	<i>ājāva, aśnavāva, jāyāva</i>	112, 115, 121f., 152f., <b>182f.</b>
I 186,5	<i>junāma</i>	130, <b>183f.</b>
I 186,10		33
I 187,1		44f.
I 191,10–12	<i>marāma</i> (3x)	110f., 114, <b>184f.</b>
I 191,16		184 n. 282
II 3,3		29
II 11,6	<i>stāvā</i> (3x), <i>stavāma</i>	58, 76, 77, 87, <b>186</b>

II 11,13	<i>cākānāma</i>	132, 151, <b>186f.</b>
II 12,14		252 n. 477
II 16,7	<i>sicāmahe</i>	76, 99, <b>187</b>
II 18,3		196 n. 325
II 21,2–3		33
II 28,8	<i>bravāma</i>	76, 88f., <b>188</b>
II 29,2		188 n. 299
II 29,3	<i>kṛṇavāma</i>	140, 141, <b>188f.</b> , 224 n. 405
II 30,3		312 n. 647
II 30,7	<i>vocāma</i>	71, 92, 101, <b>189f.</b>
II 30,11	<i>nāsāmahai</i>	125, <b>190f.</b>
II 33,3		193 n. 312
II 33,8		31
II 35,12		59
II 39,8		252 n. 477
II 41,11		59
II 42,1		187 n. 295
II 43,2		40 n. 75
III 8,6		58
III 11,9	<i>saniṣāmahe</i>	76, 93, 96, <b>192</b>
III 13,1		35, 37
III 15,5		38f.
III 20,4		170 n. 232
III 29,1	<i>manthāma</i>	103, <b>192f.</b>
III 30,21		171 n. 235
III 32,14	<i>stāvai</i>	76, 92, <b>193f.</b>
III 33,1		60
III 33,9		65, 194 n. 314
III 33,10	<i>naṁsai, śaśvacāi, śṛṇavāmā</i>	65, 151, <b>194ff.</b>
III 35,5	<i>kṛṇavāma</i>	76, 81, 82, 98, <b>196f.</b>
III 38,1–2		34 n. 58
III 51,7		58
III 53,3	<i>kṛṇavāma, śaṁsāva</i>	103, <b>197f.</b>
III 53,4	<i>sunāvāma</i>	120, 165 n. 216, <b>198f.</b>
III 54,2		31
III 55,18	<i>vocāma</i>	73, 87, 96, <b>199</b>
III 62,3		56
IV 2,10	<i>āsāma</i>	132, 134f., <b>200</b>
IV 3,1–4		29
IV 7,7		49 n. 105
IV 16,20–21		227 n. 414
IV 18,1		200 n. 334
IV 18,2	<i>ayā, gamāṇi, pṛchai, yúdhyai</i>	77f., 82, 88, 101, 111, 113, 150, <b>200f.</b>
IV 18,3	<i>gamāni, gāni</i>	78, 88, 101, <b>201f.</b>

IV 18,4		201f. n. 337
IV 18,5		202 n. 337
IV 18,11		57
IV 18,12		58
IV 20,3		57
IV 20,10	<i>bravāma</i>	73, 82, 91, <b>202f.</b>
IV 21,4	<i>ṣṭavāma</i>	76, 83, <b>203</b>
IV 23,6	<i>bravāma</i>	140, 141, <b>204</b>
IV 25,4	<i>sunāvāma</i>	76, 79, <b>204f.</b> , 246 n. 462
IV 29,3		31
IV 30,23		23 n. 40
IV 31,2		60
IV 32,10	<i>vocāma</i>	73, <b>205</b>
IV 33,5	<i>karā (2x), kṛṇavāma</i>	67, 79, 88, 104, 106f., <b>206</b>
IV 33,6		88, 206 n. 351
IV 34,2		192 n. 308
IV 39,1	<i>carkirāma, ṣṭavāma</i>	75, 83, <b>207f.</b>
IV 40,1	<i>carkirāma</i>	75, 86, <b>208</b>
IV 42,6		48
IV 43,1	<i>śreṣāma</i>	60, 140, 142, <b>208f.</b>
IV 43,2; 3		209 n. 358
IV 58,2	<i>dhārayāmā, bravāmā</i>	73, 82, <b>209</b>
V 4,10		55f.
V 7,3	<i>vānāmahe</i>	123, <b>210</b>
V 13,2	<i>manāmahe</i>	76, 87, <b>210</b>
V 14,6		187 n. 295
V 16,5	<i>dhāmahe</i>	77, 82, 94, 99, 117, <b>211f.</b>
V 18,1		56
V 22,1		27
V 25,7		27 n. 50
V 29,13	<i>carāṇi, bravāma</i>	73, 140, 141, <b>212</b>
V 29,15		227 n. 414
V 30,3	<i>brāvāma</i>	73, 82, 87, <b>213</b>
V 32,1		43 n. 83
V 35,1		248 n. 468
V 35,8	<i>manāmahe</i>	77, 94, 97, <b>213f.</b>
V 37,1	<i>sunāvāma</i>	76, 79, <b>214</b>
V 41,11	<i>bravāma</i>	140, <b>215</b>
V 41,13	<i>brāvāma</i>	76, 86, 95, <b>215f.</b>
V 42,6	<i>bravāmā</i>	73, 86, <b>216f.</b>
V 44,9		217 n. 382
V 44,10	<i>sprṇavāma</i>	72, 99f., <b>217</b>
V 45,5	<i>āyāma, inavāma</i>	105, <b>217f.</b>
V 45,6	<i>dadhāma, bhāvāma</i>	
	<i>kṛṇāvāmā</i>	105, <b>218</b>

- V 45,11  
 V 46,2  
 V 48,1  
 V 50,5  
 V 51,12  
 V 51,13  
 V 52,1  
 V 52,5  
 V 52,14  
 V 54,1  
 V 54,15  
 V 56,1-2  
 V 56,5  
 V 56,8  
 V 58,1  
 V 59,1  
 V 59,8  
 V 60,6  
 V 60,7; 8  
 V 63,6  
 V 66,3  
 V 73,10  
 V 74,4  
 V 75,2  
 V 85,4  
 V 86,2  
  
 VI 2,9  
 VI 11,1  
 VI 16,16  
 VI 16,22  
 VI 19,8  
 VI 20,8  
 VI 21,9  
 VI 32,1  
 VI 38,4  
 VI 38,5  
 VI 40,4  
 VI 45,22  
 VI 49,10  
 VI 49,11-13  
 VI 49,15  
 VI 50,6  
 VI 55,1  
 VI 55,4  
 VI 56,4
- manāmahe*  
*manāmahe* (2x)  
*bravāmahai*  
  
*ana jā*  
*tatānāma*  
  
*huvāmahe*  
  
*yājāma*  
  
*manāmahe*  
*tākṣāma*  
  
*sānā*  
  
  
*brāvāṇi*  
  
*vāṃsāma*  
  
  
*aśnāvāma, cakrāmāma*  
  
*sacāvahai*  
*stoṣāma*  
*brāvāma*
- 35, 142  
 224 n. 405, 287 n. 568  
 140, 142, **219**  
 77, 94, **219f.**  
 76, **220f.**  
 220 n. 394  
 27 n. 50  
 27 n. 50  
 29f.  
 75, **221f.**  
 133, 151f., **222**  
 34 n. 58  
 32f.  
 70, **222ff.**  
 34f. n. 58  
 31f.  
 39  
 123, **224f.**  
 225  
 219 n. 389  
 77, **225f.**  
 130, **226ff.**  
 39 n. 72  
 26, 77, 81, 82, 99, 106, **228f.**  
 296 n. 600  
 270 n. 521  
  
 12 n. 28  
 56  
 76, 86, 98, 106, **230**  
 37  
 129, **230f.**  
 24  
 36 n. 65  
 277 n. 532  
 40 n. 73  
 36 n. 65  
 54  
 37  
 32  
 33  
 130, 152, **231f.**  
 27 n. 50  
 82, 103, 105 n. 155, 116, **232**  
 76, 87, **232f.**  
 132, 133f., 138, **233**

VI 59,1	<i>vocā</i>	26, 44f., 69, 91, <b>233f.</b>
VI 67,10	<i>bravāma</i>	69, 86, <b>234</b>
VI 68,8–10		33
VII 2,2	<i>stoṣāma</i>	76, <b>235</b>
VII 4,4		227 n. 415
VII 8,3		60
VII 15,2		270 n. 521
VII 20,6		61
VII 22,7		252 n. 477
VII 23,1		27 n. 50
VII 24,6 = VII 25,6	<i>vevidāma</i>	76, 89, 94, 100, 117, <b>235f.</b>
VII 29,2		50
VII 29,3		49f.
VII 31,1–3		29
VII 32,18		60
VII 32,21		62
VII 32,23		57, 61
VII 57,4	<i>kārāma</i>	122f., <b>236</b>
VII 61,3–4		28f.
VII 66,12	<i>manāmahe</i>	76, 87, <b>236f.</b>
VII 70,7		227 n. 414
VII 81,5	<i>bhunājāmahai</i>	77, 100, 106, <b>237f.</b>
VII 82,10 = VII 83,10	<i>manāmahe</i>	76, 95, 97, <b>238</b> , 246 n. 462
VII 86,2	<i>bhuvāni</i>	60, 140, 143, <b>238ff.</b>
VII 86,7	<i>karāṇi</i>	76, 82, 100, <b>240</b>
VII 87,2		219 n. 388
VII 87,7		239 n. 442
VII 88,3	<i>īṅkhayāvahai, irāyāva</i> <i>cārāva, ruhāva</i>	110, 112, 115, 121f., <b>240ff.</b>
VII 88,4		241
VII 96,1		27 n. 50, 34f. n. 58
VII 98,4	<i>sākṣāma</i>	77, 91, 117, <b>242f.</b> , 278
VII 101,1		62
VII 104,10		281 n. 547
VIII 1,3		252 n. 477
VIII 1,31		51
VIII 7,15		56
VIII 7,21		39 n. 72
VIII 11,5	<i>manāmahe</i>	69, <b>244</b>
VIII 13,7		29
VIII 19,7		38
VIII 20,19		27 n. 50, 40
VIII 22,3	<i>karāmahe</i>	99, <b>244</b> , 284 n. 557
VIII 23,24		27, n. 50

VIII 24,19	<i>stāvāma</i>	105, <b>245</b>
VIII 26,9–11		33
VIII 27,21		245 n. 461
VIII 27,22	<i>nāśāmahai</i>	132, <b>245f.</b>
VIII 33,4		27
VIII 42,2		30
VIII 45,37		25
VIII 46,14		37
VIII 47,3	<i>manāmahe</i>	76, <b>246f.</b>
VIII 48,8		247 n. 464
VIII 48,9	<i>mināma</i>	122, <b>247</b>
VIII 49,1		37
VIII 53,7 (Vālah.)	<i>manāmahe</i>	72, 82, 100, <b>248</b>
VIII 60,11–12	<i>vāṁsāma</i>	130, 154 n. 184, <b>249</b>
VIII 61,6		52
VIII 61,11	<i>kṛṇāvāmahai, manāmahe</i>	77, 101, 123f., 138, <b>250f.</b>
VIII 62,4	<i>kṛṇāvāma</i>	76, 98, 106, <b>252</b>
VIII 62,12	<i>stavāma</i>	70, 82, 83 n. 133, 86, 101, <b>252f.</b>
VIII 63,11	<i>jéṣāma</i>	76, 99, <b>253</b>
VIII 65,5		35 n. 58
VIII 66,7		32
VIII 66,11		277 n. 532
VIII 67,1	<i>yāciṣāmahe</i>	75, 86, <b>254</b>
VIII 68,13	<i>manāmahe</i>	76, <b>254</b>
VIII 69,1		35 n. 60
VIII 69,2		35
VIII 69,3		35 n. 61
VIII 70,2		27 n. 50
VIII 70,13	<i>rādhāma</i>	140, 143, <b>255</b>
VIII 74,13	<i>mṛkṣā</i>	26, 70, 82, 91, 150f., <b>255f.</b>
VIII 74,15		45f.
VIII 75,7	<i>starāmahe</i>	140, 144, <b>256</b>
VIII 80,3		85 n. 139
VIII 80,4		85 n. 139
VIII 80,5		85
VIII 81,4	<i>stāvāma</i>	105, <b>257</b>
VIII 90,4		35 n. 58
VIII 91,1	<i>sunavai (2x)</i>	70f., 77, 88, <b>257f.</b>
VIII 91,2		71 n. 126, 88
VIII 91,3		258 n. 491, 259
VIII 91,4	<i>gāmāmahai</i>	140, 146, <b>258f.</b>
VIII 92,7		35f.
VIII 92,10		107
VIII 92,11	<i>āyāma</i>	104, 107, <b>259</b>
VIII 92,27	<i>gamāma</i>	76, 82, <b>259f.</b>
VIII 93,4		38

VIII 93,5	<i>marai</i>	111, 114, <b>260f.</b>
VIII 95,6	<i>vanāmahe, ṣṭavāma</i>	76, 83, 110, 114, <b>261</b> , 262 n. 498
VIII 95,7	<i>stāvāma</i>	105, <b>262</b> + n. 498
VIII 96,6	<i>ṣṭavāma</i>	76, 83, <b>262f.</b>
VIII 96,7		59
VIII 100,2	<i>jaṅghanāva</i>	59, 110, 112, 115, <b>263f.</b>
VIII 100,3	<i>ṣṭavāma</i>	140, 142, <b>264f.</b>
VIII 100,12	<i>riṇācāva, hānāva</i>	103, <b>265</b>
IX 41,1		266 n. 506
IX 41,2	<i>manāmahe</i>	72, 100, <b>266</b>
IX 53,2	<i>stāvai</i>	76, <b>266f.</b>
IX 61,11	<i>vanāmahe</i>	110, 114, <b>267</b>
IX 74,5	<i>dhāmahe</i>	136, <b>267f.</b>
IX 76,5	<i>jēṣāma</i>	127f., 130, <b>268f.</b>
IX 86,8		268 n. 512
IX 97,4	<i>arcāma</i>	30, 40 n. 75, 76, 180 n. 264, <b>269</b>
IX 97,5–6		269 n. 515
IX 97,51	<i>aśnāvāma</i>	132, <b>270</b>
IX 101,9	<i>vānāmahai</i>	136, <b>270f.</b>
IX 108,13–14	<i>kārāmahe</i>	130f., <b>271f.</b>
IX 114,2–3		34
X 2,2	<i>kṛṇāvāmā</i>	77, 82, 97, 106, <b>273</b>
X 2,3	<i>śakṇāvāmā</i>	133, 137, <b>273f.</b>
X 2,4	<i>mināma</i>	122, <b>274f.</b>
X 4,7		252 n. 477
X 9,3	<i>gamāma</i>	76, <b>275</b>
X 15,6	<i>kārāma</i>	123, <b>275f.</b>
X 19		276 n. 530
X 19,6	<i>bhunajāmahai</i>	72, 99, <b>276</b>
X 23,6	<i>karāmahe</i>	77, 99, <b>277</b>
X 27,1		51f., 66
X 27,2	<i>nāyāni, pacāni</i>	50, 66, 91, 96, 116, 121, 243 n. 458, <b>277f.</b>
X 27,9		48f., 67, 278 n. 539
X 27,10	<i>bhajāni, sṛjāni</i>	67, 92, 124f., 138, 171 n. 236, <b>278f.</b>
X 28,5		47f.
X 28,9	<i>randhayāni</i>	68, 79, 89, 96, <b>279</b>
X 28,10		68
X 30,1		39 n. 72
X 33,5	<i>stāvai</i>	71, 90, <b>280</b>
X 34,5	<i>daviṣāni</i>	78, 90, 101, 151, <b>280ff.</b>
X 34,13		151, 281
X 35,9–10		32
X 36,10		282

- X 36,11  
 X 37,5  
 X 38,1  
 X 38,4  
 X 39,5  
 X 39,14  
 X 42,1; 2  
 X 43,5  
 X 44,2  
 X 49,1  
 X 50,1  
 X 52,1  
 X 52,5  
 X 53,2  
 X 53,4  
 X 53,8  
 X 57,3  
 X 59,2  
 X 62,2  
 X 63,2–3  
 X 63,6  
 X 64,1  
 X 70,10  
 X 72,1  
 X 73,1  
 X 76,5  
 X 77,1  
 X 83,6  
 X 83,7  
 X 85,21  
 X 85,22  
 X 85,37  
 X 86,11  
 X 86,21  
 X 88,3  
 X 89,1  
 X 89,3–4  
 X 89,4  
 X 94,1  
 X 95,1  
 X 95,2  
 X 95,12  
 X 95,13  
 X 96,1  
 X 97,1  
 X 97,17
- náśāmahai*  
*brávāmahai*  
  
*karāmahe*  
*karāmahe, bravā*  
  
  
*vārdhāma*  
  
  
*manāvai, váhāni*  
*kārāni*  
*īḍāmahai, yājāmahai*  
*āsāma*  
*jahāma*  
*huvāmahe*  
*kārāmahe*  
  
  
*manāmahe*  
  
*vocāma*  
  
  
*pruṣā*  
*hānāva*  
*jaṅghanāva, pibāva*  
  
  
*īḍāmahe*  
*hārāma*  
  
  
*kalpayāvahai*  
*stoṣāni*  
*stavā*  
  
  
*vadāma*  
*kṛṇavāvahai*  
*kṛṇavā*  
  
  
*bravāni, hinavā*  
  
  
*mānai*  
*aśnāvāmahai*
- 125f., **282**  
 133f., 138, **282f.**  
 283 n. 554  
 76, 87, 100, **283f.**, 284 n. 557  
 74, 76, 87, 96, **284**  
 87, 227 n. 414  
 27 n. 50, 30,  
 62  
 76, 96, 98, 106, **284f.**  
 252 n. 477  
 37  
 140, 145, 193 n. 311, **285**  
 126, **286**  
 70, 84, **286f.**  
 133, 145, 224 n. 405, **287**  
 103, **287f.**  
 77, **288**  
 72, 100, **289**  
 163 n. 210  
 32  
 193 n. 312  
 140, 142, **289f.**  
 54  
 74, 75, 82, 86f., **290**  
 227 n. 415  
 37  
 77, **291f.**  
 103, **292**  
 103, 110, 112, 115, 116, **292f.**  
 293 n. 592  
 69, **293f.**  
 130, **294**  
 61  
 103, 105 n. 155, **295**  
 55, 70, 87, **295f.**  
 45, 75, **296f.**  
 33  
 52  
 75, 82, **297**  
 103, **298**  
 140, 141, **298f.**  
 64f., 299 n. 613  
 65, **299f.**  
 45  
 75, 82, **300f.**  
 132, 135, **301**

X 98,1		296 n. 603
X 98,3	<i>vānāva</i>	136, <b>301f.</b>
X 101,5	<i>siñcāmahai</i>	103f., <b>302f.</b>
X 101,6		302 n. 623
X 101,7		302 n. 623
X 101,12		29
X 108,2		65f.
X 108,3	<i>dadhāma</i>	66, 91, 96, <b>303</b>
X 108,9	<i>kṛṇavai, bhajāma</i>	66, 96, <b>304</b>
X 111,1	<i>īrayāma</i>	104, <b>304f.</b>
X 112,1	<i>bravāma</i>	74, 97, <b>305f.</b>
X 113,10	<i>māṃsai</i>	130, 154 n. 184, 249 n. 469, <b>306</b>
X 115,8	<i>stoṣāma</i>	76, 99, <b>306f.</b>
X 116,9		52, 187 n. 295
X 119,1		78, 308 n. 637
X 119,7; 8; 11; 12		307 n. 636
X 119,9	<i>dadhāni</i>	59, 78, 82, 84, <b>307f.</b>
X 119,10	<i>jaṅghānāni</i>	78, 82, <b>308f.</b>
X 124,6	<i>yajāma, hānāva</i>	69, 95f., <b>309f.</b>
X 145,5	<i>sahāvahai</i>	103, <b>310</b>
X 148,4		227 n. 416
X 154,3		280 n. 543
X 156,2	<i>kārāmahe</i>	132, <b>310f.</b>
X 157,1	<i>sīṣadhāma</i>	75, 87, <b>311</b>
X 159,6	<i>rājāni</i>	126, <b>311f.</b>
X 165,1	<i>arcāma, kṛṇāvāma</i>	75, 90, <b>312f.</b>
X 174,4-5	<i>rājāni</i>	126, <b>313</b>

## 取扱語形 (1 人称接続法) 一覧: 語根順

<i>aj</i>					
pres.	act.	du.	<i>abhi-ājāva</i>	I 179,3:	115, 121f, 152f, 182f
<i>añj/aj</i>					
pres.	act.	sg.	<i>prá ... anajā</i>	V 54,1:	75, 221f.
<i>ay/i</i>					
pres.	act.	sg.	<i>nír-ayā</i>	IV 18,2:	77f, 82, 88, 101, 150, 200f.
		pl.	<i>áyāma</i>	I 33,1:	105, 161f.
			<i>áyāma</i>	V 45,5:	105, 217f.
			<i>áyāma</i>	VIII 92,11:	104, 107, 259
<i>ay/i</i>					
pres.	act.	pl.	<i>prá ... inavāmā</i>	V 45,5:	105, 217f.
<i>ar/r (ir)</i>					
caus.	act.	du.	<i>prá ... iráyāva</i>	VII 88,3:	110, 112, 115, 121f., 240ff.
		pl.	<i>ā-irayāmā</i>	X 111,1:	104, 304f.
<i>arc/rc</i>					
pres.	act.	pl.	<i>ārcāma</i>	I 62,1:	74, 164f.
			<i>ārcāma</i>	I 173,1:	40 n. 75, 77, 80, 108, 180f.
			<i>abhí-arcāma</i>	IX 97,4:	30, 40 n. 75, 76, 180 n. 264, 269
			<i>arcāma</i>	X 165,1:	75, 90, 312f.
<i>(aś → naś/aś)</i>					
<i>as/s</i>					
pres.	act.	pl.	<i>āsāma</i>	I 53,11:	93, 130, 152f., 163f.
			<i>āsāma</i>	I 173,9:	126f., 181
			<i>āsāma</i>	IV 2,10:	132, 134f., 200
			<i>abhí ... āsāma</i>	X 53,4:	133, 145, 224 n. 405, 287
<i>īnkh</i>					
caus.	mid.	du.	<i>prá ... īnkhayāvahai</i>	VII 88,3:	110, 112, 115, 121f., 240ff.
<i>īḍ</i>					
pres.	mid.	pl.	<i>īḍāmahe</i>	X 85,22:	69, 293f.
			<i>īḍāmahai &lt;-mahā ī-&gt;</i>	X 53,2:	70, 84, 286f.
<i>(ir → ar/r)</i>					
<i>kan<sup>i</sup></i>					
perf.	act.	pl.	<i>cākánāma</i>	II 11,13:	132, 151, 186f.
<i>kar/kṛ</i>					
pres.	act.	sg.	<i>kṛṇavā</i>	X 95,2:	140, 141, 298f.
		du.	<i>kṛṇavāva</i>	III 53,13:	103, 197f.
		pl.	<i>kṛṇávāma</i>	VIII 62,4:	76, 98, 106, 252
			<i>kṛṇávāma</i>	X 165,1:	75, 90, 312f.
			<i>kṛṇávāmā</i>	I 94,4:	76, 82, 91, 97, 169
			<i>kṛṇávāmā</i>	I 165,7:	109, 112f., 114f., 121f., 137, 177
			<i>kṛṇávāmā</i>	V 45,6:	105, 218
			<i>kṛṇávāmā</i>	X 2,2:	77, 82, 97, 106, 273

			<i>kṛṇavāma</i>	II 29,3: 140, 141, <b>188f.</b> , 224 n. 405
			(áram ...) <i>kṛṇavāma</i>	III 35,5: 76, 81, 82, 98, <b>196f.</b>
			<i>kṛṇavāma</i>	IV 33,5: 67, 79, 104, 106f., <b>206</b>
	mid.	sg.	<i>kṛṇāvai</i>	I 165,10: 23, 51, 133f., 138, <b>177f.</b>
			<i>kṛṇavai</i>	X 108,9: 66, 96, <b>304</b>
		du.	<i>kṛṇavāvahai</i>	X 95,1: 103, <b>298</b>
		pl.	<i>kṛṇávāmahai</i>	VIII 61,11: 77, 101, 123f., 138, <b>250f.</b>
aor.	act.	sg.	<i>karā</i> (2x)	IV 33,5: 67, 79, 88, 106f., <b>206</b>
			<i>kārāṇi</i>	X 52,5: 126, <b>286</b>
			(áram ...) <i>karāṇi</i>	VII 86,7: 76, 82, 100, <b>240</b>
		pl.	<i>kārāma</i>	VII 57,4: 122f., <b>236</b>
			<i>kārāma</i>	X 15,6: 123, <b>275f.</b>
	mid.	pl.	<i>ā ... kārāmahe</i>	IX 108,14: 130f., <b>271f.</b>
			<i>kārāmahe</i>	X 59,2: 72, 100, <b>289</b>
			<i>ā-kārāmahe</i>	X 156,2: 132, <b>310f.</b>
			<i>ā ... karāmahe</i>	I 25,5: 59f., 140, 143, <b>158f.</b>
			<i>karāmahe</i>	VIII 22,3: 99, <b>244</b> , 284 n. 557
			<i>ā ... karāmahe</i>	X 23,6: 77, 99, <b>277</b>
			<i>karāmahe</i>	X 38,4: 76, 87, 100, <b>283f.</b> , 284 n. 557
			<i>karāmahe</i>	X 39,4: 76, 87, 96, <b>284</b>
<i>kar<sup>i</sup>/kṛ</i>				
intens.I	act.	pl.	<i>carkirāma</i>	IV 39,1: 75, <b>207f.</b>
			<i>carkirāma</i>	IV 40,1: 75, 86, <b>208</b>
<i>kalp/kḷp</i>				
caus.	mid.	du.	<i>kalpayāvahai</i>	X 86,21: 103, 105 n. 155, <b>295</b>
<i>kram</i>				
perf.	act.	pl.	<i>abhí-cakrāmāma</i>	VI 49,15: 130, 152, <b>231f.</b>
<i>kṣay/kṣi</i>				
pres.	act.	pl.	<i>kṣáyāma</i>	I 111,2: 125, <b>172f.</b>
<i>gam</i>				
aor.	act.	sg.	<i>nír-gamāṇi</i>	IV 18,2: 77f., 88, 150, <b>200f.</b>
			<i>ánu ... gamāṇi</i>	IV 18,3: 78, 88, 101, <b>201f.</b>
		pl.	(áram-) <i>gamāma</i>	VIII 92,27: 76, 82, <b>259f.</b>
			(áram-) <i>gamāma</i>	X 9,3: 76, <b>275</b>
	mid.	pl.	<i>saṃ-gámāmahai</i>	VIII 91,4: 140, 146, 258f.
<i>gā</i>				
aor.	act.	sg.	<i>ánu-gāṇi</i>	IV 18,3: 78, 88, 101, <b>201f.</b>
<i>car</i>				
pres.	act.	sg.	<i>pári-carāṇi</i>	V 29,13: 140, 141, <b>212</b>
		du.	<i>cárāva</i>	VII 88,3: 110, 112, 115, 121f., <b>240ff.</b>
<i>jay/ji</i>				
pres.	act.	du.	<i>jáyāva</i>	I 179,3: 112, 115, 152f., <b>182f.</b>
aor.	act.	pl.	<i>jéṣāma</i>	VIII 63,11: 76, 99, <b>253</b>
			<i>jéṣāma</i>	IX 76,5: 127f., 130, <b>268f.</b>
<i>jav<sup>i</sup>/jū</i>				
pres.	act.	pl.	<i>junāma</i>	I 186,5: 130, <b>183f.</b>

<b>takṣ</b>				
aor.	act.	pl.	<i>tákṣāma</i>	V 73,10: 130, <b>226ff.</b>
<b>tan</b>				
pres.	mid.	du.	<i>tanavāvahai</i>	I 170,4: 60, <b>180</b>
perf.	act.	pl.	<i>abhí ... tatánāma</i> <i>tatánāma ... abhí</i>	I 160,5: 136, 151, <b>175</b> V 54,15: 133, 151f., <b>222</b>
<b>dev/dīv ~ d(y)ā</b>				
aor.	act.	sg.	<i>daviṣāni</i>	X 34,5: 78, 90, 101, 151, <b>280ff.</b>
<b>dhar/dhṛ</b>				
caus.	act.	pl.	<i>dhārayāmā</i>	IV 58,2: 73, <b>209</b>
<b>dhā</b>				
pres.	act.	sg.	<i>ní-dadhāni</i>	X 119,9: 59, 78, 82, 84, <b>307f.</b>
		pl.	<i>dadhāma</i> <i>dadhāma</i>	V 45,5: 105, <b>217f.</b> X 108,3: 66, 91, 96, <b>303</b>
aor.	act.	pl.	<i>dhāma</i> (3 syl.)	I 122,12: 71, 79, 89f., <b>173f.</b>
	mid.	pl.	<i>dhāmahe</i> <i>dhāmahe</i> <i>dhāmahe</i>	I 92,13: 132, <b>168f.</b> V 16,5: 77, 82, 94, 99, 117, <b>211f.</b> IX 74,5: 136, <b>267f.</b>
<b>nam</b>				
aor.	mid.	sg.	<i>ní ... naṁsai</i>	III 33,10: 65, <b>194ff.</b>
<b>nay<sup>i</sup>/nī</b>				
pres.	act.	sg.	<i>saṁ-náyāni</i>	X 27,2: 50, 66, 91, 96, 116, 121, 243 n. 458, <b>277f.</b>
<b>naś/aś</b>				
pres.	act.	du.	<i>abhí-aśnavāva</i>	I 179,3: 112, 115, 152f., <b>182f.</b>
		pl.	<i>abhi-aśnāvāma</i> <i>(abhí ...) aśnāvāma</i>	VI 49,15: 152, <b>231f.</b> IX 97,51: 132, <b>270</b>
	mid.	pl.	<i>aśnāvāmahai</i>	X 97,17: 132, 135, <b>301</b>
aor.	mid.	pl.	<i>násāmahai</i> <-mahā a-> <i>násāmahai</i> <i>násāmahai</i>	II 30,11: 125, <b>190f.</b> VIII 27,22: 132, <b>245f.</b> X 36,11: 125f., <b>282</b>
<b>pac</b>				
pres.	act.	sg.	<i>pacāni</i>	X 27,2: 50, 66, 91, 96, 116, 121, 243 n. 458, <b>277f.</b>
<b>praś/prś</b>				
pres.	mid.	sg.	<i>sám ... pṛchai</i>	IV 18,2: 111, 113, <b>200f.</b>
<b>pā</b>				
pres.	act.	du.	<i>pibāva</i>	X 83,7: 103, <b>292f.</b>
<b>proṣ/pruṣ</b>				
aor. (?)	act.	sg.	<i>pruṣā</i>	X 77,1: 77, <b>291f.</b>
<b>brav<sup>i</sup>/brū</b>				
pres.	act.	sg.	<i>prá-bravā</i> <i>brávāni</i> <i>prāti-bravāni</i>	X 39,5: 74, 87, 96, <b>284</b> VI 16,16: 76, 86, 98, 106, <b>230</b> X 95,13: 65, <b>299f.</b>
		pl.	<i>prá ... brávāma</i> <i>brávāma</i>	V 30,3: 73, 82, 87, <b>213</b> V 41,13: 76, 86, 95, <b>215f.</b>

			<i>brāvāma</i>	VI 56,4: 132, 133f., 138, <b>233</b>
			<i>bravāma</i>	II 28,8: 76, 88f., <b>188</b>
			<i>prá-bravāma</i>	IV 20,10: 73, 82, 91, <b>202f.</b>
			<i>prá-bravāma</i>	IV 23,6: 140, 141, <b>204</b>
			<i>prá ... bravāma</i>	V 29,13: 73, <b>212</b>
			<i>bravāma</i>	V 41,11: 140, <b>215</b>
			<i>bravāma</i>	VI 67,10: 69, 86, <b>234</b>
			<i>prá-bravāma</i>	X 112,1: 74, 97, <b>305f.</b>
			<i>prá-bravāmā</i>	IV 58,2: 82, <b>209</b>
			<i>prá-bravāmā</i>	V 42,6: 73, 86, <b>216f.</b>
	mid.	du.	<i>sām ... bravāvahai</i>	I 30,6: 103, <b>161</b>
		pl.	<i>upa-brāvāmahai</i>	X 37,5: 133f., 138, <b>282f.</b>
			<i>úpa-bravāmahai</i>	V 51,12: 76, <b>220f.</b>
<b>bhaj</b>				
pres.	act.	sg.	<i>ví-bhajāni</i>	X 27,10: 67, 92, 124f., 171 n. 236, <b>278f.</b>
		pl.	<i>ápa ... bhajāma</i>	X 108,9: 66, 96, <b>304</b>
<b>bhar/bhṛ</b>				
pres.	act.	pl.	<i>bhárāma</i>	I 94,4: 76, 82, 91, 97, <b>169</b>
<b>bhav<sup>i</sup>/bhū</b>				
pres.	act.	pl.	<i>bhávāma</i>	V 45,5: 105, <b>217f.</b>
aor.	act.	sg.	<i>(antár ...) bhuvāni</i>	VII 86,2: 60, 140, 143, <b>238ff.</b>
<b>bhoj/bhuj</b>				
pres.	mid.	pl.	<i>bhunājāmahai</i>	VII 81,5: 77, 100, 106, <b>237f.</b>
			<i>bhunajāmahai</i>	X 19,6: 72, 99, <b>276</b>
<b>mad</b>				
pres.	act.	pl.	<i>anu-mádāma</i>	I 102,3: 132, <b>170f.</b> , 246 n. 462
<b>man</b>				
pres.1	mid.	sg.	<i>manávai</i>	X 52,1: 140, 145, 193 n. 311, <b>285</b>
aor.1	mid.	sg.	<i>mánai</i>	X 97,1: 75, 82, <b>300f.</b>
		pl.	<i>mánāmahe</i>	I 24,1: 79f., 140, 141, <b>156</b>
			<i>mánāmahe</i>	I 24,2: 76, 80, 82, <b>157</b>
			<i>manāmahe</i>	I 26,8: 77, 95, <b>159f.</b>
			<i>manāmahe</i>	I 159,5: 70, 81f., 82, 93, <b>174</b>
			<i>manāmahe</i>	V 13,2: 76, 87, <b>210</b>
			<i>manāmahe</i>	V 35,8: 77, 94, 97, <b>213f.</b>
			<i>manāmahe</i>	V 48,1: 140, 142, <b>219</b>
			<i>manāmahe (2x)</i>	V 50,5: 77, 94, <b>219f.</b>
			<i>manāmahe</i>	V 66,3: 77, <b>225f.</b>
			<i>manāmahe</i>	VII 66,12: 76, 87, <b>236f.</b>
			<i>manāmahe</i>	VII 82,10 = 83,10: 76, 95, 97, <b>238</b> , 246 n. 462
			<i>manāmahe</i>	VIII 11,5: 69, <b>244</b>
			<i>manāmahe</i>	VIII 47,3: 76, <b>246f.</b>
			<i>manāmahe</i>	VIII 53,7 (Vālah.): 72, 82, 100, <b>248</b>
			<i>manāmahe</i>	VIII 61,11: 77, 101, 123f., <b>250f.</b>
			<i>manāmahe</i>	VIII 68,13: 76, <b>254</b>
			<i>manāmahe</i>	IX 41,2: 72, 100, <b>266</b>

			<i>manāmahe</i>	X 64,1: 140, 142, <b>289f.</b>
aor.2	mid.	sg.	<i>māmsai</i>	X 113,10: 130, 154 n. 184, 249 n. 469, <b>306</b>
<i>manth<sup>i</sup></i>				
pres.	act.	pl.	<i>manthāma</i>	III 29,1: 103, <b>192f.</b>
<i>may<sup>i</sup>/mī</i>				
pres.	act.	pl.	<i>pra-mināma</i> <i>pra-mināma</i>	VIII 48,9: 122, <b>247</b> X 2,4: 122, <b>274f.</b>
<i>mar/mṛ</i>				
aor.	act.	pl.	<i>marāma</i> (3x)	I 191,10–12: 110f., 114, <b>184f.</b>
	mid.	sg.	<i>marai</i> <marā í->	VIII 93,5: 111, 114, <b>260f.</b>
		pl.	<i>marāmahe</i>	I 91,6: 110, 114, <b>167f.</b>
<i>marj/mṛj</i>				
aor.	act.	sg.	<i>mṛkṣā</i>	VIII 74,13: 26, 70, 82, 91, 150f., <b>255f.</b>
<i>yaj</i>				
pres.	act.	pl.	<i>yājāma</i> <i>yājāma</i> <i>yājāma</i> <i>yājāmahai</i>	I 27,13: 76, 91, 94, 97, 120f., <b>160f.</b> V 60,6: 123, <b>224f.</b> X 124,6: 69, 95f., <b>309f.</b> X 53,2: 70, 84, <b>286f.</b>
<i>yāc</i>				
aor.	mid.	pl.	<i>yāciṣāmahe</i>	VIII 67,1: 75, 86, <b>254</b>
<i>yoj/yuj</i>				
aor.	act.	sg.	<i>yōjā</i> (5x)	I 82,1–5: 76, 87, <b>165ff.</b>
<i>yodh/yudh</i>				
pres.	mid.	sg.	<i>yúdhayi</i>	IV 18,2: 111, 113, <b>200f.</b>
<i>randh/radh</i>				
caus.	act.	sg.	<i>randhayāni</i>	X 28,9: 68, 79, 89, 96, <b>279</b>
<i>ram</i>				
aor.	act.	pl.	<i>rīramāma</i>	I 165,2: 140, 142, <b>176</b>
<i>rāj</i>				
pres.	act.	sg.	<i>vi-rājāni</i> <i>vi-rājāni</i>	X 159,6: 126, <b>311f.</b> X 174,5: 126, <b>313</b>
<i>rādh</i>				
aor.	act.	pl.	<i>rādhāma</i> <i>rādhāma</i>	I 41,7: 140, 143, <b>162f.</b> VIII 70,13: 140, 143, <b>255</b>
<i>rec/ric</i>				
pres.	act.	du.	<i>riṇácāva</i>	VIII 100,12: 59, 110, 112, 115, <b>263f.</b>
<i>rodh/rudh</i>				
pres.	mid.	pl.	<i>ní ... ruṇádhamahai</i>	I 8,2: 129, <b>154</b> , 249 n. 469
<i>roh/ruh</i>				
aor.	act.	du.	<i>ā ... ruhāva</i>	VII 88,3: 110, 112, 115, 121f., <b>240ff.</b>
<i>vac</i>				
aor.	act.	sg.	<i>prá ... vocā</i>	VI 59,1: 26, 44f., 69, 91, <b>233f.</b>
		pl.	<i>vocāma</i> <i>vocāma</i> <i>prá ... vocāma</i> <i>prá ... vocāma</i>	I 166,1: 74, 87, 154 n. 185, <b>178f.</b> II 30,7: 71, 92, 101, <b>189f.</b> III 55,18: 73, 87 96, <b>199</b> IV 32,10: 73, <b>205</b>

			<i>prá-vocāma</i>	X 72,1: 74, 75, 82, 86f., <b>290</b>
	mid.	du.	<i>sám ... vocāvahai</i>	I 25,17: 102f., <b>157f.</b>
<b>vad</b>				
pres.	act.	pl.	<i>prá ... vadāma</i>	X 94,1: 75, 82, <b>297</b>
<b>van</b>				
aor.1	act.	du.	<i>vānāva</i>	X 98,3: 136, <b>301f.</b>
	mid.	pl.	<i>sám ... vānāmahe</i>	V 7,3: 123, <b>210</b>
			<i>vanāmahe</i>	I 15,8: 72, 99, <b>155</b>
			<i>vanāmahe</i>	VIII 95,6: 110, 114, <b>261</b>
			<i>vanāmahe</i>	IX 61,11: 110, 114, <b>267</b>
			<i>vānāmahai</i>	IX 101,9: 136, <b>270f.</b>
aor.2	act.	pl.	<i>vāṁsāma</i>	VI 19,8: 129, <b>230f.</b>
			<i>vāṁsāma</i>	VIII 60,12: 130, 154 n. 184, <b>249</b>
<b>vardh/vrdh</b>				
pres.	act.	pl.	<i>vārdhāma</i>	X 44,2: 76, 96, 98, 106, <b>284f.</b>
<b>vaś/uś</b>				
pres.	act.	pl.	<i>vāsāma</i>	I 165,7: 109, 112f., 114f., 121f., 137, <b>177</b>
<b>vah/uh</b>				
pres.	act.	sg.	<i>ā ... vāhāni</i>	X 52,1: 140, 145, 193 n. 311, <b>285</b>
<b>ved/vid</b>				
intens.I	act.	pl.	<i>prá ... vevidāma</i>	VII 24,6 = 25,6: 76, 89, 94, 100, 117, <b>235f.</b>
<b>śaṁś/śas</b>				
pres.	act.	du.	<i>śaṁśāva</i>	III 53,3: 103, <b>197f.</b>
<b>śak</b>				
pres.	act.	pl.	<i>śaknāvāma</i>	I 27,13: 91, 120f., 137, <b>160f.</b>
			<i>śaknāvāma</i>	X 2,3: 133, 137, <b>273f.</b>
<b>śav<sup>i</sup>/śū</b>				
perf.	act.	pl.	<i>śūśāvāma</i>	I 166,14: 133, 151, <b>179f.</b>
<b>śray<sup>i</sup>/śrī</b>				
aor.	act.	pl.	<i>śreṣāma</i>	IV 43,1: 60, 140, 142, <b>208f.</b>
<b>śrav/śru</b>				
pres.	act.	pl.	<i>ā ... śṛṇavāmā</i>	III 33,10: 65, 151, <b>194ff.</b>
<b>śvañc/śvac</b>				
perf.	mid.	sg.	<i>śaśvacāi</i>	III 33,10: 65, 151, <b>194ff.</b>
<b>sac</b>				
pres.	mid.	du.	<i>sám-sacāvahai</i>	VI 55,1: 82, 103, 105 n. 155, 116, <b>232</b>
<b>san<sup>i</sup></b>				
aor.1	act.	sg.	<i>sānā</i>	V 75,2: 26, 77, 81, 82, 99, 106, <b>228f.</b>
aor.2	mid.	pl.	<i>saniṣāmahe</i>	III 11,9: 76, 93, 96, <b>192</b>
<b>sarj/srj</b>				
pres.	act.	sg.	<i>saṁ-srjāni</i>	X 27,10: 67, 124f., 138, 171 n. 236, <b>278f.</b>
<b>sav/su</b>				
pres.	act.	pl.	<i>sunāvāma</i>	III 53,4: 120, 165 n. 216, <b>198f.</b>
			<i>sunāvāma</i>	IV 25,4: 76, 79, <b>204f.</b> , 246 n. 462
			<i>sunāvāma</i>	V 37,1: 76, 79, <b>214</b>
			<i>sunavāma</i>	I 99,1: 75, 97, <b>170</b>

			<i>sunavāma</i>	I 103,6: 69f., <b>171</b>
	mid.	sg.	<i>sunavai</i> (2x)	VIII 91,1: 70f., 77, 88, <b>257f.</b>
<b>sah</b>				
pres.	mid.	du.	<i>sahāvahai</i>	X 145,5: 103, <b>310</b>
aor.	act.	pl.	<i>sākṣāma</i>	VII 98,4: 77, 91, 117, <b>242f.</b> , 278
<b>sādh</b>				
aor.	act.	pl.	<i>sīṣadhāma</i>	X 157,1: 75, 87, <b>311</b>
<b>sec/sic</b>				
pres.	mid.	pl.	<i>siñcāmahai</i> <-mahā a->	X 101,5: 103f., <b>302f.</b>
aor.	mid.	pl.	<i>sicāmahe</i>	II 16,7: 76, 99, <b>187</b>
<b>star/str</b>				
aor.	mid.	pl.	<i>starāmahe</i>	VIII 75,7: 140, 144, <b>256</b>
<b>stav/stu</b>				
pres.	act.	sg.	<i>stāvā</i> (3x)	II 11,6: 58, 76, 77, 87, <b>186</b>
			<i>stavā</i>	X 89,1: 45, 75, <b>296f.</b>
		pl.	<i>stāvāma</i>	I 16,9: 76, 94, 97, <b>155</b>
			<i>stāvāma</i> <ṣṭāv->	IV 39,1: 75, 83, <b>207f.</b>
			<i>stāvāma</i>	VIII 24,19: 105, <b>245</b>
			<i>stāvāma</i>	VIII 81,4: 105, <b>257</b>
			<i>stāvāma</i>	VIII 95,7: 105, <b>262</b> + n. 498
			<i>stavāma</i>	II 11,6: 76, 77, <b>186</b>
			<i>stavāma</i> <ṣṭav->	IV 21,4: 76, 83, <b>203</b>
			<i>stavāma</i>	VIII 62,12: 70, 82, 83 n. 133, 86, 101, <b>252f.</b>
			<i>stavāma</i> <ṣṭav->	VIII 95,6: 76, 83, <b>261</b> , 262 n. 498
			<i>stavāma</i> <ṣṭav->	VIII 96,6: 76, 83, <b>262f.</b>
			<i>abhī-ṣṭavāma</i>	VIII 100,3: 140, 142, <b>264f.</b>
	mid.	sg.	<i>stāvai</i>	III 32,14: 76, 92, <b>193f.</b>
			<i>stāvai</i> < stāvā á->	IX 53,2: 76, <b>266f.</b>
			<i>stāvai</i>	X 33,5: 71, 90, <b>280</b>
aor.	act.	sg.	<i>stoṣāṇi</i>	X 88,3: 55, 70, 87, <b>295f.</b>
		pl.	<i>stoṣāma</i>	I 53,11: 76, 93, 99, 130, 152f., <b>163f.</b>
			<i>úpa-stoṣāma</i>	VI 55,4: 76, 87, <b>232f.</b>
			<i>úpa-stoṣāma</i>	VII 2,2: 76, <b>235</b>
			<i>stoṣāma</i>	X 115,8: 76, 99, <b>306f.</b>
<b>spar/spṛ</b>				
pres.	act.	pl.	<i>spṛṇavāma</i>	V 44,10: 72, 99f., <b>217</b>
<b>han</b>				
pres.	act.	du.	<i>hānāva</i>	VIII 100,12: 103, <b>265</b>
			<i>hānāva</i>	X 83,6: 103, <b>292</b>
			<i>hānāva</i>	X 124,6: 69, 95f., <b>309f.</b>
		pl.	<i>hānāma</i>	I 161,5: 104, 106f., <b>175f.</b>
intens.I	act.	sg.	<i>jañghānāni</i>	X 119,10: 78, 82, <b>308f.</b>
		du.	<i>jañghanāva</i>	VIII 100,2: 59, 110, 112, 115, <b>263f.</b>
			<i>jañghanāva</i>	X 83,7: 110, 112, 115, 116, <b>292f.</b>
<b>hay/hi</b>				
pres.	act.	sg.	<i>prá ... hinavā</i>	X 95,13: 63, <b>299f.</b>

**har/hṛ**

pres.	act.	pl.	<i>pra-hārāma</i>	X 85,37: 130, <b>294</b>
-------	------	-----	-------------------	--------------------------

**hav/hu**

pres.	act.	pl.	<i>ā ... juhavāma</i>	I 110,6: 76, 96, <b>171f.</b>
			<i>juhavāma</i>	I 114,3: 69, 97f., 100, 116, <b>173</b>

**hav<sup>i</sup>/hū**

aor.	mid.	pl.	<i>ā-huvāmahe</i>	V 56,8: 70, <b>222ff.</b>
			<i>ā-huvāmahe</i>	X 57,3: 77, <b>288</b>

**hā**

pres.	act.	pl.	<i>jahāma</i>	X 53,8: 103, <b>287f.</b>
-------	------	-----	---------------	---------------------------

## 総論 I 3 において検討した不確実語形

-ā に終わる語形					
ája	VI 49,12	33	jahā	VIII 45,37	25
árcā	V 59,1	31f.	namasyā	II 33,8	31
árcā	X 50,1	37	pr̥cha	III 38,2	34 n. 58
arcā	III 54,2	31	bharā	VIII 66,7	32
arcā	III 13,1	37	madā	X 62,3	32
arca	X 89,3	33	mahayā	I 52,1	31
arca	VIII 49,1	37	mahayā	VII 96,1	34 n. 58
arca	X 76,5	37	vārdhā	VI 38,4	40 n. 73
árca	VI 16,22	37	vardha	V 56,2	34 n. 58
árca	VI 68,9	33	vardhāyā	VI 49,10	32
kariṣyā	I 165,9	23	śāmsā	VII 61,4	29
gāya	VI 16,22	37	śāmsā	I 37,5	32
gāya	VI 45,22	37	riradhā	X 30,1	39f. n. 73
gāya	VIII 46,14	37	śāmsā	VII 31,2	29
cyāvayā	X 101,12	29	śāmsā	IV 3,3	29
janayā	VIII 13,7	29	śrāvayā	IV 29,3	31
			sādāyā	X 35,10	32
			sr̥jā	VI 20,8	24f.
			tiṣṭha	V 56,5	32f.
			-am に終わる語形		
			irayam	X 89,4	52
			irayam	X 116,9	52
			cakaram	IV 42,6	48
			ciketam	X 28,5	47f.
			cyāvam	I 165,10	51
			tatane	VII 29,3	49f.
			dediṣam	VIII 74,15	45f.
			mahayam	VIII 61,6	52
			ruhām	VIII 1,13	51
			vāyam	X 27,9	48f.
			śikṣam	X 27,1	51f.
			siñcam	X 27,2	50
			stoṣam	I 187,1	44f.

## 文法事項、テーマ等

アオリスト語幹 aor. ind. の確認 (Konstatierung) の機能 95, 166 n. 219, 226f. + n. 414  
 アガスティヤとローバームドラー 108f., 182 n. 272  
 アクセント 前後の文とのつながりを表わす (antithetischer Akzent) 97, 98f., 196, 205, 211f. + n. 364, 273; *hānta* ... 84; *éiā* ... 105 n. 155, 106  
 新しい歌 203 n. 343, 277 n. 532, 284 + n. 557, 305 n. 631  
 一般論化された条件 120 (*yadā kadā ca* ... pres. subj.), 126f. (... *cid yādi* ... pres. inj.)  
 意欲語幹から作られた接続法 24  
 意欲語幹から作られた未来語幹 24  
 インドラの出生 200ff. + n. 334; n. 337  
 インドラとマルト神群 109, 176ff. + n. 250  
 ヴィシュヴァーミトラと川 65, 194ff. + n. 314  
 格の意味・機能  
 分量を表わす acc. 300 + n. 616  
 反抗・対立・回避を表わす dat. 68 n. 125, 312 + n. 647  
 機会・場面を表わす instr. 154 n. 185, 179 n. 258  
 Inhaltsakkusativ 172 n. 240, 224f. n. 407 (*yaj*), 242 n. 457, 253 n. 478, 300 n. 616  
 関係節  
 一般論を表わす限定的関係節 134f.  
 関係節 (*yātra* ...) と目的節 (*yāthā* ...) との混淆 193 n. 311  
 再帰代名詞として機能する関係代名詞 296 + n. 601

先行詞を伴わない関係節 190, 200 + n. 332, 290 + n. 582  
 同格的関係節と限定的関係節との関係 128f., 131, 135f., 271  
 目的節と同等の機能を持つ関係節 129f. 131ff.  
 完了語幹  
 一般論を表わす 216 n. 380 (*nā* ... *āpa*), 299 + n. 615 (*nahī* ... *āpah*)  
 経験を表わす 264 + n. 505 (*dadarśa*)  
 完了語幹から作られた現在語幹 161 n. 203, 195 + n. 311  
 perf. ind. の確認の機能 95, 159 n. 199, 218 n. 386, 284 (*āsathuḥ*)  
 perf. inj. 47f. + n. 99, 48 n. 81  
 -ā に終わる perf. ind. 1sg. act. (*paprā*) 25  
 疑問文  
 疑問節=間接疑問文 145, 205 n. 349, 212 + n. 367  
 疑問代名詞 140  
 協議文 143f.  
 質問文 141, 143  
 自問自答 162f.  
 自問文 141f., 143  
 くびき語法 (Zeugma) 188, 216 n. 380  
 言及法 (injunctive)  
 一般論を表わす 43f., 61f.  
 幹母音幹の pres. inj. 1sg. mid. 15, n. 33  
 従属節における inj. 48f., 51f.  
 inj. の諸機能 43f.

iptv. として機能する 197 n. 328, 228 n. 416, 286 n. 566  
*mā* + aor./pres. inj. 150f., 189f. + n. 304  
 言葉の持つ実現力 (*bráhman-*) 75f., 100, 111, 226ff. + 227 n. 414, n. 416, 277 n. 532, 305 n. 631  
 語末母音 (-a) の延長 25  
 語末母音 (-ā) の鼻音化 218 n. 385, 280f. n. 544  
 祭官の職務の表現 (*hótar-*, *udgātár-*, [*adhvaryú-*]) 40f. + n. 75, 80f., 180f. + n. 264, 269 + n. 516  
 真実語 (*satyavacana-*) 22f., 253 n. 478, 305 + n. 631  
 接続法  
 1 人称代名詞 28f.  
 1 人称単数接続法 68, 77  
 一般的勧誘 104  
 一般的心構え 27f., 88ff., 236, 280  
 一般的見込み 113ff.  
 一方通行的性質 25f., 72f.  
 韻律上の位置 41  
 過去から見た未来 112, 240ff., 242 n. 455  
 聞き手と称讃／儀礼の対象 69ff.  
 義務 79ff., 141ff., 147f.  
 主語 (=話し手) の意志 (?) 118f., 124, 138  
 純粋に未来に言及する (見込み) 119, 138  
 条件付き心構え 91f., 190, 203  
 条件付き見込み 114f., 168, 261, 264, 267, 293  
 接続法語形の分布状況 (人称・数別) vii f.  
 接続法語尾の分布状況 (人称・数別) 8f.  
 接続法とアスペクト 150ff., 201, 228, 256, 282  
 接続法と意欲語幹 58f.  
 接続法と願望法 55ff.  
 接続法と動詞の語彙的意味 56, 152f., 162, 164, 182f. + n. 277, 239f.  
 接続法と未来語幹 57f.  
 接続法と命令法 25ff., 55  
 接続法の基本機能 54ff., 59ff.  
 1 人称接続法における第一／二語尾の分布 17ff.  
 話し手の自分自身に対する意志 118f.  
 否定文 (*ná* ...) 90f., 100ff., 114, 202 n. 338  
 不確定語形 (語彙的特徴) 40f.  
 法接尾辞 (=幹母音 -a/ā-) 6ff.  
 未来における過去の確認 228  
  
 Augenblicksbildung (nonce form) 4, 195, 291f.  
 give-and-take 96ff., 159 n. 197, 273  
 Hypercharakterisierung 「過剰表示」 7f., 13, 185  
 intens. subj. の形成法: 3f, 207f., 308f.  
 Sūkta の最終詩節 92ff.  
  
*adyá* + 1 人称接続法 87, 93  
*ádha* + — 92  
*étā* + — 104ff.

*kuvíd* + 1 人称接続法 146, 258f., 307ff. + n. 636, n. 637  
*tām u* (...) *stavāma*  
*tákṣāma* aor. subj. 226ff.  
*nú* + 1 人称接続法 86f.  
*yád(i) vásāma, śaknāvāma* 137, cf. *vāsāñ ānu*  
*yád ín nú* + 1 人称接続法 123f., 251  
*hánta* + — 31f.  
 ソーマ=馬 269 n. 515  
 超時間的・一般論的事態 (genereller/außerzeitlicher Sachverhalt) 43f., 61f., 113f., 206 n. 351, cf. gnomische Periode  
 直説法 206 n. 351  
 トゥヴァシュトリとリブ神たち 67, 106f., 175 n. 247, 206 n. 351  
 話し手自身への命令 27f. + n. 50  
 バニ族とサラマー 65f  
 不定詞 14, 15 + n. 34, 158 n. 194, 202 n. 340  
 (-*dhyai*), dat. inf. + *kar/kr* 284 n. 557  
 ブルーラヴァスとウルヴァシー 64f.  
 マルト神群 166 n. 218, 216 n. 379, 221 n. 397  
 未来語幹から作られた接続法 23f.  
 雄弁な言葉と舟の喩え 187 + n. 295  
  
 aor. subj. のみ act. で、それ以外は mid. で活用する動詞 164  
 anacoluthon (Anakoluthie) 「破格構文」 200 n. 332, 248 n. 468  
 Augenblicksbildung (nonce form) 189 n. 303  
 BRUGMANN の法則 7, 11  
 Dānastuti 45, 71, 254 n. 479, 255  
 doppelte (/Doppel-)Anrede 「二重呼び掛け」 35 + n. 59  
 elliptischer Plural 「省略的複数」 35ff.  
 e-optative 6 n. 18  
 gnomische Periode 「格言的複文」 49, 61f., 166f. n. 222, 178, cf. 超時間的・一般論的事態  
 Koinzidenzfall 33, 44 + n. 87, 46 + n. 93, 93ff. + n. 145, 125, 127, 198 n. 328, 227f. n. 416, 228, 253  
 Labasūkta 78f.  
 middle の互惠的用法 (reciprocal) 104  
 Padapāṭha 23 n. 39, 165 n. 215, 167 n. 223, 217 n. 384, 245 n. 460, 224 n. 406, 231 n. 424  
 proleptic nominative 「結果先取りの nom.」 100, 248, 269f. + n. 517  
 Samdhi 14, 23, 24, 23f. n. 41, 81, 224 n. 406;  
 m. sg. nom. *sá* + V- 51 n. 111, 155 n. 187, 185 n. 286, 198 n. 329; *ā* + V- 213 n. 371  
 Saṁsava 196 n. 325, 230 + n. 422  
 -se に終わる動詞語形  
 SIEVERS の法則 3, 207f., 308

Śunaḥṣepa の物語 79f., 101f., 155f. + n. 188

### 単語, 語句, 表現

a- 指示代名詞 224 n. 406, 227 n. 416  
*āthā ca* + aor. inj. (*bhūd*) 197f. + n. 328  
*āditi-* 156 n. 189  
*ādevī-* 231 + n. 425  
*ādihā nū* + aor. inj. 198 n. 328  
*apatyasāc-/sāc-* 190f. n. 307  
*āpūrvya-* 277 + n. 532  
*abhī* + acc. 231 n. 426  
*āram-gam* (+ dat.) 260  
*aryā[h] ā* 267 + n. 511  
*āva-hā* pass. + abl./instr.: 281 n. 547  
*ahaṃsana-* 229  
*ā-ar/ṛ* 192 + n. 308  
*ājīm aj* 182 n. 274, 242 + n. 457  
*ā-dar<sup>(i)</sup>* 171 n. 235  
*ādevī-* 231 + n. 427  
*āmenyā- (?)* 219 n. 389  
*ā-varj/vrj* 160 n. 201  
*ā-/nī-vart/vrt* 276 n. 530  
*āha* 206 n. 351  
*-iṣ-aor.* の Ablaut 281 + n. 549  
*u* 207 n. 353, 212 n. 369, 264 n. 504 (*u tva-*)  
*utā* 230 n. 423, 296 n. 600; X Y *utā* 207 n. 354,  
 215 + n. 377; voc. をつなぐ 224 n. 405 (?), 287  
 + n. 568  
*udṛc-* 93, 163 n. 210  
*ṛtū-* (instr.) 274 + n. 527  
*etā* n. nom./acc. pl. 298 n. 611  
*aidhā (?)* 179f. n. 257  
*oh/uh* 237 n. 435  
*kīm* + instr. + *kar/kṛ* 188f. + n. 300  
*ca* 主語の省略: [X] *ca* Y 159 n. 200; [X] Y *ca* 241  
 n. 452; [X] Y *ca* Z *ca* 311 + n. 644; voc. をつ  
 なぐ 189 n. 301; 従属接続詞 167f. + n. 226  
 (pres. subj.), 263 + n. 501 (pres. subj. etc.), 281 +  
 n. 548 (aor. ind.: Vorzeitigkeit), 303 + n. 625 (pres.  
 subj.), 304 + n. 627 (perf. ind.)  
 ... *cīd yādi* ... 126f.  
*takṣ* のアオリスト語幹 226ff.  
*tamat* 189 + n. 303  
*durāvī-* 266 n. 508  
*deṣṇā-* 203 n. 341  
*dhiśāṇā* 193 + n. 310  
*dhenū-* adj. 180f. n. 266  
*nakṣanta* 259f. n. 495  
*naś/aś ~ naṁś* 173 n. 243, 295 n. 598  
*nṛṇām = \*nṛṇām* 304 n. 629

suppletion (*brav<sup>i</sup>/brū ~ vac*) 73 n. 127, 233 n. 430

*pāñca carṣaṇī-* 270f. + n. 521  
*patidviṣ-* 258 + n. 493  
*pā* + acc./gen. 202 n. 339  
*pārya- āhan-* 193 + n. 312  
*pṛthivīm dyām utémām* 296 n. 600  
*prā-brav<sup>i</sup>/brū ~ prā-vac* 73ff., 158  
*bhav<sup>i</sup>/bhū* のアオリスト語幹 2f., 239 + n. 443,  
 n. 445  
*brav<sup>i</sup>/brū ~ vac* + acc. + acc. 233 n. 430  
*man-* (root-aor.) :: *maṁs-* (-s-aor.) 156, 160, 250f.  
*man* + gen./acc. 266 + n. 507  
*mayobhū-* 284 + n. 555  
*yāt te* 237 n. 437  
*yātas* 157 n. 193  
*yāthā-yathā* 304f. + n. 630  
*yād (vā) ... yād (vā) ...* 224 n. 404  
*yadā* 165 n. 216  
*yadā kadā ca* 120  
*rocanā-* 296 + n. 602  
*vavartati* 289 + n. 579  
*vāsāñ ānu* 137 n. 173, cf. *yād(i) vāsāma*  
*vér* pres. ind. 2/3sg. act. 49 n. 105  
*vardh/vṛdh* 262 n. 498  
*vārdhana-* dat./gen. + *brāhmaṇ-* + *vārdhana-* + *as*,  
*bhav<sup>i</sup>/bhū, kar/kṛ* : 252 + n. 477  
*vāsyas (prā) nay<sup>i</sup>/nī* 247 n. 466  
*vikhādā-* 283 + n. 552  
*vijānūṣ-* 291 + n. 585  
*śārmaṇ-* loc./dat. + *śārma* + *yam* : 246 + n. 462  
*śūśujāna-* 278 n. 536  
*śramat* 189 + n. 303  
*-śrī-* 158 n. 196  
*sac* + instr./acc. 172 + n. 239, 268 + n. 512  
*sām-añc* 182 n. 274  
*sav/sū* 3  
*sasavāṁs-* 248 + n. 467  
*sahāsradaḥṣiṇa-* 280 + n. 543  
*sú-* 「よい」を表わす: 246f. n. 463 (*suūtī-*)  
*sec/sic* + acc. 187 n. 197 (*utsām*), 302f. + n. 623  
 (*avatām*)  
*sētu-* 266 n. 509, 288 + n. 571  
*stav/stu* 193f. + n. 313, 291 n. 586  
*svastī-* 211 n. 362, 220f. n. 394  
*hav<sup>i</sup>/hu* のアオリスト語幹 223  
*har/hṛ* と *bhar/bhṛ* との関係 294  
*hī* + aor. ind./perf. ind. 109  
*hed/hid* 283 n. 552

リグヴェーダにおける 1 人称接続法の研究  
**Function and Form of the first persons  
subjunctives in the Rigveda**

堂山 英次郎 文学研究科哲学講座（インド学・仏教学）講師  
**DOYAMA Eijiro**

大阪大学大学院文学研究科紀要 モノグラフ編 第45巻

---

2005年(平成17) 3 月 5 日 印刷

2005年(平成17) 3 月20日 発行

編集兼 大阪大学大学院文学研究科  
発行者 豊中市待兼山町 1 - 5